

2000年

古代東国における地域圏の成立過程

—総武・常総の内海をめぐる古墳文化の相剋—

千葉大学大学院
社会文化科学研究科

都市研究専攻 白井 久美子

古代東国における地域圏の成立過程
 — 総武・常総の内海をめぐる古墳文化の相剋 —

目 次

はじめに	1
序章 地域的特性と分析視角	
第1節 東国水域圏の原風景	2
第2節 水運から見た地域的特性	13
第1章 古墳出現期の地域圏形成	
第1節 小銅鐸圏の東縁	41
第2節 定型化する古墳以前の墓制	53
第2章 古墳時代前期の地域圏形成	
第1節 前期古墳の展開	71
第2節 土器の搬入と模倣	91
第3章 倭五王の時代と2つの内海	
第1節 常総の内海をめぐる石枕と立花の時代	107
第2節 総武の内海東岸の大型首長墓	126
第3節 総武の内海の大型円墳	160
第4節 赤焼き須恵器の展開	166
第4章 古墳時代後期・終末期の地域圏形成	
第1節 東国後期古墳分析の視点 — 鉄鏃による後期古墳群の分析 —	182
第2節 竜角寺古墳群の再検討	208
第3節 古墳終末期の上総北西部	214
終章 東国水域圏の地域的特質	
第1節 総武と常総に見る古墳文化の二相	233
第2節 坂東的世界の萌芽	243
おわりに	248
附論 小規模円墳の被葬者像 — ブリッジ付き円墳の検討 —	249
図版一覧	279
初出一覧	283
引用・参考文献	286

はじめに

古墳時代研究における関東地方や九州は、倭王権中枢から見た「周辺地域」であり、また畿内の古墳文化が波及・伝播する受動的な地域として位置づけられてきた。これは、倭国の国家形成期を王権による地方首長の統制・統合という視点から解明してきた古墳時代研究の方法によるところが大きい。また、古墳という首長の墓を指標とする研究は、必然的に政治史中心になり、社会史・文化史は第2義的な立場にあったといわざるを得ない。

近年、急増した発掘調査資料によって、古墳時代における列島の多様性があきらかになるにつれ、各地の風土に根ざした特性が見直されようとしている。それは、歴史の表層で変遷する事象とは別に、時代を越えて人々をとり囲む環境との関わりから形成されたものといえよう。

地域区分は時代によって様々であり、政治的な線引き、あるいは中央から見た認識によって変動している。しかし、それ以前に地理的環境の諸条件によって自ら規定された境域が存在し、必ずしも行政区分とは一致していない。地域とは、それ自体がひとつの歴史世界を形成している領域である。いま、古墳時代の東国や九州を国家形成史から切り離して見てみると、王権中枢部の能動的な動きに対して停滞しているかのように見えるそれらの地域がそれぞれ固有の文化をもつ、畿内に比肩する地位に並ぶことさえ考えられる。

関東地方に視点を置いて弥生時代後期から古墳時代の事象を見ると、銅鐸分布圏外のこの地に弥生後期の小銅鐸が分布すること、方形周溝墓の波及後も再葬墓の伝統を引く壺棺を用いていること、大型前方後円墳の確立期である古墳前期に大型前方後方墳が集中すること、中期の滑石製祭祀具の大量製作と盛行、前方後円墳終息期に入る後期の大型前方後円墳の隆盛など、倭王権の本拠地を中心とする西日本とは大きく異なる事象があげられる。

これらは、関東地方が早くから倭王権の影響を受け、軍事的・政治的基盤として重要な位置を占めたこととは相反するといえよう。それらを理解するためには、もう一步この地に踏み込んで、それらが地域に内在する日常的な結びつきによって発生している側面を抽出することが必要になる。畿内文化の東漸という文化伝播のみでは説明できないことに突き当たるのである。一見脈絡のない個々の事象が社会のより深層に息づく地縁的結合によって裏付けられる可能性に注目したい。

表題に掲げた東国の概念、範囲は時代によって様々であるが、古墳時代の東日本世界の表徴として用いている。ここでは、弥生時代後期から古墳時代を通じて密接な交流が見られる天竜川流域・碓氷坂（峠）以東、常陸以南を古墳時代の東国の主要範囲として扱い、なかでも独特のまとまりを示す関東地方を主な分析の対象とした。分析にあたっては、特に海道と水運によって結ばれた東京湾沿岸の総武地域と利根川・鬼怒川・小貝川下流域に広がる常総地域の地域的特性を対比して論を進めたい。

房総という地域をフィールドに発掘調査、遺跡の分布調査に携わってきた一人として、調査の成果を糧にそれらを生かす方向性を求めて、地域から発信する古墳時代像を描いてみたい。

序章 地域的特性と分析視角

第1節 東国水域圏の原風景

1 水域圏をめぐる古墳時代の分析に向けて

国土の4分の3が山地である列島では、海路・水運が陸路以上に重要な歴史の道を形成している。弥生文化・古墳文化の東進・交流のルートは海路抜きには考えられないといえよう。特に大和を起点とする伊勢湾沿岸の交通路から東国への海路は、倭王権の東進路として考古学・文献双方の資料から検討されてきた。また、沿線には河川によって分割された数多くの小地域が存在し、波及した新たな文化はそれぞれの地域で受容され同化して多様性を生み出したことは、東国への海路を考える上で欠くことのできない視点である。

東国の概念、範囲は時代によって異なり、古代以前に限っても大化の東国等国司派遣は信濃・遠江以東を対象とし、壬申の乱で大海人皇子が兵を動員した東国は「三関」（伊勢鈴鹿・美濃不破・越前愛媛）以東を指している。さらに、万葉集の東歌や東国防人の歌にみえる範囲は、信濃・遠江から陸奥を含む。先に示したように、ここでは天竜川流域・碓氷坂以東、常陸以南を古墳時代の東国の主要範囲として扱うことにしたい。これは、霊峰富士山と筑波山を望む、東海道駿河湾以東の緩やかなまとまりと交流を維持した地域であると想定される。その東限に位置する常総地域は、東海道の果つる所にあるといえよう。

列島を象徴する山として古来聖山とされてきた富士山は、南西は和歌山県那智勝浦町の妙法山、南は八丈島、東は銚子市犬吠埼、北東は福島県岩代町の日山から遠望することが可能で、その可視範囲は約600kmにわたる。東海道は、日常的に富士山を望むことのできる広域な交通路であり、弥生文化の東漸以来、この道を通して東西の文物が盛んに行き交うようになる。特に、天竜川以東の駿河湾、相模湾、三浦半島を経て東京湾東岸に至る海道は、弥生時代中期から後期にかけて、交流圏として緩やかなまとまりを形成し始める。この海道の果つるところ、東京湾東岸は東漸するあらゆる文物の上陸地点であり、西に向かって開かれた地域であった。

一方、筑波山を望む鬼怒川・利根川下流域は、かつて広大な内海（香取海）を挟んで東海道経由の弥生文化と対峙し、独自の伝統を維持していた。この均衡が破られるのは、古墳時代になって東北へ向かう倭王権の強い影響力が波及した時であった。この地域は、ようやく遠江以東を緩やかに結ぶ交流圏に入ることになる。しかし、その後も独自性を発揮して、東京湾沿岸とは別の古墳文化を形成している。

東京湾東岸から鬼怒川・利根川下流域にわたる地域は、東海道の東限として必然的に東北への玄関となった。特に後期以降は、倭王権の軍事的・経済的基盤としての重要性が大きくなるが、王権の傘下にあってもなお独自の地域色を発現するきわめて統制の難しい地域であることに根元的な要因があるのではないかと思われる。

このような地域的特性はどのようにして形成されたのか。まず、当時の地理的環境を概観することにした。



図1 富士山の可視圏
 A 妙法寺（那智勝浦） B 八丈島 C 犬吠埼（銚子市） D 檜山（岩代町）

2 関東平野の地形と水脈

関東地方は、周囲を山脈と丘陵地帯に囲まれた巨大な1つの盆地であり、北側には阿武隈山脈～筑波山、西へ足尾山脈～関東山地（丹沢山系・秩父山系、最高度は2,483mの甲武信岳）、さらに北方には標高2,000m級の三国山脈・越後山脈・帝釈山脈（南に浅間山・草津白根・男体山・那須などの火山地帯）が林立する。一方、南側は三浦半島・房総半島の丘陵山地が連なり、東端は銚子岬に至る。

これらの山地の麓に関東ローム層の丘陵や台地がつながり、中央部に向かって低くなって、利根川・荒川によって形成された沖積平野に埋もれる。埼玉県北葛飾郡栗橋・幸手市周辺が盆地の底辺にあたり、かつて利根川・渡良瀬川・荒川・綾瀬川が集流し、縦横に乱流した。これをさらに巨視的な水域に広げてみると、利根川流域圏と2つの内海を囲む地域として見ることができる。2つの内海とは、古利根川が注ぐ現在の東京湾⁽¹⁾と鬼怒川・小貝川の注ぐ香取海（現在の利根川河口域から手賀沼・印旛沼・霞ヶ浦・北浦と周辺の湖沼群）である。

巨大な盆地である関東平野の底辺部は、約4千年前には標高10m付近まで海中にあり、利根川・渡瀬川流域では南埼玉郡白岡から茨城県古河市の渡良瀬川遊水地、荒川（現・元）流域では上尾市周辺から蓮田市（黒浜貝塚）までの低地が入り海であった。この入り海は弥生時代の後期ごろから陸化するが、徳川氏の入部以前まで河川が乱流し、湖沼が広がっていた。これらの大河川群が流れ込む東京湾は、房総と武蔵・相模に囲まれた広大な内海として太平洋に開き、水上交通の要衝であるとともに房総と相武を画す水域となる。近代に至るまで総称はなく、近世では相模・武蔵・上総の「内海」と記されているようであるが海域全体を指す名称はなく、近代に入って東京湾と命名された⁽²⁾。ここでは、地理的な名称としては東京湾を用い、下記の常総の内海に対比する場合は総武の内海としたい。

一方、茨城県猿島郡五箇村以東（図2-A）は、17世紀半ば（1654年、承応3年）に利根川水系が通水する以前は湖沼と湿地帯の連続する地域で、漠然と「常陸川」、あるいは「流江」^{ながれえ}などと呼ばれていた（『利根治水論考』によれば、正保図（1644年作成）に常陸川の名があり、中利根・下利根を指すという）。その水源を迎えれば、鬼怒川（衣河、毛野河）、小貝川に至り、12世紀初めの『今昔物語』に「衣河の尻やがて海の如し」といわれたように、その全体像は多数の湖沼群とそれを結ぶ水流が連なった広大な内海であった。東京湾と同様、縄文時代から古代の海進期には、太平洋の入り江が、現在の10m等高線付近まで深く入り込んでいたと推定されている。

吉田東伍の『利根治水論考』に附された衣河流海、刀禰古代水脈想定図は、江戸の治水以前の水脈図をもとに、旧河道の知見を加え、常陸國風土記、万葉集、将門記、今昔物語などの記載をもとに図化したことがうかがえる。2つの図には不整合な箇所があり、縮尺も判然としないが、合成してみた（図2）。これによると、北浦（鹿島流海）、霞ヶ浦（香澄流海）、現利根川下流域（榎浦・香取浦・浪逆海・海上瀉）・印旛沼（印旛浦）・手賀沼（手下海）は一連の内海で、小貝川（子飼川）・鬼怒川（毛野川）・常陸川（広川）が流れ込んでいる。この常総の内海には総称がないため、以下に示す古代・中世の歌学書で常総の海、浦に比定された「香取海」を常総の内海全体の名称として用いることにしたい。

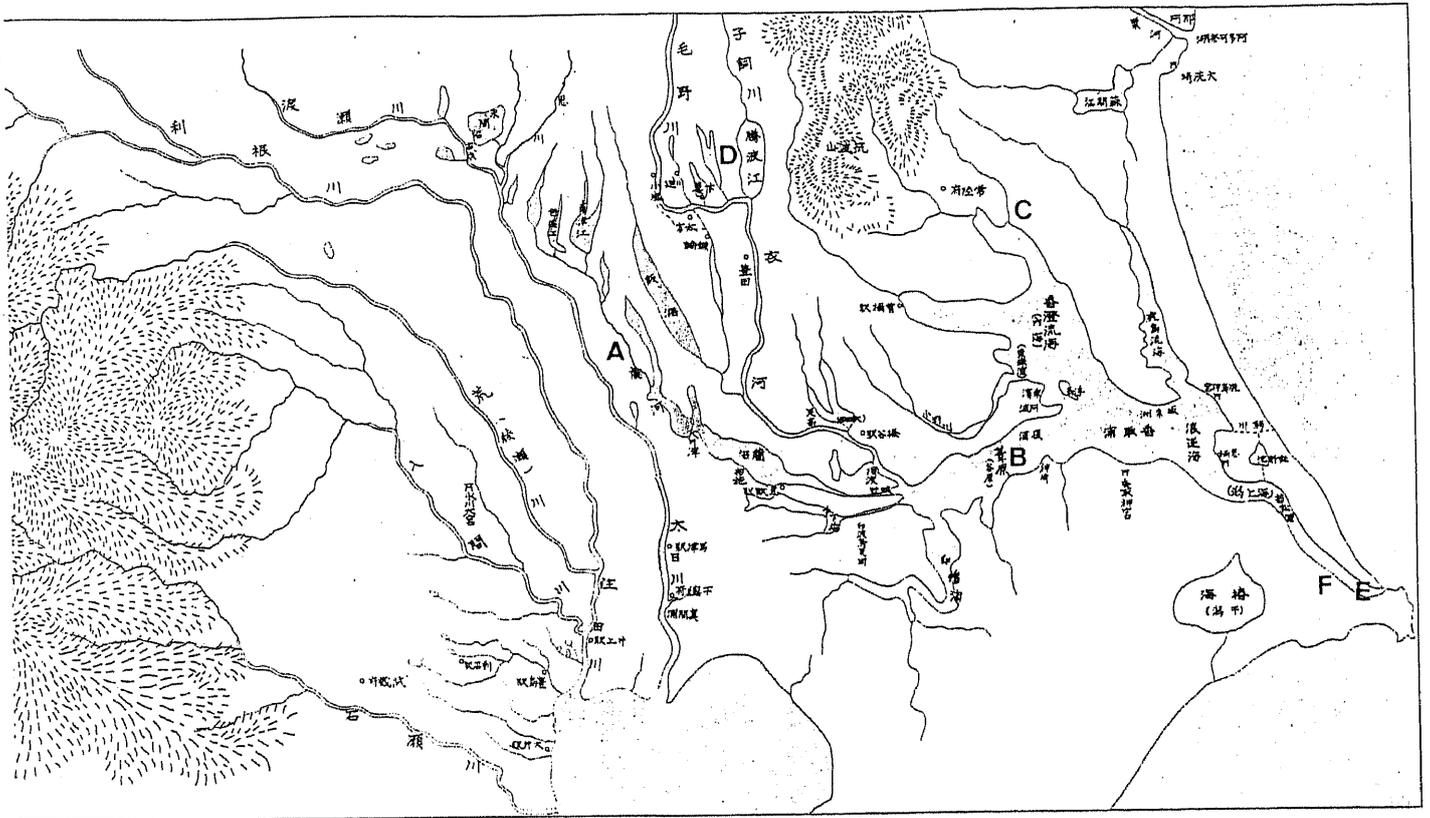


図2 衣川流海および刀禰川古代水脈想定図（吉田1910 付図を合成）

この2つの内海に連なる水脈によって結ばれた歴史地理的環境を古代以前の関東地域分析の視座にしたいと考えている。次に、近世以降の治水事業等によって全く姿を変えている常総の水域について古代・中世の記録に往時の姿を瞥見したい。

3 常総の水域圏

(1) 「香取海」の由来

まず、万葉集およびその注釈書にみえる香取浦、香取海について、表に示した（表1）。

巻7の「何処にか舟乗りしけむ高島の香取の浦ゆ漕ぎ出来る船」は、前の歌が近江国の歌であること、また、巻11の「大船の香取の海に碇おろし・・・」は柿本人麻呂の歌であることから、「香取の浦」「香取の海」は琵琶湖の高島周辺の地名と考えられている。ところが、平安時代後期の『五大集歌枕』では、この2首を引いて「香取の海、浦」を常総の海、浦に比定している。鎌倉時代の歌学書『八雲御抄』では、さらに具体的に上記の「香取の浦」に下総、「香取の海」に常陸香取の注釈をつけている。この注釈はおそらく誤認がそのまま受け継がれたものとみられるが、平安時代には「常総の香取海」が中央の歌人にも知られていたことを重視したい。

(2) 古代の香取海

「記紀」には香取海に関する記事はほとんどなく、わずかに『日本書紀』巻七、景行天

表 1 歌集および注釈書にみえる「香取海」

年代	文献名	巻	表記	史料	詠み人・著者
771	万葉集	巻7 雑歌 (1172)	香取の浦	何処にか舟乗りしけむ高島の香取の浦ゆ漕ぎ出来る船	
771	万葉集	巻11 (2436)	香取の海	大船の香取の海に碇おろし如何なる人が物思わざらむ(中略) 以前の百四十九首は、柿本人麿の歌集に出づ	柿本人麻呂
1165	五大集歌枕	巻下 一七 海	かとり <u>の</u> うみ	かとり <u>の</u> うみ 常陸 カトリノ浦、在ニ下総国ニ歟。	藤原範兼
1165	五大集歌枕	巻下 一九 浦	香取一	カトリ在ニ常州ニ歟。高島、香取一、江州湖歟。	藤原範兼
1235	八雲御抄	巻五 名所部	かとり <u>の</u>	四十六浦の項 下総 かとり <u>の</u> (万、たかしまの、)	順徳院
1235	八雲御抄	巻五 名所部	かとり <u>の</u>	四十七海 <u>の</u> 項 常(常陸)香取 かとり <u>の</u> (万、大ふね、)	順徳院
1245	壬二集	第二帖 雑一五	香取 <u>の</u> 沖	今日の日は幣(ぬさ)よくまつれ船人の香取の沖に 風向かうなり	藤原家隆
1318	続千載和歌集	巻第三 夏歌	香取 <u>の</u> 浦	建保四年百首歌奉りけるととき 前中納言定家 夏衣香取の浦のうたたねに波の寄る寄るかよう秋風	前中納言 (藤原)定家
1439	新続古今和歌集	巻第十七 雑歌上	香取 <u>の</u> 浦	応永十一年内裏にて人人題をさぐりて三十首歌つこうまつり ける時(中略) おなじ心を 源資雅朝臣 袖せばき香取の浦のあま衣やどる程なく月ぞあけ行く	源資雅朝臣

皇(四十年庚戌)に「・・・日本武尊則從=上総=轉^{ウツリテ} 入=陸奥ノ國=。時=大鏡ヲ懸テ=於王船=。從=海路=廻=於葦浦=。横=渡テ=玉ノ浦ヲ=至=蝦夷境=。・・・」というヤマトタケルの東征伝承がみえる。これによって上総から陸奥国へは海路で進んだことがわかる。「紀」に見える巡路の記載では、船で進み、所々で上陸してその土地の言向けを行っている。葦浦は香取海南部(図2-B)に比定され、玉浦は北岸の玉造から玉里辺り(図2-C)と考えられ、当時の香取海航路を知る記載といえよう。以下に香取海を舞台にした資料をあげる。

①万葉集におさめられた香取海とその周辺を詠んだ歌

万葉集には前掲の2首のほか香取海とその周辺の情景を詠んだ数首の歌がある(番号は国歌大観による)。

まず、万葉集巻第9に載る筑波山に登る歌(1757)に

「草枕旅の憂へを 慰もる 事もあるかと 筑波嶺に 登りて見れば 尾花ちる 師付の 田居に 雁がねも 寒く来鳴きぬ 新治の 鳥羽の淡海も 秋風に 白波立ちぬ 筑波嶺の よけくを見れば 長けきに 思ひ積み来し、憂いは息みぬ」がある。鳥羽の淡海と詠われたのは、真壁郡明野町の旧鳥羽村、下妻市の旧騰波ノ江村周辺と考えられ(図2-D)、筑波山西麓に湖が広がっていたことがうかがえる。これに霞ヶ浦をあてる説があり、いずれにしても筑波山から広大な内海を臨む情景が詠われているといえよう。沿岸の各地で詠まれた歌には次のようなものがある。

1174 霰降り鹿島の崎を波高み過ぎてや行かむ恋しきものを

1176 夏麻引く海上^(註4)の沖つ洲に鳥はすだけど君は音もせず
鹿島郡の刈野の橋にして大伴卿に別るる歌一首

1780 牡牛の 三宅の浦に さし向かふ 鹿島の崎に さ丹塗の 小船を設け 玉纏の 小楫繁貫き 夕潮の 満のととみに 御船子を 率ひ立てて 呼び立てて 御船出でなば 浜も狭に 後れ並み居て 反側び 恋ひかも居らむ 足摩し 哭のみや泣かむ 海上の その津を指して 君が漕ぎ行かば

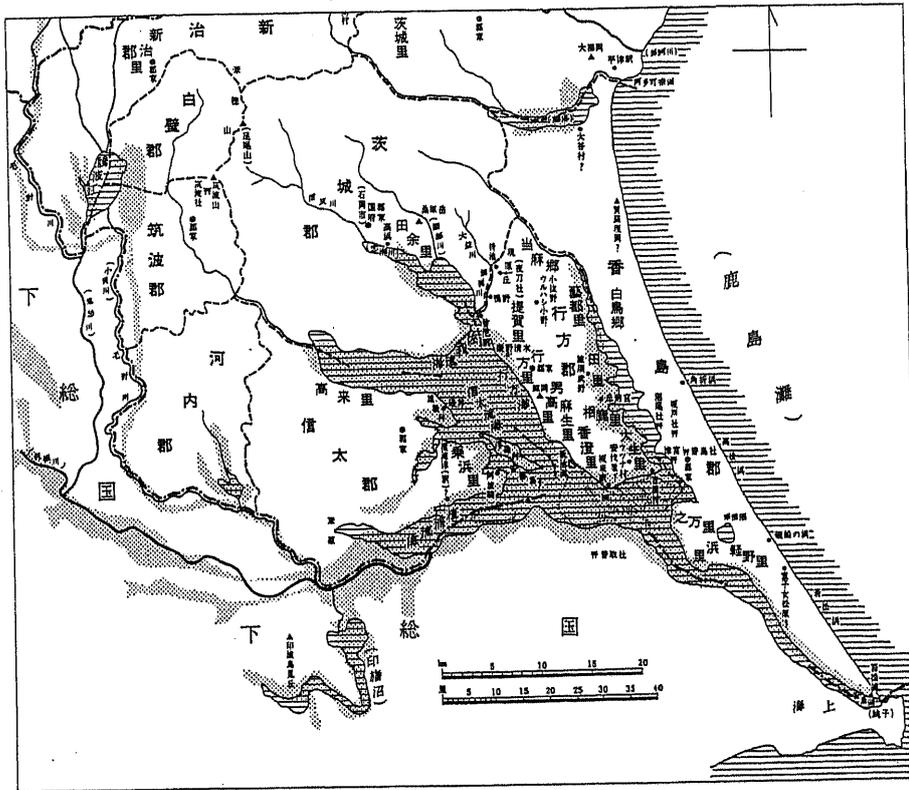


図3 常陸国風土記地図 (日本古典文学大系『風土記』1958)

反歌

- 海つ路の和ぎなむ時も渡らなむ斯く立つ波に船出すべしや
 3397 常陸なる浪逆の海の玉藻こそ引けば絶えすれあどか絶えせむ
 3503 安齊可 (安是湖) 瀉潮干のゆたに思へらぼうけらが花の色に出めやも
 3555 麻久良我の許我 (古河) の渡の韓楫の音高しもな寝なへ児ゆゑに
 3558 逢はずして行けば惜しけむ麻久良我の許我漕ぐ船に君も逢はぬかも

1174 では鹿島南端の海の波が高く、近寄れない状況がうかがえる。1176・3503 は下総国海上郡の海上瀉から安是湖 (図2-E) の干瀉の様子、1780 は鹿島郡から対岸の下総国海上郡三宅 (銚子市三宅町付近、図2-F) の浦を通過して海上の港へ渡る様子を詠み込んでいる。3555・3558 は現在の渡良瀬川遊水池付近の湖沼を船で行き交う情景が背景にある。

②『常陸国風土記』(717~719年頃作成)

奈良時代に常陸国庁から中央官庁へ報告された『常陸国風土記』は、古代の香取海周辺の状況を記述した唯一の公的な史料である。注目されるのは、その記述が筑波山周辺から始まっている点である。筑波郡の条では、西の空に万年雪をいただいて遠望できる駿河の富士山と緑豊かな筑波山を対比して神話が語られ、富士山に対する身近な神体山への信仰が記されている。「記紀」の神話とは別の地方神話を収録することは中央への報告書に欠かせぬ仕事であったのである。万葉集の東歌にも「筑波嶺(岳)」はしばしば登場し、筑波嶺が東国そのものを象徴する山であったことがわかる。そして、山頂から望む眼下の「海」と記された景観こそは、今日とは大きく異なる広大な内海が広がった常総の世界であった。

『常陸国風土記』には、広大な内海の景観や人々との関わりとともに生業や水運の様子が記されている（図3参照）。

現在の稲敷郡と牛久市、竜ヶ崎市に相当する信太郡は、「東は信太の流海、南は榎の浦の流海、西は毛野河、北は河内の郡」と3方を海と川に囲まれていた。「榎の浦の津あり、便ち驛家を置けり。東海^{うみつみち}の大道にして常陸路^{おおぞ}の頭^{はじめ}なり。」と榎浦津に驛家の置かれたことが記されているが、驛家の所在地は明らかではない。驛家の馬を利用する役人は、口と手を洗い、まず鹿島の神を拝んでから常陸国に入ったという。

茨城郡は、現在の石岡市・東茨城郡・西茨城郡・新治郡のほぼ全域に相当する地域と考えられている。「東は香島の郡、南は佐我の流海、西は筑波山、北は那珂の郡」と記される。佐我の流海は新治の南東端から香取海を臨んだ名称で、旧出島村佐賀に故地がある。これを北に廻り込んだ高濱の入り江の奥（石岡市）に、国府・郡家が置かれ、国分寺・国分尼寺・国衙工房（鹿の子遺跡）が所在する。この高濱の入り江の沿岸は、古墳時代中期から後期の香取海の首長墓が築かれた所で、古来交通の要衝であった。

行方郡は、ほぼ現在の行方郡に相当する。「東・南・西は竝に流海、北は茨城の郡なり」と記され、香取海に半島状に突き出した位置にある。孝徳朝に郡家が置かれたことが記されており、玉造町井上付近にあったと推定されている。また、郡家の南の海辺に板来の驛、北に曾尼驛家が置かれたことが記されている。人々は海藻を採って塩を焼き、漁労を生業としていたという。

現在の鹿島郡に相当する香島郡は、「東は大海、南は下総と常陸との堺なる安是^{みなと}の湖、西は流海、北は那珂と香島の堺なる阿多可奈の湖なり」とあり、太平洋と香取海に囲まれた砂州状の地形にあったことが窺える。香島（鹿島）流海に臨む中央部に鹿島神宮と鹿島郡家（神野向遺跡）が置かれ、神宮では「年別の文月に、舟を造りて津の宮に納め奉る。」御舟祭が行われていた。その縁起は、鹿島の神が水上交通神であることを示している。

また、天智朝に東北奥地の探検調査のために、陸奥の国岩城の船造りに作らせたという大型船の記事が見える。

「輕野より東の大海の浜辺に、流れ着ける大船あり。長さ一十五丈、濶さ1丈余り、朽ち摧れて砂に埋まり、今に猶遺れり」。おそらく鹿島灘を航海中に漂着したものと思われ、長さ約45m・幅約3mという規模は、大きさもさることながら全長と幅の比が15:1という極端に細身の船である。しかし、複材刳船や準構造船ではあり得ない数値ではないという（中村1994）。当時、太平洋を航海する大型船が存在した可能性を示す資料として注目される。

③『将門記』（940年頃）にみえる常総の水域

平将門は下総国猿島郡石井郷に王城を築き、それに関わる津を相馬郡大井津に設け、「京大津」に対して大井津と号している。これは近江の海に対する香取の海の対比であろうか。また、水流図（図1）に大井津をみると、半島状に内海に突出しており、内海の南の渡り口として良好な立地である。また病身の妻子をかくまった、「辛島郡（猿島郡）葦江津」は大井津から舟で広河を遡った湖沼地帯に位置する。

④『今昔物語集』（1120年代を上限に成立）巻第二十五 本朝付世俗にみえる香取海

源頼信朝臣、平忠恒〔常〕を責むるを語るの中に上記の「衣河の尻やがて海の如し、鹿島、梶取（香取）の前の渡の向ひ、顔見へ不程也、」「家の伝へにて聞き置けることあり、『此の海には浅き道、堤の如くにして、広さ一丈計にて直ぐ渡りあり、深さ馬の太腹になむ立つなる』」の記述があり、これによって、12世紀の初め頃、鬼怒川の河口が海のようにであったこと、また鹿島から対岸に馬でわたれる浅瀬があったことがうかがえる。海上潟の開口部、安是の湖（現在の銚子河口付近）では太平洋からの波浪と河川の流勢によってそのような洲ができることがあったという。

（3）中世の香取海

中世東国の水運や流通に関する研究は、近年相次いで成果が発表されている分野である。その研究の中心は総武の入海と相模湾を対象とするものであったが、太平洋海運・常総の水運に着目した新たな視点が示されている。

① 霞ヶ浦・北浦周辺の「海夫」の分布

香取社の大禰宜文書には、12世紀後半、「応保・長寛・治承以来」、常陸・下総の海夫は香取社大禰宜の支配下に置かれていたことが記されており、応安7（1374）年の海夫注文には海夫の分布状況が示されている。海夫の根拠地はすべて津といわれており、当時の津の位置を知る史料でもある。これに注目して、下総海夫の津の位置を明かにし、香取海をめぐる水運と海夫の分析が行われている（網野1956・1982・1984、小竹森1981）。海夫たちは、入海での漁獵によって供祭料を貢進するとともに、広範にわたる水上交通に携わっていたとみられ、香取社がこの人々に関渡津泊を自由に通行しうる特権を保証していたことが推定されている。

江戸時代に入ると、津々の海夫たちは玉造浜を北津頭、古渡浜（^{むつとはま}稲敷郡）を南津頭とする霞ヶ浦四十八津、白浜を津頭とする北浦四十四ヶ津を管理した組織として姿を現す。その根拠地はすでに中世に形成されていたといえる。

また、主要な3つの津頭の根拠地と香取海水域の古墳分布状況はほぼ重なりとみられ、その起源は、古墳時代の地域首長の領域に求められる可能性がある。

② 鎌倉河岸

現在の江戸崎町・桜川村を画する小野川河口には、信太荘古渡・東条荘古渡に当たる地に、鎌倉河岸の地名が残る。いずれも頼朝・政子が鹿島参詣のため上陸したという伝承があり、埼玉県北葛飾郡・東京都葛飾区の鎌倉、千代田区神田の鎌倉河岸をつなぐ、東京湾に流れ込む河川を通り、鎌倉に通ずる「水の鎌倉道」があったことが推定されている（網野1982、1984）。海夫たちの活躍を背景に、この水の道全体を押さえようとした香取社大禰宜の動向は、さらに古代に遡ってこの水域を掌握した有力な豪族の存在を示唆する。

このほか中世の香取海の状況を知る史料に、南北朝期暦応4（1341）年の武蔵国別府尾張太郎幸実の軍忠状（『集古文書』二四）がある。「同17日、屋代彦七信経に同道仕りて、信太庄に馳せ向うの処、佐倉城（現江戸崎町佐倉）の凶徒等、没落せしめ候い訖んぬ。伊佐渡（津）之入海を打ち渡り、東条城（現新利根村太田）に馳せ参ずの処、御敵降参す。」の記述があり、現在の新利根村伊佐津から入海になっていたことがうかがえ、14世紀半ば

までは江戸崎町南部から竜ヶ崎市北東部にかけての地域が霞ヶ浦・北浦に連なる内海であったことがわかる。

(4) 2つの内海

以上のように、常総の内海が古代・中世の交通・交易に果たした役割には、計り知れないものがある。この常総の内海全体を指す名称は、近世以前の文献上に見いだすことはできないが、水脈によって結ばれた地域的紐帯がやがて武家による東国政権の重要な基盤となったことは自明の理と言える。常陸に派遣された役人によって中央に伝えられた東の「淡海」香取海は、筑波山とともに東国世界の1つの象徴であったといえよう。

一方の内海である東京湾は、古代・中世の海上交通において幹道、あるいは流通の大動脈であったことは言うまでもない。2つの内海をめぐる水運は、政治・経済・文化の変革をもたらす情報伝達の導線であったが、同時に固有の地域圏を画する壁にもなり得た。そのような2面性を抽出することにこの水域圏を分析する意義があろう。

注

(1) 現在東京湾と呼称されている海域（広義では房総半島南西端の洲崎と三浦半島南端の剣崎を結ぶ線以北、狭義では富津岬と観音崎を結ぶ線以北）の名称は、近代以降に用いられるようになったものである。近世以前の名称については、海域全体をさす名称を見いだすことができないようである。綿貫友子氏（綿貫 1998）によれば、慶長 19（1614）年の奥書をもつ随筆集『慶長見聞集』に「見しハ今相模安房上総下総武蔵此五ヶ国の中に大きな入海あり」とみえ、特に名称は記されていない。また、享保 6（1721）年の上総国市原郡町田村村鑑明細帳、明和 7（1770）年の橘樹郡神奈川宿胤師町・久良岐郡小柴村等漁獵争論裁許請書、さらに文化 13（1816）年の相模国七ヶ村・武蔵国二十一ヶ村・上総国十五ヶ村内海漁獵議定書などには「内海」と記されているという。これらの記載によって、綿貫氏は中世の東国を論ずる場合に広義の東京湾の名称として「内海」を用いている。

また、『慶長見聞集』の記載に着目し、房総と相武の間に横たわる内海の総称として「総武の入海」説が提示されている（市村 1992）。名称である。なお、近年一部の研究者が用いている「江戸湾」という名称は、17世紀末以降に西欧で作成された日本図に記載された便宜的な名称であるという。

(2) 科学技術庁資源局『中川流域低湿地開発に関する基礎調査報告書』等によって明らかにされているが、縄文時代の貝塚の分布によっても確認された。

(3) 近淡海に対する遠淡海の問題は、東国にとって大きな問題であるが、ここでは言及していない。

(4) 他に「海上瀉」を詠んだ東歌「夏麻引く海上瀉の沖つ洲に舟は留めむさ夜更けにけり」が巻 14 にある。これには「右の一首は上総国の歌」の左注が付いているため、「海上瀉」は上総国海上郡（現在の市原市の一部）の海岸を指すと考えられているが、下総国にも海上郡（現在の香取郡海上町周辺）があり、直前に鹿島を詠んだ歌（1174）があることから後者を詠んだ歌としてここに取りあげた。

(5) 稲敷郡の東端、霞ヶ浦に臨む古渡・阿波・伊崎付近の浦浜。倭名抄の郷名に乗浜とある。

- 1 赤松宗旦原著・津本信博訳『利根川図志』 教育社 1980
- 2 秋本吉郎校注 『風土記』日本古典文学大系2 岩波書店 1958
- 3 網野善彦「霞ヶ浦四十八津と御留川」『歴史学研究』第192号 岩波書店 1956 (30-36頁)
- 4 網野善彦「海民の世界」『東と西の語る日本の歴史』 そしえて 1982 (121-123頁)
- 5 網野善彦「常総・下総の海民」『日本中世の非農業民と天皇』 岩波書店 1984 (366-391頁)
- 6 石橋充「常総地域における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』第6号 筑波大学歴史・人類学系 1995 (31-57頁)
- 7 市村高男「中世東国における房総の位置」『千葉史学』第21号 千葉歴史学会 1992 (31-50頁)
- 8 上田正昭「古道と海路と」『環境文化』第55号－特集・歴史の道－海上の道－ 環境文化研究所 1982 (2-7頁)
- 9 上野恵司「総における古墳時代後期の埋葬施設の研究－箱式石棺－」『立正考古』第32号 立正大学考古学研究会 1993 (59-75頁)
- 10 川尻秋生「香取の海の由来」『中央博物館だより』No. 30 千葉県立中央博物館 1996 (6-7頁)
- 11 川尻秋生「古代東国の沿岸交通－中世との接点を求めて」『千葉県立中央博物館研究報告－人文科学－』第5巻第2号 千葉県立中央博物館 1998 (69-88頁)
- 12 川尻秋生「板東の成立」『千葉中央博物館研究報告－人文科学－』第6巻第1号 千葉県立中央博物館 1999 (1-15頁)
- 13 川崎晃稔『日本丸木舟の研究』法政大学出版社 1991
- 14 岸本直文「茨城県水戸市出土の三角縁神獸鏡」『考古学雑誌』第78巻第1号 日本考古学会 1992 (113-117頁)
- 15 久曾神昇『日本歌学大系』別巻1, 3 風間書房 1966, 1970
- 16 栗原良輔『利根川治水史』崙書房出版 1973 (官界公論社1943復刻)
- 17 黒板勝美・国史大系編修會 新訂増補国史大系『日本書紀』前篇 吉川弘文館 1979
- 18 小出博『利根川と淀川』中央公論社 1975
- 19 小竹森淑江「中世香取海における津の支配－海夫注文の分析から－」『武蔵大学日本文化研究』第2号 武蔵大学日本文化研究会 1981 (37-53頁)
- 20 澤瀉久孝ほか編『萬葉集大成』総索引 平凡社 1986
- 21 白井久美子「石製立花と石枕の出現」『古代探叢』Ⅲ 早稲田大学出版部 1991 (335-354頁)
- 22 千田稔『埋れた港』学生社 1974
- 23 高木市之助ほか校注 『萬葉集』全4巻日本古典文学大系4-7 岩波書店 1959
- 24 高木市之助ほか編『萬葉集大成』5歴史社會篇 平凡社 1986
- 25 田辺幸雄『萬葉集東歌』塙書房 1963
- 26 千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史』－資料編 古代－ 千葉県 1996
- 27 千葉県立中央博物館平成5年度特別展図録『香取の海－その歴史と文化－』 千葉県立中央博物館 1993

- 28 中村太一「古代東国の水上交通」『古代東国の民衆と社会』名著出版 1994 (133-171 頁)
- 29 永原慶二監修『全譯 吾妻鏡』全5巻・別巻1巻 新人物往来社 1976
- 30 本間清利『利根川』 埼玉新聞社 1978
- 31 松枝正根『古代日本の軍事航海史』上巻 かや書房 1993
- 32 橋口尚武「黒潮の考古学」『黒潮の道』—海と列島文化7—小学館 1991 (55-88 頁)
- 33 吉田東伍『利根治水論考』 崙書房出版 1974 (三省堂 1910 復刻)
- 34 吉田東伍『利根の変遷と江戸の歴史地理』吉田東吾論文講演集 (守屋健輔編) 崙書房出版 1974
- 35 吉田東伍『大日本地名辞書』板東 関東史料研究会 1974 (1908 富山房版復刻)
- 36 龍ヶ崎市史編纂委員会『龍ヶ崎市史』—中世史料編— 龍ヶ崎市教育委員会 1993
- 37 綿貫友子『中世東国の太平洋海運』 東京大学出版会 1998
- 38 和田萃「東国への海つ路」『環境文化』第55号—特集・歴史の道—海上の道— 環境文化研究所 1982 (8-28 頁)

第2節 水運から見た地域的特性

1 海人の首長

(1) 海蝕洞穴と「海人」

房総半島・三浦半島の南端部は、海岸近くまで樹枝状に発達した急峻な丘陵部と常緑樹林が武蔵野・下総台地とは全く異なる景観をかもしだしている。東京湾岸を南下し、浦賀水道に臨むと、景観は一変して岩場の多い海岸線が現われる。対岸の半島が間近に見え、相模灘から東京湾に流れ込む潮に乗って行き交う船の姿は古来の海路を想起させる。東岸をさらに10キロほど南下すると、房総で最も高い鋸山―清澄山丘陵があり、ここから南が古代安房国の領域である。安房国は養老2(718)年に上総国から独立するが、その後一時的に上総国に併合され、再び独立するという経緯をたどった。鋸山―清澄山丘陵によって分断された地形的要因によって独特な文化圏を形成した地域である。

2つの半島の海岸線につくり出された複雑な景観は、いわゆる磯石とよばれる凝灰岩質砂岩と凝灰質泥岩が波に洗われた自然の造形による。このなかに、凝灰岩質泥岩の軟質な部分が侵食されて形成された海蝕洞穴があり、丘陵の裾部に開口している。海蝕洞穴は、縄文時代前期から平安時代まで利用された例が多く、弥生時代以降は墓や祭祀の場として長期にわたって使われている。この地域の人々と海との関わりは、海蝕洞穴遺跡によって最もよく特徴づけられる。

山陰から北陸の日本海沿岸と佐渡に見られる洞穴遺跡が、多くの場合墓であることに注目した藤田富士夫は、日本海域で広範な交易活動を行っていた「海人」集団が存在し、彼らが洞穴を墓域とする習俗をもっていたことを示唆した⁽¹⁾。

「海人」は古来、漁業と航海に習熟した海辺の民の総称として用いられている。古代の文献では、『日本書紀』応神3年11月の条に、各地の「海人」が命に従わないため阿曇連の祖大浜宿禰を派遣して平定させ、海人の「幸」としたことが記されているのをはじめ、王権に海産物を貢納し、あるいは水先案内をつとめる海人の記事が散見される。応神5年8月の条には諸国に令して海人と山守部を定めた記事があり、山林を管理して山の幸を貢納する山守部と共に王権の下に統制されたことが窺える。王権の各種行事、神マツリに海産物が不可欠であり、その安定した供給が必要であったことを反映しているといえよう。王権の下に編成された海人は、やがて海部・阿曇部などの品部として史料に現れ、『和名抄』に見える海部郷・海部郡は律令制に組み込まれた海人の存在を裏付ける。古代史料に海人・海部・大海・凡海部などと表記される海洋民集団は、列島各地に分布し、畿内から東では伊勢・尾張・三河・遠海・上総、信濃・若狭・越前・能登・越中に見られる。

日本海沿岸の海蝕洞穴墓が海上交通を掌握した海人たちの墓であったように、房総・三浦半島の洞穴墓も古東海道を支配した海人の墓であったと考えられる。

伊豆・房総半島の海岸の狭い低地帯には、紀伊半島と同じ地名が散在し、海運による広域な交流がうかがえる。一方、伊豆半島・伊豆七島・房総半島の南端には「海の祭祀」跡が集中し、古墳時代から奈良時代にわたって青銅鏡や多量の石製・土製祭祀具を用いたマツリが行われており、航海の安全や大漁を祈願した海人の足跡をたどることができる。

安房地域の洞穴

No.	洞穴名	所在	標高	規模	時代
1	松部洞穴	勝浦市松部1641-5			縄文
2	こうもり穴洞穴	勝浦市守谷字茂浦	8	4×3×30	縄文・弥生・古墳
3	本寿寺洞穴	勝浦市守谷前ノ代	10	5×6×13	縄文・古墳
4	守谷洞穴	勝浦市守谷字小浦	3.6	6.5×5×20	縄文・弥生・古墳
5	弁天崎洞穴	勝浦市興津字小湊	3.6		弥生・奈良・平安
6	香指神社遺跡	鴨川市浜被太字宮下	30		縄文
7	白浜の鶏乳洞	白浜町塩浦		×1.6×5	
8	布良(A)洞穴 布良(B)洞穴 布良(C)洞穴	館山市布良字飯山 館山市布良1227 館山市布良	20	2×1×29 6×3×24 2.5×4×30	縄文
9	安房神社洞穴	館山市大神宮字宮ノ谷589		1.5× ×11	弥生・古墳
10	蛇切洞穴	館山市浜田字上棚期376	24	5.9×4.2×37	縄文・弥生・古墳
11	波佐間洞穴	館山市波佐間字茂越650		3×1.5×3	縄文
12	波佐間周辺の洞穴	館山市波佐間		18× ×10	
13	大寺山洞穴第1洞 第2洞 第3洞	館山市沼字大和田東	30.7 27.5 26.5	5.5×4×30 5.2×1.7×× 6×3.6×9.3	縄文・古墳 縄文 縄文
14	北下台洞穴	館山市館山字北下台		6×3×3	古墳
15	山野尾洞穴	館山市山野尾字柳作	20~30	5×1.5×7	縄文・古墳
16	大蔵院裏洞穴	館山市館野大蔵388-5		1.4×1.8×10	縄文
17	伏姫窟穴	安房郡富浦町合戸飯山		1.2×1×6	
18	大黒山洞穴	安房郡鋤南町勝山字大黒山	5	15×12×20	古墳
19	明鑑崎洞穴	富津市金谷字御代袋	20	不明	弥生
20	不動蔵洞穴	富津市金谷字御代袋			弥生・古墳
21	洞口洞穴	富津市萩生字洞口	10	× ×7.3	弥生・古墳
22	ヒカリモ発生地	富津市萩生字竹岡			
23	城山洞穴	富津市竹岡字城山	8	5×10×30	縄文・弥生・古墳
24	城山周辺の洞穴	富津市竹岡字城山			

三浦半島の洞穴

No.	洞穴名	所在	標高	規模	時代
25	勝力崎洞穴	横須賀市泊町			古墳
26	かもめ島洞穴	横須賀市泊町			
27	猿島洞穴	横須賀市追浜南1丁目	6	8×2×16+20	弥生・古墳
28	走水洞穴	横須賀市走水			
29	観音崎洞穴	横須賀市鴨居たたら浜			
30	鴨居洞穴	横須賀市鴨居	5.4	4.5×2.1×5.7	
31	島ヶ崎洞穴	横須賀市鴨居2丁目	3	5×3×8	弥生・古墳
32	住吉神社裏洞穴	横須賀市久里浜8丁目		× ×18	古墳
33	雨崎洞穴	三浦市南下浦町金田雨崎	7.0	7×2.5×5	弥生・古墳・奈良
34	大浦山洞穴	三浦市南下浦町松輪	6.2	8×6×20	弥生・古墳・奈良
35	間口洞穴A B	三浦市南下浦町松輪間口 "	4.6	4×2×6 0.8× ×2	弥生・古墳・奈良 弥生
36	さくら浜洞穴	三浦市南下浦町松輪南向		10×2×30	
37	剣崎南洞穴	三浦市南下浦町剣崎		7× ×11	古墳・奈良・平安
38	毘沙門洞穴A B C D	三浦市南下浦町毘沙門八浦原	6.0 5.8 7.8 7.8	2×1.4×11.5 6.2×4.2×17 11× ×20 5.4× ×8	弥生・古墳 弥生・古墳・平安 弥生・古墳・奈良 弥生
39	宮川洞穴	三浦市三崎町宮川			
40	通り矢向ヶ崎洞穴A B	三浦市向ヶ崎町鑑がかり浜	6.7	5.7× ×8	弥生 弥生
41	西ノ浜洞穴	三浦市三崎町	7.8	9×2.5×28	弥生・古墳
42	歌舞島洞穴	三浦市三崎町白石町			
43	二町屋 神明社下洞穴	三浦市白石町	6.0		弥生
44	海外洞穴 海外第3洞穴	三浦市三崎町海外 "	7.0 7.1		弥生・古墳 古墳
45	浜諸磯洞穴	三浦市三崎町浜ノ原		2× ×5	弥生
46	浜ノ原洞穴	三浦市三崎町浜ノ原	5.0	1.7× ×6.5	弥生・古墳
47	荒崎十文字洞穴	横須賀市荒崎			

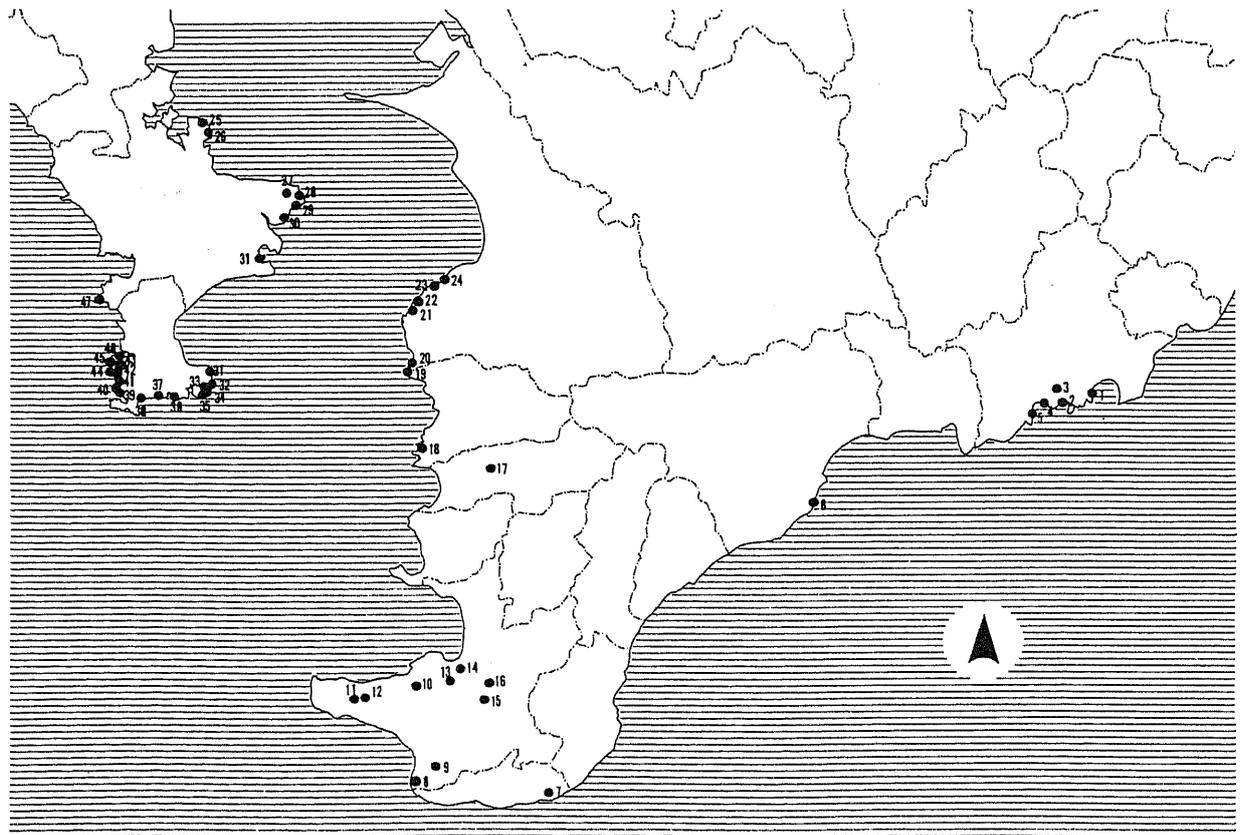


図1 房総半島と三浦半島の海蝕洞穴分布図(千葉大学考古学研究室1997)

(2) 房総半島の海蝕洞穴

房総半島には30基あまりの海蝕洞穴が分布するが、そのうち24基が安房にある。半島南端の館山市内にはこのような海蝕洞穴が11カ所に分布しており、古墳時代の遺物が明らかな例は大寺山洞穴、鉦切洞穴、佐波間洞穴、出野尾洞穴、安房神社洞穴など、いずれも標高20m以上の海岸段丘上にある。

これらの洞穴と同じ段丘上に位置する沼珊瑚礁は縄文海進期の海面上昇によって形成されたと考えられている。当時の海水面は、現在より数m（最大約6m）高かったと考えられており、その後の海水面低下と地震隆起によって現在の標高に至っている。同様の地震隆起を生じている千倉付近の地形断面には、この間に生じた4段の明瞭な海成段丘が見られる。第1段丘が5,500年以上前の汀線高度25mの沼段丘、第2段丘は約3,600年前の汀線高度16mの段丘、第3段丘は約2,900年前の汀線高度12mの段丘、第4段丘は270年前の汀線高度5m（館山では3m）の元禄段丘である。

大寺山洞穴では第3段丘が形成された頃の縄文時代後期の土器が出土しているが、その当時は洞穴の前面に幅100mほどの広いテラスが形成されていたものと思われる。古墳時代の汀線については、第3段丘と元禄段丘の間という以外に確たる資料はないが、地形図から見ると元禄段丘の汀線から洞穴までおよそ250m離れているため、古墳時代には150～200mくらいの幅をもつ平坦面が存在していたものと考えられる。

この海岸段丘上に、2基の注目すべき海蝕洞穴墓があり、そのひとつは後述する館山市沼の大寺山洞穴墓である。現在の館山湾を望むやや奥まった所にあり、甲冑・武器類などの副葬品と共に舟形の木棺が出土している。もう1基は同市浜名の鉦切り洞穴である。鉦切洞穴は、従来縄文時代前期の遺跡として知られていたが、古墳時代から平安時代の土器類と共に古来社室として伝えられる舟が出土しており、ほぼ全体が残る。舳先の尖った細身の形態は大寺山例と同様で、長さは2.5m前後である。元禄8年の記録では2艘あり、それ以前は二十数艘あったと伝えられている。伝説では、祭神の乗ってきた舟とされているが、平安時代から漁民が海神に舟を奉納する風習があったとされ、平安時代に造られたものと考えられてきた。しかし、洞穴では5世紀前半代から6世紀後半代の土器も出土しており、「舟」の形態や質感が大寺山洞穴の例に極めて類似していることから、この「舟」が土器群と同時代の舟形木棺である可能性が高い。安房で確認されている24基の洞穴のうち、半数の12基で古墳時代の遺物が出土しており、洞穴墓の分布はさらに広がると考えられる。

このような洞穴墓の他に、海岸低地や段丘上に墳丘をもつ古墳も存在する。館山市峯で発見された小規模な円墳、峯古墳もそのひとつである。この小円墳からは、くすんだ青のガラスに乳白色・赤・コバルトブルーの色文様を埋め込んだ極めて希少な「トンボ玉」が出土している。国産品と考えられるものは、後期古墳からの出土例が多く、コバルト着色の濃紺のガラス地に黄色や緑色の小玉をいくつか埋め込んだ単純なものが一般的で、峯古墳のように複雑な色模様をもつ例は他にない。小型の滑石勾玉、赤瑪瑙・白瑪瑙の丸玉、碧玉の管玉、コバルトブルー・緑青のガラス小玉など中期前半の古墳から出土する玉類が伴出し、いままで国内で最も古いと考えられていた5世紀中葉の福井市泰遠寺山古墳の舟形石棺から出土した例⁽²⁾よりさらに遡る出土例になる⁽³⁾。

この色模様に見られる風車の羽根を埋め込んだような意匠は中国・朝鮮半島のものとも異なり、さらに西方からもたらされた可能性がある。また、韓国慶州市味鄒王陵C地区四号墳（5世紀代の古新羅王族の墓）から出土した「人面トンボ玉」も象嵌された人物の特徴から白色人種の手によって作られたものられたものであることが指摘されており、赤瑪瑙の勾玉・ソロバン玉・丸玉、水晶玉、碧玉の管玉、コバルトブルー・緑青のガラス小玉が連なった玉の構成と古墳の年代が峯古墳と非常に近いことが注目される。このような通有の小円墳の被葬者には入手困難な副葬品をもつことに、漁労・海運を生業とした安房の海人の特異性がうかがえる。

また、刳抜式の石棺がほとんど用いられていない総武・常総地域にあって、唯一鴨川市に刳抜式の舟形石棺（広場1・2号墳例）が出土しているのも上記の地域的特性を表しているといえよう。

一方、安房は河川流域に沿った丘陵に横穴墓が密集する地域でもある。これらのほとんどは未調査であるため実体を知るには至っていないが、玄室は長方形の平面形態で、ドーム状の天井をもち、奥壁や側壁の一部を長方形に彫り込んで棺室とする独特の構造をもつ。築造時期と被葬者の性格が海蝕洞穴とどのように関わるのか、今後の調査の課題である。

（3）三浦半島の海蝕洞穴

三浦半島の海蝕洞穴は、北東部の勝力岬・観音崎周辺と半島南端部の剣崎から油壺にかけて集中的に分布する。1960年以降半島南端部を中心とした発掘調査が行われ、房総半島の洞穴より早くから注目されてきた。洞穴の利用は弥生時代中期前半から平安時代に及んでいるが、弥生時代中期を遡って利用される例は見られない。この点で、縄文時代後期の利用例が多い房総半島南端の洞穴と対照的である。また、三浦半島の対岸に位置する富津市周辺の洞穴で弥生時代以降の遺物しか発見されていない例が多いのは、これに呼応した現象とも見える。

調査された洞穴のうち、古墳時代の利用が明らかな例は、半島南端の間口湾に面した大浦山洞穴・さぐら浜洞穴・間口洞穴、雨崎洞穴、海外洞穴、浜諸磯洞穴である。以下に古墳時代を中心とした洞穴の内容を示すことにする。

①大浦山洞穴

洞穴最奥部から中期の土師器と共に埋葬人骨・副葬品の玉類が出土した。壁際にはアワビ・サザエ・インダタミ・バテイラなどからなる貝層があり、主に古墳時代前期の土器が出土している。また、古墳時代終末期から平安時代に築かれたと推定される石積みの墓が左右の壁に沿って検出された。弥生時代の洗骨葬と考えられる人骨のかたまりも出土している。ト骨・（飾弓）弓弭のような祭祀具のほか、骨角製の離頭銛・ヤスなどの漁具・髪飾り、貝包丁・貝輪・貝刃など動物遺存体を素材にした出土品が目立つ。

②雨崎洞穴

弥生時代中期から後期には、貝層が形成され、骨角製の漁労具・ト骨・貝製品・板状鉄斧などが出土し、生活の場として機能したことが窺えるが、古墳時代には一貫して墓とし

て使われ、多数の埋葬人骨が出土している。中期の例には塗彩された舟形の刳抜木棺が出土しており、滑石製の勾玉・小玉・管玉を伴う未成年の人骨が埋葬されていた。後期には長方形の石組みに木棺を置いて火葬した例があり、内部から火葬骨と共に直刀・玉類が出土している。他に、鉄鏃・刀子・鹿角製品・骨鏃などの副葬品、土師器・須恵器が出土し、古墳時代の埋葬は前期から終末期におよぶ。

③海外洞穴

弥生時代後期から古墳時代終末期にわたる遺物が出土しているが、弥生時代後期から古墳時代前期にはS字状口縁甕や装飾壺を含む土器類と共に多量の骨角器とその未製品が出土し、その数は60点におよぶ。釣針・ヤス・回転離頭銛・骨鏃・アワビおこしなどの漁労具のほか、多量の卜骨・貝製品があり、漁労の基地あるいはそれに伴う祭祀の行われた場所であったと見られる。また、洞穴奥の棚状の落ち込みでは古墳時代前期の土器と共に洗骨葬と考えられる人骨がまとまって出土し、埋葬も行われたことが分かる。古墳時代後期から終末期の遺物はほとんど埋葬に伴う副葬品で、土器類・鉄器・玉類・骨角器などがある。積石墓を築いて改葬（2次埋葬）した例や人骨の頭部に丹を塗った例が見られる。

このほか、さぐら浜洞穴では洞穴内に舟形状の石槨が造られている点が注目される。貝輪と古墳時代後期の土師器杯が2点出土している。また、間口洞穴3号墓から挂甲小札、6号墓からは鹿角装刀子・滑石製勾玉が出土し、大寺山例に近い様相が見られる。隣接する浜諸磯洞穴は弥生時代後期から古墳時代前期に使用され、S字状口縁甕・有段口縁壺など外来系の土器類が出土している。

三浦半島の海蝕洞穴が生活の場として利用されるのは、弥生時代中期から古墳時代前期までで、古墳時代後期以降は主に埋葬の場として使用される。生活層からは貝類・魚類・鳥類・ほ乳類の遺存体と共に多量の漁労具が出土し、釣漁法・刺突漁法と貝の採取が盛んに行われていたことが窺える。同時代の台地上の集落からも少量ながら漁労具が出土し、網漁法に使われた管状土錘が出土することが、洞穴の状況と対照的である。また、洞穴では洗骨・改葬という縄文時代晩期からの系譜を引く埋葬が行われているのに対し、台地上では方形周溝墓・高塚古墳という新たな葬制が採用されている。

このような点から洞穴と台地上の集落を住み分けていることが推定される。洞穴を台地上の拠点集落に対する出村、あるいは季節的な作業場とする見解もあるが、主な漁労のひとつであるカツオ漁と農繁期が重なることから、洞穴は漁労専門集団の生活の場であったと考えられる。古墳時代後期以降、漁労を生業とする人々は砂丘上に生活の場を移しているが、遺跡からはウマ・ウシ・ニワトリの骨も出土し、家畜を飼うようになっていたようである。これらの三浦半島の状況は、集落の様相が未解明な安房の洞穴墓集団の性格を考える上で重要な視点となろう。

また、三浦半島も丘陵上に横穴群が分布する地域である。横穴は海岸部にも分布しており、安房と同様に横穴と海蝕洞穴の被葬者がどのように区別されるのか今後の課題として残る。横穴の構造は横須賀市鳥ヶ崎・佐嶋横穴墓群に代表される長方形平面・ドーム状天井をもつ構造は安房の横穴と共通するが、壁に棺室を造らない点が異なる。

(4) 館山市大寺山洞穴について

①立地と環境

海蝕洞穴は房総半島南部を代表する特徴的な遺跡のひとつであるが、本格的に調査されたのは館山市の鉾切洞穴1基に限られ、その実態はほとんど不明であった。また、鉾切洞穴の調査は特に縄文時代を中心としているため、弥生時代以降の様相については断片的な資料が報告されているにすぎない。大寺山洞穴は、房総半島で唯一古墳時代の遺構を対象とした調査が行われた洞穴である。また、房総を代表する古墳に比肩するような副葬品を出土しており、古墳時代の安房の首長を解明するうえで最も注目される遺跡である。

大寺山洞穴は、館山市沼字大和田東にあり、その名称は安房の大寺と呼ばれる総持院境内の裏山に所在することによる。房総半島南部の州崎半島基部に位置し、館山湾に臨む丘陵の西側に3つの洞穴が開口している。

②調査の経緯

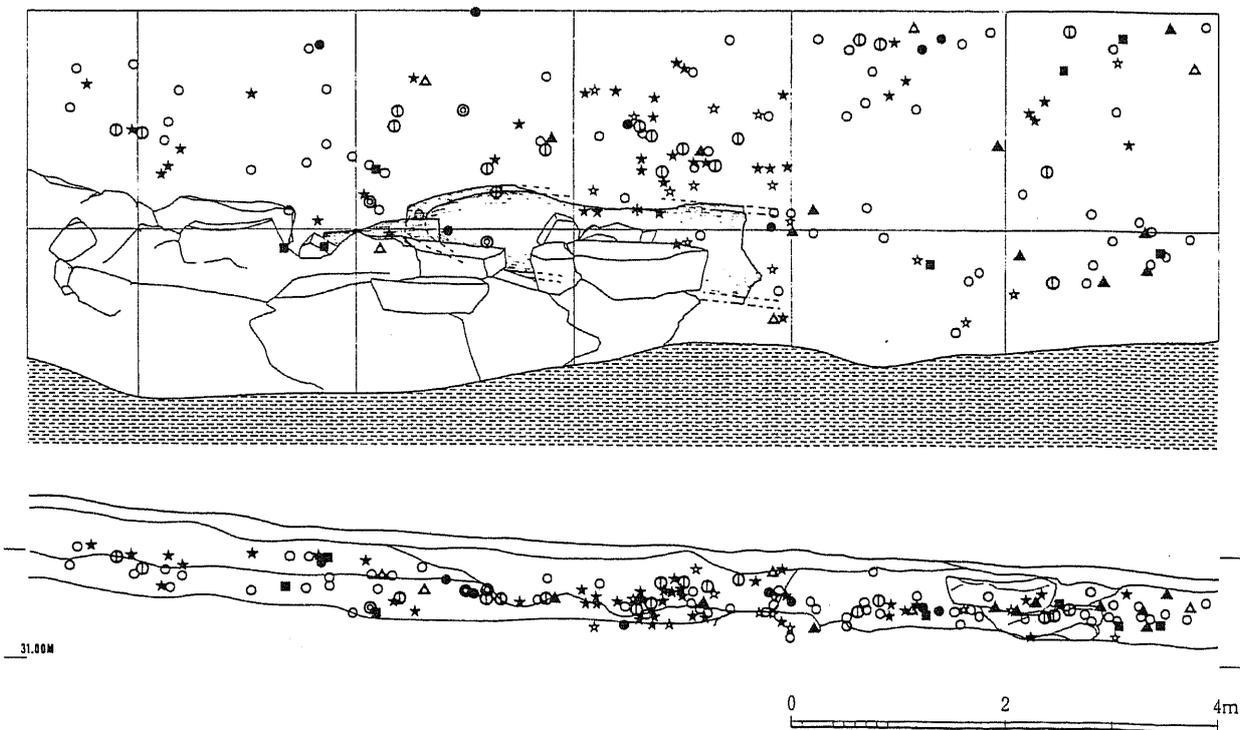
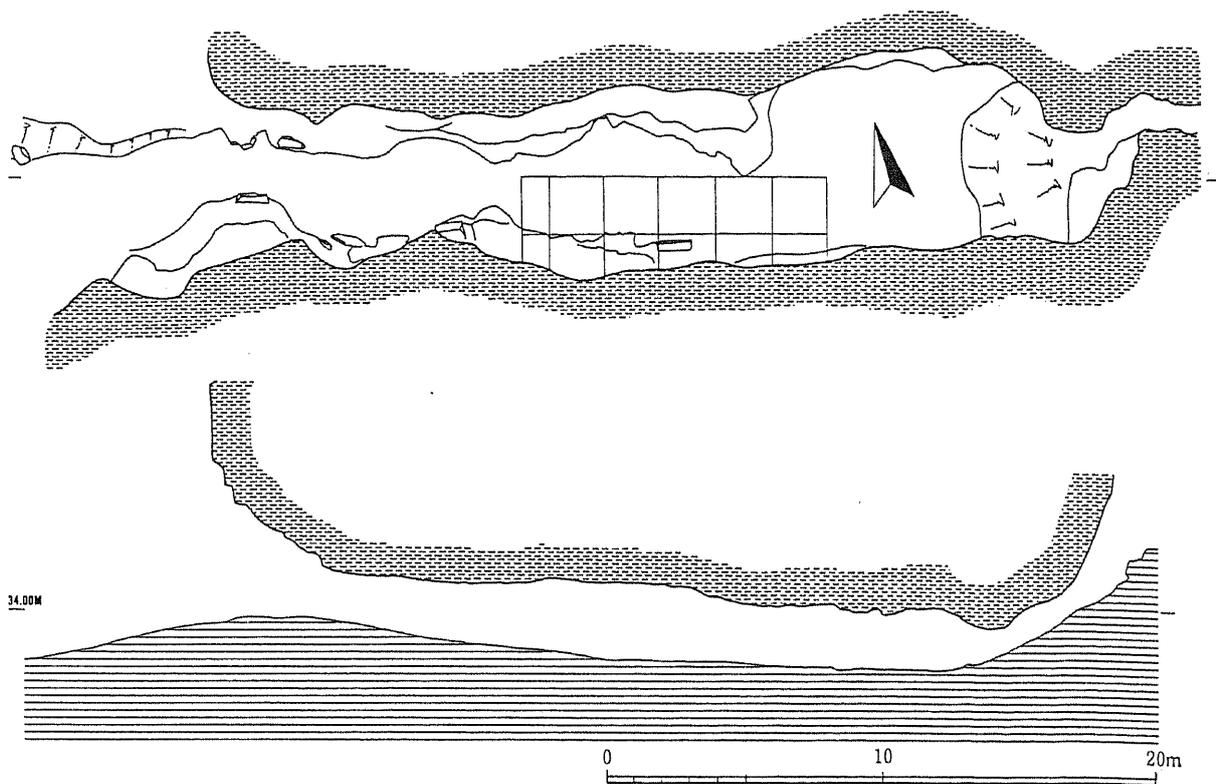
以下の遺物は、大寺山の3つの洞穴のうち最も奥まった位置にある洞穴（第1洞）から出土したものである。この洞穴からは1956年に舟形木棺の一部や人骨とともに鉄製品の破片や土器が掘り出されて、大寺（総持院）に保管されていた。この中に鉄製甲冑・大刀・剣・鉄鏃などの断片が含まれていたことから、古墳時代には有力者の墓として使われていたことが注目された⁽⁴⁾。洞穴内は砂地で適度に乾燥しているためか遺物の遺存状態が良く、特に舟形木棺は最近造られたかのような質感を保っている。収蔵されている木棺は舳先から約1mくらいで、幅が狭く（約40cm）、舳先の尖った細身の形態であることがわかる。1992～98年にわたる千葉大学考古学研究室による調査で、このような舟形の木棺12基が舳先を重ねるように出土している。非常に浅いため、遺骸を納めるというよりは、載せていたという形態である。実際に1基の木棺には仰臥身展葬の人骨3体分が頭部をそろえて置かれていた。ここでは、1956年の出土品を中心に1993年度の調査による出土品を加えて検討しているが、その後の調査によって舟形の木棺と共に青銅製鈴・漆塗り木製盾などの注目すべき副葬品が出土しており、遺跡の性格に新たな要素が加わっている。

③遺物の出土状況

1956年に出土した第1洞の遺物は、洞穴右奥の壁際で出土したといわれていた。

1993年調査区は関係者の話とレーダー探査に基づいて設定されたが、果たして右壁の中央部付近で古墳時代の遺物が出土した（図2）。壁際では、遺物と共に総持院に保管されているものと同様の舟形木棺が出土し、木棺と遺物の出土状況が確認された。これは、舟形の木棺が後世の祭祀に用いられた「舟」ではないかという疑問を払拭することになった。

確認された甲冑の分布状況では、三角板革綴短甲の破片が木棺より奥に多い傾向が



- 凡例
- | | | | |
|-------------|---------|------|-------|
| ▲ 三角板革綴短甲 | ○ 鉄鏃 | * 耳環 | ● 須恵器 |
| △ 三角板革綴衝角付冑 | ★ 鉄製利器類 | ◎ 玉類 | ○ 土師器 |
| ■ 横刎板鉄留短甲 | ★ 大刀・鉞 | | |

図2 大寺山洞穴全体図，遺物出土状況図（千葉大学考古学研究室1997）

あるが、衝角付冑や横矧板鋌留短甲の破片は木棺を取り囲むように分布して、特にまとまった出土状況は見られない。鉄鏃・刀剣類も棺の脇に集中する傾向はうかがえるが、本来の位置を保つものはほとんどないと見られる。その中では玉類と耳環が木棺内、あるいは木棺の付近にとどまっているため木棺内の遺骸に装着されていた状況がある程度保って出土したといえる。鉄製品では大刀や農工具などの破片が木棺内に見られる。また、甲冑・鉄鏃はその形式から耳環・玉類とはかなり時期を異にするため、この木棺の被葬者とは別に副葬されたものと推定されるが、木棺の幅が狭いことを考えると本来棺外に置かれていたものと考えられる。土器の中にはほぼ完形で出土した須恵器Ⅰがあり、木棺より1.5mほど洞穴の中央部へ寄った地点で出土している。

④遺物の検討

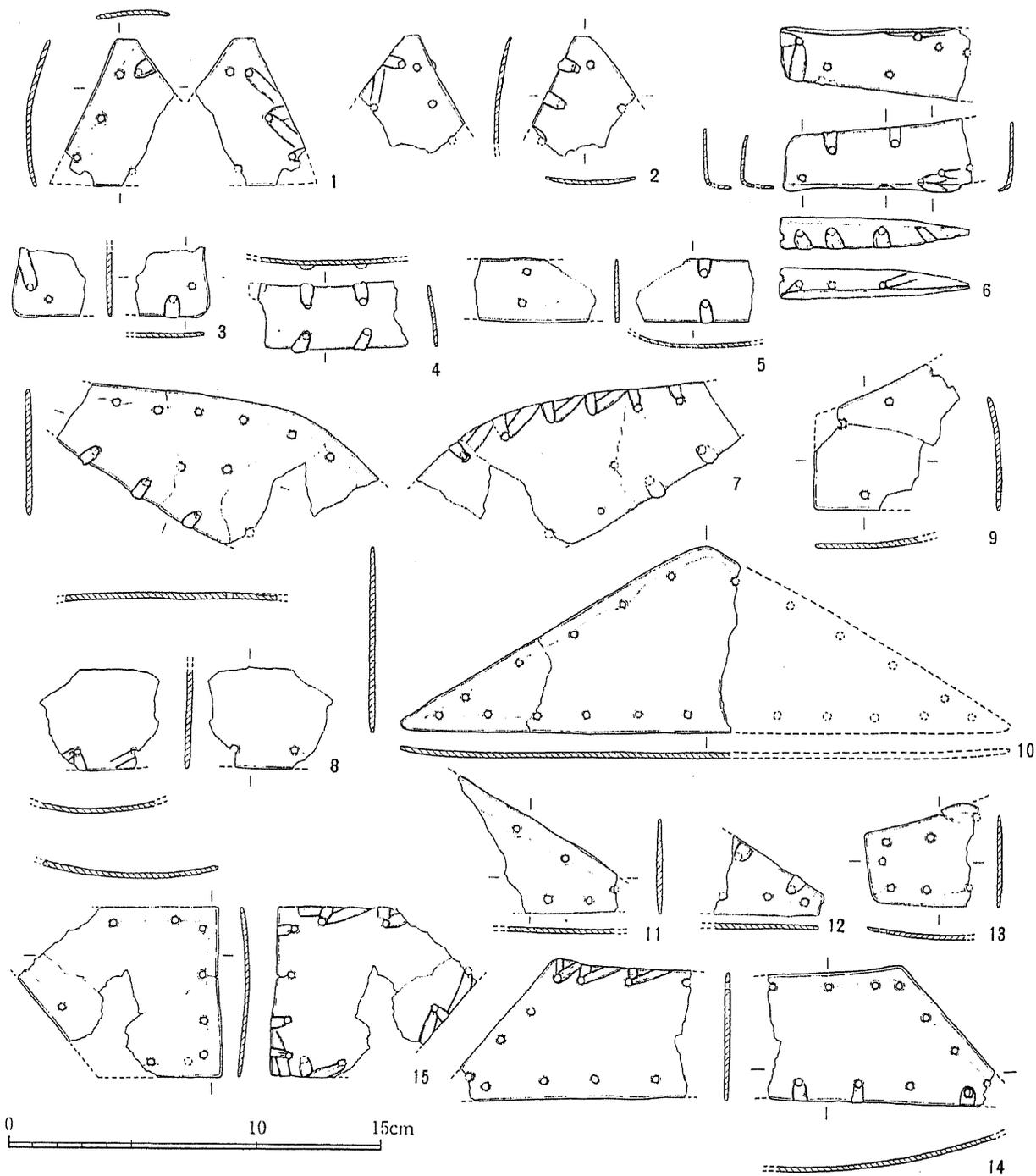
ここで扱う遺物の個体数は、鉄製品が衝角付冑1・短甲2・大刀4以上・剣1・刀子1・鉄斧2以上・鉄鏃17・工具等6、装身具が勾玉1・管玉4・耳環1、土器類は須恵器8・土師器9である。いずれも第1洞に葬られた被葬者に副葬されたものと考えられ、これらの形式は大きく4段階に分かれることから少なくとも4次にわたる埋葬が行われたことが推測される。このなかで、第1次埋葬の副葬品と考えられる三角板革綴衝角付冑と三角板革綴短甲は、房総では唯一共伴して出土した例である。また、1993年の調査ではこれらの甲冑と共に副葬されたことが推定できる鉄鏃・須恵器が出土したことから、その位置づけはより明確になってきたといえる。

鉄製甲冑(図3・4)

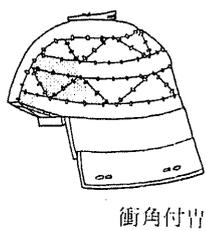
1993年に出土した三角板革綴衝角付冑片6点、三角板革綴短甲片9点、横矧板鋌留短甲破片9点、1956年出土資料(以下56年資料とする)のなかからこれらと接合した3点、今回出土の蝶番の座金痕をもつ資料を1点掲載した。56年資料と併せても甲冑の全容を知るにはまだ相当の資料が不足している。衝角付冑は、左前側の衝角部付近の部材に限られている。革綴短甲は前胴の長側地板数片と後胴の竪上第2段地板、および脇部の地板を確認できるが、革紐の覆輪をもつ押付板、裾板はまだ検出されていない。鋌留短甲は、蝶番を含めて右前胴の部材がかなり充実しているが、左前胴は未だ空白部分が多く、後胴は竪上第2・3段を除いて断片的な資料にとどまっている。

三角板革綴衝角付き冑は、地板三角板2枚、帯金3枚、衝角左側の金具1点があり、同一個体の部材と考えられる。地板と帯金の位置関係は不明であるが、2点の地板の大きさは若干異なり、帯金には胴巻板と腰巻板がある。56年資料にはしころ板と考えられる薄い帯金1枚と地板2枚を矧ぎ合わせたものがある。

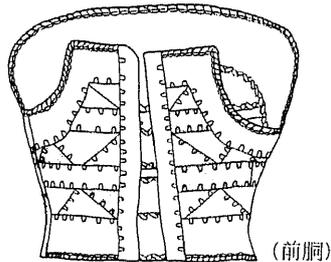
三角板革綴短甲は、後胴竪上第2段右側の地板1枚、後胴竪上ほかの地板三角板3枚、脇部地板3枚、部位・形状を特定できない地板1枚がある。56年資料には後胴竪上第2段の左側隅と右側の地板1枚ずつ、後胴長側第1段の右側脇部地板1枚、前胴引合板側の長側第2段・第3段の地板が1枚ずつ、前胴竪上の地板1枚、部位不明の地板2枚、帯金8点がある。



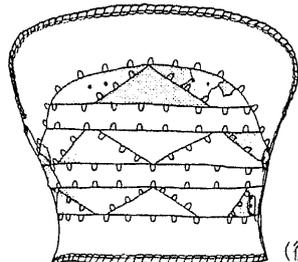
〈付〉 現在出土している革綴甲冑の部位（網かけ） 想定復原図



衝角付冑



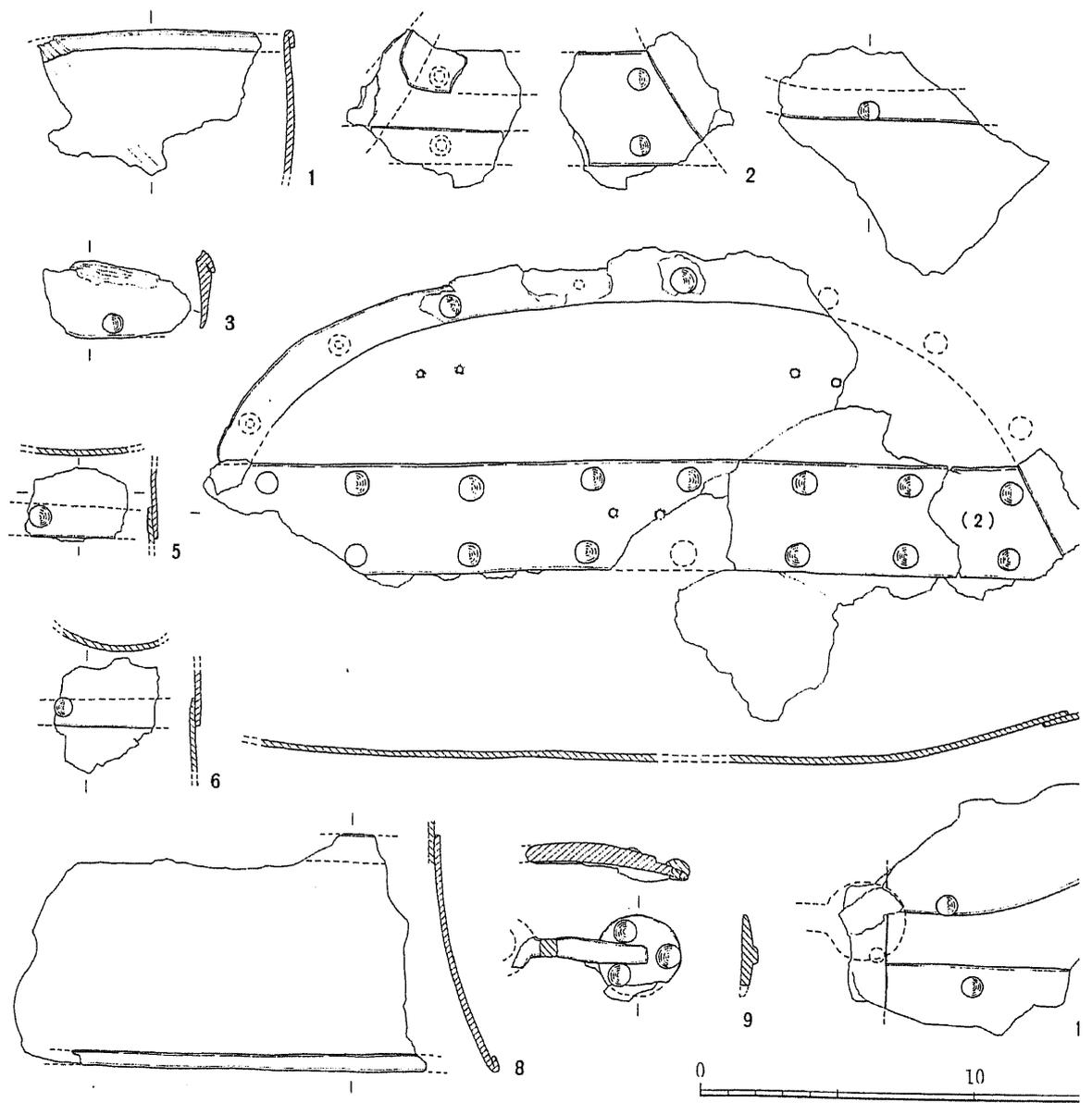
(前胴)



(後胴)

短甲

図3 三角板革綴衝角付冑・短甲



〈付〉 現在出土している鉄留短甲部位
 想定復原図

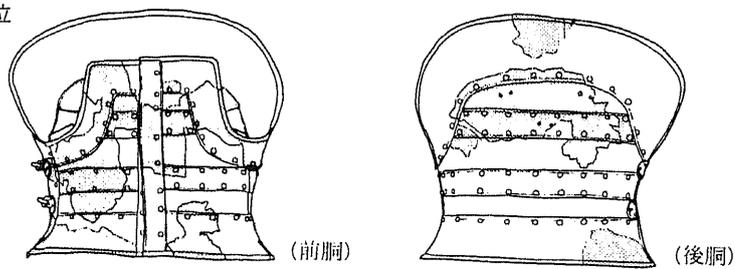


図4 横矧板鉄留短甲

横矧板鉾留短甲は、後胴押付板(図4-1)、後胴押付板と重なる豎上第3段の右側地板(2)、前胴の可能性が高い押付板(3)、後胴脇と考えられる湾曲のある地板(4)、脇部の地板(5)、後胴右脇と見られる脇部(6)、後胴裾板(8)、蝶番金具(9)の8点を図示した。(2)は56年に出土していた後胴豎上第3段の右側に接合し、豎上第2・3段の幅をほぼ確定する資料となった(7)。(2)の裏側に残る豎上第2段の地板には隅切り加工がある。(9)の蝶番金具は円形の座金具をもつ壺側の金具で、同様の座金具に付く釣り手金具と組み合うものである。右前胴に取り付けられていたものであるが、56年出土の右前胴脇部の資料に蝶番座金具の圧痕があり、この圧痕の位置に装着されていた可能性が高い(10)。座金具は径3cm前後で3本の鉾で固定されていた。表面には光沢のある樹脂膜が良く残っている。

鉄鏃 (図5-1~17)

かなり錆ぶくれしてひび割れ、変形しているが、X線撮影と錆落としによって刃部が大きく棒状部の極端に短い片刃箭式が5点、両刃にしのみをもつ腸袂三角形式1点、小型の三角形式1点、片丸の剣身形式1点が確認された。棒状部から茎には厚みや幅の大きな重量感のあるつくりのものと細く軽いつくりのものがある。これらは大きく4段階の製品に分けられ、

I：刃部が大きく棒状部の極端に短い片刃箭式(1~5)

II：太い棒状部が発達して長くなった形式(6~9・11)

III：両刃にしのみをもつ有茎の腸袂三角形式(12)、小型の三角形式(13)・片丸の剣身式(14)の長頸鏃

IV：細く華奢な棒状部をもつ長頸鏃(15~17)がある。

Iは革綴甲冑に伴うと考えられ、逆刺をもつと見られるが、変形が著しいため不明瞭である。2の関は4面に段をもつと見られ、5の関もその可能性が高い。II~IIIは鉾留短甲に伴うと考えられる。IVは耳環・玉類に伴うものであろう。

鉄製利器 (図5-18~23)

18~22は鉄鏃の棒状部を再加工した可能性のある利器である。鑿や鑿として用いられたと考えられるが、茎の遺存する22を見ると矢柄状の柄に装着されていることからヤスとして使われた可能性もある。23は極めて変形し、外形に生きた面は見られないが断面の形態等からヤリガンナの刃部と推定される。

剣・大刀・工具類 (図6)

刀剣類・工具類の破片は錆化による剥離や変形が特に著しく、部位や用途を特定できないものが多い。ここでは剣の切先1点(1)、大刀の破片8点(2~9)、刀子関部1点(10)、斧頭の一部と考えられるもの8点(11~18)を図示した。

大刀には切先1点、目釘孔のある茎4点があり、刀身には1~4のように細身のものと8のような幅広のものがある。4の刀身は56年資料との接合例である。斧頭と推定した8点のうち袋状の柄装着部と見られる11以外は部位を特定できない。12・16・

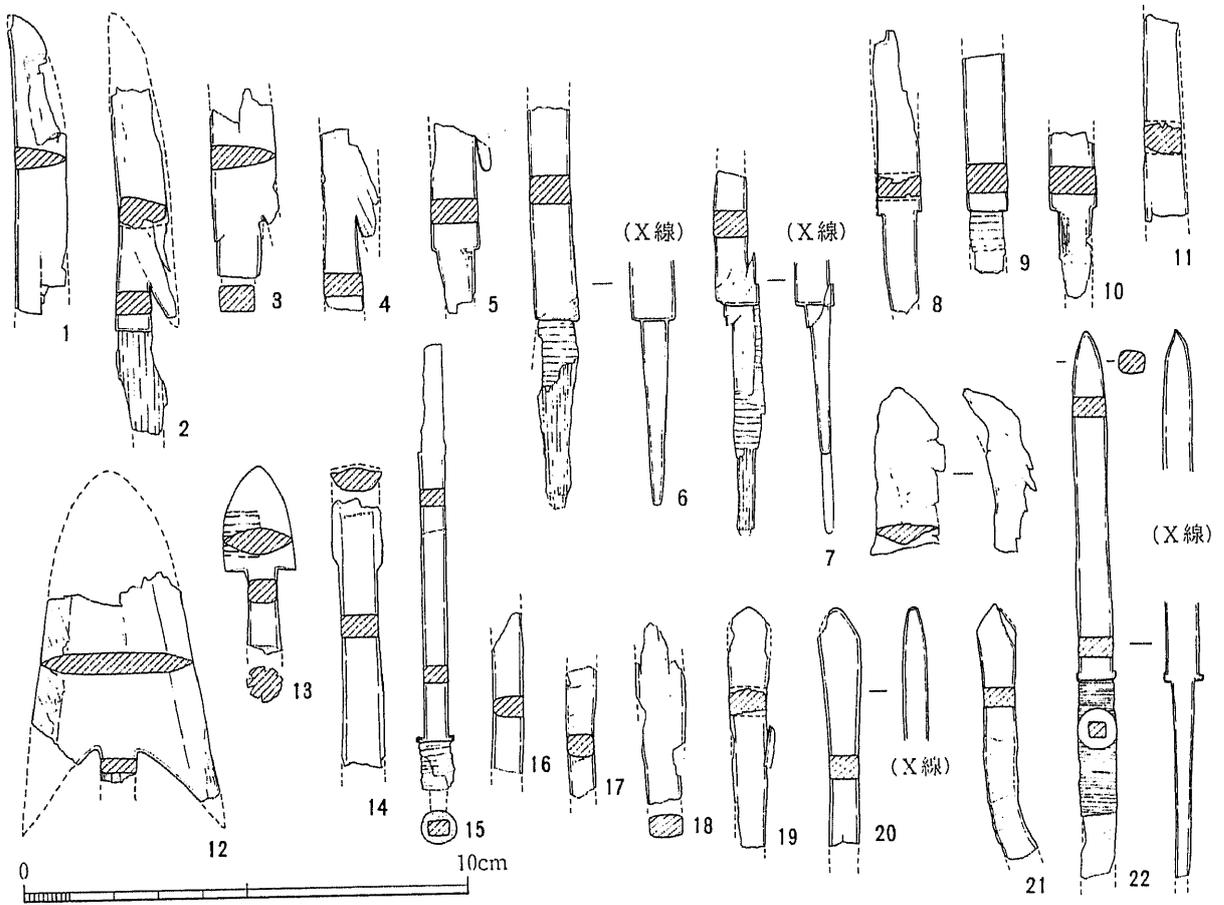


图5 鉄鏃・鉄製利器

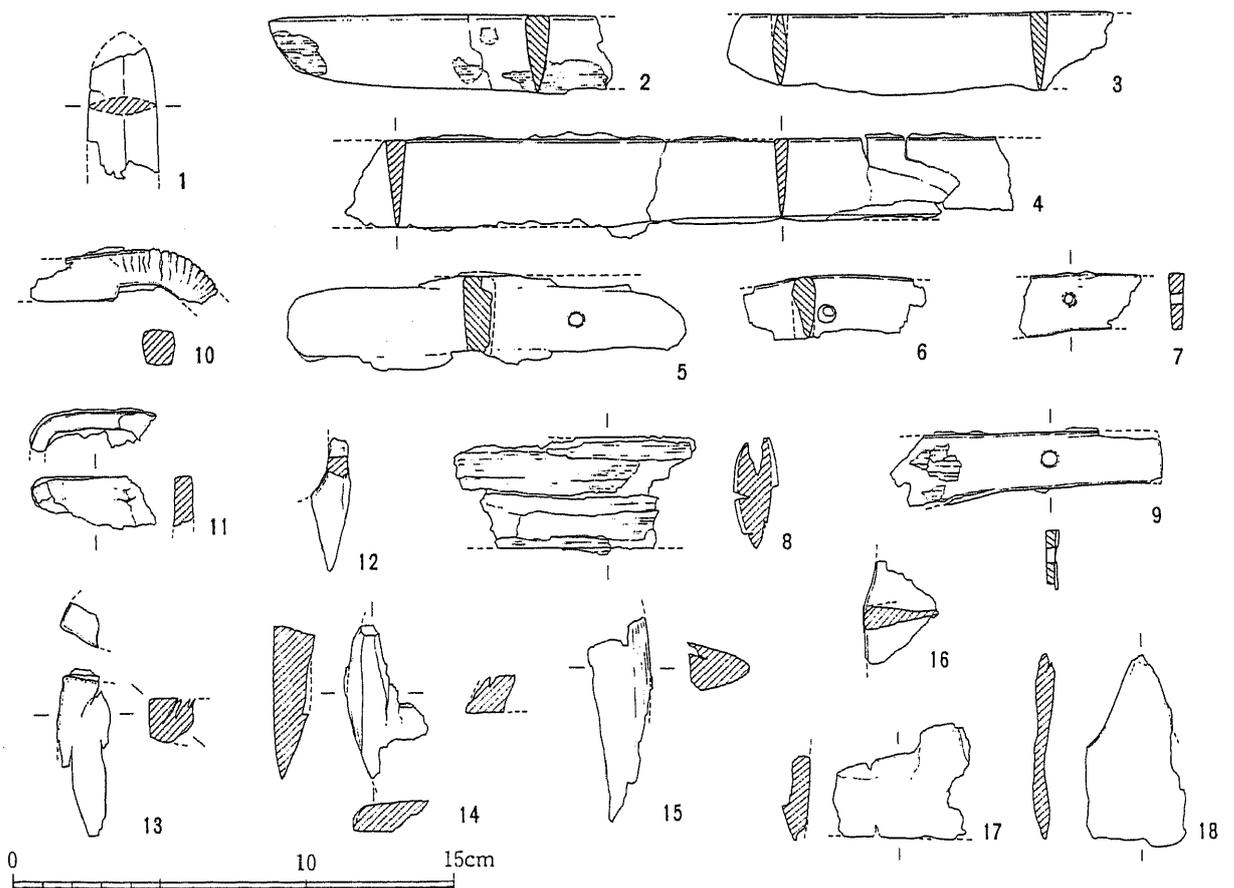


图6 鏃・大刀・工具

18の外縁には斧頭の肩部と考えられる部分が遺存し、13～15は厚みのある側縁に相当する生きた面が残っている。17・18は大刀とは考えられない大型の剥片であることから斧頭を想定した。17は刃先に近い部分と考えられる。

また、その後の調査で直弧文を彫刻した鹿角製の刀剣装具が出土している。

装身具（図7）

メノウ製の勾玉1点、銅地塗金の耳環1点、碧玉製管玉3点（4～6）、埋もれ木製と見られる管玉1点（3）がある。このうち5・6の碧玉製管玉は総寺院に保管されていたものである。メノウ製の勾玉は断面の丸みが弱く、周縁を面取りして仕上げた製品で、頭部の穿孔は片側から行われている。透明感のある黄褐色を呈する。

銅地塗金の耳環は腐食が著しく、全体に緑青に覆われているが10倍のルーペで観察するとわずかに塗金膜を確認できる。断面は偏平な楕円形である。

碧玉製管玉はいずれも暗い緑灰色で、磨かれて光沢がある。穿孔は片側から行われている。埋もれ木製と推定した管玉はまったく光沢がなく、風化した表面は灰黄褐色であるが本来は黒褐色である。断面は楕円に近く、面取りした痕が見られる。穿孔は両側から行われている。

土器（図8）

図示した須恵器のうち大型甕、短脚の高杯、広口壺の口頸部は今回の調査で出土し、長脚の高杯、高杯蓋、短頸壺、平瓶、広口壺（17）は総持院に保管されていたものである。大型甕はほぼ完形で出土しており、房総では出土例の少ない大型甕の中でも全容のわかる希少な資料である。底部は厚い粘土盤を叩き成形しており、内面には無文の当て具痕がある。底部の外表面は回転ヘラケズリ後、手持ちのヘラナデによって仕上げられており、全体に丁寧なつくりである。胴部外表面はカキ目調整後、回転ナデが加えられている。口頸部から胴部上半の外表面と口頸部の内面には暗オリーブ～黒色のかなり多量の降灰があり、窯体等の小片が溶着している。良好に還元した焼き締まりの良い製品である。

土師器は高杯3点、杯5点、短頸壺1点を図示した。2の高杯は93年出土の破片が総持院保管の資料と接合したものである。高杯にはいずれも多量の赤色顔料（ベンガラ）が厚く塗られており、顔料を塗布した刷毛の痕が明瞭に残り、顔料の粉末や塊が付着している。通有に赤彩された他の器種が赤味の強い赤褐色に発色しているのに比べて、高杯は橙色に近い赤褐色であることから焼成後に塗られた可能性が高い。

これらの土器は4時期に分けられ、

1期：須恵器の大型Ⅰと2～4の土師器

2期：短脚高杯と7～10の土師器

3期：長脚2段透かしの高杯と蓋の組み合わせ、および12・13の土師器杯

4期：14～17の須恵器が該当する。

1期には革綴甲冑と鉄鏃のⅠ段階が対応し、2期には鉾留短甲とⅡ～Ⅲ段階の鉄鏃

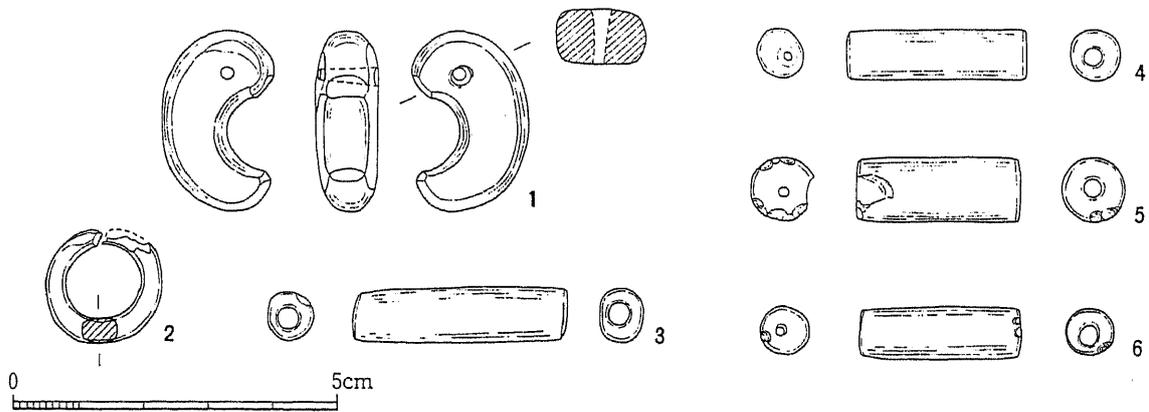


图7 耳環·玉類

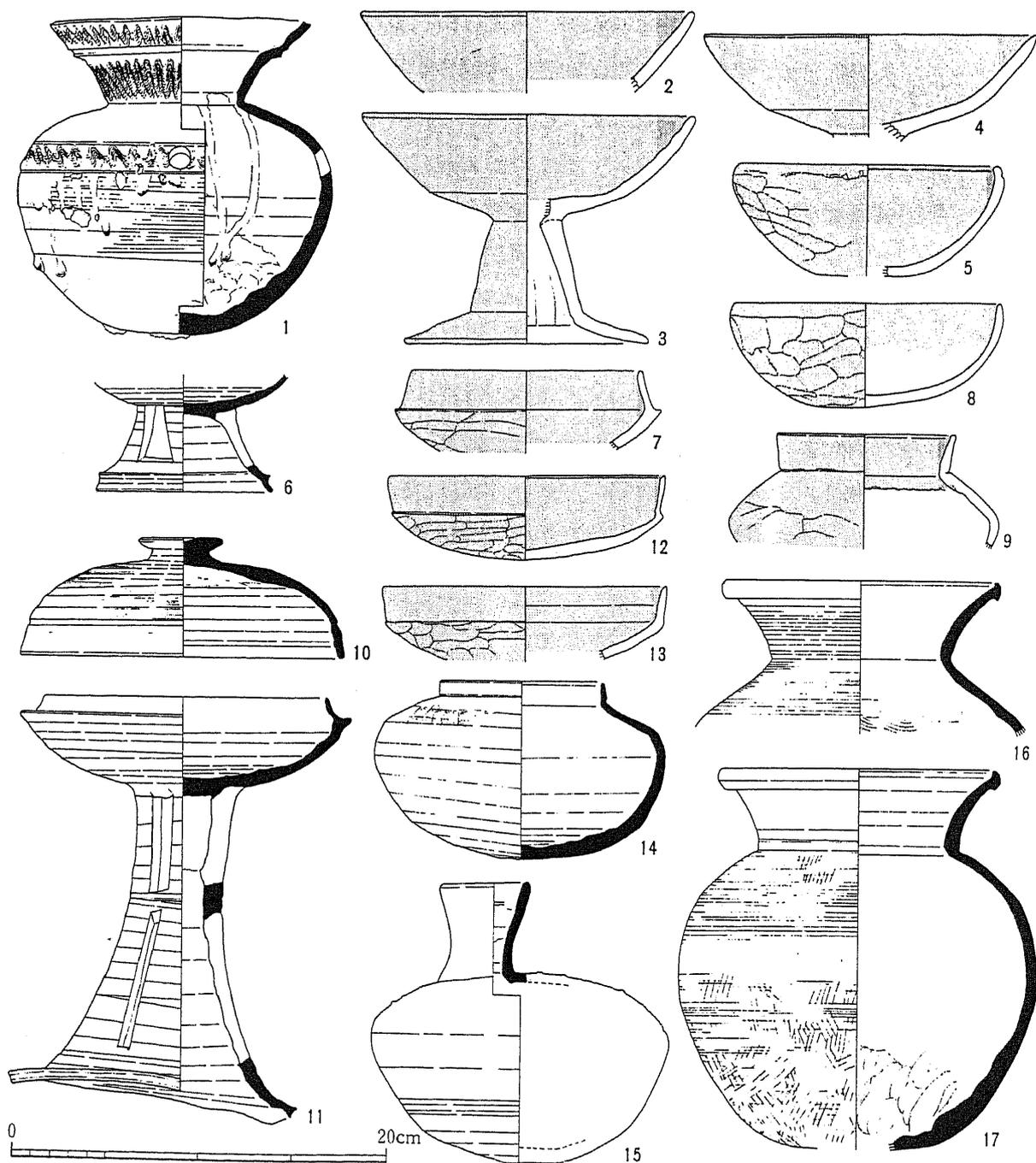


图8 須惠器·土師器

が伴う。3期には木棺内の装身具やIV段階の鉄鏃が伴うと考えられる。4期の須恵器に対応する副葬品は確定できないが、この時期にも埋葬が行われていたのであろう。

⑤舟形の木棺について

大寺山洞穴で出土した木棺は、いずれも削りの浅い丸木舟形である。12基の棺は南側の壁沿いに舳先を洞穴の開口部に向けて並べられ、棺と棺の間に横木を渡して積み上げられたように出土している。高塚古墳の舟形木棺とは全く様相を異にしており、蓋の有無も明らかではないことから、丸木舟を転用した「舟棺」とする見解が示されている（岡本1999他）。ベンガラで赤彩されており、必ずしも転用されたとは言いがたい。いずれにしても、舟形の棺に遺骸を乗せて累々と安置した様相は、舟葬と呼ぶにふさわしい。

類例を求めると、前掲の三浦半島の例のほか、島根県平田市猪目洞穴で削り舟と推定される幅50cm・厚さ5cmの木片3枚に覆われた人骨が赤彩された土師器高坏を伴って出土している。猪目洞穴は『出雲国風土記』に黄泉の坂、黄泉の穴と記された「磯の岩屋」に比定されている。風土記では既に異界のこととして記され、洞穴に葬られること自体が忌諱すべきことで、洞穴の夢も見てはいけないという。しかし、洞穴を墓とした海人集団にとっては海上の他界への入り口であったと思われ、これらの舟葬例はまさに海上他界を彷彿とさせる。このような海人の他界観が倭王権のもとで形成された他界観とどのように関連するか、本稿の及ぶ所ではないが、舟形木棺・舟形石棺に表象される古墳時代前期・中期の葬送概念が海上他界を強く意識したものであることは確かであろう。次第に農耕に立脚した体制を整えた支配者層は横穴式石室の導入を契機に葬送の形式を変え、海上他界観は概念としてのみ残存するが、海人は原型に近い葬送形式を後期以降まで維持したといえよう。

⑥被葬者の性格

出土資料の検討によって、大寺山洞穴墓の被葬者は洞穴墓の被葬者のなかでも群を抜いて豊かな副葬品をもっていたことが明らかになってきた。特に房総の大型前方後円墳の被葬者でさえもつことのできなかつた革綴甲冑の組み合わせを副葬されている点は注目される。革綴甲冑のなかでも三角板革綴短甲・衝角付冑の組み合わせ例は関東地方全体でも極めて少なく、確実な類例は栃木県佐野市の佐野八幡山古墳出土例に限られる（表1）。これは、大寺山洞穴墓がこの時期の主要な大型古墳に比肩し、あるいは凌駕するような存在であったことを物語っている。

大寺山洞穴墓の被葬者はその副葬品によって5世紀前半から7世紀前半にわたって埋葬されたことが推定される。複数の鉄製武具をはじめ多くの鉄製品を手に入れ、何世代にもわたって同じ墓に埋葬されている被葬者達は、おそらく海上交通の掌握を背景に台頭して王権と結びつきをもち、特別な地位を得たことが推測される。平城宮木簡に表わされた「贄の国」安房の特別な位置づけは、7世紀からさかのぼって5世紀代にその萌芽を見いだすことができるといえよう。

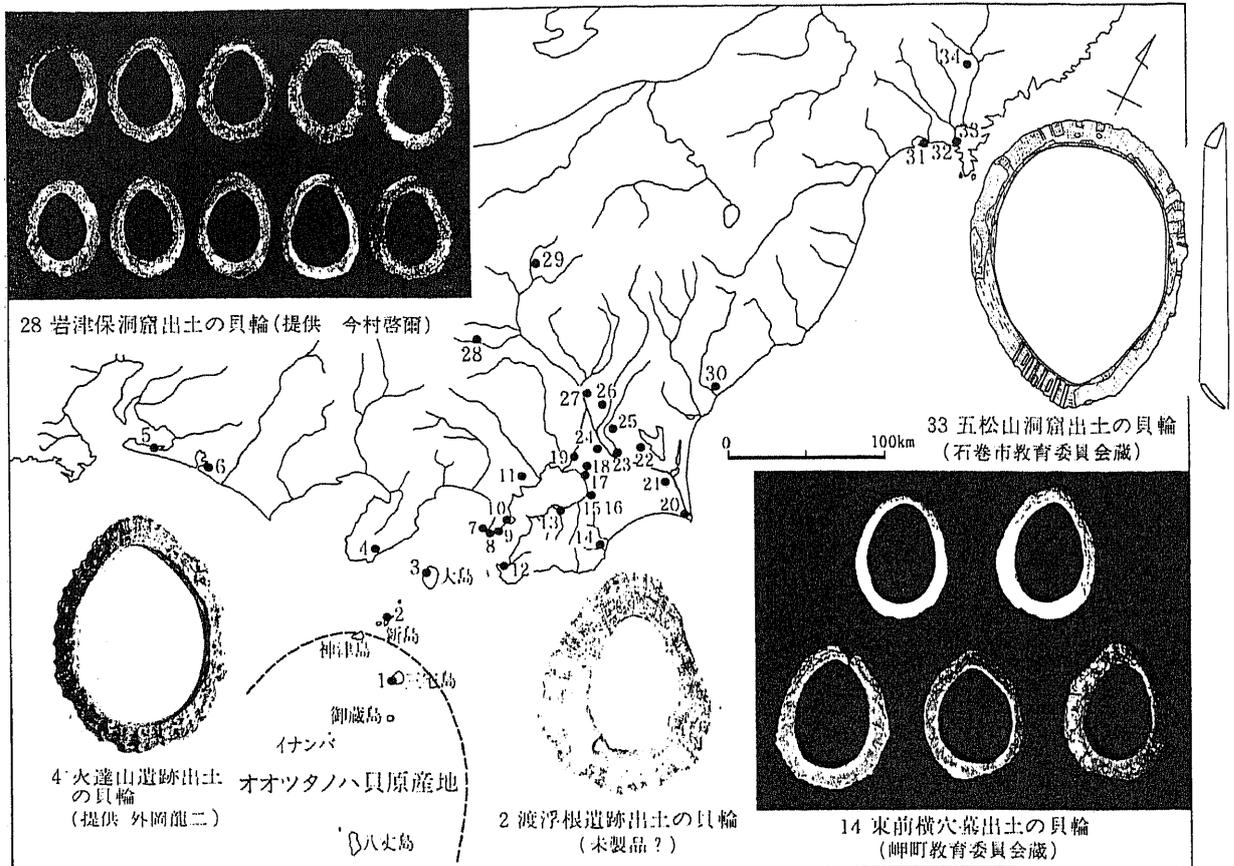


図9 東日本におけるオオツタノハガイ製貝輪の分布 (富田編 1991)

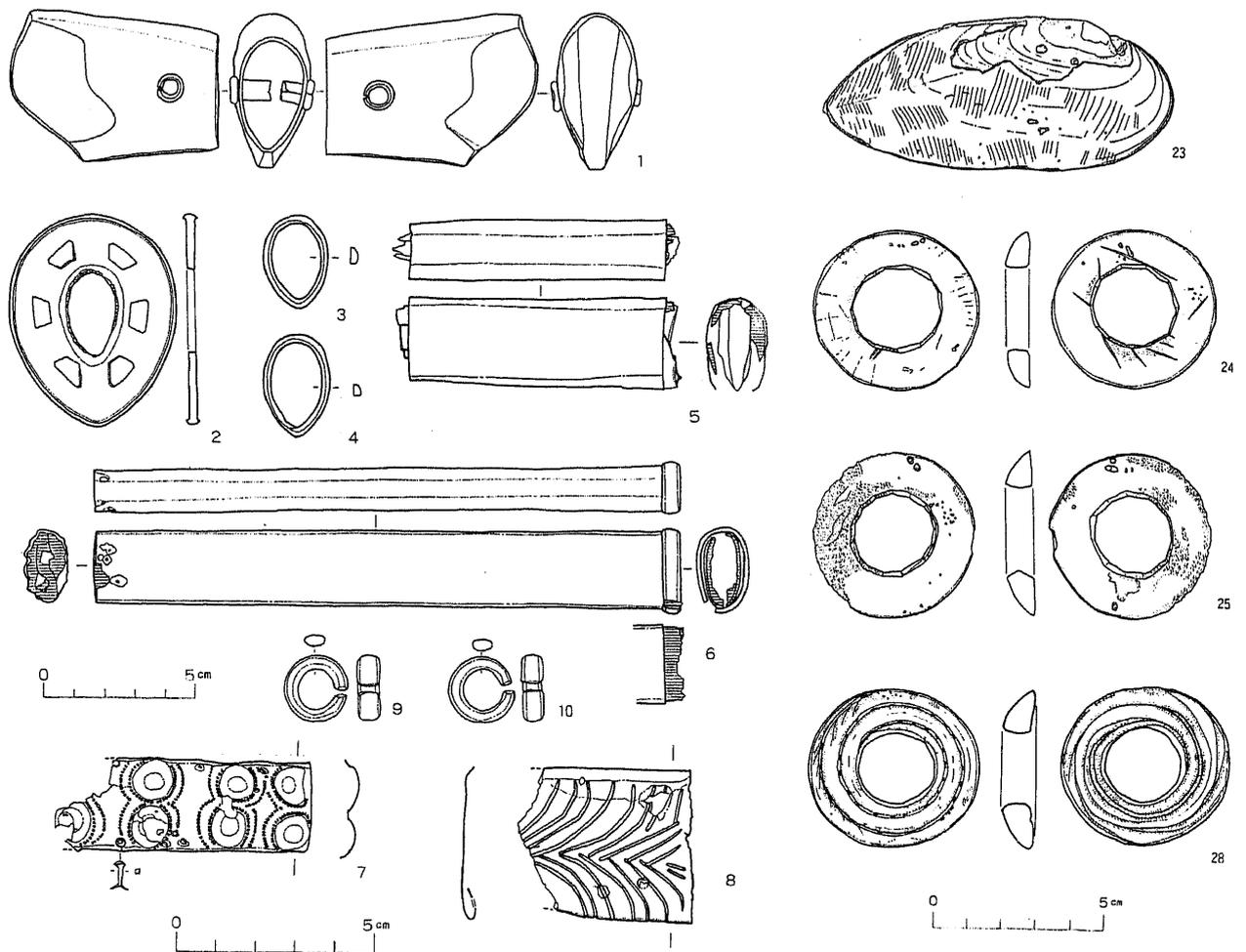


図10 石巻市五松山洞窟出土遺物 (三宅ほか 1988)

(5) 海人の首長墓

海蝕洞穴墓は、紀伊半島から東北南部の太平洋沿岸、山陰・北陸の日本海沿岸に広く分布し、縄文時代から平安時代の人々によって使用された跡が残されている。当時は海に直接面していたと考えられ、海を舞台に活動していた人々の季節的な生活の場、あるいは海の祭祀を行う場であったことを示す遺物が出土している。一方、古墳時代には墓として利用された例が多く、特に、日本海沿岸では海人の首長たちの墓として特別の位置を占めていたことが注目される。大寺山洞穴の調査例によって、常総の南の玄関口である安房もまた、海を舞台に活躍し、かなりの勢力を得た首長がその奥津城を海蝕洞穴に求めた地域であったことが明らかになった。

全国的に見ても大寺山洞穴例に比肩する遺物を出土した海蝕洞穴墓は極めて限られており、宮城県石巻市五松山洞窟は、その数少ない例のひとつである。多様な貝・骨角製品と共に金銅製圭頭大刀・衝角付冑・鉄製武器・須恵器提瓶が出土している。いずれも後期以降の製品で、大寺山の3期～4期に相当する。注目されるのは、遺物の中に南海産のオオツタノハガイ製の貝輪と大型イモガイの環状製品が存在することである。この組み合わせは列島最北端の例である。

関東以北のオオツタノハガイ製貝輪を太平洋岸に北上して見ると、三浦市海外洞穴・毘沙門洞穴・雨崎洞穴→館山市安房神社洞穴→岬町東前横穴→銚子市余山貝塚・赤塚古墳→日立市南高野貝塚→宮城県鳴瀬町里浜貝塚→石巻市南境貝塚・五松山洞窟という東北への海のルートが浮かび上がる。この中で明らかに古墳時代と考えられる例は安房神社洞穴（前期）→岬町東前横穴（後期）→赤塚古墳→五松山洞窟（後期）に限られるが、古墳時代の腕飾が石製や青銅に材質を変えた後もオオツタノハガイ製の貝輪が長く用いられていたことが窺える。海人の伝統のひとつといえようか。大寺山第1洞には貝製の装身具はないが、第3洞にイモガイ製の装身具があり、南海産貝の装身具を伝統的にもつ系譜上にあるといえよう。

一方、紀伊半島との関係では、田辺市磯間岩陰（海蝕洞穴）遺跡に長期にわたる埋葬例がある。岩棚状の海蝕ノッチに石室8基・火葬跡6か所・海亀の甲で蓋をした石槨1基がり、4世紀～7世紀まで継続して使用された大寺山とほぼ同時期の洞穴墓である。多種多様な鹿角製品があり、精巧な作りである。特に鉄剣の鹿角装具は直弧文の彫刻を施した優品である。また、鉄製の銚・釣針をはじめ、漁具が多いのが特徴で鹿角製のヤス・組み合わせ式の釣り針などが見られる。鹿角製のヤスは縄文時代後・晩期のものと形態的な差がほとんどないため、関東地方の洞穴出土例にも再検討すべきものが少なくない。

以上の太平洋岸に分布する古墳時代の海蝕洞穴墓は、地域による葬法の相違はあるが、同一の系譜上にあるものと見られる。三浦半島の兼業漁労民との比較に見たように、海蝕洞穴墓の被葬者は、陸に生活の根拠をもたない人々であったと推定される。王権に組み込まれたとはいえ海上で活動する海人は、定住する農耕民中心の社会にとっては異質な人々であり、海神を信仰する特殊な集団として独特の他界観を守り続けたものと思われる。

2 石材の流通

(1) 古墳と石材

数百年の時を経て、多くの古墳は深い緑に覆われているが、墳丘に葺石をめぐらし長大な石の埋葬施設を築いた古墳は、一種の石の構造物であったといえよう。刳抜き式石棺や大型の組合わせ式石棺が造られるようになると、加工しやすい特定の石材が開発され、大量に切り出されている。九州肥後の阿蘇石（阿蘇溶結凝灰岩）、四国讃岐の通称讃岐石（石英安山岩質凝灰岩）と火山相地石（白色石英安山岩質凝灰岩）、播磨の竜山石（流紋岩質凝灰岩）、大和・河内の二上山白色凝灰岩、越前の笏谷石（足羽山産凝灰岩）は代表的な石材である。これらは石棺や石室に盛んに用いられ、遠隔地へ運ばれた例も見られる。特に、阿蘇石は王陵（允恭陵古墳）の陪塚と考えられる長持山古墳や紀伊大谷古墳の家形石棺に用いられ、阿蘇の豪族と王権・紀伊の豪族との交流を示すものとして注目される。また、竜山石は組み合わせ式の長持形石棺材として畿内を中心に広い範囲で用いられた。これらの石材移動は単に素材の運搬に限らず、工人の移動を伴う場合があり、石材は新しい技術と共に遠隔地へ運ばれたものといえよう。

関東地方は、現在の群馬県を中心とする毛野を除いて、多量の石材や大型の石材を必要とする竪穴式石室や刳抜き式石棺がほとんど波及しなかった地域である。中期以降の組合わせ式石棺と横穴式石室の導入によってようやく本格的な石の埋葬施設が定着している。東京湾沿岸の凝灰質砂泥岩・筑波山麓の筑波変成岩・荒川水系産出の緑泥片岩は、このような埋葬施設の石材として広域に移動したことが推定される。首長間交流の証左として注目されるが、石材の同定を前提とするため、再検討の必要な例が少なくない。ここでは、東京湾沿岸の礫石を中心に、石材の移動について検討することにしたい。

(2) 古墳に使用された礫石

東京湾沿岸の石室・石棺の石材のなかには、直径0.5～3cmの穿孔貝の生痕（Shell hole）が見られるものがあり、それらの石材がかつて汀線付近に存在したことを物語っている。Shell holeをもつ石室・石棺材の多くは、房総半島側の富津市を中心とした地域に分布する。それらの石材が海岸から切り出されたと考えられるのは、Shell holeをもつことに加えて、現在も海岸の露頭に類似した岩石を見いだすことができるからである。それらは第三紀に堆積した多量の火山砕屑物を含む海成層で、隆起し岩棚状の海食台となって露出している。特に鋸山の麓付近から房総半島の南端にかけての海岸線は、軟らかい層が侵食され硬質の部分が残って表面が鋸歯状になった海食台が形成されているため、一定の大きさの板石を必要とする石室・石棺材の切り出しに適していたと思われる。これらの石材は、凝灰質砂岩、あるいは凝灰質泥岩に分類され、海岸には転石も見られる。

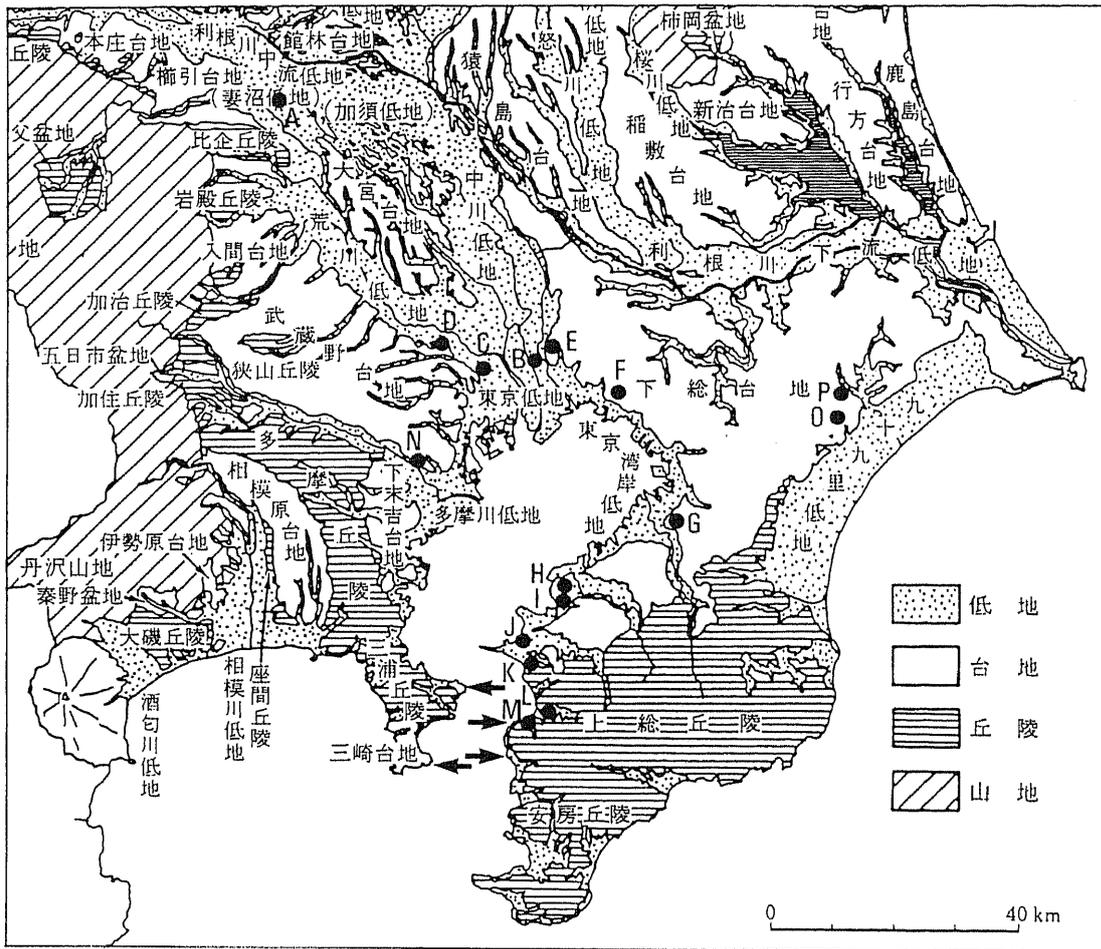


図11 磯石を利用した石室・石棺の分布と石材サンプル採取地（日本の地質1991より引用・改図）
 （A～Pは表1と対応。矢印の採集地は図3を参照）

この房総の海岸に産出する石材が、行田市の埼玉將軍山古墳の横穴式石室に用いられているという見解から、房総の石の広域間移動に両地域の首長の交流を推定する論考（若松1992・1993）が出されたのを契機に、これに注目した分析・検討が相次いでいる（高橋・本間1994、江上1994）。若松論文では、富津市内裏塚古墳群の6世紀代の大型前方後円墳と將軍山古墳の墳形・副葬品の共通性から石材の採取と加工を含めた古墳築造にかかわる房総と武蔵の首長間協力関係を想定し、房総の海岸から埼玉古墳群への石材の長距離運搬を示唆している。高橋・本間両氏は、房州の海岸産出石材（「房州石」の名称を使用）の地質学的な整理と石材使用例の補足を行い、以下の3点を挙げた。

- 1：將軍山古墳の石室に使用された「房州石」は、鋸山付近の海岸にある稲子沢層の転石である。
- 2：石材の移動距離は直線にして118kmで、水運による運搬以外は考えられない。
- 3：將軍山古墳の「房州石」は、石材産出地との政治的関係があったことを示唆していると共にその距離は政治権力と比例することを示している。また、中期前半

の武蔵の代表的な古墳である東京都大田区野毛大塚山古墳の石棺材も「房州石」である可能性が報告され、武蔵と房総南部の首長間の結びつきが石材の長距離運搬をもたらしたとする見解が強調されつつある。

しかしながら、東京湾を挟んで房州（房総南部）と三浦半島は同じ地質層序をもち、稲子沢層を含む三浦層群は両地域の海岸に露頭が見られる。果たして、その産地を房総に限定することができるのであろうか。また、区別できないとすれば、産地を房総に求める根拠についてどのような検討を進めたらよいか。さらに、海岸産出の石材がどのように古墳の石室・石棺につかわれているか具体的な分析を行う必要がある。この課題は使用例の最も多い、いわば「房州石」の本拠地である房総の古墳時代を分析する重要なテーマであると認識している。本稿では地質学・考古学両面からこの課題を分析するための問題点を整理し、その展望を示すことを目的としたい。

なお、石室・石棺材として用いられた海岸産出の石材を「房州石」と呼称するのは、建築用材として用いられたいわゆる房州石と音による区別ができないため、房総、あるいは三浦半島の「磯石」と呼称することにしたい。

（3）磯石を用いた石室・石棺（表1、図11）

表面にShell holeをもつ磯石を用いた石室・石棺の主な例を表1に示した。このうち、サンプル番号を付したものは今回現地調査を行って石材のサンプルを得たものである。また、富津市周辺の使用例については未確認のものが多く、今後かなり追加・修正することになると思われる。

分布の特徴は、

- 1：房総の富津市周辺に集中し、三浦半島側の多摩川以西には今のところ例がない。
 - 2：習志野市から北区にかかる奥東京湾の沿岸に分布の中心のひとつがある。
 - 3：磯石産出地の中心と考えられる鋸南町鋸山付近から約120km離れた行田市にその使用例と推定される將軍山古墳が位置する。
 - 4：太平洋側にも産出地や産出層の異なる磯石の使用例が見られる点である。
- 次に芳賀正和による肉眼観察の所見（芳賀1996）を掲載する。

（4）石材、採集した岩石の肉眼的特徴

考古学上の磯石は主に千葉県内の古墳の石室に使われている火砕岩や凝灰質砂岩、凝灰質泥岩などを指す。これらは房総半島中西部の鋸山およびその周辺の地層に見られる火砕岩や凝灰質砂岩、凝灰質泥岩などと類似する。しかし、一口に磯石といってもその特徴は多様であり、採石場所も複数に及ぶ可能性もある。そこで、本研究は古墳の石材として使われた海岸産出の岩石がどこから運ばれてきたかを明らかにすることを目的とする。その最初の段階として、筆者らは古墳の石材に類似する岩石を実際に露頭で採集し、それと石材との比較を肉眼観察に基づいておこなった。

本論では、まず、古墳の石材として使われている岩石を簡単に記載し、次に房総半島と三浦半島に分布する地層の岩相の説明と採集した岩石の採集地、肉眼的特徴を簡

表 1 東京湾産出の磯石を使用した石室・石棺

地点	番号	所在地・古墳名	磯石使用施設	墳形・規模(m)	時期
A	①	埼玉県行田市・將軍山古墳	横穴式石室	∩・90	6c中
B		東京都葛飾区柴又・柴又八幡神社古墳 立石・立石様	横穴式石室 (横穴式石室)	○・20 —・—	6c後
C		北区赤羽台・赤羽台古墳群 3号墳	横穴式石室	○・12	6c後
		4号墳	横穴式石室	○・20	6c後
		5号墳	横穴式石室	○・23	(7C前)
		6号墳	横穴式石室	○・17	(7C前)
D		荒川区南千住・素戔雄神社瑞光石	(石室?)	—・—	
E		千葉県市川市国府台・法皇塚古墳	横穴式石室	∩・54.4	6c中
F	②	習志野市鷺沼・鷺沼B号古墳	組合式石棺	∩・—	6c後
G		市原市国分寺台・南向原2号墳	横穴式石室	○・24.0	7C前
		西谷14号墳 根田5号墳	横穴式石室 横穴式石室	○・27.7 ○・17	7C前 (7C前)
H	③	木更津市高柳・高柳銚子塚古墳	組合式石棺	∩・142	5c前
I	④	木更津市長須賀・金鈴塚古墳	横穴式石室	∩・95	6c末
J	⑤	富津市二間塚・内裏塚古墳	(竖穴式石室)	∩・148	5c前
		富津市下飯野・九条塚古墳	(横穴式石室)	∩・105	6c前
		富津市下飯野・白姫塚古墳	横穴式石室	○・26	6c後
		富津市大堀・西原古墳	横穴式石室	∩・63	6c後
		富津市大堀・丸塚古墳	横穴式石室	○・30	6c後
		富津市青木・姫塚古墳	横穴式石室	∩・70	6c後
		富津市二間塚・わらび塚古墳	横穴式石室	∩・48	6c末
		富津市二間塚・新割古墳	横穴式石室	∩・39	6c後
K	⑨	富津市小久保・弁天山古墳	竖穴式石室	∩・87	5c後
		富津市綱・綱稻荷塚古墳	横穴式石室	(∩)・(40)	6c?
L	⑩	富津市更和・上北原古墳	横穴式石室	∩・46	6c末
M	⑫	富津市竹岡・松原古墳	(横穴式石室)	(○)・(15)	6c?
N		東京都世田谷区野毛・野毛大塚古墳	組合式石棺	∩・82	5c前
O	⑬	千葉県山武郡山武町・胡摩手台16号墳	横穴式石室	∩・86	7C初
P		八日市場市飯塚・関向古墳	横穴式石室	—・—	7C初

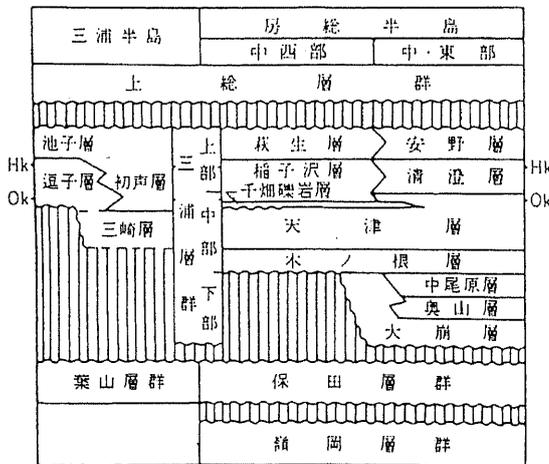


図 12 房総半島と三浦半島の層序対比 (地質調査所1995より引用・改図) (HK, OKは火山灰を表す)

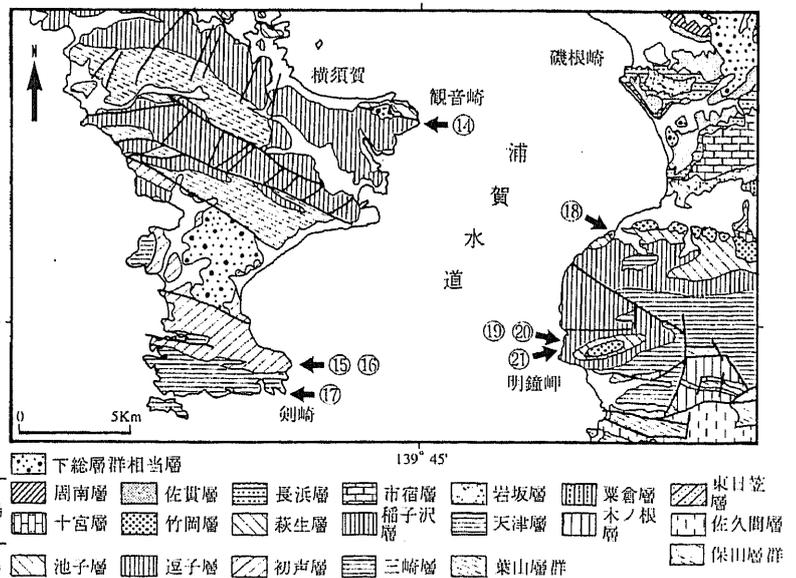


図 13 房総半島中西部と三浦半島の地質図 (数字は表1と対応)

単に述べることにする。

(a) 古墳の石室の石材として使われている磯石。

①埼玉県行田市將軍山古墳石室 (サンプル3点)

1. 乳白色凝灰質泥岩。Shell holeが見られる。
- 2・3. 灰白色凝灰質泥岩。フジツボ、ヒザラ貝が付着する。

②千葉県習志野市鷺沼古墳石室

側板：白色軽石質細粒凝灰岩。水平葉理が見られる。Shell holeが見られる。
天井部：褐色を呈する細礫質凝灰質砂岩。

③木更津市銚子塚古墳石室 (サンプル3点)

1. 乳白色凝灰質細粒砂岩。水平葉理が見られる。
- 2・3. 同上。小片のため水平葉理は確認できない。

④千葉県木更津市金鈴塚古墳石室

灰褐色細粒砂岩。

⑤富津市内裏塚古墳石室 (サンプル4点)

- 1・2・3. 灰白色軽石質粗粒砂岩。水平葉理が見られる。
4. 同色の細粒砂大の凝灰岩。

⑥富津市九条塚古墳石室

凝灰質細粒～中粒砂岩。水平葉理が見られる。Shell holeが見られる。

⑦富津市白姫塚古墳石室

ピンクを帯びた白色を呈する凝灰質細粒砂岩。

⑧富津市西原古墳石室

灰白色凝灰質中粒～細粒砂岩。石英が若干入る。

⑨富津市弁天山古墳石室 (サンプル3点)

1. 灰色細粒～中粒砂岩。石英含み、西原古墳サンプルと類似。
- 2・3. 黄褐色軽石質粗粒凝灰質砂礫岩。

⑩富津市絹稻荷塚古墳石室 (サンプル4点)

1. 白色細粒凝灰岩
2. 多孔質玄武岩
3. 安山岩
4. 凝灰質細粒砂岩

⑪富津市上北原古墳石室

軽石を含む凝灰質粗粒砂岩～凝灰質細礫岩。

⑫富津市松原古墳石室

灰褐色凝灰質細粒砂岩。

⑬山武郡山武町胡摩手台16号墳石室

軟質凝灰質細粒砂岩。

これらのうち⑬胡摩手台16号墳石室のものは他と比べて著しく軟質で、下総層群に由来する可能性が高い。しかし、その他の岩石は白色に近い色の軽石質あるいは凝灰

質砂岩または泥岩が多く、房総半島中西部の鋸山周辺の三浦層群、上総層群に由来する可能性が高いと思われる。そこで、次にこれらの地層の簡単な説明を行う。

(b) 房総半島中西部と三浦半島に分布する地層

房総半島中西部の鋸山周辺に分布する地層は下位から下部中新統の保田・葉山層群、中部中新統～上部鮮新統の三浦層群、上部鮮新統～更新統の上総層群に区分される

(図12)。ところが、房総半島中西部と三浦半島には一連の地層が分布しているので、いずれの場所でも似た岩相の岩石を採集することができると考えられる。そこで、筆者らは房総半島中西部と三浦半島とで実際に似た岩石を採集することを試みた。それらの岩石は、房総半島側では三浦層群稲子沢層、上総層群竹岡層に、また、三浦半島側は三浦層群三崎層、初声層、池子層に属する(図13)。次に、これらの地層の説明を鈴木ほか(1995)および、日本の地質「関東地方」編集委員会編(1986)に基づいて簡単に行うとともに、それらの地層から筆者らが採集した岩石の採集地と肉眼的特徴を述べることにする。

竹岡層：主に安山岩片を主とする凝灰角礫岩からなる。筆者らは次の試料を採集した。

⑱十宮海岸 安山岩片、貝化石を含み、斜交葉理が見られる灰褐色～褐色凝灰質スコリア質粗粒砂岩。

稲子沢層：主として凝灰質泥岩と砂岩の泥岩勝ち互層からなり、スコリア質砂岩と泥岩の互層、軽石質砂岩と泥岩の互層、薄い凝灰質砂岩を挟む。本層基底には厚さ10数mの礫岩層(千畑礫岩)が発達する。筆者らは次の2試料を採集した。

⑲不動岩北 黒色細粒砂を含む灰色泥岩。

⑳不動岩北の道路脇 軽石を含む灰褐色泥岩。

*○不動岩南 スコリア混じり灰白色細粒砂岩および泥岩。水平葉理が見られる。

池子層：主に凝灰質砂岩からなり、泥岩を挟む。海底地滑り堆積層が見られる。

筆者らは次の試料を採集した。

⑭観音崎 灰白色軽石質凝灰質泥岩。風化すると黄色を帯びる。

初声層：主にスコリア質および軽石質の粗粒砂岩からなる。一部には斜交葉理が発達する。筆者らは次の試料を採集した。

⑮雨崎 灰色軽石質中粒～粗粒砂岩。

三崎層：主に泥岩と凝灰質砂岩および凝灰岩の互層からなる。本層の下部は粗粒シルト質泥岩と火砕質砂岩および礫岩の泥岩優勢互層である。筆者らは次の3試料を採集した。

⑯剣崎 褐色～黒褐色スコリア質泥岩。中粒～粗粒砂を含む。Shell holeが見られる。

⑰A剣崎 灰褐色～黒灰色粗粒砂岩。

⑰B剣崎 黒色細粒～中粒砂を含む黄褐色泥岩。

竹岡層は一般に粒度が大きく、安山岩片などを著しく含むことから、他と区別でき

と思われる。しかし、その他の地層はいずれもスコリア質、軽石質あるいは凝灰質の砂岩泥岩互層や砂岩層を主体としており、肉眼的には岩相は互いに似ている。したがって、地層の一部分だけを切り出した石材が、どの地層に由来するものかを肉眼的特徴だけで決めることはほとんど不可能であると言える。

また、石材は三浦層群中上部あるいは上総層群最下部の地層から切り出したものであることはまちがいないかもしれないが、房総半島だけでなく三浦半島を産地とする可能性も十分あるといえる。

(5) 礫石分析の課題

地質学的な作業としては今回は肉眼観察しか行わなかったもので、産地の特定はできなかった。これは非常に困難な作業であり、これを可能にするには、どの層準に由来するか、また房総側か、三浦側かを定める必要がある。それにはまず、石材として使われている岩石の時代や岩石の中の火砕物質の性質を明らかにする必要があると思われる。そこで、筆者らは研究の次の段階として、石材と採集した岩石の微化石、および鉱物組成の分析をおこなう予定である。

考古学的な検討課題は、さらに礫石の使用例を追跡・確認し、礫石を用いた古墳の位置づけを行うことにある。

Shell holeをもつものをなぜ選んだかという問いは、本間氏によってすでに出されている。石室の遺存が良く、構造や石材の使い方が分かる例は数例に限られているが、穿孔のある面を意図的に内側に配したといえる例に鷲沼古墳の石棺が挙げられる。また、市原市国分寺台の3例は、基本的に穿孔面を背面に配しているが、穿孔面の方が平らである場合はそちらを内側に用いるというように石材の加工を最小限にした結果ともうかがえる使い方である。この点も今後確認・検討する課題のひとつである。なお、この穿孔の要因については、穿孔員の生痕のほかにごんぐり等の実が雨水で廻って窪んだものがあるとの指摘があり、掘り出されて長年風雨にさらされた石材にはこのような穿孔がみられることもあり得るため、Shell holeの確認に際して留意する必要があると思われる。

また、礫石には凝灰質の柔らかなものからかなり硬い砂岩まで見られる。前者の代表例には鷲沼古墳があり、後者には弁天山古墳天井石4枚のうち一枚(サンプル⑨-1)が挙げられる。このような礫石の使い分けが個々の古墳、地域によって異なるのか、あるいは弁天山古墳や絹稻荷塚古墳のように同じ石室(石棺)に両者が混在して用いられるのが通有なのかという点の確認も今後の課題である。

主要河川の流域を代表する首長墓のひとつである弁天山古墳では、最も大型の縄掛け突起をもつ天井石に地元で産出しない花崗岩を使用していると報告されていたが、今回の観察によって房総半島中西部の三浦層群、上総層群に由来する可能性が高い軽石質粗粒凝灰質砂礫岩であると判断された。これによって弁天山古墳の石室構造の系譜と被葬者の性格を再検討する必要があると思われる。

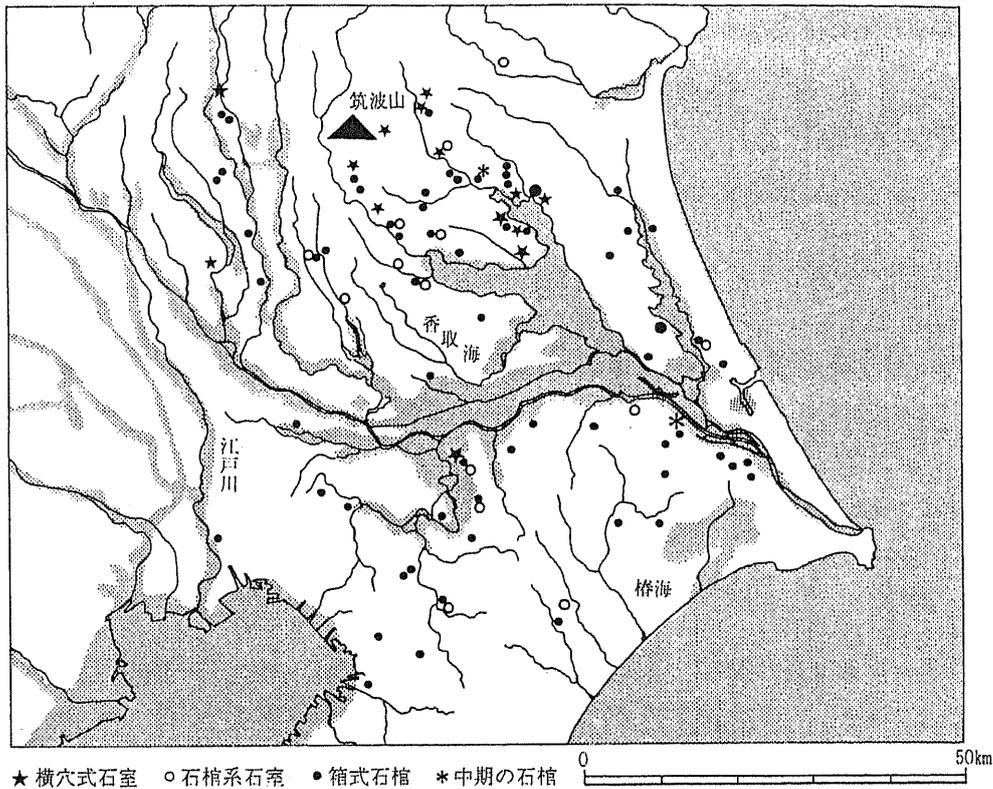


図 14 片岩使用の埋葬施設 (石橋1995を改図)

(6) 筑波石を用いた埋葬施設の分布

香取海の水運と沿岸の交流を物語るものとして、筑波山東麓を中心的な産地とする通称筑波石（筑波変成岩）を用いた埋葬施設の分布があげられる。筑波石は、板状に割れる節理をもつ片岩の1種で、古墳時代には主に組合わせ式石棺の素材として盛んに用いられる。

その分布は、北は鬼怒川の上流域から西は江戸川下流域、東は利根川河口におよぶ香取海沿岸のほぼ全域にわたる。また、印旛沼から南流する鹿島川に沿いにも分布が見られ、下総と上総の境を流れる村田川右岸が南限である。

中期の石棺は、わずか2例であるが、1例は香取海南岸最大の前方後円墳である小見川町豊浦大塚山古墳（全長124m）の長持形系石棺、もう1例は北岸最大の前方後円墳・石岡市舟塚山古墳（全長186m）に隣接する舟塚山13号墳である。豊浦大塚山古墳の石棺は、畿内の大型古墳に組合わせ式の長持形石棺が採用されたことに呼応した新形式の埋葬施設であり、およそ60km離れた筑波山麓から石材を運んで造られたものである。石棺材は幅約90cm、長さ220cm以上、厚さ15cmにおよぶ大型の板石で、この石材の運搬が香取海を経由したことは言うまでもない。

後期に至ると筑波石の埋葬施設は中小規模の古墳に用いられるようになり、分布は一気に拡大する。墳丘の裾部に筑波石の箱式石棺を配置する後期古墳は、香取海沿岸域の常陸・下総地域（常総地域）に特徴的な形式として定着する。

一方、後期の大型古墳には、筑波石を用いた横穴式石室が築かれ、産地周辺では霞

ヶ浦町風返稻荷山古墳（全長70mの前方後円墳）、関城町舟玉古墳（1辺35mの方墳）のように全長10mにおよぶ大型の横穴式石室が見られる。これらの石室には長さ3～4mの一枚石が使われており、片岩板石の素材を用いた最も大型の埋葬施設である。香取海南岸で大型の横穴式石室に筑波石を用いた例は、竜角寺古墳群の浅間山古墳に限られている。浅間山古墳は、南岸の後期～終末期最大の前方後円墳（全長78m）で、列島最大の終末期方墳である竜角寺岩屋古墳の1段階前の首長墓と推定される。この浅間山古墳の築造をもって、埋葬施設の構築に伴う筑波石の遠距離移動は最終段階を迎える。以後、首長墓をはじめとする主要な古墳の埋葬施設には、地元で産出する貝化石入りの砂岩切石が用いられている。このように、香取海沿岸の筑波石の移動は、中期から後期のほぼ全期間にわたって行われ、特に後期には中小古墳の被葬者層にも筑波石の埋葬施設が波及している。しかし、南岸地域では、新たな形式の切石積横穴式石室の採用とともに大型古墳への需要がなくなり、石材の入手を通じた北岸との交流が希薄になったことがうかがえる。大化の改新前後の王権の変革期に、東国掌握の動きが一段と強まり、王権とその周辺の方が在地の交流に変化をもたらしたものと考えられる。

（7）古墳使用石材の流通圏

東京湾・香取海の水運による古墳使用石材の遠隔地移動は、石の埋葬施設構築という古墳時代を象徴する需要によってもたらされたものである。埋葬施設の形式によって適材は異なり、また畿内の首長墓にみられるような特定の色にこだわった石材の選択も石材の遠隔地移動を促したようである。刳抜き式家形石棺に見られる特徴的な石材加工技術によって、九州から畿内へ専門の石工集団が石材と共に移動したことが示されたように、特定の地域間交流を石材と加工技術によって知ることが可能である。

東京湾をめぐる石材流通については、磯石とは対照的に秩父の青石と称される荒川水系産の緑泥片岩が房総の木更津市金鈴塚古墳にもたらされており、武蔵から上総の後期を代表する大型前方後円墳に石材が運ばれたことがうかがえる。緑泥片岩の類例は現在のところ他に確実な例が見られないが、古墳時代後期に隆盛を極めた北武蔵と上総南部の相互交流を知る手がかりとして今後も検証すべき貴重な素材である。

香取海沿岸の筑波石の流通は、古墳時代中期から後期の沿岸首長の交流を如実に物語るといえるが、この流通圏はまた、滑石を用いた石製模造品製作跡の分布と重なっている。滑石の産出地は、群馬県・埼玉県の間付近の「三波川変成帯」と茨城県常陸太田市周辺の「日立変成帯」の2カ所に限られるが、石製模造品製作跡は産出地から遠く離れた栃木県南部と千葉県北部、すなわち香取海南岸地域とその東奥部に集中している。香取海南岸地域は古墳に用いられた滑石製石枕が最も集中する地域で、おそらく製作地もここに存在すると思われる。小型の祭祀具から石枕まで、各種の滑石製品を製作する工人集団がこの地域に集中していたことが想定される。それらの工人を統制した香取海南岸の地域首長は筑波石の本格的な流通に先立って滑石の流通を目的とした広域首長間の交流を行っていたものと思われる。

このように、特定の用途に使われた産地の限定される石材は地域間の交流を知る有効な資料となり得る。考古学的な観察による石材の判断には限界はあるが、岩石学の分析に基づく標本を作成することによって、さらに精度の高い石材流通圏の検討が可能になると思われる。

註

- (1) 藤田富士夫『古代の日本海文化』—海人文化の伝統と交流— 中央公論社 1990
- (2) 中司照世編『泰遠寺山古墳』 松岡町教育委員会 1984
- (3) 白井久美子「海人の首長」『房総考古学ライブラリー6』—古墳時代2— (財)千葉県文化財センター 1992 (16-21頁)
- (4) 田中新史「五世紀における短甲出土古墳の様相」『史館』第5号 史館同人 1975 (80-103頁)
- (5) 第2項の石材の流通—(4) 石材、採集した岩石の肉眼的特徴は、千葉大学理学部地球科学教室の芳賀正和の観察と報告である。

参考文献

(著者五十音順)

- 1 浅賀正義編『新・千葉県地学のガイド』 コロナ社 1993
- 2 麻生優・河原純之・岡本東三「館山市大寺山洞穴墓の舟葬について」『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨 愛知学院大学(代表麻生優) 1998 (36-41頁)
- 3 安藤鴻基ほか『関向古墳』—発掘調査概報— 関向古墳発掘調査団 1975
- 4 江上智恵ほか『立石遺跡』IV 葛飾区遺跡調査会 1994
- 5 大林太良編『古代の日本』8海人の伝統 中央公論社 1987
- 6 岡本健一「埼玉将軍山古墳の横穴式石室について」『調査研究報告』7 埼玉県立さきたま資料館 1994 (47-57頁)
- 7 岡本東三「よみがえる舟葬論」『古墳研究最前線』新人物往来社 1999 (36-41頁)
- 8 奥村 清編『改訂・神奈川県 地学のガイド』 コロナ社 1993
- 9 尾崎喜左雄・藤岡一雄『鷺沼古墳』 習志野市教育委員会 1967
- 10 貝塚爽平編『東京湾の地形・地質と水』 築地書館 1993
- 11 金子浩昌・和田哲也『館山鉾切洞窟の考古学的調査』早稲田大学考古学研究室 1958
- 12 堅田直『紀伊田辺市磯間岩陰遺跡調査概要』帝塚山大学考古学研究室 1970
- 13 金宅圭・李殷昌『皇南洞古墳発掘調査概報』古蹟調査報告第1冊 嶺南大学校博物館 1975
- 14 黒坂勝美・国史大系編修会『日本書紀 前篇』吉川弘文館 1979
- 15 剣持輝久「神奈川県三浦半島南部の海蝕洞穴をめぐって」『洞穴遺跡の諸問題』第2回シンポジウム発表要旨 千葉大学(代表麻生優) 1997 (32-33頁)
- 16 近藤精造監修『千葉の自然をたずねて』 築地書館 1992
- 17 埼玉県立さきたま資料館『さきたま将軍山古墳と銅鏡』展示解説書 1992
- 18 梶山林継・野中徹『史跡 弁天山古墳保存整備事業報告書』富津市教育委員会 1979
- 19 鈴木尉元ほか『東京湾とその周辺地域の地質』(第2版) 地質調査所 1995

- 20 高橋一夫・本間岳史「将軍山古墳と房州石」『埼玉県史研究』第29号 埼玉県 1994
(21-38頁)
- 21 千葉県地学のガイド編集委員会編 『続千葉県 地学のガイド』 コロナ社 1990
- 22 千葉県立中央博物館『鋸山周辺の地層』(自然観察会11) 千葉県立中央博物館 1982
- 23 千葉大学文学部考古学研究室編『館山市大寺山洞穴測量調査概報』 千葉大学文学部考古学研究室 1993
- 24 千葉大学文学部考古学研究室編『大寺山洞穴第1次発掘調査概報』 千葉大学文学部考古学研究室 1994
- 25 千葉大学文学部考古学研究室編『大寺山洞穴第2次発掘調査概報』 千葉大学文学部考古学研究室 1995
- 26 千葉大学文学部考古学研究室編『大寺山洞穴第3・4次発掘調査概報』 千葉大学文学部考古学研究室 1996
- 27 千葉大学文学部考古学研究室編『大寺山洞穴第5次発掘調査概報』 千葉大学文学部考古学研究室 1997
- 28 栃木県立なす風土記の丘資料館 第6回企画展図録『ムラ・まつり・古墳』 栃木県立なす風土記の丘資料館 1998
- 29 谷口栄ほか『柴又八幡神社古墳』 葛飾区郷土と天文の博物館 1992
- 30 谷口栄ほか『柴又河川敷遺跡Ⅱ』 葛飾区遺跡調査会 1989
- 31 寺田良喜ほか『野毛大塚古墳』—第4～6次調査概報— 野毛大塚古墳調査会・世田谷区教育委員会 1992
- 32 日本海洋学会ほか『日本全国沿岸海洋誌』(第3刷) 東海大学出版会 1992
- 33 日本の地質『関東地方』編集委員会編 『関東地方』—日本の地質3— 共立出版 1991
- 34 芳賀正和・白井久美子「古墳に使用された礫石」『土筆』第4号 土筆舎 1996
- 35 萩原恭一『山武町胡摩手台16号墳発掘調査報告書』 千葉県教育委員会 1995
- 36 間壁忠彦・間壁葎子「岡山県丸山古墳ほか長持形・古式家形石棺の石材同定」『倉敷考古館研究集報』第10号 (財)倉敷考古館 1974 (221-231頁)
- 37 松尾昌彦「横穴式石室石材の交流と地域性」『人物埴輪の時代』 葛飾区郷土と天文の博物館 1997 (79-82頁)
- 38 三宅宗議・茂木好光編『五松山洞千葉大学文学部考古学研究室 窟遺跡』—発掘調査報告— 石巻市教育委員会 1988
- 39 宮田登編『海と列島文化』 第7巻黒潮の道 小学館 1991
- 40 横須賀考古学会『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』 横須賀考古学会 1984
- 41 由水常雄『トンボ玉』 平凡社 1989
- 42 若松良一 「埼玉将軍山古墳と渡航文化」『考古学ジャーナル』No. 349 ニューサイエンス社 1992 (20-28頁)
- 43 若松良一「からくにへ渡った東国の武人たち」—埼玉将軍山古墳と房総の首長の交流をめぐって—『法政考古学』第20集 法政考古学会 1993 (199-214頁)

第1章 古墳出現期の地域圏形成

第1節 小銅鐸圏の東縁

1 小銅鐸の年代と性格

—草刈遺跡出土の小銅鐸をめぐって—

(1) 副葬された小銅鐸

小銅鐸は、出土状況が不明な例が多く、伴出遺物も少ないため、その用途・年代に検討の余地が多い遺物のひとつである。明らかに墓から出土し、土器を伴出した草刈遺跡の例をめぐって、その問題に一考を提示したい。

まず、この小銅鐸が墓から出土した点で、従来住居跡との関連で考えられてきたその用途に多様性が見出し得る。また、同地域の類例も含めて棺上、あるいは遺骸埋め戻し段階で副葬されていることから、棺内の副葬品とは区別された使い方が注目される。この墓への副葬ないし供献という発想は、いわゆる「銅鐸祭祀」からは生まれてこないものと考えられ、「銅鐸のマツリ」が波及しなかった伊豆以東の地域で行われた「小銅鐸のマツリ」と「銅鐸祭祀」の違いを検討する必要がある。一方、後者がより広域に分布することを関連づけると、より根元的な「弥生のマツリ」に小銅鐸が用いられていたことが想定できよう。

次に、この例が鈕を省略した形態であること、また、土器と共に出土した希有な調査例であることから、年代の推定が可能な資料であることにも注目したい。

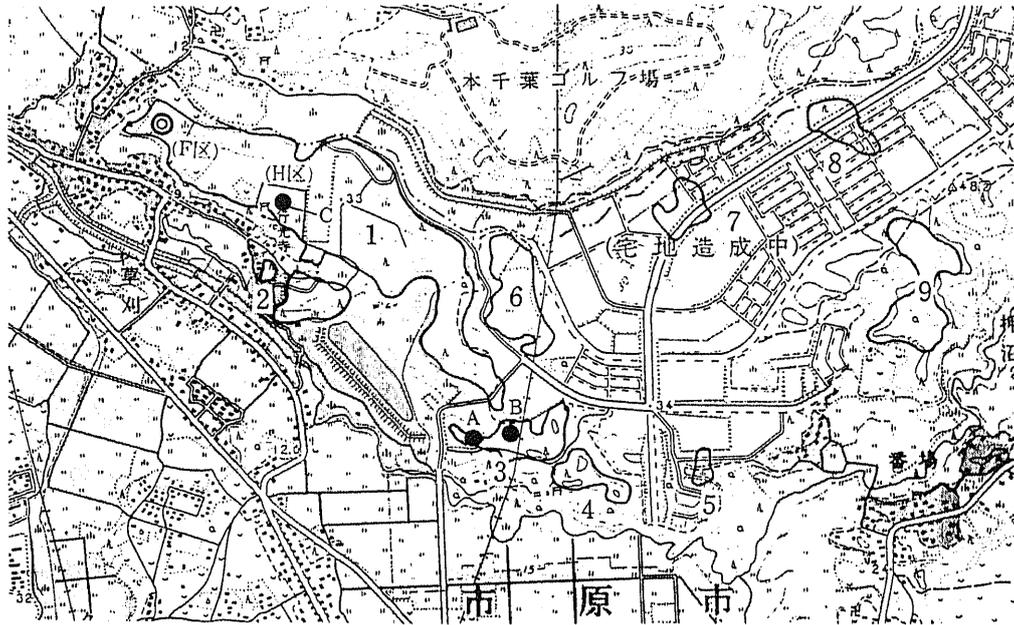
一方、三遠式銅鐸の分布圏以東の小型銅製品の分布には、三遠式銅鐸が作られなくなった後に、工人がその製作に携わったのではないかと考えられる状況が見られる。小銅鐸は最もよくその痕跡がうかがえる遺物でもあり、東国的な銅製品の受容の仕方を分析する上でも示唆的な資料である。

(2) 遺跡の立地と概要

草刈遺跡は、東京湾に注ぐ村田川中流域北岸の市原市草刈に所在し、標高約34mの台地上に立地する(図1)。遺跡は、幅150~300m、長さ15kmにわたって東西に延びる。海岸平野に面した西端部には弥生時代中期の環濠集落があり、草刈遺跡の弥生時代集落はここを起点に東へ営まれている。調査した弥生時代の住居跡は300軒に及び、F区では有角石斧・太形蛤刃石斧・環状石斧などの特徴的な石器が出土した。

小銅鐸が出土したH区は草刈遺跡のほぼ中央南側に位置し、東側に隣接する貝塚を伴った縄文中期環状集落の北西端部にあたる。弥生時代の遺構は、住居跡46軒、木棺土坑墓4基が検出されており、いずれも後期に属するものである。そのうち、木棺土坑墓からコバルトブルーのガラス小玉を伴う断面板状の鋼釧2例と、やはりコバルトブルーのガラス玉を伴う鹿角装柄付の鉄製短剣1振が出土している。

古墳時代の遺構は、方墳9基、円墳2基を検出している。いずれも墳丘は削平され、



1. 草刈遺跡 2. 草刈六之台遺跡 3. 川焼台遺跡 4. 鶴牧遺跡 5. 鶴牧古墳群
6. 中永谷遺跡 7. ばあ山遺跡 8. 野馬堀遺跡 9. ナキノ台遺跡
- A. 川焼台1号鐔出土地点 B. 川焼台2号鐔出土地点 C. 草刈H区小銅鐔出土地点

図1 草刈遺跡群分布図

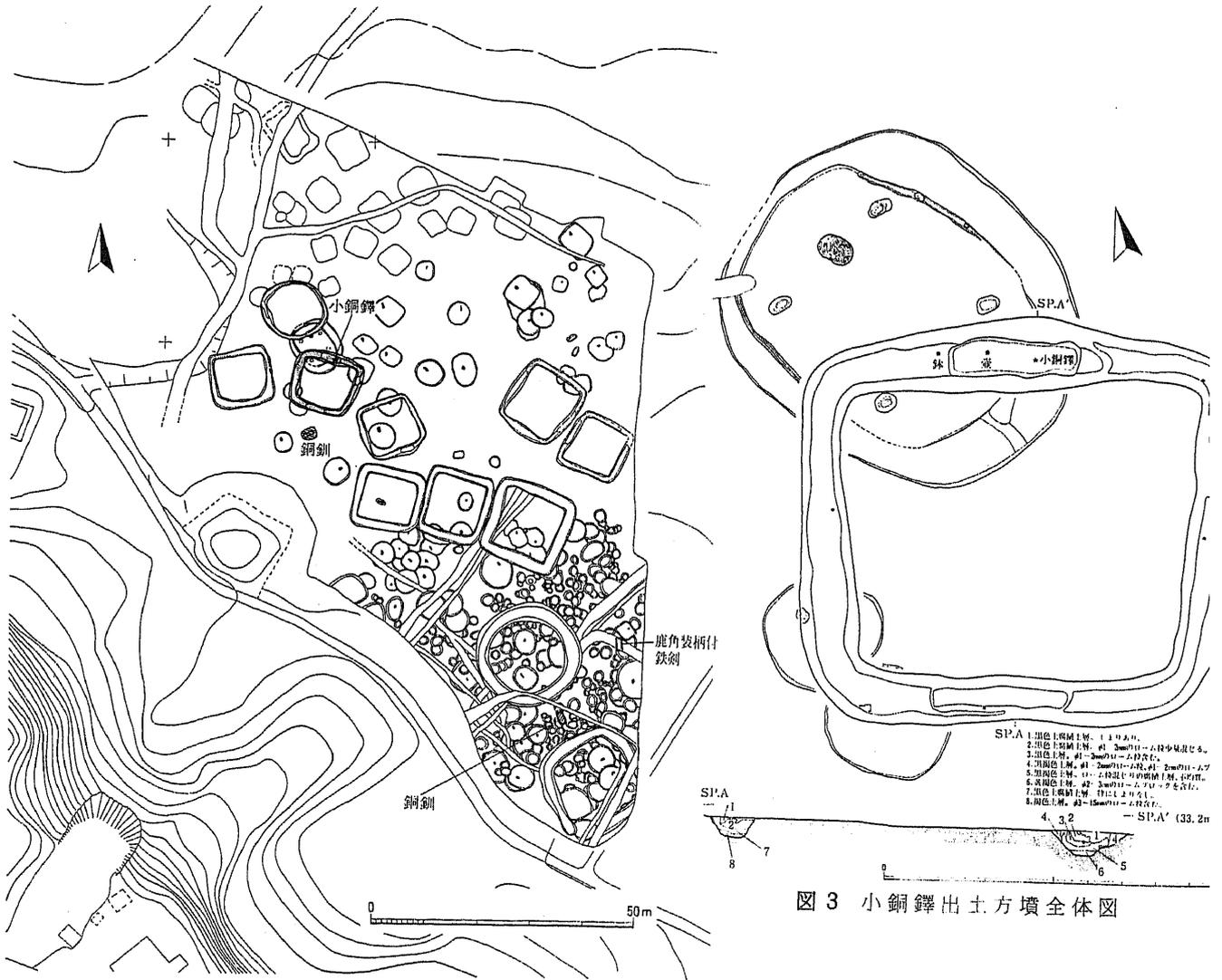


図3 小銅鐔出土方墳全体図

図2 草刈遺跡H区遺構配置図

周溝のみが確認された。草刈遺跡群では、古墳出現期から前期にわたる古墳が数多く営まれ、台地中央部には前方後方墳1基、小型の方墳40基ほどが集中している。それらはH区から北東へ、緩斜面に沿って展開しており、小銅鐸が出土したのはこのうちの一画、H区のほぼ中央に位置する方墳の周溝内からである。

(3) 遺構と遺物の出土状況

小銅鐸は、方墳(397号跡)周溝内に設けたセクションベルトに沿って出土したため、堆積状況と小銅鐸の関係を知る良好な資料となった。土層を見ると(図3・4)、小銅鐸は北側周溝中程に、底面から約30cm浮いた状態で出土している。5層の黒褐色土と周辺の土層との違いはかなりはっきりしており、5層の下には明瞭なロームブロック充填土が堆積する。6層の土を取り除くと、底面は凹凸が著しい。また、周溝の他の部分に比べ、6層の入る部分だけが一段下がっていることから、特に埋葬施設を設けるために一段掘り下げ、埋めもどして整地したものと思われる。従って、5層が埋葬部分の腐植土、3層が遺骸の腐食によって陥没した埋葬後の埋め戻し土と考えられる。小銅鐸はこの3層から出土した。

このような周溝内に埋葬施設をもつ方墳は周辺にも見られ、4つの施設を設けたものもあるので少なくとも草刈遺跡では珍しい存在ではない。東側のB区(草刈貝塚)とその南辺部では周溝内の埋葬施設を混貝土で埋め戻したため埋葬人骨がほぼ完全な姿で遺存した例が4例ある。

一方、この方墳の周溝内施設の平面プランは不整形で、木棺の使用については可能性が低い。おそらく被葬者は麻布などに包まれて直接墓坑の中に埋置されたものと思われる。なお、掘りかたは一回り大きくなっている。また、この埋葬施設から赤色顔料の入った壺下半部と小型の鉢が出土し、小銅鐸の帰属時期を知るうえで貴重な資料となった(図5・6)。さらに、周溝北東コーナーからは内外面の一部と破断面に赤色顔料が付着した甕が約1m四方から集中して出土しており(図3)、赤色顔料を用いた埋葬儀礼として注目される。甕の出土状況からは、破碎後に赤色顔料が塗抹され周溝内に廃棄されたことも想定できる。

以上のことから推測すると、この埋葬施設は、周溝が埋まりかけた段階で墓坑を掘りこみ、被葬者と土器を埋置したものと考えられる。これを埋め戻した後に小銅鐸を納め、葬送の儀礼を行った状況が推定されるのである。

(4) 小銅鐸と土器

①小銅鐸(図4)

この小銅鐸で最も目につくのはもともと鈕を鋳出していない点である。鋳型のずれによって舞の中央には段が生じており、甲ばりは片側に被ったまま未処理のため、鈕部分の鋳型は始めから存在した形跡がない。また、この鋳型のずれのためB面側の舞孔は孔が開いていないが、内面では明瞭な凹面を形成している。裾端部の面は風化

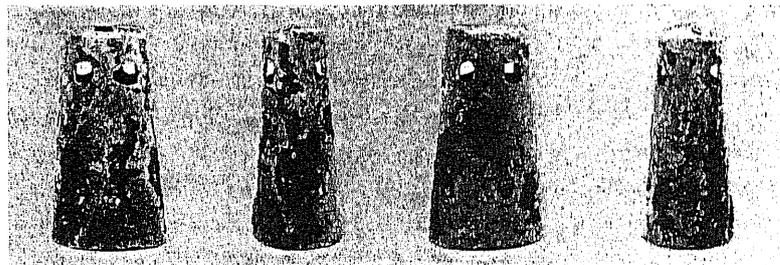
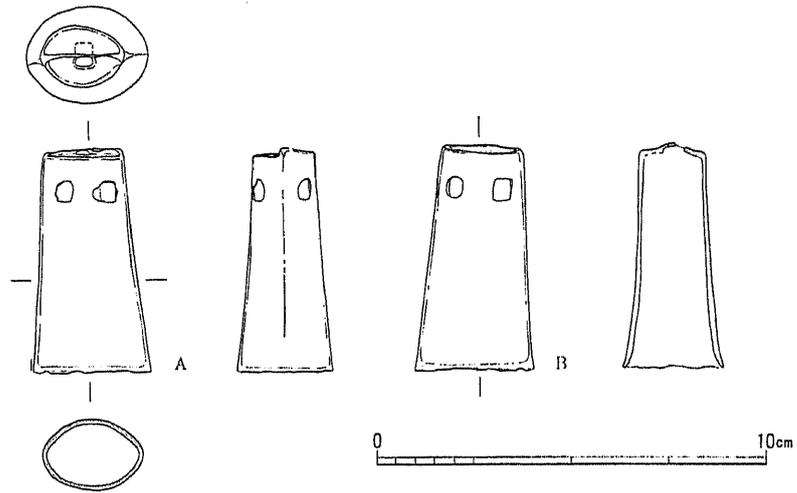


図4 小銅鐸実測図・写真

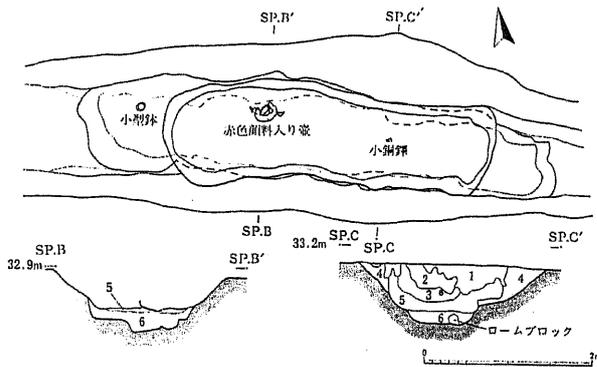


図5 小銅鐸・土器出土状況

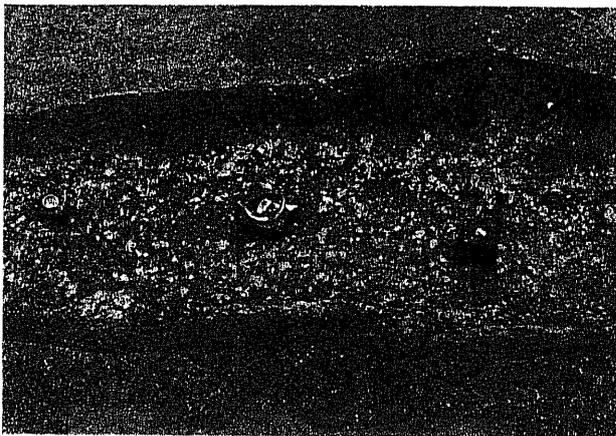


図6 小銅鐸・土器出土状況写真

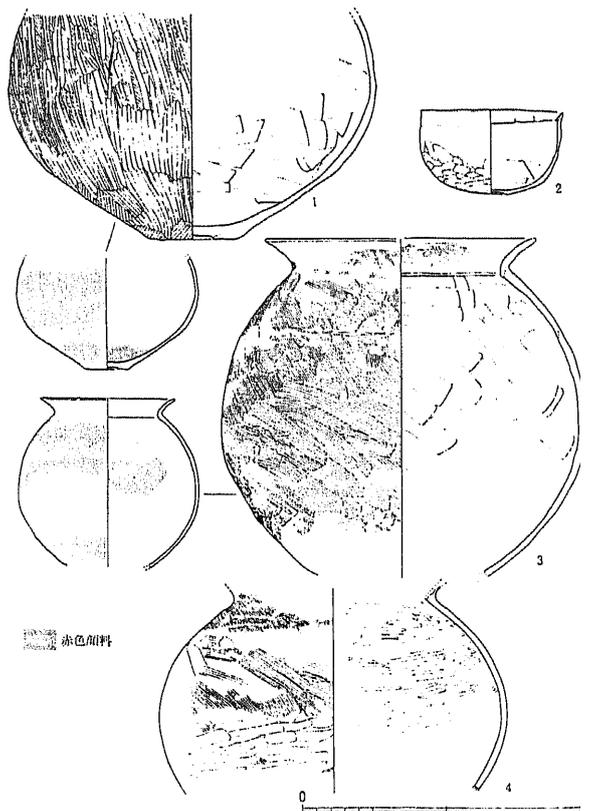


図7 方墳(397号跡)出土土器

してかなり荒れているが、ほぼ完形品である。鑿はなく、鑿身側面の甲ばりはきれいに処理されている。鑿身の文様も認められない。鑿身の横断面は楕円形に近く、裾から3cmの高さでの偏円率(タテ/ヨコ比×100)73%、裾ではほとんど楕円形で偏円率83%となる。舞から鑿身への肩部は丸みのある造りである。舞孔は、42×28mmの楕円形を呈するが、内面の形状やX線写真によると、本来は45×60mmの方形であったものが湯まわりが悪いため現状のようになったことがわかる。型持ち孔は両面に2孔ずつあり、第6図のA面で左59×55mm、右62×56mm、B面で左55×45mm、右55×49mmで、やや不正な方形である。この型持ち孔部分で器壁は最も薄く1.1~1.2mmとなり、鑿身下半では1.5~1.7mmと厚みを増す。裾は先細りで、若干外反する。裾内面の突帯もなく、吊す、鳴らすという銅鑿本来の特徴はきわめて稀薄である。

現状での法量は、総高5.93cm、A面鑿身部高5.79cm、B面鑿身部高5.80cm、鑿身底部長径3.15cm、短径2.59cm、舞部長径2.80cm、短径1.61cm、重量37.73gである。

②土器(図7-1~4)

1は、墓坑の埋葬部底面から正位で出土した壺形土器である。胴部下半が1/2ほど依存し、底部は完存する。内部には土まじりの赤色顔料約100gが入っており、底部内面の約1/3に純度の高い赤色顔料が付着している。顔料は、やや茶色味を帯びた色調からベンガラと見られ、良質な赤鉄鉱糸の色ではない。壺の法量は、胴部最大径25.7cm、底径6.15~6.3cm、現存高16.3cmで、器壁の厚さは、3.5~6.5mmとこの大きさの壺としては薄手である。底部の周縁には粘土紐による輪台を用いた成形技法が見られ、斜位のハケ(6~7本/cm)を施した後、下から上への当たりの強い磨きによって器面を調整している。胎土には細砂粒が多量に含まれ、きめ細かく焼き締まりも良い。外面はほぼ全面にわたって赤彩され、内面はにぶい黄橙色である。

2は、ヨコナデにより口縁部と体部の間に弱い屈曲をもつ小型の鉢である。口縁部~体部上位の一部を欠くが、ほぼ完形品である。口縁部の内面には、貼付した粘土紐をつまみだした稜線が残る。体部外面の上半は、器面が荒れて調整が不明瞭だが、横方向の1次ユビナデ整形と見られる。下半は、細かくヘラケズリした後、粗いミガキを加えている。内面は指ナデによって仕上げ、下半には横方向の粗いナデが残る。底部は強いヘラケズリによる上げ底で、厚さ1.9mmまで薄くなっている。口径9.7~9.9cm、底径2.2~2.4cm、器高6.1cmで、やや歪みはあるが、器厚2.5~3.5mmと薄手に仕上げている。胎土に細砂粒を多量に含み、にぶい黄橙色を呈する。

3は、周溝の北東コーナーから出土した甕である。口縁部の半分は欠失するが、底部付近まで約8割が遺存する。底部は、割れ口の状態から穿孔された可能性がある。図示したように、胴部内外面・底部外面に赤色顔料が付着し、内面の一部には特に鮮明に残っている。また、上述のように多くの破断面にも赤色顔料の付着が見られる。顔料は、色調からやはりベンガラと思われる。口縁部が強く外反して「く」の字状に開く器形で、胴部は卵形に近い。胴部は3段階に分割して成形されており、外面の底部付近では細かいハケ(12~14本/cm)をナデ消し、中位では単位が長く、当たりの

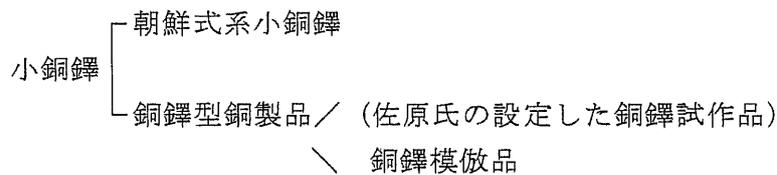
強いハケ（8～9本/cm）が施され、下段との接合面のつなぎを消している。上段のハケは短く、比較的当たりが弱い。口縁部付近はナデ仕上げされ、部分的にハケが残る。口縁部のつなぎでは、内面の口縁下端に粘土が被るのが特徴である。内面の調整にはへら状工具が用いられる。下部はナデ仕上げで、へラケズリ痕がわずかに残る。口径19.1cm、頸部径15.3cm、胴部最大径25.7cm、現在高24.5cm、胴部の器厚3.5～5.5mmで、全体に薄手のつくりである。胎土は、非常に細かい砂粒を多く含み、特に白色細砂粒が目立つ。外面の大半は黒色を呈するが、二次的な加熱によるものとは見えない。内面はにぶい黄橙色～黒色で、下半はほとんど黒色になっている。

4は、周溝覆土から出土した甕の胴部破片である。出土地点は特定できないが、3と同時期のものと思われる。頸部がわずかに残る、胴部上半1/4ほどの破片である。かなり球形化した胴部をもつ。外面肩部は、斜位の細かいハケ（12本/cm）の上やや粗いハケ（9～10本/cm）を重ねて調整する。胴部上位には、斜位のハケ（8本/cm）の後の部分的なへらケズリが見られる。中位以下ではハケを横方向のへらケズリで消し、さらにミガキを加えて調整している。頸部推定径14.2cm、胴部最大径24.4cm、現在高15.5cm、胴部の器厚4.0～5.0mmで、胎土には1.5～2mmの赤色粒子を多く含む。外面はにぶい黄橙色～黒色、内面はにぶい黄橙色を呈する。

なお、すべての土器の胎土には僅かながら白色海綿状骨針が含まれ、海成粘土を用いていることがわかる。これは、在地産の土器に一般的な特徴である

(5) 小銅鐸の位置づけ

小銅鐸について、佐原真氏の分類（佐原1983）では、小型銅鐸を日本製の小銅鐸に含めているが、小型の銅鐸だけが小銅鐸と同様の性格をもつという混乱した認識を招くため、ここでは下記のように分類した。



ただし、この場合の銅鐸模倣品は、舌や内面突帯をもつ例からも、実用品として使われたものも判明しており、銅鐸祭祀圏の周辺部で使われた祭器として捉えられる。

静岡県以東の小銅鐸については、集落内、特に竪穴住居跡との関連が取り上げられてきたが、袖ヶ浦町文脇遺跡とこの草刈遺跡H区例のように墓に伴う例が出土したことで、この地域の小銅鐸の使われ方にも多様性のあることが分かってきたといえよう。文脇例は、木棺を使用した単独の木棺土坑墓から出土したが、木棺の側板際に倒位で出土しており、棺内に副葬されたとは断定しがたい。むしろ、棺上に置かれた可能性が考えられる。草刈遺跡H区例も木棺の痕跡は見当たらないものの、遺骸埋置後の埋め戻し段階で置かれたと見られ、埋葬に伴う用い方に棺内副葬品とは区別された共通性が窺える。草刈H区例は、墳丘の中心に葬られたであろう主たる被葬者との関連が注目される。

銅鐸は、本来的に「埋納」の仕方にも積極的な意義をもっていたと考えられる。掘りかた内に緒を立てて、横置きに埋納された例が数例確認されている。小銅鐸では、矢部南向遺跡跡や板付遺跡で構置きの出土例が見られるが、静岡県以東の小銅鐸には置きかたを確認できる資料がない。「銅鐸のマツリ」が波及しなかった伊豆以東の地域にも「小銅鐸のマツリ」は形を変えて存在したと考えられるが、おそらく埋納の仕方までは模倣されなかったであろう。墓への副葬あるいは供献という発想は、本来の銅鐸祭祀からは生まれて来ないものと考えられる。

一方、鈕を省略したものが出土したことで銅鐸を模倣した小銅鐸の存続期間にも幅があることが推測される。関東地方の出土例の中では、銅鐸を忠実に模倣した造りのもの（Ⅰ類）、文様・緒・鈕等にかんがりの省略が見られるもの（Ⅱ類）、そして鈕を省略したもの（Ⅲ類）が存在するわけである。川焼台1号・2号鐸、栃木県小山市田間鐸をⅠ類に分類できるが、特に川焼台1号鐸は原型を忠実に模倣したものである。そのモデルには同時期の小型銅製品（装身具・銅鏃等）の製作地も考慮して、突線鈕式の三遠式銅鐸を当てるのが最も妥当といえよう。

Ⅱ類・Ⅲ類については、変化の過程を把握しがたいが、年代幅を想定することは可能である。九州の小銅鐸とは似て非なる別系統の簡略化の過程が考えられよう。省略された形態からⅠ類よりもやや遅れて製作されたものと思われ、吊すという機能を失って鐸身の形だけを残すⅢ類は、最も新しく位置付けられよう。草刈遺跡群出土の3点は、同一地域内での変遷を追える基準例として把握できる。これによって従来別系統のものと考えられていた市原市天神台例を製作・配布期間の幅からⅡ類に含めることができよう。

既に報告されている東京湾周辺の小銅鐸では、明確に弥生時代後期に比定できるものがなく古墳時代前期に帰属する可能性が示されていた。しかし、帰属時期を推定できる資料は公表されていなかった。草刈遺跡H区では、ほぼ確実に共伴する土器群を検出したことで貴重な資料を得た。これらの土器は、畿内の庄内式古～中段階に並行する土器群と考えられ、古墳時代前期古段階に位置づけられる。おそらく、この土器の帰属時期は小銅鐸の下限を示すものとなろう。静岡県以東の小銅鐸は、三遠式銅鐸、近畿式銅鐸後半（山中～欠山式並行か）の影響下に成立し、東海地方西部の土器との対応では、元屋敷式にほぼ並行してその枠の中で変化し、終焉を迎えると考えられる。しかし、その上限については、川焼台1号鐸の位置づけによっては三遠式の終焉と接点をもつのか、近畿式の終焉と接点をもつのか、今後の課題である。

いずれにしても、下限は草刈H区例によって古墳時代前期古段階にほぼ比定できることから、大型前方後円墳が出現する直前まで小銅鐸を製作・使用していたといえる。

2 小銅鐸分布圏の意義

(1) 銅鐸のマツリと小銅鐸のマツリ

弥生時代前期の終り頃から後期にかけて、近畿地方を中心に発達した青銅製の銅鐸

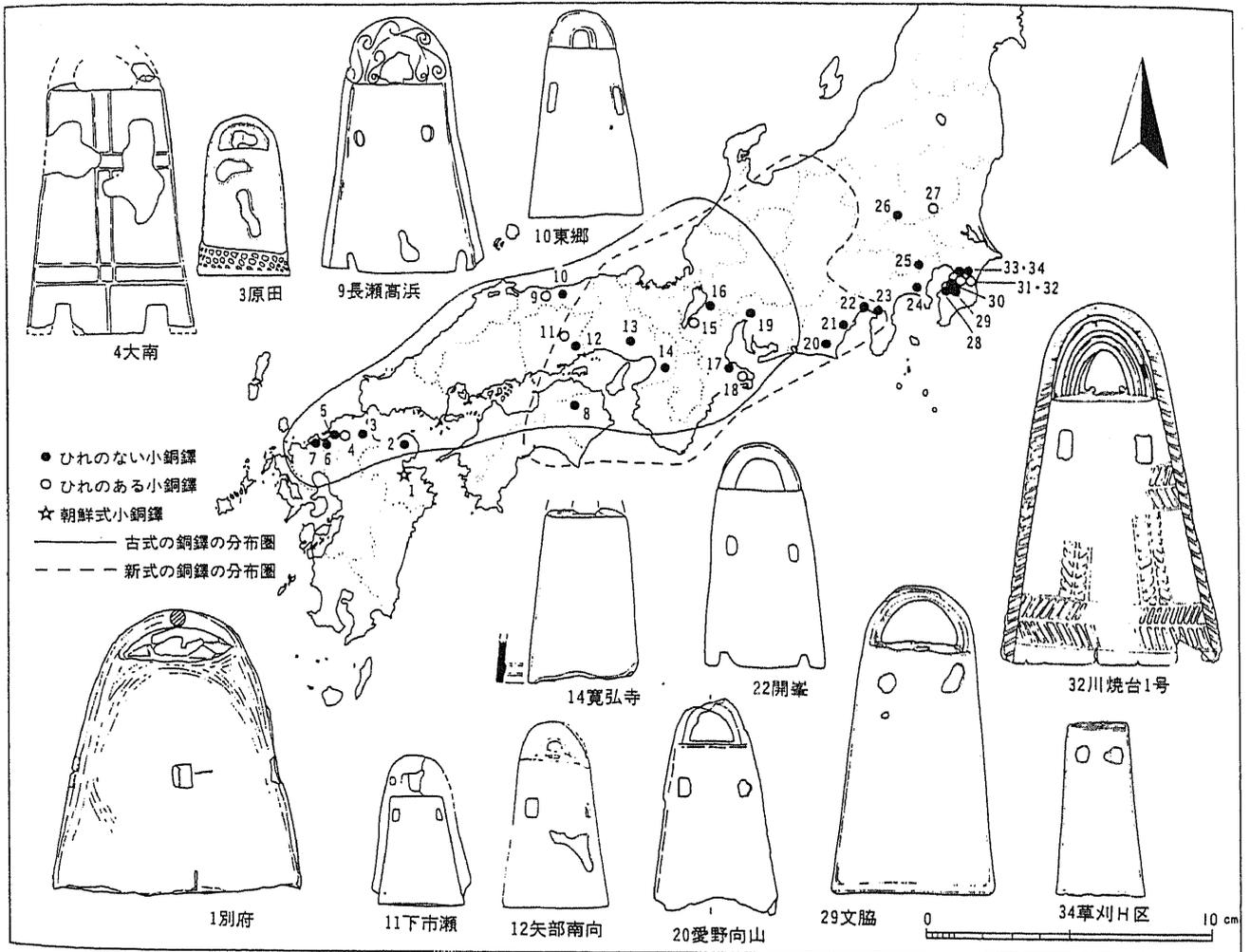


図8 小銅鐸の分布図(白井1993)

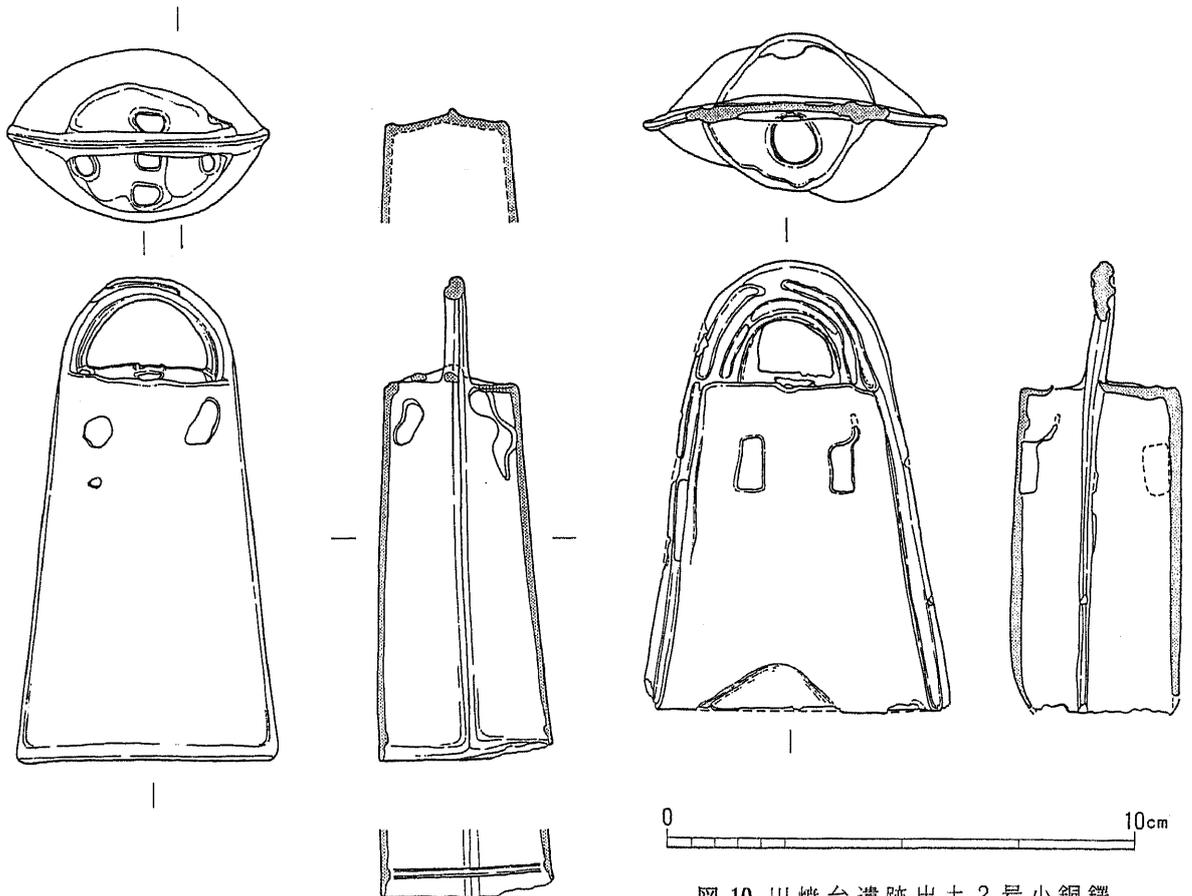


図9 文脇遺跡出土小銅鐸

図10 川焼台遺跡出土2号小銅鐸

表1 小銅鐸出土地名

()内の数字は図8に対応

NO. 遺跡名	所在地	出土状況	廃棄時期
1 別府(1)	大分県宇佐市	住居跡	弥生後期
2 多武尾(2)	大分県大分市	溝	弥生後期後半～末
3 原田(3)	福岡県嘉穂郡嘉穂町	木棺墓	弥生中期前半
4 大南(4)	福岡県春日市	溝	弥生後期
5 板付(5)	福岡県福岡市	ピット	弥生後期
6 今宿五郎江(6)	福岡県福岡市	溝	弥生後期前半
7 浦志(7)	福岡県糸島郡前原町	溝	弥生後期～古墳前期
8 本行	佐賀県鳥栖市江島町	住居跡	弥生後期
9 江原(8)	徳島県美馬郡脇町		
10 弘田川西岸	香川県善通寺市仙遊町	包含層	弥生後期前半
11 長瀬高浜(9)	鳥取県東伯郡羽合町	住居跡上層	古墳前期
12 東郷(10)	鳥取県東伯郡東郷町	丘陵上採集	
13 下市瀬(11)	岡山県真庭郡落合町	井戸跡付近	弥生後期後半
14 矢部南向(12)	岡山県倉敷市	住居跡小穴	弥生後期後半
15 横寺	岡山県総社市新本	住居跡	弥生
16 高篠(13)	兵庫県三木市		弥生後期～古墳前期
17 寛弘寺(14)	大阪府南河内郡南河内町	住居跡	弥生後期中葉～後期
18 上フジ	大阪府岸和田市三田町	住居跡	弥生後期初頭
19 本郷	大阪府柏原市本郷	溝状遺構	弥生後期
20 東奈良	大阪府茨木市東奈良	溝(弥生中期)	弥生前期末
21 志那(15)	滋賀県草津市	包含層	
22 松原内湖(16)	滋賀県彦根市	溝(奈良時代)	弥生後期
23 下鈎	滋賀県栗東町	環濠跡	弥生中期後半～後期
24 唐古鍵	奈良県磯城郡田原本町		
25 草山(17)	三重県松坂市	包含層	弥生後期
26 白浜貝塚(18)	三重県鳥羽市		弥生後期
27 余野神明下(19)	愛知県丹羽郡大口町	表面採集	弥生後期
28 愛野向山Ⅱ(20)	静岡県袋井市	木棺墓付近	弥生後期後半
29 有東第1(21)	静岡県静岡市	表面採集	
30 開峯(22)	静岡県富士市	表面採集	
31 原町(23)	静岡県沼津市原町	表面採集	
32 陣ヶ沢	静岡県富士市	(横穴式石室)	
33 本郷(24)	神奈川県海老名市	住居跡	古墳前期
34 広川・公所	神奈川県平塚市	溝	弥生末
35 高田馬場3丁目(25)	東京都新宿区	住居跡床面	弥生後期
36 八王子市中郷	東京都八王子市長房町	住居跡	弥生末
37 中溝(26)	群馬県新田郡	住居跡	古墳出現期?
38 田間(27)	栃木県小山市		
39 大井戸八木(28)	千葉県君津市大井戸	土壇墓	弥生後期
40 中越	千葉県木更津市大久保	住居跡	古墳出現期?
41 文脇(29)	千葉県袖ヶ浦市	木棺墓	弥生後期
42 天神台(30)	千葉県市原市	住居跡	古墳前期
43 川焼台1号(31)	千葉県市原市	住居跡	弥生後期
44 川焼台2号(32)	千葉県市原市	住居跡?	弥生後期～末
45 草刈Ⅰ区(33)	千葉県市原市		古墳前期?
46 草刈Ⅱ区(34)	千葉県市原市	方墳周溝内土壇	古墳前期

は、次第に装飾性が加わって巨大化し、音響を司る祭器から「仰ぎ見る」祭器に変わっている。この特殊化した銅鐸とは別に、弥生時代を通じてムラムラのマツリに神聖な音を提供し、単純な形と携帯できるような大きさを保ったのが青銅製の小銅鐸であった。

小銅鐸は、その起源を朝鮮半島の小銅鐸に直接たどることができる。特に北部九州の出土品には搬入品の存在も含めて朝鮮半島の影響が色濃い。しかし、全体を見渡すと紋様や鱗をもつ例も多く、日本列島で発達した「倭様」の銅鐸の影響を少なからず受けていたことがうかがえる。このことから、特殊化した銅鐸と並行して、ムラムラで行われる日常的なマツリには小銅鐸が用いられ、その時どきに流行していた銅鐸の影響を受けて小銅鐸も形を変えていったことが考えられるのである。

複数がまとまって埋納されていることの多い銅鐸とは異なり、小銅鐸は単独で出土している。また、そのほとんどが集落とは離れた場所の埋納坑に納められた銅鐸とは対照的に、集落に隣接した墓や住居の跡などから出土した例が多い。これは、朝鮮半島の小銅鐸が墓に副葬されていることと共通している。小銅鐸は、ある程度伝世された後に廃棄された例もあるが、本来それを使用した祭司、あるいは呪術師が死後の世界まで携えていくような私有された呪具であったと考えられる。

小銅鐸の鈕にはその中央部が著しく窪んで、相当長い間吊り下げて使用したことがうかがえるものが多い。これは、儀礼の時だけ取り出して使用した銅鐸とは異なり、かなり頻繁に吊り下げて使用したことを物語っている。祭司や呪術師が身につけ、彼女(女)らの動きに合わせて音を発したマツリの道具であったと考えられる。

(2) 青銅製祭器の終着点

弥生時代を象徴する祭器や利器が青銅でつくられたことは、それらを生産する集団の支配と流通をめぐって新しい体制と文化を生む画期的なできごとであった。青銅製祭器の分布は、この新たな時代の動きがどのように波及していたかを知る手がかりである。

銅剣・銅矛・銅戈の武器形祭器は近畿地方以西に分布範囲が限られる。祭器としての銅鐸は、北部九州から東海地方東部にわたる広い範囲に分布する。その東限は、修繕寺町益山寺に伝わる近畿式の例や大仁町段遺跡からペンダントに加工された近畿式銅鐸の飾り耳が出土したことによって伊豆半島まで及んでいたことが推定できる。しかし、小銅鐸の分布範囲はさらに広い。西は北部九州から東は房総半島に達している。出土例は大規模な発掘調査の増加に従って増えており、最も普遍的な青銅製祭器になるかも知れない。図8では、34点の小銅鐸の出土地点を示しているが、銅鐸の分布圏からはずれた北関東と南関東にも分布し、北部九州と房総半島で特に集中した分布がみられる。廃棄された時期を見ると、推定可能な24例のうち17例までが弥生時代後期である。この小銅鐸の動向は、後期の銅鐸の動きと密接に関連しているようである。特に後期になって尾張地方を中心に成立した三遠式銅鐸は、東海地方西部から東方に集中した分布を示し、銅釧や銅鍬などの小型青銅製品や土器の動きにも対応している。

弥生時代後期に見られる青銅器生産の東方への拡大によって、小銅鐸は一気に伊豆を突破して毛野・上総まで達しているのである。これは、東海地方を介在した西日本的な精神文化の東漸でもあった。この意味で、小銅鐸がたどり着いた東の果て・上総は、銅鐸に代表される畿内中心の弥生時代後期文化の終着駅であったといえる。

一方、ムラごとの「祭祀具」のなかでも鐸形土製品・石製品というムラごとの「祭祀具」は、一部の例外を除いて東国には見られない。弥生ムラの銅鐸・小銅鐸・鐸形模造品（土製・石製）の使い方は、地域や時代によってずれを生じているようである。

小銅鐸の出土例は現在（1999. 10.）46例に達している。果たして地域的な捉え方ができるか、あるいは地域的な特徴を抽出できるかがこれからの課題となろう。

一方、三遠式銅鐸の分布圏以東の銅製品の分布には、三遠式銅鐸を作った工人がその後も銅製品の製作に関わったと想定できる状況が見られる。佐原真氏が論じたように、近畿式銅鐸の製作に呑み込まれただけでなく、古墳時代のある段階まで銅鏃、銅釧、小型仿製鏡、小銅鐸などの小型の青銅製品を作る工人が東海地方に存続した可能性がある。その多くは東国向けに作られ、ムラごとのマツリに用いられていたのであろう。ムラとムラを統括する地域の首長は、継承儀礼として既に古墳祭祀を行っているが、ムラごとでは弥生時代的な祭器を用いた儀礼を行っているという過渡的な状況が考えられる。おそらく、この時期の集落から出土する銅鏃も杉山晋作氏が論じたような（杉山1980）族長権断絶の行為に用いられたのではなく、ムラの農耕儀礼に使われたのではないだろうか。

これらの製品の東国的な受容の仕方は、古墳時代の段階的な問題を検討するうえで「鍵」になると思われる。この点で、当地域出土の小銅鐸を東海以西、さらに九州・朝鮮半島の小銅鐸と直接的に比較するのは無理であろう。東海道系の小銅鐸圏の東限は、小櫃川・養老川・村田川という東京湾東岸の主要河川沿いに帯状に展開して、古墳出現期前後の地域的なまとまりを示している。また、1例離れて分布する小山市田間例も、東京湾西岸からのルートは終点近くに位置しており、これらの小銅鐸分布地域と、この時期の東山道系東限の拠点である毛野地域との相違を把握することが、今後の重要な視点となろう。

（3）最後の小銅鐸

小銅鐸の東海道ルート終着駅には、8つもの例が出土している。形や大きさは様々で、明らかに一定の時を経た変遷がうかがえる。土壙墓に副葬されていた君津市大井戸八木遺跡の例は板状の銅釧や硬玉・水晶・ガラス・赤色頁岩・碧玉の玉と共に出土し、弥生時代後期に使われて廃棄されたものである。袖ヶ浦市文脇遺跡の例も同様である。また、突線鈕風の鈕と鱗をもち、羽状の櫛歯紋帯によって変則的な袈裟たすき紋を描いた市原市川焼台1号鐸も後期の比較的早い段階に搬入されたものと考えられる。これに対して、古墳時代に入ってから副葬、廃棄された例が上記の草刈遺跡H区の周溝内埋葬施設と市原市天神台遺跡の竪穴住居から出土している。後者には一定の期間伝世した形跡がみられる。

このように小銅鐸が浸透したために、新しい権威・マツリの開始と小銅鐸の廃棄が重なっている点もこの終着駅付近の特徴である。古墳時代の開幕を告げる古墳として注目されている市原市神門古墳群の形成は、まさに最後の小銅鐸の廃棄・副葬と相前後しているからである。

最後に使った小銅鐸を廃棄するとき、すなわちムラムラの日常から弥生時代の残影が消えるとき、既に新しい権威は成立していたのである。

参考文献

(著者五十音順)

- 1 相京邦彦・白井久美子・金子進「川焼台遺跡出土の2号銅鐸について」『研究連絡誌』第15・16合併号 (財)千葉県文化財センター 1986 (6-15頁)
- 2 井上洋一「銅鐸起源論と小銅鐸」『東京国立博物館紀要』第28号 東京国立博物館 1993 (1-95頁)
- 3 榎本義謙「草山遺跡の小銅鐸」『考古学雑誌』第73巻第4号 日本考古学会 1988 (87-100頁)
- 4 榊原弘二・山口典子「市原市川焼台遺跡出土の小型銅鐸について」『研究連絡誌』第7・8合併号 (財)千葉県文化財センター 1984 (1-6頁)
- 5 榊原弘二・土屋潤一郎・宮城孝之「市原市草刈遺跡出土の有角石斧について」『研究連絡誌』第12号 (財)千葉県文化財センター 1985 (1-6頁)
- 6 佐原真「銅鐸の始まりと終り」『展望アジアの考古学』-樋口隆康教授退官記念論集- 1983 (382-393頁)
- 7 三森俊彦編『千原台ニュータウン』Ⅱ-草刈A区・鶴牧古墳群・人形塚- (財)千葉県文化財センター 1983
- 8 白井久美子「〈研究ノート〉 市原市草刈遺跡の方墳群」『研究連絡誌』第22号 (財)千葉県文化財センター 1988 (9-16頁)
- 9 白井久美子・福田依子「千葉県市原市草刈遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌』第75巻第2号 日本考古学会 1989 (73-84)
- 10 白井久美子「銅鐸の終着駅」『考古学の世界』第2巻 ぎょうせい 1993
- 11 杉山晋作「古墳時代銅鐸の二、三について」『古代探叢』-滝口宏先生古稀記念考古学論集- 早稲田大学出版部 1980 (181-205頁)
- 12 高田博他『千原台ニュータウン』Ⅲ-草刈遺跡B区- (財)千葉県文化財センター 1986
- 13 高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』9 岡山県立博物館 1988 (1-32頁)
- 14 富樫雅彦・徳澤啓一「小銅鐸の基礎的研究」『國學院大學考古学資料館紀要』第11輯 國學院大學考古学資料館 1995 (25-70頁)
- 15 春成秀爾「遠江の銅鐸寸感」『浜松市博物館館報』I 浜松市博物館 1989 (13-16頁)

第2節 定型化する古墳以前の墓制

1 出現期古墳とその前後

—房総の出現期古墳をめぐって—

(1) 方形周溝墓から出現期古墳へ

房総の古墳時代出現期は、短小な前方部をもつ前方後円墳、神門 5・4 号墳によって新たな局面を迎える。その前段階には、弥生時代後期初頭から引き継がれた方形周溝墓を母胎とする変革の時代が存在する。これは、弥生時代後期から列島規模で動き出した古墳時代への胎動ともいうべき現象に対応するものである。

南関東では、弥生時代後期の久ヶ原式土器を出土する方形周溝墓には、小規模ながら装身具を着装して葬られた特定の被葬者群が出現するが、この勾玉・管玉・ガラス玉・釧などの装身具を着装する被葬者の墓の系統は、墳丘規模の大きさが墓の地位に反映しない系統として出現期古段階の特殊化した通路をもつ古墳へと引き継がれていく。これらの玉類を中心とした装身具は、弥生時代後期から古墳時代出現期・前期を通して見ることのできる遺物として重要である。

一方、在地の土器に外来系の土器が加わり、加飾壺・高坏などの祭祀用土器に顕著な変化が表われ、続いて小型の高坏・器台・鉢を含む新しい器種の組み合わせが見られることも出現期の普遍的な現象である。これは、東北以南の列島に見られる広域の社会的・文化的現象の一つであるといえよう。また、各地域の在地の土器が一斉に変化した段階に対応して、茎の短い短剣の副葬が開始されることは、東国各地の社会で普遍的な現象である。

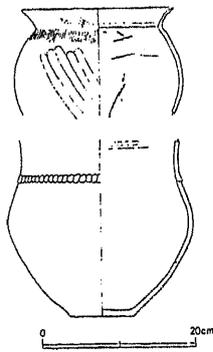
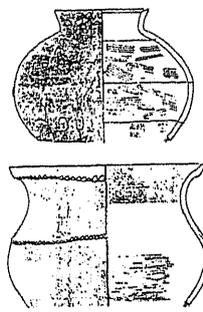
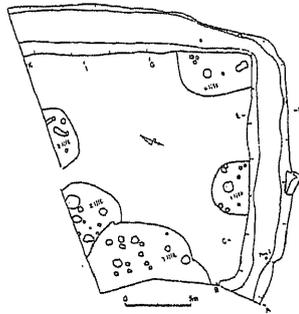
神門古墳群では、4号墳よりさらに前方部の発達した3号墳が築かれるが、これに続く定型化した前期の前方後円墳は、現在のところ房総では発見されていない。しかし、定型化以前のこの種の墳形をもつ古墳は、近年の調査で各地に報告例が認められる。特に、前期倭王権の本拠地である大和で、王権の成立期に関わる大型古墳の調査が相次いで行われ、出現期古墳の理解は飛躍的に前進している。ここでは、近年の房総の調査例を加えてその位置づけを確認することにした。

(2) 出現期の方墳と前方後方墳

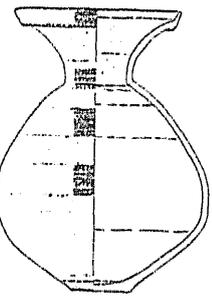
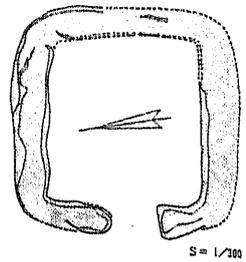
弥生時代後期初頭からの系譜にある方形周溝墓を母胎とする方墳は、特定の位置に通路をもつことによって、従来の形式から発展する。隅角、あるいは正面に設けられた通路は、次第に1辺の中央部へ集約され、規模・形態ともに前方部へ発達する。

神門古墳群の営まれた市原台地では、菊間1号→加茂1号→東1号・長平台1号という1連の発展系列を見ることができる。墳丘規模は17～20mの間にあり、1辺10m前後の弥生後期の方形周溝墓と比較すると大型化しているが、これ以上は大型化しない。いずれも外来系の土器をもち、それらの系譜は畿内から東海西部を経て相模に及んでいる。長平台1号の周溝から大量に出土した土器の中には、パレススタイルの装飾壺・手焙り型土器を含み、当該期の東海地方色の強い一面を示している。埋葬施設の残存した加茂1号・長平台1号には短剣が副葬されている。

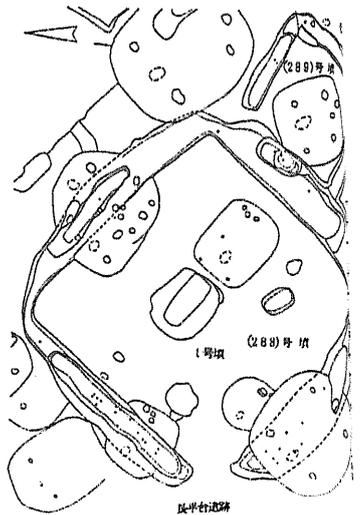
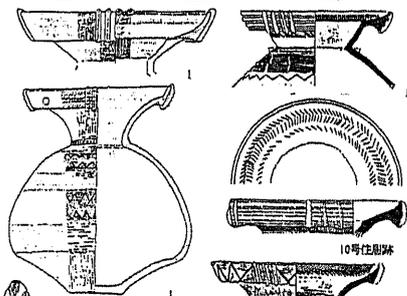
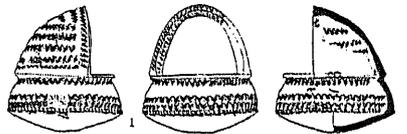
菊間1号



東1号



長平台1号・2号



加茂1号

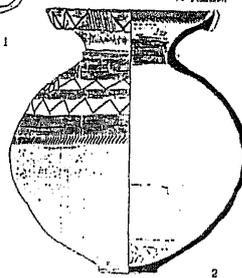
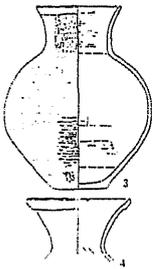
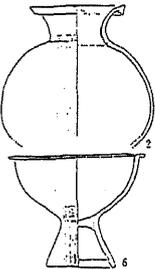
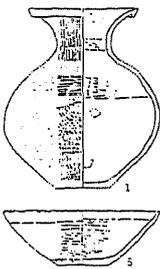
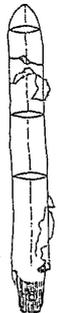
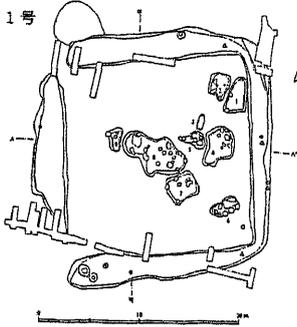
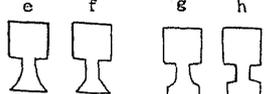
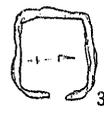
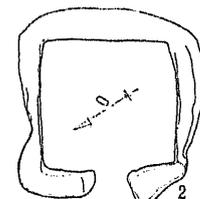
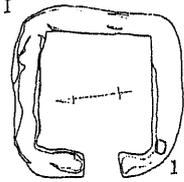


図1 房総の出現期古墳

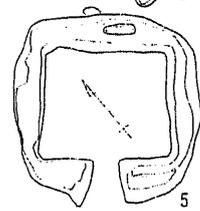
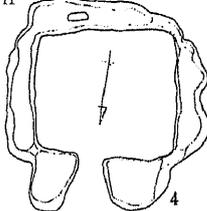
B I 垂型					
	a-7	b-1	b-1	b-7	c-7
B I					
B II					
	d	d	d	e	
B III					
B IV					
	a	b	c	d	d



B I

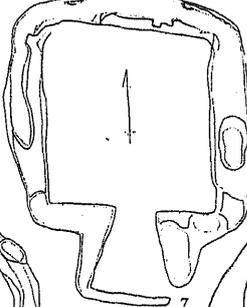
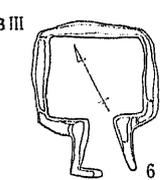


B II



1. 東1号墳
2. 大厨9号墳(千葉)
3. 塚本山36号墳(埼玉)
4. 塚本山33号墳(埼玉)
5. 田村原2号墳(埼玉)
6. 諏訪台33号墳(埼玉)
7. 東間部多2号墳(千葉)
8. 山倉3号墳(千葉)
9. 千光寺1号墳(埼玉)

B III



3・4 竪尺 1/300
5 " 1/300
他 尺 " 1/300

A III

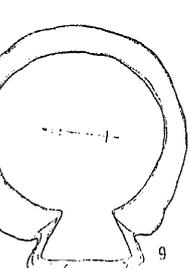
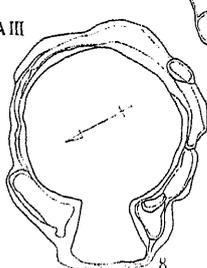
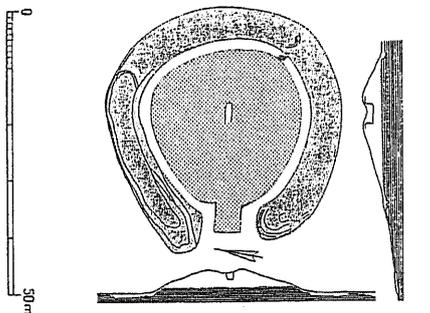
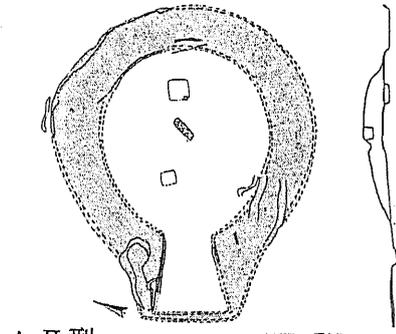


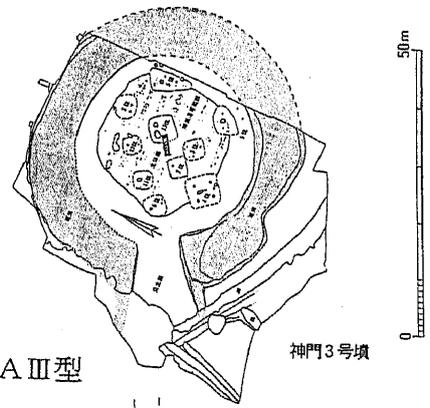
図2 特定通路から前方部へ (田中1977・1986より 一部改変, 転載)



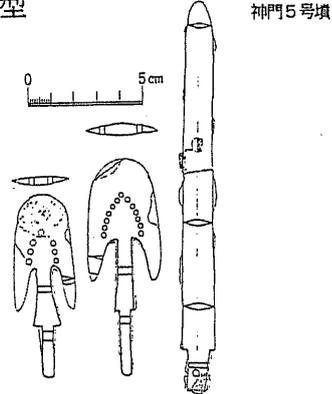
A I型



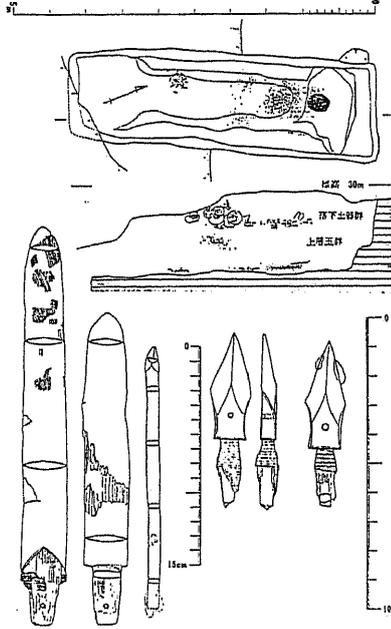
A II型



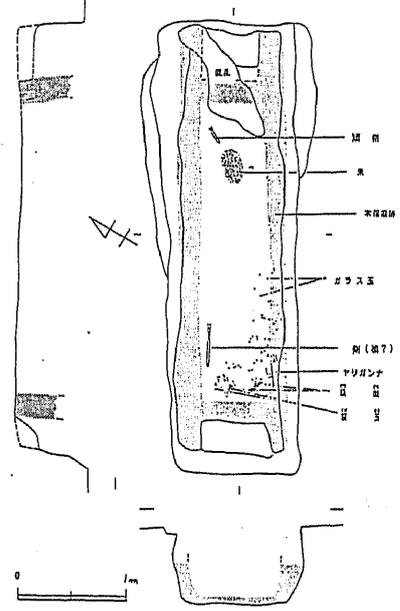
A III型



神門5号墳



神門4号墳

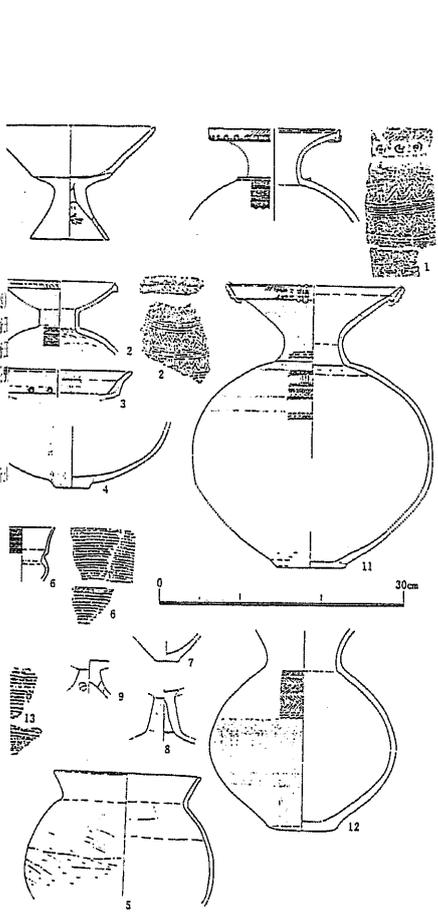


神門3号墳

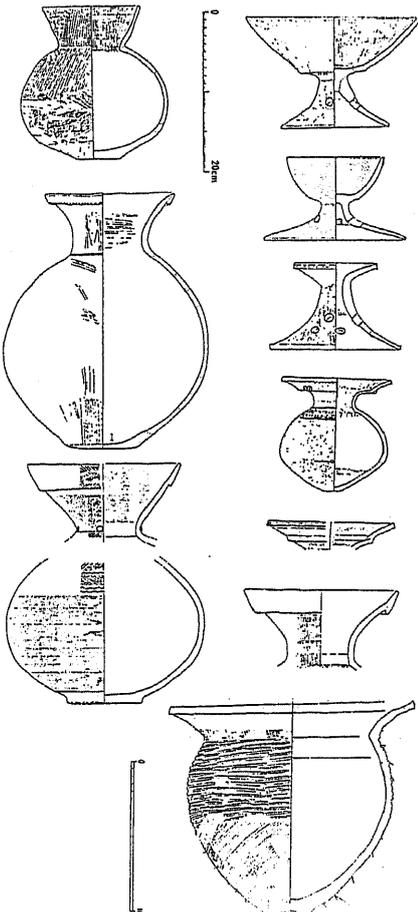
神門5号墳・神門4号墳・神門3号墳の比較 (単位/メートル)

	神門5号墳	神門4号墳	神門3号墳
全長	38.5	48-49	47.5+
墓 (下長向)	(上段) 27-28 (下段) 32-33	30-34	34
盛土高さ	3.2	3.35	3.10
みかけの高さ (盛土面から)	5.9	6.9	5.14
発出層 (前方部) (長さ・幅)	(上段) 5×3 6-7×12	14×9-14	16+×8.5-12
墓 幅	N 82°-84° W	N 66° W	N 63° W
墓 坑 深 度 (長さ・幅・深)	3.0×1.2×1.3	4.05×1.2×1.2(N26° 凹)	4.13×1.2-1.3×0.72 3.82×0.94-1.0×0.72
出土遺物	柄1・残断2・ガラス玉6・土器13+	柄1・残断1・ヤリ先11・土器241・ガラス玉73+ガラス玉420+土器150+	柄1・残断1・ヤリ先11・土器241・ガラス玉73+ガラス玉420+土器103+

8号中継金 古代77号で作成表に3号墳計測値を加算
1号墳計測値は2 調査途中であり今後変更ありうる

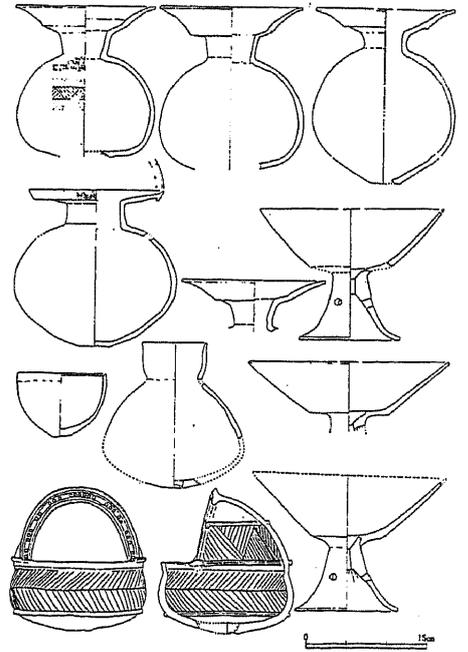


神門5号墳



神門4号墳

神門古墳群 出土土器



神門3号墳頂部出土遺物

神門3号墳

図3 神門古墳群



高部 30号墳

高部 32号墳

図4・高部30・32号墳墳形図 (1/400)

東1号墳は辺の中央に通路をもつ方墳として初期の段階に位置づけられる例である。方墳に出現した中央通路が前方部に発展する墳形は、通路・前方部の形態によってB I～B IV型に分類された(田中1984)。B I型は、前期の終わりまで前方部の発展し得ない墳形として残存するが、B II・B III・B IV型は、新しく出現する円丘系の墳形の刺激によって生み出され、前方部の発達段階に応じた前方後方墳への定型化を示して一定期間存続する。この前方部の発達形式が、円丘系の出現期古墳から前期の前方後円墳への発達段階(A I・A II・A III型)に対応していることは、神門古墳群における5号→4号→3号の変容過程の分析によって明らかにされている(同上)。

前面に浅い溝を設けたB III型成立期の例には、木更津市高部30・32号墳を挙げ得る。墳丘の比較では、32号墳の前方部が明らかに30号墳より発達し、全長に対する比率は約1/3(35%)から1/2(49%)に達している。30号に二神二獣鏡の破砕鏡と鉄槍2本、32号に「上方作」系斜縁浮彫式獣帯鏡の破鏡と鉄槍2本が副葬されており、いずれも後漢から三国時代初期の鏡と鉄槍をもつ同質の被葬者が連続して埋葬されたことがうかがえる。墳頂部・周溝内の土器群には共に手焙り形土器があり、30号の土器がより古相の特徴をもつ。土器群の位置づけは、東海系の高坏・壺類・手焙り形土器の比較から、30号が神門3号墳にほぼ並行し、32号はそれに後続すると見られ、墳形の特徴にも呼応する。

高部古墳群は、鏡を副葬する風習のない東国で、出現期から前期の変換期にB III型の前方後方墳が鏡の副葬をもって成立することを明らかにした例として重要である。

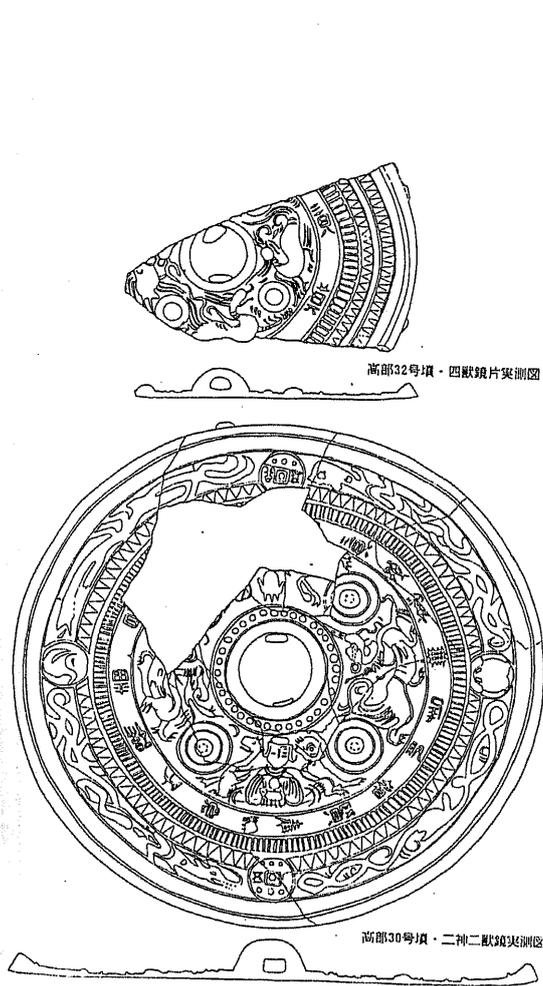


図5 高部30・32号墳出土鏡

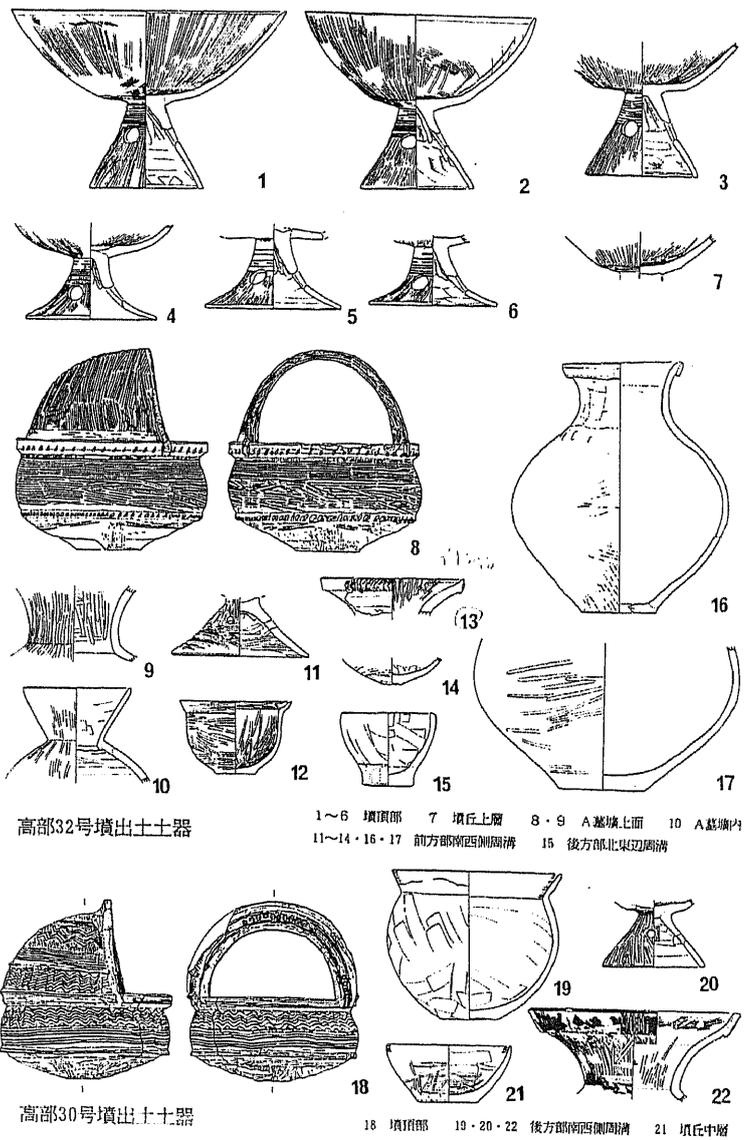


図6 高部古墳群出土土器

(3) 出現期古墳をめぐる見解

1977年、神門4号墳が畿内型の前期前方後円墳に先行する出現期の前方後円墳として報告された時には、これを地域色の強い弥生時代の「墳丘墓」として扱う見解が大勢を占めていた。畿内系・東海西部系の外来土器と在地の土器の併行関係の認識の相違から、当時としては突出して古い位置にあったが、各地の調査例に加えて、前期倭王権周辺部の様相が明らかになってきたことによって、現在では畿内の大型前方後円墳の出現期に納まったといえよう。

土器型式の認識と時期区分には、なお一致を見ない状況ではあるが、『後漢書』にみえる倭国大乱時代の終息期に吉備に新勢力の首長墓として出現した「楯築」をもって「新しい時代」が始まるという認識は一致してきている。それを、古墳時代出現期の始まりとみるか、弥生時代後期の新段階とみるかは、その後の首長墓をどちらの時代につなげて捉えるかによる。特殊化した通路、あるいは突出部をもつ新たな形態の墳形が、列島各地で一定の地理的範囲に出現し、前方部をもつ墳形に発展的に変化することを重視すれば、「楯築」以後を弥生時代から切り離して、新しい時代に位置づけることができる。

表1 出現期・前期古墳をめぐる見解

		白井 (2000)		
		西日本	東日本	
		(房総を中心として)		
倭国大乱時代の終息期	弥生後期	原田中 (26)		
	180	VIII c	楯築 (70~80) ☆□菊間1号 (17~20)	
	200	出現	IX a	☆□加茂1号 (19) ☆□東1号 (17) ☆□長平台1号 (17)
		現	IX b	☆神門5号 (39)
	前方部大型化	期	IX c	☆神門4号 (49)
		250	X a	鶴尾神社4号 (40) ———— ☆神門3号 (48) ・ ■高部30号 (34) ホケノ山 (90) ■弘法山 (66) ☆ ■高部32号 (31) 馬口山 (114) ☆ ■瀧ノ口向台8号 (55) ■駒形大塚 (64) ■元島名將軍塚 (95) ■藤本観音山 (116)
	前方部超大型化	前期	X b	津古生掛 (33) ・ 宿東山1号 (22) ・ ■国分尼塚1号 (53)
		古	X c	箸墓 (276) ■権現山51号 (43) 黒塚 (130) ■都月坂1号 (33) ☆ ■北作2号 (34) 椿井大塚山 (169) □神原神社 (35) 雪野山 (70) ☆ ■東間部多2号 (36)
		段	X d	桜井茶臼山 (207) ■元稻荷 (94) 前橋天神山 (129)
		階	X e	
300		前期新	古	メスリ山 (230) ■東之宮 (72) ■上侍塚 (114) 渋谷向山 (300) ■下侍塚 (87) 紫金山 (100) ・ 安土瓢箪山 (162) 会津大塚山 (114) ☆ 釈迦山 (93) ☆ 手古塚 (60)
350	階	新	東大寺山 (140) ・ ■新山 (137) ☆ □新皇塚 (40)	
	中期		日葉酢姫陵 (207) ・ 松岳山 (120) ・ ■南原 (60) 和泉黄金塚 (85) ☆ 大厩浅間様 (52) ———— 金蔵山 (165) 石山 (125) 常陸鏡塚 (96) 津堂城山 (200) 遊塚 (80)	

卑
弥
呼
・
臺
与
の
時
代

■前方後方墳 □方墳 ☆房総の古墳 ()の数字は墳丘長m
 *ローマ数字の編年は高橋護氏の吉備編年(高橋 1988)をもとにしている。

豊岡 卓之 (1999)				春成 秀爾 (1992)		都出 比呂志 (1989)	
弥生後期一終末期	總向廻間	1	楯築	弥中	楯築・黒宮大塚 ・西谷3号	弥生後期式	5 仲仙寺山12号 楯築 黒宮大塚 西条52号墓 —仲仙寺山9号—
				V新			
古墳時代	庄内	總向廻間	I 廻 II 廻	弥古	鶴尾神社4号 廻間1号 馬口山・都月坂2号 神門5号 神門4号 廻向石塚 宮山	弥生終末期式	庄内式 神門4号 宮山
				VI新			
	庄内	總向廻間	II 廻 III 廻	古墳時代	箸墓 椿井大塚山古 西殿塚	古布留時式	鶴尾神社4号 箸墓 ■備前車塚 ■元稻荷 桜井茶臼山 紫金山 寺戸大塚 東大寺山 ■南原
				III 廻			
布留	總向廻間	III 廻	III 廻	古墳時代	箸墓 椿井大塚山古 西殿塚	古布留時式	鶴尾神社4号 箸墓 ■備前車塚 ■元稻荷 桜井茶臼山 紫金山 寺戸大塚 東大寺山 ■南原
				III 廻			
布留	總向廻間	III 廻	III 廻	古墳時代	箸墓 椿井大塚山古 西殿塚	古布留時式	鶴尾神社4号 箸墓 ■備前車塚 ■元稻荷 桜井茶臼山 紫金山 寺戸大塚 東大寺山 ■南原
				III 廻			
布留	總向廻間	III 廻	III 廻	古墳時代	箸墓 椿井大塚山古 西殿塚	古布留時式	鶴尾神社4号 箸墓 ■備前車塚 ■元稻荷 桜井茶臼山 紫金山 寺戸大塚 東大寺山 ■南原
				III 廻			
布留	總向廻間	III 廻	III 廻	古墳時代	箸墓 椿井大塚山古 西殿塚	古布留時式	鶴尾神社4号 箸墓 ■備前車塚 ■元稻荷 桜井茶臼山 紫金山 寺戸大塚 東大寺山 ■南原
				III 廻			
布留	總向廻間	III 廻	III 廻	古墳時代	箸墓 椿井大塚山古 西殿塚	古布留時式	鶴尾神社4号 箸墓 ■備前車塚 ■元稻荷 桜井茶臼山 紫金山 寺戸大塚 東大寺山 ■南原
				III 廻			

津古生掛古墳

鶴尾神社 4号墳

宿東山 1号墳

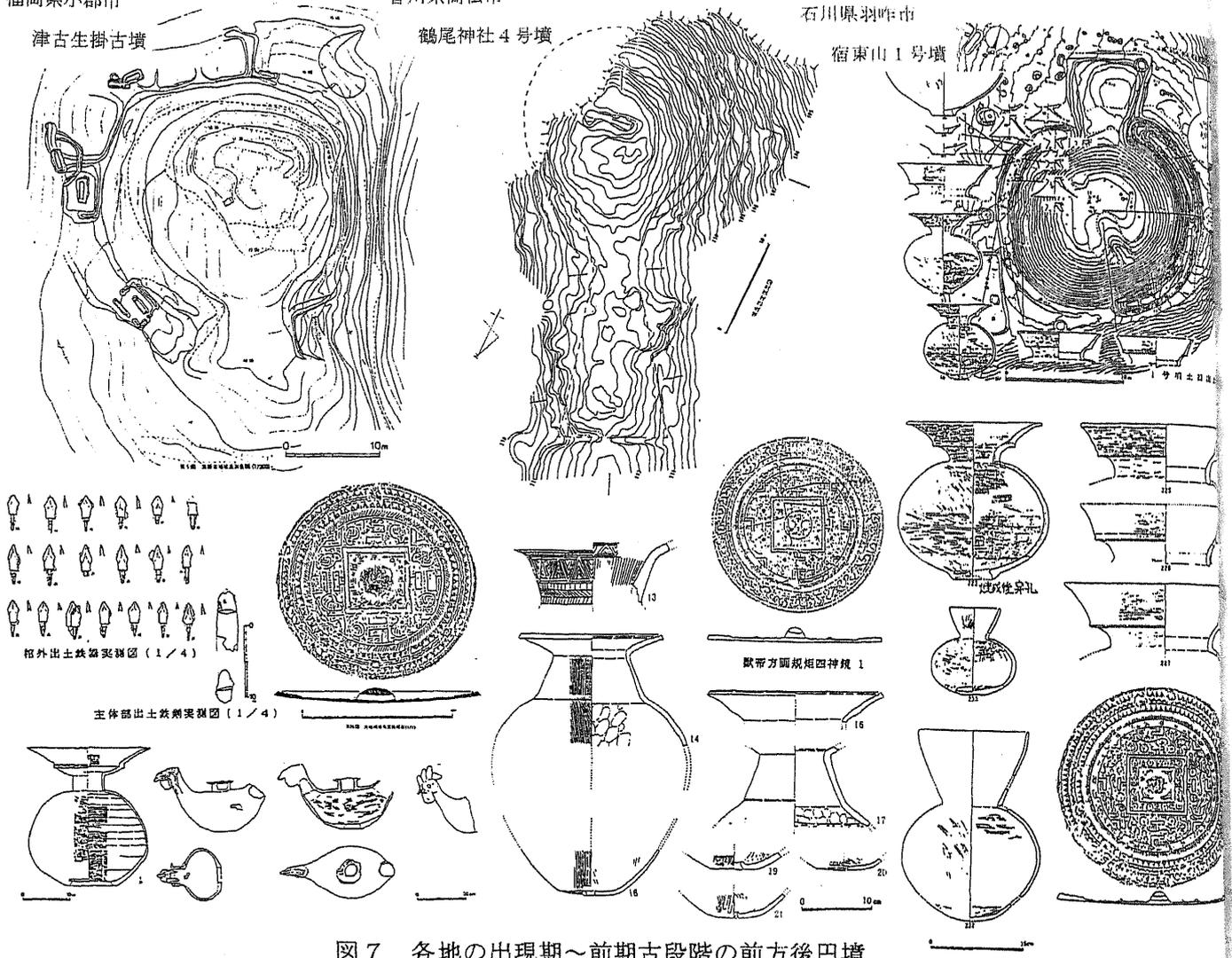


図7 各地の出現期～前期古段階の前方後円墳

桜井市

纏向石塚古墳

天理市

馬口山古墳

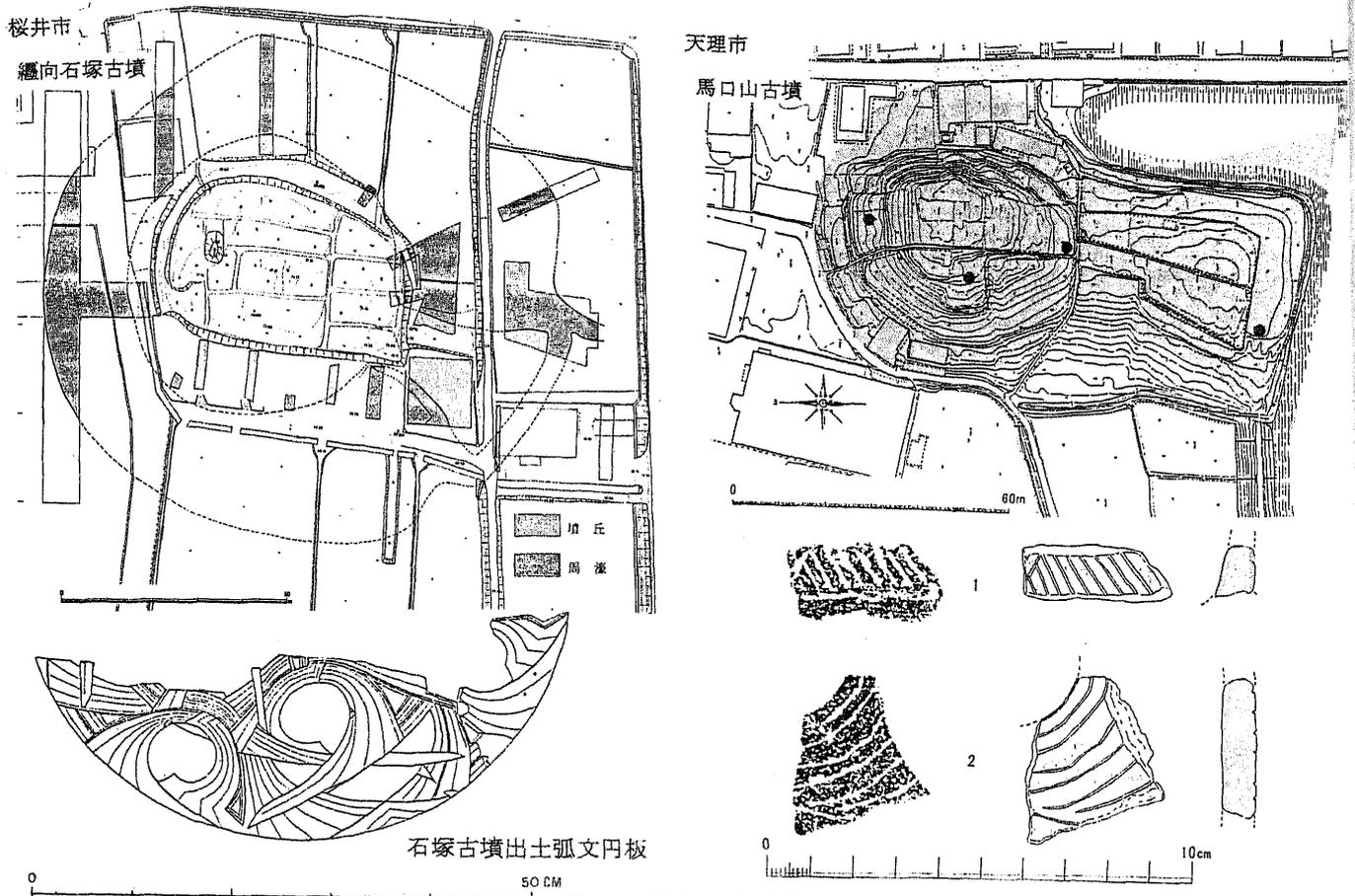


図8 纏向石塚古墳・馬口山古墳 馬口山古墳採集の特殊器台

現在のところ、倭王権初期の中心部である大和に、出現期古段階の例を見ることはできないが、出現期新段階の様相は次第に明らかになりつつある。

倭王権成立期に関わる古墳として 1971 から調査されている桜井市纏向石塚古墳は、扁円形（無花果形）の円丘に短小な前方部が付く、定型化以前の大型古墳（全長 96 m）として注目されてきた。新・古の土器が検出され、築造年代には諸説があったが、墳丘下の最も新しい土器によって造営期の上限が纏向 2 式の古段階を遡らないことが明らかになり、房総の出現期との対比では、神門 4 号墳にほぼ並行する。石塚古墳に後続する大型古墳は箸中古墳群のホケノ山古墳（全長 90 m）であることが調査によって明らかになってきた。ホケノ山古墳は墳丘に葺石を用いた最古の例と見られ、葺石をもつ超大型前方後円墳（全長 276 m）として完成する箸墓古墳へ直接連なる古墳として注目される。ホケノ山と箸墓の間には、なお発展段階を埋める古墳が存在すると考えられるが、そのひとつとして、特殊器台をもち、葺石を用いた可能性のある天理市馬口山古墳が全長 114 m という中間的な規模をもって存在する。馬口山古墳の特殊器台は、後円部の細線鋸歯文と胴部の蕨手状曲帯紋の一部を知る資料に限られているが、精緻な施文と薄いつくり、ハケ調整が見られないことなどから大和古墳群の特殊器台の中でも古相に位置づけられる（田中 1989）。吉備地方産の向木見型として大和最古段階の特殊器台とする見解（春成 1993）もあるが、大和古墳群東部の中山大塚古墳（全長 120 m）等の特殊器台に先行する別系統のものも見られ、纏向石塚古墳出土の弧文円板に文様の祖形をみることができる。

一方、大和の西方に出現期の前方後円墳を求めると、高松市鶴尾神社 4 号墳があげられる。これは、讃岐に見られる突出部が長く伸びる墳形の系譜で最初に大型化した例である。底部穿孔壺を墳丘に置き、獣帯方面規矩四神鏡を副葬品にもつ。神門 3 号墳とほぼ並行し、出現期と前期の変換期に位置づけられる。これらに続く前方部の短小な前方後円墳には、福岡県津古生掛古墳、石川県宿東山 1 号墳があり、副葬品に方面規矩鏡をもち、墳丘に底部を穿孔した有段口縁壺を置くという共通点が見い出せる。前掲の前方後円墳のうち、高部古墳群が二神二獣鏡・半肉彫獣文鏡をもち、また弘法山古墳が斜縁獣文鏡をもつのは対照的である。

前期古段階の大和は 90 ～ 120 m の大型前方後円墳が続々と築かれ、やがて箸墓古墳の出現をみる。一方、出現期に一連の造墓が続いた房総では、神門 3 号墳の後を埋める前期古段階の大型前方後円墳を見いだすことができない。関東地方に範囲を広げても、同様である。この段階の主要古墳は、前方後円墳で占められているのである。

2 古墳出現期前後の周溝内埋葬について

(1) 周溝内の埋葬施設

弥生時代後期の方形周溝墓や古墳時代出現期の方墳には、周溝内中央部に土壌や一段低い掘り込みを検出することがしばしばあり、報告例はかなりの数に上っている。これらは周溝内に設けられた埋葬施設と考えられ、墳丘中央部の埋葬施設との関連から被葬者群の構成を探る手がかりとして注目される。しかし、副葬品が検出される例はきわめて少なく、また判別可能な人骨の遺存する例もなかったため被葬者の具体像はほとんどわかっていなかったといえる。また、掘り込みの形状が不明確なものは周溝の掘りかたとして扱われたものが少なくない。

以下に示す例は、明らかな副葬品や埋葬人骨、あるいは土器棺を検出し、埋葬施設であることが判明したものである。特に、副葬品を伴わない埋葬人骨の出土例と周溝覆土中からの管玉を装着した人骨の出土例は、たとえ遺物や明確な掘り込みがない場合にも埋め戻しの痕跡や土器群、玉類の出土によって埋葬施設の存在を想定する必要があることを示している。周溝が単なる区画ではなく、特定の被葬者のための埋葬空間として機能していたことに改めて注目してみたい。

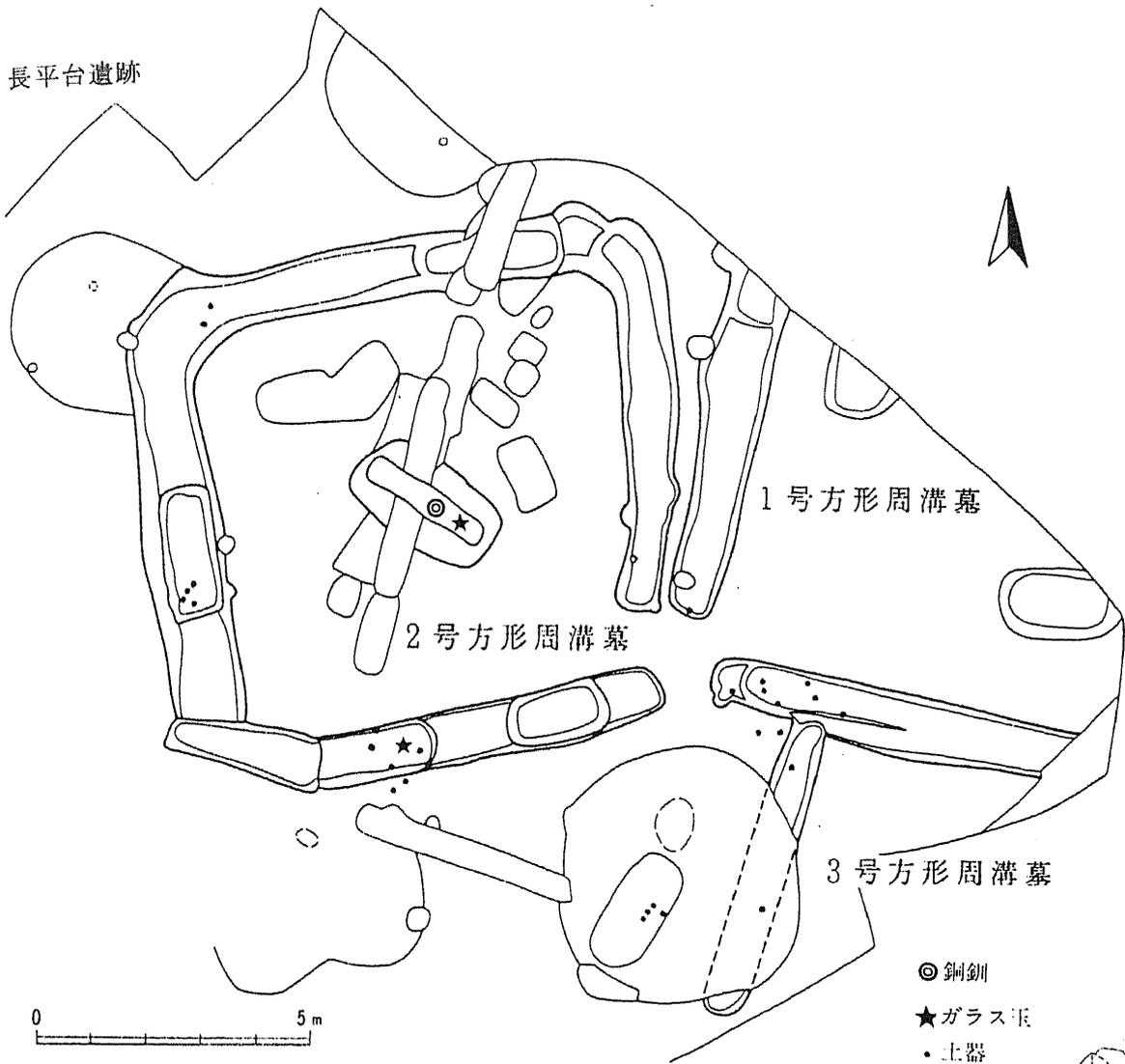
(2) 弥生時代後期の周溝内埋葬

弥生時代後期の方形周溝墓では墳丘中央の埋葬施設と周溝内の埋葬施設の出土遺物にあまり差がみられない。これは、丘陵上に築かれたいわゆる方形台状墓・墳丘墓群と同様である。溝を伴わない台状墓・墳丘墓では、墳丘の裾部や周辺に多くの土壌が墳丘を取り囲むように配される。それらの遺物（副葬品）の内容は類似性が強く、墳丘中央の埋葬施設と裾部の施設間にも大きな差は認められない。特に、東日本ではまだ副葬の習慣が未発達であるため、中央部と周溝内の埋葬施設から出土する遺物の差は小さく、被葬者が装着していたと見られる装身具類の組成の差異にとどまる例が大半を占める。

例えば、市原市長平台遺跡2号方形周溝墓では、墳丘中央部に1基、周溝内に5基の埋葬施設があり、周溝内の土壌群ではそのうちの1基から13個のガラス玉が出土したのに対し、中央の埋葬施設ではガラス玉15個に加えて断面板状の銅釧が出土している。周溝内の被葬者と墳丘中央の被葬者の差を青銅製の装身具に求めることのできる例である。

しかし、一方では九州の弥生時代中期から鉄製武器を死後の世界まで携帯する風習があった。次第に西日本一帯に広まり、後期になると東日本にも波及している。平塚市王子ノ台遺跡・掛川市原新田遺跡・渋川市有馬遺跡・市原市草刈遺跡などの後期の特定集団の墓から相次いで鉄剣が出土したことにより、その風習が広範に及んでいることがわかってきた。これらの武器もまた、墳丘中央部の埋葬施設や木棺使用の単独の土壌墓から出土し、周溝内施設からの出土例はなく、特定の有力者を象徴する遺物である。

長平台遺跡



王子ノ台遺跡 5号方形周溝墓

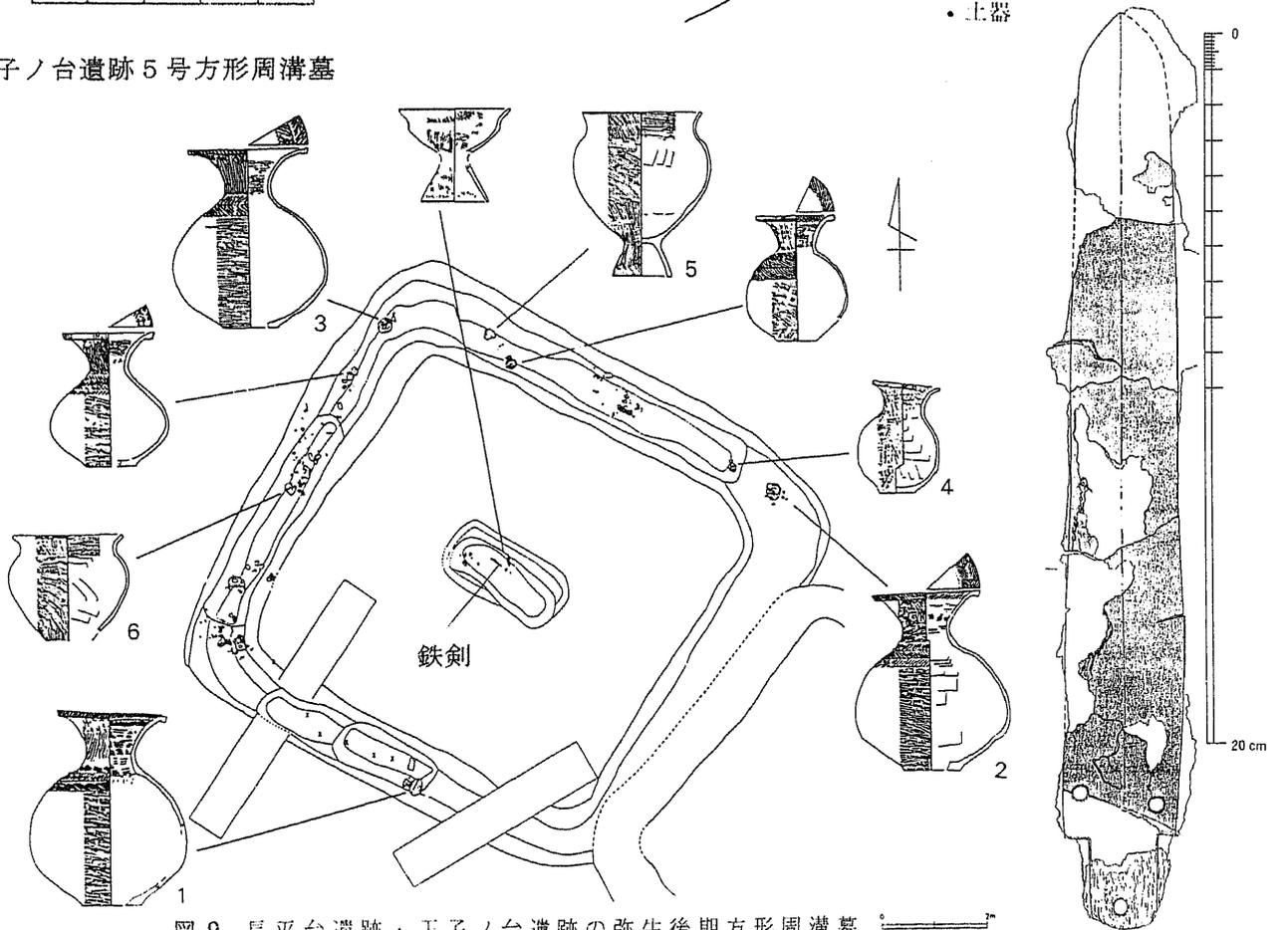


図9 長平台遺跡・王子ノ台遺跡の弥生後期方形周溝墓
(半田1982) (東海大学校内調査団1992)

5号方形周溝墓出土鉄剣

(3) 古墳時代出現期から前期の周溝内埋葬

出現期から前期の方墳群は、主墳と小規模墳が群在して同一墓域内にある点で共通の要素をもっている。また、墳丘中央部の埋葬施設と周溝内の埋葬施設の格差は次第に大きくなり、中央施設は東日本を含めたさらに広い地域で明かな副葬品をもつようになるが、周溝内施設の遺物は依然として装着されていたと考えられる装身具類に留まっている。

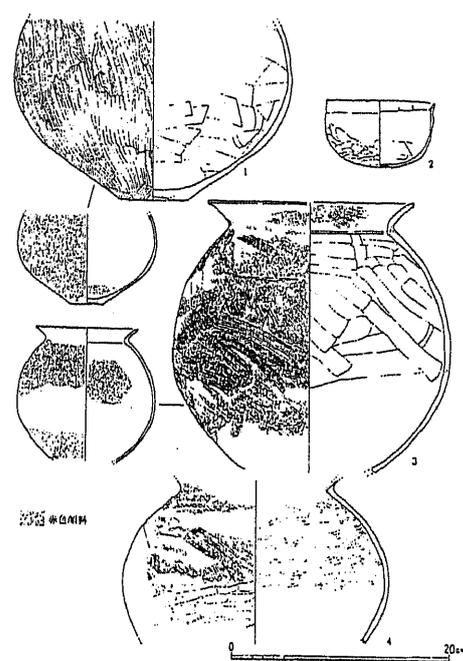
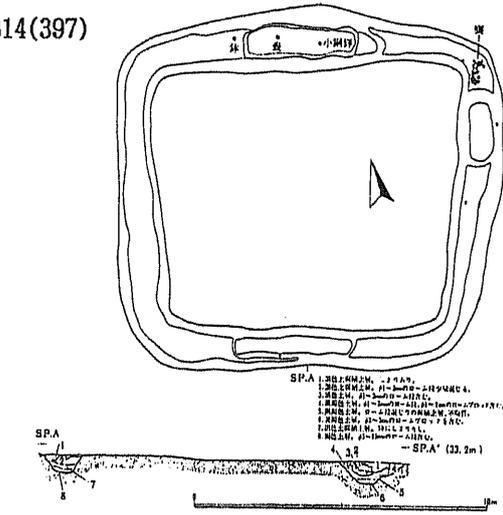
草刈古墳群の周溝内埋葬人骨の検出例は、縄文時代の貝塚混貝土層中に築かれた方墳群という房総ならではの立地によってかなり良好な状態で遺存していた。墳丘がすでに削平されていたために中央施設との比較ができないのは残念であるが、この発掘資料は周溝内の埋葬状態、被葬者の年齢・性別、副葬品等の状況を物語る資料として重要である。

B14・B1の周溝内埋葬は、周溝底を掘り込まない例である。B14は周溝を一旦埋め戻して平坦な面を作り、木棺を納めたと考えられる。木棺の上に埋納された小銅鐸が陥没した木棺の覆土から出土している。小銅鐸は当遺跡出土の4例のなかで最も形骸化したもので、伴出した土器からも小銅鐸の埋納時期は前期古段階の初頭に位置づけられる。葬送に伴って小銅鐸が埋納されていることは、これ以後小銅鐸を使用しないことを物語っており、すでにこれを用いる祭祀が終わったことを示している。B1の例は、明確な掘り込み等の埋葬施設は検出されておらず、混土貝層中になれば人骨の検出もなく単なる周溝の発掘に終わった可能性が高い。ところが、ここから管玉を手玉として装着した成人女性をはじめ4体の埋葬人骨が出土したのである。また、これらの人骨の周囲では葬送に伴って置かれたと見られる土器類が人骨の頭部や足元から出土している点も見逃せない。周溝内の玉や土器は周溝内埋葬の所在を伝える信号を発しているといえるだろう。

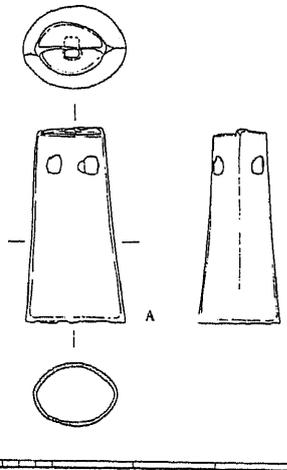
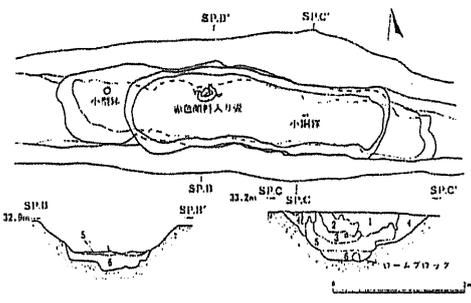
C9・C10・B4は周溝底を掘り込んだ土壌である。このうち、壺棺との組み合わせで注目されるのがC9の第2周溝内土壌である。土層の観察では、壺棺の掘りかたと土壌は同時に埋め戻されたとみられ、壺棺内の0歳児（胎齢10ヶ月）と土壌内の熟年男性は同時に埋葬されたものと捉えられる。熟年人骨が女性であれば、2人の関係は死産によって亡くなった母と子という想定が成り立つが、熟年男子との組み合わせはどのような場合が考えられるであろうか。父と子、あるいは叔父と甥などの同じ集団に属している近親者であると考えられるが、血縁関係のない場合もないともいえない。そして、母親が別集団の出身者であったため一緒に葬られていないことが想定できる。このような例は、縄文時代の貝塚内に埋葬された例が報告・検討されているが、房総では古墳時代中期の古墳にも類例が求められる。

松戸市の河原塚古墳は、墳丘径26メートル、高さ4メートルの規模をもつ中期古墳で、墳頂部に木棺直葬の埋葬施設が2基検出されている。周辺の縄文時代貝塚に堆積した混土貝層を墳丘に盛り上げているため、中央の木棺からは遺存の良い2体の人骨が残っていた。1体は伸展葬で、推定身長172cmにおよぶ長身で体格の良い熟年男性、もう1体は3才くらいの幼児と判定された。第2の施設は攪乱が著しく人骨の判別が

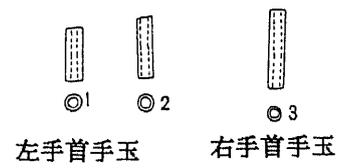
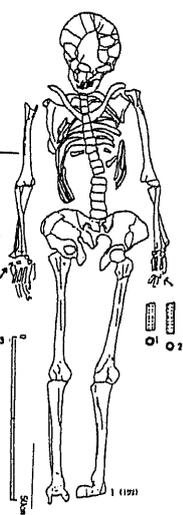
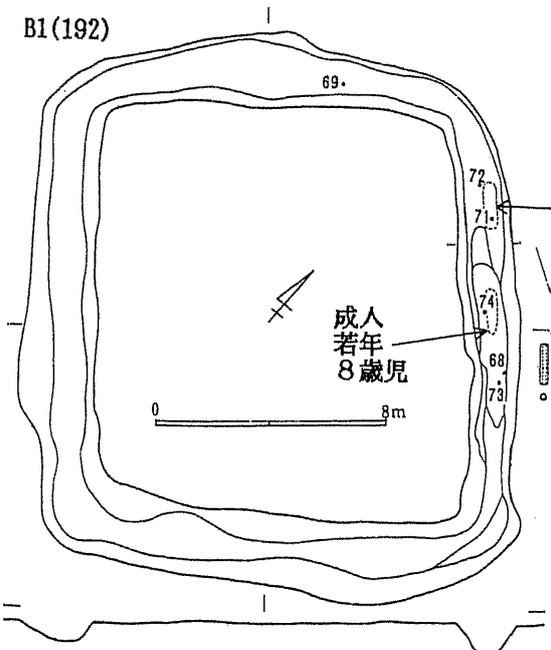
B14(397)



B14(397)出土土器
小銅鐸
(白井・福田『考古学雑誌』
第75巻第2号1989より)



B1(192)



(『千原台ニュータウン』Ⅲ-葦刈貝塚-1986より)

図10 草刈遺跡の周溝内埋葬(1) (白井・福田1989) (高田ほか1986)

不可能であったのは惜しまれるが、長身の熟年男性と幼児、第2の埋葬施設の被葬者は同じ集団に属する有力「家族」であったと推定される。この場合も、幼児は母親とは別の墓域に埋葬されたことが推定され、草刈例とともに集団内の埋葬のルールを示唆していて興味深い。

表2 草刈遺跡出土の周溝内埋葬人骨一覧

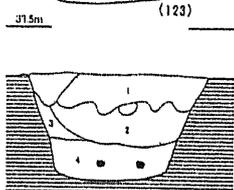
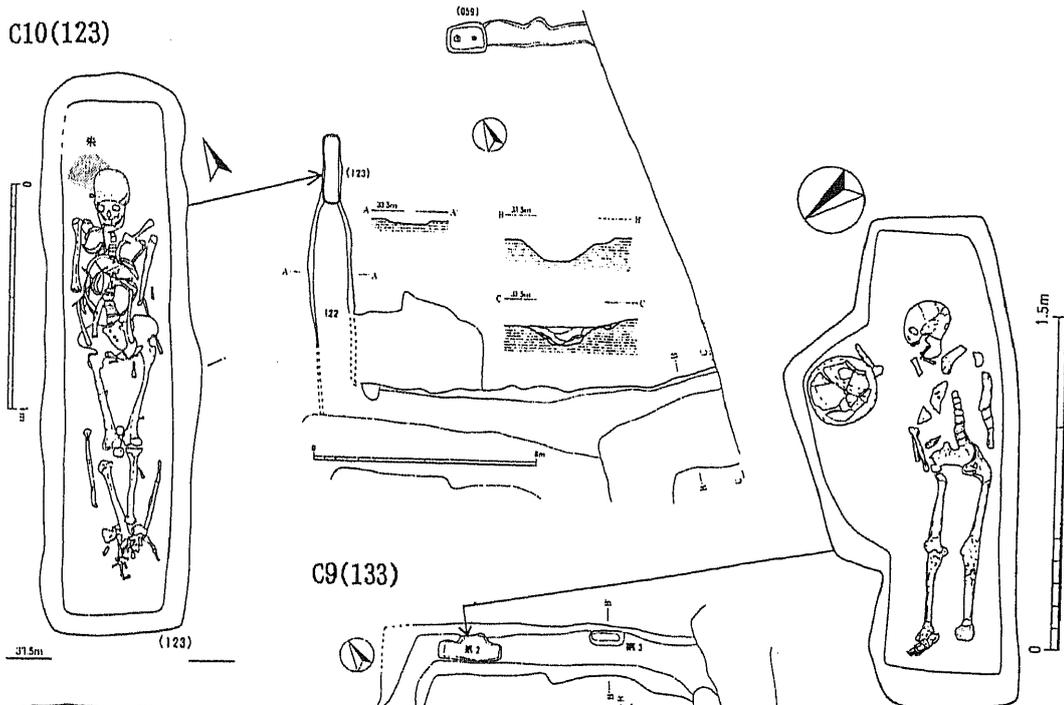
遺構番号	年齢	埋葬状態	遺存状態	性	身長cm	副葬品・その他
B1(192)	成人	仰臥伸展	1体分	女	160	右手首管玉1, 左手首管玉2 頭部と足元に小型器台出土 溝中央にかたまって 出土。人骨周辺に埴形 壺、甕、高坏が出土。
〃	成人	—	大腿骨のみ	?	—	
〃	若年	—	歯芽	?	—	
〃	8歳児	—	歯芽	?	—	
B4(140)	(小人)	仰臥伸展	ほぼ1体分	?	132	土壌周辺に壺2、埴形壺2
C9(133)	熟年	仰臥伸展	1体分	男	縄文人 より大	頭蓋冠、下顎、下肢長骨以外は遺存が悪い
〃	0歳児	壺棺内	全身骨格	?	—	胎齢10ヶ月、良好に遺存していた
C10(123)	壮年	仰臥伸展	全身骨格	男	164.5	良好に遺存していた
〃	壮年?	伸展葬?	少量の骨片	?		
草刈3号A	壮年	仰臥伸展	1体分	男	約160	土壌上で小型器台、底部穿孔壺出土
〃 B	成人	—	頭蓋、歯芽	?	—	

このように、草刈のC9第2土壌・松戸河原塚古墳中央施設では、熟年男性と乳幼児が同時に埋葬されているわけであるが、この場合乳幼児の遺骸は熟年男性が亡くなるまで壺に保管されていたのであろうか。あるいは別の場所に保管されていた遺骸を埋葬時に壺に移したか、いずれにしてもこの乳幼児達はあらかじめ埋葬する場所が決まっていた特定の有力「家族」に属していたものと考えられる。

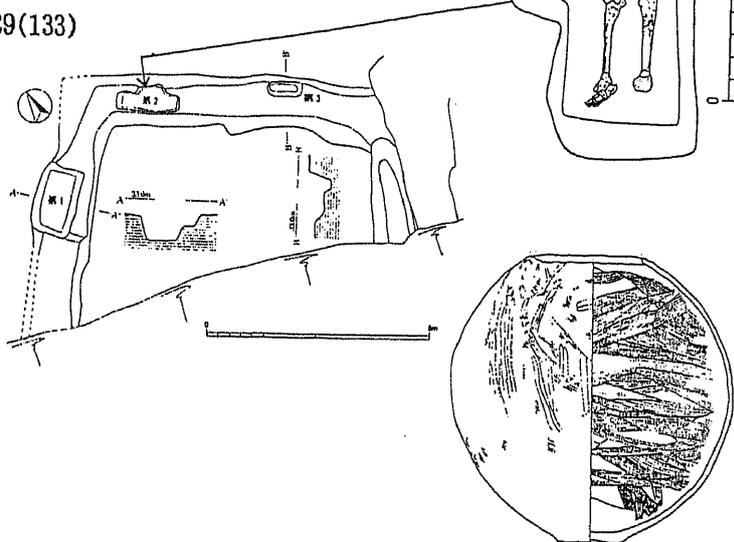
(4) 周溝内に葬られた人々

古墳の被葬者は、墳丘中央部の第一義的な被葬者を中心に墳丘一周溝一周溝外と3群に分けられる。この区別は、出現期から後期まで中・小規模の古墳群に受け継がれている。その萌芽は、西日本の弥生時代後期には既に認められていたが、王子ノ台遺跡や群馬県渋川市有馬遺跡などの近年の調査例によって東日本でも弥生時代後期に逝ることが分かってきた。また、周溝内の被葬者は、玉類・鉄鏃・刀子などの副葬品をもつ例が少なくないことから、ほとんど副葬品をもたない周溝外の土壌に葬られた被

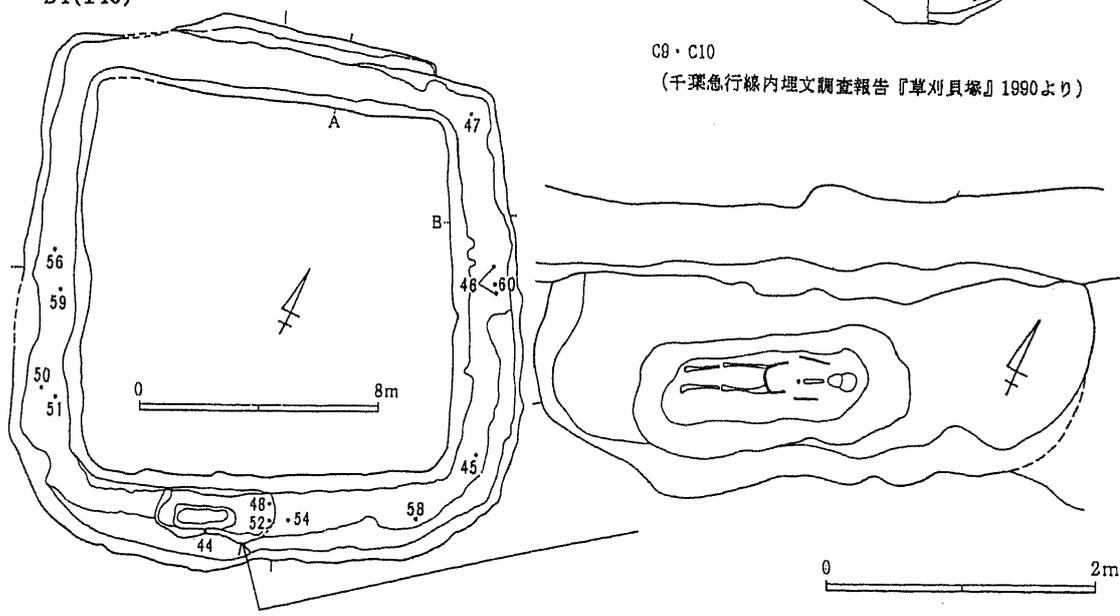
C10(123)



C9(133)



B4(140)



C9・C10
(千葉急行線内埋文調査報告『草刈貝塚』1990より)

(『千原台ニュータウン』Ⅲ-草刈貝塚-1986より)

図 11 草刈遺跡の周溝内埋葬 (2) (小林1990) (高田ほか1986)

葬者とは一線を画し、墳丘中央部の被葬者に直接関連する人々であるといえよう。

草刈遺跡は、未発掘部分があり、大半は本格的な整理を残しているため現状での概算になるが、現在までに総面積30万㎡の約7割を発掘調査した段階で、古墳時代出現期から前期の堅穴住居約700軒に対し、この時期の方墳55基前後を検出している。単純に割返せば、12.7軒に1基の割合となり、全ての堅穴住居の住人が方墳内に葬られていないのは明かである。周溝内土壙・壺棺に葬られた人々も、乳幼児を含めてやはり「選ばれた人々」であったと考えられる。

草刈の例のように主墳と小規模な方墳が群在して同一墓域内に造られた段階には、全国各地に大型の前方後円墳が出現し、こうした小規模古墳群との格差は一層大きくなっている。東日本でも社会全体としての階層分化はかなり進んでいるが、ムラ単位の葬制には根強い伝統が残っている。熟年男性と乳幼児の同時埋葬もそうした伝統を受け継ぐ集団間の規制に基づく可能性は強いが、このことが階層分化の未成熟さを物語る証左にはならないであろう。

また、埋葬人骨の人類学的な分析は、墓の形式や副葬品の分析からは知り得ない被葬者間の関係を知る方法として、今後さらに重視する必要があると思われる。しかし、埋葬人骨を含めて古墳時代研究における自然遺物・動物遺存体の分析は、縄文・弥生時代のそれに比べて資料の蓄積が少なく、試料の検出方法や取り上げ方には未だ改善の余地が多い。

一方、方形周溝墓や方墳に葬られることのなかった大多数の人々がどのように埋葬されていたのかという命題は、依然として未解決である。畿内で検出されている弥生時代中期から古墳時代後期に数百基単位で群在する土壙群、あるいは埼玉県深谷市城北遺跡で検出された堅穴住居内の人骨が一般の人々の墓地を解明する糸口になることを期待したい。

参考文献

(著者五十音順)

- 1 赤塚次郎ほか『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990
- 2 石野博信・関川尚功編『纏向』奈良県立橿原考古学研究所 1976
- 3 糸川道行『沼南町北ノ作1・2号墳発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター 1993
- 4 上野純司・栗田則久・白井久美子・萩原恭一『房総考古学ライブラリー5』古墳時代(1)(財)千葉県文化財センター 1990
- 5 小沢洋「南関東の前方後方墳」『前方後方墳を考える』第1分冊 東海考古学フォーラム 1995 (467-561頁)
- 6 小久貫隆史『千原台ニュータウン』1(財)千葉県文化財センター 1980
- 7 小出義治他『松戸河原塚古墳』松戸市誌編纂委員会 1956
- 8 小林清隆ほか『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 草刈貝塚』(財)千葉県文化財センター 1990
- 9 桜井市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『ホケノ山古墳発掘調査現地説明会資料』1995

- 10 三森俊彦編『千原台ニュータウン』Ⅱ－草刈遺跡A区・鶴牧古墳群・人形塚－（財）千葉県文化財センター 1983
- 11 清水真一 平成10年度冬季企画展『纏向遺跡100回調査記念－纏向遺跡はどこまでわかったか－』桜井市立埋蔵文化財センター 1998
- 12 白井久美子「《研究ノート》市原市草刈遺跡の方墳群」『研究連絡誌』第22号（財）千葉県文化財センター 1988（9-16頁）
- 13 白井久美子「房総の出現期・前期古墳の様相について」『第17回古代史サマーセミナー発表資料』 1989（181頁）
- 14 白井久美子・福田依子「千葉県市原市草刈遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌』第75巻第2号 日本考古学会 1989（73-84頁）
- 15 白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田尚「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集 国立歴史民俗博物館 1984（41-82頁）
- 16 高田博ほか『千原台ニュータウン』Ⅲ－草刈遺跡（B区）－（財）千葉県文化財センター 1986
- 17 高橋護「組帯文の展開と特殊器台」『岡山県立博物館研究報告』5 岡山県立博物館 1984（1-21頁）
- 18 高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』9 岡山県立博物館 1988（1-32頁）
- 19 高橋康男『草刈遺跡』（財）市原市文化財センター 1985
- 20 田中新史「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』第63号 早稲田大学考古学会 1977（1-21頁）
- 21 田中新史「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号 早稲田大学考古学会 1984（1-53頁）
- 22 田中新史「東国の古墳時代出現期とその前後」『東アジアの古代文化』46 大和書房 1986（84-94頁）
- 23 田中新史「奈良盆地東縁の大形前方後円墳出現に関する新知見」『古代』第88号 早稲田大学考古学会 1989（126-136頁）
- 24 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』岩波書店 1989
- 25 都出比呂志編『古代史復元』6－古墳時代の王と民衆－ 講談社 1989
- 26 寺沢薫『桜井市箸墓古墳（纏向遺跡第81次）発掘調査概報』橿原考古学研究所 1995
- 27 東海考古学フォーラム『前方後方墳を考える』第3回東海考古学フォーラム三重県実行委員会 1995
- 28 東海大学校地内遺跡調査団編「相模の3・4世紀 方形周溝墓をめぐって」『東海大学校地内遺跡調査報告』3 東海大学校地内遺跡調査団 1992
- 29 豊岡卓之『古墳のための年代学』－近畿の古式土師器と初期埴輪－ 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1999
- 30 奈良県立橿原考古学研究所編『黒塚古墳』 学生社 1998
- 31 萩原儀征・清水真一・寺沢薫『纏向石塚古墳』範囲確認調査（第4次）概報 桜井市教育委員会 1989
- 32 橋本輝彦「纏向遺跡の発生期古墳出土の土器について」『庄内式土器研究』XIV 庄

内式土器研究会 1997 (102-113頁)

33 春成秀爾「吉備と大和」『第9回古代史シンポジウム』全日空・朝日新聞社 1991 (13-21頁)

34 春成秀爾「弥生から古墳へーその変革過程ー」『日本考古学協会1992年度大会』研究発表要旨日本考古学協会 1992 (60-67頁)

35 半田堅三「長平台遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台発掘調査団 1982 (37-43頁)

36 埋蔵文化財研究会編『定型化する古墳以前の墓制』埋蔵文化財研究会 1988

37 埋蔵文化財研究集会編『前方後円墳の再検討』埋蔵文化財研究会 1995

第2章 古墳時代前期の地域圏形成

第1節 前期古墳の展開

1 前方後方墳の時代

(1) 東国の前方後方墳

大型前方後円墳が定型化し、大和で飛躍的に規模を拡大する段階に、関東地方を中心とする東日本では、主要な大型古墳が前方後方墳で占められる。神門3号墳の後に大型の前方後円墳が継続しなかったのとは対照的に、出現期以来前方後方墳は次第に規模を拡大して定型化し、地域の中核をなす古墳に発展している。特に、出現期には大型古墳の見られない東山道沿いの内陸部（群馬県・栃木県）に前期古段階の大型前方後方墳が集中する。前期の大型前方後方墳上位20基のうち10基は美濃・岐阜県以東にあり（表1）、関東地方には、前橋八幡山古墳（130m）を筆頭に藤本観音山古墳（116.5m）、上侍塚古墳（114m）、山王大柵塚古墳（96m）、元島名将軍塚（90m）、下侍塚古墳（84m）の6基がある。墳丘規模を60m以上に広げて分布を見ると、60基のうち半数以上の37基が美濃以東にあり、24基が関東地方以東に分布する。一方、大和より西側では60基中の13基にとどまり、極めて東方に偏った分布を示す。

東京湾沿岸では、高部古墳群に後続する発掘調査例はないが、袖ヶ浦市滝ノ口向台8号墳が墳丘測量・レーダ探査によって全長53～55mの前方部の短小な前方後方墳であることがわかり、採集した手焙り形土器によって高部古墳群を越える地域最大の前方後方墳が前期古段階に出現していることが明らかになった。

鏡副葬の風習のない東国では、出現期にはほとんど副葬例が見られないが、前方部の発達した前方後方墳の成立と共に波及する。その初源と考えられる高部古墳群には、後漢から三国時代初期の二神二獣鏡と「上方作」系斜縁浮彫式獣帯鏡、弘法山古墳にも「上方作」系斜縁浮彫式獣帯鏡が副葬されている。後続する駒形大塚では画文帯龍虎四獣鏡、元島名将軍塚では四獣鏡、国分尼塚1号ではき鳳鏡と鏡の種類は様々であるが、この時期の大型前方後円墳の副葬鏡が方面規矩鏡を主体とするのとは対照的である。前期古段階の後半になると、大和を中心とする西日本では大型前方後円墳に画文帯神獣鏡・三角縁神獣鏡の副葬が始まり、前方後方墳にも三角縁神獣鏡が入るようになるが、この時期の東国には明らかな例がない。

円筒埴輪の定型化と腕飾類を中心とする石製品の多量副葬が見られるようになる前期の新段階には、関東地方にも定型化した大型前方後円墳が出現し、三角縁神獣鏡を含む鏡群を副葬するようになるが、前方後方墳では下侍塚に盤龍鏡、上侍塚に振文鏡と区別した鏡群として一貫している。また、この時期、東海西部にも大型前方後方墳が造られている。愛知県犬山市東之宮古墳（72m）は尾張で最古の大型前方後方古墳である。4面の三角縁神獣鏡を含む11面の鏡の副葬は前方後方墳としては奈良県新山古墳（34面）、岡山県湯迫（備前）車塚古墳（13面）・兵庫県西求塚古墳（12面）について多く、この時期の東海西部で傑出した存在である。

表1 大型前方後方墳一覽

名	称	所在地	規模 (m)
1	西山古墳	奈良県天理市杣之内町	180
2	波多子塚古墳	奈良県天理市成願寺町ハタゴ塚	145
3	新山古墳	奈良県広陵町大塚小字新山	137
4	前橋八幡山古墳	群馬県前橋市朝倉	130
5	藤本観音山古墳	栃木県足利市藤本町	116.5
6	下池山古墳	奈良県天理市成願寺町川下り	115
7	上侍塚古墳	栃木県湯津上村湯津上	114
8	フサギ塚古墳	奈良県天理市成願寺町	110
9	赤土山古墳	奈良県天理市櫛本町赤土山	105
10	浅間古墳	静岡県沼津市須津増川	103
11	山王大樹塚古墳	栃木県藤岡町大字蛭沼字砂田	96
12	西求女塚古墳	兵庫県神戸市灘区都通	95
13	元稻荷古墳	京都府向日市向日北山	94
14	植月寺山古墳	岡山県勝央町植月	91.5
15	元島名将軍塚古墳	群馬県高崎市元島名町將軍塚	90
16	下侍塚古墳	栃木県湯津上村湯津上	84
17	北山古墳	岐阜県大野町大字上磯	83
18	大安場古墳	福島県郡山市田村町大善寺字大安場	82
19	午王堂山3号墳	静岡県清水市庵原中午王堂	78.2
20	西山1号墳	京都府城陽市久世下大谷	76
21	元屋敷1号墳	福島県浪江町大字北幾世橋字伊織迫	75
22	桜井古墳	福島県原町市大字上渋佐字原畑	75
23	桜井二子古墳	愛知県安城市桜井二子	74
24	天神森古墳	山形県川西町大字上小松	73.5
25	東之宮古墳	愛知県犬山市大字大山字北白山平	72
26	向山古墳	三重県嬉野町大字上野字向山	71.4
27	大住南塚古墳	京都府田辺町大住小字八王子	71
28	聖陵山古墳	兵庫県加古川市野口町長砂	70
29	雨の宮1号墳	石川県鹿西町能都部上アメノミヤ	70
30	勅使塚古墳	富山県婦中町羽根字前割	70
31	宝領塚古墳	山形県米沢市窪田町字北宝領	70 (推定)
32	処女塚古墳	兵庫県神戸市東灘区御影塚町	68
33	名取薬師堂古墳	宮城県名取市飯野坂字山	67
34	大住車塚古墳	京都府田辺町大住小字八王子	66
35	京銭塚古墳	宮城県子牛田町字素山	66
36	古梅松塚古墳	群馬県大泉町古梅字松塚	65.5
37	九流谷古墳	大阪府太子町大字太子小字九流谷	65
38	板谷1号墳	富山県高岡市板谷	65
39	后塚古墳	茨城県土浦市手野町字后塚	65
40	中綴古墳	京都府園部町上木崎	64
41	駒形大塚古墳	栃木県那須郡小川町大字三輪字駒形	64 (推定)
42	勅使塚古墳	茨城県玉造町沖州字下組	64
43	高御堂古墳	愛知県春日井市堀ノ内町字表	63
44	弘法山古墳	長野県松本市大字出川・神田	63
45	観音塚古墳	宮城県名取市飯野坂字山居	62
46	吸坂A3号墳	石川県加賀市吸坂町	61
47	小田中亀塚古墳	石川県鹿島町小田中	61
48	那須八幡塚古墳	栃木県那須郡小川町大字吉田字八幡	60.5
49	下里古墳	和歌山県那智勝浦町字下里尾藪	60以上
50	西山七号墳	京都府城陽市久世下大谷	60
51	長法寺南原古墳	京都府長岡京市長法寺南原	60
52	星塚古墳	奈良県天理市新泉町星山	60
53	皇子山1号墳	滋賀県大津市錦織1丁目	60
54	小松古墳	滋賀県高月町西野	60
55	鷺山古墳	埼玉県児玉町大字下浅見字鷺山	60
56	寺山古墳	群馬県太田市強戸口	60
57	茂原権現山古墳	栃木県宇都宮市茂原町	60
58	山居古墳	宮城県名取市名取ヶ丘1丁目	60
59	宮山古墳	宮城県名取市飯野坂字山居	60
60	西寺山古墳	岐阜県可児市大字中恵土小字寺廻	60 (推定)

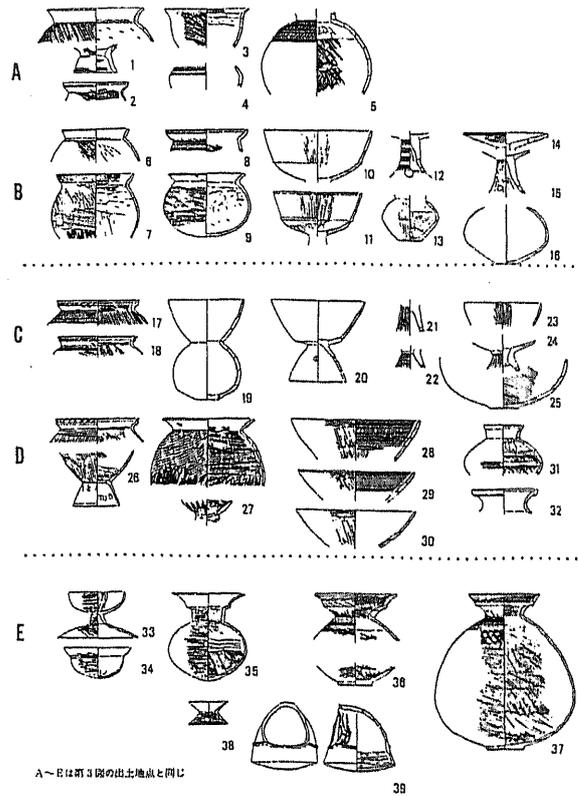
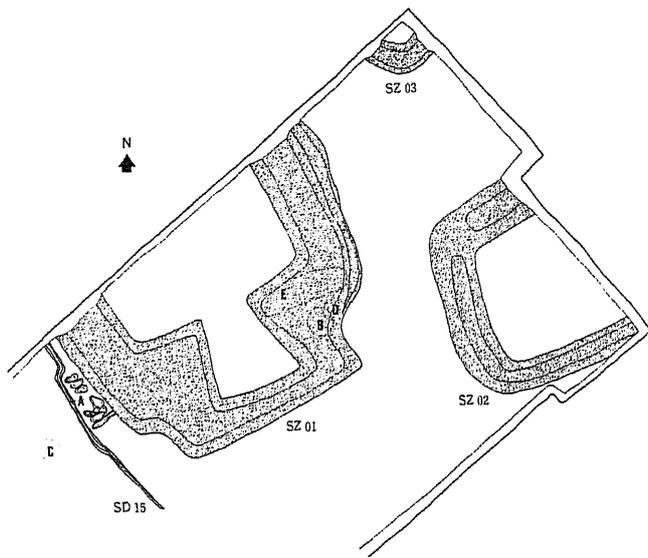


図3 廻間遺跡SZ01とSZ02関連遺構出土土器
(赤塚1999)

大和では新山古墳(137 m)を最後に大型前方後方墳の築造は終息を迎え、山城の京都府(長法寺)南原古墳が王権の中心地域で最後の前期大型前方後方墳となる。確実な調査例がない関東地方も、おそらくこの段階までに大型前方後方墳の築造は終わると考える。

このように、大型前方後方墳は前期に出現し、衰退するという限られた期間の消長を示している。また、最大規模は180 mを超えることなく、副葬品もその規模に応じた内容にとどまっているが、前期を通じて王権の中心域と周辺部の拠点に一定の規模を保って築かれていることは、その被葬者たちが前期の王権にとって重要な存在であったことを物語っている。特に、その主要な分布域が東方に偏っている点は、前期の東国進出に関わった王権中枢部と東国の有力豪族層の強い結びつきを示すものと考えられる。前方後方墳は、前期倭王権の重要課題であった東国への進出の象徴として一時代を画した首長墓の形式であったといえよう。

(2) 小規模な前方後方墳

一方、東国では、前期の古段階を中心に中・小規模の前方後方墳が存在し、小規模な方墳を伴って群在する例が少なくない。前述のように、前方部の形態が段階的に変化する点は、出現期の前方後円墳の発達段階と対応するところでもあり、定型化した前方後円墳成立の側面を担う別系統の墓として注目される。すなわち、弥生時代以来の方形周溝墓からつながる墓を母体として変化し、より大型の古墳の下部組織を構成する一定の階層性をもつ墓として位置づけられるものである。このことは、「前方後方型方形周溝墓」という用語をこれらに用いる認識とは、墓制の階層性の把握に大きな相違があるといえよう。

近年、尾張の低地で前掲BⅢ型(前方部前面に溝をめぐらす形態)と方墳群の例が調査・報告され、東海西部の小規模前方後方墳の様相も明らかになってきた。尾西市西上免古

墳、西春日井郡清洲町廻間遺跡S Z 01は前者が全長40m、後者が25m（推定復元）と規模の差はあるが、周溝形態も含めて類似したBⅢ型の墳形をもつ。西上免古墳の前方部のほうがやや発達した形態で、規模の相違を反映している。

西上免古墳は単独の検出例であるが、廻間遺跡S Z 01には小規模な方墳群を伴っている。廻間遺跡で設定された土器編年での位置づけは、西上免古墳がⅠ式4段階～Ⅱ式1段階とされ、関東地方との対応では神門5号～4号墳に並行する。廻間遺跡S Z 01はⅠ式1段階～Ⅲ式2段階にわたる長期の古墳祭祀が想定され、築造時期をⅠ式期に遡らせて報告されているが、対象となる土器はいずれも周溝外側から出土した破片資料で、周溝内側から出土した有段口縁壺・手焙り形土器・小型高坏・鉢からなる遺存の良い土器群を埋葬儀礼に伴う土器群とするのが自然であり、前期古段階の新相に位置づけられる。出現期新段階から前期古段階に集中して築かれるBⅢ型の地域内での変遷を知る資料である。

前項で触れたように、このような中・小規模の前方後方墳の墳形は、前方後円墳の発達段階に応じて出現し、一定の階層性をもって変化しない墳形であることに特性があり、単純な前方部の発達段階を全てが反映しない例が少なくない。小規模な方墳群を伴って群在し、拠点集落に近接して形成された例が多い点も、集落から隔絶し得ない被葬者群の性格をあらわしていると考えられる。

2 前期の前方後円墳

(1) 東京湾沿岸の前期古墳

前期の定型化した大型前方後円墳は、群馬県前橋天神山古墳が関東地方で最古の例である。全長 129 m の規模は、相前後して築かれたと前方後円墳・前橋天神山古墳の 130 m と拮抗するが、3 段築成で葺石をもつ墳丘形式は全く系譜を異にする。三角縁神獣鏡 2 面のほか禽獣鏡・神仙鏡の中国鏡 2 面と獣形鏡 1 面で構成される 5 面の鏡、素環頭大刀を含む刀剣類 20 本、銅鏃 30 本、鉄鏃 74 本、韃 2 点、碧玉製紡錘車 4 点などを副葬品にもつ被葬者は、倭王権との結びつきを確立した最初の毛野の首長であるといえよう。

東京湾沿岸、香取海沿岸ともこれに匹敵する前方後円墳は明らかではない。東京湾沿岸の小櫃川流域の丘陵上に 100m 級の前方後円墳が 3 基あり、前方部の低い前期型の墳形と突出した規模から、前橋天神山古墳と同時期の古墳が含まれていると考えるが、いずれも未調査で時期を判断する資料がない。東京湾を見下ろす海岸丘陵上に市原市釈迦山古墳・木更津市手古塚古墳が築かれるのは前期新段階の中ごろである。当時、東北南部には全長 114 m の会津大塚山古墳が造られており、大型前方後円墳の分布が一気に広がった時期である。

釈迦山古墳は、上海上国造の奥津城と推定される姉崎古墳群にある。全長 93 m の規模をもち、内部施設は粘土槨であることが確認されている。内部施設の直上から出土した高坏・壺類によって年代を推定する手がかりを得た。同じ河川（養老川）流域のやや奥まった所には、全長 110 m の今富塚山古墳があり、有段口縁の壺が出土しているが、埋葬施設が木炭槨であったという情報以外に内容を知る手がかりがない。規模の割に前方部が短小な墳形は釈迦山古墳とよく似ており、2 基が造られた時期はかなり近いとみられる。

手古塚古墳は、全長 60m の中規模古墳ながら仿製三角縁神獣鏡と碧玉製腕飾類が副葬されるなど、当時の政治的中心地であった大和の古墳と非常によく似た内容をもつ。また、内部施設の排水溝から出土した甕形土器が、搬入された布留式甕であることも、これを裏づけるものといえよう。但し、葺石・埴輪をもたない点はこの時期の房総の古墳の地域的特性を反映したものと考えられる。一方、前橋天神山・会津大塚山・釈迦山古墳も含めて堅穴式石室を築かず粘土槨に木棺を直葬する埋葬形式は、大和の大型前方後円墳とは異なる点である。関東地方以東は前期を通じて典型的な堅穴式石室が波及しなかった地域であり、粘土槨木棺直葬の形式は、中期の長大な木棺直葬形式へ発展する。

以上のように、東京湾沿岸の前期前方後円墳は、調査された古墳の変遷からは、前方後円墳の展開を挟んだとしても、なお神門古墳群との飛躍が大きく、東京湾沿岸の出現期から前期への前方後円墳の理解には、なお未解決な問題が多い。

次に、前期古段階の指標のひとつである「舶載」三角縁神獣鏡が一面出土している香取海沿岸の前期前方後円墳の在り方に注目してみたい。

(2) 香取海南岸の前期古墳

香取海南部水域の前期古墳について検討するにあたり、西部の印旛・手賀沼水系を除く南岸の古墳を対象とするが、手賀沼に臨む我孫子市水神山古墳は南岸の前期前方後円墳に

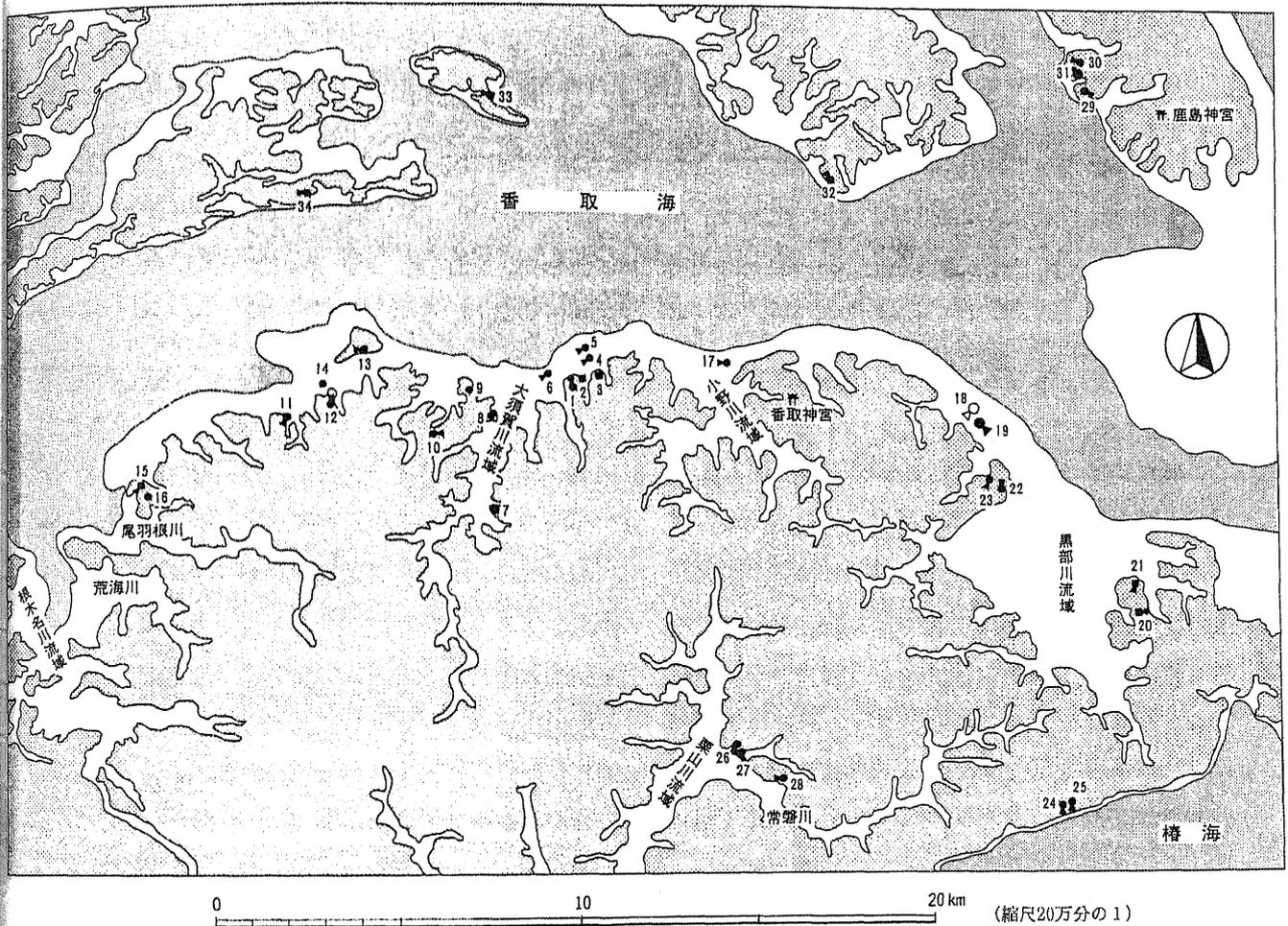


図4 香取海南岸域の主要古墳 (図1は、国土地理院発行20万分の1地勢図を緯度・経度等分に画像処理し、衛星写真から復元した香取海の範囲(文献1)をもとに作成した。)

表2 香取海南岸域の主要古墳

番	古墳名	墳形	規模	時期	特記事項	番	古墳名	墳形	規模	時期	特記事項
1	大戸天神台	前方後円	62	前期		19	豊浦(三之分目)大塚山	前方後円	124	中期	埴輪・長持系石棺
2	大戸宮作	方	19	中期	石枕・立花	20	阿玉台A007号	前方後方	25.5	前期	土師器
3	山之辺手ひろがり3号	方	20	中期	石枕・立花	21	布野台3号	前方後円	28	中期	横刃板鋌留短甲
4	森戸権現前	前方後円	-	(後期)	埴輪	22	城山1号	前方後円	68	後期	埴輪・飾大刀・天冠 三角縁三神五獣鏡
5	森戸大法寺	前方後円	(60)	後期	埴輪	23	城山5号	前方後円	51	後期	埴輪
6	禅昌寺山	前方後円	(60)	後期	石枕・埴輪	24	瀧台	前方後円	60.8	前期	
7	堀籠浅間2号	方	10.6	前期	底部穿孔壺	25	御前鬼塚	前方後円	105	後期	
8	鶴崎天神台	円	29	中期	石製模造品	26	柏熊杓子塚	前方後円	82	前期	壺形埴輪
9	堀之内(西部田)1号	円	18	中期	石枕・立花	27	柏熊1号	前方後円	80	前期	
10	舟塚原4号	前方後円	45	後期	埴輪・石製模造品	28	北条塚	前方後円	74	後期	埴輪
11	大日山1号	前方後円	54	前期	木炭塚・短冊形鉄斧	29	宮中野お伊勢山	前方後円	96	前期	
12	小松古墳(向田4号)	前方後円	32	中期	石枕・ガラス玉	30	宮中野夫婦塚	前方後円	109	中期	
13	西ノ城1号	前方後円	-	中期	内行花文鏡	31	宮中野大塚	造出付円	92	後期	箱式石棺
14	馬場古墳	円	-	中期	石枕・石製模造品	32	牛堀浅間塚	前方後円	84	前期	壺・(鏡)
15	滑川中台4号	前方後円	70	-		33	原1号	前方後方	29.5	前期	底部穿孔壺
16	猫作栗山16号	円	16.2	中期	石枕3・立花	34	幸田古墳	前方後円	38	(前期)	
17	浅間神社	前方後円	70	後期	埴輪						
18	豊浦(三之分目)1号	前方後円	(70)	(中期)							

加えておきたい⁽¹⁾。水神山古墳を除くと、下総町大日山1号墳を唯一の調査例として南岸には前期の前方後円墳に関する調査資料がなかったが、佐原市大戸天神台古墳の測量調査から得られた墳丘形態の分析によって、これが全長62mの前期古墳であることがほぼ明らかになった。大須賀川流域では全長60m級の前方後円墳が後期以降継続して築かれており、この規模の前方後円墳が南岸域西部から中央部にかけての盟主墳であると考えられる。大戸天神台古墳は、弓状に張り出した香取海南岸中央部に位置し、香取海南部水域のほぼ中心部に立地している(図4)。この南岸中央部は、西から順に根木名川(成田市・下総町境)、大須賀川(佐原市中央部)、小野川(佐原市東部)、黒部川(小見川町中央部)による開析谷が刻まれ、それぞれの流域を単位として台地上と縁辺の微高地に連続と古墳群が分布している。これらは、地形によって大きく3つに分けて見ることが可能であり、まず西部として根木名川河口右岸とそれに続く香取海縁辺、大須賀川と小野川流域の中央部、黒部川低地⁽²⁾を囲む東部に分けることができる。一方、この地域は常総(常陸南部から下総北部)に特徴的な滑石製の石枕が最も多く出土している地域でもある。

西部から主要な古墳を概観すると、大日山1号墳(図4-11、以下番号は図4に対応する)が前期にさかのぼる主墳とみられ、舟形あるいは割竹形の木炭塚を内部施設としている。中期では小松古墳(12)・猫作栗山16号墳(16)など石枕をもつ古墳が判明しており、地元で伝世されたものを含めると、全国で最も石枕の集中する地点である。

香取海南岸を3地域に分けて前期古墳を見ると、西部の大日山1号墳が全長54mで、ほぼ同規模である。東部の黒部川流域ではこれに匹敵する前方後円墳の例はなく、前期では全長25.5mの前方後方墳・阿玉台A007号が唯一の調査例である。豊浦大塚山古墳以後、城山古墳群に至るまでこの流域に香取海南岸の中心的な古墳が営まれていることをみると、ここに前期の有力首長墓が存在しないのは不自然である。しかし、この流域では前掲の城山1号墳から、京都府椿井大塚山古墳出土鏡と同型の三角縁三神五獣鏡が出土していることを重視する必要がある。城山1号墳は六世紀中葉以降の後期の前方後円墳であるため、この三角縁神獣鏡をめぐる長期伝世説・畿内政権内の所有者からの後期下賜説・広域首長間での伝世・授受説など様々な解釈が示されている。椿井大塚山古墳と分有関係をもつことにこの鏡の意義があるとすれば、椿井大塚山古墳と同時代の首長に配布されたとすべきであろう。しかも、それが後期の古墳から出土したことは、黒部川流域に前期の大型古墳が存在しないことを加味すると、香取海南岸の首長間で代々伝世・授受されたと解釈するのが妥当であろう。大戸天神台の被葬者が保有した時期があった可能性も考えられるのである。

一方、干潟町瀧台古墳の測量報告では、太平洋に望む椿海から栗山川流域と黒部川流域を含めた広域地域圏を想定し、香取海への玄関口として捉えた。これによって、瀧台古墳を同一圏内に築かれた前期の主要首長墓のひとつに位置づける見解を示した(白井1997)。瀧台古墳は、墳丘全長60.8mで大戸天神台古墳と拮抗する規模の前方後円墳である。また、栗山川流域では墳丘全長80m級の柏熊1号墳・杓子塚古墳(8号墳)が前期の首長墓であり、この3基の被葬者の中から城山1号鏡の入手者を想定することも可能であろう。

香取河北岸の前期古墳を見ると、対岸の茨城県桜川村から鹿島町にかかる地域に前期の前方後円(後方)墳が点在する。唯一の調査例として原1号墳(33)があり、底部穿孔壺・鉄剣・槍・鉄製農工具・ガラス玉が出土している。また、西に隣接する台地上には幸田



図5 城山1号墳出土三角縁三神五獣鏡

古墳(34)があり、前方部が後円部より3m低い墳形によって前期にさかのぼる可能性が指摘されている。

小野川河口から北東4km、香取海が最も狭くなる地点の対岸には、墳丘全長84mの前方後円墳・牛堀町浅間塚古墳(32)がある。墳丘から壺の破片が出土しており、前方部が低く(後円部との比高3m)広がらない墳形の前期大型前方後円墳である。かつて銅鏡が出土したと伝えられるが、現在は所在不明である。後円部径に対する前方部長の比率は、57:43で比較的大戸天神台古墳に近い。北岸域東端には、墳丘全長96mの鹿島町宮中野お伊勢山古墳(29)がある。細長く伸びる低い前方部(後円部との比高4m)をもつことから前期古墳と推定される。後円部径に対する前方部長の比率は、55:45で大戸天神台古墳とほぼ同率である。これら北岸の前期古墳は、60m級の大戸天神台古墳より一廻り規模が大きいにもかかわらず、同様の墳形をもつ点で注目される。香取海に張り出した南岸の中央部に立地する大戸天神台古墳と対岸の前期古墳との密接な関連がうかがえよう。

また、手賀沼沿岸の水神山古墳(墳丘全長69m)も後円部径と前方部長が拮抗する墳形をもつ。調査によって明らかになった墳形は、前方部の幅が広く発達した形態であることから必ずしも同列には扱えないが、南岸の前期古墳として検討に加える必要がある。

椿海・栗山川低地・根木名川～黒部川流域を含めた香取海の南岸地域圏は、古墳時代前期の段階には60mあるいは80m級の首長墓を中心とした2つのまとまりを形成し、これらを統括するような規模の首長墓は見られない。この地域圏がまとまりを深めるのは、全長124mという南岸最大規模の豊浦大塚山古墳が低地に築かれた時を契機とする。この時期には南部水域の対岸にこれを上回る規模の古墳はなく、次代の香取海を代表する石岡市舟塚山古墳に匹敵する存在となる。豊浦大塚山古墳の造営こそが、香取海沿岸全域を取り込んだ広域首長墓の出現という一大画期を反映しているものと思われる。

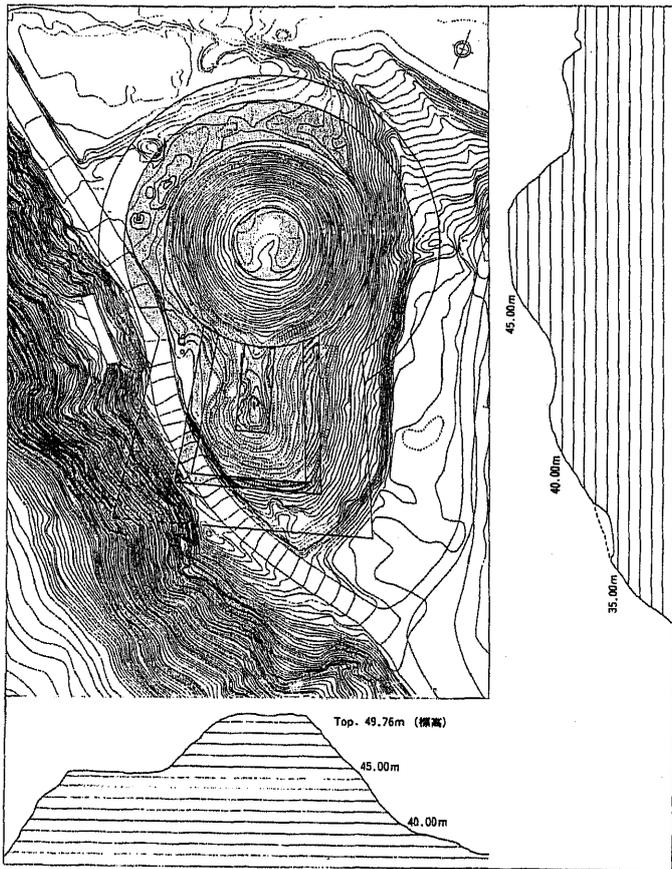


図 6 佐原市大戸天神台古墳測量図

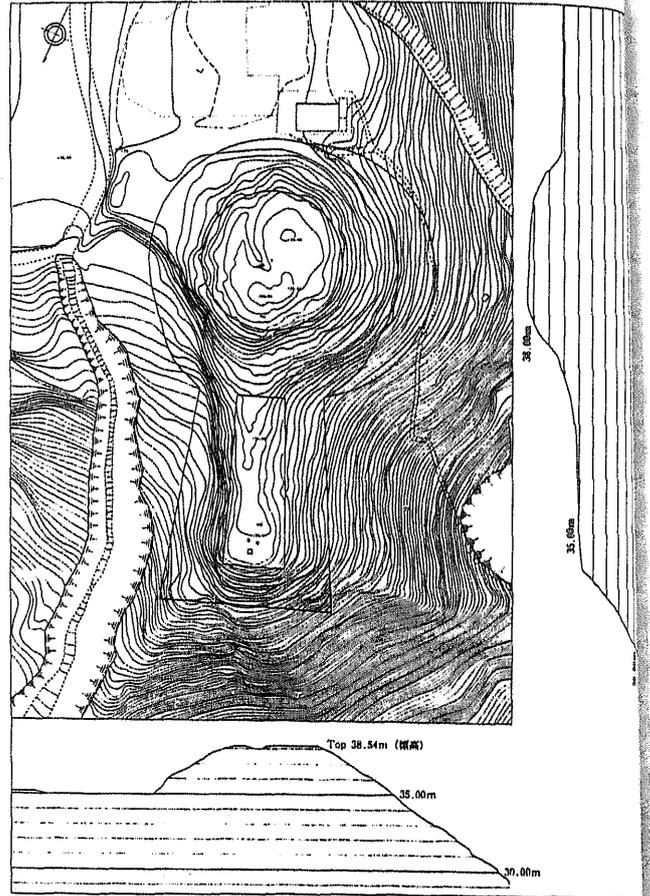


図 7 干潟町麴台古墳測量図 (1:2000)

註

- (1) 水神山古墳の時期については、前方部墳丘から出土した壺形土器によって中期に位置づける見解が報告され定着しているが、壺形土器は口縁部を欠くため確定はできないものの、胴部上半をハケ調整の後磨いて仕上げ、さらに内面もナデ・磨き仕上げし、内外面を赤塗りした製作技法によって前期に位置づけられると考える。また、割竹形木棺から出土したガラス管玉・ガラス小玉もきわめて丁寧な造りの製品であり、これらの遺物の再実測・再検討によって前期古墳と判断した。
- (2) 香取海の海岸線復元については、黒部川流域の低地を内海と一連の入り江に復元する案が示されている（『香取海—その歴史と文化』千葉県立中央博物館 1992 ほか）が、低地の古墳が立地する砂堤との比高が1 m前後（砂堤 3.8 ~ 4.3 m：低地中央部 3.0 m）にすぎないため、季節的に冠水する湿地帯と想定した。地質調査による確定を望みたい。

3 前期の方墳群

— 草刈遺跡の方墳群をめぐって —

(1) 方墳群の構成と群形成

市原市草刈遺跡の方墳群⁽¹⁾は、1979年から1983年にわたって漸次調査され、既に刊行された報告書⁽²⁾によってその内容が明らかになってきた。台地の西側部分については、整理中であるため全容を知るには至らないが、現在までのデータをもとに若干の私見を加えて2、3の点に注目してみたい。

ここで扱う方墳群は、40基から成り、平面的な分布から台地の中央部に環状にめぐる群(図8 A・B群)と台地南側の緩斜面に及ぶ群(同C群)に大きく分けることができる。環状の群は、21基が一定の方向性をもって配列するA群と7基が不規則に分布するB群に分けられる。A群は前方後方墳1基を囲むように群在し、周溝の一边を共有するものも見られる。方墳の形態は、周溝が全周するものが大半を占め、周溝の一隅がとぎれるものが若干含まれる。二隅が途切れるたり、コの字状の周溝をもつ例は、後世の削平や土砂の流出に抛るものと考えられる。前方部の発達した前方後方墳の形態⁽³⁾も含めて、佐倉市飯郷作遺跡⁽⁴⁾の例に極めて近い群構成を示している。

環状の中央空間の解釈には、いくつかの推察が可能であるが、前方後方墳の前方部と、隣接する方墳A3の前面の通路跡が中央空間に面していること、さらにこの中央空間に向って2基、あるいは3基ずつ並ぶ配列が見られることに注目してみたい。この配列は、A群で最も整っていることから、第1図のように北側の谷から中央空間に上ってくる墓道を想定した。また、A群の配列を出土した土器から検討すると、中央から外側へ新しく造られた大きな流れが窺えることも配列の内側を結ぶ道を考える上での傍証となろう。

B群では、この墓道に沿うような配列は見られず、むしろC群に近い分布を示すが、C群との間には明らかな空間がある。この平面分布から群形成を考えると、まずA群の形成が始まり、B群を造る過程で新たに分離してC群が営まれたことが想定できる。

出土した土器群は、ほぼ前期古段階の範囲に位置づけられるが、大きく3段階に分かれており、これによって上記に想定した全体の群構成を3期に分けることが可能である(図9)。

まず、I期には、A群の墓道幹線部に面したA1・A2・A3が造られ、続いてその背後や幹線部の奥まった所にA4・A5・A6・A7・A8・A13が、B群にB1・B2・B3が造られる。この段階の途中で南側へ分れて占地したC群の造墓が始まっている。最も墳丘規模の大きいA10もこの段階に位置づけられる⁽⁵⁾ことから、造墓の盛期をII期に求めることが可能である。次のIII期には、A群の外縁部とB・C群へ大勢が移り、主体的な造墓活動がB・C群へ移行した可能性が強い。B群とC群の間に、南西の谷から上ってくる墓道が存在したことも考えられよう。

群形成の契機となったのは、特別な形態として他を凌駕する前方後方墳A1で、最も古相の土器群を出土している。これと同世代と考えられるA2・A3はほぼ同規模で、

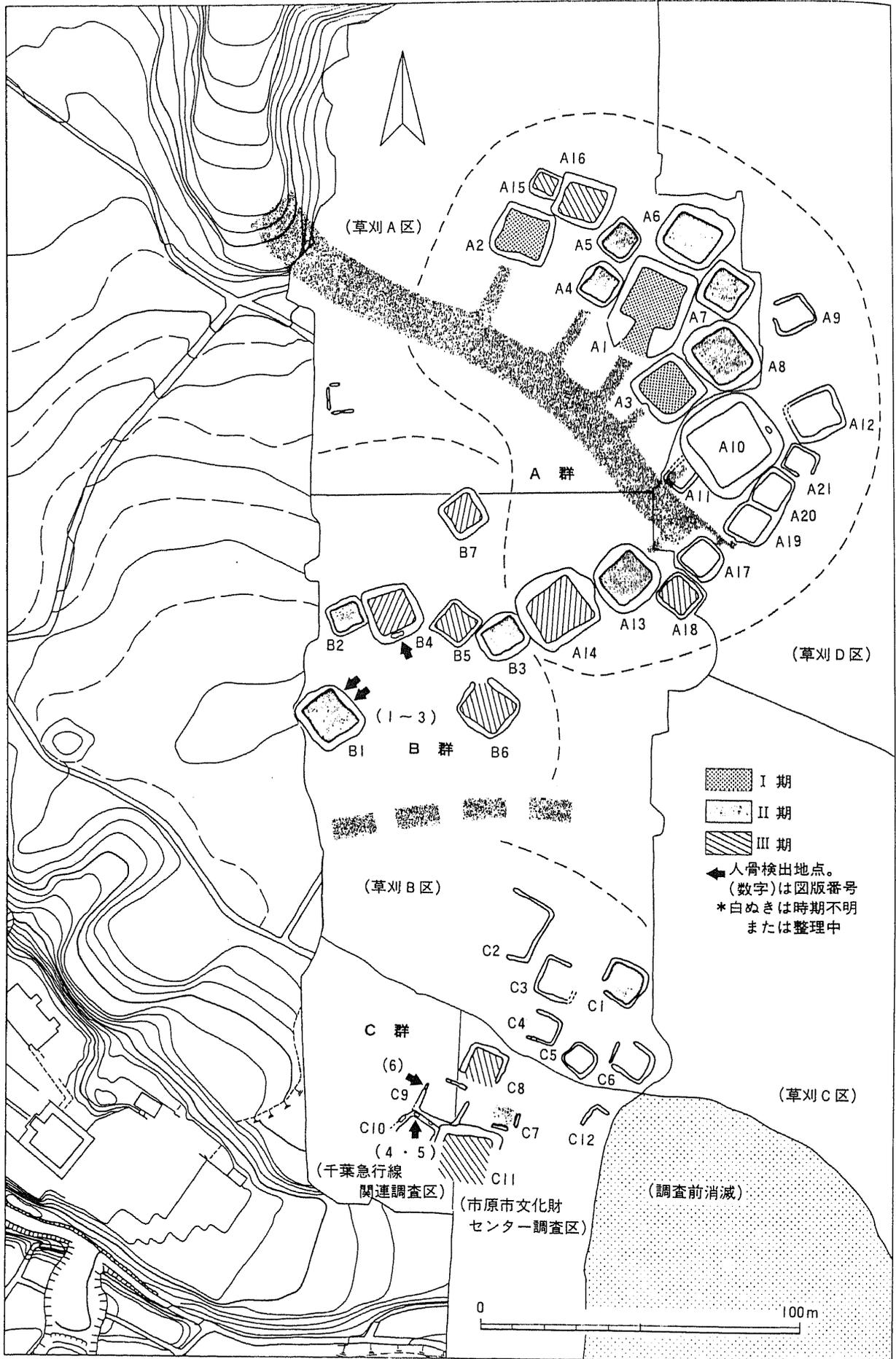


図8 草刈遺跡の方墳群配置図 (1:2000)

方丘部の面積では A1 と大差はない。続いて A 群では、2～3 基ずつのグループが方向性をもってⅡ～Ⅲ期にわたって造墓を行っているが、少なくとも 2 世代が短期間に連続して造墓を行ったことを物語り、墓道の幹線からは 8 本の枝すじに分かれた分布が見られる。この 2 世代連続する造墓の流れの中で、Ⅱ期には A10、Ⅲ期には A14 が規模・土器の量共に他を凌いで群の中心的存在となるが、幹線に面した枝道は 8 本で終息し、A 群の主体的な造墓を終えたものと見られる。

2 世代連続する造墓は、一定の方向性を失った B 群にも見られるが、Ⅲ期にはくずれ、新たに単独の占地をするものが目立つ。

C 群は、遺物の遺存が悪いためか時期不明のものが多く、群形成の内容ははっきりしないが、一番南に位置する C11 が最も新相の土器群を出土していることに着目しておきたい。

(2) 埋葬形態について

前掲(第 1 章第 2 節)のように、草刈遺跡の方墳群で注目されるもう一点の特徴は、縄文時代の貝塚混貝土層中に掘り込まれた周溝内に埋葬された人骨が、かなり良好な状態で遺存していることである。このような混貝土層中の埋葬人骨の検出例は、松戸市河原塚古墳⁽⁶⁾に、古墳時代中期の墳頂部木棺直葬例もあり(図10-7)、貝塚が全国で最も多い房総ならではの偶然性がもたらしたものといえよう。この極めて房総的な特性によって、周溝内に埋葬された人骨がいくつかの歴史的事実を伝えてくれた。

図10-1～3は、B1の周溝内の人骨出土状態である。この周溝からは、写真の推定身長160cmの成人女性の他に、成人の大腿骨、若年の歯芽8歳児の歯芽が検出され、少なくとも4体が埋葬されていることが判明している。すべて北側の周溝から発見されているが、中央の周溝底が深く掘られているものの、明確な掘り込みや土壌はなく、混貝土層中になれば、単なる周溝のみの発掘で終わったであろう。しかし、最も遺存の良い写真の女性は、両手首に計3個(左に2個、右に1個)の管玉を装着して全身を現わした。また、周溝中央の凹部で検出された3体と異なり、周溝底に約15cmのロームブロックをつき固めた上に埋葬されている(図10-3)。さらに、土器の出土状況を見ると、この女性の頭と足の部分から器台が各1個ずつ出土した他、中央の人骨出土地点で埴形壺、甕、高杯が出土している。

この発掘資料が、周溝内の埋葬形態、被葬者の性格、副葬品の状況を知る重要な手掛りになることは言うまでもないが、草刈の周溝内埋葬人骨は B1 の他に、同じ B 群の B4 で身長132cmの性別不明のもの1体、C 群 C9 と C10⁽⁷⁾に2体ずつの計4例がある(図10-5～8)。この4例に残る成人骨は、伸展葬が基本である。幼児については1例のみであるが、C9内の壺棺⁽⁸⁾があり、隣りの成人骨が男性と推測されることから2体の関係が注目される。検出状況は、あたかも父親が壺棺を抱くようでもあり、掘りかたの状況からも同時に葬られたようである。周溝内埋葬者の構成、あるいは性格についてこれだけの資料で語るのは難しいが、B 群人骨の形質学的分析では、明らかに成人男子と判明したものがなく、成人女性、若年、小児と判定された点は注目さ

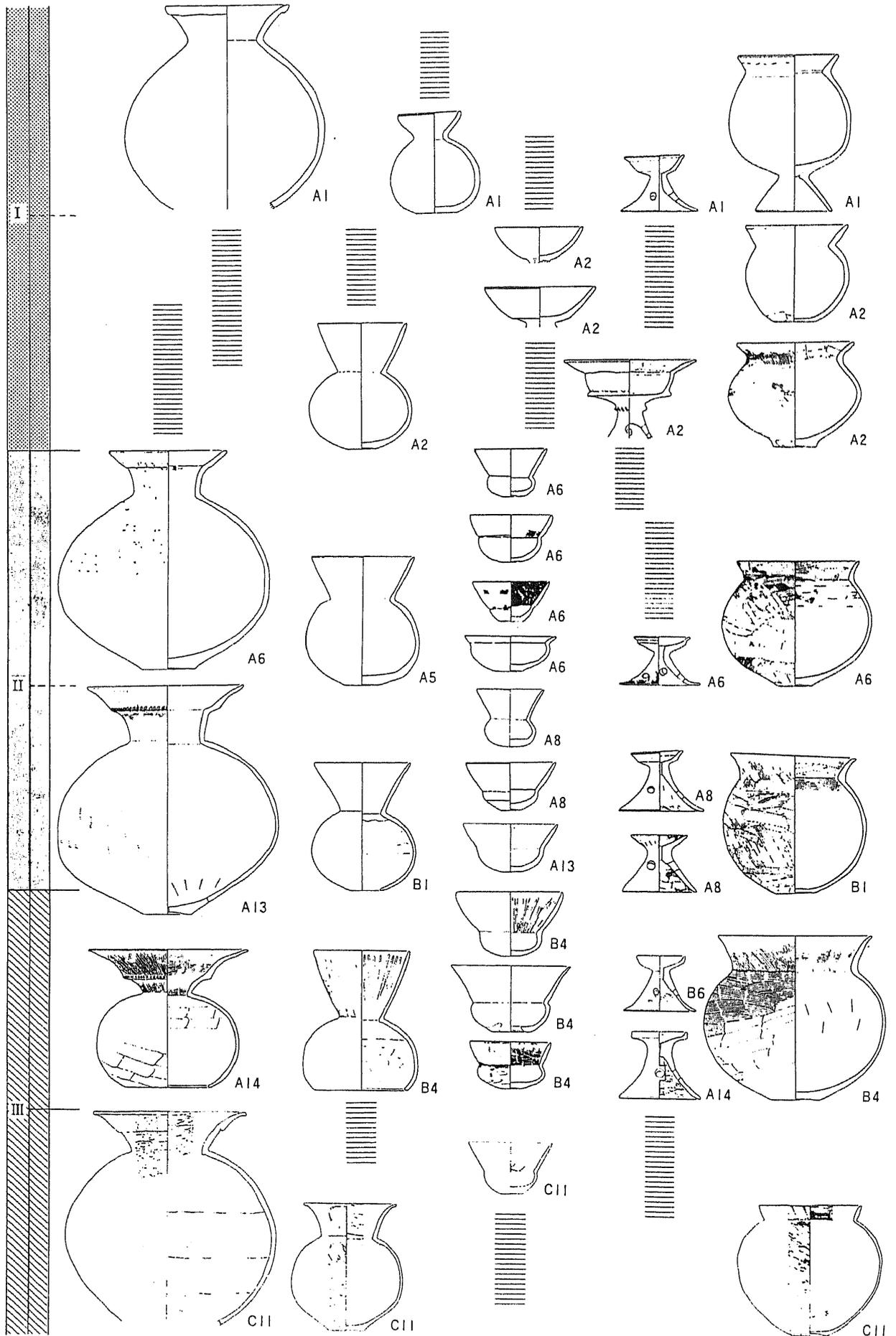


图9 草刈遺跡方墳群出土土器

れる。

これらの方墳の墳丘中央部の内部施設は、後世の畑作による墳丘の削平によって既に消滅していると考えられるため、墳丘中央部の内部施設を中心的な埋葬施設とする観点から、これらの被葬者を周溝内被葬者と位置づけることにしたい。古墳時代の被葬者群は、墳丘中央部の第一義的な被葬者を中心に、墳丘一周溝一周溝外の3群に分けられる。周溝内の被葬者群は、玉類・鉄鏃・刀子などの副葬品をもつことから、周溝外の土壙等に葬られた被葬者とは異なり、墳丘中央部の被葬者に直接関連する被葬者群であるといえよう。特に草刈遺跡例では、女子と子供を主体としており、家族墓的色彩が色濃い。

周溝内埋葬には、上記のような副葬品が見られるが、副葬品は一般に寡少である。古墳時代の出現期・前期では玉類を副葬した例が少なくない。草刈遺跡では、他に草刈六之台遺跡で前期の円墳周溝内土壙から管玉4個、滑石製小型勾玉9個が出土している。これは、首飾りになる可能性があり、B1の手玉の装着例は、ごく少数の玉類の出土を解釈する上で極めて重要である。数個のガラス小玉や土製小玉が周溝内土壙から出土することもあり、これらもB1の管玉同様手玉として用られた例といえよう。尚、管玉3個を手玉として副葬した例には、市原市小田部古墳がある。

(3) 方墳群の性格

草刈遺跡の前期方墳群の構成では、小規模な前方後方墳の周囲に連続して営まれる2～3基のグループが、方向性をもって配列する点に着目して群の中央空間に墓道を想定したが、この群構成のあり方は、神奈川県横浜市歳勝土遺跡の弥生時代中期後半の方形周溝墓群の配置や、三重県松阪市草山遺跡等の周溝を接して群在する古墳時代出現期の方墳群とも異なる。しかし、主墳と小墳群とが依然として一体となって同一墓域にある点では共通の要素をもっているといえよう⁽⁹⁾。この点で草刈の例は、集団の墓とは全く別の所に築かれた首長層の大型古墳に対し、より在地性の強い下位の小首長とその側近の人々の墓として捉えられる。草刈の方墳群が造られた段階には、既に全国各地に大型前方後方墳が出現し、こうした小規模古墳との格差は一層大きくなっているが、その下にあつて地域内で別の変遷をたどっていく小規模古墳群の構造に注目したい。

一方、古墳時代出現期・前期の小規模方墳は、それぞれ規模に応じた墳丘をもっていたが、後世の削平を受けやすいため、中央部の内部施設が検出されなかったものが大半を占めている。そこで周溝内、あるいは周辺部の埋葬施設の調査は、墳丘を失った古墳の調査成果として重要な役割りを果たすといえよう。草刈の埋葬人骨は、周溝内に明確な土壙がない場合にも、掘り込みや土器群、玉類などの出土によって埋葬施設の存在を想定する必要がある、たとえ掘り込みや遺物が出なくても、周溝が埋葬空間として機能したことを示してたとえよう。彼等は、1,600年に及ぶ眠りから醒めて多くを語りかけたが、周溝が単なる区画ではなく、墓の一構成要素として強く認識されていることを改めて実証することになった。

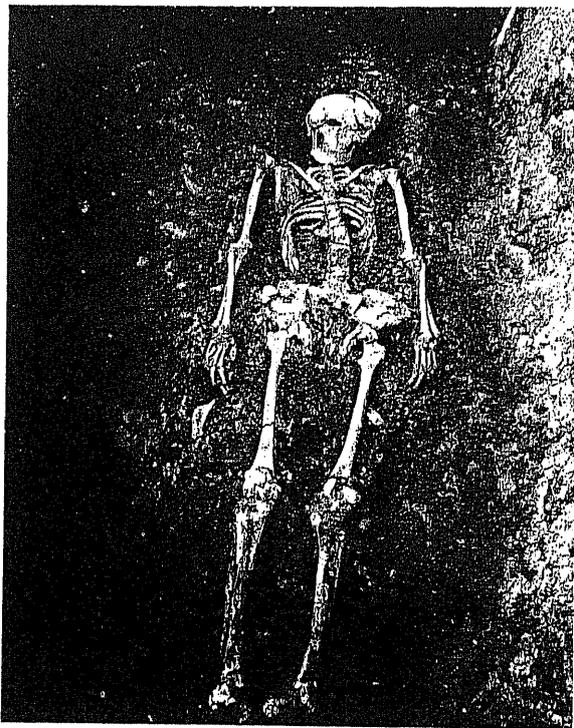


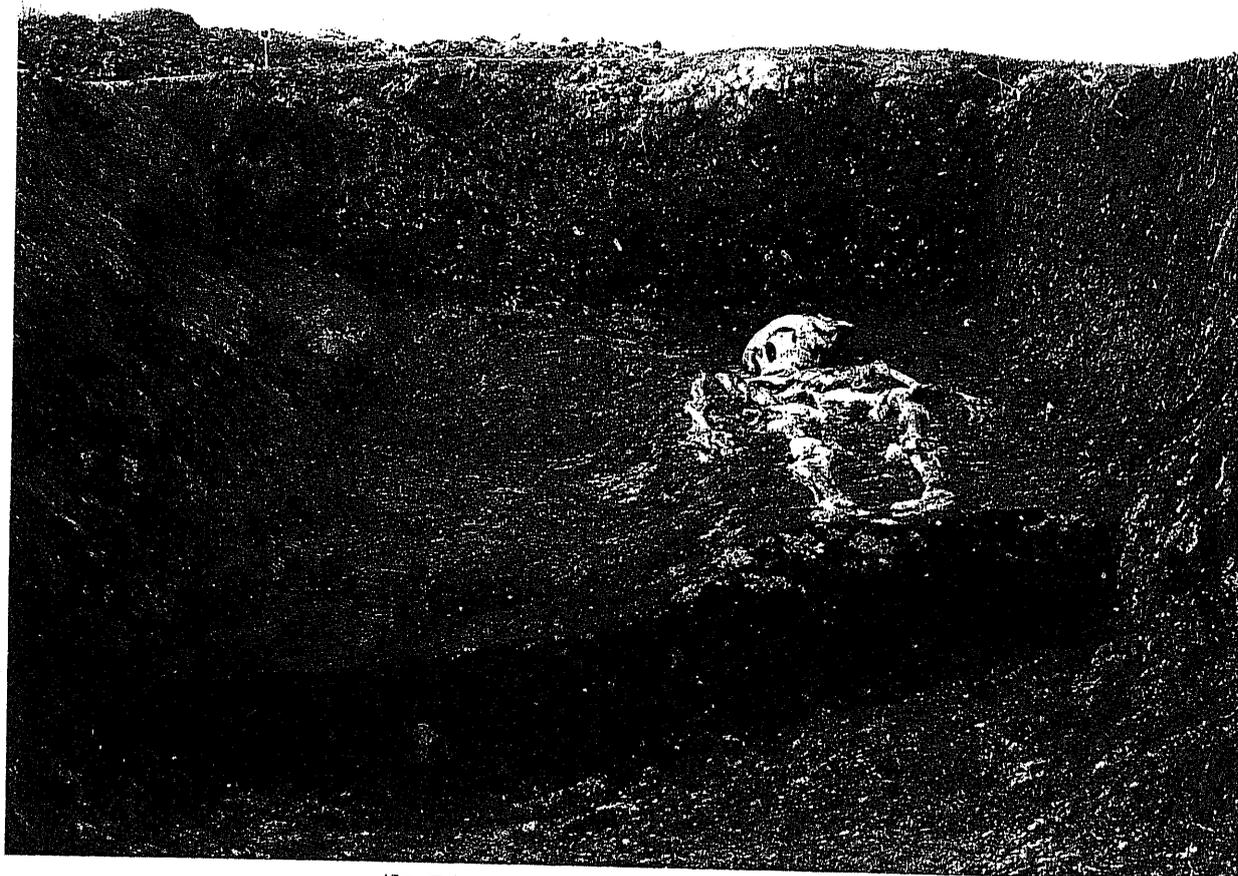
図 10 B 群 B 1 周溝内埋葬人骨

1 人骨全景 右壁は周溝外壁

2 手五（管五）装着状況

3 人骨出土層位 後方は混貝土層

2



（『千原台ニュータウン』IIIより一部改変して掲載）

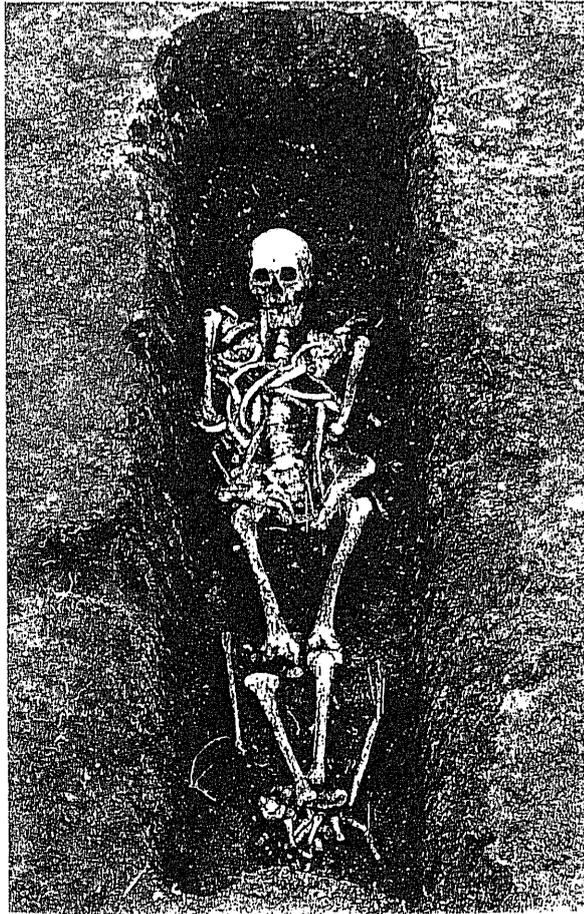
3



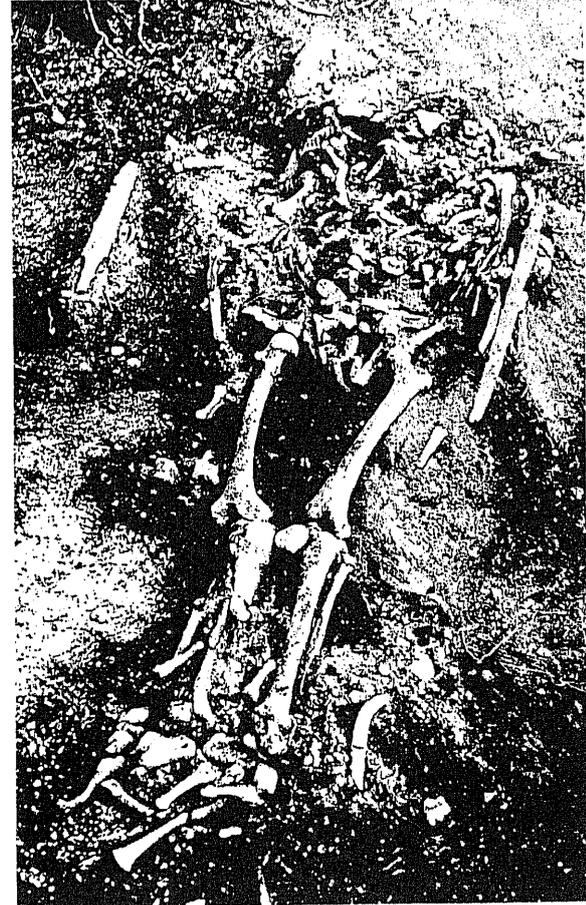
4



5



6



7

4・5. 草刈貝塚千葉急行線予定地内 C10周溝内土壇埋葬人骨 6. 同 C9周溝内土壇埋葬人骨
7. 松戸河原塚古墳墳頂主休部埋葬人骨

このように、小規模古墳群の埋葬形態には、弥生時代の方形周溝墓の中央施設と周溝内土壌との関係に近い様相が見られ、群構成の特徴と共に弥生時代以来の伝統と新たな古墳時代の動向の両面から検討していく必要がある。

註

(1) 古墳時代出現期・前期の墳丘を失った小規模な方墳を「方形周溝墓」と呼称する立場もあるが、「方形周溝墓」とは、弥生時代社会に限定して使うべき用語で、弥生時代の集団の墓地の中から分離して一定地域内の集団の上に立つ首長墓が現われた古墳時代には、「方墳」の用語を用いるという立場に従っている。

古墳の時期区分についても諸説があるが、出現期・前期・中期・後期・終末期の五期区分法に立脚している。

古墳時代出現期の解釈は、市原市神門5・4号墳を出現期新段階に位置づけ、出土土器が畿内第5様式Ⅱ式に並行するとされた田中新史氏の研究成果に基づいている。従って古墳時代前期は、畿内庄内段階～布留段階を通した期間にとらえ、ここで扱う方墳群は、前期の古段階に位置づけられるものと考えている。尚、この段階には、石川県七尾市国分尼塚古墳、長野県松本市弘法山古墳、栃木県小川町駒形大塚古墳等の大型前方後方墳が既に出現している。

- (2) ①小久貫隆史ほか『千原台ニュータウン』1 (財) 千葉県文化財センター 1980
②三森俊彦編『千原台ニュータウン』Ⅱ一草刈遺跡 A 区・鶴牧古墳群・人形塚一
同上 1983
③高橋康男『草刈遺跡』(財) 市原市文化財センター 1985
④高田博ほか『千原台ニュータウン』Ⅲ一草刈遺跡 (B 区) 一 (財) 千葉県文化財
センター 1986
- (3) 墳丘長16.0mで、前方部長が6.0mと前方部がかなり発達した形態で、後方部長との比は5:3に達している。後世の削平により墳丘だけでなく、周辺部も削られているようであり、当初は前方部前面に溝が存続した可能性もある。なお、第1図の墳形は、切り合う住居跡の壁のラインを生かして、西側前方部の形を復元している。
- (4) 沼沢豊・森尚登・深沢克友『佐倉市飯合作遺跡』(財) 千葉県文化財センター 1978
尚、「飯合作」の名称は、字名の検討により「飯郷作」に調査担当者が訂正している。
- (5) 草刈 D 区は、今年度整理を開始したばかりであるが、A10 については出土土器を実見して判断した。
- (6) 小出義治他『松戸河原塚古墳』松戸市誌編纂委員会 1956
- (7) 『千葉県文化財センター年報』No. 8 (財) 千葉県文化財センター 1982
小林清隆ほか『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 草刈貝塚』 同上 1990
- (8) A11 の周溝内からも一對の合口壺棺が出土しているとの御教示を、調査担当者の一人である小高春雄氏から受けたが、まだ未確認である。
- (9) 都出比呂志「墓地の階層性」『岩波講座 日本考古学4』一集落と祭祀一 岩波書店 1986

参考文献

(著者五十音順)

- 1 赤塚次郎ほか『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990
- 2 赤塚次郎ほか『西上免遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1997
- 3 糸川道行『沼南町北ノ作1・2号墳発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター 1993
- 4 上野純司・栗田則久・白井久美子・萩原恭一『房総考古学ライブラリー5』古墳時代(1)(財)千葉県文化財センター 1990
- 5 岡村秀典『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館 1999
- 6 小久貫隆史『市原市釈迦山古墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会 1996
- 7 近藤義郎編『前方後円墳集成』—東北・関東編—山川出版社 1994
- 8 斎藤忠編『弘法山古墳』松本市教育委員会 1978
- 9 「相模の3・4世紀 方形周溝墓をめぐって」『東海大学校地内遺跡調査報告』3 東海大学校地内遺跡調査団 1992
- 10 坂本行広編『猫作・栗山16号墳』(財)香取郡市文化財センター 1995
- 11 白石太一郎『古墳とヤマト政権—古代国家はいかに形成されたか—』文芸春秋 1999
- 12 白井久美子「房総の出現期・前期古墳の様相について」『第17回古代史サマーセミナー—発表資料』古代史サマーセミナー実行委員会 1989(181頁)
- 13 白井久美子「香取郡干潟町 瀧台古墳測量調査報告」『千葉県史研究』第5号 千葉県 1997(83-92頁)
- 14 第3回東海考古学フォーラム『前方後方墳を考える』フォーラム三重県実行委員会 1995
- 15 第36回埋蔵文化財研究集会『倭人と鏡』その2—3・4世紀の鏡と墳墓—埋蔵文化財研究会 1994
- 16 第38回埋蔵文化財研究集会『前方後円墳の再検討』埋蔵文化財研究会 1995
- 17 高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』9 岡山県立博物館 1988(1-32頁)
- 18 田中新史「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号 早稲田大学考古学会 1984(1-53頁)
- 19 田中新史「東国の古墳時代出現期とその前後」『東アジアの古代文化』46 大和書房 1986(84-94頁)
- 20 千葉県史料研究財団編「古代の房総三国」『千葉県の歴史 資料編 考古3』千葉県 1998
- 21 千葉県教育庁文化課編『千葉県重所在古墳群詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会 1990
- 22 東海古墳文化研究会編「東海の前方向後方墳—論集 弥生から古墳へ—」『古代』第86号 早稲田大学考古学会 1988(123-214頁)
- 23 都出比呂志『古代国家はこうして生まれた』角川書店 1998
- 24 豊岡卓之『古墳のための年代学』—近畿の古式土師器と初期埴輪—奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1999
- 25 永沼律朗『市原市今富塚山古墳確認調査報告書』千葉県教育委員会 1992

- 26 日本考古学協会新潟大会実行委員会『東日本における古墳出現過程の再検討』 日本
考古学協会 1993
- 27 原田享二ほか『佐原市内遺跡群発掘調査概報』Ⅱ 佐原市教育委員会 1988
- 28 平野 功『三之分目大塚山古墳発掘調査報告書』 小見川町教育委員会 1987

第2節 土器の搬入と模倣

1 市原市長平台遺跡のパレス式装飾壺をめぐって

(1) パレス式装飾壺

長平台遺跡1号墳出土のパレス式装飾壺(以下パレス壺という)は、口縁部に明瞭な凹線と棒状浮文があり、頸部以下の文様は、非常に細い櫛歯状工具による押圧山形文と不適続の横線文によって構成されている(図1-2)。伴出した手焙り形土器(図1-4)等にも細い櫛歯状工具による波状文が描かれており、いずれも在来の装飾土器からは追えない異系統の飾られた土器である。

このパレス壺は1号墳(方墳)の周溝北東コーナーから出土したもので、乳白色に近い灰白色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれている。文様帯・頸部内面は朱色に近い明るい赤色に塗彩されている。胎土・文様構成共に在地のものからは追えないパレス壺で、おそらく招来品であると思われる。肉眼観察による対照では、伊勢湾周辺にこれに近い胎土で作られたパレス壺が見られ、文様構成も類似する。しかし、この例のように細かい櫛描文や細かいハケを用いたものは見られない。また、胎土は、伊勢湾周辺でも地域・器種によってかなり相違することから、その製作地については、東海地方西部の何処かという推測に留まる。

1号墳に接して検出された2号墳の周溝北東コーナーからは、ほぼ完形のパレス壺(図1-1)が出土しているが⁽¹⁾、やはり細い櫛歯状工具による押圧文(山形文・列点文)と横線文による構成をもつ。胎土は、明るい赤褐色を呈し、在地に求められる。櫛描の文様構成は、典型的なパレススタイルの壺をかなり忠実に踏襲したものであるが、1号墳出土例に見られる口縁部の凹線文は、横線文風の横方向のハケになっており、口縁部と頸部の内面を画する稜線も見られない。また、頸部の凸帯の形状も、断面正三角形に近く、東海地方西部には見られない。むしろ在地の弥生時代後期以来の装飾壺に見られるものである。一部剥落しているが、肩部に3個1組(おそらく3単位)の円形浮文が貼付されている。1号墳のパレス壺に比べると、口縁部の形態や文様にも後出する要素が伺える。この他にも櫛歯状工具による横線文と波状文を施した壺が出土しており、1号墳と同じ系譜の文様をもつ土器群として捉えられる。この2例は、周溝の一辺が重なる方墳からの出土資料でその前後関係が問題となるが、伴出した土器も含めて1号墳が先行すると見られる。

長平台遺跡では、表土除去作業の段階から、櫛描の山形文や横線文のある土器片が採集されており、その胎土は、在地に見られない灰白色や淡い灰褐色であることから、東海地方西部の影響を強く受けた土器群の存在が期待されていた。また、周辺の集落からも櫛描の列点文、山形文を施した壺の破片が出土している。

国分寺台では、他の地点でも古墳時代前期の古墳・集落から東海系の土器が出土しているが、このようにまとまったパレス壺の出土例は見られない。長平台のパレス壺は、器形の伺えるものの他に、遺構・表土層から出土した破片を加えると、その個体数はかなりの数になるものと思われる。文様構成・胎土・色調も様々で、典型的なパレス壺に近いものから、在地の類似品、柳ヶ坪タイプのものまで含まれている。

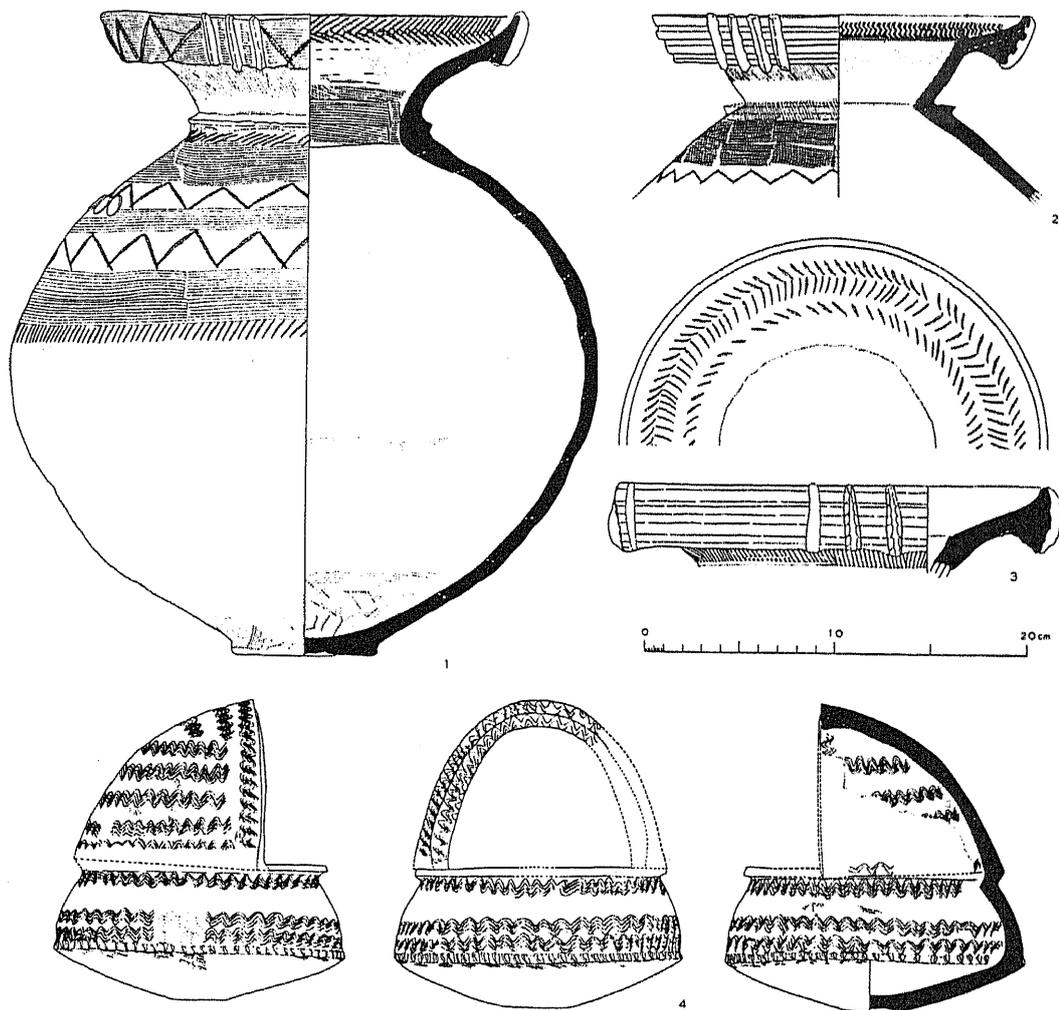


図1 長平台遺跡出土土器

(2) 櫛描文をもつ外来系土器

1・2号墳では、他に櫛描の波状文と横線文を施した壺形土器が出土している。これも、在地の装飾壺からはつながらない文様構成で、その系譜が問題となるところであるが、この時期、伊勢湾周辺では、横線文は多用されるものの、櫛描波状文は主体的な文様ではなく、壺の装飾にはほとんど見られなくなる。パレス壺の文様とは別系統の文様と考えてよいだろう。

一方、1号墳の北西コーナーブリッジ付近で出土した手焙り形土器は、櫛描波状文をほぼ全面に描いたもので、傘部と鉢部が別々に出土しており、波状文はハケ調整の後、ていねいに磨かれた上にかなり精緻に描かれている。胎土には、大粒の砂粒を含み、全体に明るい淡褐色で、部分的に黒変している。国分寺台での手焙り形土器の出土例は、神門4号墳について2例目であるが、ミガキ仕上げの後、精緻な文様を施した長平台例は、無文で、歪みのある神門4号墳出土例と対照的である。

千葉県内では、他に市原市土宇遺跡・千葉市東寺山石神遺跡・同市星久喜2号墳等に手焙り形土器の出土例がある。土宇・東寺山例は無文で全体に歪みがあり、神門4号墳出土例に近い。これに対し、星久喜2号墳出土例は、傘部前面と傘部上半に櫛描波状文を施し、傘部下半～鉢部には綾杉文を施して、念入りに飾られたものである。この他に安房でも無

文の手焙り形土器が出土したことが伝えられているが、県内で出土する手焙り形土器には、明らかに精粗の2種があり、装飾されたものは、いずれも波状文で飾られている点は、その系譜を求める上で興味深い。

(3) 出現期の外来系土器

1・2号墳出土の無文の壺や他の器種には、在来の弥生時代後期の特色を備えたものと、今までにない形態・技法をもつものが混在している。1号墳では、薄手の小型鉢、くの字状口縁の甕が非常に焼き締りの良好な作りである。このような長平台出土の土器群は、神門4号墳とは異なる組み合わせをもって、前段階から当地へ入ってきた土器群として注目される。1号墳は、一辺16.5mの方墳で、周溝は一隅の切れる形態である。内部主体からは、短剣、ガラス玉が出土しており、短剣を副葬し、外来系の要素が強い土器群を伴う出現期の古墳として重要である。

パレス壺を含む異系統の土器群は、関東地方各地で報告例が増えているが、埼玉県美里村南志渡川古墳群出土の例は、少なくとも3段階の流れをもつパレス壺をもつ土器群で、関東地方のパレス壺系の土器群の位置づけに多くの示唆を与えられる。パレス壺は、関東地方では弥生時代後期の装飾壺とは別に、後まで残る特殊な装飾壺として扱われる傾向が強く、東松山市雷電山古墳出土のパレス壺のように、墳頂部の方形埴輪列と伴う可能性が考えられた例もある。雷電山古墳の円筒埴輪には横ハケが施されているようであり、両者は時期的に矛盾するものであるが、この墳丘にパレス壺が伴うとすれば、北武蔵最古の大型古墳になる可能性があり、墳形も帆立貝として捉えられるものではなく、前方部の未発達な定型化以前の前方後円墳であることになる。しかし、方形埴輪列との組み合わせは考えられず、再検討を要する古墳である。

長平台遺跡1・2号墳出土の土器群は、南志渡川古墳群出土の土器群とともに、関東地方の出現期の古墳に伴う土器群として、新たな組み合わせを提示するものと思われる。

2 東海系「有段口縁」甕について

(1) 有段口縁甕の類型

東京湾東岸の市原台地では、1972年以来、台地上に分布する遺跡の継続的な調査が行なわれている。このうち、神門・東間部多・根田・加茂・蛇谷で、前期古墳が調査されており、東京湾東岸の古墳の出現に関わる資料として注目されている。また、台地中央部の中台・台遺跡、南部の天神台遺跡では、弥生時代後期末から古墳時代前期の大規模な集落が調査されており、造墓活動の基盤を担う集落としての可能性が期待されている(図2)。

これらの古墳・集落からは、在来の土器群と共に、外来系の土器群が出土しており、東海・畿内・北陸系の土器群が確認されている。これらの資料は、将来の編年作業によって東京湾東岸の基準資料となり得るものと思われるが、ほとんど未整理の状態、体系的な検討を行なうには至っていない。ここでは、外来系と考えられる資料の一部を比較・検討して今後の研究への布石としたい。

ここで扱う資料は、国分寺台で出土した外来系の甕形土器のうち、口縁部が受け口状を



針線部は前期古墳群の範囲
 ○ 前期の主要古墳
 ▲ S字状口縁の壘
 ■ 叩き板成形の壘
 □ Sの字状口縁の壘

- 1 神門4号墳・神門古墳群
- 2 四分堂等仁王廟住居址・中台集落
- 3 長者台集落・加茂古墳群
- 4 御林跡集落
- 5 蛇谷集落・古墳群
- 6 台集落・西谷古墳群
- 7 根田古墳群
- 8 北野原遺跡
- 9 坊作集落
- 10 己ノ輪台遺跡
- 11 稲荷台2号墳
- 12 持塚古墳群
- 13 山倉古墳群
- 14 東間部多2号墳
- 15 諏訪台古墳群・天神台集落
- 16 南中台集落

図2 上総国分寺台の古墳時代前期の古墳と集落

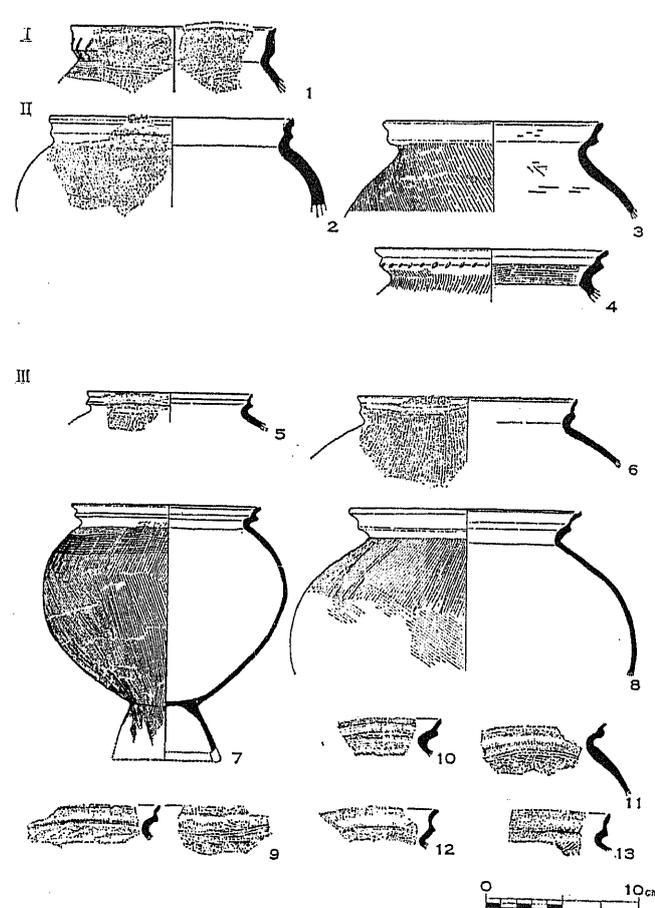


図3 市原市上総国分寺台出土「有段口縁」甕形土器

1. 神門4号墳墳丘盛土中
2. 神門4号墳墳丘南側流土中
3. 僧寺仁王門脇住居址(中台集落)
4. 長者台集落包含層
5. 御林跡集落117号住居址
6. 御林跡集落116号住居址
7. 蛇谷集落79号住居址
8. 蛇谷集落71号住居址
9. 蛇谷集落包含層
10. 蛇谷集落50A号住居址
11. 蛇谷集落26号住居址
12. 蛇谷集落100号住居址
13. 西谷123号墳墳丘表上層(台集落)

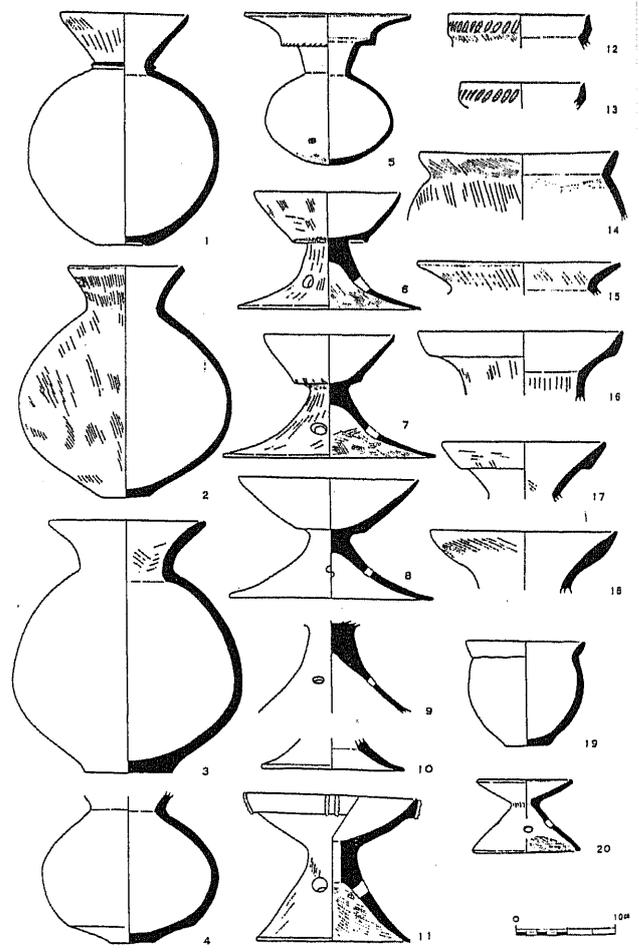


図4 野田市三堀遺跡1号住址出土土器
 (報告書より抜粋して転載)

呈するもの（以下受け口甕）と口縁部がS字状を呈するもの（以下S字甕）である⁽⁵⁾。なお、これらを総称して「有段口縁」甕と仮称した。

図3に示したように、国分寺台出土の「有段口縁」甕（以下有段口縁甕）には、全体を伺えるものがなく、またその在り方も散発的で、相互に発展・継承された類型を捉えることほどできない。しかし、図3の1～4と5～13では、明らかに胎土・色調・器壁の厚さが異なり、後者は、かなり精製された砂粒を多く含む胎土⁽⁴⁾を使用して堅緻に焼きあげられ、淡い灰褐色を呈している。器壁の厚さは約0.3cmと薄く、口縁部形態、ハケの手法からも定型化したS字甕として捉えられる。これに対し、1～4は、口縁部形態、施文手法も様々で、胎土もそれぞれ異なり、器壁を特に薄く仕上げたものではない。これらは、さらに以下のように分けられる⁽⁶⁾。

I 受け口状の口縁部を有し、口縁部から肩部に装飾のある甕形土器（図3-1）

口縁部は、短く外反気味に立ち上がって、ほぼ直立し、口唇内側に明瞭な面をもつ。口縁の屈曲部上半に櫛状工具による刺突文が施され、屈曲部下半以下に縦方向のハケが見える。口縁部直下には、横線文⁽⁶⁾が施される。また、内面の口縁部直下に横方向のハケが施される。

II 口縁部にS字形の屈曲が見られる厚手の甕形土器

II-a（図3-2）

口縁部は、直立気味に立ち上がり、上方に屈曲する。屈曲部には、明瞭な稜があり、口唇部が肥厚する。肩部は張りをもち、口縁部直下、および肩部に横線文が施される。

II-b（図3-3）

口縁部は、外反気味に立ち上がり、緩やかに外方へ屈曲する。口唇部の内側には、弱く面が作りだされており、肩部の横線文は見られない。

II-c（図3-4）

口縁部は外反気味に立ち上がり、短く外方に屈曲する。屈曲部の稜線上に櫛状工具による刺突文がめぐり、口縁部内側の下半には、横方向のハケが認められる。

III 定型化したS字甕

III-a（図3-5）

口縁部は、直立気味に立ち上がり、先端が尖る。肩部には、横線文が施される。比較的小型である。

III-b（図3-6）

口縁部は、直立気味に立ち上がり、先細りとなる。口唇内側には細い沈線がめぐり、肩部に横線文をもたない。比較的大型である。

III-c（図3-9）

口縁部は、外反して立ち上がって外方に屈曲し、屈曲部下半にへら状工具による刻みが見られる。頸部内面には、横方向のハケ目がある。

III-d（図3-7）

口縁部は、外反して立ち上がり、外方へ屈曲する。頸部内面に面をもつ。肩部には、横線文がめぐり、ハケは羽状に施される。脚台部では、斜位のハケを間隔を置いてナゲ消す手法が見られる。比較的小型である。

III-e（図3-8）

口縁部は、大きく外方に屈曲し、口唇の内側は、強いヨコナデによる沈線が見られる。外面のハケは、羽状に施されるが、肩部の横線文はない。比較的大型である。

上総国分寺台では、この種の甕形土器は、当該期の甕形土器の中にあつて、極めて少数で、Ⅲ類に至っても、在地で普及したことを示す出土例はなく、むしろⅡ類は、その胎土を在地に求められない招来品と考えられるものである。

Iの神門4号墳盛土中の出土土器は、4号墳に伴出した伊勢湾系の土器群に先行するものであり、墳丘下の住居跡の時期のものである可能性があるが、項丘下の住居跡の遺物はきわめて少なく、住居跡の存続時期を明らかにするには不十分である。ただ、内湾気味に伸びる口縁部に細線山形文を4段配した小形の壺形土器が、その内の一軒の住居跡から出土しており、先行する住居跡を切って築造されていることから、この壺形土器が4号墳の直前の時期に近いものとして捉えられる。住居跡に遺物が少ないことも、築造直前に移動した可能性を示すものといえよう。

Ⅱ-a は、神門4号墳の主体部南側の中世の削平面より出土したものであるが、既に露呈した表土層中のもので、4号墳に伴うものか、或は、盛土中の先行する時期のものか、出土状況からは判断しがたい。Ⅱ-c僧寺仁王門脇出土例は、トレンチ拡張区の住居跡より出土したもので⁽⁷⁾、口縁部内側に同心円文と山形文を交互に配した壺形土器、脚部柱状部に横線文をめぐらした器台脚部、叩き板成形の壺形土器がこれと共に出土している。他に新しい要素を持つ土器は出土していないことから、これらは一括遺物として捉えられる(図5参照)。Ⅱ-dは、弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓・古墳、および集落が検出された長平台遺跡の包含層より出土した。

Ⅲに一括したS字甕は、弥生時代中期から古墳時代後期の遺構が検出された御林跡遺跡、および古墳時代前期の墳墓と集落から成る蛇谷遺跡より出土したものである。S字甕を出土した住居跡は、小形精製土器を含む定型化した畿内型土師器が各地に波及した段階のもので、図3-7・8を出土した蛇谷79号址、71号址は、埼玉県五領遺跡B区の1期⁽⁸⁾(畿内和田麩寺下層併行)に位置づけられる。

(2) 総の有段口縁甕

千葉県内の東海系有段口縁甕は、上総国分寺台の6地点の他に、12地点で出土していることが報告されており、そのうちS字状口縁を有するものが出土しているのは11地点で、市川市須和田、佐倉市大篠塚、同江原台、我孫子市鹿島前、印旛郡印西町平台先、千葉市官脇、同東寺山石神、市原市大厩9号墳、同千原台、同土宇、富津市大堀に出土例がある。東寺山石神のように、招来品と共に在地で作られたものが確認されている例もあるが、その在り方は、やはり客体的である。東海系の装飾を持つ受け口甕は、野田市三堀、佐倉市大篠塚、千葉市官脇、市川市出土の例がある。

以上の中で、定型化したS字甕と見られるものは、鹿島前、東寺山石神、大厩9号墳、千原台、土宇、大堀、国分寺台蛇谷例と意外に少なく、S字状を呈するが、定型化以前の様相を示すもの、受け口状の口縁部を有するものが国分寺台例を加えて8地点で出土している。ここでは、国分寺台のⅠ、Ⅱに当たる受け口甕、および定型化以前のS字甕について県内の類例を挙げてみたい。

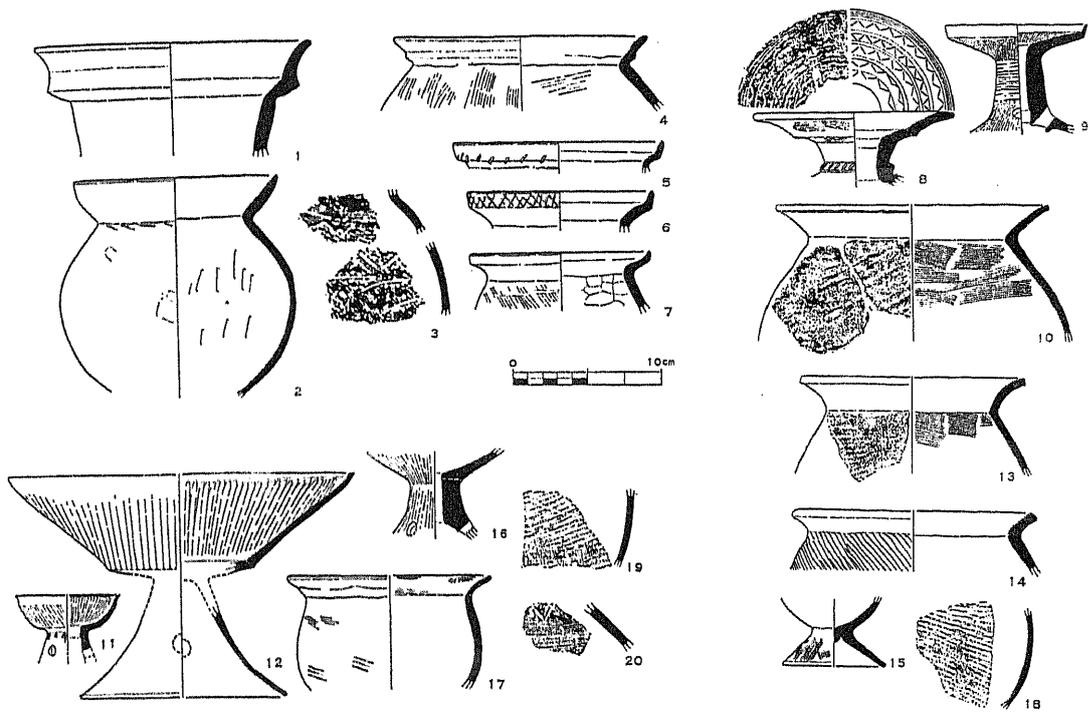
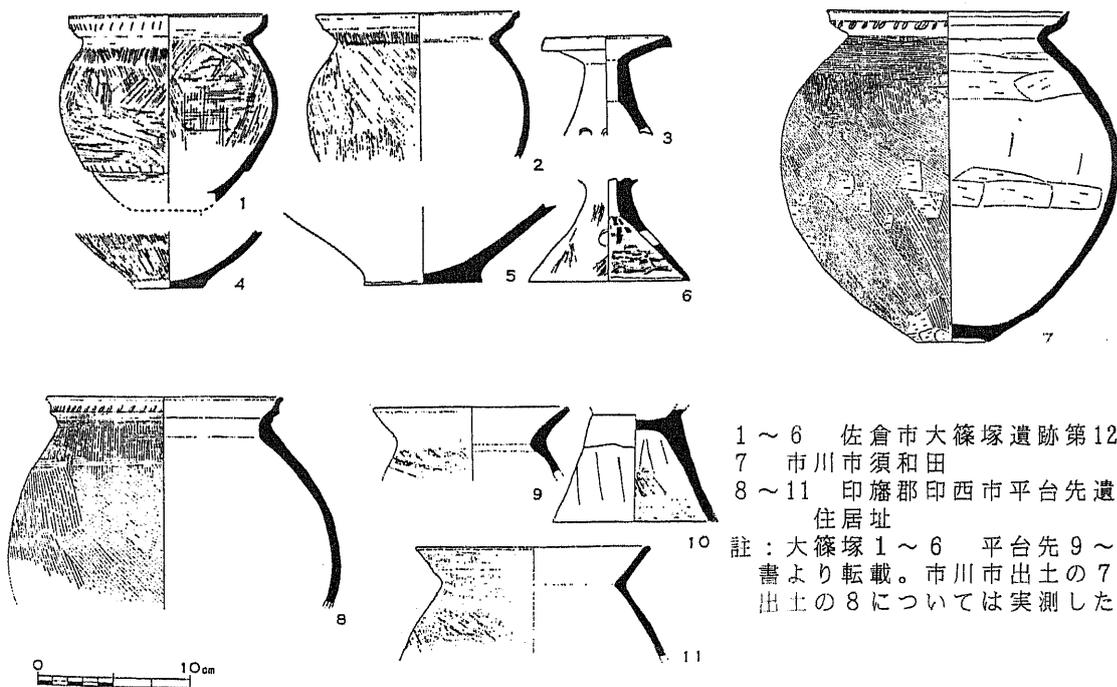


図5 千葉市宮脇遺跡および上総国分僧寺仁王門脇住居址出土土器
 1～7 宮脇遺跡11号住居址・8～20上総国分僧寺仁王門脇住居址



1～6 佐倉市大篠塚遺跡第12号住居跡
 7 市川市須和田
 8～11 印旛郡印西市平台先遺跡第8号住居址
 註：大篠塚1～6 平台先9～10は報告書より転載。市川市出土の7 平台先出土の8については実測した

図6 千葉県内の受け口状口縁甕形土器・初期S字状口縁甕形土器

野田市三ツ堀遺跡一号住居跡では、受け口状の口縁部に刺突文を有する甕形土器の口縁部が2点出土している（図4）。短く外反してやや内傾気味に立ち上がる形態で、屈曲部より上に刺突文が施されている。一号住居跡からは、他に、逆台形の杯部下端に稜を有し、脚部がほぼ水平に開く小型高杯、口縁部の大きく開く有段口縁の小型壺⁽⁹⁾、受部に棒状浮文のある器台等が出土している。このうち、杯部下端に稜をもつ小形高杯は、東海地方西部に系譜が求められるもので、西は北陸から、東は南関東まで分布する⁽¹⁰⁾。後に触れる受け口甕の系譜を示唆する伴出例である。また、5の小形壺も西方からの影響下に出現する器種であり、口縁部径が胴部径を上回って大きく開き、段部の張り出しがしっかりした古い段階の様相を示している。在来の土器群は、定型化した畿内型土師器の波及する以前の段階に捉えてよいだろう。

千葉市宮脇遺跡号住居跡からは、3点の受け口甕の口縁部が出土しており（図5）、口縁部に刺突文をもつもの、クロス文⁽¹¹⁾をもつもの、無文のものがある。また、緩くS字状に屈曲する口縁部も出土しており、国分寺台Ⅱ-b（僧寺仁王門脇堅穴出土）に類似した、厚手で口縁部に装飾をもち、肩部の横線文もないものである。装飾のある受け口甕とこのような厚手のS字甕が伴出する例は、東海西部地方にも見られる。

図6に示した佐倉市大篠塚、市川市出土の受け口甕は、口縁部がやや内湾気味に伸びる形態のものである。大篠塚例は、口縁端部の内側に面をもつ。口唇部と口縁部中位にヘラ状工具による刻みが施されている。胴部下半には、明瞭な成形時の接合痕を残し、ヘラ状工具による刻みを施すという在来の特長も備えている。伴出した甕（図6-2）は、緩くS字状に屈曲する口縁部を有する。器台は2点出土しており、そのうち、受部の端部が立ち上がり、外側に幅のある面をもつ3は、後に受け部が短かく立ち上がるこの種の小型器台の古相を示すものである。市川市出土例は、口縁部形態、旅文の特長に加えて、内面にヘラケズリが認められる点が注目される。内面のヘラケズリは、肩部と胴部中位に認められ、胴部中位では、外面の成形時の接合部にヘラケズリ状の砂粒痕がある。このことから、少なくとも体部を三分割して成形したことが考えられる。

このように、東海系の施文手法と内面にヘラケズリのある甕形土器は、纏向遺跡東田地区大溝合流点中層に出土例があり、外面には、叩き目を残している。また、三重県鈴鹿市箕田遺跡でも、櫛描の刺突文と横線文を施した受け口甕の肩部以下に、叩き目を残す例がある。畿内系の甕と東海系の甕の複合要素を持つ甕の存在が確認できよう。纏向例は、「庄内型の甕が出現した纏向2式土器群中に含まれ、移入品の中に、東海系土器群が多くの割合を占めた時期の所産である。市川出土例は、この2地域の複合した要素をもつものであるが、胎土は、在地の土器に求められ、また、脚台部をもち、在来の平底を踏襲していることから、在地で作られたものと考えられる。

（3）東海地方の受け口甕

このような受け口甕は、東海地方では、弥生時代後期初頭から後期後半にわたって見られ、伊勢湾西岸第V様式⁽¹²⁾、尾張山中期欠山期古相、三河地方寄道期に展開する。その中でも伊勢湾沿岸に出土例が多い（図7）。また、受け口甕の文様構成、伴出土器の様相から、古式に考えられるものも、伊勢湾沿岸に求められる。

伊勢湾西岸の鳥羽市おぼたけ遺跡SK2出土の受け口甕は、口縁部に篋と櫛による刺突文

を2段配し、肩部には、2帯の櫛描横線文の間に櫛描波状文をめぐらしている。横線文直下には、篋による刺突文が施される。内外面にハケが施され、内面の頸部直下には横方向のハケが見える。内湾気味に伸びる口縁部を有する壺形土器、受け口状口縁に刺突文を有する鉢形土器が伴出している。また、津市納所遺跡では（報告者の編年で、従来の伊勢湾西岸西ヶ広期併行期）の土器群の中に受け口甕が見られる。いずれも口縁部に櫛状工具による刺突文があり、肩部に横線文を施し、波状文を施すものも一例ある。ここでも受け口状口縁に刺突文を施す鉢形土器が見られる。

鈴鹿市上箕田遺跡にも、北区8号溝址より出土した上箕田式の甕形土器に、口縁部に刺突文を施す受け口甕があり、頸部から肩部に横線文、刺突文、波状文を配す装飾が施される。その中の一例に、前掲した肩部以下に叩き目を残すものが含まれている。叩き板成形の甕形土器は、この他に3例が出土しており、胴部下半にヘラケズリの認められるものが一例である。

尾張では、東海市カブト山遺跡第1区出土土器、名古屋市古沢町第4地点出土土器、名古屋市見晴台遺跡出土土器が挙げられる。古沢町第4地点の土器群には、口縁部が、凹線と円形浮文で飾られた比較的幅の狭い面をもつパレススタイルの壺形土器等、欠山期古相の様相を示す土器が少なくない。また、尾張では、既に弥生時代後期、山中期の土器群の中に、受け口状口縁を有する台付甕があり、肩部から胴部に櫛描横線文刺突文・波状文を配す例が一宮市南木戸遺跡で出土している。この時期の土器群の中に、口縁部を緩くS字状に屈曲させ、受け口甕と同様の装飾をもつ鉢があり、大参義一氏によってその口縁部形態・文様がS字甕に受けつがれることが指摘された。一方、甕形土器の器種の中での変遷からは、ここに挙げた装飾ある台付の受け口甕が、S字甕へ移行していくことが考えられている。受け口状口縁を内外に3回強くヨコナデしたS字甕は、受け口甕の中の一類型として出現し、やがて定型化するようになると考えるが、欠山期の古い段階では、受け口甕と、緩く屈曲する初期のS字甕が共存していたことが、出土例の中にも求められる。これについては、国分寺台出土のⅡに類する初期S字甕との関連で後に触れていく。

三河では、宝飯郡欠山第Ⅱ貝塚、豊田市伊保遺跡六反田地区、および同市高橋遺跡C6号堅穴出土土器に受け口甕が見られる。伊保遺跡出土土器群には、尾張欠山期の特徴を備えたパレススタイルの壺形土器、脚部に横線文を多用した高杯脚部が見られ、三河の寄道期の新しい段階に捉えられる。

東海地方東部では、弥生時代後期中葉～後葉に口縁部端に刻みを施すハケ仕上げの台付甕が盛行し、弥生時代終末期まで甕形土器の主要な類型として存続する。口縁部の形態は、単純に外反するものと、外反して端部を肥厚させるものがある。現在のところ、受け口甕は⁽¹³⁾一例だけ報告されている。

近江地方は、弥生時代後期から古墳時代前期に口縁端部に平坦面を持つ受け口甕が盛行し、近江型の甕として周辺地域へ広がりを見せたように、受け口甕が定着した地域であるが、V様式末から庄内式併行期にかけて、口縁端部に平坦部をもたない受け口甕が用いられる。これらは、外反する頸部に短かく立ち上る受け口状の口縁部を有し、口縁部に櫛状工具による刺突文や刻み、頸部から肩部に横線文を施すというきわめて伊勢湾系の受け口甕に近いものである。

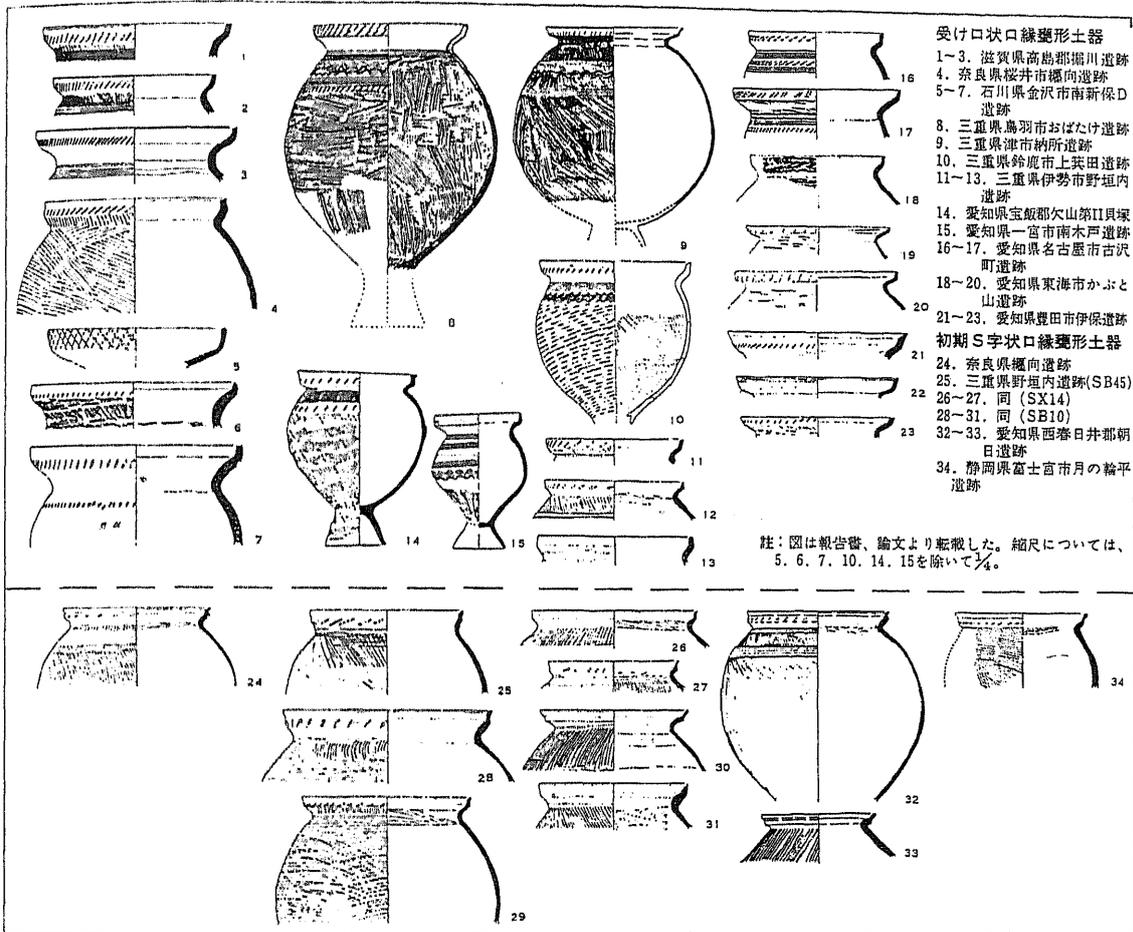
これらは、相前後して移入されたと考えられている山陰・北陸系の5の字状口縁甕形土

器に優勢して、やがて口縁端部に平坦部をもつ近江型の甕として定着する。近江型の甕として定着する前後に、国分寺台1の神門出土例のような直立気味の口縁部を有するものや、口縁端部内側に面をもつもの、或は口縁端部を丸く細めるもの、また口縁端部をつまみ上げるものが見られる。滋賀県堀川遺跡に、これらの出土例が報告されている。

一方、畿内では、桜井市纏向遺跡の中に類例を求めることができる。報告書の中で纏向1式、およびⅡ式に編年された尾張系の土器群のうち、東田地区北溝下層出土の50、同土壙3出土の9が挙げられる。北溝下層の50は、纏向1式の土器群に含まれ、若干内傾気味の受け口状口縁を有し、端部をつまんで内側に面をもつ。口縁部に刺突文、肩部に2帯の横線文がめぐり、横線文間にはへら状工具による刻みが見られる。土壙3の9は、外反気味に立ち上り、途中でわずかに内傾して端部に面を持つ口縁部を有する。口縁部の中位に刺突文が施される。また、市川市出土例との対比で前に触れた東田地区大溝合流点の21は、前掲した伊勢湾西岸の上箕田遺跡の例との関連で、伊勢地方と畿内の土器の接触を示す甕形土器として捉えられよう。

北陸でも、在地の土師器が定型化する以前の段階に、東海色の濃い文様をもつ受け口甕が出土している。石川県羽咋市次場遺跡上層、同柳田ウワノ遺跡溝A、金沢市下安海岸遺跡のA区、およびC区、同南新保D遺跡のA区、およびC区に刺突文のある受け口甕が見られる。これらは、次場上層式とされた畿内第V様式末から庄内式期初頭にほぼ併行すると考えられる土器群の中にあり、南新保D遺跡では、この他にも尾張欠山期に見られるパレススタイルの壺、脚部裾部に山形文を有する高杯等、伊勢湾系の土器群が出土している。また、南新保D遺跡C区出土の受け口甕の中には、千葉市宮脇出土例と同様のクロス文をめぐらすものがある。この文様は、伊勢市野垣内SB5出土の壺形土器（尾張欠山期併行）にも見られる。北陸では、他に新潟県西蒲原郡巻町大沢遺跡で、方形周溝基から口縁部刺突文と肩部横線文をもつ受け口甕が2個体出土している。方形周溝基は2隅が切れることが確認されており、残存部からすれば4隅が切れるタイプになる可能性が強い。遺構に伴うと考えられる土器群は、定型化する土師器以前の様相を示すもので、口縁部に刺突文を有する受け口甕の他に、S字状渦巻文と鋸歯文から成るスタンプ文のある土器片、5の字状口縁の甕形土器等が出土している。

このように、東海地方西部の伊勢湾沿岸地域に多く見られる櫛描装飾のある受け口甕は、北陸から関東地方にまで分布し、関東地方では、前掲した千葉県内の例の他に、埼玉県桶川市入山方形周溝墓に出土例がある。外反する口縁部の上部が短く立ち上がる形態で、口縁部の刺突文、頸部の横線文を有する。伴出した土器群はミガキを多用する直口の壺、口唇部に刻みをもつハケ目仕上げの甕等で埼玉県出土の古式土師器の中でも古相に含まれる土器群である。また、口縁部の形態は異なるが、外反する口縁部の端部をつまみあげ、刺突文を施した平底の甕が、茨城県鹿島町木滝台遺跡に出土している。肩部に横方向のハケ、以下に斜位のハケを施す等、東海地方の影響がうかがえる。これらは、断面VおよびU字形の大溝から出土した1, 300余の土器に含まれており、櫛描の刺突文、横線文、波状文で飾られた壺、杯部下端に稜を持つ裾広がりの小型高杯等、東海系の要素を持つ他の器種も見られる。この大溝は、十王台式土器を出土した住居跡を切って構築され、出土土器には、十王台式土器を含まずミガキ仕上げの小型丸底壺、小型器台等の新来の器種を含んでいる。また、口縁部に文様はないが、世田ヶ谷区下山遺跡11号住居跡で、市川市出土例



- 受け口状口縁甕形土器
 1~3. 滋賀県高島郡堀川遺跡
 4. 奈良県桜井市瀬向遺跡
 5~7. 石川県金沢市南新保D
 遺跡
 8. 三重県鳥羽市おぼたけ遺跡
 9. 三重県津市納所遺跡
 10. 三重県鈴鹿市上英田遺跡
 11~13. 三重県伊勢市野垣内
 遺跡
 14. 愛知県宝飯郡穴山第II貝塚
 15. 愛知県一宮市南木戸遺跡
 16~17. 愛知県名古屋市長古沢
 町遺跡
 18~20. 愛知県東海市かぶと
 山遺跡
 21~23. 愛知県豊田市伊保遺跡
 初期S字状口縁甕形土器
 24. 奈良県瀬向遺跡
 25. 三重県野垣内遺跡(SB45)
 26~27. 同 (SX14)
 28~31. 同 (SB10)
 32~33. 愛知県西春日井郡朝
 日遺跡
 34. 静岡県富士宮市月の輪平
 遺跡

注：図は報告書、論文より転載した。縮尺については、5. 6. 7. 10. 14. 15を除いて1/4。

図7 南関東地方以西の受け口状口縁甕形土器および初期S字状口縁甕形土器

に形態の類似する受け口甕が出土している。口縁端部を強くヨコナデして、S字風に仕上げられており、頸部には、横線文がある。外面のハケは、肩部で羽状に施されており、東海系の手法を持つ甕形土器として捉えられよう。

国分寺台出土のIは、以上に挙げた受け口甕の一類型として捉えられるもので、口縁部形態の非常によく似た例を東海地方以西に求めると、伊勢では、伊勢市上地町野垣内遺跡SX14（方形周溝墓）上層出土土器、亀山市地藏僧遺跡SB23-41が非常に近い形態を呈している。尾張では、名古屋市古沢町遺跡第4地点、東海市カブト山遺跡1区、畿内では、纏向遺跡東田地区土壌3に類例がある。また滋賀県掘川遺跡第1区、第3区の出土例も、直立する受け口状を呈する類例である（図7参照）。

(4) 定型化以前のS字甕

国分寺台出土のIIとしたものは、口縁部がS字状に屈曲するものの、施文方法、胎土、器壁の厚さにS字甕として定型化以前の様相を示すものである。この中には、第2図2・3（II a・b）のように口縁部に文様をもたないものと、4（II c）のように受け口甕と同様の装飾が施されたものがある。II cは元屋敷a類へ、II a・II bは元屋敷b類へつながる定型化以前の段階のものに捉えられる。

伊勢市野垣内遺跡SB10、同SX14、西春日井郡朝日遺跡南部地区でII bとII cが出土しており、野垣内SX14では、上層に1に類似する受け口甕も出土している。県内では、II bが大篠塚、宮脇で受け口甕と出土していることは前に触れた。これらは、S字甕として定型化する以前のある段階には共存し、そのうちS字状口縁を有するものが残存して定型化の方向

へ進むものと考えられる。

この段階のS字甕のうち、IIcは、大参義一氏によって欠山期のS字甕とされたもの、或は、木下・安達氏によって伊勢I類とされたものに類する。県内では、印旛郡平台先遺跡8号住居跡に出土例があり、(図6-8) 口縁部に刺突文、頸部に櫛状工具による狭い不連続の横線文、肩部にハケによると思われる不連続の横線文を有する。外面のハケは、比較的目の粗いもので、頸部・肩部は縦位に、肩部以下は斜位に施され、羽状のハケに近い効果を出している。この施文手法は、市川市出土例に見られ、特に頸部から肩部の2段の不連続な横線文は両者の施文が同系統のものであることを示すものと思われる。胎土は粒子が粗く、焼成も堅緻ではない。肩の張りは弱く、器厚は0.55~0.7cmと厚い。伴出した土器は少なく、形のわかるものは図6に示したものだけであるが、他に櫛描・刺突文、横線文、波状文を配した壺形土器の破片と思われるものが4点出土している。

八王子市の神谷原遺跡でもSB168から、これに近いS字甕が出土しているが、横線文の描き方は粗雑で、外面のハケも斜位だけになっている。SB168では、他に比較的深い碗状の杯部を有する小型の高杯、弥生時代後期以来の口縁部に縄文帯を施す二重口縁の小形壺、口縁部が短く外反する小型の鉢が出土している。高杯は、裾径がほぼ杯部口径に近く、杯部と脚部の高さもほぼ等しいもので、赤彩されている。

平台先、神谷原例は、共に脚台部を欠失しているが、残存部の器形からすれば、脚台部をもつものと考えられる。平台先例により東海色が強く、土器群の様相は、神谷原例がやや新しいと思われるが、いずれも、小型精製土器を含む普遍的な土師器が波及する以前の段階の所産と考えてよいだろう。

平台先、神谷原例に類似するS字甕は、関東以西では、畿内から東海東部地方に見られ、桜井市纏向遺跡東田地区南溝中層、伊勢市野垣内通跡SB10、宝飯郡欠山貝塚、碧海郡王江遺跡、西春日井郡朝日遺跡南部地区溝、富士宮市月の輪平遺跡43号住居跡、小田原市諏訪の前遺跡に出土している。口縁部がS字状に屈曲するものの、形態・文様、ハケの用い方に統一性がなく、器壁を特に薄く仕上げることも見られない。また、平台先例のように頸部から口縁部下半が肥厚する例が多い。伴出した土器群は、定型化した畿内型土師器を含まない段階(畿内庄内期、および尾張欠山期)に位置づけることが可能である。

(5) 有段口縁甕の東漸

南関東出土の古式土師器の中に、伊勢湾周辺の影響を強く受けた土器群が混在することは、既に多くの報告があり、その都度指摘されてきたところである。中でも、S字甕は、比較的出土例が多く、その特徴的な口縁部形態から、伊勢湾周辺の影響を示す明快な例として最も頻繁に取り上げられてきた。

また、関東地方には、S字甕の中でも、定型化した段階のものが波及したとする認識が強かったが、定型化以前にさかのぼる段階のものが存在することを見てきた。また、ここで紹介した口縁部に刺突文のあるS字甕は、尾張元屋敷遺跡のa類として扱われることが多かったものであるが、定型化した段階の招来品、および在地で作られたものとは異なり、定型化以前のS字甕にさかのぼるものである。

定型化したS字甕を含む土器群が、関東地方の古式土師器の中でも、土師器として普遍的な様相をもつ時期のものであるのに対し、定型化以前のS字甕は、小型器台、小型丸底

壺といった普遍的に波及した畿内型土師器を含まない段階の土器群に伴って出土している。また、口縁部の屈曲が弱く、肩部の横線文が見られない比較的厚手のS字甕は、退化して形態のくずれたS字甕と混同されることが多いが、これについても刺突文のある例同様、定型化以前にさかのぼるものが存在する。

また、口縁部から肩部に櫛描の装飾をもつ受け口甕も、定型化したS字甕に先行して関東地方にもたらされ、初期S字甕と共存する例もある。この受け口甕の分布の中心は、伊勢湾周辺、近江に求められ、戦内第V様式から庄内期に盛行する。伊勢湾西岸では、既に当地の第IV様式に櫛描の装飾を多用した受け口甕が在り、その萌芽は、第III様式に見られる。近江でも、畿内第IV様式期に、口縁部に櫛描列点文をもつ受け口甕があるが、その上限は、今のところ判然としない。この受け口甕と初期S字甕が共存する時期は、畿内庄内期に求められ、千葉県内の例も、この時期のものと考えられる。両者が共存する例は、伊勢湾周辺に多い。今、模式的に両者の変遷をたどると、伊勢湾周辺では、尾張欠山期に、山中期以来の受け口甕に見られた施文手法を受けついで初期S字甕が現われ、一時受け口甕と共存する。やがてS字甕が定型化すると受け口甕は姿を消す。

S字甕が出現し、発展した時期の東海地方西部の土器群は、弥生時代中期以来の畿内の影響から離れて、地域色の強い独自の展開を示し、それぞれの器種が、強い地域色をもって各地に波及する。S字甕もその一つである。

S字甕が東漸した地域のうち、東海地方東部、群馬県のようにS字甕が定着し、主要器種となる地域もあるが、S字甕が定着しなかった地域においても、台付甕、肩の張る無花果形のハケ仕上げの平底甕等様々な形でこの外来の甕形土器の影響を見ることができ。そして、定型化したS字甕が波及する以前に、これに直接連らなると思われる土器群が定型化したS字甕の分布範囲にほぼ匹敵する範囲に及んでいたものと思われる。しかしその在り方は、継起的なものではなく、単発的に、東海色の強い遺物を出土する初期古墳であり、集落址であるという在り方にとどまっているようである。

房総地方は、S字甕のほとんど定着しなかった地域であるが、定型化したS字甕につながると考えられる受け口甕・初期S字甕が既にもたらされている。房総で出土する東海系の他の器種についても、定着して、継承された現象は見られないが、東漸する東海地方の影響をかなり早くから受けていたことは伺える。上総国分寺台では、そのような漸移的な東海地方からの影響下に、前掲した3段階のS字系の甕形土器をはじめ、東海色の強い土器群が出土するようになる。また、この時期は、畿内地方、北陸地方の影響を受けた土器群が波及する時期でもあり、東海系と北陸系、畿内系・東海系と北陸系、畿内系と北陸系の組み合わせに在来の土器が加わって出土する例がある。しかし、定型化したS字甕を含む東海系土器と他の外来系の土器の共存はなく、一連の西方からの外来系土器の波及の中で、定型化したS字甕が一段階遅れることを示している。

このように、畿内地方で一早く成立する定型化した土師器の波及を前にして、西方からの動きが次第に活発になる状況の中で、国分寺台の一角に、墳丘全長48～49メートルの前方後円形を呈する神門4号墳が出現する。墳頂、および墳丘下の土器群は、畿内・伊勢湾沿岸・在来のものから成り、盛土中からも古墳より一時期前に属する畿内系・伊勢湾系の土器が出土している。ここで取り上げた、神門出土の受け口甕は、この盛土中のものであり、神門4号墳の出現する一時期前に、伊勢湾周辺との交流があったことを物語る資料で

ある。また、墳頂・墳丘下からは、多量のハケメ仕上げの台付甕が出土しているが、S字甕は含まれていない。これらは、当地への定型化したS字甕波及の前段階の様相を示すものと考えられ、主体部南側の中世削平面より出土した初期S字甕（図3-2）、この古墳に非常に近い時期の伊勢湾系の甕と考えてよいだろう。

ここで挙げた受け口甕・初期S字甕は、東海地方西部でも主体的な甕ではなく、今のところ東海地方東部での出土例が極めて少ないなど、これらの性格には不明な点が多いが、定型化した畿内型土師器が皮及する前段階の資料として注目しておきたい。

註

- (1) その後の整理の見解として、2号墳と切り合う住居跡（014号）に帰属する可能性が示されている。他の出土土器の比較では、住居跡の方が新しいと判断される。
- (2) 長平台の資料と伊勢湾周辺の資料の対照については、尾張・伊勢・三河地域へ持参して比較した。
- (3) 今回紹介する資料は、すべて正式報告の出ていないものであるが、各調査担当者の了解を得て、紹介させていただいた。
- (4) この胎土は、在地に求められるものではなく、肉眼による観察では、東海地方西部にこれに近いものが見られる。
- (5) 資料の説明について、特に記さないものは、外面の特徴等を指している。
- (6) ここていう横線文は、竹管状工具等によって施された横線、および擬横線ではなく、櫛状工具、或はハケを横に引いて施したものである。
- (7) 中司照世「西地区出土土器」『昭和43年度 上総国分寺址調査報告』 上総国分寺址調査団 1969（19-20頁）
- (8) 日本考古学協会、昭和56年度大会シンポジウムⅡ「関東における古墳出現期の諸問題」〈資料〉1981
- (9) 第3図5～7および2は、調査前の耕作中に一号住居跡の中央附近より出土したとされるものである。
- (10) 比田井克仁「古墳発生時における小型高杯について（試論）」『金鈴』22 1980（5-19頁）
- (11) これは、格子文の省略されたものとも考えられるが、報告された図の形状からクロス文と仮称した。
- (12) 「納所通跡」の報告で、伊藤久嗣氏の行なわれた編年による。
- (13) 浜名湖「弁天島海底遺跡」で出土している。浜松市博物館佐藤由紀男氏の御教示を受けた。文献、内藤晃・市原寿文『浜名湖弁天島海底遺跡』 浜名郡舞阪町教育委員会1972

引用・参考文献

（著者五十音順）

- 1 安達厚三・木下正史「飛鳥地方出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻2号 日本考古学会 1974（1-30頁）
- 2 甘粕健・古川知明編『大沢遺跡』—B'・B地区の調査概報— 巻町・渦東村教育委員会 1981
- 3 我孫子市教育委員会『我孫子市鹿島前遺跡』 我孫子史料刊行会 1978
- 4 石野博信・関川尚功『纏向』 橿原考古学研究所 1976
- 5 伊藤久嗣『納所遺跡』 三重県教育委員会 1980

- 6 植松章八・馬飼野行雄・渡井一信編『月の輪遺跡群』 富士宮市教育委員会 1981
- 7 大参義一「S字状口縁土器考」『いちのみや考古』No. 13 一宮考古学会 1967 (1-8頁)
- 8 同「弥生式土器から土師器へー東海地方西部の場合」『名古屋大学文学部研究論集(史学)』47号 1968 (1-34頁)
- 9 大橋勤編『伊保遺跡』 猿投遺跡調査会 1974
- 10 小久貫隆史他『千原台ニュータウン』1 (財)千葉県文化財センター 1980
- 11 柿沼修平他『土宇』 日本文化財研究所 1979
- 12 久保哲三編『シンポジウム 関東における古墳出現期の諸問題』 日本考古学協会・学生社 1981
- 13 倉田直純『地蔵僧遺跡発掘調査報告』 亀山市教育委員会 1978
- 14 三森俊彦他『市原市大厩遺跡』 (財)千葉県都市公社 1974
- 15 栗本佳弘編「佐倉市大篠塚遺跡」『東関東自動車(千葉ー成田線)道関係埋蔵文化財発掘調査報告』 千葉県教育委員会 1970 (1-88頁)
- 16 真田幸成他『上箕田』一弥生式遺跡第2次調査報告1 鈴鹿市教育委員会 1970
- 17 下津谷達男他『野田市三ツ堀遺跡』 野田市郷土博物館 1962
- 18 下村登良男・村上喜雄『おばたけ遺跡発掘調査報告』一第4次一 鳥羽市教育委員会 1972
- 19 下村登良男「伊勢市上地町野垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1979 (61-117頁)
- 20 柴垣勇夫監修『朝日遺跡群第1次調査報告』一環状2号線関係一 愛知県教育委員会 1975
- 21 下山遺跡調査団『下山遺跡』I 世田谷区教育委員会 1982
- 22 白井久美子「長平台遺跡出土土器」『上総国分寺台発掘調査概報』 上総国分寺台遺跡調査団 1982 (44-46頁)
- 23 白石竹雄編『平台先遺跡』 平台先遺跡発掘調査団 1973
- 24 辛亥銘鉄剣シンポジウム実行委員会「埼玉県の前期古墳」『辛亥銘鉄剣と金石文』 埼玉県教育委員会 1982 (30-31頁)
- 25 杉崎章編『東海市カブト山遺跡』第2次調査報告 東海市教育委員会 1974
- 26 杉原荘介・小林三郎「古墳時代」『市川市史』第1巻(原始、古代) 市川市 1974 (353-467頁)
- 27 杉山博久他『小田原市諏訪の前遺跡』 小田原考古学研究会 1971
- 28 澄田正一・大参義一・岩野見司『新編一宮市史ー資料編2ー』 一宮市 1967
- 29 田中新史「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』第63号 早稲田大学考古学会 1977 (1-21頁)
- 30 玉口時雄・阪田正一編『宮脇』 宮脇遺跡調査団 1973
- 31 豊田市教育委員会編『高橋遺跡』 豊田市教育委員会 1971
- 32 中司照世「西地区出土土器」『昭和43年度 上総国分寺址調査報告』 上総国分寺址調査団 1969 (19-20頁)
- 33 沼沢豊他『東寺山石神遺跡』 (財)千葉県文化財センター 1977 (484-508頁)
- 34 丸山竜平・中村博司他『高島郡新旭町 堀川遺跡調査報告』 滋賀県教育委員会 1975
- 35 美里町史編纂委員会「美里町の古墳」『美里町史』通史編 美里町 1986 (145-191頁)
- 36 宮本哲郎編『金沢市南新保D遺跡』 金沢市埋蔵文化財調査委員会 1981

- 37 森重彰文・田口崇『木滝台遺跡・桜山古墳 埋蔵文化財発掘調査報告書』 鹿島町木滝台遺跡発掘調査会・日本文化財研究所1978
- 38 羽咋市史編纂委員会『羽咋市の考古資料』－羽咋市史原始古代編－ 羽咋市 1973
- 39 橋本澄夫他「金沢市下安原海岸遺跡の第1次調査」『石川考古学研究会々誌』第18号
石川県考古学研究会 1975 (9-35頁)
- 40 湯川悦夫・加納俊介「南関東出土の東海系土器とその問題」『小田原考古学研究会会報』
第5号 1972 (85-103頁)
- 41 吉廻純・大村直編『神谷原』I 榎田遺跡調査会 1981
- 42 横田里司「五領期の江原台」『江原台』 江原台第一遺跡発掘調査団 1979 (499-513頁)
- 43 和田英雄『古沢町遺跡発掘調査報告』弥生時代編 名古屋市教育委員会 1974

第3章 倭五王の時代と2つの内海

第1節 常総の内海をめぐる石枕と立花の時代

1 石枕出現の背景

古墳時代前期の刳抜式石棺には、造り付けの石枕が彫り出されたものがあり、讃岐、肥後には特に集中して見られる(図1)。その造り付け石枕が石棺から遊離したかのごとく、枕部分だけが石で作られ独自に発達した地域が(古)香取海の南岸を中心とする常総地域であった。この刳抜式石棺がほとんど分布しない地域で、造り付け石枕のモチーフが受け継がれ、発達していく背景には、刳抜式の棺を舞台にある種の葬送儀礼を共有した集団が存在したことが想定される。刳抜式石棺の出現は、堅穴式石室の庇護を必要としない内部施設の登場であり、木棺が堅穴式石室から分離して直接土中に埋置される契機を促したといえる。枕造り付け石棺は、まさにその変換期に展開し、弥生時代後期以来の伝統的な木棺直葬圏である常総地域に刳抜式木棺と石枕による独特の葬送形態をもたらしたと考える。しかし、葬送に際して主要な役割を果たしたものは枕そのものではなく、枕の周りで行われたであろう儀礼に用いられた器具であったと思われる。常総地域では、それが2つないし、4つの勾玉を背中合わせにして結束させた形の石製立花であった。枕部分が独自に発達することに加え、石製立花という特殊な石製品と結び付いて独特の展開を示したことは、東国に位置する常総地域の最も特徴的な地域色であったといえよう。本稿では、石枕出土古墳の年代の検討を通して、石枕の系譜と常総における変遷を確認し、木棺直葬の時代に展開した石製立花と石枕による葬送儀礼の成立基盤に言及したい。

2 枕造り付け石棺の年代

割竹形あるいは舟形と称されている刳抜式石棺・木棺は、弥生時代以来の組み合わせ式石棺・木棺とは一線を画して、古墳時代前期に特別に採用された埋葬施設である。刳抜式石棺の製作には、単に加工しやすい石材が近くに産出するだけではなく、石工の技術と道具が不可欠であるため、これらの条件を満たした地域にのみ分布したといえよう。

その中で石枕を彫刻した刳抜式石棺は、石材の豊富な地域の地方色としてまず注目された。特に讃岐の例は、地域内での発達を推察できる例として刳抜式石棺出現の問題にも1石を投じている。すなわち、これらの刳抜式石棺の出現をもって古墳時代中期の始まりであるとする後藤守一の編年観に着目した小林行雄は、香川県綾歌郡綾歌町に所在する快天山古墳の3基の枕造り付け石棺を取り挙げ、副葬品・埴輪の検討から前期にさかのぼり得ることを指摘した。その後の北部九州、瀬戸内沿岸地域の調査で、枕造り付け石棺の多くは碧玉製腕飾類のうち新相の組み合わせをもつことから古墳時代前期新段階に特徴的な埋葬施設であることが明らかになり、その初現は前期古段階にさかのぼる可能性も示されている。刳抜式石棺の中でも枕造り付けのものが古段階に位置付けられることを、肥後・讃岐の分布集中地域の変遷で明らかにして行こう。

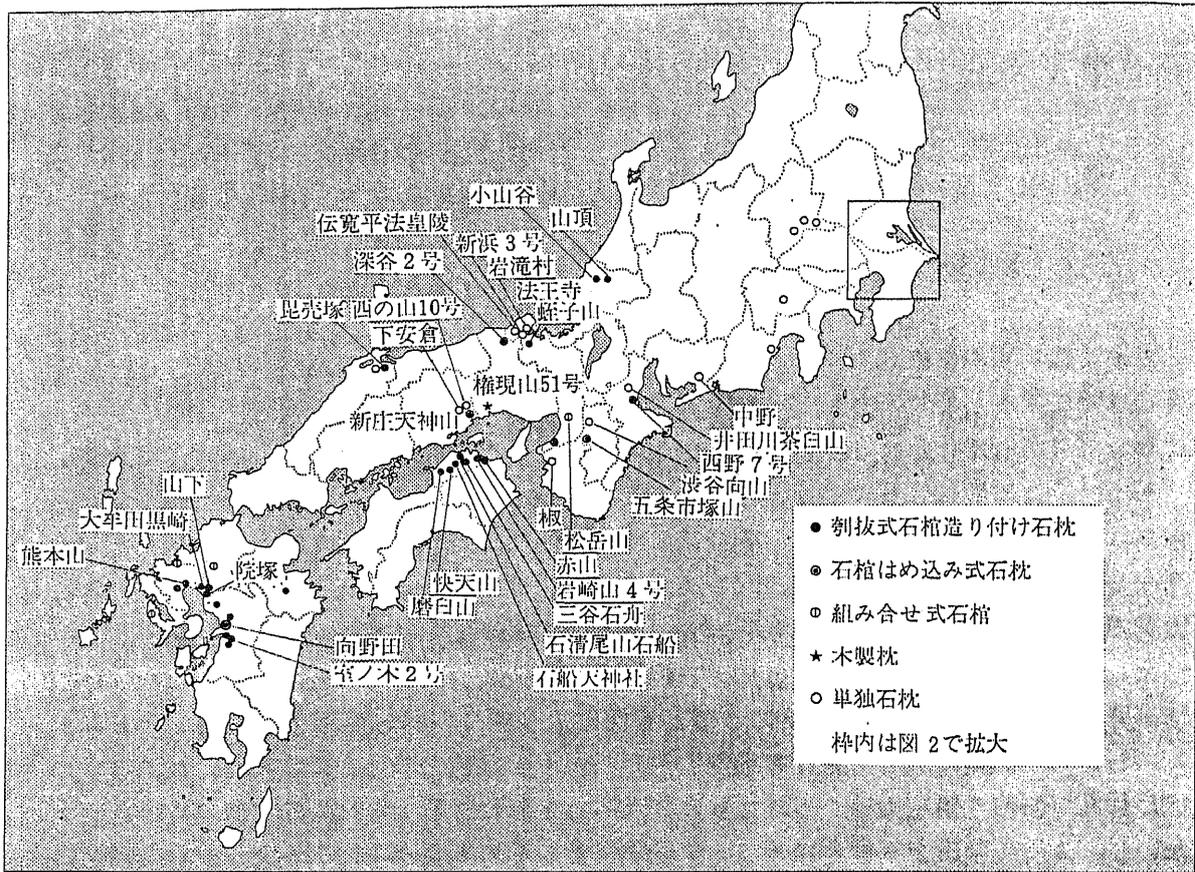


図1 枕造り付け石棺の分布（関連主要古墳）

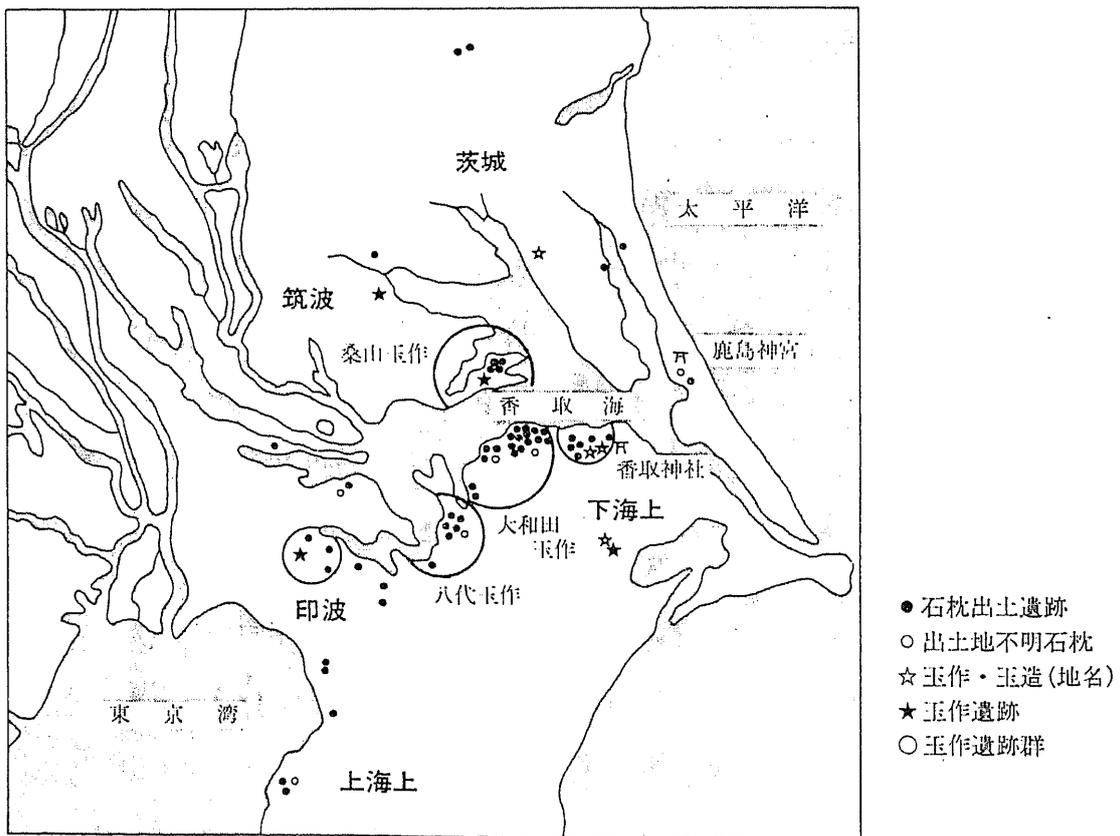


図2 香取海を中心とした石枕・玉作遺跡分布図

(1) 肥後の枕造り付け石棺

肥後では、菊池川流域に分布の中心があり、阿蘇溶結凝灰岩（阿蘇溶岩）を素材として割竹形・舟形石棺に枕が彫りだされる。現在のところ最も古く位置付けられているのは全長 59 m の前方後円墳玉名市山下古墳 2 号石棺である。複数の人骨に追葬が認められ、盗掘によって本来の副葬品も不明であるが、石棺と相前後して埋設された壺棺を根拠として 4 世紀前半代に比定されている。この石枕は、棺の両端に向きあって造り付けられ、頭部が小口にぴったり付くような形態である。

やはり 4 世紀前半代にさかのぼると考えられる宇土市向野田古墳の石枕は、舟形石棺の棺身に彫り込まれたものではなく、石棺の北端に嵌め込まれている。しかし、次段階の棺から遊離した単独の石枕とは異なり、棺に合わせて設計され、棺と一体化した形状をもつ。向野田古墳は全長 89 m の前方後円墳で、舶載の後漢鏡・碧玉製車輪石・壺形埴輪の年代観から備前市の新庄天神山古墳の例とともに 4 世紀第 2 四半期までさかのぼる石棺嵌め込み式石枕をもつ例である。この 2 例からみて、造り付け石枕と嵌め込み式石枕は、ほぼ同時に出現して、一定期間併存していたと言える。

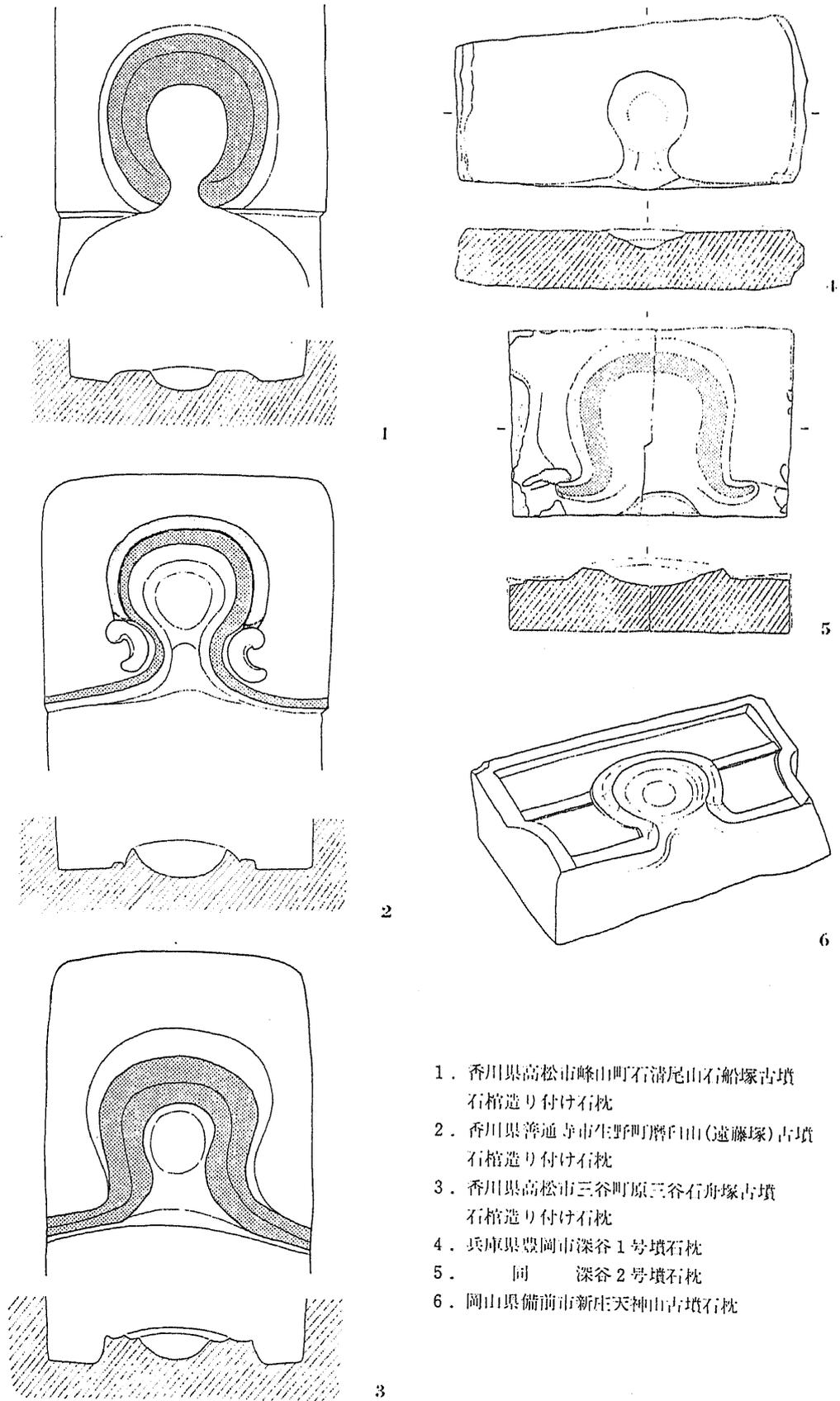
これに続く肥後の代表的な枕造り付け石棺は、全長 78 m の前方後円墳・院塚古墳の 3 基の舟形石棺である。3 基それぞれに相違があり、1 号の伝統的な舟形に対して 2 号、3 号は冢形に近い形態で、1 号→2 号→3 号の順に枕の位置が棺端から離れていく。また、1 号棺に見られる枕部と棺底の明瞭な段が 2 号、3 号には見られず、枕だけが彫りだされている点からも順に後出の要素をもつと思われる。底部穿孔の壺形埴輪等から 4 世紀中葉頃の年代が与えられよう。

その後造り付け石枕は、八代郡宮原町室ノ山古墳の 2 号石棺のような棟状の平坦面をもつ蓋石と矩形に変化した棺身から成る割抜式石棺に見られるが、環状縄掛突起をもつ地域色の強い石棺で、5 世紀前半代に位置づけられる。肥後の枕造り付け石棺の下限を示す例の 1 つであると考えられる。

(2) 讃岐の枕造り付け石棺

讃岐では、鷲ノ山産の通称讃岐石（石英安山岩質凝灰岩）と火山産の相地石（白色石英安山岩質凝灰岩）が主な石棺材である。枕造り付け石棺の形態には、快天山古墳例などの割竹形と高松市石清尾山石船塚のような舟形がある。石棺の形態の分かる 11 例のうち、副葬品の明らかな例は快天山古墳の 3 基の石棺と大川郡津田町岩崎 4 号墳例の 4 基にすぎない。讃岐の場合、火山産の相地石を使う津田湾周辺の東讃岐とそれ以西の讃岐石を使う地域では、古墳の動態そのものが大きく異なるため、石材別に見ていくことにする。

火山産の石材の例には、大川郡津田町の赤山古墳の 2 棺と岩崎 4 号墳があり、3 棺とも断面形は割竹形である。形態的な特徴には、赤山の蓋が両端を斜めに切り落とした舟形を呈し、阿蘇石の舟形石棺と共通する点と、岩崎 4 号の蓋の格子目状の削りだし装飾が挙げられる。造り付け石枕は、赤山の 2 例が頭から頸の受部を彫りだしただけの装飾のないものであるのに対し、岩崎 4 号では棺両端の対角の位置に枕が彫られ、かなり複雑な装飾が施されている。岩崎 4 号の石棺は既に埋めもどされているが、津田町郷土資料館に残る拓本によると二重の縁取りで飾られ外側に鋸歯文を内側に幅広の刻みがあり、「刻みを半肉



1. 香川県高松市峰山町石清尾山石船塚古墳
石棺造り付け石枕
2. 香川県津通寺市生野町磨白山(遠藤塚)古墳
石棺造り付け石枕
3. 香川県高松市三谷町原三谷石舟塚古墳
石棺造り付け石枕
4. 兵庫県豊岡市深谷1号墳石枕
5. 同 深谷2号墳石枕
6. 岡山県備前市新庄天神山古墳石枕

図3 石棺造り付けの石枕 (各報告書より改図)

彫りした特異な形態をなし、奈良県天理市渋谷出土と伝えられる滑石製石枕と極めて似かよった装飾をしている」という（藤田 1976）。赤山古墳は、1号棺から碧玉製管玉・ガラス玉各1、2号棺から碧玉製管玉11・ガラス玉93が出土しているが、他に伝赤山古墳出土品として石釧5・仿製方格規矩鏡・仿製変形神獸鏡がある。一方、岩崎4号墳では棺外の遺物に舶載二神四獸鏡・銅鏃5・鉄鏃2・剣10・大刀1・短冊形鉄斧1・鉄鎌3他があり、棺内の副葬品として石釧・車輪石・貝釧・玉類がある。また、『讃岐名勝図絵』には吾作銘四神四獸鏡・勾玉・壺が伝えられている。発見時には石棺外面が磨かれていたという。以上の遺物相に加え、赤山・岩崎例ともに堅穴式石室に納められていたことなど枕造り付け石棺では古い要素をもっており、4世紀前半～中葉の範囲で前後する時期と考える。墳丘規模も全長約50mとほぼ等しい。副葬品の比較からは岩崎4号墳がやや先行すると思われる。

讃岐石使用の例は、石清尾山古墳群の高松市峰山町石船塚・三谷町石舟塚（丸山）と鷲ノ山近くの快天山古墳、さらに西方の善通寺市生野町磨臼山（遠藤塚）古墳に分けられる。石清尾山石船塚の石棺は、舟べり状の隆起帯が蓋・身ともに認められる舟形である。石枕の形状は頭受部から肩のラインを彫り込み、頭受部の周縁に緩やかに下がる広い面を彫りだしているのが特徴である（図3-1）。墳丘出土の壺形埴輪から同古墳群の猫塚に近い時期の古墳と考えられ、4世紀前半代には既に築造されていたと思われる。三谷石舟塚の石棺は断面形が四角形に近く、棺の内面形態も矩形に近づいたかなり新相の石棺である。石枕の形態は、頭受部の周縁に彫りだされる平坦面が石清尾山石船塚と異なって肩のラインで外方へ伸びてより装飾的になり、周縁平坦面の基底部にもう1段狭い段がめぐっている（図3-3）。以上の特徴から前期末から中期の4世紀後半から末葉に位置付けられる。

快天山古墳は鷲ノ山の石材を掌握した地域首長の墓として初源期の刳抜式石棺に比定されている（藤田 1976 他）。しかし、先行する1・2号棺が堅穴式石室様の施設に納められ、3号棺が粘土に包んで直葬されるという石棺直葬への変換期に位置し、枕の外縁部の形態も三谷石舟塚に類似したもので、3号棺では基底部に馬蹄形の段をもつ。

全長100mという規模は石清尾山猫塚、三谷石舟塚に匹敵し、丸亀平野の要衝に位置する讃岐最大規模の前期古墳である。くびれ部に円筒埴輪をめぐらし、舟形石棺直葬への過渡期に存続した点を見ると石清尾山石船塚より新しいと考えられる。中心的な1号棺の副葬品には方格規矩四神鏡・石釧・両側穿孔の硬玉勾玉があり、4世紀中葉にさかのぼる要素をもつ。さらに丸亀平野対岸の西縁に位置する磨臼山（遠藤塚）古墳は、造り付け石枕の頸受部両側に勾玉が陽刻されていることで注目される（図3-2）。この勾玉形の陽刻は、頭部から肩部への彫りとは別に頭部の外縁に1段低く彫りだされた紐帯状の突帯から吊下げられたように見える。頭受部周縁の断面は三角形に近く、外縁が薄くなる。突帯と頭受部の間には細い溝が巡っている。この頭受部断面形の特徴は、4世紀前半に比定し得る備前市新庄天神山古墳の石枕にも見られ（図3-6）、同一系譜であろう。また、堅穴式石室に納められていること、石棺の周縁に見られる突帯は九州の古式舟形石棺に類似することから、従来考えられていたような4世紀後半代に下がるものとは考えがたい。

以上に見た讃岐の枕造り付け石棺を簡単に整理すると、

石清尾山石船塚→磨臼山・岩崎4号→快天山・赤山→三谷石舟塚という4世紀代全般にわたる変遷が考えられる。石枕の形態は必ずしも外縁の彫りの単純なものが先行するとは

言えないが、石清尾山石船塚のように頭受部外縁に低く丸みのあるテラスをもつものから外縁に突帯をもつものへ変化し、さらに外側に低い段をもつものが現われている。

(3) 越前の枕造り付け石棺

さて、もうひとつの舟形石棺集中分布地域である越前の枕造り付け石棺を見ておきたい。越前では、足羽山産凝灰岩(笏谷石)を石棺材として4世紀後半から5世紀後半まで舟形石棺が作られる。この地方の舟形石棺は、排水孔・排水溝をもつ例が多いのが特徴であるが、石枕を造り付けた福井県足羽山山頂古墳、同小山谷古墳の石棺2例には排水施設がない。また、石棺の外面に装飾を施しているのも共通している。

この地方の舟形石棺の仕上げ技法に着目した和田晴吾氏は、削りの上を敲打技法で仕上げ、さらに外面を磨いた例を古段階に捉えている(和田1983)。この観点から、工具痕を残さない磨き調整を行い、蓋の外面と縄掛け突起に線刻文を施した、丸岡町丸岡城内の牛ヶ島の石棺(御野山古墳)が最も古い特徴をもつが、枕は造り付けられていない。これよりやや後出と考えられる山頂古墳は、手斧削りの後、2次調整として荒く磨かれ、棺身に連弧文様の線刻文をもつ。石棺は竪穴式石室内に置かれており、全体に丸みのある舟形を呈している。従来、静岡県三池平古墳と同時期に比定されてきたが、石棺の特徴からはやや新しくなろう。石枕の頭受部周縁は丸みのある高まりを彫り残し、頸受部ですぼまって特に装飾はない。盗掘された石棺内には朱の付着した碧玉製管玉7個と碧玉製琴柱形石製品が残っていた。この琴柱形石製品は上半を欠失しているが、下端が袋状になる長さ3.8cmの軸は断面楕円形で、亀井正道氏が松林山型とした(亀井1972)形態に比定できよう。Y字形に大きく開く角状突起がつく形態であろう。この石製品は、後で触れる石製立花の系譜にかかわるものの1つとして注目しておきたい。

小山谷の石棺には鏡形の浮彫風の刻文がある。蓋の天上部には棟状の稜があり、山頂古墳より後出の形態であるが、扁平で丸みのある断面形はやはり古相の舟形石棺の範疇にあることを示している。石枕は、頭受部周囲に比較的高い縁を彫り残す点で山頂古墳と似るが、さらに外側に低い段を巡らしている点と頸受部に短く外方に開く縁がある点が異なる。越前国名蹟考には鏡6・車輪石・石釧・鋏形石が出土したことが伝えられているが、現存する遺物は木製合子・滑石製白玉を含む玉類である。以上の2基は、いずれも4世紀前半～中葉に位置付けることが可能で、後者がより新相を示している。

枕造り付け石棺は、前掲の3地域の他にも筑前・筑後・肥前・豊後・出雲・丹後・備前・摂津・大和に分布する(図1)。また、家形石棺製作以前の石枕造り付け刳抜式石棺は、越前・丹後・吉備・讃岐を結ぶラインの西側に限られる。また、刳抜式石棺に別材の石枕を嵌め込んだ備前市新庄天神山古墳・宇土市向野田古墳は、初期石枕造り付けの一類型としてこの分布圏に入っている。この2棺に類似して石枕を彫り込んだ板石をそのまま底石として組み込んだ組み合せ式石棺が丹後・豊岡市中ノ郷深谷2号墳にある。深谷古墳群では、1号墳にも嵌め込み式の石枕をもつ組み合せ式石棺があり、『長宜子孫』銘後漢鏡の鏡片が副葬されている。2号墳の供献土器から4世紀前半代にさかのぼると考えられ、吉備・肥後の2棺よりさらに先行する可能性が強い。肥後・讃岐の石枕造り付け石棺の出現時期との関係が問題となる。このように、石枕造り付け、あるいは嵌め込み式石棺の出現

は、古墳時代前期古段階の後半（舶載三角縁神獸鏡の時代）にあり、前期新段階の前半（仿製三角縁神獸鏡と碧玉製腕飾類の時代）に盛行したことが窺える。石枕造り付け石棺は、家形石棺や河内・松岳山古墳のような初期長持形石棺にも採用され、その下限は肥後室ノ山古墳・大和御所市権現堂古墳の家形石棺などから5世紀前半頃と考えられる。一方、嵌め込み式石枕は石棺の規格に合った石枕の系統に限れば、毛野白石稲荷山古墳の例から5世紀初頭頃に下限を求めることができる。

これらの石枕造り付け石棺は、主要河川の流域単位の各地域首長の墓に比定できる大型の前方後円墳の埋葬施設として採用されている例が大半を占める。また、初期の例には新庄天神山古墳を始めとして内部に大量の朱を用いたものが多く、白色系の石材を用いた棺の内部だけが特別の空間であったことを如実に示している。

3 刳抜式木棺と枕

刳抜式石棺の分布は、石材の有無だけでなく石工の技術、道具、石材運搬の可否によって規制される。常総における単独石枕の盛行には、このような条件が不備な地域にもかかわらず、最も大切な頭部に心血を注いだ人々の意志が反映されている。

石棺から遊離した単独の石枕は出土地不明なものも多く、内部施設の明らかな例は極めて少ないが、千葉市東寺山2号墳を始めとする近年の調査で古段階の常総型石枕は、割竹形木棺に納められていることが明らかになった。

割竹形、および舟形の刳抜式木棺と石枕の組み合わせは、常総地域に限らず播磨から毛野まで広い地域に存在することが単独石枕の分布状況から推測される。大和の磯城郡渋谷村付近出土の石枕は、外縁部に鋸歯文と面違文を二重に巡らして装飾性に富み全面を磨いた優品で、渋谷向山古墳出土の可能性も含めて前期新段階の古相に位置付け得る。

一方、大阪府藤田美術館蔵の燈籠山古墳出土の埴製枕は、断面形態から割竹形木棺に置かれたことが推測できる例である。外縁部が鍵手文と複合鋸歯文によって飾られている点に渋谷出土の石枕との類縁性が見られる。燈籠山古墳は、大和古墳群の中山大塚、東殿塚に次ぐ大型前期古墳の系譜にある。

これらの大和の単独枕は、枕造り付け石棺分布圏の東縁にあって著しい装飾性をもち、枕が独自に特殊化する常総型石枕の初現との関連が注目されるところである。

枕造り付け石棺分布圏と常総を結ぶ東海道沿いの石枕の分布は、極めて稀薄であるが、この中間地域に至って初めて「立花孔」と推定される外縁部の小孔（以下立花孔と呼ぶ）をもつ単独の石枕が存在する。立花孔をもつ最も西日本寄りの例は、三河・豊橋市中野古墳の例で、頭受部外縁の段＝亀井正道氏の設定された高縁（以下高縁と呼ぶ）が2段あり、下段に立花孔が9孔ある。全面が磨かれ、面取りに丸みのあるていねいな造りであるが、頸受部が長く伸びる形態や高縁が2段である点は常総型の発達した型式に属する。さらに東側の例には駿河・静岡市麓山神社後古墳出土の石枕がある。高縁は2段、立花孔は基底面に6孔、1段目に7孔あり、頸受部が伸びる形態である。全面が磨かれ、ていねいでシャープな造りである。これも常総型では新相の石枕に対比できる。2例とも常総型石枕成立後の分布圏の周縁の例であり、後で触れる石製立花の分布地域を刳抜式木棺・石製立花

を用いる独特の葬送儀礼を共有した地域とすれば、三河までを刳抜式木棺・石枕・立花の結合による常総型石枕祭祀の波及した地域の西限とすることができよう。

4 東国の石枕と立花

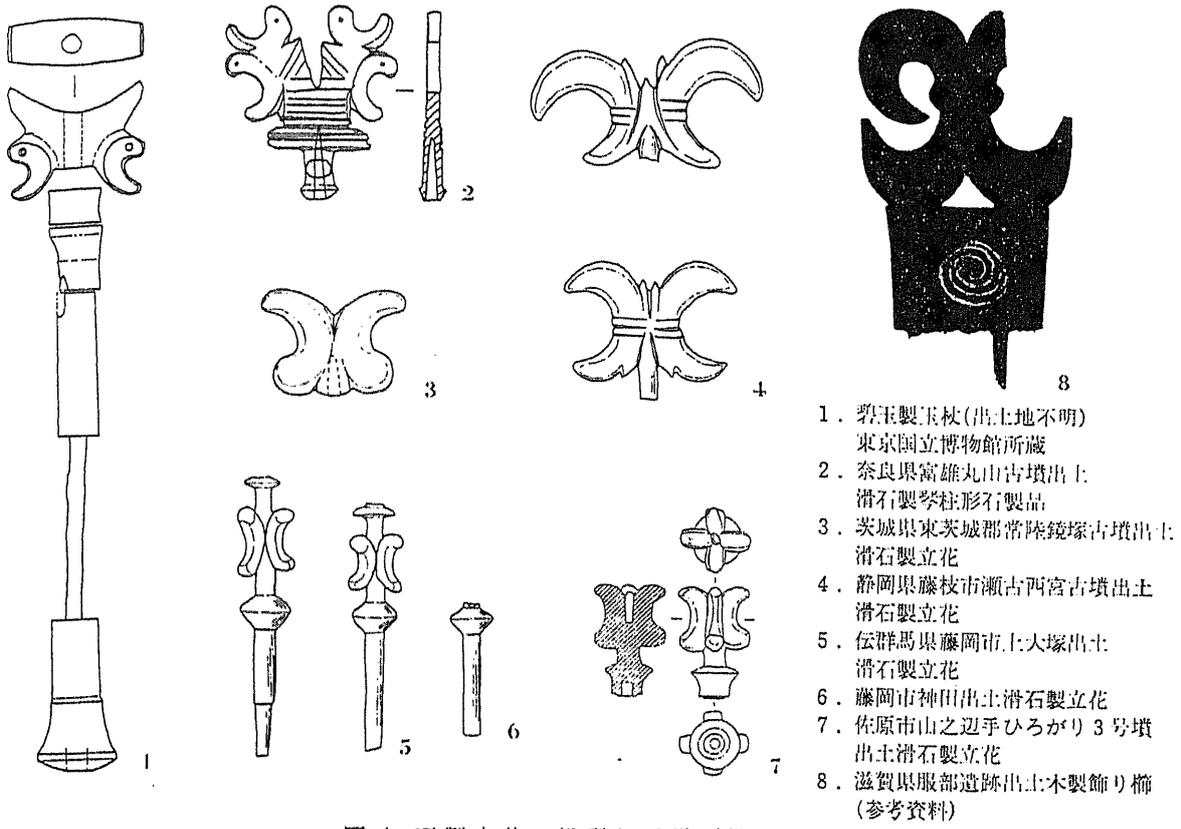
(1) 石製立花の系譜

常総型石枕は、石製立花と結び付くことで独自の展開を示し、その形態も変化したといえる。高縁の発達と立花孔に見る形態的な変遷を促すに至った背景には、立花を重視した葬送儀礼を有する地域的な共通基盤が存在したと考える。図4は、東国の石製立花の祖型と系譜を示している。東国の石製立花の初源と考えられるものの1つに常陸鏡塚古墳出土の石製品(図4-3)がある。2つの勾玉の頭部を下にして背中合わせにし、盲穴をもつた石製立花である。4個の滑石製管玉と共に、一括の滑石製品群とはやや離れて出土している。この袋状の茎を付けたタイプ、すなわち有機質の軸を差し込んで孔に立てたと考えられる例には、下総・山之辺手ひろがり3号墳に石枕を伴って出土した例があり、4個の逆位の勾玉を背中合わせに結束した形態である(図4-7)。これと良く似た石製品に、東京国立博物館所蔵の伝藤岡市上大塚出土の石製立花2点(図4-5)と藤岡市神田出土の石製立花(図4-6)がある。後者は古相の滑石製模造品類(ヤリガンナ、剣)と共に購入されており、共伴すれば4世紀後半から末葉に比定し得る。山之辺手ひろがり3号墳の勾玉が逆位であるのに対し、上大塚出土品の勾玉は正位で結束しているが、勾玉の数は等しく軸部の形態が良く似るなど同系の工房による製品であろう。山之辺手ひろがり3号墳では、袋状の茎をもつ2種と非常に短い茎をもつ型式が出土している(図6)。袋状の茎に有機質で作られた藤岡市上大塚出土例のような軸が付けば、勾玉・管玉・ソロバン玉を組み合わせた最も装飾性の高い立花となろう。袋状の茎をもつ石製立花は5世紀前葉から中葉の姉崎二子塚古墳出土の石製立花の中にもあり、また、石製の短い軸をもつ型式と長い軸をもつ型式が並存しているのを見ると、全体の高さや装飾の構成が異なる立花が厳密に使い分けられて使用されたことが考えられる。また、この多種類の玉を結んだ初期の石製立花の形態は、「たまむすび」を具象化した初現的な姿ではないかと思われる。

一方、碧玉製の玉杖、および琴柱形石製品の中にも勾玉を背中中で合わせた形態のものがある。大和・奈良市富雄丸山古墳の滑石製琴柱形石製品の1つに4個の勾玉を2個ずつ角状突起に結合させた形態のものが見られる(図4-2)。軸は短く袋状を成し、下端にソロバン玉風の表現をもつなど、上記の石製立花と極めて親縁性をもつ造りである。

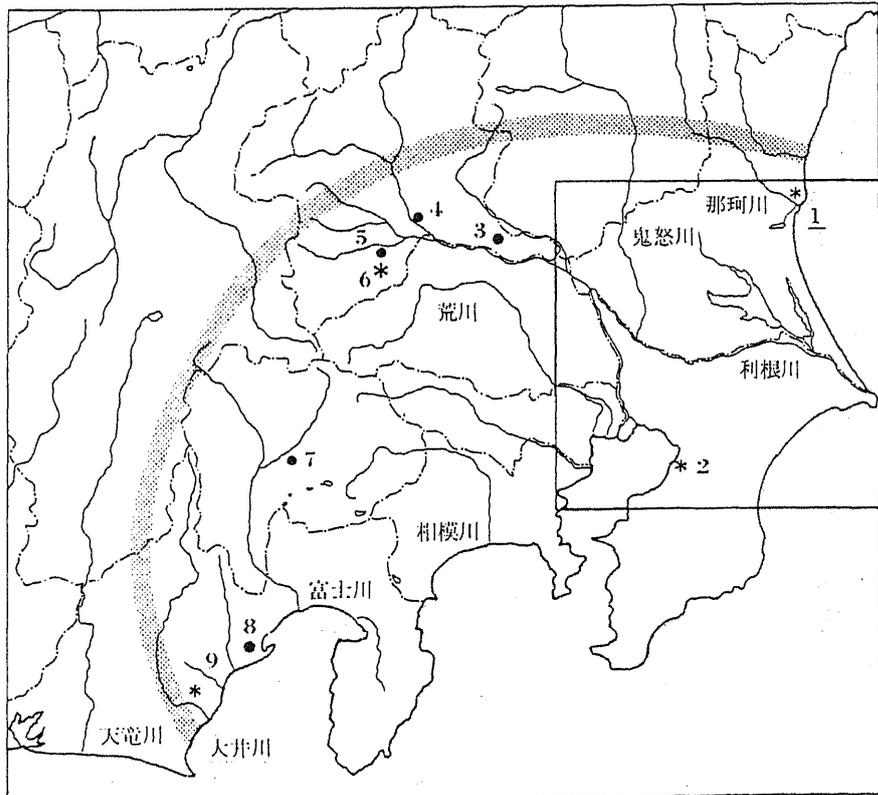
一對のものを背中合わせにして結んだ意匠は、既に弥生時代後期の飾り櫛(近江・守山市服部遺跡、図4-8)にある。藤枝市瀬古西宮古墳出土の石製立花がこれに似た意匠をもつ(図4-4)が、服部遺跡の例との関連にはなお間を繋ぐ資料が必要である。しかし、この飾り櫛は、勾玉形出現以前にも木製立花のようなものが存在したことを予見させる資料である。木製立花の想定は、立花孔をもちながら石製立花を伴わない常総型石枕の立花孔の解釈に有効である。木製の立花も一貫して存在した可能性は充分考えられる。

立花の意匠を弥生時代後期に遡って求め得るとしても、石製立花はやはり古墳時代前期の碧玉製品の影響下に作られた葬送用の石製品であるといえよう。また、初期の石製立花



1. 碧玉製玉杖(出土地不明)
東京国立博物館所蔵
2. 奈良県富雄丸山古墳出土
滑石製琴柱形石製品
3. 茨城県東茨城郡常陸鏡塚古墳出土
滑石製立花
4. 静岡県藤枝市瀬古西宮古墳出土
滑石製立花
5. 佐群馬県藤岡市上大塚出土
滑石製立花
6. 藤岡市神田出土滑石製立花
7. 佐原市山之辺手ひろがり3号墳
出土滑石製立花
8. 滋賀県服部遺跡出土木製飾り櫛
(参考資料)

図4 石製立花の祖型と系譜(縮尺不同)



1. 常陸鏡塚古墳
 2. 七廻塚古墳
 3. 大泉町寄木戸古墳
 4. 前橋稲荷山古墳
 5. 白石稲荷山古墳
 6. 藤岡市上大塚
 7. 大丸山古墳
 8. 麓山神社後古墳
 9. 瀬古西宮1号墳
- * 石製立花
● 石枕
枠内は図6で拡大

図5 石製立花・常陸型石枕の分布地域

が石枕を伴わないことから常総型石枕の成立より先行して、刳抜式木棺と木製枕の組み合わせと共に樹立して用いられたことが窺える。石製立花の分布範囲は、駿河湾の西側から毛野地域を越えて常陸の那珂川河口域に及んでいる（図5）。この範囲の石枕を見ると、形態が様々で常総以外の地域には特に集中した分布は見られない。わずかに毛野が他に比べて数が多いというに留まる。一方、滑石製模造品の製作に関して見れば、毛野は下総に優るとも劣らない中心的な地域である。古墳出土品を中心とした滑石製品は、毛野地域の方が卓越し、より畿内的な要素が強いといえよう。しかし、4世紀後葉頃には初期立花を始め滑石製の複合文様をもつ大型石釧が分布するなど両地域特有の共通点をもっている。この2地域の滑石製品製作が大きく異なった方向を目指すのは常総型石枕製作以降であると思われる。

（2）常総型石枕の編年—石枕の東国化—（図6）

石枕造り付け石棺の存在しない常総地域で石枕だけが唐突に出現したのではなく、その前提には木製の枕が存在したことは想像に難くない。この地域での出土例はないが、1989年に発掘調査された兵庫県保郡御津町の権現山51号墳では、竪穴式石室の割竹形木棺内に赤彩された長方形の木製枕が検出されている。権現山51号墳には特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪と5面の舶載三角縁神獸鏡が共存し、古墳時代前期古段階の吉備と畿内中枢との関連を示す新資料を提供したことで注目されるが、刳抜式木棺に伴う木製枕が明瞭な形で検出された初めての例でもある。これを石棺に置き換えると、舟形石棺に嵌め込まれ多量の水銀朱を塗布していた新庄天神山古墳、向野田古墳の石枕が想起される。前期新段階になると、畿内以西では刳抜式石棺の時代を迎える。当時盛行していたのは、石枕そのものではなく枕造り付けの「石棺」であったといえよう。刳抜式石棺製作の条件が満たされない常総地域では、それに替わって枕造り付けの刳抜式木棺が用いられたことが考えられる。木棺頭部で、木製枕とその周縁に立花を樹立する孔を想定すれば、常陸鏡塚のように石枕を伴わない石製立花の用途も石枕出現以降と同様に解釈できる。前に触れたように枕造り付け石棺の盛行期は4世紀の中頃にあり、遅くともこの頃には枕造り付け木棺が導入されていたであろう。利根川流域の前期古墳・大日山古墳（全長58mの前方後円墳）が木炭塚で、舟形木棺を内部施設としているのは、この地域の石枕出現以前の様相を物語る例として極めて示唆的である。そこで、石枕出現以前の石製立花による葬送儀礼が行われた段階を第I段階としたい。

常総で最も古い石枕と石製立花の組み合わせは佐原市山之辺手ひろがり3号墳出土品である。石製立花は先に触れたように、その祖形と考えられる碧玉製品の流れを汲む特徴を残している。共伴した遺物には滑石製の勾玉と白玉を含むが、硬玉製勾玉・ガラス製管玉などの玉類を主体にしており、滑石製の白玉側面も中央部に稜をもつていねいな造りのものが9割以上を占めている。常陸鏡塚古墳に極めて近い年代が考えられる。常陸鏡塚古墳は、古相の滑石製模造品、突出するタガをもつ特異な円筒埴輪の存在から4世紀後半頃の年代に比定できる。手ひろがり3号墳は、これに若干遅れて4世紀末葉頃に位置付けられる。この段階の石枕そのものには立花孔がなく、石枕の外縁の木棺部分に立花を立てた鏡塚と同様の想定が可能である。石枕の形態は楕円形に近い箕形でその基部に頭受部を造り出し、まだ高縁をもたない単純な形態であるが、頭受部・頸受部・基底部底面を磨いて仕

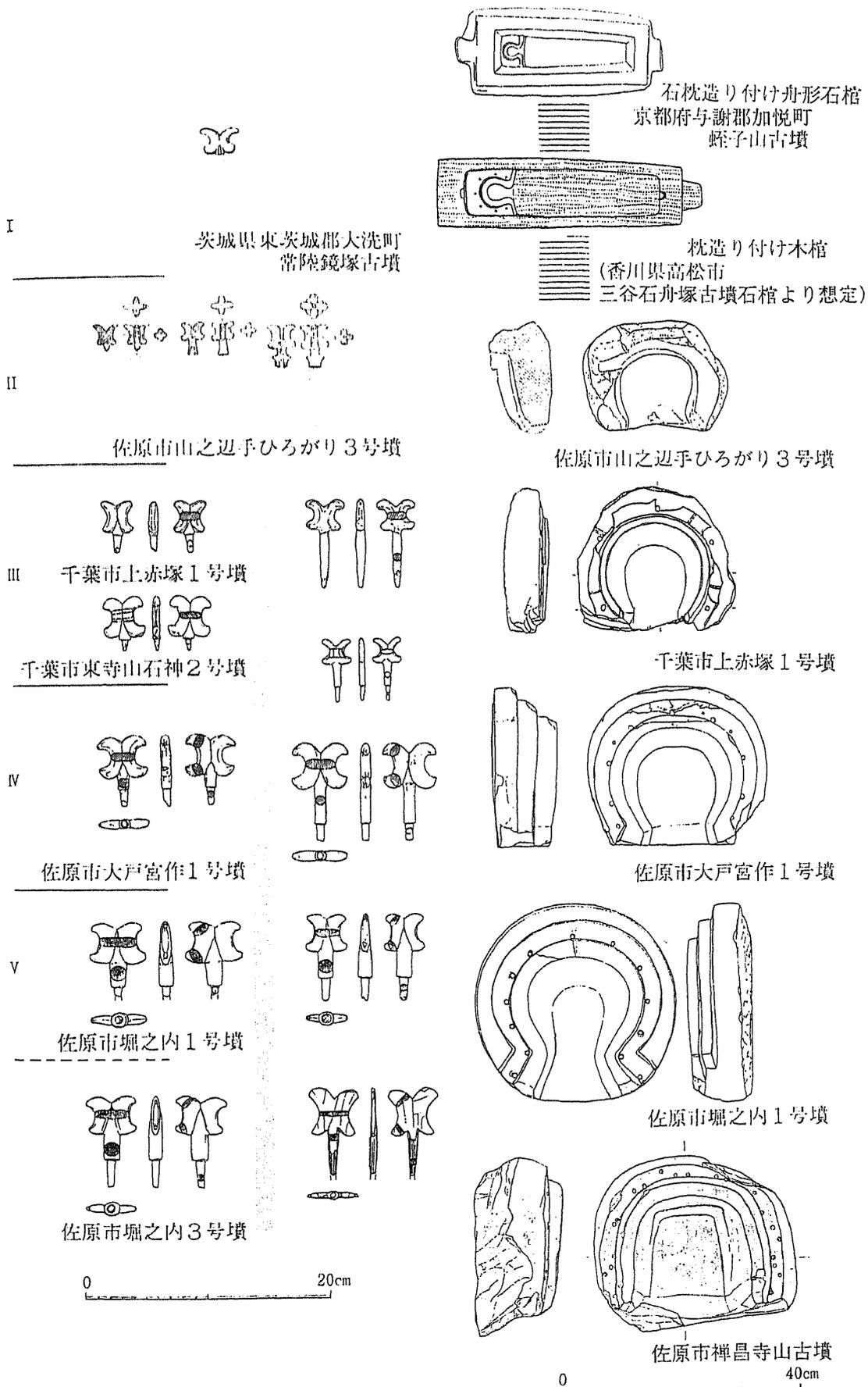


図6 石製立花と石枕の変遷

上げた丁寧な造りである。

立花孔と高縁をもつ石枕は、千葉市上赤塚1号墳、東寺山石神2号墳に出現する。いずれも高縁を1段もつ型式であるが、上赤塚1号の例には基底部の平坦面に鍵手文風の浮彫がある。多量の滑石製模造品と鉄製農耕具、鉄製模造品を副葬する時期で、5世紀始め頃に位置付け得る。石製立花は、上記のように極端に茎が短く有機質の柄に差し込んで使用したと思われる形態のもの、石製の軸が長く伸びる形態、および短い石製の軸が付く形態の3種がそろっている。石製の軸が長い型式と短い型式の石製立花はこれ以降併存していく。この立花孔をもつ高縁1段型式の成立を第Ⅲ段階としたい。この段階には上総・養老川南岸の姉崎に2例の出土があり、常総型石枕が南下した時期でもある。

石枕の形態が最も多様化し、盛行するのは5世紀前葉から中葉にかかる時期である。この時期には、養老川流域の主墳・姉崎二子塚に石枕が採用されるが、高縁と基底面の側面に直弧文を彫刻した特別な製品である。石材は房総南部嶺岡山溪産出の黒色で光沢のある蛇紋岩系の石材と見られ、他の滑石系統の石材とは大きく異なる。他に、この時期の上総の代表的な石製品には木更津市長州塚古墳の出土品があり、石製刀子全面に彫刻された直弧文にも同系の工人の存在を予見させるものがある。小稿では、石材の相違、整形工具痕や仕上げの技法を詳細に検討するには至っていないが、下総の玉造り工人とは別系統の石工、あるいは下総の玉造り工人移動の足跡を追う手掛かりになるであろう。この段階の石枕の特徴は、姉崎二子塚例にも見られる高縁2段型式の成立である。これを第Ⅳ段階としたい。発掘調査された例には佐原市大戸宮作1号墳があり、滑石製の刀子・白玉・紡錘車形石製品、鉄剣、鉄製の刀子が副葬されており、他に碧玉製管玉・琥珀玉・ガラス玉から成る玉類がある。白玉1,044個のうち稜線をもつものは486個と半数以下に減り、第2段階に比べて玉類の組み合わせも新しい。この側面中央に稜をもつ滑石製白玉は、ソロバン玉の存在を意識して作られたもので、ソロバン玉の消失と共に稜を失っていくものと思われる。なお、下総・神崎町小松出土の高縁3段型式も2段型式の変容形としてこの時期に作られた可能性が強い。Ⅳ段階の最後に位置付けられる古墳には、横矧板鋌留短甲をもつ下総・我孫子市金塚古墳が挙げられる。金塚古墳の石枕は、頸受部が外方に大きく開いて伸びる高縁2段型式である。石枕の大型化に対応して素材の大きさに比べて枕を大きく作りすぎたため、周囲の欠失部分が多く整形も雑である。

金塚古墳の石枕の形態に類似した例の1つに佐原市堀之内1号墳が挙げられる。立花の勾玉部がかなり扁平になり、軸部の径の方が太くなっている。この段階になると、石枕の製作は激減したようであり、以後滑石製品使用祭祀の終息と共に石枕も終焉を迎えることになる。この変換期は5世紀末葉から6世紀初頭にあり、堀之内古墳群の中では1号墳から3号墳へ移行して石製立花の形骸化も進む。この段階を第Ⅴ段階として捉えた。常総型石枕の最終段階の年代基準資料となるのが佐原市禅昌寺山古墳である。石枕は赤・白・緑に塗り分けられているのが特徴で、素材の欠失部にも赤色塗彩が及んでいることから当初より欠損した石材を使用したことが分かる。高縁の整形は雑で立花孔の間隔も極めて乱れている。孔の数は14孔あり、そのうち使用に足りない極めて浅い孔が8孔ある。全長60～70mの前方後円墳と推定されており、横矧板鋌留衝角付冑・冑甲・f字形鏡板付轡・馬鐸・剣菱形杏葉・鉄製武器類などの副葬品の示す年代観は6世紀前半代にある。石枕を用いた、石枕製作中心地最後の地域首長といえよう。

常総型石枕と石製立花の変遷を概観すると、石枕・石製立花共に次第に大型化する傾向にあり、本来主体的に扱われていた石製立花が形骸化していくのとは逆に、石枕の形態が多様な要素を加えていくという特徴が見られる。その盛行期は上記のⅢ・Ⅳ段階にあり、その時期に上総の一部にも波及し、常陸では那珂川流域の東茨城郡内原町まで北上する。しかし、Ⅳ段階になると滑石製品全体が衰退の傾向にあり、鉄製武器・武具を主体とする副葬品がこれに替わっていく。我孫子市金塚古墳はこの変換期に位置するといえる。

5 常総型石枕成立の基盤

さて、ここで常総型石枕と石製立花を古墳副葬の滑石製品全体の変遷の中に置いて、その成立基盤を検討してみたい。

古墳の副葬品への滑石製品の使用は、前期新段階の後半に始まり、後期の初頭には終わっている。滑石製品の初現は、三重県石山古墳・奈良県富雄丸山古墳・茨城県鏡塚古墳に見られるように碧玉製品の副葬に替わって滑石製品の同種多量副葬が始まった時期で4世紀後半代の早い段階に位置付けられる。石製立花の初現に関わる製品として着目した滑石製琴柱形石製品(図4-2)は、富雄丸山古墳の出土品であり、常陸鏡塚古墳の石製立花(図4-3)と共に滑石製品副葬の開始時期に出現していることになる。また、常総型石枕分布地域の中心となる利根川下流域にも小見川町一之分目出土の滑石製品があり、長い茎をもつ刀子・短冊形斧・袋状柄付斧がある。全体に丸みのある古相の造りである。これらの滑石製品は、小文で設定した石製立花のⅠ段階にほぼ並行すると考えられる。

滑石製品の模造化が多種多様になり、農耕具中心の模造品に勾玉や鏡が加わって、さらに同種多量の副葬ないし埋納が行われるのが中期前半である。この中でも古相の例には奈良県巢山古墳・室宮山古墳を挙げ得る。東国では群馬県剣崎天神山古墳・白石稻荷山古墳・野毛大塚古墳があり、常総では石製立花と石枕が結合する時期である。小文のⅡ・Ⅲ段階に対応し、4世紀末葉から5世紀前半代に比定している。また、刳抜式石棺が竪穴式石室から分離して直接土中に納められるようになるのがⅡ段階に対応することから、刳抜式石棺分布圏では刳抜式木棺の直葬もこの頃に定着したと考えられる。但し、常総では、竪穴式石室が導入されなかったため刳抜式木棺の直葬はいち早くⅠ段階にさかのぼって導入されている。滑石製品盛行期の後半は、大阪府カトンボ山古墳・京都府久津川車塚に代表される時期である。東国では、群馬県赤堀茶臼山古墳・同おそね塚古墳・下総多古台古墳が挙げられる。刀子は粗製のもので構成され、剣形に小型粗製化が見られ、有孔円板が新しく加わっている。石製立花と石枕のⅣ段階が対応し、5世紀前葉から中葉にかかる時期に比定した。全国的に鉄製武器・武具が副葬品の中心になる時期である。滑石製品の古墳への副葬は、中期後半には衰退している。白石太一郎氏は古墳の石製模造品の変遷について触れられた論文の中で滑石製模造品衰退期の古墳として群馬県梁瀬二子塚古墳・茨城県丸山4号墳を挙げておられる。この頃には東国以西では滑石製模造品の副葬はほとんど見られなくなっており、東国で滑石製品が特に遅くまで重用された側面が現われていると思われる。上記の2基は、いずれも東国では古式の横穴式石室をもつ古墳で、石製模造品の粗製化がかなり進み、剣・有孔円板が組成の中心になっており、5世紀末葉から6世紀前

半に位置付けられる。石製立花・石枕出土のⅤ段階の古墳が対応し、堀之内1号墳から同3号墳を経て禅昌寺山古墳で終末を迎えている。その下限は、滑石製模造品の古墳への供献・副葬の終息と軌を一にするといえよう。

一方、毛野地域と常総地域は東国における滑石製品の2大分布地域である。石製立花と石枕が毛野地域で定着しなかったのに対し、常総で定着・発展したことに両地域の滑石製品の用いられ方に大きな差が生じていると言えよう。すなわち、導入段階では古式の石製立花・特殊な滑石製大型石釧等を共有して、葬送儀礼にも共通の文化的基盤を反映していたと思われる地域が小文のⅢ段階以降、すなわち中期全般にわたってそれぞれ独自の文化・葬祭の基盤を形成していく状況が滑石製品の使われ方にも現われている。この相違は中期円筒埴輪の系譜にも見られ、Ⅲ段階後半からⅣ段階前半にかけての毛野地域では、有黒斑のヨコハケ2次調整の技法をもつ円筒埴輪が主要古墳に用いられるのに対して、常総では有黒斑タテハケ2次調整の円筒埴輪が主要古墳に樹立される。また、Ⅳ段階に対応する毛野地域のお富士山古墳に山城・久津川車塚古墳例に近い型式の長持形石棺が用いられるのに対し、Ⅲ段階の下総・三之分目の豊浦大塚山古墳の石棺は、縄掛突起の形態等が全く異なる異系統の組み合せ式石棺である。

このような相違が顕在化する中で、(古)香取海を取り巻く常総地域の中心部(図6参照)は、石製立花と石枕を結合させた独自の葬送様式を完成させた地域色をもつようになる。これはまた、Ⅲ・Ⅳ段階に石枕の波及した上総、および下総西南部とも異なる地域性となっていく。上総では石枕は定着せず、工人の定着が極めて短期間であったことが窺える。姉崎二子塚の石枕が滑石ではなく蛇紋岩系統の製品であることは前に触れたが、下総地域の滑石は、印旛沼水系の鹿島川沿いに南下して上赤塚1号墳の所在する村田川流域まで達したルートは考えられるが、あくまでも初期の段階での単発的な移動であったと思われる。それ以南への移動はさらに希薄であったと考えられる。むしろ、上総の石枕は静岡市麓山神社後古墳や大泉町寄木戸古墳の例のように周辺部に波及した常総型石枕として捉えるのが妥当であろう。かつて甘粕健氏が述べられたような下海上と上海上の政治的な連合政権を象徴する遺物とするには両地域の様相に相違点が多く、地域的な結び付きには無理があると思われる。また、この滑石製品に見られる分布の相違は、常総地域の後期古墳で盛んに用いられた雲母片岩(通称筑波石)の箱式石棺の分布とも一致し現在のところその南限は村田川の北岸にあり、しかも単発的な分布である。また、豊浦大塚山古墳と長州塚古墳の石棺材にも雲母片岩と凝灰質砂岩(通称房州石)の違いがある。

常総地域の石製立花と石枕を用いた葬送儀礼の復元・考察は沼沢豊氏による千葉市東寺山石神2号墳の調査・研究報告によって深められた。特に、埋葬施設内の石枕と石製立花の出土状態に関して多くの知見が示されている。沼沢氏が石製立花のネズミの歯形から「殯」儀礼の一形態を想定した作業は、文献に見える「殯」儀礼を考古学資料と結び付けた点で示唆的であった。すなわち、形式的に古い立花に地上で棲息するネズミの歯形が付いているのは、被葬者が一定期間の「殯」を行うための建物、あるいは棺の中に安置されている間に立花を飾って儀礼を行っている間の出来事であったとするものである。また、石枕の下に立花が置かれていたことも埋葬以前の使用を物語る証左とされた。石枕の下に立花を置く例は、その後調査された上赤塚1号墳でも確認されている。しかし、石棺造り付けの枕では埋葬以前に使われたことを物語る証左がなく、必ずしも石枕が「殯」と結び

付くとは言えない。むしろ石製立花が儀礼の全期間を通じて使用された一種の葬具であったことを示しているといえよう。立花は、埋葬施設内で石製模造品と共伴するが一緒にまとめられた状態で出土した例はなく、他の石製品類とは別に扱われていたことがわかる。

一方、小文では、石製立花の分布から木製の枕と立花の組み合わせを想定して、常総型石枕出現以前に立花を用いた儀礼を共有する地域が存在したことを推定した。すなわち、葬送に際して石製立花を用いた地域は、石枕が立花と結びついて特殊化する前の政治・文化・社会的な結びつきの強い地域であることに着目したいのである。これは弥生時代以来の文物の交流基盤でもある。石製立花は、滑石製品製作と古墳への副葬という新しい波に乗って、まずこの地域の葬送儀礼の中に取り入れられ、次の段階で関東一円に石枕が導入されたものと考えられる。

最後に、常総における当時の主要古墳と立花・石枕出土古墳の墳形・規模・副葬品に関する相違について確認しておきたい。墳形については既に小野山節氏による分析があり、石製模造品をもつ古墳を5期区分して、2期・5世紀初頭（本文のⅢ段階）と4期・5世紀後半（本文のⅣ段階）に畿内王朝による墳形規制が存在するために該期の東国には帆立貝形古墳と円墳しか存在しないとする見解を示されている。しかし、大型前方後円墳の調査例が極めて少ないためまだ検討の余地が残されていると思われる。また、小野山氏が3期・5世紀中葉（本文のⅣ段階）の前方後円墳の復活例とした白石稻荷山古墳は氏の2期にさかのぼり、5期・5世紀末葉から6世紀前半（本文のⅤ段階以降）の前方後円墳とした姉崎二子塚古墳は、氏の3期にさかのぼる古墳であると考えている。

ここでは、常総に限って石製立花と石枕を出土した古墳の相対的な位置付けを確認することにしたい。前方後円墳については、Ⅰ段階、Ⅳ段階、Ⅴ段階に1基ずつ出土例がある。常陸鏡塚古墳（全長105m）、姉崎二子塚古墳（全長110m）、禅昌寺山古墳（全長60～70m）でそれぞれ大きな河川の流域を治めた地域首長の墓と考えられる。また、Ⅰ段階の石製模造品とした小見川町一之分目出土の滑石製品が竈塚古墳等の前方後円墳に帰属した可能性もあり、Ⅲ段階に並行する全長120mの前方後円墳・豊浦大塚山古墳の第2の内部施設に石枕が納められている可能性も充分ある。その他の大型古墳では、Ⅲ段階の千葉市七廻り塚古墳が径54mの円墳で、円墳の中で傑出した規模をもっている。常総型石枕・石製立花を出土した古墳に最も多いのは、25～30mの円墳である。墳形・規模の分かっている14基中9基はこの規模の円墳によって占められている。また、佐原市山之辺手ひろがり3号墳（Ⅱ段階）、大戸宮作1号墳（Ⅳ段階）は、いずれも小規模な方墳（前者が20×14mの長方墳、後者が1辺14m）から石枕が出土した稀少例である。

ⅠからⅤ段階を通じて、前方後円墳からの出土例はそれぞれの画期の頂点に位置するもの、あるいは特殊な例であり、常総型石枕を用いた葬送儀礼の担い手は、中規模の古墳の被葬者たちであったといえる。特に（古）香取海周辺地域では、内海の水運と石材の共有によって培われた地縁的・文化的つながりの強い集団が存在したことが窺える。そこに滑石製品の製作というインパクトが加わり、独自の滑石製品文化圏を築くことになるが、その素地には前期前半から碧玉製管玉等の玉作り工人が定住し、石材が入手できたという条件がある。図6に示したように常総型石枕の分布に玉作り遺跡の分布を重ねてみると、（古）香取海周辺で祭祀用の玉を作っていた集団の分布と一致する。常総型石枕祭祀の担い手となった被葬者の中には、それらの石工・石材を直接指揮・管理した在地の有力者た

ちがおり、100 m級の前方後円墳の被葬者の下にあつて政治色の強いまとまりを維持していたと思われる。IV段階になると、それらの中規模円墳の被葬者は、武人的性格を強めて畿内の中央集権的な集団編成の中に組み込まれていくに従い、地縁的・文化的な結びつきは表面上弱まっているが、後期に雲母片岩の箱式石棺を墳丘裾部に配置することによって再び地域色を表出するのである。

6 分析の意義

石枕造り付け石棺の年代を代表的な3地域で検討した結果、それらはほぼ4世紀代を通じて展開し、各地で出現した石棺嵌め込み式石枕とが並行して存在することを明らかにした。枕を抜き出して検討すると、肥後・讃岐・吉備の石工には系譜上の親縁関係が認められた。さらに、石枕周縁の平坦面あるいは段の加飾化から讃岐と大和との関連に特に着目している。大和の前期王陵域である大和古墳群から出土した2例の独立した石枕の存在は、常総型石枕出現の前段階ではあるが、大いに注目してよいだろう。

また、石枕造り付け石棺と木棺に伴う独立した石枕の存続期間と変遷にはいくつかの接点があり、石枕造り付け石棺が隣接地域へ波及した4世紀後半からの動きを受けて東国地域への石枕の導入もあったと予測できる。この変換期には東国でも滑石製品の製作が始まったことに着目した。これは、おそらく工人の移動があつたものと思われる。しかし、在来の葬送儀礼の中で枕部分＝頭部を特に重視する要素がなければ、常総の石枕祭祀は成立・発展しなかつたであろう。その儀礼で最も重要な役割を果たしたのが立花であり、東国の初期石製模造品と初期の石製立花の関連が強いことから、石枕導入以前から刳抜式木棺に立花を用いる葬送儀礼が行われていたことが窺える。それらが碧玉あるいは滑石で作られるようになった時点で畿内的な色彩を残したのが毛野地域であるのに対し、独自の発展を遂げ、石枕と組み合わせると共に高縁と立花孔の採用という地域的な伝統を誇示したのが常総の石枕祭祀である。

さらに、視野を広げて見れば、古墳時代の関東地方は、東京湾沿岸地域を別にして、既に4世紀代には鬼怒川を挟んで東西に対峙する二大文化圏を形成していると言えよう。大型古墳の分布などから毛野の勢力のみが著しく突出したとする従来の定説は見直す段階にある。しかしなお、石製立花の分布などからこの段階では大きな地域圏としてのまとまりは存在したことが窺える。続く5世紀前半代の中規模古墳を中心にその盛期を迎えた常総型石枕の成立と展開は、この東西二極構造の潜在的な違いを視覚的、より直接的に示す好例で、独自の地域圏の形成や発展を如実に物語っている。

石枕による紐帯が崩れた後も、この(古)香取海を中心とした地域圏の紐帯が存在したことは、下総型埴輪の分布や筑波石製箱式石棺の分布から窺うことができるが、常総型石枕の探究は、5世紀の地域と時代を代表するものとして地域史研究の中でも重要な位置を占める。

註

(1) かつて利根川下流域は、現在の霞ヶ浦・北浦・印旛沼・手賀沼がひとつの内海を形成し

ていた。この内海は、近代まで香取海という名称に名残りを留めていた。小出博氏による約一千年前の香取海の復元図（小出博「第3図千年前の利根川」『利根川と淀川』中公新書384中央公論社 1975）によれば、古墳時代の香取海もおおよそ図6のような状況にあったと考えられる。兩岸地域は、古代の行政区画で常陸・下総の2つの地域に分けられるが、それ以前には水運によって兩岸が密接に結ばれ、共通の生活圏を構成していたことが推測される。

- (2) 小林行雄「神功・応神紀の時代」『古墳文化論考』（再録）平凡社 1976（67-91頁）
- (3) 三島 格他「山下古墳調査概報」『熊本の歴史と社会』 熊本史学会編 1977（1-17頁）
- (4) 富樫卯三郎他『向野田古墳』 宇土市教育委員会 1978
- (5) 梅原末治「備前新庄天神山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』 日本古文化研究所 1938（53-56頁）
岡山県立博物館編 『おかやまの歴史と美』 岡山県立博物館 1975
- (6) 乙益重隆他『院塚古墳調査報告』 熊本県文化財調査報告第6集 1965
- (7) 高木恭二「環状縄掛突起を有する石棺について—とくにその石棺材の産地をめぐって—」
・同(2)『熊本史学』第53号・第54号 熊本史学会 1979・1980（41-58,39-52頁）
- (8) 藤田憲司「讃岐（香川県）の石棺」『倉敷考古館研究集報』第12号（財）倉敷考古館 1976（58-79頁）
- (9) 松本豊胤他編『香川の前期古墳』 日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会 1983
- (10) 津田町教育委員会の大山衛氏に同教育委員会保管の岩崎4号墳石棺枕部の拓本をお送り戴いて、文様を確認した。
- (11) 斉藤 優『足羽山の古墳』 福井考古学会 1985（復刻）
斉藤 優『改訂 松岡古墳群』 松岡町教育委員会 1979
和田晴吾「古墳時代の石工とその技術」『北陸の考古学』—石川考古学会々誌第26号—
石川考古学研究会 1983（501-534頁）
また、現地踏査の御案内を戴いた中司照世氏には、石棺の調整技法・石棺材・地域的特性など多くの御教示を受けた。
- (12) 瀬戸谷 皓他『中ノ郷・深谷古墳群』 但馬考古学研究会 1985
- (13) 常総地域の古環境と石枕の分布状況に着目した沼沢豊氏は、石枕を用いた葬制の地域的特性を指摘し、「常総型石枕」を設定した。（沼沢豊「千葉県の石枕」『房総風土記の丘年報』3 1980（34-43頁））および「東国の石枕」『古代探叢』—滝口宏先生古稀記念考古学論集— 早稲田大学出版部 1980（207-220頁）
- (14) 高木博彦『日本の石枕』 千葉県立房総風土記の丘 1979
- (15) 亀井正道「古墳出土の石枕について」『上代文化』第20輯 國學院大學考古学会 1951（29-36頁）
- (16) 大場磐雄・佐野大和『常陸鏡塚』 国学院大学考古学研究報告第1冊（綜芸舎） 1956
- (17) 原田享二「山之辺手ひろがり3号墳出土遺物」『佐原市内遺跡群発掘調査概報』II 1987年度 佐原市教育委員会 1988（27-28頁）
- (18) 村井崑雄・本村豪章・望月幹夫他『東京国立博物館図版目録』—古墳遺物篇（関東II）— 東京国立博物館 1983 図版138-1より作図（166頁）
- (19) 八賀晋「富雄丸山古墳の出土遺物」『富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』京都国立博

- 物館 1982 (1-28 頁)
- (20) 大橋信弥・山崎秀二他『服部遺跡発掘調査概報』 (財) 滋賀県文化財保護協会 1979
- (21) 前掲 (高木 1979) の『日本の石枕』23 頁掲載の図版より作図
- (22) 杉山晋作「特異な彫刻文のある石製腕飾」『古代探叢Ⅱ』—早稲田大学考古学会創立 35 周年記念考古学論集— 早稲田大学出版部 1985 (299-318 頁)
- (23) 近藤義郎編『権現山 51 号墳』 『権現山 51 号墳』刊行会 1991
- (24) 市毛勲・梶山林継・沼沢豊他『千葉県香取郡下総町大日山古墳』昭和 45 年度埋蔵文化財抄報 2 大日山古墳調査団 1971
- (25) 栗田則久「上赤塚 1 号墳」『千葉東南部ニュータウン』13 (財) 千葉県文化財センター 1982 (3-43 頁)
- (26) 杉山晋作「千葉県の石枕」—市原市発見の石枕—『史館』第 8 号 史観同人 1977 (71-73 頁)
- (27) 大場馨雄・亀井正道「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌』第 37 巻第 3 号 1951 (31-46 頁)
- 金子皓彦・青木豊『國學院大學考古学資料館要覧』—関東の古墳時代文化— 國學院大學考古学資料館 1976
- (28) 森本六爾「直弧文を有する石製刀子」『古代文化研究』第 2 号 古代文化研究会 1925 (87-99 頁)
- 梶山林継「木更津市長州塚出土品と伝える石製模造品」『上総菅生遺跡』 中央公論美術出版 1980 (162-163 頁)
- (29) 原田享二「大戸宮作古墳の発掘調査」(原田 1988) (12-26 頁)
- (30) 村井・雄・亀井正道・本村豪章・望月幹夫・井上洋一他『東京国立博物館図版目録』—古墳遺物篇 (関東Ⅲ)— 東京国立博物館 1986
- (31) 甘粕健「金塚古墳」『我孫子古墳群』 東京大学文学部考古学研究室編 我孫子町教育委員会 1969 (58-83 頁)
- (32) 原田享二「堀之内 1 号墳出土遺物」「堀之内 3 号墳出土石製立花」 (原田 1988) (30-31 頁)
- (33) 杉山晋作・大久保奈奈・荻悦久「佐原市・禅昌寺山古墳の遺物」『古代』第 83 号 早稲田大学考古学会 1987 (110-139 頁)
- (34) 東京国立博物館蔵 (村井他 1986)
- (35) 前掲の下総町大日山古墳 (短冊形鉄斧・袋状柄付鉄斧・鉄剣・玉類出土)、手賀沼南岸の葛飾郡沼南町北作 1 号墳 (短冊形状鉄斧・ヤリガンナ・鉄剣・銅鏃・鉄鏃・大刀出土の古墳、金子浩昌・中村恵次・市毛勲「千葉県東葛飾郡沼南村片山古墳群の調査」『古代』第 33 号 早稲田大学考古学会 1959 (23-39 頁)) が挙げられる。
- (36) 白石太一郎「神まつりと古墳の祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 7 集— 共同研究「古代の祭祀と信仰」本篇— 国立歴史民俗博物館 1985 (79-114 頁)
- (37) 安藤鴻基他「千葉県香取郡小見川町三之分目大塚山古墳の長持形石棺遺材」『古代』第 64 号 早稲田大学考古学会 1978 (35-45 頁)
- なお、千葉県地方課編『千葉県町村合併史』(上) (大和学芸図書株式会社 1979) によれば、豊浦大塚山の名称は、1951 (昭和 26) 年の町村合併によって小見川町となる以前

の所在地名「香取郡豊浦村」による。豊浦村は明治 21 年に設置されたが、当地区内にあった港が往時「豊浦港」と称せられたという口伝によるものである。この点についての見解は、田中新史氏に御教示をいただいた。

- (38) 甘粕 健「養老川水系の古墳分布と山王山古墳の歴史的 성격」『上総山王山古墳』 市原市教育委員会 1980 (196-217 頁)
- (39) 沼沢 豊「石神 2 号墳の調査」「石神 2 号墳の諸問題」『東寺山石神遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1977 (31-101, 118-154 頁)
- (40) 小野山 節「千葉市石神 2 号墳の年代論の意義」『東寺山石神遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1977 (534-541 頁)
- (41) 平野 功「豊浦古墳群の概略及び調査に至る経過」『千葉県香取郡小見川町 三之分目大塚山古墳発掘調査報告書』 小見川町教育委員会 1987 (5-9 頁)
- (42) 千葉市史編纂委員会「七廻り塚古墳」『千葉市史』史料編 1 千葉市 1976 (221-226 頁)
- (43) 田中新史氏の御教示を受けた。
- (44) 轟 俊二郎 『埴輪研究』第 1 冊 1973

第2節 総武の内海東岸の大型首長墓

1 高柳銚子塚古墳の出現

(1) 変革期の首長墓

古東海道の東の端に位置する房総は、文物の流れが西から東へ向かうようになった弥生時代から、海路の終着地点として特性を示すようになる。黒潮に乗って西から波及する新しい文物は東京湾に流入してその東岸に上陸する。そこにはいち早く新しい文化が、時には遠来の来訪者が入ってくる。

木更津市の小櫃川下流域にひろがる海岸平野もそのような西からの文化の前進基地のひとつである。古墳時代になると、それは畿内の中央勢力にとって政治的な前進基地となり、東国への勢力拡大の足がかりを求めて在来の有力者と関わるようになる。そのような動きは古墳時代の出現期から終末期に至るまでほとんど絶えることがない。ここでは、この前進基地に時代の節目を画して築かれ、今はその姿がほとんど消えかけている前方後円墳を復原し、地域と時代という時空間にもどす作業を試みたい。

倭王権が勢力拡大のために、積極的に新しい技術と文化を求めて朝鮮半島に働きかけた時代、列島各地で技術革新が進み、それが定着して集落の生活にも変化がもたらされる。この倭王権の強大な権力を背景にした列島規模の技術革新の時代を古墳時代中期として認識している。この時代の設定には、古墳時代全般をどのように分けるかという前提が必要である。まず、この時代を出現期・前期・中期・後期・終末期の5期に区分し、3世紀中葉から7世紀後葉の400年あまりの時間幅において整理することにした。

前期から中期への変化は、朝鮮半島南部との交渉が古墳出土品に色濃く反映されるが、筒形銅器・琴柱形石製品・石製腕飾類など前期から中期初頭に連続するものも少なくなく、また、前期後半から加わって中期につながるものもある。そこで、中期の指標を農工具・勾玉・白玉の滑石製祭器化と鉄製祭器の出現とし、川西編年Ⅱ期埴輪の新段階の主要古墳にその初源を求めた。金蔵山古墳、津堂城山古墳、石山古墳、および和泉黄金塚古墳、遊塚古墳、長良龍門寺古墳、東国では常陸鏡塚古墳がその初源期の例である。

また、中期は新技術の搬入・導入期と定着・発展期という視点から前半と後半に分けられる。中期前半の古墳の指標にはⅢ期の埴輪とこの時期を代表する埋葬施設である長持形石棺があげられ、革綴甲冑の製作技術の確立、鉄挺などの鉄素材の波及、鉄製品では曲刃鎌・蕨手刀子・鎌子などがもたらされる。前半と後半の画期には須恵器生産の本格化、それに連動したⅣ期埴輪の展開があげられ、朝鮮半島からはそれまでになく大きな文物の波が押し寄せてくる。鉄製鍛冶具、鋌留手法の甲冑・馬具、U字形鋤鍬先・最新式の曲刃鎌などの農具の出現、また帯

金具・耳飾・天冠・飾り大刀など金・銀・金銅製の華やかな装飾品が出現する。この大きな変革の時期は、菅田山古墳・大仙古墳の築造に象徴される巨大前方後円墳築造の時期でもあり、古墳時代を通じてその規模が頂点に達する。この“大王墓の時代”を倭王武までの連続性を重視して中期後半として整理したい。

このような中期の前半から後半へ大きく変動する時代に東国の前進基地に築造された首長墓に焦点をあててみたい。

(2) 墳丘の復原

高柳銚子塚古墳（以下高柳銚子塚）の重要性に着目して、削平された墳丘をはじめ本格的に復原されたのは梶山林継氏である。氏は『上総菅生遺跡』の報告のなかで木更津市域の遺跡・遺物を検討され、「木更津「長州塚」出土品と伝える石製模造品」を出土した古墳の最有力候補として高柳銚子塚を取り上げている。墳丘の復原に当たっては、昭和20年代まで使用されていた公図などから二つの

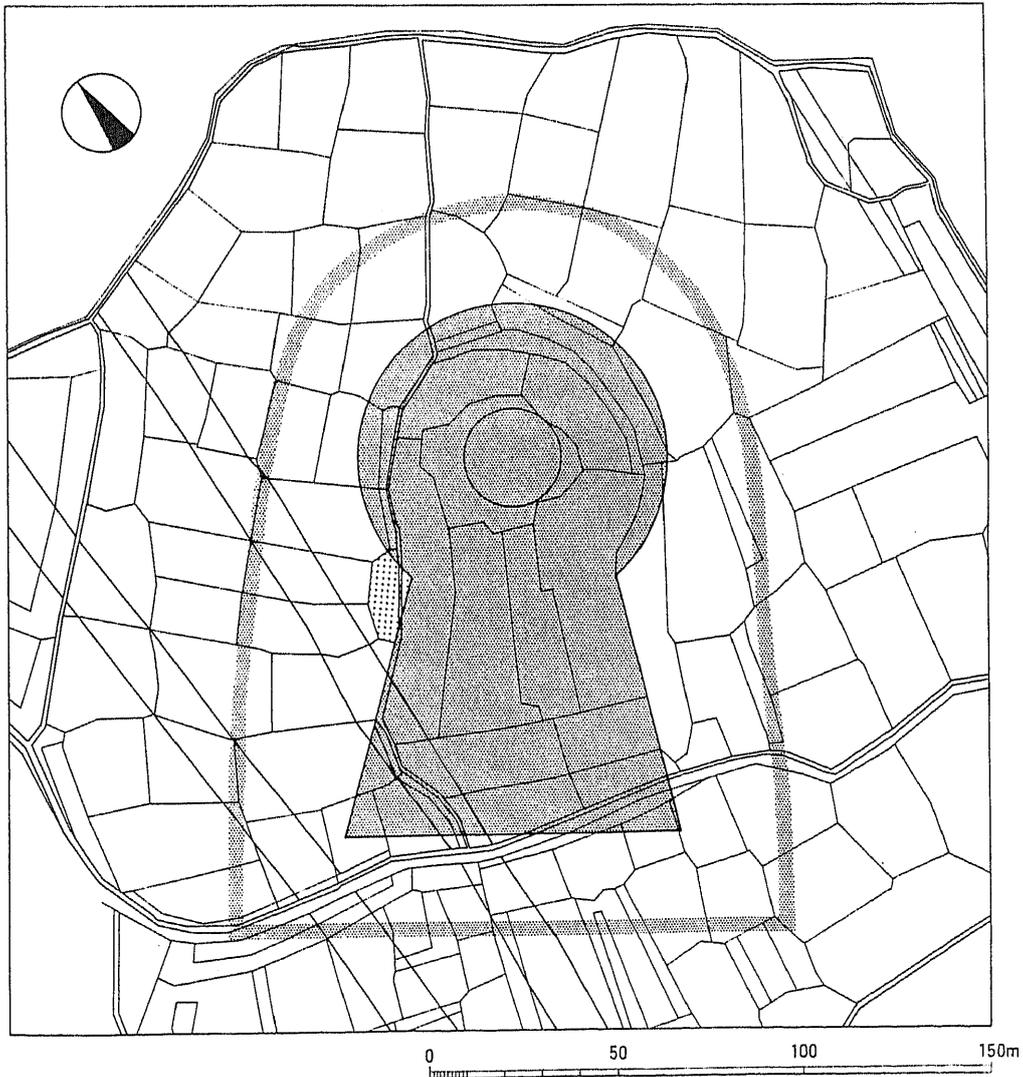


図1 高柳銚子塚古墳墳丘復原（1945年以前の公図『地籍図』－高柳（一）字塚越－による）

復原案を示された。ひとつは、「墳麓部にテラス状の部分が付加し、その外に周溝をもつもので、テラスを含め、墳丘主軸長132.25m、後円部径92m、前方部幅97.5m、周溝主軸長161m、後円部側の径115m、前方部側の幅139m」。もう一方は、「テラス部分を除いた主軸長109.25mの部分」を墳丘とする案である。このいずれの案にしても木更津市域で最大級の墳丘であることを提示された。

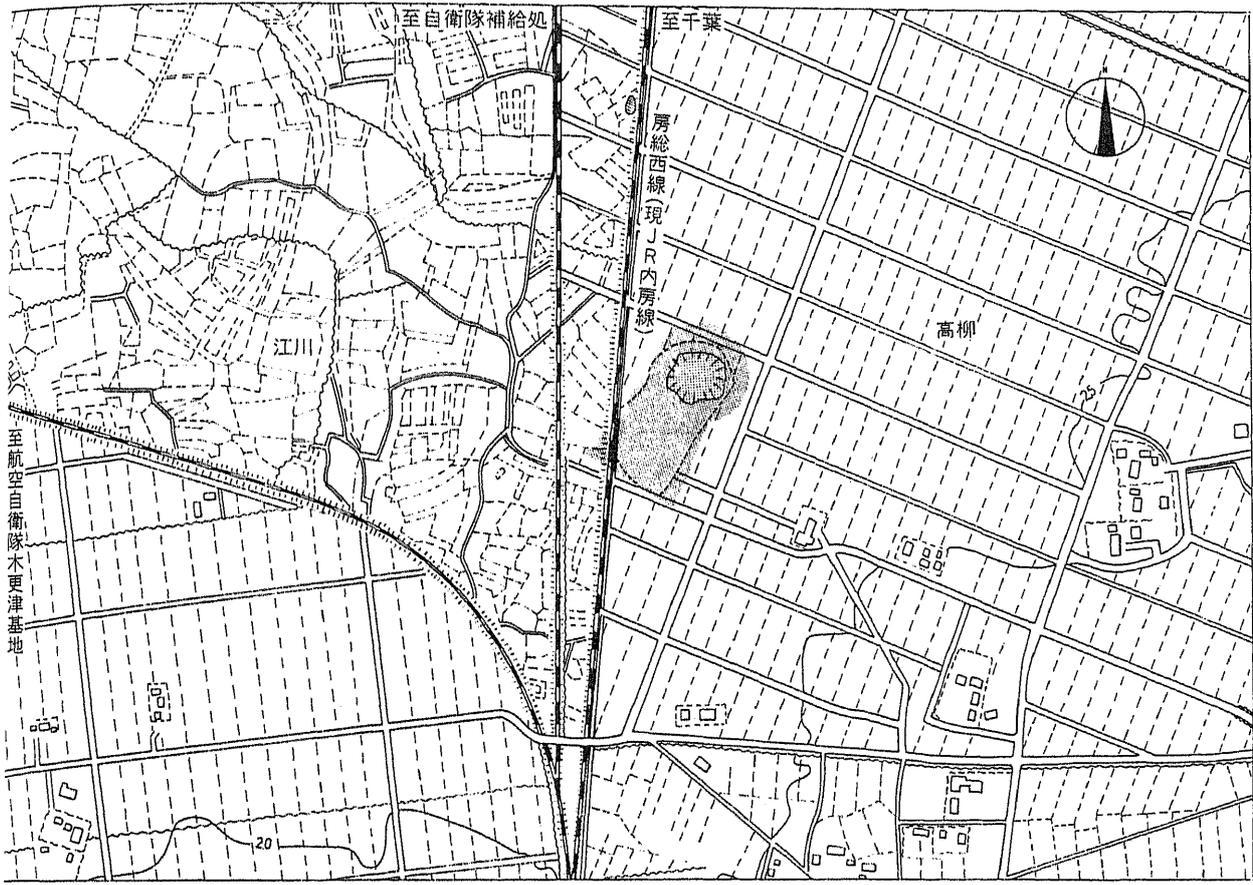
今回、再び高柳銚子塚を検討するに際して、改めてその墳丘規模と形態に着目することにした。図1に示した墳丘復原図の基礎資料に用いたのは、梶山氏が使用した地籍図と同じ1945年以前の公図である。この時点で、すでに前方部は削平され、後円部も残丘を残すのみとなっていた。このことは、1929（昭和4）年に刊行された『千葉県史蹟名称天然記念物調査報告』第六輯の報告によって明らかである。この報告に「高柳茶臼塚地図」として示された図には、削平された墳丘部分の地目が畑として記載されているため墳丘部分の復原に有効であると思われるが、前掲の公図とは鉄道線路の位置がかなり異なっていた。これを検証するため、1946年米軍撮影の航空写真（図3）で確認した結果、公図の位置関係が正しいことがわかった。

次に、航空写真に写る墳丘部分の陰影を地籍図に重ねるため、1962（昭和37）年の都市計画図（1/3,000）を地籍図と合わせたところ、鉄道線路上に挟まれた地域が昭和30年代の耕地整理を免れて旧状を残していたため、地籍図状に墳丘を復原し、縮尺と方位を算出することができた。図2では、都市計画図に航空写真から復原できる墳丘を重ねているが、これによって都市計画図に破線で区画された墳丘範囲は墳丘の最小範囲としてとらえることができる。これは、地籍図からは復原が困難な前方部の前端のラインを引く上で参考になった。今回は最も消極的なライン、すなわち都市計画図、および航空写真に残る前端の範囲で墳丘を復原している。したがって、墳丘規模はさらに大きくなることはほぼ確実である。また、くびれ部の西側には隣接する区画とは全く方向の異なる造り出し状の区画があり、西側に造り出しをもっていた可能性もある。

以上の作業によって得られた墳丘規模は、墳丘主軸長142.3m、後円部径82.5m、前方部幅89.0mで、房総最大の内裏塚古墳（墳丘長148m）に次ぐ規模の前方後円墳であることが推定される。周溝は、地籍図に残る地割りから見て盾形と推定され、その範囲は主軸長198m、後円部側の最大幅133m、前方部側の幅151mに復原可能である。また、後円部と同様に前方部前面の墳丘が10m前後の範囲で削り込まれ水田化しているとすれば、墳丘主軸長は150mを優に超え、房総最大の前方後円墳になる。

（3）墳形の検討

さて、復原した高柳銚子塚古墳の墳丘形態をどのように位置づけることができるだろうか。また、中期の畿内政権が前方後円墳を主軸にして新たな枠組みをつくろうとしたならば、その墳形にどのような影響があらわれているのだろうか。



1962年3月測図「木更津市都市計画図」一其六一
 および1946年2月米軍撮影航空写真より作図) 至木更津

図2 木更津市高柳銚子塚古墳の復原図



図3 1946年の高柳銚子塚古墳 (1946年2月米軍撮影航空写真M58-A-6) (1:6,000)

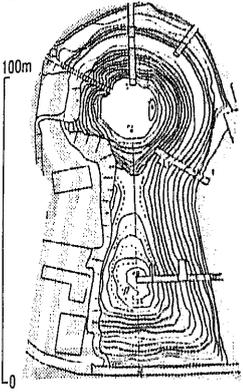
図4は、高柳銚子塚の前後に位置づけられる畿内・東海・関東の代表的な前方後円墳の墳形を主軸長5cmにそろえて比較したものである。現在確認できる資料から、可能な限り段築、墳頂の平坦面を白抜きで表現している。墳丘長が100m以下(86m)の紀伊・和歌山市車駕之古址古墳と、他のこの中では最も新しく位置づけられる上総・富津市内裏塚古墳を除くと、墳丘は三段築成である。また、一様に前方部が発達し、墳丘規模が頂点に達する段階の各地の様相には、王陵級の墳形に見られる変化がそれぞれの背景に応じて反映されている。たとえば、平面形態では後円部と前方部の比率が全く異なって見える東国の例も、面積比を比較するとかなり画一的な比率で築造されていることがうかがえる。

図5は高柳銚子塚と同列に比較できる主な例について、墳丘全体(造り出しを除く)と前方部の面積比、および後円部と前方部の面積比を示したものである。常陸・石岡市舟塚山古墳のほかは、後円部と前方部がほぼ1:1の比率(1:0.92~1.16)に納まっている。これを比率の順に並べると、和泉・堺市いたすけ古墳(0.92)→紀伊車駕之古址古墳(1.00)→上総高柳銚子塚古墳(1.01)→上総内裏塚古墳(1.02)→毛野・太田市太田天神山古墳(1.155)→遠江・磐田市堂山古墳(1.157)→下総・香取郡小見川町豊浦大塚山古墳¹⁾(1.16)→常陸舟塚山古墳(1.32)となる。復原した高柳銚子塚の墳形は、これらの中では前方部の面積比が小さい方に属し、前述のようにもう少し前方部が大きくなる可能性が高い。しかし、同じ地域の内裏塚古墳もまた前方部の面積比が小さい形式であり、この墳形が復原案の傍証として最も有効な資料であった。これらの面積比は必ずしも古墳の前後関係を表していないが、地域ごとの比較では上総の高柳銚子塚→内裏塚、常総(下総北部・常陸南部)の豊浦大塚山→舟塚山という変遷が見られ、後述する埴輪の前後関係を反映している。

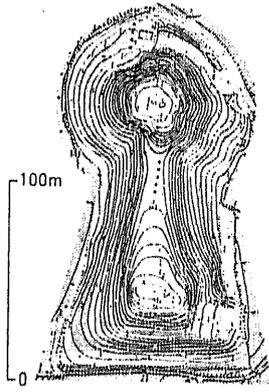
次に、後円部径に対する前方部幅の割合を見ると、高柳銚子塚(1.08)→下総豊浦大塚山古墳・常陸舟塚山古墳・和泉いたすけ古墳(1.10)→山城・城陽市久津川車塚(1.11)→毛野・藤岡市白石稻荷山古墳²⁾(1.10~1.11)→毛野・伊勢崎市お富士山古墳(1.12)→河内・藤井寺市仲津山古墳(1.14)→上総内裏塚古墳(1.15)→和泉・堺市石津丘古墳(1.16)→遠江堂山古墳(1.16)→河内・羽曳野市墓山古墳³⁾(1.19~1.20)→河内・羽曳野市誉田(御廟)山古墳(1.20)→紀伊車駕之古址古墳(1.22)→毛野太田天神山古墳(1.26)の順に大きい。

古市・百舌鳥古墳群の王陵級の古墳では、仲津山→石津丘→墓山→誉田山の順に前方部幅の比率が大きくなっている。墓山の全体の形態をみると、段のとり方は仲津山とほぼ一致しているが、仲津山より前方部最上段が短くなり、誉田山により近い形態になっている。また、仲津山は前方部の開き、後円部との比率では石津丘に近い形態であるが、段築のつくりかたでは百舌鳥古墳群で次段階に位置づけられる石津丘より古市古墳群内で後続する墓山に類似する。これら4古墳の墳形にみられる変遷は、出土している埴輪の編年と一致する。

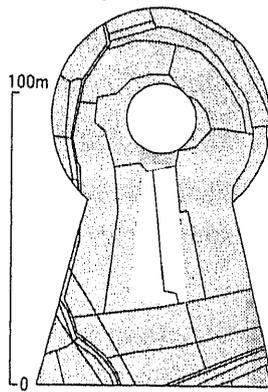
豊浦大塚山



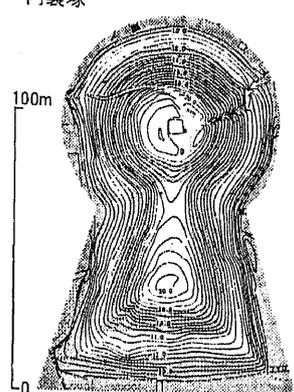
石岡舟塚山



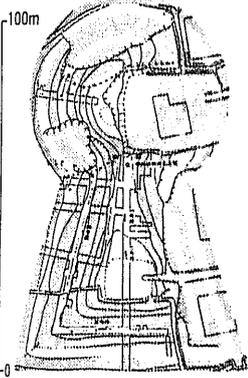
高柳銚子塚



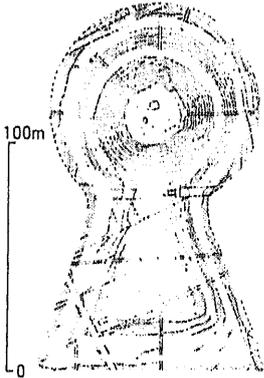
内裏塚



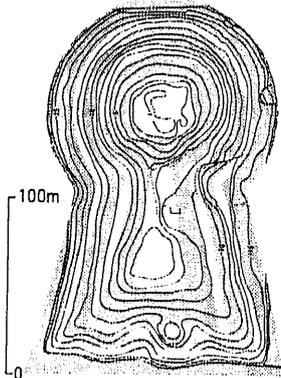
遠江堂山



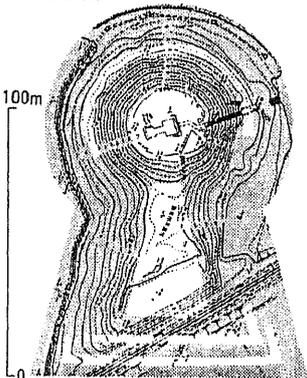
白石稻荷山



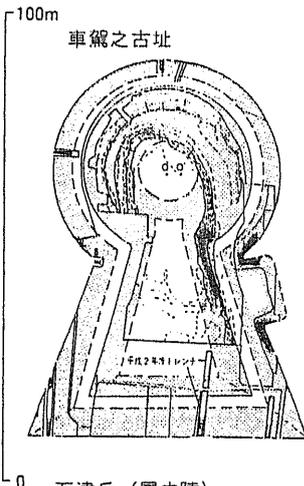
太田天神山



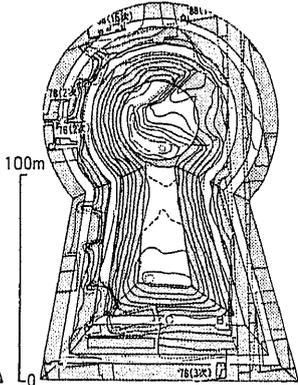
お富士山



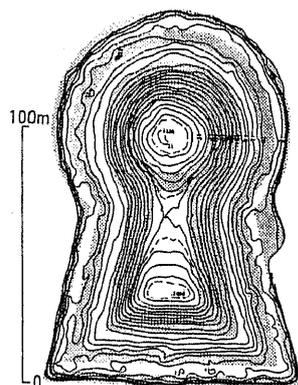
車籠之古址



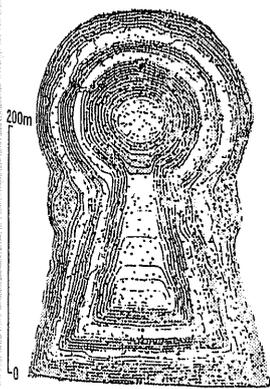
久津川車塚



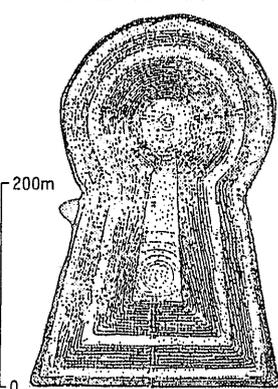
いたすけ



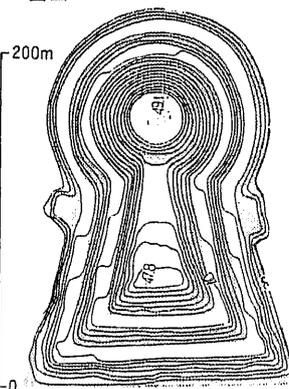
仲津山 (仲津媛陵)



石津丘 (履中陵)



墓山



菅田山 (応神陵)

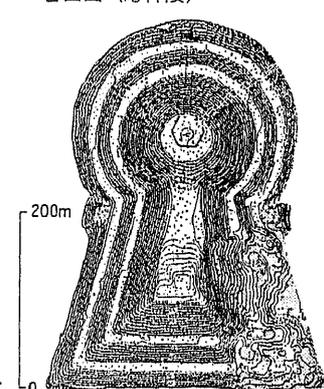


図4 中期前半の前方後円墳墳形

いたすけ古墳は、墳丘全長146mという銚子塚・内裏塚と同規模の古墳として注目した。つまり、河内・和泉の王陵群の中であって、この規模の古墳の墳形がどのような形式であるのかという関心からである。出土した埴輪から推定される時期は、菅田山に最も近く、銚子塚・内裏塚に前後すると推定される。前方部の面積比が小さいという点では両古墳に類似しているが、くびれ部の屈曲が弱く、前方部最上段が短い菅田山に類似した形態は、むしろ毛野の太田天神山・お富士山古墳に近い。確認調査による復原案に疑問は多いが、同地域の白石稻荷山古墳がその影響を受けていない墳形であることは注目される。

くびれ部が強くくびれ、前方部の最上段が長い下総・常陸・上総の4古墳の墳形は、仲津山、あるいは石津丘などの畿内の大型古墳の影響を受けている可能性が高い。しかし、舟塚山のように前方部最上段の鞍部が長大な墳形は地域的変容を考慮しなければならない。また、内裏塚には三段築成から二段築成へ変化するという新たな段階の墳丘構造が波及している。豊浦大塚山・舟塚山の2例は、川西編年Ⅲ期の埴輪を有する仲津山・石津丘とほぼ同時期の古墳で、毛野の2例より早い時期に畿内の影響を受けて成立した墳形と推定される。銚子塚は、舟塚山とほぼ同じ時期に新たな畿内型埴輪をもって築造された古墳であると考えられ、墳形も直接畿内の影響を受けて成立したものと思われる。それが内裏塚に受け継がれ、毛野とは異なる形式に発展したものであろう。ただし、銚子塚の段階では他地域の類例からみて3段築成であった可能性が高い。

(4) 石棺

高柳銚子塚古墳の内部施設の構造を知る唯一の手がかりは、後円部残丘の裾部に残る石棺材である。この石棺材についても、梶山氏が前掲の文献で報告され、「長持形石棺」の底石である可能性を指摘された。その後15年間放置された石棺材は、風化が著しく新たなひび割れも生じているため、改めて現状での記録をとって報告することにした。また、今回新たに棺材の一部を発見したので合わせて掲載している。石材は平行葉理のある細粒砂岩で、黄色みがかかった灰白色(土色帖7.5Y8/1)である。表面は長年の風雨によって緑がかかった薄茶色に変色しているが、新しい割れ口の色はかなり白みが強い。

①底石(図6)

この石棺材が、長持形石棺の底石であるとすれば、小口の短側石が長側石に挟み込まれる形に組み合うように加工されているのが通例である。先の報告では、小口の短側石を受ける部分が溝状になっているものの風雨にさらされて明瞭ではないとされ、小口の組み合わせについては言及されていない。今回の再実測にあたっては、この点を確認するのが第一の課題であった。

底石の現状は、片側を小口方向に切損し、残る小口も約半分が失われている。前回の報告時よりさらに風化が進んだと見え、底石本来の面は中央部にわずか6.5

×5.5cmの範囲にしか残っていない。小口には短側石をはめ込むための溝を確認できるが、長側石を乗せる削りだしの段は小口の内側から先が風化して不明瞭になり、長側石がどこまで伸びていたか判断し難い。しかし、小口の短側石を受ける溝が長側石の位置で立ち上がっていることは確認できる。溝の立ち上がりは長側石にわずかに食い込むように見え、長側石に小口をはめる削り込みがあった可能性もある。小口溝の前面には長側石が約10cmは伸びる余地があり、長側石が短側石を挟み込む構造であったものとする。

現存する主軸方向の長さは137.0cm、外側の最大幅94.5cm、内のり幅68.0～69.0cmである。石材の厚さは、15.5～23.5cm。長側石を乗せる仕口の段は、左側で幅9.0～10.5cm、長さ123cm以上、右側は幅12.0～12.5cm、長さ98.9cm以上である。左側の仕口幅は風化・欠失して狭くなっている可能性が高い。両側とも風化によって段が低くなっており、現状では1.5～2.1cmしかない。中央部に残る底石の面から復原すると、本来は3.0～3.5cmの段であったと推定される。

小口の溝は、溝の中央部で43cmにわたって残存している。内側は上端51.8cm、下端37.8cmの長さに残り、外側では上端38.2cm、下端33.6cmである。溝の幅は上端で17.8～18.3cm、下端で8.4～10.1cmある。深さ（高さ）は内側で3.1～3.9cm、外側ではわずかに0.5～2.5cmになっている。

②新たに発見された棺材片（図7）

底石と同じ石材である。厚みは11.5cm、図上での長さ21.0cm、幅21.5cmで、側面には溝状の凹部がつくり出されている。図の上面は、器面がやや風化するものの平滑に加工されていることが分かる。下面には手斧かタガネの痕が見られ、面は粗く削りっぱなしである。

側面の凹部がこの部材の位置を推定する手がかりであり、蓋を受ける長側石のほぞ、あるいは小口石の蓋受けとも考えられる。底石に残る小口石受け部の幅は17cm以上あり、この石材の厚みでは合わない。底石の長側石受け部の幅は10.0～12.5cmで、この部材の厚みとほぼ一致することから長側石の一部であると考えられる。

③石棺の形式

この石棺材は1980年に発表されて以来、「長持形石棺に類似した石棺をめざした例」（間壁 1994）あるいは「長持形石棺と共通する要素をもつ組み合わせ式石棺」（白石ほか 1984）として扱われてきた。確かに、典型的な長持形石棺の底石に通有な縄掛け突起がなく、小口の組み合わせが今ひとつ明瞭ではなかったため、そのような評価になったものと考えられる。今回の再実測と新発見の石棺材を追加しても、これを長持形石棺として位置づけるには、まだ多くの要素を欠いていることは否めない。そこで、石棺以外の要素も含めた畿内の中心勢力との関係、あるいは東国の長持形石棺のあり方、さらに他の地域の長持形石棺の特色といった視点から検討してみたい。

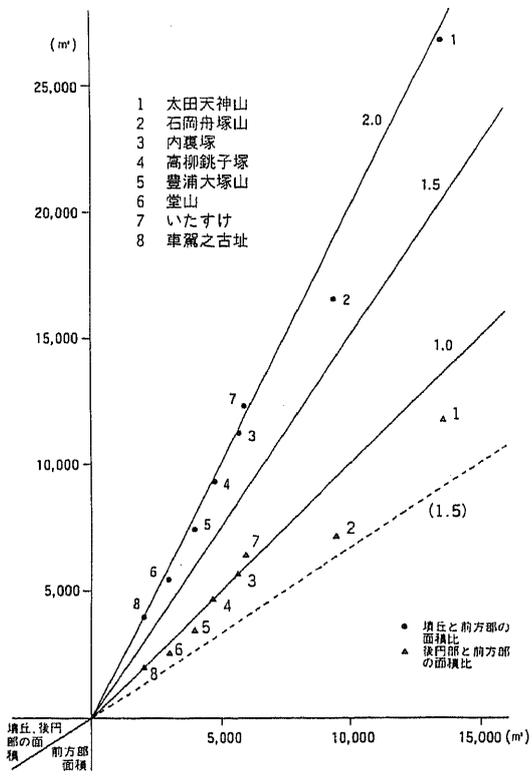


図5 前方部の面積比

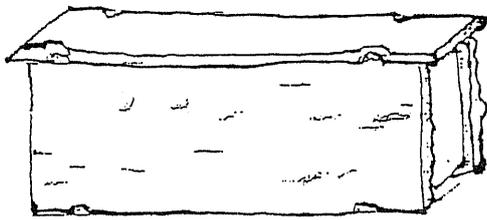


図9 祇園大塚山古墳石棺図
(明治24年9月25日付『発掘古器物取調書』付録図より)

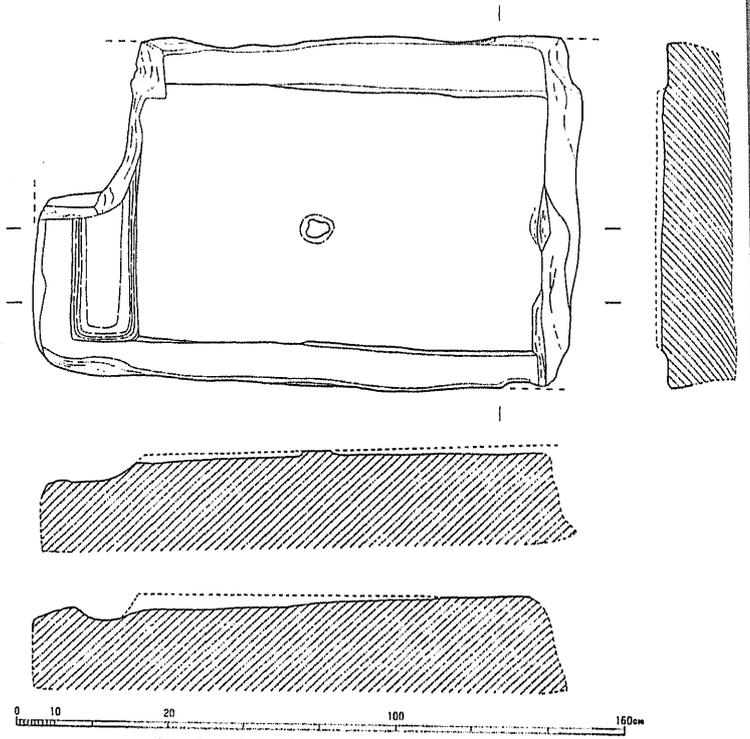


図6 高柳銚子塚古墳石棺底石

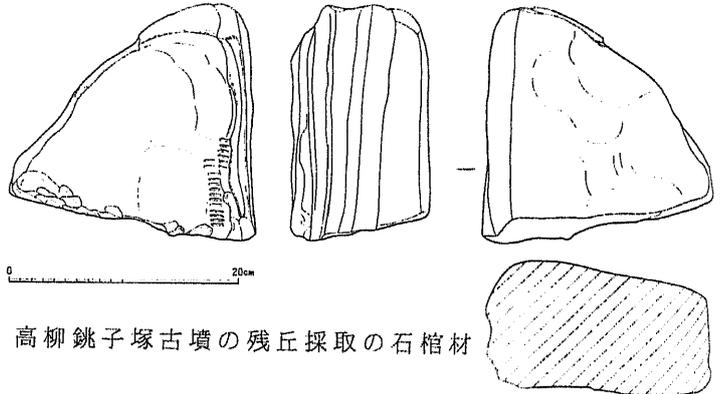


図7 高柳銚子塚古墳の残丘採取の石棺材材

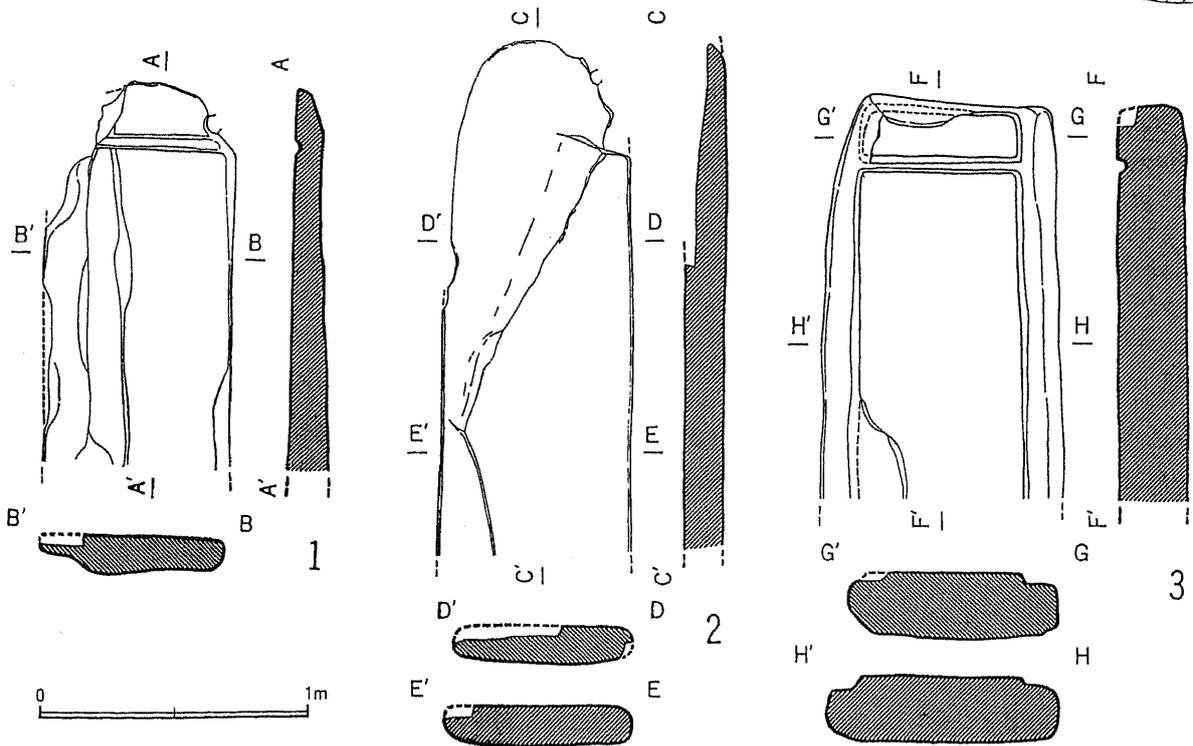


図8 豊浦大塚山古墳石棺材材 (安藤ほか1978より)

上記のように、高柳銚子塚の墳形は中期畿内型前方後円墳の系譜上に復原され、しかも房総の中期を代表する古墳のひとつとして県内最大級の規模をもつことがわかった。それ自体がすでに畿内の王との関係をぬきにはありえないことである。中期の王陵の棺であった長持形石棺を志向したことは想像にかたくない。問題はその取り入れ方である。東国では、典型的な長持形石棺は毛野の太田天神山古墳とお富士山古墳に限られる。太田天神山古墳は、墳丘主軸長210mにおよぶ東国最大の前方後円墳であり、前述のように中期畿内の定型化した巨大前方後円墳にきわめて類似した墳形をもつ。お富士山古墳はその系列にある100mクラスの前方後円墳で、国立歴史民俗博物館による調査によって長持形石棺の全容が報告されている。それは畿内の中心部で用いられた竜山石の典型的な長持形石棺と同様のものので、使用している砂岩の色調まで竜山石（全体として淡い黄色）に類似するという。ここまで類似すると、畿内から石棺作りの工人まで招へいするような親密な関係を畿内の中心勢力との間にもっていた被葬者像が浮かんでくる。

その他の長持形石棺に類似した組み合わせ式石棺とされているものには、陸奥・宮城県名取市経の塚古墳・豊浦大塚山古墳、そして本例があり、わずか3例にすぎない。経の塚の例は粘板岩製とされる6枚の板石で構成され、蓋と長側の両端に縄掛け突起がある。

豊浦大塚山の例（図8）は、通称筑波石と呼ばれる片岩製の3枚の棺材が墳丘に残る。この棺材については、安藤鴻基氏ほかによって実測・報告が行われている（安藤ほか 1978）。石材は風化しにくい反面、かなり硬い石である。図8-1は長側石と見られ、小口に短側石を受ける溝があり、端部には（おそらく）両端を丸く抉って縄掛け突起を意図した加工が見られる。短側石を受ける溝は幅が非常に狭く、上端で7cm前後、下端は3～5cmしかない。溝の断面は半円形、深さは2.5～1.5cmである。これに組み合う短側石は、久津川車塚の例のようにほぞ状の凸部をもつものでないと安定した組み合わせができないと考えられる。2は断面がわずかに蒲鉾型に膨らんで見えるが、端部を欠いており、蓋石か長側石か判断し難い。凸面側は平滑で丁寧に加工されており、蓋石の可能性が高いのではないかと思われる。3は底石である。長側石が短側石を挟み込んで組み合うことが明瞭にわかる。短側石を受ける溝は1よりもさらに狭く、上端で4.5cm、下端では3.0～3.3cmになっており、上記のように3辺にほぞをもつ久津川車塚例のような短側石を想定しなければならないと考える。報告の図では小口に方形の高まりを削り出しているようになっているが、短側石を受ける溝の底は長側石を受ける面より2cm高く、長側石を受ける面はまっすぐ小口に突き抜けてつくり出されている。露出している小口端面は欠損しており、1のような縄掛け突起状の加工があった可能性もあり、土中に埋まっているもう一方の端面を掘り出せば、その有無が判明するであろう。この豊浦大塚山の例は、加工しにくい片岩の板石を使用しているという制約を考えると、長持形石棺の要素をかなり満たしている例であり、

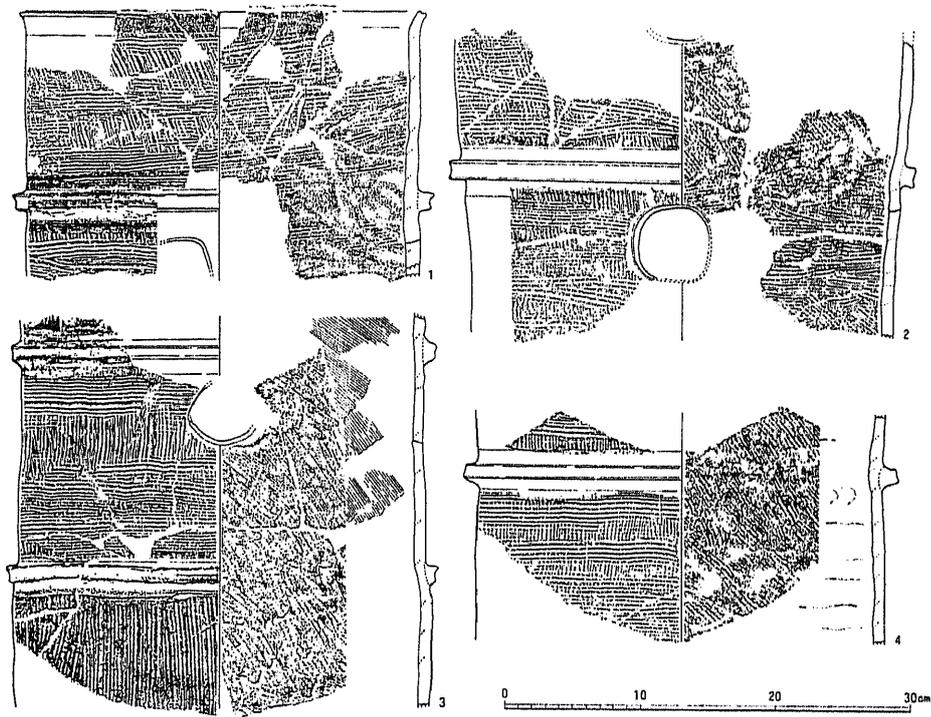


図10 高柳銚子塚古墳の円筒埴輪

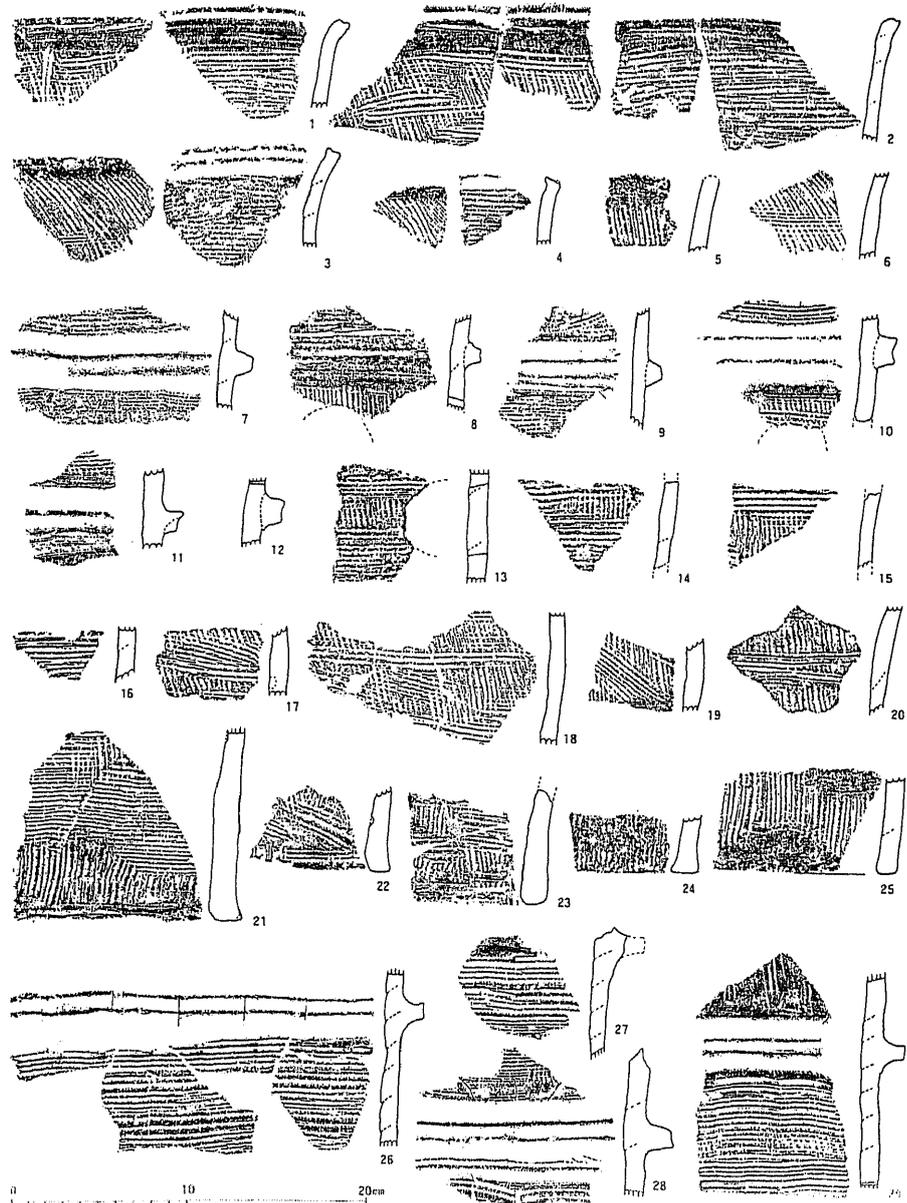


図11 高柳銚子塚古墳・内裏塚古墳出土埴輪 (1~25銚子塚, 26~30内裏塚)

典型的なモデルを想定してつくられているのではないだろうか。この石材は、この後、箱型の組み合わせ式石棺・横穴式石室の素材として常総地域で最も広く用いられた石であり、豊浦大塚山例は地域独自の素材を用いた長持形石棺であると考える。

一方、高柳銚子塚の周辺では、同じ小櫃川左岸の海岸平野に2 kmほど離れて立地し、金銅製眉庇付き甕を出土したことで有名な祇園大塚山古墳（全長100mクラスの前方後円墳）があり、1891（明治24）年に宮内省によって作成された「発掘古器物取調書」に付随する「日本考古図譜解説・抜粋」のなかに、石棺の絵図（図9）がある。図でははっきりしないが、解説に厚さ24cmほどの底石があると書かれており、6枚の板石を組み合わせた石棺であることがわかる。小口は短側石が挟み込まれる構造で、長側石底面の小口付近には両側とも丸い抉りがある。また蓋石の両小口付近にも同じ様な半円形の抉りがあり、豊浦大塚山の例のように縄掛け突起を意識した抉りの可能性がある。記載によると、蓋石の幅は約91cm、長さ約197cm、重さ約338kg、短側石は幅約85cm、高さ約91cmとなっている。祇園大塚山古墳は上記の甕のほか銀製長型耳飾・画文帯四仏四獣鏡・金銅製挂甲などの副葬品があり、B種ヨコハケの二次調整をもつ円筒埴輪、須恵器大型・も含めて5世紀中葉に位置づけられる（白井 1987）。高柳銚子塚より2世代あとの地域首長墓であると考えられ、石棺の形式も踏襲されたものと思われる。しかし、石材に付いては、石棺絵図の脇に「青色石ニシテ 木目アリ」と書かれており、高柳銚子塚の石棺材とは異なる。おそらく、内裏塚古墳群の主墳をはじめ、上総南部の埋葬施設に広く使われている青灰色の凝灰質砂泥岩ではないかと思われるが、長さ2 mの大きさでは横穴式石室の天井石として使われている例があるものの絵図のような均一な厚さに加工した例は見当たらない。

祇園大塚山の例はともかく、豊浦大塚山・高柳銚子塚の2例は、畿内王権の棺である長持形石棺を意図して製作されたことは明らかで、それぞれ長持形石棺の一類型であると考えられる。ただし、毛野のように直接畿内の石棺作り工人が関与するには至らなかったため、典型的な長持形石棺にはならなかったのであろう。房総の例のように在地の石材で長持形石棺の類型を製作した例は、出雲、丹後、備中、安芸、周防にも見られ、中央とのつながりの強さを棺の形式で表わそうとした地方有力首長の存在がうかがえる。

（5）円筒埴輪

円筒埴輪の分析は、川西宏幸氏によって示された5型式I期～V期に分けた編年案がその後の研究の基礎になっているといえる。ここでは、川西氏の研究を基に、中期円筒埴輪展開の中心地である古市・百舌鳥古墳群の埴輪を段階的な変化によって細分・編年する考えを示した一瀬和夫、上田睦氏の研究に従って整理したい。

現在確認できる高柳銚子塚古墳（以下高柳銚子塚）の埴輪は、採集された破片

資料に限られる。明らかに形象埴輪と推定できる資料はなく、ほとんどが円筒、あるいは朝顔型円筒埴輪の破片と考えられる。ここに掲載した25点のうち図10-3・4、図11-5・8・12~16・20・25は県立上総博物館収蔵資料として現在芝山町立芝山古墳・埴輪博物館で展示されている。他の資料は地元採集品である。なお、比較資料として内裏塚古墳の資料の一部(図11-26~30)を示した。最も遺存の良い図10-3から推定すると、円筒埴輪の形状は3条4段、高さはタガ間の16.6cmから復原して66cm前後になると考えられる。最大径の復原値は図10-2で34.0cm、3で31.1cm、4で30.0cmである。また、1の口径復原値は30.2cmであった。全体に薄手のつくりで、タガはそれほど高くないが、稜線が明瞭で幅が狭く、ていねいに仕上げられている。以下、細部の特徴について検討する。

①口縁部

口縁部の形態は、外反して端部に面をもつものである。端部にはナデによる凹部があり、次の2種に分かれる。

(A) 外側をつまみ上げて面に凹部をもつもの。

(B) 内側をつまみ上げて内側にも凹部をつくりだしたもの。

外反の形状には、直線的に立ち上がって端部近くで急に外反するものと比較的緩やかに外反するものがある。また、比較資料で示した内裏塚古墳(以下内裏塚)例の口縁部は、外反して端部に面をもつが、凹部をつくりだしていない。また、銚子塚のものより概して厚手である。

古市・百舌鳥古墳群では、「く」の字状のものから端部を肥厚させ、外面に面をもつもの、直立したものへ変化する傾向が確認され、以下のように分類されている。

I類 逆「く」の字状になり、端部をつまみ上げるもの。

II類 直立気味に立ち上がり、

(a) 端部を肥厚させるもの。

(b) 端部を肥厚させ、外面に面をもつもの。(I類の退化)

III類 外反して端部に面をもつもの。

IV類 直立して端部を撫でるだけで終わるもの。

V類 端部に突帯を付加するもの。

高柳銚子塚の資料は、I類のように逆「く」の字状に屈曲しないものの、端部近くで急に外反し端部をつまみ上げる手法はI類の要素と合致する。これに対し、内裏塚の資料は、つまみ上げが見られないIII類に分類できる。

②タガ

タガの断面形には、台形とM字形がある。台形のもののは整ったつくりで突出度は中程度、上下の稜線が明瞭につくり出され、比較的幅が狭い。

(A) 上辺をつまんで突出させたもの

(B) 端面がほぼ平滑になでられたものがある。

M字形のものは比較的高く、凹部の浅い形態でIより幅が広い。

内裏塚の例には、銚子塚で見られる台形・M字形の他に以下の形態が見られる。

I. 突出度の高い台形、あるいは長方形。

(a) 上辺をつまむもの(図11-26・29)

(b) 下辺をつまむもの(図11-28)

II. 高い三角形。

また、内裏塚の断面台形の例は、高さが中程度のもので主体を成すと考えられるが、低い台形のものも見られる。前掲の古市・百舌鳥古墳群の分類では、時期が下るほど突出度が低くなる傾向があること、ナデのため上辺が突出しているものから、台形状→M字状→三角形へと退化することを確認した上で、

1類 突出して上辺をつまむもの。

2類 断面台形。

3類 断面M字形。

4類 断面三角形。

5類 端部に押圧を施しているもの。

6類 断続ナデを施すもの。

7類 断続ナデの後、押圧を施すもの。

に分類している。これによると、高柳銚子塚の資料は2類と3類に該当し、2類の断面台形のものには上辺をつまむという1類の要素をもつ。内裏塚の資料には、多様な要素が含まれ、1類・2類・3類・4類を確認できる。

③スカシ

この時期の円筒埴輪では、円形以外のスカシはほとんど見られない。高柳銚子塚例のスカシは、2段目と3段目に確認できる。基本的には円形であるが、形態は隅丸方形に近い。その配置を確認できる例は1例(図10-2)に限られ、上下段のスカシがほぼ同じところに配置されている。

スカシの位置を見ると、タガ間のかなり上方に片寄っており、図10-3で見るとスカシの上縁は上のタガ下辺からおよそ1.3cmの位置にあるのに対し、下縁は下のタガ上辺から9.3cm上にある。これは、スカシの直径がタガ間の高さに比べて小さいことに拠る。スカシの径は5.1~5.2cmと推定される。これらのスカシに見られる特徴は、II・III期に見られるもので、多条の大型品が増える前の要素のひとつであろう。

④外面調整

外面調整の分類と編年は、川西氏の研究を基に古市古墳群の埴輪を段階的な変化によって細分・編年する考えが示されている(一瀬1994、上田1994ほ

か)。ここでは、上田氏の整理に準じて以下のように識別した。

A種ヨコハケ 断続的なヨコハケ。ヨコハケ同士の切り合いがある。

B種ヨコハケ 連続的なヨコハケ。静止痕が認められる

B a種 タガ間を2回以上工具をあて、断続的なヨコハケを施す。

B b種 タガ間を2回以上工具をあて、ヨコハケを施す。上下間の切り合いがある。

B c種 タガ間を1つの工具で（タガ幅の施紋具を1回あてて）ヨコハケを施す。静止痕は垂直。

B d種 B c種同様一つの工具でヨコハケを施す。静止痕が傾く。（タガ幅に合わない施紋具）

C種ヨコハケ 連続的なヨコハケ。

C a種 長いストロークでヨコハケを施す。静止痕少ない。

C b種 ロクロ引きのヨコハケ。静止痕なし。（川西編年のC種）

また、二次調整のヨコハケの段階的な変遷については、その主体がA種からB種になり、B種は個体によって不定型なもの（一部に施すものや、2回以上の工程によって施すものなど）から定型化したB種ヨコハケ（タガ間1回の幅の広い工具を用いたもの）を施すものが出現し、さらに能率的な施紋法として静止痕が斜めになったものへ変化するという変遷が指摘されており、これに基づいて検討することにしたい。

高柳銚子塚の資料は、ヨコハケによる二次調整が主体である。ヨコハケの二次調整は、図11-21・22・23のように最下段でも行われているが、図10-3では最下段には見られない。2段目・3段目と3段目・最上段にヨコハケ二次調整が施されている例があることから、最上段から最下段までヨコハケ二次調整をおこなったものと最下段のみタテハケ一次調整で終わらせたものがあると推定される。ヨコハケにはB b、B d、C a種が認められ、器面が剥離しているためにB aかB bか判断しかねるものもある。また、タガ間が遺存する資料が極めて少ないためB c種の確認ができなかった。過去に紹介されていた資料（築比地 1982）がB b種主体（図10-3・4、図11-13・25）であったためB種が主体であるかの印象が強かったが、ストロークが長く静止痕が少ないC a種がB b種とほぼ同率で見られる。図10の遺存の良い4点がC a種（1・2）とB b種（3・4）に分かれるのが全体の傾向を示しているといえる。B d種としたものは図11-21に示した底部である。なお、C a種については、定型化以前のC種として扱ったが、A種の変容形として古段階から継続する調整技法であると見られ、むしろA種に含める方が適切ではないかと思われる。

⑤底部の調整

この場合の調整は、川西編年でV期の要素として抽出された「底部調整」とは区別されたもので、III・IV期の埴輪に見られる底部端内外面のハケ・ナデ・ケズ

リによる底部の整形技法を指している。高柳銚子塚では、内面のケズリ（図11-21・22）、外面のナデ（同図25）、内面のナデ（同図23～25）が見られる。

⑥焼成・色調・胎土

いわゆる黒斑は見られない。硬質の製品とやや軟質のものがあるが、総じて焼きしまりはよい。窖窯で焼かれた製品であると考えられる。高柳銚子塚の埴輪を最も特徴づけていると思われるのは、非常に赤味の強い色調である。いわゆる赤褐色に発色する。図示した25点のうち、18点がこの色調をもつ。残りの7点（図11-5・8・12・16・19・21・24）は明るい橙色である。これらは、胎土も若干異なり。赤褐色の埴輪の胎土には、細かい砂粒が多く含まれ、1～2mm大の乳白色の砂粒が目立つ。緻密できめ細かい質感である。橙色のものは前者に比べるとやや粒の大きい砂粒を多量に含んでいる。

赤味の強い色調は、一見赤彩されているためかとも見えるが、塗彩の痕はなく、焼成によって発色したものと考えられる。また、赤色部分は表面に限られ、風化して表面が剥離したところでは橙色の地肌が見える（a）。さらに中心部は黒みの強い灰赤色で、かなり硬質である。地肌全体が硬質な暗灰赤色に焼き上がったもの（b）も少なくない。（a）の表面の赤色部分は脆く、傷つきやすいため口縁端部やタガでは特に剥離した箇所が多い。このことから、表面に化粧土を塗って赤く発色させたのではないかとも見られたが、本来は（b）のように全体に硬質で表面が赤く発色する製品を意図したと思われる。これは、菅田山古墳など古市古墳群の王陵級の埴輪に見られる特徴のひとつであり、色調にも畿内中樞部の製品を志向したことがうかがわれる。なお、遠江堂山古墳・お富士山古墳の円筒埴輪は赤彩されている。

内裏塚の埴輪も表面は赤味の強い橙色であるが、高柳銚子塚のものに比べると、はるかに赤味が弱く淡い色調である。胎土には4～5mm大の小石を含む多量の砂粒が含まれ、高柳銚子塚の橙色系のものと比べても粒子が粗いことが識別できる。蛍光X線分析では両古墳の埴輪胎土の主要因子がほぼ同じ領域に分布することから、同じ地域の土でつくられていることが示唆されている（三辻 1994）が、混和材、焼成方法（発色方法）に差異があることは明らかである。赤の発色にこだわって胎土も厳選したと見られる高柳銚子塚の埴輪に畿内の手本に忠実な古相の手法を読みとることができる。

また、房総で唯一明らかになっている中期の埴輪窯、畑沢埴輪窯跡が木更津市内に所在したことにも注目する必要がある。この窯跡の製品については、萩原恭一氏が整理と分析を行っている（萩原 1994）。畑沢窯跡の製品は、蛍光X線による胎土分析で高柳銚子塚・内裏塚と同じ領域に因子をもつことが指摘されているが、円筒埴輪の型式や色調・質感が内裏塚古墳の埴輪に極めて近いことが判明し、畑沢窯がその供給窯のひとつであったことが推定された。ここでは、内裏塚のB種ヨコハケ二次調整の資料を用いたが、内裏塚・畑沢の円筒全体の傾向では

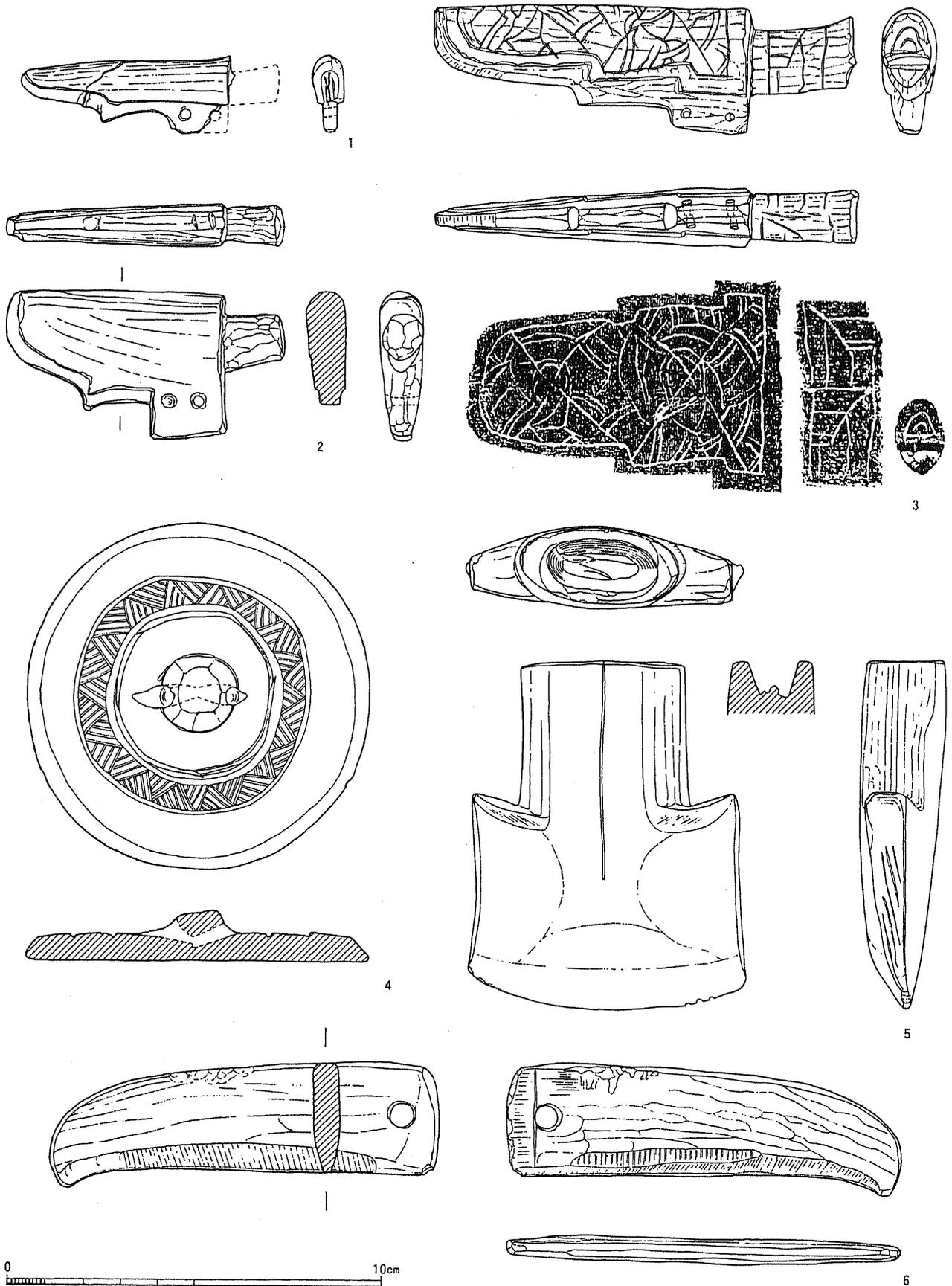


図12 長州塚古墳の石製模造品（白井1992より転載，3の拓本のみ小林1976より転載）

B種ヨコハケは極めて少量で、二次タテハケが一般的であることが報告された。この点では内裏塚の埴輪が高柳銚子塚より古相の要素をもつようであるが、内裏塚では各種のヨコハケがみられること・厚手のつくり・多種多様な形象埴輪をもつ点から高柳銚子塚古墳の埴輪が先行すると考える。

以上の所見から高柳銚子塚の円筒埴輪を位置づけるならば、器壁の薄い、硬質なつくりの窖窯焼成の製品であることはIV期の埴輪としてとらえられる要素である。しかし、口縁端部をつまみ上げる形態、タガは幅が狭く整った台形を主体とし、上辺をつまむものがある点はIII期へつながる要素である。タガの断面形にM字が加わり、外面調整はヨコハケ二次が主流で定型化以前のB種(B b)とやはり定型化以前のC種(C a)が中心であるが、定型化したB種(B d)も出現している点はIV期に入って見られる。これらの点から高柳銚子塚の円筒埴輪をIV期の初頭に位置づけたい。

(6) 石製模造品

①「長州塚」の石製品

1919(大正8)年12月刊行の『皇室博物館紀要一』に掲載された高橋健自著「古墳発見の石製模造器具の研究」に、木更津付近出土の「有紋刀子・鏡・斧・鎌の石製品」のあることが紹介されている。その後、1925(大正14)年森本六爾が『古代文化研究』第2号に「直弧紋を有する石製刀子」と題して長州塚出土の滑石製刀子を紹介している。この長州塚が現在の高柳銚子塚古墳を指しているのではないかという指摘は、前掲の梶山氏の報告でなされた。『千葉県史蹟名勝天然記念物』第六輯では高柳銚子塚を「高柳茶臼塚」としているなど、名称の表記に混乱があることも確かである。木更津地区に他の有力候補がないことも加えて、「長州塚」は茶臼塚・銚子塚と同一の古墳であると考え。「長州塚」出土の石製品とは、図12に示した六つの滑石製模造品である。刀子形3点、鏡形1点、鎌形1点、鉄斧形1点があり、最も大型の刀子形の鞘(皮袋)と把に直弧文の陰刻がある。

刀子 直弧文をもつ刀子(図12-3)は実物をかなり忠実に模倣した製品である。皮袋の縫合による段差まで表現した立体的なつくりをもち、沈線区画・文様は細かい単位の彫刻によって構成されている。全長は11.25cm、鞘の長さ8.45cm、把の長さ2.80cmで、鞘(皮袋)の幅は最も広い把に接するところで3.25cmである。厚さは最も薄い刃部先端で2.68mm、最も厚い鞘の把側では15.80mm、把尻で14.05mmである。刃部側で縫合された皮袋は三段に幅が狭められ、把に近い縫合部には両側から小孔がつけられている。皮袋部は細かく削って整形した後、丁寧に磨いて仕上げられ、その上に直弧文が陰刻されている。把にも同様の調整を行った後、鍵手文が刻まれている。把は上反りで比較的短く、把頭の端は刃部側のそぎが突帯と段で表現され、半円形の陰刻文が施されている。

ほかの2点の刀子形はこれとは全く異なる小型品である。「もの」の形状をデフォルメしたいいわゆる「形代」としてつくられた石製模造品として直弧文付きの刀子とは区別されるものである。皮袋の表現に段がつけられて、縫合部が縁取りされ、全体に丸みのあるつくりはこの種の石製刀子のなかでは写実的である。また、細かいケズリと丁寧な磨き仕上げは古相の特徴といえよう。

鏡 鏡形は、面径9.45cm、厚さ6.8～6.9mmで、鏡面に反りはなく、縁には幅4.5mmの斜めに切った面がめぐる。背面には内区と外区の区別があり、外区は無文で平滑に磨かれている。内区には太い沈線で画された文様帯があり、複合鋸歯文が刻まれている。中央には7つに面取りされた半球状の紐が削り出され、両側からあけられた紐孔はかなり実物に近いつくりである。

斧 斧形は、有肩の袋状鉄斧を模したもので、全長は9.4cmあり斧形模造品としては大型である。刃部は明瞭な片刃につくられ、実物を忠実に模倣したものである。肩は反り上がって幅7.1cmあり、わずかにすぼまって再び刃部先端で幅を増し7.5cmになる。袋部のあわせ目は1条の沈線で表現されている。柄部は縦方向に削った後磨かれ、光沢がある。刃部にも光沢のある磨き仕上げが施され、全体に丁寧なつくりである。穿孔はない。

鎌 左側に柄部装着の表現があり、刃部の先端が短く湾曲する。装着部付近に径6mmほどの比較的大きな穿孔がある。全長10.5cm、最大幅3.1cmでやはり大型品である。刃部は両面とも明瞭に削り出されており、磨き仕上げの細かい擦痕が見える。全面に細かい単位の調整痕があり、丁寧に磨いて仕上げた優品である。

②石製模造品から見た高柳銚子塚古墳の年代

さて、これらの石製品にどのような位置づけが可能であろうか。まず、この中で最も特徴的な直弧文付きの刀子について見てみる。

上記のように、きわめて写実的に作られた大型品で、おそらく実物大に近いものと思われる。鉄製の実用品では中期の初頭前後に見られる両関で厚手のものが長さの割に幅の広い形態でこの石製品と良く一致する。このような実物に忠実につくられた石製刀子は、石製模造品の最も古い段階、奈良県富雄丸山古墳、三重県石山古墳、茨城県常陸鏡塚古墳などの出土品にみられ、その後の石製模造品には類例の少ないものである。これらの写実的な大型品の中に本例を置くと、把が短く（全長の1/4）、把元と把頭がほぼ同じ幅で、把頭の刃部側にそぎが入るといふ古相の大型品には見られない要素をもつ。このような形態は岐阜県遊塚古墳の小型品の中に認められ、その後大阪府野中古墳の小型品では定式化している。東国でも同時期の大型品に類例はなく、小型品の東京都野毛大塚古墳、群馬県白石稻荷山古墳出土品に類例を求めることになる。

また、この刀子の直弧文、および鍵手文の彫刻については、小林行雄による指摘がある（小林 1976）。ひとつはこの直弧文が未熟ながら純正の直弧文を写しているという点である。要約すると、鞘全面に描かれた直弧文は斜交軸をもつ2

個の単位図形が連続して描かれたもので、右回りのA型直弧文を連結したものとみられるが、帯の表現の原則がみだれ、連結方法は他に例がない顕著な未熟さを露呈している。また、そこで取りあげられた大阪府忍岡古墳、同安福寺の石棺、奈良県新山古墳、同日葉酢媛古墳などの直弧文系統の装飾をもつ資料は、この刀子や千葉県市原市姉崎二子塚古墳の石枕例とは異なって、すべて斜交軸をもつ純正な直弧文をもっていないことから、直弧文系統の装飾を採用した前期後葉に普遍的に使用したのは純正の直弧文ではなく、曲線的な一種の鍵手文が主流であったとしている。次に、直弧文の発現は石山古墳や京都府庵寺山古墳の靱形埴輪によって前期末あるいは中期初頭に確例があり、直弧文を豊富に用いた鹿角製刀装具の副葬が頻繁になる時期まで下げる必要はないが、その装具に正しい構図の直弧文を彫刻した遺物はことごとく中期以後の遺物に限っているという見解を示した。ここで、本例の直弧文と鍵手文という組み合わせを位置づけると、刀子本体の写実的なつくりも加えて直弧文の発現期に続く中期の前半におくことができるのではないかと考える。

6点の石製品全体にいえることは、1・2の小型刀子と3～6の製品ではその用途が異なると推定されることである。つまり、1・2程度に小型化・簡略化された鏡、斧、鎌の石製模造品が他に存在した可能性を考える必要がある。石製品の種類構成では、農工具に鏡が加わっている点が石製模造品の最古段階には見られない要素である。

鏡の文様帯に刻まれた複合鋸歯文は、房総の滑石製品ではきわめて限られた時期に類例がみられる。中期初頭の大型円墳・千葉市七廻塚古墳と市原市草刈3号墳で出土した大型石製腕飾がそれである。この2例は径17cm前後の特殊な大型品で、面互いに陽刻された櫛歯文と複合鋸歯文帯が表裏に彫刻されている。これに類する複合鋸歯文をもつ石製腕飾（石釧）は奈良県櫛山古墳・大阪府大師山古墳・京都府長岡にあり、ほかに静岡県明ヶ島磐田古墳では青銅製の釧の両面に複合鋸歯文が刻まれている。また、同様の文様が前期前葉から中期の和製の鏡にも見られる。これらの時間帯の中で本例を位置づけると、滑石製であるという点で県内の2例に近い時期が考えられる。

また、鎌が曲刃鎌を模したものである点も写実的な大型品の中にあっては新しい要素である。畿内では大阪府野中古墳例（長さ9.0・9.1cm）、東国では群馬県白石稻荷山古墳例（長さ12.1cm）に類例が求められる。このうち野中古墳例は、本例と同様に左鎌を模したものである。この時期、実用の鉄製鎌には直刃と曲刃が共存している。以上を整理するならば、本例は写実的に、また精巧につくられた大型滑石製模造品としては最も新しい段階に位置づけられる。小型の刀子も含めて墓山古墳陪塚の野中古墳に最も近い要素を見いだすことができる。東国の中での位置づけでは、滑石製模造品を副葬したに3基の埋葬施設をもつ野毛大塚山古墳例が、中期前半から後半への変革期の短期間の変遷を見るうえで有効であ

ろう。野毛大塚古墳では、その配置から第1（粘土槨）→第3（木棺直葬）→第2（石棺・東博保管資料）施設の順に築かれたと推定され、滑石製模造品の比較では、第1・第3がつくりが丁寧で写実的なのに対し、第2では簡略化されたつくりになっている。第1・第3は近接した時期に埋設されたとみられるが、両施設に納められた鉄鏃のうち、その主体をなす鳥舌形のもものが第3施設より第1施設のものの方が丁寧なつくりであること、また第3施設では広身の有舌鏃が形態ごとにまとまって置かれるという中期後半の古墳に見られる新しい要素をもつことから、鉄鏃群の様相からも第1施設が先行することが指摘されている（田中1995）。第3施設に曲刃鎌が入っている点も矛盾しない。

これら3施設の滑石製模造品は種類・数量ともに異なり、第1では刀子11、手斧2、短冊形斧3、直刃鎌2、勾玉1の19点、第3では手斧10、直刃鎌4の14点、第2では231点におよぶ刀子を主体に埴・坏・皿・槽・履などの特殊な石製祭器を含む総数243点が出土している。第1・第2は直刃鎌をもつが、第1の例は背がほとんど水平であるのに対し、第3では大型・小型品とも刃部側で湾曲し、小型品は刃部の先端にもわずかな湾曲がみられ、曲刃鎌を模した可能性もある。第1の刀子は把が先細りで、丸みのある精巧なつくりのものに限られる。第2の多量の刀子は、まさに粗製多量副葬の例であり、かなり簡略化されたものも見られるが、長さ8～9.8cmの大型品もあり、大小とも先細りの比較的長い把をもつ丸みのあるものと把が短く扁平になったものが混在する。この野毛大塚古墳の滑石製品群と高柳銚子塚の滑石製品を比較するならば、第3施設のものに最も近いと考える。また、高柳銚子塚の精度の高い大型滑石製模造品は、特別の祭器として配布された最終段階のものと思われる。

（7）高柳銚子塚古墳の性格と位置づけ

倭王権の象徴である前方後円墳の規模が頂点に達した時期、それはまた、東アジアの先進技術を積極的に取り入れ、急激な技術革新が進行した時代の中で、導入期からと定着・確立期へと変革した時期でもある。そのような変革期に列島各地の地域首長にはどのような動きがあったのか。東京湾東岸に存在した倭王権の前進基地の拠点に、その時期の地域首長墓を求めるのが本稿の目的である。はからずも、その古墳はすでに地上から消滅しつつあり、散在する資料からその復原を試みた。

高柳銚子塚古墳の墳形を再検討した結果、最も消極的な復原案によっても墳丘長142mという房総第2位の数値を得た。これは、川西編年IV期の埴輪をもつ東国最大の古墳・墳丘長148mの内裏塚古墳に迫る規模であり、前方部の規模によってはそれを超える可能性もでてきた。高柳銚子塚古墳と内裏塚古墳は同じ東京湾東岸にあっても流域が異なり、それぞれ一定のまとまりをもつ領域にある。前者の立地する小櫃川流域は、中国鏡を出土した出現期の前方後円墳・高部古墳群、仿製三角縁神獸鏡・中国製の四獣鏡をもつ前期の前方後円墳手古塚古墳等が立地

し、まさに前進基地の拠点として機能していたと考えられる地域である。高柳銚子塚より新しい中期後半段階には祇園大塚山古墳、後期に入ると金銅製品を多量に副葬した古墳群が海岸砂堤に林立し、その最終段階に17振りの飾り大刀ほか奈良県藤ノ木古墳に匹敵する副葬品をもつ金鈴塚古墳が君臨する。その後、房総最初の寺院・上総大寺が川原寺式の瓦をもって建立されたのもこの地である。

一方、内裏塚を擁する内裏塚古墳群は、小糸川下流域の海岸平野に展開し、内裏塚古墳の築造を契機に中期後半から後期にかけて墳丘長100m以上の前方後円墳が継続して築かれている。その数はこの古墳群内で5基に達する（房総全体で復原値も含めて16基）。その景観は、湾に面した立地も含めて百舌鳥古墳群を想起させる。この新興の大型古墳群は、少し遅れて北武蔵に形成された埼玉古墳群とともに東国の東玄閔を勢力下においた首長たちの奥津城である。

内裏塚古墳群が南関東を代表する首長墓として形成された背景には、北側に隣接する小櫃川の勢力と連合して勢力を拡大・発展させた背景が考えられる。そこには一種の輪番制ともみられる首長権の変遷がたどれる。両地域のIV期埴輪出土古墳は、小櫃・高柳銚子塚古墳（墳丘長142m+）→小糸・内裏塚古墳（148m）→小櫃・祇園大塚山古墳（100m）→小糸〔湊〕・弁天山古墳（90m+）という4代の系譜がたどれる。

高柳銚子塚は、この新たな展開の先陣をきって東京湾東岸に出現した変革期の首長墓である。それは倭王権が頂点に達しようとする段階の畿内からの強い波によって築かれ、倭王権の最盛期に築かれた内裏塚古墳より規模が大きい可能性が高い。内部施設には、典型的なものではないが、中期倭王陵の棺であった長持形石棺を用いている点も竪穴式石槨を採用した内裏塚古墳より畿内への志向性と親縁性が高いことを示している。

埴輪の位置づけでは、国内の須恵器生産とともに新たな段階に入った埴輪生産の開始時期の例であると考えられる。この時期には、畿内の王陵級の埴輪にも有黒斑と無黒斑のものが存在し、東国でも同じ状況がうかがえる。タテハケ二次調整・有黒斑の常陸舟塚山古墳の埴輪は、朝顔形埴輪が定式化以前の特徴をもつ豊浦大塚山古墳のものより1段階新しく、埴輪工人の専門化・分業化が進んだ段階に位置づけられ、周溝出土の土師器壺からも高柳銚子塚古墳にきわめて近い時期の埴輪であると考えられる。同様のことは野毛大塚山古墳のタテハケ二次調整、およびB種ヨコハケ二次調整・有黒斑の埴輪についてもいえる。

畿内から新たに入ってきた新技術による生産体制によって生まれたのが川西編年IV期の埴輪であり、その開始時期に位置づけられるのが畿内では墓山古墳・久津川車塚があり、定型化したB種ヨコハケによる二次調整も存在しながら有黒斑と無黒斑が共存している。遠江では堂山古墳の埴輪がこれに該当する。有黒斑でⅢ期の調整技法を残すものと窖窯焼成で定型化したものを含むB種ヨコハケ二次調整という新技術の所産が共存するIV期開始期の埴輪である。これに後続する千

人塚古墳等の埴輪にはいわゆる淡輪技法を用いたものが見られ、開始後まもなく変質した技法が伝わっている。

高柳銚子塚の埴輪は、Ⅲ期の埴輪を樹立した古墳がない地域に畿内から直接新技術による埴輪が導入された例といえよう。それは、次の地域首長墓である内裏塚古墳に継承されるが、タテハケ二次調整が用いられていることは、常総地域の埴輪工人との交流、あるいは工人の招来などより広域にわたる在地の埴輪生産体制を確立しつつあったことを物語っている。

一方、毛野では対照的にⅢ期の埴輪の多量樹立による埴輪工人の専門化が独自に進んだため、太田天神山・お富士山・白石稻荷山古墳の埴輪の製作技法には多様な要素が見られるが、定式化したB種ヨコハケによる二次調整はなく、窖窯焼成の例も見られない。ただし、白石稻荷山の埴輪はタガの突出度が低くなるなど他の2例より新しい段階のものとして区別する必要がある。従って、太田天神山・お富士山古墳は高柳銚子塚古墳より若干さかのぼる位置に、また、白石稻荷山古墳は高柳銚子塚古墳とほぼ同じかその直後に位置づけられる。このことから、毛野の典型的な長持形石棺は高柳銚子塚より先行して導入されたことになり、高柳銚子塚の石棺は、東国の長持形石棺では最も新しい例となる。

さて、Ⅳ期の埴輪の開始期を時間軸のどこに求めるかという問題が残されている。初めに示した中期前半と後半の境目はまさにⅣ期の埴輪の開始期にある。須恵器の国内生産の本格化を指標にすれば、中期前半は陶質土器の搬入期と大庭寺窯跡などに見られる半島系の工人を中心とする須恵器国内生産の開始期に、後半は陶邑での本格的な生産が確立し、陶邑が倭王権主導の国内生産の最大中心地として存続したTK73型式からTK47型式までが該当すると考える。前半の今來の技術の搬入・導入期を4世紀中葉から5世紀初頭、半島系文物の新たな導入と展開期である後半を5世紀前葉から末葉までという年代観から、Ⅳ期埴輪の開始期は5世紀初頭から前葉に求められる。高柳銚子塚古墳が東京湾東岸の海岸平野に姿を現したのもこの頃である。

2 祇園大塚山古墳の性格

(1) 古墳の沿革

木更津市祇園大塚山古墳は、たがね彫り動物文をもつ金銅製眉庇付冑を出土した古墳として知られる。この他に、画文帯四仏四獣鏡、銀製垂飾付耳飾、金銅製挂甲等、大陸文化の影響を強く受けた副葬品をもつことで、我国の五世紀代を代表する古墳の一つである。

遺物の詳細については、村井崑雄氏の研究⁽⁵⁾があり、1891に発見されて以来の遺物を集成し、検討されている。しかし、墳丘の形状、内部施設に関しては正確な資料がなく、埴輪についても公表された資料がなかった。

大塚山古墳の墳丘は、現在では完全に削平されているが、墳丘跡の栗林、乾田、畑には、下層の土器とともに埴輪の小片が散布している。今回紹介する資料⁽⁶⁾は、主に乾田、畑からの採集品であるが、1985年の夏、現地を訪ねた際、大塚山古墳所在地に住む長谷川曠氏宅で、自宅に保管されていた須恵器甕を拝見する機会があった。長谷川氏は、旧帝国博物館へ大塚山古墳の遺物を寄贈した堀切角蔵氏の子息から土地を購入した方の孫に当り、戦前から大塚山古墳の状況を見て来られた方である。須恵器甕は、1930、31年頃、石棺の蓋石をかたづけた所から土師器と共に出土したという。このことから、内部主体に関連した遺物である可能性がきわめて強いと考え、埴輪と共に報告する。

(2) 墳形の検討

大塚山古墳の墳形は、公図から前方後円墳であったことが推測できるが、野口秀昌編「千葉県君津郡 清川村地図」(図12)によって周辺部を含めた旧状を復元すると、墳丘長約70mのA案と約100mのB案が想定できる(図13)。A案では、公図に残る前方部前面のラインを生かして復元したが、これによると後円部径約55m、前方部長約110m、前方部幅約40mの帆立貝形の墳丘になる。しかし、前方の道に面した畑にも埴輪が散布することから、B案で水田の区画を生かした場合、後円部径約55m、くびれ幅約30m、前方部長約50m、前方部幅約55mとなり、後円部と前方部の長さがほぼ等しい墳形になる。

周溝の外郭線は、現在の道路ではゆるやかな曲線を描いているが、その後の改変による可能性が強いため、盾形周溝に復元した。周溝幅には、水田の区画約20mを用いて全長を求めると、外形約140mの規模になる。副葬品の内容から考えると、B案による復元が妥当と思われるが、なお別案を想定する余地が残されている。復元による墳丘主軸は、N-42°-Wである。

また、長谷川氏の話では、段築をもつ墳丘であったと推測される。内部施設として伝えられる組合式石棺は、蓋石の長側に抉りの入っていたことが絵図によって伝えられている。他は、手懸りもないが、後円部の墳頂より一段下がった面に所在していたらしい。

(3) 埴輪と須恵器甕

ここで紹介する祇園大塚山古墳出土の埴輪は、いずれも小片で、全体を知ることはできない。しかし、外面調整、内面調整、タガの形態、焼成による質感、および胎土の観察が可能である。

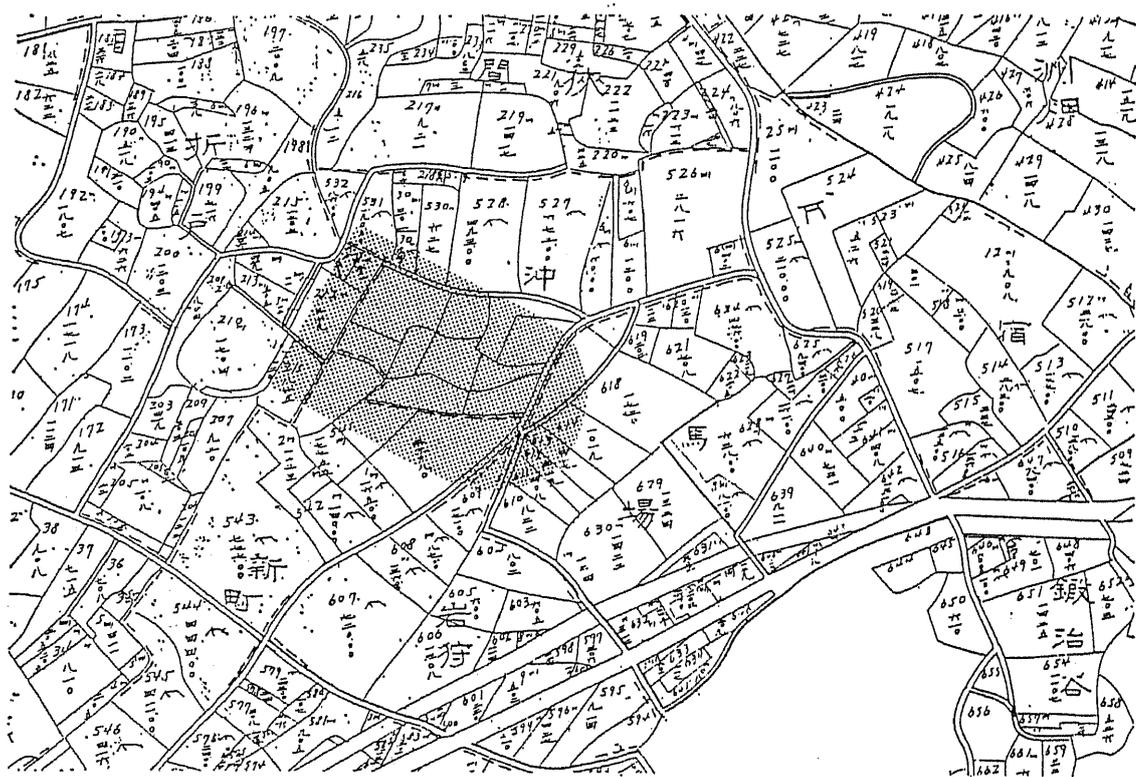


図13 公図に見る祇園大塚山古墳 (S=1 : 5,000)
 (野口秀昌「千葉県君津群清川村地図」大日本地図学会 昭和10年刊による)

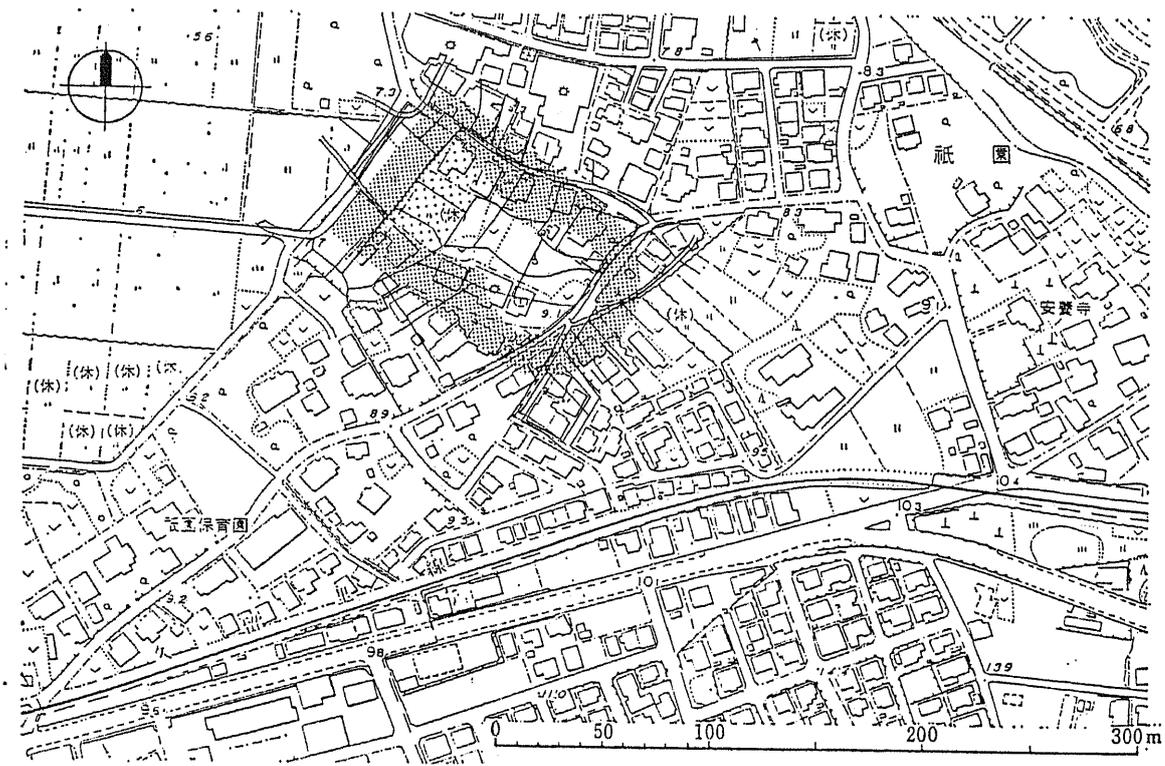


図14 祇園大塚山古墳復原図および周辺現況図 (S=1 : 5,000)

外面調整については、従来知られていた縦ハケ一次調整のもの他に、横ハケによる二次調整を行ったものが存在することが明らかになった。図14-1は、当りの強い横ハケのタッチが、川西氏の言われるB種横ハケ⁽⁷⁾に見られるものである。横ハケは4本/1cm、縦ハケには4~6本/1cmのものが用いられる。横ハケをもつ資料は、図14-1、および2のみである。内面調整は、縦方向、および斜位のナデがほとんどで、図14-3に横方向の荒いハケが見られる。

タガの断面は、すべて台形で、端部をややくぼませている。突出度は弱く、6~9mmで、全体にきゃしゃな作りである。第3図8は、朝顔形埴輪の頸部突帯かと思われるが、直下にスカシ孔とも考えられる面が見られる。不自然な感はあるが、仮にスカシ孔とすれば、円形のものである。

黒斑をもつものはなく、また須恵質のものも見られなし。色調は、明るい橙色で、やや赤味を帯びたものもある。軟質ながらも焼き上りは良く、特に横ハケをもつ図14-1は堅緻に焼上げられている。窰窯焼成によると考える。

胎土は、長石と思われる白色の砂粒を多く含み、1~12mmの赤色粒子（土器片粉末等の混和剤）が見られる。図14-1の胎土は特に良質で、砂粒も細かく、の赤色粒子は1mm以下である。

上総の東京湾海岸平野では、大塚山古墳の他に三基の大型前方後円墳が窰窯焼成の2次横ハケ埴輪を出土している。市原市姉崎二子塚古墳（全長110m+）、木更津市高柳銚子塚古墳（全長109~130m）、富津市内裏塚古墳（全長147m）の三基で、いずれもが100m以上の規模をもち、それぞれ、養老川、小櫃川、小糸川下流域を代表する古墳である。内裏塚古墳、銚子塚古墳の例は、既に公表されたように⁽⁸⁾、B種横ハケを用いた2条3段以上の大型円筒埴輪で、タガ間に2個の円形スカシをもつ。内裏塚古墳の埴輪には、突出度の非常に高いものが含まれ、高さ2.5cm程の鐙状のタガをめぐらす例もある。高柳銚子塚の例も、祇園大塚山例に比べると、タガの突出度が高く（1.1~1.5cm）強いヨコナデによってシャープに仕上げられている。

さて、姉崎二子塚古墳の円筒埴輪は、従来一次縦ハケによるもののみが知られていたが、採集品の中には、B種横ハケを用いた硬質の埴輪もあり、非常にシャープな口縁部とタガをもち、厚さ6mm程に焼き上げられているものもある。以上のように、海岸平野に占地する四基の前方後円墳の円筒埴輪は、いずれも川西編年IV期の要素を満たすことが明らかになった。

ここで問題になるのが祇園大塚山古墳の築造年代である。従来の見解では、5世紀中葉から6世紀初頭の幅の中に位置づけられていたが、次に紹介する大型甕の発見によってより限定できるものと考えられる。

大型甕（図15）は、口縁部上半を欠失するが、器高（現高）18.3cm、頸部径8.2cm、胴部最大径16.7cm、孔径1.7cm~1.8cmである。焼成は堅緻で、胎土は精選されており、断面はセピア色を呈している。胴下半は、明瞭な分割成形によっており、底部には叩き目を消す強い仕上げナデがある。胴中位は、横方向のヘラケズリによって整形され、弱い稜が残る。また、櫛歯の連続刺突による2段の施文は、口縁部の2段の波状文構成と対応し、2条の凹線間が幅広で、ゆったり施文されている点等が古相の要素としてあげられる。一方、頸部の径が広く、肩の張りがやや弱くなっており、胴部径に対して頸部までの高さが大きい

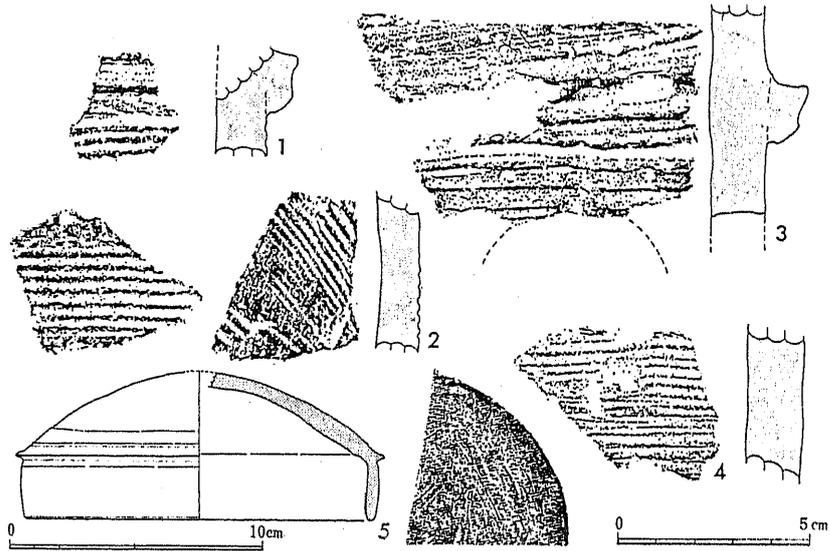


图 15 御獄山古墳 (1·2), 塚山古墳 (3~5) 出土埴輪・須恵器

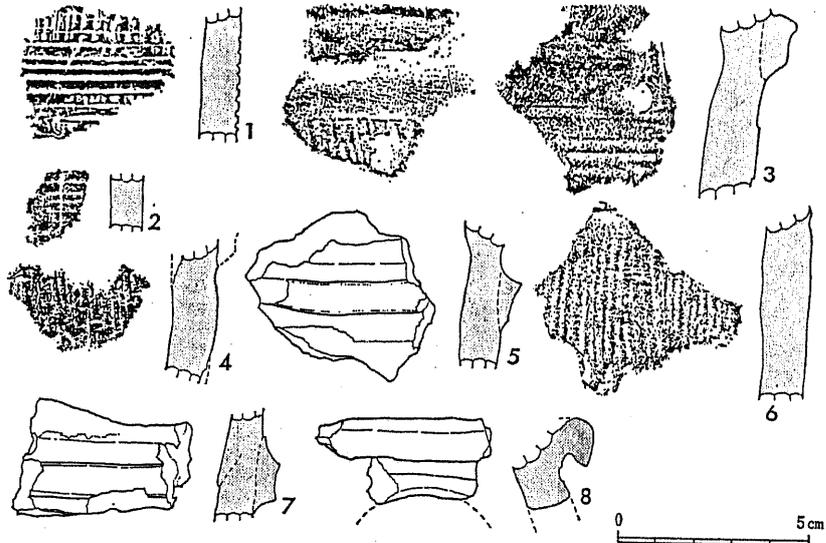


图 16 祇園大塚山古墳出土埴輪

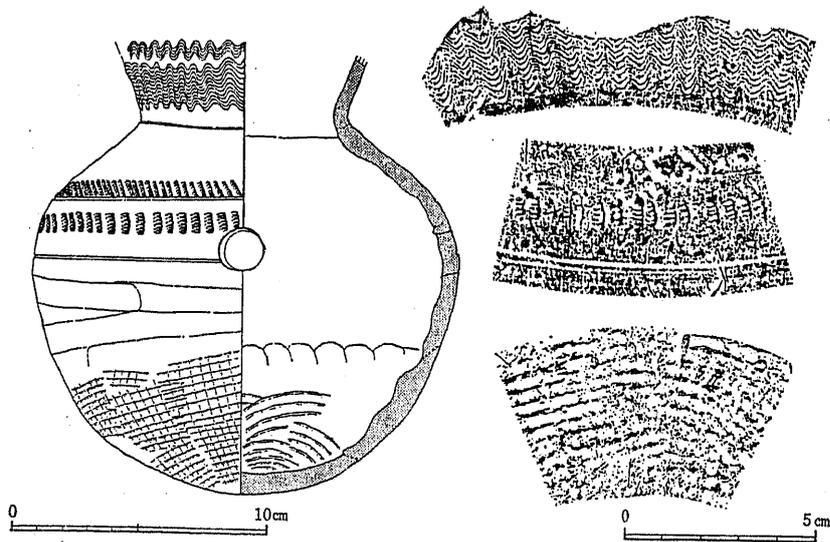


图 17 祇園大塚山古墳出土須恵器

が特徴である。波状文が若干くずれ、凹線間の施文に櫛歯を引っぱる技法が見られる点は、新しい様相といえる。このような器形、整形、文様構成に多様な要素をもつ類例は少ないため、さらに広く検討する必要があるが、以上の新旧の要素から、定式化しない段階の須恵器として、陶邑ON46型式併行期に位置づけられよう⁽⁶⁾。

(4) 祇園大塚山古墳の年代

大塚山古墳は、前掲の須恵器大型甕によって、ON46型式併行期に有力な一点を求めることが可能になった。

そこで、遺物相のはっきりしている類例を南関東に求めると、世田谷区御嶽山古墳が挙げられる。御嶽山古墳は、三角板鋳留式短甲・横矧板鋳留式短甲・七鈴鏡の組み合わせによって5世紀第2四半期から第3四半期に比定できる古墳である⁽¹⁰⁾。図16-1・2は、表面採集の小片ながら明瞭な二次横ハケが認められ、施文の特徴からB種と判断できる。やや軟質ではあるが、黒斑はない。

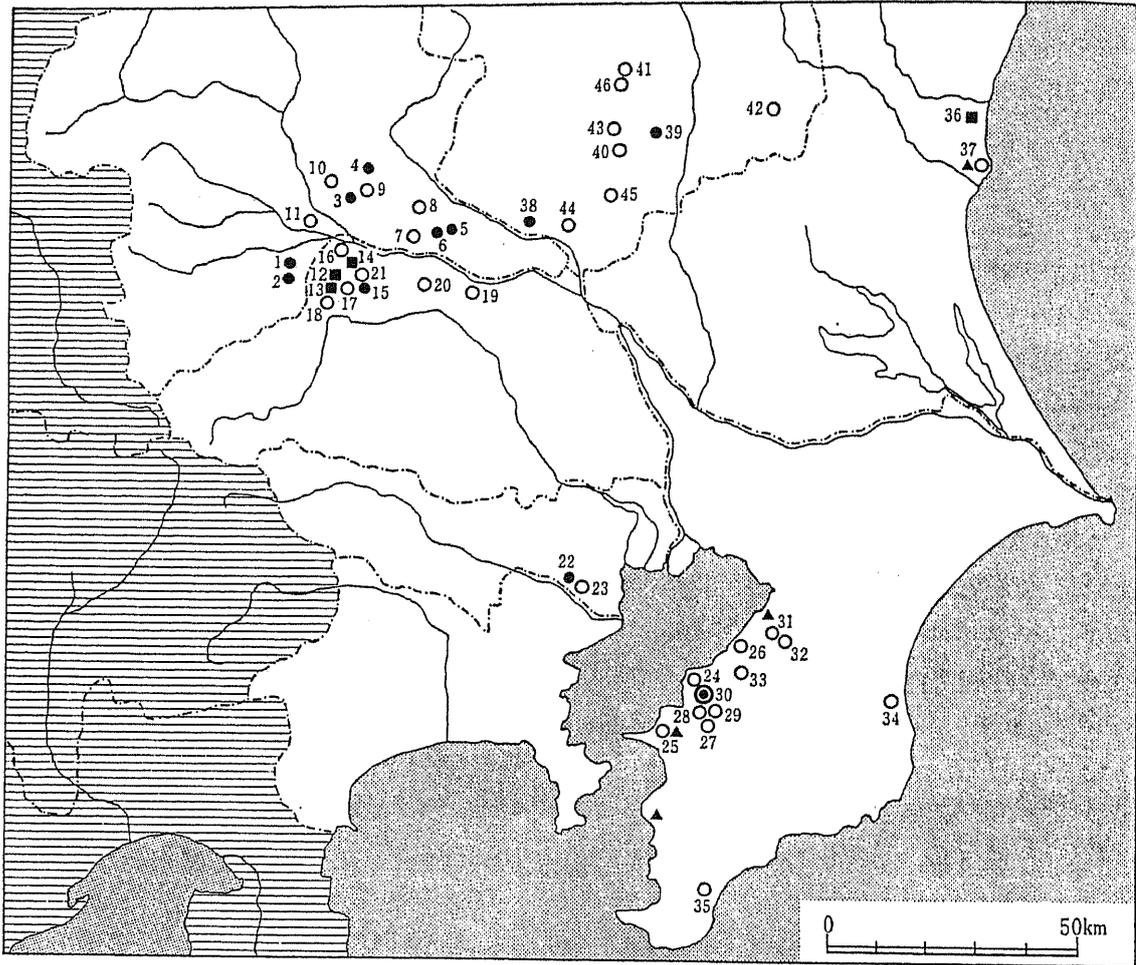
一方、須恵器を伴う例には、宇都宮市塚山古墳等がある。塚山古墳は、既に発表されたように⁽¹¹⁾、B種横ハケをもつ窖窯焼成の埴輪を出土しているが、採集資料の中に、須恵器杯蓋の破片があり(図16-5)、稜線のきわめてシャープな古式の器形で、口縁部径13.6cm、器高6.8cm、口縁部高2.4cmに復元できる。天井部外面は、2/3以上が一定方向の強いナデによって調整され、内面には、手持ちによる不定方向のヘラナデが明瞭に残り、定式化以前の特徴を残す。塚山西古墳にも若干の横ハケ埴輪と古式の須恵器器台があり、TK208型式前後に位置づけられる。塚山古墳の杯蓋は、これに先行すると把握できよう。このように、両古墳は、祇園大塚山古墳とほぼ併行すると見られるが、次に、関東地方のIV期の中での位置づけを試みてみよう。

第1表では、上総における横ハケ埴輪盛行期である川西編年IV期を中心に、その前後を取り上げている。まず、関東への横ハケ埴輪の導入と定着に重要な動きを見せる、上毛野地域と北武蔵の児玉地域に着目しておきたい。

川西氏の編年に従って、有黒斑の横ハケ二次調整をⅢ期のメルクマールとしたが、これに前後して、児玉地域、常陸には有黒斑の格子叩きをもつ埴輪が出現している。この格子叩き調整の埴輪は、和泉、紀伊等に特徴的な平行叩きを施した須恵質の埴輪とは全く異質で、韓式系軟質土器の生産との関連が指摘されており⁽¹²⁾、妥当な見解と考えている。

この韓式系軟質土器は、須恵器の国内生産に先行して生産されたもので、関東では、千葉市大森第二遺跡に出土例がある。4世紀後半には、生産が始まっていたと推定され、格子叩きの埴輪は、それらの動きを受けて4世紀末葉から5世紀初頭頃には出現していた可能性が強い。続いて、横ハケによる二次調整の技法が関東にも伝えられた結果、本庄市公卿塚古墳のように格子叩き技法とB種横ハケ技法の埴輪が共存するのであろう。しかし、これも関東全域に見られる現象ではなく、畿内により近い系統をもつ上毛野地域では、直接B種横ハケ技法が入っていた可能性が高い。格子叩きをもつ北武蔵の三古墳の遺物相は、滑石製模造品・剣・手斧・曲刃鎌と、上毛野Ⅲ期の遺物相に対応するものである。

このように、地域によって少しずつずれながらも、5世紀前半には、関東にB種横ハケ埴輪が出現、定着していた地域が存在する。一方、常陸南部と下総では、二次縦ハケ調整の有黒斑埴輪が用いられた2つの古墳⁽¹³⁾(石岡市舟塚山古墳、小見川町豊浦目大塚山古



● B種横(有黒斑) ■ 格子叩き ○ B種横(無黒斑) ▲ 格子ハケメ

図 18 B種横ハケ埴輪出土古墳分布図

	上毛野	北武蔵	南武蔵	上総・安房	下総・常陸	下毛野	東北
Ⅲ	1. 十二天塚 2. 白石稻荷山 3. お富士山 4. 赤堀茶臼山 5. 女体山 6. 太田天神山	12. 金鎧神社 (叩き) 13. 生野山將軍 塚(叩き) 14. 公卿塚(叩 き・横ハケ) 15. 志渡川	22. 野毛大 塚山		36. 真崎権現山 (叩き)	38. 佐野八幡山 39. 笹塚	
Ⅳ	7. 米沢ニツ山 8. 亀山 9. 丸塚山 10. 今井神社 11. 不動山	16. 三空山2号 17. 生野山9号 18. 長沖14号 19. とやま 20. 横塚山 21. 熊谷後5号	23. 御嶽山	24. 高柳銚子塚 25. 内裏塚 26. 姉崎二子塚 27. 矢那大塚(2次) 28. 清見台A-4号 29. シ A-8号 30. 祇園大塚山 31. 山王街道350号 32. 持塚1号 33. 境1号 34. 待山1号 35. 永野台	37. 川子塚	40. 壬生浅間塚 41. 塚山 42. 新田山1号 43. 富士山 44. 赤麻愛宕塚 45. 桑57号 46. 塚山西	裏町 天王塚 国見八幡塚
Ⅴ	七興山 保渡田二子山	埼玉稻荷山 大稻荷	西福寺	弁天山 南向原4号	三昧塚 花野井大塚 金塚	塚山南 摩利支天塚	神谷作109号 菅沢2号 原11号

表 1 関東・東北のB種横ハケ埴輪出土古墳(註14)

墳)がこの時期に併行すると把握されているが、副葬品の内容が全く不明で、今後によくの問題を残しているといえよう。

今のところ、上総には、有黒斑のB種横ハケをもつ埴輪は見つかっていないが、内裏塚古墳についてみると、舶載の金銅製胡籙金具⁽¹⁴⁾は、定形化したものとしては古相の特徴をもち、先端のみが曲がる曲刃鎌、古式の長頸鏃等、半島系の要素が強い副葬品をもつ。また、高柳銚子塚古墳は、長持形石棺材と、直弧文をもつ滑石製刀子⁽¹⁵⁾によって、内裏塚古墳よりややさかのぼる可能性が強い。この二基は、副葬品の内容に相異があるものの、有黒斑横ハケ埴輪の出土古墳としては関東で最新の様相をもつ野毛大塚山古墳⁽¹⁶⁾にほぼ併行すると思われる。また、石枕等の滑石製品、革綴短甲をもつ姉崎二子塚古墳も、これに近い時期に位置づけられよう。祇園大塚山古墳は、これらに続く埴輪樹立古墳としてとらえられ、南関東のIV期を滑石製品の有無と鋳留短甲の出現という二要素で分けた場合、新相の古墳に属するわけである。

また、銀製長型耳飾を検討すると、中間飾りの装飾が少なく簡素な二子塚例よりも、花籠形連環球の意匠をこらした中間飾りをもつ祇園大塚山例が新相に属す。この種の中間飾りをもつ(金)銀製長型耳飾のうち、大塚山例のように三条の鎖で垂飾をつけたものには、和歌山県大谷古墳、熊本県江田船山古墳がある。いずれも横矧板鋳留式の甲冑をもつ新しい半島文化の影響が色濃い古墳であるが、船山例と共通の意匠をもつ類例が、兵庫県宮山古墳にも見られることで、この種の長型耳飾りは三角板鋳留短甲の段階には出現してした可能性が高い。宮山古墳出土の須恵器はTK73型式で、埴輪はIV期のものである。祇園大塚山古墳は、宮山古墳併行期に後続するIV期の古墳であり、関東IV期の中でも新相に入るか、その築造時期は伴出の須恵器からON46型式併行期に位置づけが可能となった。

なお、須恵器の年代観については、陶邑TK73型式を5世紀初頭から前葉に、ON46型式を5世紀中葉に置き、TK23型式を5世紀後葉、TK47型式を5世紀末葉に比定している。

祇園大塚山古墳の築造された時期は、関東で窖窯焼成の横ハケ使用埴輪が広く用いられた時期で、今後も発見例が増加するものと思われる。また、この前段階の様相には、地域によって各々系統を異にする動きがあり、関東のII期、III期、IV期古相の様相はかなり複雑である。一方、TK208型式の段階には、窖窯焼成の縦ハケだけを用いた埴輪(表1)が出現しており⁽¹⁷⁾、V期の最古段階はIV期埴輪の残存部分と重なると思われる。さらに常総地域の特徴として、「斜格子状ハケ」を加える独特の技法が上総と常陸の古墳⁽¹⁸⁾に見られる。これもまた、常総IV期の地域色といえよう。

註

- (1) 豊浦大塚山古墳は、発掘調査報告書等では現在の字名を冠して「三之分目大塚山古墳」とされているが、大塚山古墳を含む古墳群は旧村名を冠して「豊浦古墳群」とされている。ここでは、歴史地理的意味をもつ後者の名称に基づき豊浦大塚山古墳とした。
- (2) 白石稻荷山古墳の墳形は、藤岡市教育委員会による範囲確認調査報告書にもとづいて復原したが、前方部の形態については不明な点が多く、今回は葺石によって明らかな2・3段目の段築と墳丘測量図から図上復原案を示したに留まる。太田天神山・お富士山古墳の墳形との違いを示した。
- (3) 墓山古墳の前方部幅値は、公開されているデータでは153mとなっているが、隅角の崩壊部

分を復原すると160～162mになる。

- (4) 高柳銚子塚古墳には区画整理事業の計画があり、保存か消滅かの岐路に直面している。
- (5) 村井崑雄「千葉県木更津市大塚山古墳出土遺物の研究」『ミュージアム』第189号 東京国立博物館 美術出版社 1966 (2-17頁)
- (6) 田中新史氏の採集品の提供を得た。また第5図掲載資料も氏の提供によるものである。
- (7) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 1978 (1-7頁)
- (8) a 註7に同じ
b 築比地正治「高柳銚子塚古墳の埴輪」『宇麻具多』第3号 木更津古代史の会 1982 (7-8頁)
c 小沢洋『二間塚遺跡群確認調査報告書』Ⅱ 富津市教育委員会 1985
- (9) この須恵器甕の位置づけについては、国立歴史民俗博物館考古研究部の吉岡康暢氏の御見解を参考にさせていただいた。
- (10) 田中新史「御嶽山古墳出土の短甲」『考古学雑誌』第64巻第1号 日本考古学会 1978 (28-44頁)
- (11) a 常川英夫他『塚山古墳群』栃木県考古学会 1979
b 石部正志編『塚山古墳外形確認調査報告』 宇都宮大学考古学研究会 1995
- (12) 酒井清治「千葉県大森第2遺跡出土の百済土器」『古文化談叢』第15集 九州古文化研究会 1985 (105-124頁)
- (13) a 車崎正彦「常陸舟塚山古墳の埴輪」『古代』第59・60合併号 早稲田大学考古学会 1976 (38-49頁)
b 安藤鴻基他「千葉県香取郡小見川町三之分目大塚山古墳の長持形石棺遺材」『古代』第64号 早稲田大学考古学会 1978 (35-45頁)
- (14) 小沢洋「参考資料 内裏塚古墳出土遺物」『年報』No.1 (財) 君津郡市文化財センター 1983 (42-44頁)
- (15) 楢山林継「管生周辺の遺跡」『上総菅生遺跡』1979 (159-165頁)に掲載・紹介されており、伴ってもよいと考えている。
- (16) 墳丘斜面で採集されている須恵器杯片は、最古の形態までさかのぼるものではない。
- (17) 第一表の上総以外の地域については、主なものを掲載している。また、破線で区切ったV期の埴輪は、C種横ハケ・B種横ハケの残存、縦ハケ一次のみの外面調整のものである。
- (18) a 那珂湊市川子塚古墳 (表採)
b 内裏塚古墳 (前掲註(4) -C)
c 菊間手永古墳 (市原市文化財センター調査、近藤 敏氏教示)
d 富津市富士見台古墳 (平野雅之・諸墨知義「富士見台遺跡 (FT008)」『年報』No.5 (財) 君津郡市文化財センター 1987)
- なお、「斜格子状ハケ」は、Ⅲ期公卿塚(埼玉県本庄市)にも存在し、高山塚(茨城県常陸太田市梵天山3号墳)にも認められる。その初現は、Ⅲ期に遡ることは確実で、おそらく二次調整縦ハケと二次調整横ハケの交流の中で出現したものと考えられる。

参考文献

(著者50音順)

- 1 天野末喜・中西康裕他『新版古市古墳群』 藤井寺市教育委員会 1993
- 2 天野末喜・山田幸弘・中西康裕・東口公子編『古市古墳群をめぐる諸問題』 藤井寺市教育委員会 1989
- 3 天野末喜編『岡古墳』 藤井寺市教育委員会 1989
- 4 天野末喜他『古市古墳群』 藤井寺市教育委員会 1986
- 5 安藤鴻基他「千葉県香取郡小見川町三之分目大塚山古墳の長持形石棺遺材」『古代』第64号 早稲田大学考古学会 1978 (35-45頁)
- 6 伊賀高弘・近藤義行『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第15集 城陽市教育委員会 1986
- 7 伊賀高弘・太田勝康・近藤義行他『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第17集 城陽市教育委員会 1987
- 8 一瀬和夫・鈴木陽一・小野昌光・伊藤雅文『允恭陵古墳外堤の調査』 大阪府教育委員会 1981
- 9 一瀬和夫・伊藤雅文『応神陵古墳外堤発掘調査概要』 大阪府教育委員会 1981
- 10 一瀬和夫「河内平野とその周辺の埴輪編年概観」『古代文化』第44巻第9号 (財) 古代学協会 1992 (8-12頁)
- 11 一瀬和夫「古市古墳群における埴輪群の変遷—大型古墳を中心として—」『究班』埋蔵文化財研究会 1992 (279-288頁)
- 12 上田睦「円筒埴輪の形態、調整分類」 「土師の里埴輪窯跡群の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告』VI 藤井寺市教育委員会 1991 (179-228頁)
- 13 上田睦「古市古墳群出土円筒埴輪の様相」『古代文化』第44巻第9号 (財) 古代学協会 1992 (13-22頁)
- 14 上田睦「円筒埴輪編年から見た古市・百舌鳥古墳群の構成」『倭の五王の時代』 藤井寺市教育委員会 1994 (6-16頁)
- 15 上田睦他『石川流域遺跡群発掘調査報告』IV 藤井寺市教育委員会 1989
- 16 上田睦他『石川流域遺跡群発掘調査報告』V 藤井寺市教育委員会 1990
- 17 上田睦他『石川流域遺跡群発掘調査報告』VIII 藤井寺市教育委員会 1993
- 18 上田睦他『石川流域遺跡群発掘調査報告』IX 藤井寺市教育委員会 1994
- 19 梅沢重昭『史跡天神山古墳外堀部発掘調査報告書』群馬県教育委員会 1970
- 20 梅原末治『久津川古墳研究』(復刻) 名著出版 1973
- 21 萩原恭一「畑沢埴輪生産遺跡」 「房総における埴輪の変遷と分布」『千葉県文化財センター—研究紀要』15 (財) 千葉県文化財センター 1994 (76-129, 160-177頁)
- 22 小沢洋『二間塚遺跡群確認調査報告書』II 富津市教育委員会 1985
- 23 小野山節他『紫金山古墳と石山古墳』 京都大学文学部博物館 1993
- 24 笠井敏光他・古市古墳群研究会編『古市古墳群とその周辺』 摂河泉文庫 1985
- 25 北野耕平『河内野中古墳の研究』 大阪大学文学部国史研究室 1976
- 26 河上邦彦他「堺市いたすけ古墳・文殊塚古墳・定の山古墳及び岸和田市貝吹山古墳の測量調査」『考古学研究紀要』3 関西大学考古学研究会 1977 (1-22頁)
- 27 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 1978 (1-70頁)

- 28 車崎正彦「常陸舟塚山古墳の埴輪」『古代』第59・60合併号 早稲田大学考古学会 1976 (38-49頁)
- 29 小泉裕司・近藤義行他『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第19集 城陽市教育委員会 1989
- 30 小泉裕司・佐藤正之『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第20集 城陽市教育委員会 1990
- 31 木暮昌典・島田孝雄『天神山古墳外堀・A陪塚』一範囲確認調査一 太田市教育委員会 19705
- 32 小林行雄「直弧文」『古墳文化論考』 平凡社 1976 (483-540頁)
- 33 小林行雄「直弧文」『古墳文化論考』 平凡社 1976 (483-540頁)
- 34 近藤義郎編・広瀬和雄・天野末喜他『前方後円墳集成』一近畿編一 山川出版社 1992
- 35 佐伯秀人『内裏塚古墳群』 (財) 君津郡市文化財センター 1992
- 36 茂木努・志村哲『白石稻荷山古墳』範囲確認調査報告書II 群馬県藤岡市教育委員会 1987
- 37 茂木努・丸山治雄・志村哲『白石稻荷山古墳』範囲確認調査報告書I 群馬県藤岡市教育委員会 1986
- 38 白井久美子「祇園大塚山古墳の埴輪と須恵器」『古代』第83号 早稲田大学考古学会 1987 (100-109頁)
- 39 白井久美子「長州塚」の石製品『房総考古学ライブラリー6』古墳時代(2) (財) 千葉県文化財センター 1992 (37-40頁)
- 40 白石太一郎・杉山晋作・車崎正彦「群馬県お富士山古墳所在の長持形石棺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集 1984 (83-120頁)
- 41 白石太一郎「神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館 1985 (79-114頁)
- 42 末永雅雄『日本の古墳』 朝日新聞社 1961
- 43 杉山晋作「石製刀子とその用途」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館 1985 (115-133頁)
- 44 杉山晋作「特異な彫刻文のある石製腕飾」『古代探叢』II 早稲田大学出版部 1985 (299-318頁)
- 45 梶山林継「菅生周辺の遺跡」『上総菅生遺跡』 中央公論美術出版 1980 (159-1 65頁)
- 46 鈴木敏則「淡輪系円筒埴輪」『古代文化』第46巻第2号 (財) 古代学協会 1994 (39-50頁)
- 47 田中新史「古墳時代中期前半の鉄鏃(一)」『古代探叢』IV 早稲田大学出版部 1995 (247-308頁)
- 48 田中英夫「長持形石棺の再検討」『古代学研究』77 古代学研究会 1975 (17-29頁)
- 49 千葉県教育庁文化課『千葉県富津市内裏塚古墳群測量調査報告書』千葉県教育委員会 1986
- 50 築比地正治「高柳銚子塚古墳の埴輪」『宇麻具多』第3号 木更津古代史の会 1982 (7-8頁)
- 51 寺田良喜他『野毛大塚古墳』 世田谷区教育委員会・野毛大塚古墳調査会 1999
- 52 中井正幸「古墳出土の石製祭器—滑石製農工具を中心として—」『考古学雑誌』 第79巻 第2号 日本考古学会 1993 (31-61頁)
- 53 中井正幸「四世紀の神まつりはどのようなものだったか—滑石製農工具の検討から」『新視点日本の歴史』第2巻古代編I 新人物往来社 1993 (126-135頁)
- 54 中西康裕編『土師の里8号墳』 藤井寺市教育委員会 1994
- 55 原秀三郎・柴垣勇夫他『遠江堂山古墳』 磐田市教育委員会 1995

- 56 平野功他『三之分目大塚山古墳発掘調査報告書』小見川町教育委員会 1987
- 57 前田敬彦「和歌山県和歌山市車駕之古址古墳」『日本考古学年報』46 日本考古学協会
1995 (531-535頁)
- 58 間壁忠彦『石棺から古墳時代を考える』同朋舎出版 1994
- 59 松島栄治他『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
- 60 松村一美他『お富士山古墳』一範囲確認調査報告書一 伊勢崎市教育委員会 1989
- 61 三辻利一「千葉県内の古墳出土埴輪の蛍光X線分析」『千葉県文化財センター研究紀要』15
(財)千葉県文化財センター 1994 (130-158頁)
- 62 森本六爾「直弧紋を有する石製刀子」『古代文化研究』第2号 古代文化研究会 1925 (87
-99頁)
- 63 山内昭二他『舟塚山古墳周濠調査報告書』石岡市教育委員会 1972
- 64 和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号 日本考古学会
1987 (44-55頁)

第3節 総武の内海の大型円墳

1 大型円墳の立地

総武の内海の大型円墳は、西岸の鶴見川・多摩川と東岸の村田川・養老川に集中する傾向があり、前期から中期の大型前方後円墳が存在しない中流域にも立地している。また、東岸では、下流域に大型前方後円墳の集中する小櫃川・小糸川流域に大型円墳の分布が希薄である。ここでは、鶴見川から小糸川にわたる沿岸地域を主な対象とするが、近代以降の開発が急速に進められた地域であるため、未調査のまま消滅した古墳がかなりあると考えられる。特に、首都圏の大半は本来の古墳の分布状況を復元できなくなっている。そこで、比較的開発が遅く始まったため古墳の遺存が良く、最近の分布調査や発掘調査によって内容がかなり分かってきた東岸の養老川と村田川流域を参考にしてこの地域の大型円墳を概観してみたい。

2 規模と構成

大型円墳の概念は、地域や時代によって異なると思われるが、まず墳丘規模に拠って一般的にどれ位のものを大型とするか確認することにする。養老川流域では、1,162基以上の古墳が確認されている（『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図』—南部編・北部編—1987・1988市教委）。その内前方後円墳が61基で全体の9.3%であるのに対し、円墳は659基で57%を占めるが、この内墳丘径50m以上となると3基(0.5%)に過ぎない⁽¹⁾。45～33mになると8基(1.2%)となる。さらに25m以上にすると48基(7%)を占める⁽²⁾。同様の作業を村田川流域でも行ってみると、確認された総数663基の内、前方後円墳は36基で5.4%、円墳は411基で64%を占める。最大の円墳は墳丘径54mで養老川流域とほぼ同規模であるが、50m以上のものは2基のみで円墳中0.5%となる。45～33mのものが5基(1.2%)、25m以上にすると39基(9%)になる。中期の甲冑や胡籙金具を出土した円墳の規模がほぼ25m以上であることから、円墳の7～9%を占めるこの規模に一つの基準を見出し得る。しかし、これらをすべて大型円墳と呼ぶには規模の格差が大きく数も多いため、1%強を占める45～33mとした第2のグループ以上を大型円墳とするのが妥当であろう。それ以下の25mを超えるものは、表1に示したように流域によっては規模の割に副葬品の豊かなものもあり、地域内での地位に一定の高い位置付けを示す中規模の1群といえよう。尚、調査古墳の墳丘規模は円丘の下端、すなわち周溝をもつものは内側下端の径を示している。

大型円墳、特に40～50mの規模になると、何らかの施設が付設されている可能性が強い。事実、多摩川流域最大の円墳とも考えられていた野毛大塚山古墳は、帆立貝型と確定し、さらに造り出し状の施設が付くことも確認された⁽³⁾。御嶽山古墳や持塚1号墳のように埴輪、あるいは葺石をもつものには付帯施設の存在を予測する必要がある。すなわち大型円墳には、内部施設しか調査していないものが多く、検討すべき課題は多い。全掘例でなければ同列に扱えない限界をもつことを強調しておきたい。

総武の内海沿岸では、円形の墳丘をもつ墓は弥生時代には見られず、現在のところ、古墳出現期に径30m強の傑出した規模をもつ神門5・4・3号墳が初現である。これらは墳丘に発達した突出部が付き、円墳でもなく中型の帆立貝型前方後円墳でもない定型化以前の前方後円墳の一類型として区別できる。

瀬戸内東部を中心に、弥生時代中・後期には既に円丘墓が存在している。しかし、東国では神門古墳群以前に群馬・埼玉で見られる隅丸方形の小墳丘も東山道系の変容した形と考えられ、方形の認識がくずれたもので一部で言われているような円墳ではない⁽⁴⁾。円丘系の墓は、地域や時代によって規模や形態に様性があり、形態については造り出し部・陸橋部等に盛土がない限り、全掘しないと明らかにできないといえるが、この地域の実際の発掘例から見て大型円墳には何らかの付帯施設が付くことを予測すべきであろう。

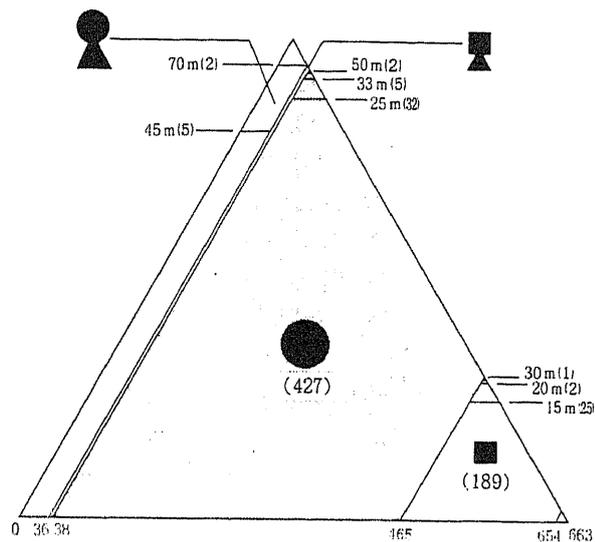


図1 村田川流域の墳形と規模の構成
()内は基数

3 円墳の類別

円墳の形態的要素には、円丘部の径と高さ・造り出し部の大きさと高さ（盛土の有無）・周溝の形態が挙げられる。これによってA：付帯施設のない円墳（周溝は全周）、B：造り出し付円墳、C：ブリッジ（陸橋部）付円墳を設定することができる。

造り出し付円墳は、従来前方後円墳の造り出し付設を契機に出現した墳形として捉える見方が一般的であった。それに従えば中期古墳の一類型となるが、新潟県三条市保内三王山11号墳や福井県敦賀市の立洞2号墳のような碧玉製石釧をもつ段階にも調査例がある。また、帆立貝型古墳への造り出し付設例も前掲の野毛大塚古墳の他にも類例が確認されており、造り出し付円墳には時代によって異なる系統のものが併存していることが考えられる。帆立貝型古墳は、短小な前方部の形態から造り出し付円墳との類似性が指摘されているが⁽⁵⁾、造り出しが埴輪列や土器、木器等を用いた一種の祭壇に終始するのに対し、短小な前方部には内部施設が設けられることも少なくない。この点で両者は基本的な機能を異にした施設であり、造り出しはあくまでも葬送に関連する副次的な祭祀の場であるといえよう。厳密に言えば、造り出しといえるものは上記のような祭器を用いた祭祀跡が検出された場合に限られ、周溝に張り出した小規模な方形部は単なる通路の掘り残しの場合もある。従って、造り出し付円墳の設定には形態に加えて地域・時期的背景と機能を示す遺物が必要となろう。

一方、ブリッジ付円墳は、周溝を掘り残したブリッジ部分に盛土がなく、その長さが周溝の幅とほぼ同じものを設定している⁽⁶⁾。ブリッジは、基本的には墳丘への通路であるが、埴輪や土器類を用いた二次的な祭祀の場としても機能した例が少なくない。しかし、

表1 東京湾周辺の大型円墳一覽

番号	名称	所在地	時期	墳丘径・高 (m) (m)	外部施設	内部施設	副葬品・その他
1	朝光寺原1号墳	横浜市港北区市ヶ尾町下市ヶ尾	中期	37.0・2.5		木棺直葬	三角板鋌留短甲・眉庇付冑・鉄剣・鉾・滑石臼玉
2	日吉矢上古墳	横浜市港区日吉本町下ノ町	中期	24.0・4.0	埴輪	木棺直葬	龍鏡2・竹櫛・鉄剣
3	了源寺古墳	川崎市北加瀬菱見ヶ崎公園	中期	25.0・3+			仿製六獣鏡2・鉄斧
4	馬絹古墳	川崎市高津区馬絹994-8	後期	33・6	葺石	横穴石室	鉄釘
5	西福寺古墳	川崎市高津区南梶ヶ谷	中期	35・5.5	円筒埴輪		
6	虚空蔵山古墳	横浜市緑区荏田町215	前期	35・5.5		木棺直葬	鉄剣・鉈・鉄鏃・玉類
7	室ノ木古墳	横浜市磯子区磯子町浜	後期	(30)	(埴輪)	(横口石槨)	金銅装馬具・大刀・鉄鏃
8	狐塚古墳	世田谷区尾山台2丁目17-1	中後期	40・6	円筒埴輪		
9	御嶽山古墳	世田谷区等々力1丁目	中期	40・7	円筒埴輪 葺石	不明	三角板、横刃板鋌留短甲各1・七鈴付内行花文鏡 鉄剣・鉄鏃
10	砧中学校4号墳	世田谷区成城1丁目	中期	37.0・1.5		粘土槨?	大刀・土師器
11	兜塚古墳	狛江市中和泉字橋場749	中後期	36.0・5.5	円筒埴輪		
	白井塚	狛江市中和泉字橋場817	中期	36.0・4.0	(葺石)		
	経塚	狛江市中和泉字橋場1786	中期	40・5.0	(葺石)		
	絹山塚	狛江市中和泉松原東1818	中後期	40・4.7		礫槨?	大刀片
	松原東稲荷塚	狛江市中和泉松原東	中後期	34・4.0	埴輪葺石	礫槨	大刀・鉄鏃
12	上布田1号	調布市上布田	中期	31.0	陸橋部付		土師器
13	広場2号墳	鴨川市広場上広場		42・4			(周溝確認)
14	向原新割古墳	富津市二間塚字向原新割	後期	39.0	造出し付	横穴石室	馬具・大刀・人骨20以上
15	丸塚古墳	富津市大堀字砂山	後期	30.0・4.0	陸橋部付	横穴石室	馬具・骨鏃・大刀・鉄鏃 ・刀子・玉類
16	八重原1号墳	君津市三直	中期	37.0・4.0			三角板、横刃板鋌留短甲各1・鉾・鉄製模造品他
17	戸崎37号墳	君津市岩出		40・7			
	戸崎49号墳	君津市岩出		40・7			
	宮下西谷3号墳	君津市宮下字西谷		40・4			
	中谷2号墳	君津市浜子字中谷		40・5			
	熊ノ腰1号墳	木更津市矢那熊ノ腰		40・2+			
18	卒土神社南古墳	袖ヶ浦町岩井南	中後期	36・5	円筒埴輪		二段築成
20	辺田1号墳	市原市惣社字辺田	前期	33・5.6	陸橋部付 (3ヶ所)	木棺直葬	素環頭大刀・鉄槍・鉄剣 鉈・小型素文鏡・玉
21	小田部古墳	市原市小田部字向原	出現期	23.0・3.0	陸橋部付	木棺直葬	ガラス玉・管玉
22	持塚1号墳	市原市西広字持塚	中期	39.5・4.5	円筒埴輪	木棺直葬 粘土床	神獸鏡・大刀・刀子・鉄 鏃・玉類・須恵器
23	諏訪台9号墳	市原市村上字諏訪台	前期?	45.0・6.5			(墳丘測量・部分調査)
24	稲荷台1号墳	市原市山田橋字稲荷台	中期	27.5・2.3		木棺直葬	「王賜」銘鉄剣・横刃板

25	東間部多1号墳	市原市西広字蛇谷	中 期	29.0・2.5		(2基) 木棺直葬 (3基)	鉄留短甲・鉄製胡籙金具 ・きさげ状鉄製品・鉄鍔他 横矧板鉄留短甲・鉄劍・ 大刀・鉄鍔・刀子
26	鍋塚古墳	市原市新堀字淵	中期?	60・4.4	(造出し付)		
27	丸山塚古墳 安須1号墳	市原市松崎字塚越 市原市安須	前期? 中後期	50・4.5 39.2・3.0			
28	菊間天神山古墳	市原市菊間字手永	中 期	44.0・6.7	円筒埴輪		
29	大厩浅間様古墳	市原市大厩字川上台	前 期	52.0・11.4	(造出し付)	木棺直葬 (3基)	珠文鏡・石釧・玉類・ 鉄劍・滑石製白玉
30	菊間仙台原古墳 草刈1号墳	市原市菊間字仙台原 市原市草刈字天神台	(後期) 中 期	33・3.3 38.0・7.0		木棺直葬 (3基)	鉄劍・鉄鉾・鋸・鉄製農 具・鉄挺ミニチュア等
31	草刈3号墳	市原市草刈字六之台	中 期	35.0・6.0		木棺直葬	滑石石釧・大刀・鉄鍔・ 舟形須恵器・玉類
32	長者塚1号墳	市原市潤井戸字長者塚	後 期	38.0・5.0			
33	七廻塚古墳	千葉市生実町字峠台	中 期	54.0・8.8		木棺直葬 (3基)	仿製獸形鏡・滑石石釧・ 石製立花・石製模造品・ ・鉄劍・鉄鉾・鎌・銅鍔
34	上赤塚1号墳	千葉市南生実町	中 期	31.0・2.7	陸橋部付	木棺直葬 (2基)	石枕・石製立花・石製模 造品・鉄製農工具・鉄鍔 ・玉類・大刀・石釧
35	東寺山石神2号 墳	千葉市東寺山町字石神	中 期	25.6・2.3		木棺直葬	石枕2・石製立花・石製 模造品・鉄製模造品・鏡 ・針・錐・鉄劍・刀子
36	鶴塚古墳	印旛郡印西町小林	中 期	44.0・3.0	壺形・器 台形埴輪	木棺直葬 (3基)	鉄劍・鉄鉾・大刀・刀子 ・鉄鍔・滑石製白玉
37	カブト塚古墳	山武郡山武町麻生新田地先	後 期	36.3・4.2		横穴石室	金銅装大刀・馬具・鍔
38	経僧塚古墳	山武郡成東町野堀字経僧	後 期	45.0・7.15	埴輪 二重周溝	箱式石棺 横穴石室	圭頭大刀・胡籙・馬具・ 金銅製鈴・鉄鍔・玉類 (測量のみ)
39	松尾姫塚古墳	山武郡松尾町	後期～	66.0・10.0			
40	真々塚古墳	八日市場市飯塚字真々塚	中 期	(60)・(12)		木棺直葬	鉄劍・鉄斧・鉄鍔・大刀
41	竜角寺78号墳 竜角寺104号墳	印旛郡栄町竜角寺字大畑 印旛郡栄町竜角寺字大畑	後 期 後 期	35 34		横穴石室	

4 位置づけと消長

前に触れたように、大型円墳が何らかの付帯施設を伴うことに着目すると、出現期から後期に至る動向を理解しやすいと思われる。出現期・前期前半に、特殊化した突出部を付設した大型円墳が主要河川流域の小地域首長に採用される現象は、総武の内海東岸だけではなく、吉備・讃岐地方を中心とする瀬戸内海沿岸や九州北部、北陸等広い範囲で確認されている。定型化した前方後円墳の成立以前には、こうした大型円墳が中小規模の方墳群の頂点として導入された状況が見られる。前期になると、円墳は定型化した前方後円墳の成立と共に多様化し、造り出し付円墳・ブリッジ付円墳のような付帯施設をもつ一群と付帯施設のないものに分化し、前者が比較的大型の規模を保つもののそれぞれ別の系譜の中で優劣も生まれている。しかし、総武の内海沿岸ではこの段階の円墳は少なく、中小規模古墳の大半は方墳で、円墳は大型墳に限って採用される状況にある。

円墳が一般化し、最も多様性をもつのは中期である。この段階で径 33 m 以上の大型円墳と 25 ～ 30 m クラスの中規模円墳が、副葬品の内容からも分離できるようになる。大型円墳は、帆立貝型を含めた前方後円墳を頂点として編成された地域首長層の一端を担い、中規模円墳はその有力構成員の墓として一定の地位を占める。中期の甲冑・胡・を出土した古墳は、ほとんどが円墳でしかも 25 ～ 30 m クラスのものに集中しているのである。特に、横矧板鋌留式短甲をもつ例が多く、このクラスの円墳の中から「王賜」銘鉄剣を副葬した稲荷台 1 号墳が現れる。これは、この時期に鉄製短甲の配布のピークがあり、倭王権の積極的な外交政策を背景とした各地の中小規模首長の組織化を反映したものと見える。

一方、東京湾沿岸の大型円墳は、最大でも径 54 m に留まり、60 m を超える円墳が存在する関東平野の他の地域とは状況を異にする。後期以降になると、前方後円墳の築造数・規模に地域差が著しいため大型円墳の位置付けも流域ごとに相違が出てくる。鶴見川・多摩川流域には明確に後期に下る 50 m 以上の前方後円墳がなく、横穴式石室をもつ大型円墳が著しく減少する。東岸でも養老川・村田川流域では 70 m を超える前方後円墳はなく大型円墳も少ないのに対し、山武郡を中心とした地域では後期になっても 100m クラスの前方後円墳があり 60 m を超える大型円墳が存在する。このように、後期後半になるとごく限られた地域にだけ大型円墳が存在し、東国の終末期大型方墳の出現・展開と関連して大型円墳の消長に見られる地域差の存在は、関東平野全体の問題である。

註

- (1) 現在のところ調査によって明らかになっている最大の円墳の規模は 45 m である。
- (2) 田中新史「市原台地の特性」『「王賜」銘鉄剣概報』滝口宏監修 吉川弘文館 1988 (2 頁)
- (3) 寺田良喜「野毛大塚古墳見学資料」世田谷区教育委員会 1989.9
- (4) 田中新史「出現期古墳の理解と展望—東国神門五号墳の調査と関連して」『古代』第 77 号 早稲田大学考古学会 1984 (1-53 頁)
- (5) 遊佐和敏『帆立貝式古墳』同成社 1988
- (6) 拙稿「小規模古墳の一類型について—ブリッジ付円墳の検討—」『古代』第 75・76 合併号 早稲田大学考古学会 1983 (29-69 頁)

第4節 赤焼き須恵器の展開

1 赤焼きの「須恵器」

市原市草刈遺跡で出土した赤焼きの須恵器が「草刈型土器」として報告されてから、既に8年が経過した。その後、草刈遺跡の継続的な調査が行われ全体の8割以上が調査された現在、この種の土器が出土する範囲は限られていることがほぼ判明してきた。その主たる範囲は草刈遺跡の中央部から南に張りだした草刈六之台遺跡とその付け根部に小支谷を挟んで対面する区域である。このほかに、現在整理中の草刈遺跡E区から壺、あるいは甕の底部と考えられる破片が出土しているが、断片的な資料でしかない。今回報告する草刈六之台遺跡が、最もまとまった資料をもつ中心的な出土地点であることは確実であろう。そこで、これまでの調査成果をここでまとめ、これらの土器の位置づけに触れておきたい。

2 名称について

この土器の名称は、上記のように最初の報告で「草刈型土器」と仮称された。これについて、報告者の高橋康男氏は、器種・ロクロ整形に須恵器的要素、酸化炎焼成・赤彩に土師器的要素をもつという特徴を挙げ、「土師器」「須恵器」といった名称を冠さなかった理由について以下のように説明している。「「赤焼き須恵器」あるいは「ロクロ土師器」といった形で表現することも理論的には可能であったが、土師器・須恵器ではない「第3の土器」として規定し得るかどうかの検討も踏まえた後からでも遅くないと考えていたため、このような名称とした」とし、1987年の上記の論考の中で、これらの土器が、土師器・須恵器のどちらにも組み込めない、従来の土器体系の枠外にある土器、またその需用と供給が一地域のわずか一時にすぎないところでは認められない土器として「第3の土器」に規定する考えを示した。

筆者が「須恵器手法の土器」と仮称した理由もこの見解と同様、焼成技法と赤彩に須恵器の範疇にない土器の存在を模索したからである。しかし、焼成技法とできあがった製品の質は必ずしも一致していない例は少なくない。いわゆる生焼けといわれる須恵器は、橙色で素焼きに近い質感をもつ点に注目すると、窖窯焼成でも還元していない例は古墳時代から平安時代を通じて多々見られる。また、土師器とこの土器を比べると、土師器と区別し難いものもあるが、明らかに硬質で緻密な焼き上がりの製品が多く、今回報告した資料の中には明らかに外面が還元した製品が2点含まれているのである。1点は828号住居出土の杯、あるいは有蓋高杯の杯部、もう1点は150号住居出土の円形透かしをもつ高杯の脚部である。特に150号住居出土の高杯脚部はやや焼きの甘い須恵器といった方が適切な焼き上がりの製品であるが、明らかに外面を赤彩しているのである。これらが窖窯で焼成されたことは疑いなく、これによって、製

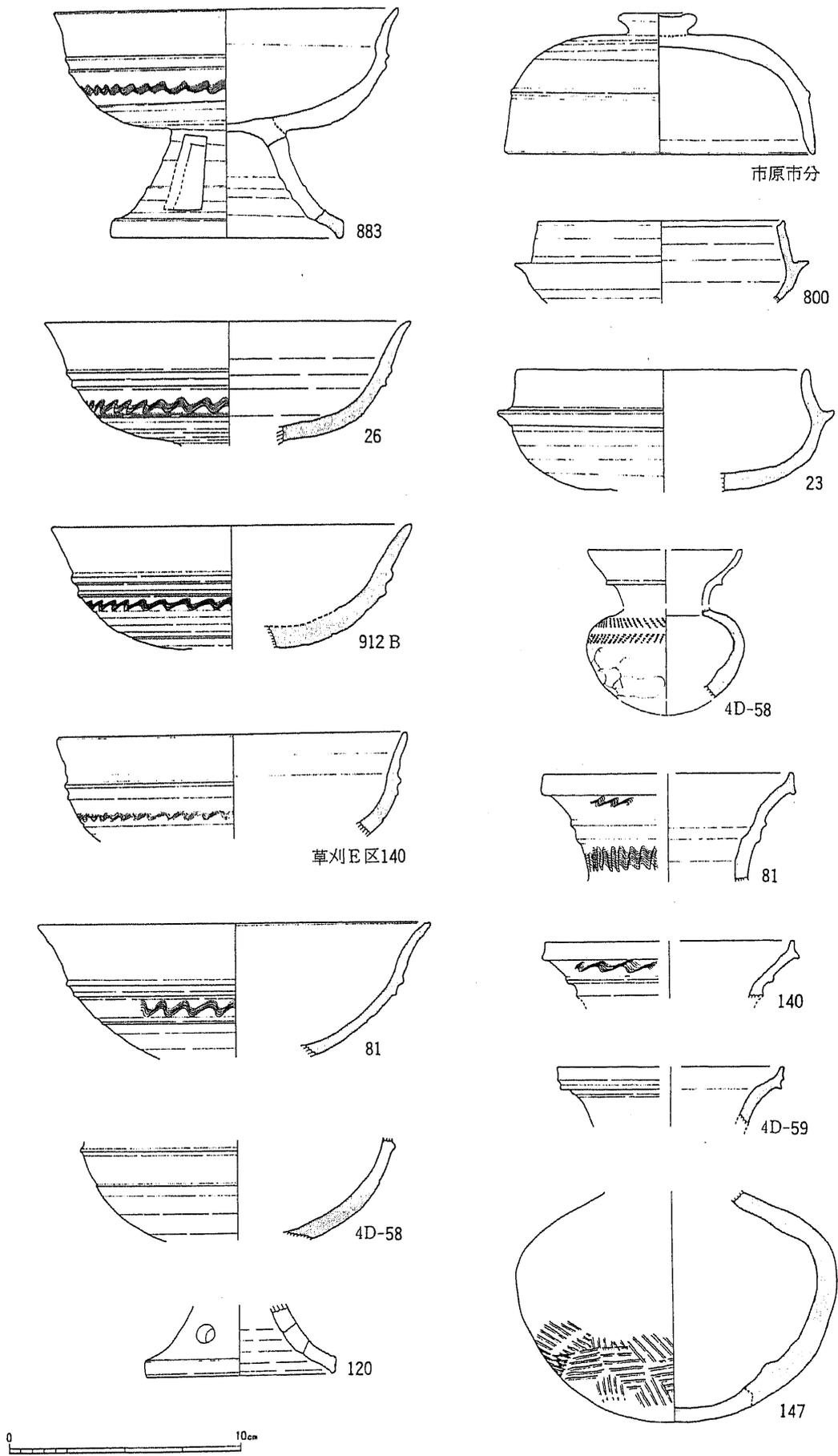


図1 草刈遺跡出土の赤焼き須恵器(1)

作手法だけでなく焼成技法も須恵器の名に矛盾しない土器であることが明らかになった。なお、壺の一部には黒斑が見られるが、これは窖窯焼成の埴輪にもしばしば見られる。また、窯跡出土の須恵器にも見られるとの御教示を得た⁽¹⁾。ここで、須恵器の範ちゆうを「還元焰焼成」ではなく「窖窯焼成」とすることに異論もあるかと思われるが、窖窯の採用に土師器との根本的な相違を見ることができると考える。

さて、通有の須恵器と異なるのは、初めから酸化焰焼成で赤く発色するように意図して作られていることである。また、古い段階は、焼成に際して赤色に塗彩していることから、本来は赤彩して焼く土器だったことが推測される。これはまさに「赤焼き」を意図したものであり、焼成によって赤く発色することを目的としている。これは、北部九州で報告されている赤焼きの須恵器と同様の技法である。

北部九州の例は6世紀以降に見られ、7世紀に多く8世紀におよぶものもあり、7世紀以降の製品については、赤彩せずに赤（深紅）色に焼き上げるため焼成温度等を調整した形跡があり、はからずも還元してしまったものは改めて赤彩するといった製作技法が見られる⁽²⁾。北部九州では、これらに先行する資料として福岡県嘉穂郡桂川町寿命王塚古墳からは鮮やかなオレンジあるいは赤褐色に発色した赤焼き土器が出土している（赤彩はされていない）。この「赤焼き」土器を再検討した西弘海・高島忠平氏は、これらを「蓋杯・杯・高杯・直口壺・提瓶・台付き壺などの須恵器があり、大多数は暗灰色を呈する。なかにいわずゆる「赤焼き」とよばれる赤褐色のものがある。」と報告し、一般的な須恵器と区別する見解を示している⁽³⁾。西氏はその相違点として、還元させない焼成技法のほかに、底部の切り離し技法と底部外面の回転ヘラケズリ技法の欠如を挙げた。すなわち、赤焼き土器は「粘土ひもを巻き上げてロクロで調整するが、切り離しをしない技法で作られたもの」として初期須恵器や半島系軟質土器に見られる平底土器の製作技法との共通点を指摘し、「須恵器技法が日本に輸入された当初の古い技法をそのままとどめていた事」に注目している。一般の須恵器工人とは異った系統の工人集団の存在を示唆したわけであるが、この見解は、あくまで「赤焼き」土器を須恵器の別種として扱う立場であることがうかがえる。

草刈六之台出土の赤焼き土器には、現在のところ杯が確認されていないが、高杯の底部ケズリ手法を見る限りは一般的な須恵器と同様の手法である。この点について言えば、寿命王塚の「赤焼き」土器よりさらに一般的な須恵器に近い要素をもつと言えよう。ここで、器種・器形、成形・整形手法、窖窯焼成技法を須恵器と同じくする赤焼き土器を「赤焼き須恵器」と呼称することにし、草刈六之台を含む広義の草刈遺跡から出土している「赤焼き須恵器」の諸様相をまとめ、他地域の類例を引いて検討を加えたい。

3 草刈遺跡出土の赤焼き須恵器について

(1) 出土地点

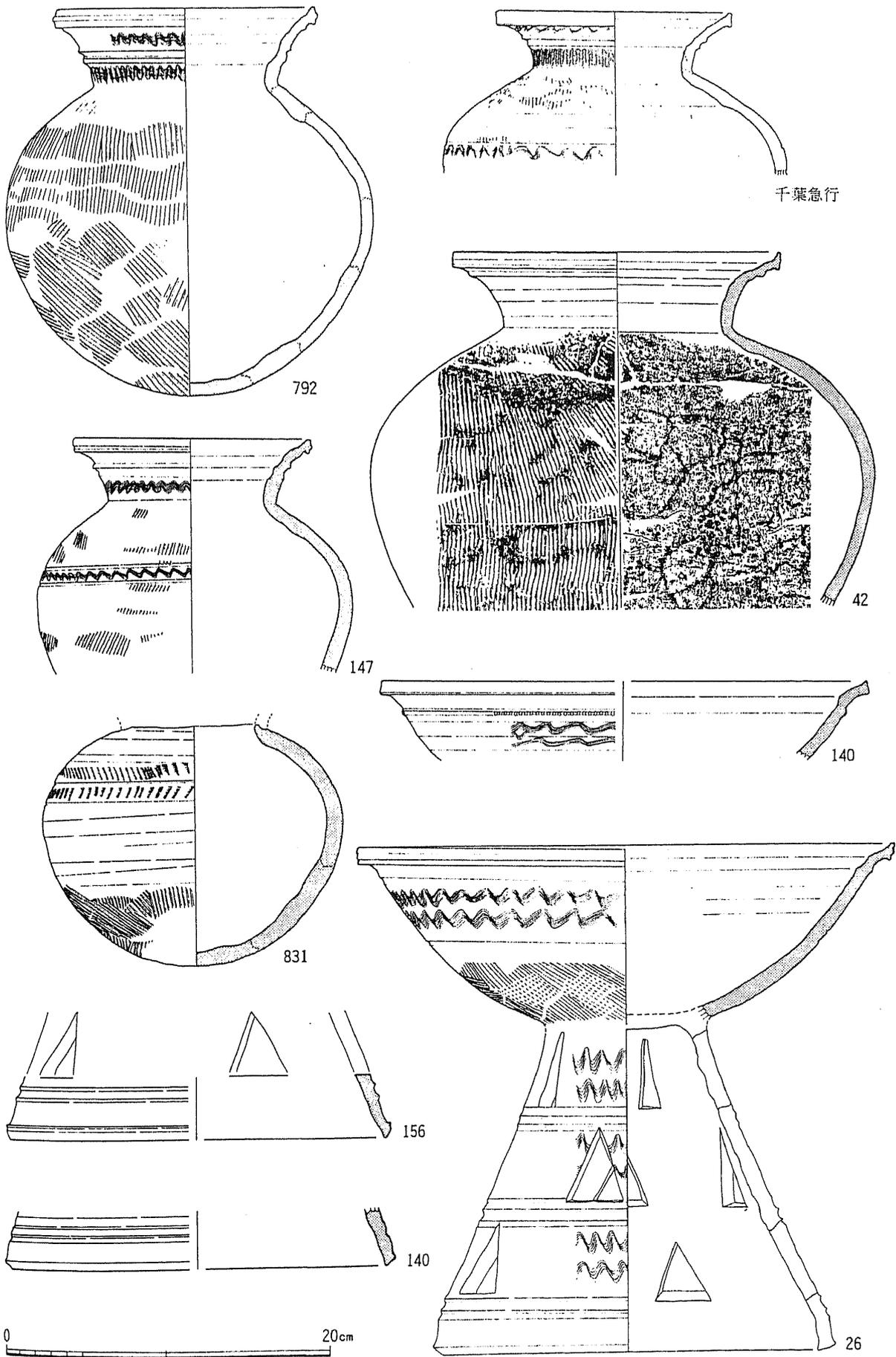


図2 草刈遺跡出土の赤焼き須恵器(2)

広義の草刈遺跡は上記のように約30万㎡の規模をもつが、そのうち報告書が刊行された分も含めて千葉県文化財センター調査区の約18万6千㎡と市原市文化財センター・千葉急行線内の調査区約8,200㎡分の基礎整理が終了している現段階で、出土地点は大きく2カ所に分かれている。1カ所は、すでに報告されている市原市文化財センター・千葉急行線内の調査区と草刈六之台遺跡の所在する草刈台地南側の中央部である。もう一カ所の出土地点は、草刈台地の北東部に位置する草刈遺跡E区である。E区は、土器の復原作業が進行中の遺跡であるため、今後資料が増えると思われるが、現時点で確認しているのは無蓋高杯の杯口縁部1点のみである。断片的な資料であるが、口縁部の下に2条の突帯と櫛描き波状文をもち、回転ナデ手法を確認できる。胎土の特徴・質感・赤彩の発色も含めて前掲の出土地点の資料と同じ製品である。また、竪穴住居から出土した資料である点も注目される。

次に出土した調査区内での出土位置を見ると、台地中央部の3つの調査区では、市原市文化財センター・千葉急行線内調査区の出土例は、ともに草刈六之台側の台地整形部から出土している。草刈六之台遺跡内での出土地点は、1～3次調査区の南半に片寄った分布がみられ、特に南東区域に多い。一方、1～3次調査区の北縁中央部に1軒離れて赤焼き須恵器を出土した竪穴住居（42号住居）があり、市原市文化財センター・千葉急行線内調査区の出土地点の対岸に位置している。草刈六之台遺跡の4次調査区からは住居跡に伴う出土例がなく、表土層から叩き目のある壺の破片が出土したにとどまる。

（2）出土した遺構と器種構成

草刈六之台遺跡1～3次調査区では17軒の竪穴住居から赤焼き須恵器が出土しており、それぞれの住居から出土した赤焼き須恵器の器種構成は以下の通りである。

遺構番号	赤焼き土器の器種と数量
26号	無蓋高杯杯部1、高杯脚裾部1、器台受け部1
42号	短頸壺（大型）1、高杯脚裾部1
81号	無蓋高杯杯部1、高杯脚裾部1、（高杯）蓋つまみ1、長頸壺口縁部1
120号	高杯脚部1
121号	高杯脚部1
140号	器台受け部1、器台脚裾部1、長頸壺口縁部1
147号	短頸壺（中型）1、無蓋高杯杯部1、大型甗あるいは長頸壺胴部～底部2
150号	高杯脚部1
156号	器台脚裾部1
310号	無蓋高杯杯部1
736号	高杯脚部1
792号	短頸壺（中型）1



図3 草刈遺跡の赤焼き須恵器出土遺構

817号	無蓋高杯 1
828号	有蓋高杯杯部 1
831号	大型甗あるいは長頸壺肩部～底部 1
883号	無蓋高杯 1
912B号	無蓋高杯杯部 1

以上のように、住居から出土した赤焼き須恵器は28個体分あり、高杯が最も多く15点が図示可能であった。次に多いのが壺類で8点あり、中型から大型の短頸壺3点、大型甗・長頸壺が5点見られる。器台は4点図示できた。

この他に、3号墳周溝、溝等から出土したものがある。特に3号墳周溝では、無蓋高杯杯部5、高杯脚2、長頸壺1、小型甗1の計9点が出土した。周溝上層の土器群と時期を同じくしている。中世以降の溝から出土した赤焼き須恵器は、溝23号から有蓋高杯杯部1点である。表土あるいは包含層から出土した赤焼き須恵器は無蓋高杯杯部2、大型甗あるいは長頸壺肩部～胴部1の計3点が図化におよんだ。図化した個体数は40個体である。また、器形の復原が困難であったり、小片であるため図示しなかった資料は次の通りである。

遺構番号等	赤焼き土器の器種と数量
-------	-------------

23号	壺胴部 3片。
42号	甗胴部 3片、甗頸接合部～肩部 1片、壺胴部 5片。
81号	壺接合部～肩部 1片、壺胴部 7片（内1片は特に平行叩きシャープ、また2片は86号の壺破片片と接合）。
86号	壺胴部10片（厚手と薄手の2種、5片が81号の壺破片と接合）。
120号	壺胴部 2片（内1片は特に平行叩きシャープで、赤の発色も良好）。
143号	壺胴部 1片（薄手）。
147号	壺胴部 5片（内2片は薄手）。
202号	壺胴部 1片。
776号	壺胴部 1片。
788号	壺胴部 3片（叩き痕ナゲ消す）。
3周 4D-58	壺胴部 1片（平行叩き明瞭）
3周 4D-66	壺胴部 1片（4D-67の1片と接合）。
3周 4D-67	壺胴部 3片。
3周 4D-85	壺胴部 1片（平行叩き明瞭、内側には無文の当て具痕）。
3周 4D-95	壺胴部 1片（平行叩き明瞭）。
L56-17-1	壺胴部 2片（3F-09～3E-21）。
T56-17-2	壺胴部 1片（平行叩き明瞭、3F-21～41）。
表採	壺胴部 2片。



図4 草刈遺跡の古式須恵器出土遺構

これらの資料を出土した遺構のなかで明らかに赤焼き須恵器と時期を異にするのは、23号（中世以降の溝）、776号（平安時代の竪穴住居）、788号（古墳時代前期の竪穴住居）である。その他の遺構は該期の竪穴住居と考えられ、図示した資料を出土した竪穴住居に加えて86号・143号にも赤焼き須恵器が伴った可能性がある。ただし、これらの2軒は図示した資料出土の竪穴住居と切り合って隣接している。確認調査で出土した資料（L56・T56出土）は、いずれも310号・147号の周辺から出土している。一方、同時期の須恵器を出土した住居は、1～3次調査区の中央部と西側に多く、中央部は赤焼き須恵器の分布域と重なっている。須恵器と赤焼き須恵器が共存する121号・147号・310号もこの中央部分布域にある。

図示に至らなかった赤焼き須恵器の個体数は26個体以上になると考えられる。器種はすべて壺類で、特に胴部破片が多く残ったが、頸部接合部から肩部の破片も2点あり、1点は甕になると見られる。

次に、草刈六之台以外の草刈遺跡から出土した赤焼き須恵器を見ると、市原市文化財センターの調査区で有蓋高杯杯部1、高杯脚部1、高杯蓋1、大型短頸壺の口縁部1の4点、千葉急行線調査区から大型短頸壺の口縁部から胴部上半1が出土している。また、前掲のように草刈遺跡E区の竪穴住居で無蓋高杯の破片1点が検出されている。

（3）製作技法

成形技法 蓋杯・高杯は粘土紐巻き上げ。壺・甕は叩き成形、叩き板は平行線文をもち、当て具は無文である。高杯形の器台は受け部に叩き成形、脚部に粘土紐巻き上げが用いられる。

調整・整形技法 （蓋）杯・有蓋高杯・無蓋高杯には回転ヘラケズリ、削りだし突帯、沈線、回転ナデ、カキ目技法が用いられる。壺・甕も基本的に同じであるが、叩き痕を擦り消すナデや底部のヘラケズリには手持ちの手法も見られる。

施文 無蓋高杯では櫛描き波状文が飾られる。壺・甕にも口縁部や肩部に櫛描き波状文があり、肩部には羽状の櫛描き刺突文も見られる。高杯形器台は、器台部に櫛描き波状文や刻み文、脚台部には三角形の透かしと櫛描き波状文が施されている。

赤彩 草刈遺跡では、すべての器種が赤彩されている。遺存が悪く不明確なものもあるが、ほとんど全部赤彩されていると見られる。ただし、その発色には鮮やかな明赤褐色と沈んだ灰褐色系統の2種類があり、赤彩が製作のどの段階で行われたかによる差異か、あるいはすべて焼成前に塗布された場合にも窖窯内の状況によって発色が異なることが考えられる。

焼成 窖窯を用いた酸化焰焼成。

（4）産地の推定

草刈六之台遺跡出土の赤焼き須恵器の生地には土師器とは明らかに異なる精良な粘土を用いていることは胎土の肉眼観察で分かるが、三辻利一氏による蛍光X線分析を行った結果、同時期の須恵器・土師器とも区別され、地元の精良な粘土（下末吉粘土

層の白色粘土) を使用して作られていることが推定された。また、素焼きという焼き物の強度からも、近くで生産された可能性が高い。これを赤焼き須恵器の出土状況からみると、赤焼き須恵器の存続期間には約80軒の竪穴住居が確認でき、そのうち17ないし19軒の住居から赤焼き須恵器が出土しており、検出された個体数は66個体におよぶ。廃絶後の住居からの出土状況が本来の状況を必ずしも意味していないことは考慮すべきであるが、これらの数値が少ない割合でないことは確かである。破片資料が大半を占めることを考えれば、相当量の赤焼き須恵器が存在したと推定され、在地で生産されたと考えるのが妥当であろう。

(5) 時期

草刈遺跡の赤焼き須恵器が存続した時期は当遺跡の古墳時代Ⅳ期として分期した時期にほぼ対応する。Ⅳ期は、竪穴住居に伴う古式須恵器が出土し、造り付けのカマドが定着することをⅢ期との区分の指標とした。須恵器の型式で言えば、TK216型式からTK47型式までの期間である。土師器ではⅢ期が平底杯から丸底杯への変換期にあり、Ⅳ期の後半で完全に丸底化する。また、カマドの定着に伴って甑も完備される。

TK216型式の赤焼き須恵器は認められず、三方透かしの無蓋高杯の型式から見て、その初現はON46型式からTK208型式に求められる。TK208型式の一例である817号住居出土の無蓋高杯は口縁端部に明瞭な沈線がめぐり、口縁部の比率が大きく、波状文を凸帯によって明確に区画している。また、表採資料の中には817号例より口縁端部の沈線がシャープで口縁が大きく開く無蓋高杯があり、817号よりやや遡る例と考えられる。脚の透かしは817号では三方透かしであるが、121号には四方透かしが見られる。また、310号住居出土の無蓋高杯にはTK208型式あるいはON46型式の須恵器甕が伴出し、身の深い平底の土師器杯と丸底の杯が出土している。これよりやや新しいと考えられるのは883号の無蓋高杯である。口縁端部の沈線がなく、身が浅くなっている。しかし、伴出している土師器を見ると、身の深い平底の土師器杯と丸底の杯が混在して伴っているため310号とそれほど隔たりのない時期の遺物である。TK208型式からTK23型式に位置づけられよう。

有蓋の高杯には口径11cmで口縁端部の内側に面をもつシャープなつくりの828号出土例と口径13cmで口縁端部が丸くおさめられ、比較的身の浅い23号溝出土例がある。前者はTK23型式に比定できる。後者は、一見するとMT15型式の蓋杯に類似するが、明らかに脚部のつく有蓋高杯である。有蓋高杯にはTK23型式からこのように身が浅く、杯内部の底面が水平な有蓋高杯があり、底部をほぼ全面回転ヘラケズリした丁寧な造りである点にも注目するとやや古く位置づけられる。壺類・器台を見てもMT15型式に下がる資料がないことから下限はTK47型式期ではないかと考えられる。中世以降の溝から出土した23号例には伴出遺物がなく、不確定な資料であることもつけ加えたい。伴出遺物がある住居出土例ではTK23～47型式の須恵器杯と丸底のみの土師器杯をともなう147号の無蓋高杯・櫛描き波状文と刺突文で飾られた短頸壺、甕等の壺類が赤焼き須恵器の新段階の資料といえる。

長頸壺や器台はいずれもTK208～23型式である。この他に42号住居から出土した無文で比較的大型（胴部径30.9cm）の短頸壺がある。口縁直下に削り出し突帯がめぐり、口縁短部は強いヨコナデによってつまみ上げられている。頸部以下は、外面全面に当たりの明瞭な平行叩き、内面の胴部には無文の当て具痕がある。無文の当て具痕は、既に述べたように装飾のある短頸壺・甗の内面に見られ、この赤焼き須恵器の製作に一貫して用いられている。口縁部の形態・つくりから42号の短頸壺はTK23型式に比定できる。伴出している土師器杯には身の深い丸底が多い。

4 類例の検討

さて、草刈遺跡の赤焼き須恵器の類例はどのような器種がどの地域にみられるであろうか。改めてその定義を確認し、時期を限定して主要な例を挙げたい。

上記に示した技法によって製作された土器を「赤焼きの須恵器」と判断し、須恵器の手法の一部を模倣した土師器とは区別したい。たとえば、当遺跡742号住居出土の甗のように器形のみをを忠実に模倣した例は含まない。また、ここでは酸化焰焼成によって素焼きに近い質感に焼き上げられた製品を対象とし、時期を草刈遺跡の赤焼き須恵器が存続したON46型式～TK47型式期とその前後に限定したい。すなわち、須恵器の国内生産が本格化し、一部の地方に在地生産が波及し、須恵器の定型化と普及が進行した時期に限りたい。従っていわゆる半島系軟質土器の系譜にある土器、硬質で生地を深紅色に焼き上げた北部九州の6世紀以降の製品は今回の類例に含めないこととする。また、資料の性格や時期が推定できることを前提に、資料を選択した。

(1) 県内の類例

①大栄町中岫B-1遺跡8号住居出土坏蓋

中岫遺跡は、香取郡大栄町に所在する古墳時代の集落である。その中の8号堅穴住居から赤焼き須恵器の坏蓋が出土している。

天井部に明瞭な回転ヘラケズリが見られ、口縁部との境は強いヨコナデによって沈線が作り出され、口縁部の調整は回転ナデ仕上げである。口縁端部の内側には明確に沈線がめぐっている。器面の凹部や口縁部内側に残る赤色顔料から全面に赤彩が施されていたことが分かる。天井部は完存し、口縁部の1/2周が残存している。

口径13.54cm、器高4.92cm、口縁高2.80cm、器厚（口縁部）2.0～2.5mm、（天井部）3.5～6.7mm。胎土には1～2mmの砂粒・赤色粒・灰白色粒・黒色粒が含まれている。

②木更津市マミヤク遺跡1号祭祀遺構出土甗

マミヤク遺跡は、木更津市の東京湾に面した台地上に位置し、同じ台地には仿製三角縁神獣鏡等を出土した前期の前方後円墳、手古塚古墳があった。富士山・筑波山を望む1号祭祀遺構からは200個体以上の土器と2,000個以上の滑石製小玉を主体とする各種の石製品・鉄製品が出土している。中でも注目されるのは、鎌・鏃などの実用的

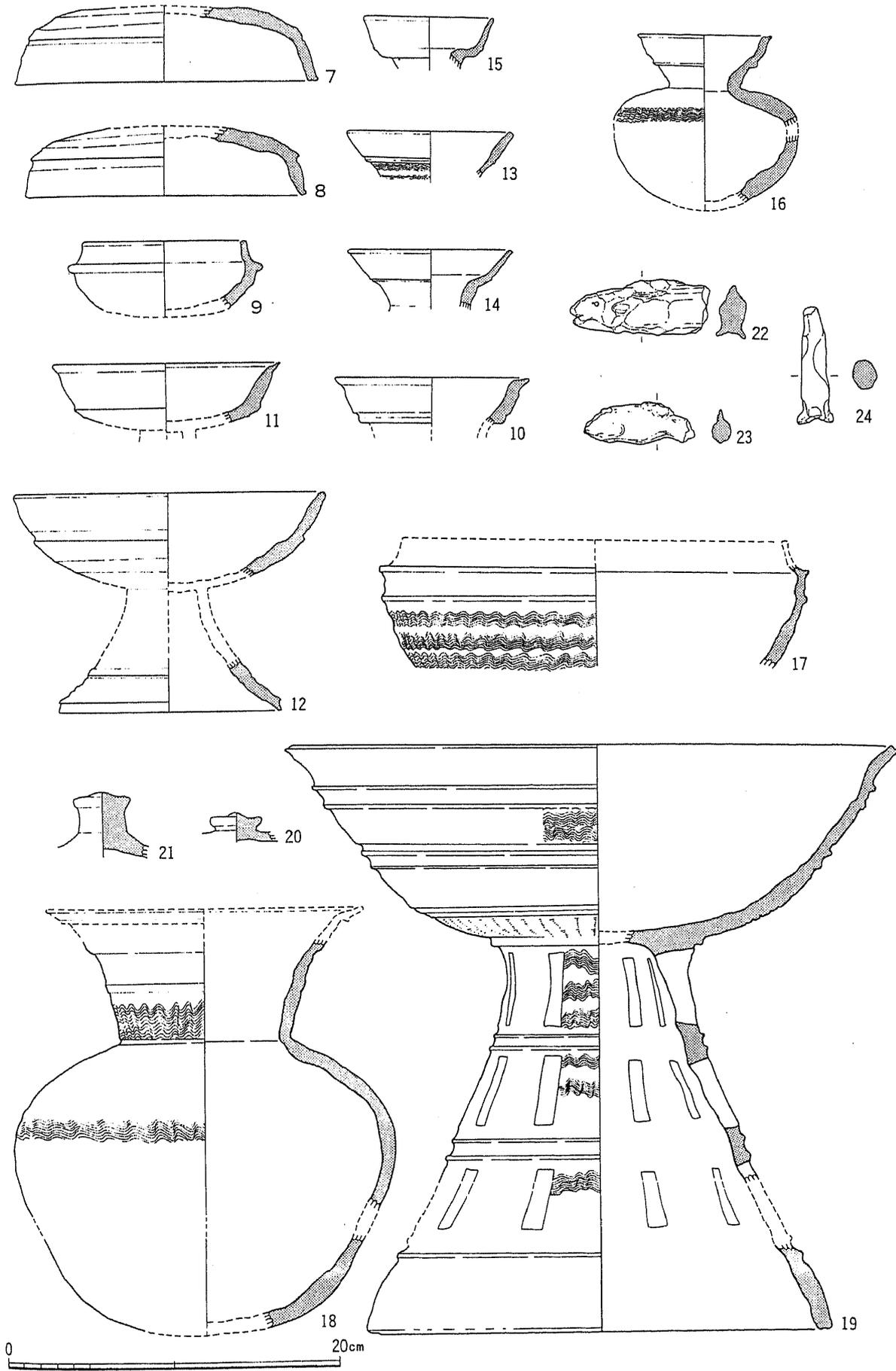


図5 ウワナベ古墳出土の赤焼き須恵器

な鉄製品と鉄製模造品が混在していることである。鉄製模造品には、刀子・U字形鋤先・鎌・斧頭などの農工具をもしたものである。実用品を用いた祭祀から模造品を用いた祭祀への過渡的な段階の遺構といえる。

赤焼き須恵器と考えられる甗は、祭祀遺構出土の土器群の中で1点だけ「特殊な器種」として報告されている。口縁部上半を欠失するが全体の2/3が遺存し、その特徴をとどめている。すなわち、体部中位に2条の平行沈線によって区画された櫛描波状文が描かれ、外面全体に連続的なヨコナデが施されているのである。このヨコナデは同心円状の整ったもので、かなり高速の回転台の使用が考えられる。胎土は砂粒が細かく精選されている。

この祭祀遺構ではこの甗とともにTK208型式前後の須恵器が多量に出土しており、還元焰で焼成された通有の須恵器甗も5個体ある。

(2) 県外の類例

①福岡県嘉穂郡桂川町寿命王塚古墳出土資料(前掲)

彩色壁画で知られる寿命王塚古墳の横穴式石室内から出土した蓋杯3点と長頸壺1点である。同形の須恵器蓋杯・長頸壺が伴出しているのが注目される。器形・成形技法・回転ナデ調整は通有の須恵器と同様であるが、底部の切り離し技法と底部の回転ヘラケズリを欠いていることが指摘されている。高島・西氏の報告によると、赤褐色硬質で胎土は精良、須恵器に比べてほとんど砂を含んでいない。

これらの土器について、西氏はTK47型式との見解を示している。伴出している須恵器蓋杯も含めて口径は12cm前後で、身の浅い形態であることからやや新しいのではないかと考えている。

②奈良県ウワナベ古墳造り出し出土土器

ウワナベ古墳は、奈良市法華寺北町にある全長254mの前方後円墳である。奈良市の北西部、平城京のすぐ北方に展開する前期から中期の大古墳群、佐紀盾列古墳群の中にある。この大古墳群は、王陵の伝説をもつ古墳を含めて全長200mを越える巨大古墳8基を中心に構成されている。ウワナベ古墳の陪塚のひとつである大和6号墳は、滑石製模造品とともに大量の鉄製農工具と合計128kgに達する膨大な量の鉄・が出土したことで、中期初頭の大和に君臨した王族の墓ではないかと推定されている。

ウワナベ古墳東外堤の発掘調査が行われた際に、周辺の分布調査によって造り出し付近から「酸化焰焼成による赤彩された須恵器」が採集されている。草刈六之台遺跡出土の赤焼き須恵器の報告に当たって、調査時の出土資料、および1992年秋の周堤部護岸工事に伴って行われた周濠内の水汲み出し作業期間に採集された資料を奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターで実見した。

草刈六之台遺跡出土資料とウワナベ古墳出土資料を比較検討した結果を率直に言えば、現在知られている同種の土器の中で両者は最も類似した土器群である。まず、製作技法についてみると、ウワナベ古墳の資料では壺類が小破片しかないため叩き成形

技法については明らかではないが、その他の技法は草刈六之台とまったく同じである
とあって良い。

器種について見ると、草刈六之台資料が無蓋高杯・有蓋高杯・高杯の蓋・大型（高杯形）器台・壺・甗から成るのに対し、ウワナベ古墳では蓋杯・大型鉢が加わり、草刈六之台で最も多くみられた櫛描波状文を施した無蓋高杯が出土していない。櫛描波状文を施した無蓋高杯が見られない点は、ウワナベ古墳出土の高杯脚部には明確な段があり、草刈六之台の例よりやや先行することに起因しているものと思われる。また、ウワナベ古墳からは大型の装飾器台に貼り付けられていた魚形などの装飾品も出土している。

酸化焰焼成であることは、窯の有無というよりも意図的な行為であることがウワナベ古墳の資料によっても確認できた。中には半分還元しかかったものも含まれているからである。そのような還元しかかった製品も赤色に彩色されている。

これらのウワナベ古墳の資料は、造り出し付近からまとまって出土したもので、古墳祭祀に使われた特別な土器群であったことが推測される。現在のところ、造り出し部から通有の須恵器は出土していないようである。外堤上に樹立されていた埴輪を見ると、中期の円筒埴輪に特徴的な不連続のヨコハケで調整されているが、鱗付きで方形や三角形の透かしをもつなどの前期の埴輪に見られる特徴も残している。

以上のようなウワナベ古墳出土「須恵器」（赤焼き須恵器）の状況から、草刈六之台遺跡出土の赤焼き須恵器は、畿内の中期初頭の古墳祭祀土器にその出自を求めることが可能であるといえる。しかも、王陵級の巨大古墳に使用された祭器にである。この視点は、草刈六之台遺跡で初期須恵器や舟形の須恵器など畿内の先進文化と深いつながりをもった人々が住む集落であったことを意味づけるものといえよう。

③奈良市東紀寺遺跡土壇内一括出土高杯

櫛描き波状文を施した無蓋高杯である。脚の透かしは4窓であるが、杯部の形態は省略の傾向にあり、口縁部下の突帯は1条になっている。報文によると、形態・製作技法・胎土は伴出の須恵器無蓋高杯と何等異なることがなく、焼成はやや軟弱で色調は淡赤褐色である。赤彩の有無についての報文はない。同形の須恵器高杯1点、蓋杯身4点、杯蓋3点、甗1点、土師器鉢1点と共に土壇の一隅に人為的に置かれた状態で出土した。須恵器はいずれの器種もTK23型式に位置づけられる。高杯脚の透かしは須恵器では3窓になっている。出土状況に特徴があり、須恵器高杯は須恵器杯身と赤焼き須恵器高杯は土師器鉢と合わせ口に組み合せて出土し、しかも高杯が蓋状に倒置されているのである。祭祀に関連した遺構である可能性が高い。

④群馬県群馬町三ツ寺I遺跡出土蓋杯

古墳時代の豪族居館として様々な施設をもつ遺跡である。周濠の西張り出し部周辺から回転ナデ調整をもつ酸化焰焼成の高杯が6点出土した。これらはTK23型式前後の須恵器無蓋高杯の形態的特徴を模倣した器形であるが、杯部・脚部とも須恵器には見

られない形態で、在地の土師器高杯の形態も取り入れた器形である。この点で、①～③の類例とは同列に扱えないという見方もできる。しかし、出土状況を見ると、同時期の須恵器無蓋高杯・土師器高杯が伴出しており、それらとは明らかに区別されて作られていることがわかる。また、出土した器種に高杯が圧倒的に多いこと、滑石製模造品・青銅製品を鑄造した羽口やルツボなども出土していることから祭祀が行われた場所であることが推定されている。このように、回転ナデ調整の高杯は特別な目的のために、須恵器・土師器とも異なる土器として製作されたことが窺えるため、赤焼き須恵器の範疇に加えることにした。

⑤福島県泉崎村大字太田川字原山所在の原山1号墳出土無蓋高杯

原山1号墳は全長20mの前方後円墳で、円筒埴輪列、人物・動物埴輪列を配している。それらの埴輪と共に周溝内から赤焼きの無蓋高杯が1点出土している。

実見して、草刈六之台例にきわめて近い製品であることが確認できた。非常に薄手のシャープなつくりであるが、波状文は草刈六之台例より粗く、当たりが弱い。脚の透かしは4窓である。灰褐色の発色や質感は草刈六之台883号例に類似するが1段階古い型式と考えられ、TK208型式に位置づけられよう。赤彩の有無については微妙であるが、草刈六之台883号の例もやや黒ずんだ灰褐色の色調で、焼成前に赤彩した可能性が高いため、同様に赤彩された可能性はあると考える。なお、報告者はTK23型式とし、二次ヨコハケ調整が省略されている円筒埴輪の時期を示す資料としている。

以上は、使用目的を特定して製作されたと考えられる赤焼き須恵器の例である。実見した例を主体に例示したため多くの遺漏があると思われるが、赤焼き須恵器として作られたかどうか検証できなかつたものはすべて割愛している。窖窯で焼かれた酸化炎焼成の、あるいは還元しなかつた須恵器の例を挙げれば時期を限定してもかなりの数にのぼると思われる。しかし、上記のように赤焼き須恵器は偶発的な産物ではなく、初めから意図して作られたものである。したがって、窖出土の断片的な資料や単独の出土資料だけでそれが赤焼き須恵器かどうか判断するのは赤彩が明確である場合を除いて困難である。

5 今後の課題

赤焼き須恵器は、本格的な須恵器生産が行われ、かなり広範に須恵器が普及し始めた時代の産物である。北部九州のように特殊な発展を示す地域もあるが、その盛期は須恵器の定型化する時期に対応していると推定している。器種構成をみると、高杯・杯、壺類が特に多い。これは祭祀における須恵器の使用器種が大型の甕を多用した初期須恵器の段階から杯類・壺類を多用する段階に移行する動きに連動したものと考えられる。須恵器が定型化するTK208型式前後の時期には古墳祭祀・集落祭祀ともに杯類・壺類が多用されているのは周知のとおりである。集落出土の須恵器甕がこの

時期に急増するのも軌を一にした動きであろう。

類例に示されたように、赤焼き須恵器は祭祀に用いられた土器である。祭祀の場は古墳・豪族居館・集落と多種多様である。にもかかわらず同種の特殊な土器を用いた背景には、祭祀行為・精神文化を共有したことが推定される。ウワナベ古墳の造り出しで行われた古墳祭祀、あるいは三ツ寺遺跡の豪族居館で行われた祭祀も草刈六之台の竪穴住居で行われた祭祀と同じ内容をもっていたことが想定できるのである。そこに通底するのは、当時の古墳祭祀に象徴的な「農耕儀礼」を中心とした祭祀体系が存在しているといえるであろう。

現段階では赤焼き須恵器が通有の須恵器と窯を兼用した例は明かではなく、須恵器生産との関連を解明するのが今後の課題のひとつである。これはまた、各地の赤焼き須恵器がこの時代の須恵器地方窯の成立とどのように関連するかという問題でもある。草刈遺跡の場合はこの時代の須恵器窯が未発見であるが、5世紀後半代にさかのぼる粘土採掘坑が存在すること、集落出土の古式須恵器がかなりの量にのぼることから須恵器自体も在地で生産している可能性が高い。従来、陶邑からの搬入品と考えられてきた製品も再検討が必要である。

註

- (1) 草刈六之台出土の赤焼き須恵器を実見した中村浩氏の御教示による。
- (2) 佐賀県金立開拓遺跡の資料を実見し、確認した。
- (3) 高島忠平・西弘海「寿命王塚古墳出土器」『奈良国立文化財研究所年報』奈良国立文化財研究所 1971(48-49頁)

引用文献

- 1 梅原末治・小林行雄『筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳』京都帝国大学 1939
- 2 小沢洋他『小浜遺跡群Ⅱ マミヤク遺跡』(財)君津都市文化財センター 1989
- 3 下城正・女屋和志雄他『三ツ寺Ⅰ遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 4 白井久美子「草刈遺跡出土の赤焼き須恵器『千原台ニュータウン』Ⅳ-草刈六之台遺跡-」(財)千葉県文化財センター 1994(903-920頁)
- 5 鈴木啓・辻秀人他『原山1号墳発掘調査概報』福島県教育委員会 1982
- 6 高島忠平・西弘海「寿命王塚古墳出土土器」『奈良国立文化財研究所年報』奈良国立文化財研究所 1971(48-49頁)
- 7 坪之内徹「東紀寺遺跡出土土器焼成の(須恵器)高杯」『韓式系土器研究』Ⅳ 韓式系土器研究会 1993(120-126頁)
- 8 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』Ⅵ 奈良国立文化財研究所 1974
- 9 西弘海「平底の土器・丸底の土器」『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986(167-205頁)

第4章 古墳時代後期・終末期の地域圏形成

第1節 東国後期古墳分析の視点

－鉄鏃による後期古墳群の分析－

1 分析にあたって

東国の古墳時代後期社会の変質を最も端的に具現化しているものは、各地における群小古墳の形成とその特性である。古墳時代後期の群小古墳で、武器・武具を主体的にもつ場合、その組み合わせは当時の階層性と普遍性を追求することに有効であり、鉄鏃は、特に飾り大刀をもたない階層の分析に有効であると考えられる。最近では、東国の古墳時代鉄鏃の分析が各地で行われているが⁽¹⁾、総論的な分析が多く、一定地域内の基礎的な分析はほとんど見られない。土器が集落ごとの分析を経て、小地域内、さらに一定地域内で比較検討されているように、使用頻度の高い鉄鏃の分析はまず古墳群ごとになされる必要があり、さらに他地域との同レベルの比較・検討を通して歴史の中により正確に位置づけられるものと考えられる。

千葉市生実・椎名崎古墳群は、後期に至ってそれまでにない隆盛を見せる古墳群の一例であり、近年の発掘調査によって南北約20km、東西約25kmの範囲で160基の古墳が調査され、このうち、後期・終末期古墳と判断できるものが約8割を占め⁽²⁾、135基にのぼる(表1)。一地域内の調査例としては、最もまとまったものの一つといえよう。

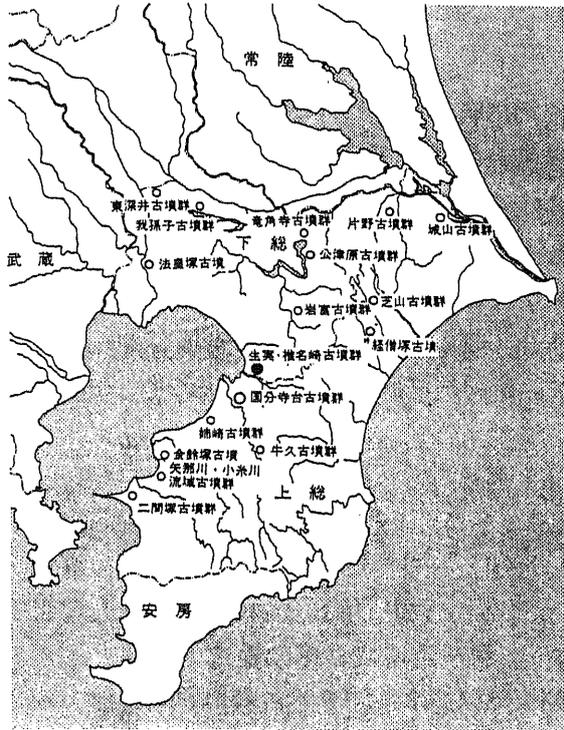
この後期古墳群の最も特徴的な地域色は、軟砂岩を構築材とした横穴式石室と組み合わせ式石棺を採用している点で、短期間の石材の崩壊によって埋葬施設の遺存が悪い反面、盗掘をまぬがれた例が少なくない。また、同一墳丘内に複数の石室・石棺をもつ例が多いことから、追葬による年代幅をさほど重視しないで済む点で、直葬古墳に比すべき稀有の例といえる。

副葬品では、鉄製武器、武具の出土率が高く、埋葬施設の検出された古墳の83%で出土している。中でも鉄鏃は、約70%の古墳で検出され、総数は1,300本を超える(表3)。また、各々の古墳によって組み合わせ、種類に変化があり、支群ごとの変遷が追えることから、この古墳群の分析には、最も出土頻度の高い鉄鏃を使用した基礎的分析がかなり有効であると思われる。

分析に際しては一括性を重視し、小支群ごとに把握することによって、主体的な鉄鏃の組み合わせと変遷を検討し⁽³⁾、特性を抽出することとしたい。なお、時期の確定には、鉄鏃のみではなく、伴出土器や石室構造の変化を加味している。

2 生実・椎名崎古墳群の概要

生実・椎名崎古墳群は、東京湾東岸にそそぐ村田川下流域の台地上に形成された古墳群で、樹枝状に開析された小支谷に面したおよそ20の小支群から成る総数200基以上の古墳群である(図1・2)。



古墳	期	450	550	600	650	700	
		I	II	III	IV	V	VI
1 七輪塚古墳群							
2 大鷲中山古墳群							
3 上泉塚古墳群							
4 有吉古墳群 3次							
5 有吉古墳群 1・2次							
6 生原古墳群							
7 南二道塚古墳群							
8 馬ノ口古墳群							
9 鹿ノ原古墳群							
10 八形塚古墳群							
11 〆山古墳群							
12 神明比古墳群							
13 木戸古墳							
14 椎名崎 A 1次							
15 小倉塚古墳群							
16 小倉古墳							
17 アコノク古墳群							
18 穴通古墳群							
19 大瀬野比古墳群							
20 穴通野比古墳群							
21 御塚古墳群							
22 太田法師古墳群							
23 椎名崎 B 3次							
24 野宮城第 1 2 地点							
25 藤取古墳群							
26 藤取古墳群							
27 野子古墳群							

表 1 生実・椎名崎古墳群一覧

前期	後期	終末期	不明
6 (4)	86 (54)	49 (30)	15 (9)

表 2 時期別の比率 註 数字は調査古墳数。()は%

図 1 生実・椎名崎古墳群と房総の主な後期古墳

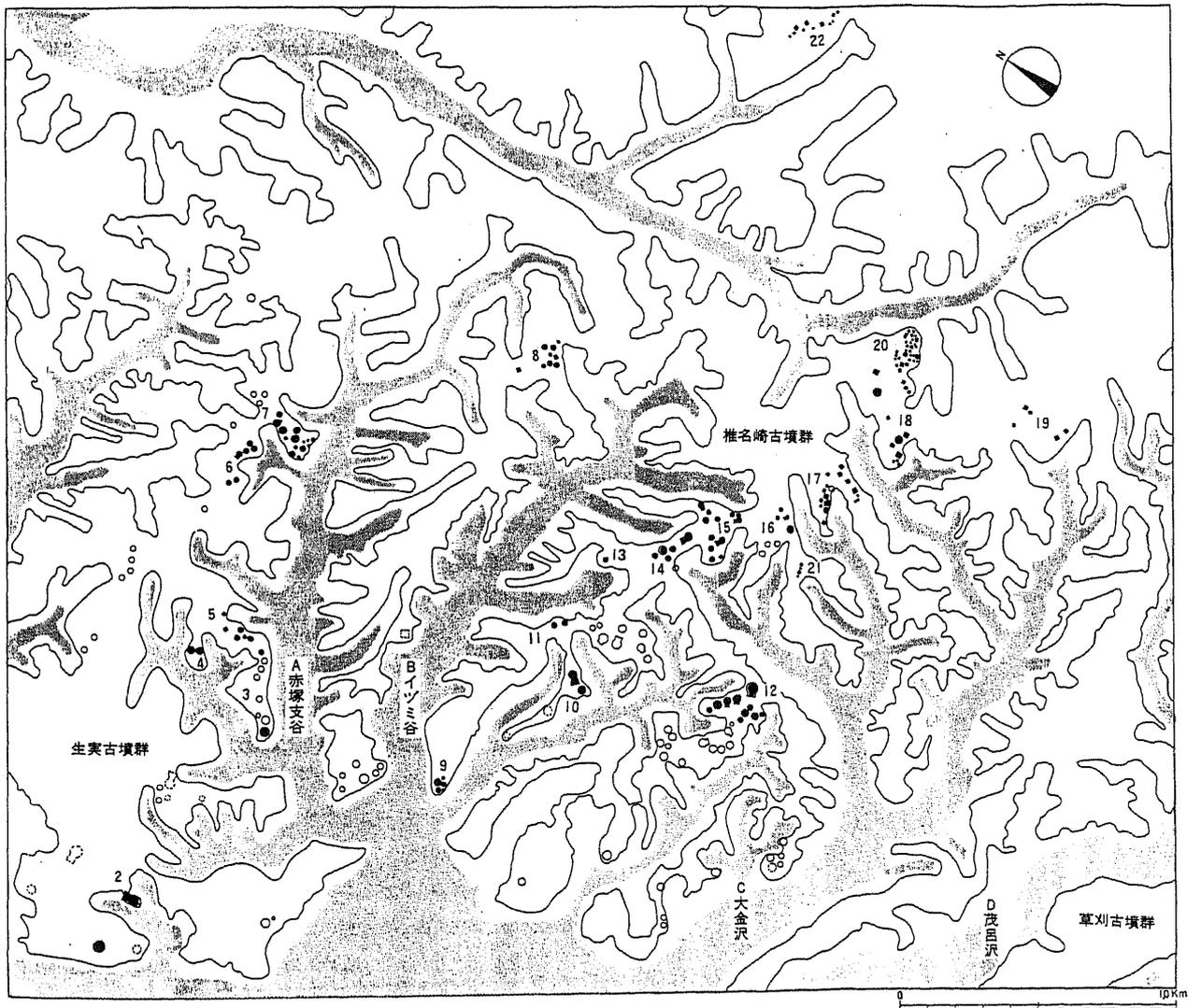


図 2 生実・椎名崎古墳群分布図 (1:20,000)

村田川北岸の沖積地から、大きく4本の谷(沢)が開析されており、最も南の谷(D)が、旧千葉郡と市原郡の境界として下総国と上総国を分けていたと推定され、現在もこの谷が千葉市と市原市の境界となっている。

後期古墳群は、谷口北側の台地先端部とA谷を中心に形成された群、B谷とC谷に囲まれた中央部に形成された群、D谷と村田川低地に縁どられた台地上に営まれた群の3群に分けられる。各々の谷口の代表的な地名から、生実・椎名崎古墳群、草刈古墳群と呼称することにしたい(図2)⁴⁾。このうち、小文では、後期古墳群の調査成果が整理・報告されている生実・椎名崎古墳群を取り上げている。

この地域の古墳出現期から中期にかけての集落と墓域の構成には未解明の部分が多い。出現期・前期段階のものは、南二重堀・馬ノ口遺跡などごく一部で検出されているのみで、弥生時代から古墳時代前期の遺跡が極めて少ない地域としての特異性が指摘できる。前期・中期の大型古墳は、最も北側の谷口に3基〔大覚寺山古墳(墳丘長約62m)、七廻塚古墳(径54m)、上赤塚1号墳(径31m)〕が集中し、村田川流域北岸の最有力者層としての姿を突如示す。前後の時期のその基盤となる部分で謎が多く、各谷口部の突端には、唯一調査例である西ノ原古墳群など前期古墳が存在する可能性があるが、谷口部の大半が未調査のため、推測に留まる部分が多い。いずれにしても、古墳時代中期段階までは、谷奥部の開発のほとんどなされていない地域に、6世紀段階になって大集落と古墳群が展開することが調査によって明らかになっており、さらに奈良・平安時代まで存続する。

以下に、調査例を主体とした概要を示すことにしたい。

出現期から前期の古墳は、いずれも一辺8~18mクラスの方墳で、一隅を掘り残した形態と、溝の全周するものがあり、周溝内土拡から管玉が出土した他は、主たる埋葬施設の検出がなく、性格も判然としないが、集落と同じ台地上に築かれている点を特徴とする。

前期新段階から中期の古墳は、滑石製品を主体的にもつ大型円墳によって特色づけられるが、石枕、立花、石製・鉄製模造品の組み合わせは、都川水系の千葉市石神2号墳と共通し、より広範囲な結びつきを推測させる。

群の主体を成す後期古墳群は、大きく2又に分かれるB谷とC谷に形成された中央部の台地上を中心に展開する。6世紀後半代の群形成期から7世紀中葉の截石積横穴式石室築造の終焉までを後期古墳の時代とするならば、約100年間に86~90基以上の古墳が築かれた群として捉えられる。支谷中央部を占める椎名崎古墳群の3支群(図2-10・11を含むB支群、12を含むC支群、14・15から成るA支群)は、50m~30mクラスの前方向後円墳を中核とする支群で、群ごとに一定の面積を占めて広く群在する。

前方向後円墳では、この地域で唯一埴輪をもつ全長約50mの人形塚古墳(図2-10)が目され、現在発掘調査中であるが、後期の椎名崎古墳群の出発点と考えられる重要な古墳である。群形成初期には、直葬系の古墳(図2-11・12)が築かれ、軟砂岩使用の石棺・石室系の古墳が定着し、普遍的になるのは、群の拡大する段階で、台地基部からさらに奥部へ築かれた7~10基単位の5群(14・15・16・17・18)は、群形成の盛期の支群である。

一方、A谷に面した後期古墳群は、谷の奥へ広がっており、谷口近くに直葬系の2群(4・5)が築かれ、石室を主な埋葬施設とするより新しい群は谷奥部へと築かれていく。

また、17のムコアラク支群形成の段階で、方墳の導入という新たな展開を示し、この方

墳の導入によって生実・椎名崎古墳群も終末期を迎えることになるが、方墳の採用時期については、現在のところ資料が不十分なため、時期を限定することができないが、7世紀中頃には出現している。

また方墳の築造は、いわゆる終末期古墳として終息することなく、奈良・平安時代まで存続してさらに新たな展開を示しており（図2-20～22）、この地域的な特殊性は、後期古墳の時代にさかのぼる造墓活動の延長上に派生したことが推測される。

今回分析の対象とする、調査された86基の後期古墳のうち埋葬施設の検出されたものは70基であるが、複数の埋葬施設をもつ古墳があるため、埋葬施設の総数は103基となる。前述したように、83%の古墳に武器・武具の出土が見られ、78%の埋葬施設に何らかの武器・武具が出土した状況にあり、土器の出土が少ないのとは対称的である。主なものには、直刀、鉄鏃、刀子、馬具、鉄製弓飾り金具が挙げられ、この他に小札、鑷子、石突（鉾）が少数出土している。70基の古墳に見る出土率は、直刀54.0%、鉄鏃68.5%、刀子54.3%、馬具2.9%、飾り弓8.6%で、103基の埋葬施設では、直刀48.0%、鉄鏃63.0%、刀子47.6%、馬具2.0%、飾り弓5.8%である。これらの総数は、直刀約100振、鉄鏃1,196～1,360本、刀子88本、馬具2組、飾り弓6張分が確認できる。すなわち、集積の差を単純化すると、直刀1振、刀子1本、鉄鏃約15本の所持が生実・椎名崎古墳群被葬者の平均的な姿として浮び上がる。

3 鉄鏃の検討

(1) 分類と系統の抽出（表3）

出土した鉄鏃の組成は、刃部の形態、箆被（頸部、棒状部、以下棒状部と呼ぶ）の有無、形状によって以下のように分類できる。

I類 広根系鉄鏃：刃部が大きく、変化に富む形態のものを一括した。末永雅雄博士が、平根式とされたものにほぼ対応する。有機質（木・竹等）の棒状部にはさみ込まれて矢柄に装着されるA・B類と鉄製の棒状部をもつC類があり、前者には、舌状突起をもたないA類と舌状突起のつくB類がある。C類としたものには、棒状部の比較的短いものから、長頸化したものまで含まれるが、刃部の形状にはA・B類との関連を示す変化が見られる。鉄製の棒状部をもつ点ではII類との関連性が認められるが、ここではA・B類の変化と把握しておく。刃部の形態にはa～fの6種類が見られる。

II類 細根系鉄鏃：I類に比べて刃部の幅が狭く尖鋭で棒状部の細く長い形式を基本とするもので、末永博士の分類の細根式に該当する。小型の三角形の系統（a、b）と、両関・両刃の系統とその変化形（c～f）、片関・片刃の系統とその変化形（g～j）がある。

(2) 主な鉄鏃の抽出と検討

① 剣身形長頸鏃（表3 II-c、図3）

細根系長頸鏃のうち、両関・両刃で、鏃身が剣身に似た長刃の平行した形態のものを長三角形と区別している。生実・椎名崎古墳群のI期からIII期に見られる長頸鏃であるが、

6世紀後半の築造が主体の市原市西谷・南向原古墳群等でも同様に、後期古墳鉄鏃の変遷の軸になる鉄鏃である。

剣身形の特徴は、片平造りの断面台形を呈するものを主としていることで、この系統の鉄鏃には、6世紀前半代の浅い逆刺（腸袂）をもつ片平の剣身に近い形態に類似するものも見られる。しかし、棘状突起と刃長よりはるかに長い棒状部をもつ系譜はそれに求め難く、むしろ異系統の外来的要素の強いものと思われる。現在の知見では、この初現を明らかにできないが⁽⁶⁾、6世紀中葉になって急に類例の増える長頸鏃の一つといえよう。6世紀後半代の小見川町城山1号墳出土例⁽⁶⁾には、両者の複合した多様な剣身系鉄鏃が見られ（図3）、3のように両関で関部に切り込み痕をもつものや、棒状部の短い4もある。

生実・椎名崎、市原市国分寺台では、身の幅が比較的広く、関のつくりのしっかりした重量感のあるものがまず先行し、次第に細身で長頸のものが加わっていく流れが窺える。剣身形には、身の幅が広く比較的短いa、幅広く身の長いb、細身でふくらのないc、ふくらがあり関に向かってすぼまるd、細身で特に身の長いeがあり（図3）、各々に変化しているが、I期は全般につくりのしっかりしたもので一貫し、棒状部も比較的太いものが多い。aは、II期になると身長が一段と短くなり、かなり小型化して関の不明瞭なa-6が現われる。これはb、dにも共通した変化で、b-3からb-4、d-5からd-8への関の消失と刃部の小型化は、やがて無関の両刃式として統合される。一方、d-6、7のように原型に近い形で残存する例も若干ある。生実・椎名崎では、III期になると、既に剣身形は長頸鏃の主流ではなくなるが、圧倒的に多い無関の両刃系の中に長身の剣身形eがわずかに残存している。また、この剣身形の刃部の形態変化と小型化という変遷は同時に、軽量化の流れでもある点に注目しておきたい⁽⁷⁾。aでは、a-2の10.14gからa-4の8.66gへ、b-1の11.30gからb-3の8.11gへ、c-1の9.99gからc-3の6.88gへ、d-1の9.58gからd-5の5.55gへ減少しており、総体的に、I期からII期への軽量化の流れを追うことができる。これは、関の不明瞭な過渡的な段階のものを経て、無関化した後の変遷にも窺える。無関の両刃式として定型化した比較的刃部の大きなタイプ（f-1、2）では、計量可能な2が2.71g、刃部が小型化して棒状部も短く細くなる4では6.22gとなり、さらに刃部が薄くきゃしゃなつくりになった5は4.96gまで軽量化する。

剣身形の棒状部の長さには、明瞭な長短の2種〔長：9.5cm（平均）、短：7.5cm（平均）〕があるが、大量に出土した神明社裏古墳群のデータ（棒状部長の平均値）では、1号墳第3主体部：8.57cm、2号墳B区石棺：8.27cm、1号墳第2主体部：8.36cm、1号墳第5主体部：9.14cmとなっており、aタイプの刃部が小型化した1号墳第5主体部で著しく長頸化する。この傾向は、例外的なeを除いて無関両刃系長頸鏃への変遷上に捉えられる。無関両刃系は、比較的刃部の大きい段階（表2II-d）に最も長頸化し、刃部から棘状突起までの長さは平均12.8cmとなるが、先に述べたように、無関係もまた小型・軽量化する中で再び短くなっている。

以上の剣身形鉄鏃の変遷を古墳群形成の流れに対応させると、剣身形の盛行期は、生実・椎名崎古墳群の直葬系から石棺・石室系へ移行する前後以前に求められ、これは市原台地の後期古墳群にも対応して見られる。両地域とも横穴式石室の採用以後には、この剣身形はほとんど見られなくなり、替わって広根系と無関係長頸鏃が台頭するが、それはまた古墳の築造数が急増する時期でもある。生実・椎名崎古墳群では、剣身形の関の消失から

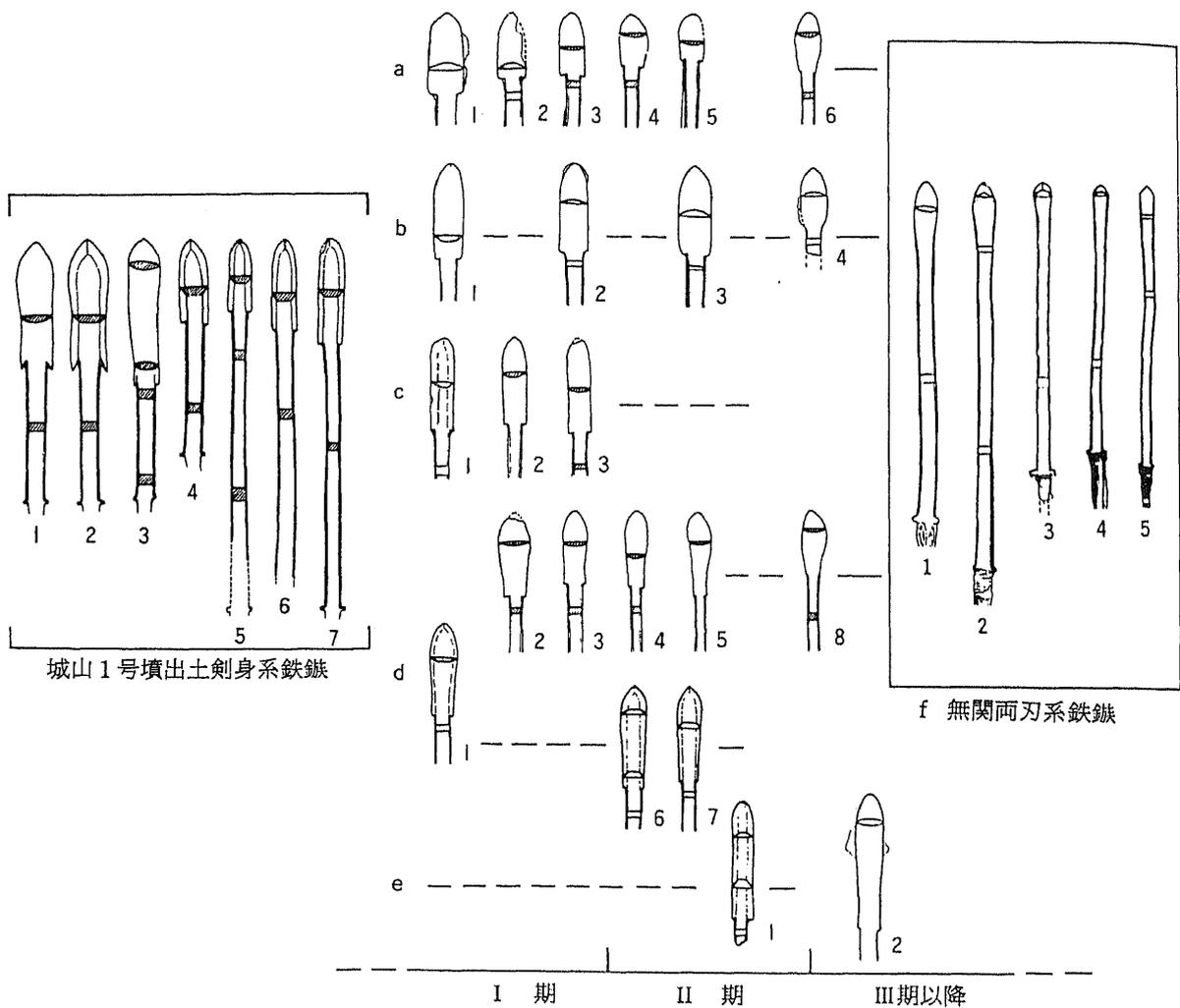


図3 剣身形鉄鏃の変遷

さらに無関化した後の刃部の短小化まで一貫して追うことができるが、この流れは、製作量の増加に対する省力化現象として捉えられる。

剣身形長頸鏃は、後期の長頸鏃の二大系統の一つである片刃系に対する両刃系の主体となった重要な鉄鏃であるといえよう。

② 片刃系長頸鏃 (表3 II-g~j)

片刃系とした長頸鏃には、片関の片刃箭鏃と呼ばれてきたII-g、無関でふくらをもつII-h、刃部が短かくふくらをもつII-i、かまち切先に近い形態のII-jがある。

総体的な変遷の中でみると、g~jへの流れは、刃部の細身・小型化の流れとして理解できる。一方、棒状部の長さに着目すると、I期からIII期に長頸化の傾向にあるものが、IV期から再び短くなっていく。これは第8図に示した馬ノ口古墳群出土鉄鏃の変遷図にも現れているが、さらに小型・軽量化していく現象に拠るものである。I期からV期の片刃系長頸鏃の重量を見ると、I期のII-gでは8.7g平均、II期のII-gで8.9g平均、III期のII-hで7.96g、V期のII-iでは7.70gと減少している。

また、g～jの量的な変遷を見ると、片関のgは、I期からIII期の前半までまとまって副葬されるが、以後はわずかな数に留まり、IV期以降にはほとんど見られなくなる。これに替わってIII期には無関のh・iの増加が目立ち、IV期になると無関係が主体的になる。iとjはIII期から既に見られるが、IV・V期に盛行する型式で、この時期の片刃系長頸鏃を代表するものといえよう。

③ 小型三角形式長頸鏃（表3Ⅱ-b）

この長頸鏃は、II期から見られ、II期ではII-aの小ぶりなものに近い大きさの刃部をもつが、III期以降は小型・軽量化の傾向をたどり、IV・V期にほぼ定型化する。これは、剣身形の無関化、刃の短小化と関連したもので、広義の両刃系の変遷として捉えられる。

まとまって副葬されるのはIII期以降で、IV期、V期には、この形式のみを20本、38本と出土した例がある。この点もまた、国分寺台と共通する現象であり、IV・V期に盛行する長頸鏃として剣身形長頸鏃衰退後の主座を占める場合がある。このことは、I期からII期にさかんに副葬された比較的小型の長三角形式II-aに替わる三角形系統の新しいタイプとして入ってきた可能性を示していると思われる。

④ 広根系鉄鏃（表3Ⅰ-A・B・C）

前述のように、ここでは棒状部の有無にかかわらず、刃部が大きくて変化に富む形態のものを広根系として一括して把握している。これは、棒状部のつくI-C類が、鏃身を鉄以外の素材で矢柄に装着するI-A・Bの影響下に成立したと考えられるからである。また、I-CがI-A・Bと同様なII類（細根系長頸鏃）との組み合わせを示していることも一傍証としよう。

I-A・Bは、全期間を通じて見られるが、IV期以降は極端に少なくなる。最も出土例の多いのはII期からIII期で、腸扶をもつB-aが最も多い。一方、I-Cは、II期の後半からIV期の前半に出土例が多く、V期に入っても激減する傾向は見られない。また、同じ形態のものをまとまって出土する例が、IV期に特に多く、刃部の形態が最もバラエティに富むのもIV期である。

I-Cのうち、C-aは、I期以前にも見られる大型の腸扶長三角形式の系統を引くと考えられ、他とは区別すべきかと思われる。これはIV期まで見られるが、一古墳での出土数は極めて少なく、儀使的性格をもつ可能性が強い。C-bは、II期からIII期に多く見られる幅の狭い長三角形の系統であるが、III期後半以降は、C～dがこれに替わってI-C類の主流となり、IV期以降にはbは全く見られなくなる。C～dの基本形は、長三角形から出発したと考えられるが、直角関のCの影響下にdの五角形が生まれ、腸扶長三角形のeが正三角形～横長の三角形へ変化した段階でfが加わっているものと考えられる。fはIV期とV期にのみ見られ、方墳で出土している点も注目される。方墳では、他に細根系の棒状部が数点出土しているが、広根系は、これのみである。

また、椎名崎A支群4号墳の菱形の広根系は、三角形の系統から派生したとは考え難い形態で、外部からのインパクトによるものと考えられる。

一方、鉄鏃総数に占める広根系の割合（総数10本以上の出土例に限る）を見ると、I期4.5%、II期10.4%、III期33.0%、IV期20.6%、V期7.8%で、III期、IV期の割合の

高さが目立つ。これを市原市国分寺台と比較してみると、Ⅰ期9.7%、Ⅱ期15.0%、Ⅲ期19.25%、Ⅳ期0%、Ⅴ期9.5%で、生実・椎名崎の広根系鏃の扱いとの差を示している。中でもここでⅠ-C類とした長頸の広根系のあり方が特徴的で、54例中24の埋葬施設に出土しており（44%）、5本以上10本未満出土した例が9例（17%）、10本以上の例が5例（9.2%）見られる。国分寺台では、12例（48%）にⅠ-C類が出土しているが、10本以上の例はなく、5本以上が1例あるのに留まっており、1本しかもたない例が最も多い（平均2.6本）。

県内で他にⅠ-C類をまとめて副葬する例は、成田市公津原古墳群⁽⁸⁾に3例認められる。約50基の6世紀前半～7世紀代の調査古墳のうちの3例であるが、10本以上のⅠ-C類をもつ例が2例あり、生実・椎名崎のⅢ・Ⅳ期併行期には直角関の三角形、および五角形を呈するものをもつ点が共通する。木更津市請西古墳群⁽⁹⁾にも20基の後期古墳の中に1例だけ8本のⅠ-C類をもつ例があるが、いずれにせよ、生実・椎名崎の様相とは異なるものである。

また、埼玉県では、東松山市西原古墳群⁽¹⁰⁾の3基中の1基に5本、同市柏崎古墳群⁽¹¹⁾1の4基中の1基に9本、大里郡鹿島古墳群⁽¹²⁾の34基中に3例あり、5本、9本、25本の副葬が見られるが、鹿島古墳群の例にしても副葬される比率は少ない。

なお、Ⅰ-Cの棒状部を含めた形態を見ると、棒状部の長短によって新古に分けがたく、むしろ古墳ごとに異なる規格性をもつ傾向がある。特に、同一形態のものがまとめて副葬される例にその傾向が強く、各々の被葬者に応じて配布された可能性が高い。

（3）鉄鏃の組み合わせと変遷（表3）

生実・椎名崎古墳群の鉄鏃から見た変遷は、大きく3期に分かれ、各支群の拠点となる古墳が築かれ始めた時期、群形成の発展期、衰退期に各々対応する。これをさらに群形成期を2段階に、発展期を2段階に分けることが可能である。また、参考として直前の時期のものが市原市国分寺台古墳群に連続して見られるので確かめておきたい。

直前の時期と捉えられるのは、市原市西谷9号墳Ⅰ期の周溝内土拵出土例、南向原3号墳中央施設出土例、そして、6世紀前半～中葉の代表的な古墳として埴輪、馬具を有する西谷10号墳、根田1号墳出土例である。これらの古墳には、陶器Ⅱ期第一段階から第二段階に比定される須恵器が伴出しており、2例とも鉄鏃には剣身形の長頸鏃が含まれるが、西谷10号墳には主体的で、根田1号墳では片関片刃鉄鏃が主体である。また、広根系鉄鏃は大型で、棒状部が長くないものである。

この時期を代表する上総の前方後円墳の調査例は、養老川南岸の姉ヶ崎古墳群中に在り、山王山古墳⁽¹³⁾、および原1号墳⁽¹⁴⁾がある。いずれも、全長70mクラスで埴輪をもち、姉ヶ崎古墳群の首長系列の墓と考えられる古墳であるが、特に山王山古墳は、金銅製冠、単竜式環頭大刀、変形四獣鏡等の卓越した副葬品をもつことで知られる。この山王山古墳の鉄鏃は、鑄造細根柳葉形が主体で、他に鑄のない広根柳葉形、重袂広根長三角形、腸袂片刃箭形があり、国分寺台の古墳群とは大きく系統の異なる組み合わせである。

これに後続する資料は、姉ヶ崎古墳群中には求められないが、小糸川中流域の君津市白駒1号墳⁽¹⁵⁾（全長約45mの前方後円墳）では、剣身形長頸鏃を明らかに主体とする鉄鏃の組み合わせが認められる。

一方、6世紀後半には下総を代表する古墳として市川市法皇塚古墳⁽¹⁶⁾、小見川町城山1号墳が築造されている。下総の東西に位置する2基は、後者が規模、副葬品等で優るものの、共通した要素が見い出され、法皇塚古墳に存在する要素の大半は、城山1号墳にも存在する。

鉄鏃についても、城山1号墳が多種多様なものをもつが、法皇塚古墳と共通するものに剣身形が挙げられる。法皇塚古墳出土鉄鏃は46～48本あり、40本が両関両刃系統で、うち21本が剣身形である。城山1号墳例は、前掲したように剣身系にも多様な要素を含んでいるが、法皇塚古墳例を含めてこの時期には大型古墳の鉄鏃の中で、剣身形が両関系の独立したタイプとして副葬され、特に法皇塚古墳では組成の主体となっている点に注目しておきたい。

I期：この時期には、生実古墳群の南二重堀支群と椎名崎古墳群の神明社裏支群に例が見られる。南二重堀4号墳例は、つくりのしっかりした短かめの剣身鏃が主体を成し、無関系のII-d、II-hが少量入る組み合わせで、広根系の有頸鏃(I-C)は見られない。神明社裏では、剣身を主体的にもつ例と、小型～中型の三角形II-aを主体とする例があり、両刃系のつくりのしっかりした長頸鏃で一貫するが、2号墳B区石棺では、無関のII-dが加わり、南二重堀と同様の組み合わせになる。この石棺は、現在のところ当古墳群の軟砂岩使用組み合わせ式石棺の初現になると思われる。

この時期の国分寺台では、根田1号墳前方部施設、西谷5・8号墳がある。鉄鏃はいずれも剣身形の長頸鏃が主体で、この時期は、国分寺台での剣身形長頸鏃の盛行期である。

II期：生実・椎名崎古墳群では、神明社裏1号墳第2・第5主体部をはじめ、12基の埋葬施設出土の資料が挙げられる。これには、椎名崎1号墳の横穴式石室初葬時のものが含まれる。鉄鏃の組み合わせから見ると、剣身形、片刃系の長頸鏃を主体とする神明社裏1号墳第2・第5主体部例がI期に近い様相を示すが、その他の古墳では、剣身形は主体的でない。これに対し、無関の両刃系統の長頸鏃が増えており、この中には、剣身形の関が退化して消失したような刃部の比較的長いものも含まれている。一方、片刃系についても、無関のものを併せもつ例が増えている。

国分寺台では、西谷7号墳、南向原3号墳南施設があり、西谷7号墳では剣身形の長頸鏃が主体であるが、ややきゃしゃなつくりになっている。また、これらに先行する山倉1号墳は、円筒・形象・人物埴輪をめぐらした前方後円墳で、横穴式石室を内部施設としており、生実・椎名崎古墳群の横穴式石室の初源に近い時期の古墳として注目される。

III期：椎名崎A支群の3基をはじめ15基の埋葬施設が挙げられ、すべて軟質石材による石棺・石室である。この内石室は、9基を占め、当地域における横穴式石室の導入から定着期と言える。前室⁽¹⁷⁾の長さが、後室の1/3以上あるプランと、前室の短小なものが、初めから併存し、後者は、生実古墳群に多い。また、敷石・底石をもつ石室、石棺が大半を占める。

鉄鏃は、無関の長頸鏃が主体になり、特に両刃系のII-dが多いが、片関の片刃、両関の両刃も存在し、剣身形はかなりきゃしゃなつくりで軽量化したものになっている。また広根系では、直角関の長三角形(I-C-c)、それから派生したと思われる五角形(I-C-d)、腸挟三角形(I-C-e)が加わって、多様な様相を呈するようになる。

さらに、Ⅱ期に見られなかった現象として小型の三角形式長頸鏃（Ⅱ-b）を多くもつ例が見られ、棒状部の短いものや、刃部の大きいものが目立つが、主体的なものではない。国分寺台では、西谷6号墳、同9号墳Ⅱ期石棺、南向原1号墳北施設が挙げられる。

Ⅳ期：六通1号墳第1石室をはじめ17基の埋葬施設が該当する。すべて軟質石材使用の石棺、石室で、その割合は半々である。Ⅲ期に引き続いて、石棺、石室が展開し、その盛行期を迎えた時期といえよう。しかし、一方では、石室の変容が目立ちはじめ、前室の形骸化したものや、大型の石材を用いた簡略な構造のものが増える。また、石棺も簡略化され、底石は用いられなくなる。

鉄鏃は、広根の長頸鏃が最も多く見られる時期で、10本、12本とまとまった量を出土する傾向がある。鏃身の形態もさらにバラエティーに富み、菱形（椎名崎4号墳のみ）や横長の三角形に近いⅠ-c-fが加わる。長頸鏃では、無関の片刃系（Ⅱ-d、e）、小型の三角形式（Ⅱ-b）が主体的になり、刃部の小型化棒状部の軽量化が進む。特にⅢ-bは、この時期に最もまとまって副葬される例が多い。

国分寺台では、発表資料が少ないため不明な点が多いが、比較的大量の須恵器を出土した西谷12号墳、南向原2号墳が併行すると考えられる。鉄鏃の出土量は前掲したように少なく、本来の組み合わせを示すものではないが、小型化した無関の両刃（Ⅱ-e）が主体になると思われる。

Ⅴ期：前方後円墳を中心とした一つのまとまりから谷奥部へ展開する大きな変換期にあり、方墳の導入と展開が始まる。六通4号墳第2石室以下9基の埋葬施設

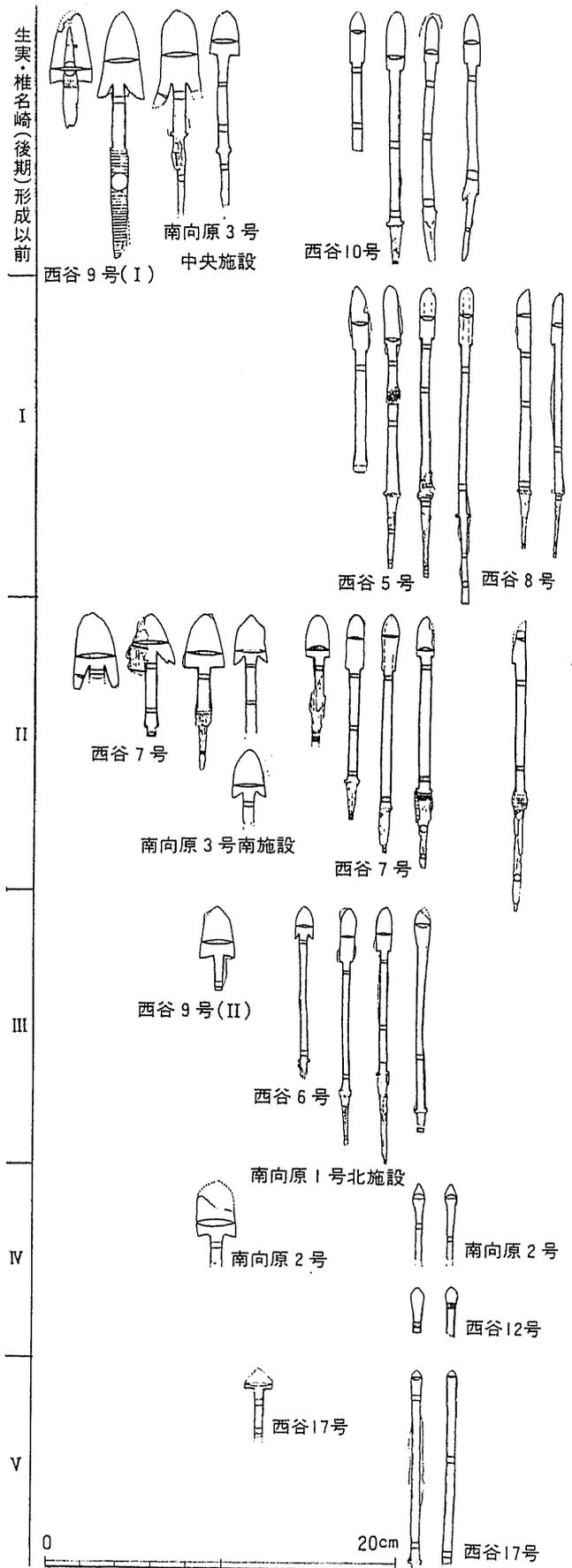


図4 市原市西谷・南向原古墳群出土鉄鏃

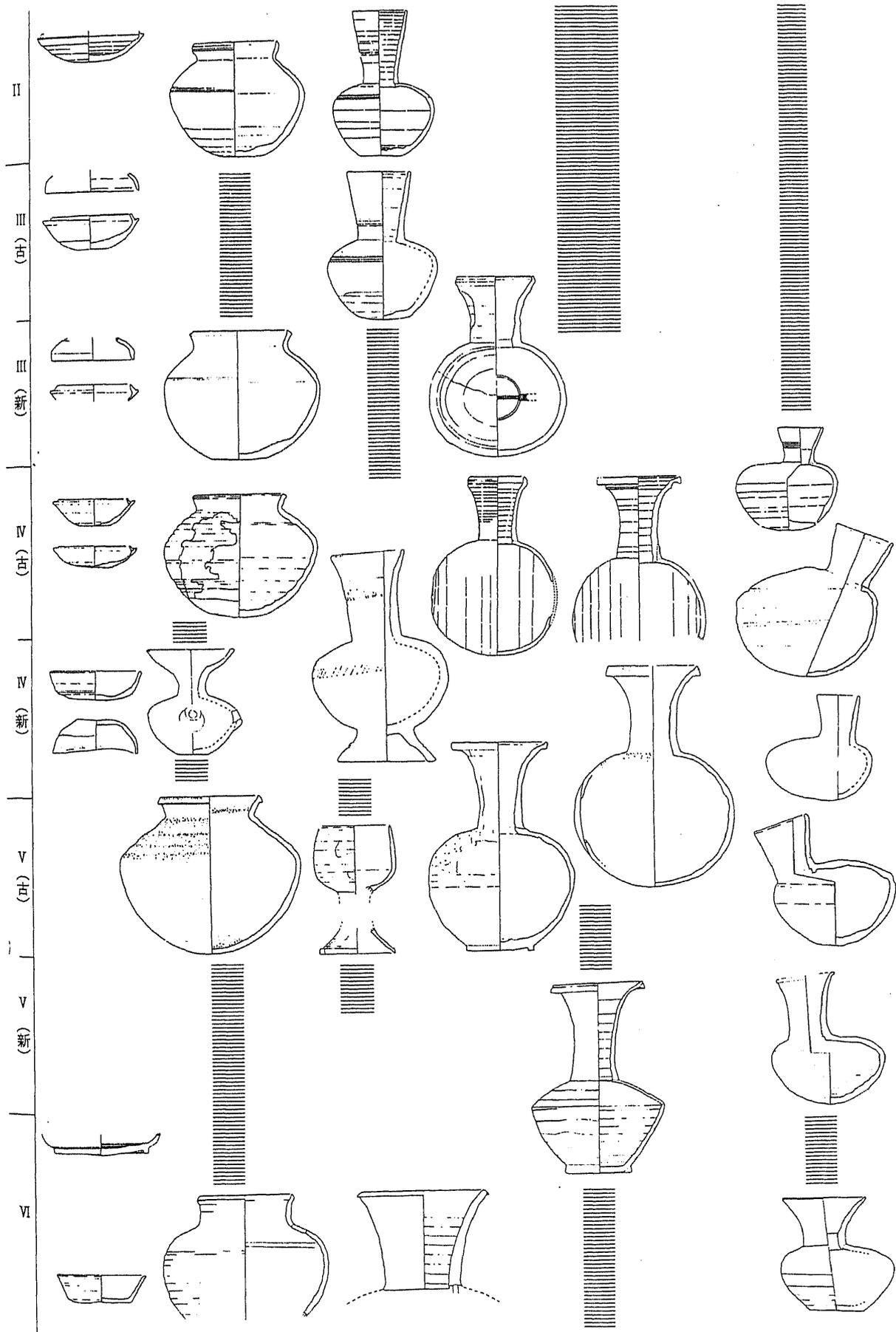


図5 生実・椎名崎古墳群の須恵器

があり、石棺は見られなくなっており、鉄鏃はすべて横穴式石室の出土例で、追葬時の副葬品を示すとも考えられるが、六通4号墳第2石室のような一種類に限られた鉄鏃の出土例もあることから、この時期までは、石室の構築が続いていたと思われる。

石室の規模（後室の規模）はそれほど変わっていないが、副葬品は、質量共に貧弱になり、鉄鏃の出土量も少なくなる。方墳では、特にその傾向が強く、鉄鏃の出土量は激減する。ムコアラクの方墳群から出土した鉄鏃は、9基の埋葬施設からわずか9点（破片も含む）に留まっている。

この時期の鉄鏃は、小型三角形（Ⅱ-b）、無関の両刃系（Ⅱ-d・e）、片刃系（Ⅱ-h・i・j）の長頸鏃が主体であるが、Ⅳ期に比べさらに小型・軽量化の傾向にある。Ⅱ-e、Ⅱ-i・jでは、刃部が極端に小型化した例が見られる。また、Ⅳ期から見られた広根系の横長三角形（Ⅰ-c-f）は、方墳採用後も存続する。

以上のように、生実・椎名崎古墳群の鉄鏃から見た変遷は、大きく5段階に分けられる。この変遷の年代幅については、Ⅰ期を6世紀中葉～第3四半世紀、Ⅴ期を7世紀中葉～第4四半世紀に捉えている。

一方、古墳時代後期のタイムスケールとして最も有効な遺物である須恵器は、量的に少なく（総数約100個体、出土率50.7%）、特に蓋杯の資料が不十分だが、図5では、器種ごとの変化と組み合わせを上記の鉄鏃の変遷と対照した。

Ⅲ期（新）～Ⅳ期（古）段階には、市原市国分寺台では乳頭状のつまみのつく蓋杯が出現し、以後は蓋と身の逆転した蓋杯の系譜が続いているが、当地域では現在のところ出土例がない。また、Ⅳ期（新）段階は、扁平つまみの小形の蓋杯が出土してもよい時期と思われる。なお、Ⅳ期としたものは、石室への最終的な供献に用いられたと考えられる。

（4）小支群内の組み合わせと変遷

馬ノ口古墳群出土の約180点の鉄鏃について、組成と系統内の変化の検討を試みたことがある⁽¹⁸⁾。その中で、小支群内の古墳の展開と推移に対応して鉄鏃の組成と形態変化にいくつかの傾向性を見出した。この小支群内の変遷を再検討し、さらに椎名崎古墳群A支群、神明社裏古墳群の例を追加して検証してみたい。

① 神明社裏古墳群（図6）

馬ノ口古墳群、椎名崎A支群（1次）より一段階古い資料は、神明社裏古墳群の調査によって明らかになった。椎名崎C支群とされた群の東部分である神明社裏古墳群は、人形塚を擁する椎名崎B支群に対峙して広義の椎名崎古墳群の中心的な位置の一翼を占める支群である。前方後円墳5基、円墳16基、方墳1基が確認されているが、神明社裏古墳群として調査したのは、前方後円墳3基、円墳6基、方墳1基である。全体的な整理は行っていないが、他の支群にさかのぼる資料がまとまって出土した2基の前方後円墳の鉄鏃を取り上げたい。

資料化した鉄鏃は、2重周溝をもつ墳丘長約42mの前方後円墳（以下1号墳とする）内に検出された3基の直葬施設、墳丘長28mの前方後円墳（以下2号墳とする）内の1基の石棺、および直葬施設から出土したものである。

直葬の施設からは、各々26～49本の形態の判る鉄鏃が出土しており（表3）、各々の組

成と傾向性をつかむことが可能である。

これら5基の内部施設出土資料は、大きく2時期に分けることが可能で、I期には1号墳内の1基の直葬例と2号墳の石棺が挙げられ、1号墳の他の2基の直葬例と2号墳の直葬例がやや後出する。

神明社裏に見られる組成の特徴は、小型～中型の長三角形(II-a)と剣身形(II-c)が主体となっている点である。各々組成の特徴を抽出すると、直角関のII-a刃部が大きくしっかりした造りのII-c、片関で左右の刃部の形態の異なるII-fから成る1号墳第3主体部から大型・長頸の広根鍔(I-c-a)と片関片刃長頸鍔(II-g)が加わる2号墳c区主体部への変遷を見ることが可能である。2号墳B区石棺は、細身で刃部がほぼ平行する腸袂長三角形とバラエティに富む剣身形の組み合わせが特徴でC区主体部より先行する可能性が高い。

1号墳第2主体部、同第5主体部では、I-B、Cの広根鍔が加わり、剣身形のつくりがくずれ始めて、小型化・無関化が進む。無関の両刃II-dとの区別が難しいものが何例もあり、刃部の形態の不明瞭なものが29本もあることから、II-dが含まれる可能性が高い。

② 椎名崎A支群(1次調査区)(図7)

椎名崎A・B支群は、南北250m、東西350mの範囲内に21基の古墳が所在した群で、やせ尾根上の1次調査区(A)と小金沢貝塚内の2次調査区(B)の2群に分けられる。1次調査区には、比較的大型の墳丘をもつものが所在し、全長44.6mの前方後円墳をはじめ、2重周溝をめぐらす径24mの円墳、および22～25mクラスの円墳3基が在り、単独の石室、石棺各1基を加えた7基から成る。小金沢貝塚内の14基は、ひき続いて築造されたひと回り小型の前方

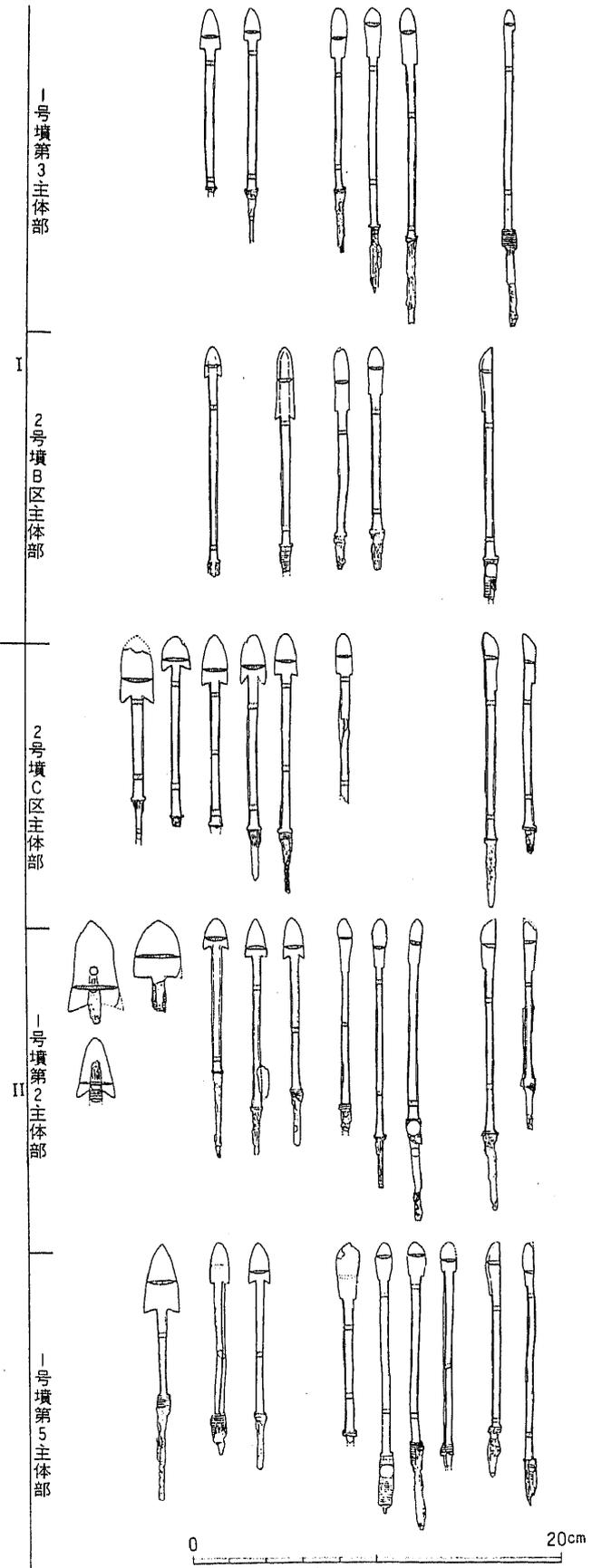


図6 神明社裏古墳群出土鉄鍔

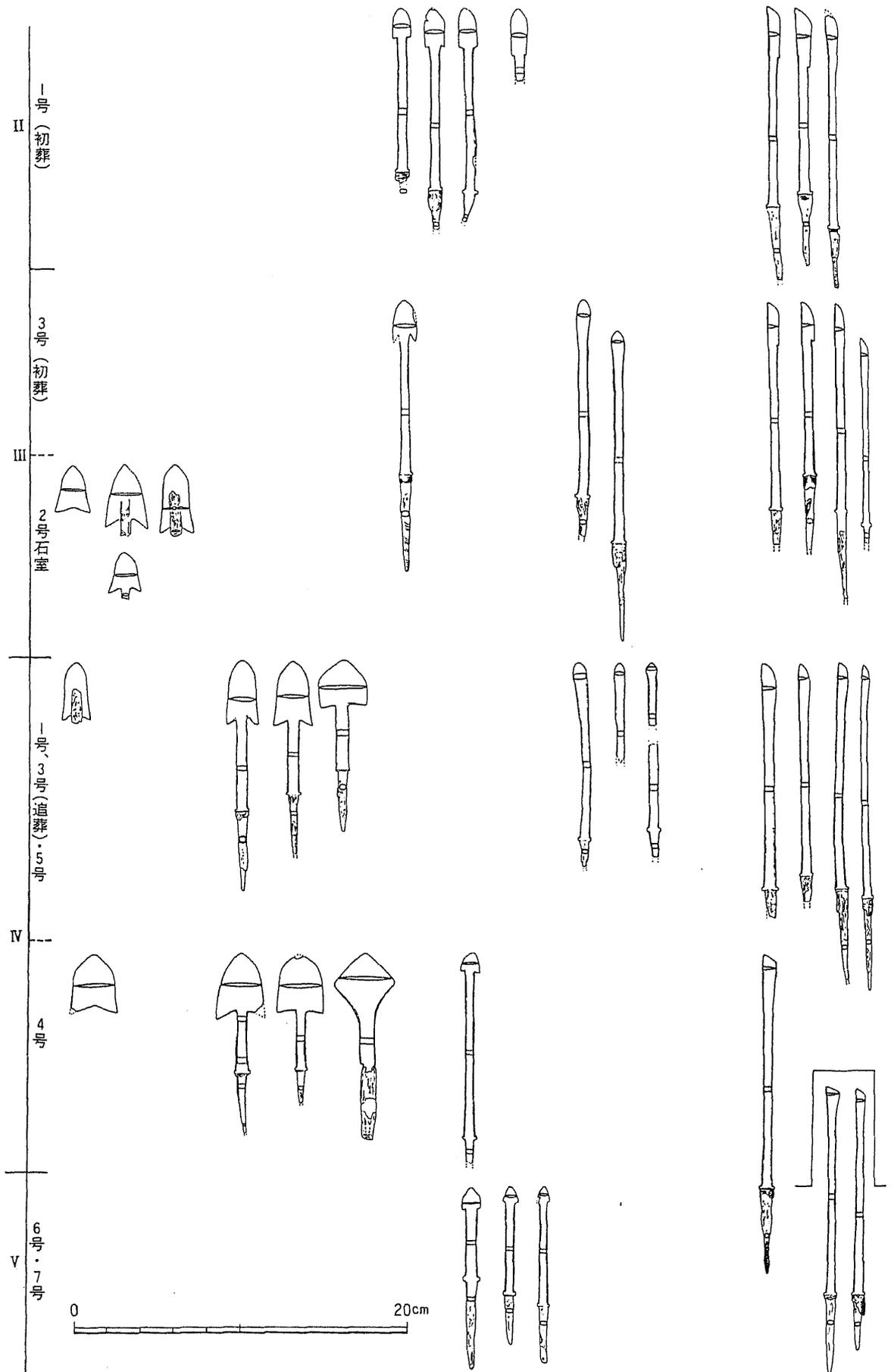


图7 椎名崎A支群(1次調査)出土鉄鍬

後円墳（30mクラス）と円墳群（15～20mクラス中心）から成るが、いずれも軟砂岩使用の石棺・石室系古墳群の中心となる群である。

1次調査区の前方後円墳（1号墳）の横穴式石室は、1段目の石材を石棺風に縦長に用いて2段目以降は小型の石材を小口積に配する手法で築かれており、当地域の横穴式石室採用の初期に属する例であると思われる。A支群はこの前方後円墳の築造を契機に展開し、2次調査区へと拡大している。3号墳の総数59本を最高に、7基の埋葬施設から200本近い鉄鏃が出土しており、3基に鉄製の弓飾り金具が検出された群である。また、1墳丘内に複数の埋葬施設が存在したのは、石室と石棺を併設した2号墳のみで、横穴式石室の併設はなく、石室内の遺物配置によって追葬が行われたことが明らかな例もある。

鉄鏃の組成は、馬ノ口にはほぼ対応した変遷が見られ、1号墳初葬時→3号墳初葬時・2号墳石室→1号墳、3号墳追葬時・4号墳・5号墳→6号墳・7号墳の4期に分けることができる（図7）。1号墳、3号墳では、鉄鏃の出土状況、および耳環、玉類の出土位置から少なくとも1回の追葬が行われていることが確実で、初葬時、追葬時の組み合わせを分離できる。また、2号墳にも耳環と玉類の位置から追葬がうかがえ、鉄鏃は追葬時の副葬品と考えられるが、これは周溝内出土の須恵器が鉄鏃の示す年代観より先行する特徴をもつことと矛盾しない。

馬ノ口に比べて広根鏃の変遷が不明瞭であるが、IV期に長頸の広根鏃（I-C）が盛行し、多様な形態のものが現われる点は全体的な傾向に合致する。なお、菱形のI-Cは、4号墳のみに見られる形態である。細根系鉄鏃は、1号墳初葬時の小型三角形（II-a）、剣身形（II-C）と片関片刃形（II-g）による組み合わせから、次第に無関化し、刃部が小型化する流れを追うことができる。小型三角形（II-b）はIV期以降に見られるが、V期では棒状部がより短くなり、6号墳の鉄鏃はこれのみで構成される。また、この段階の片刃系鉄鏃は、稜の明瞭なつくりのかまち切先となっている。

③ 馬ノ口古墳群（図8）

馬ノ口の後期古墳群は、箱式石棺、横穴式石室を埋葬施設とする6基の円墳群である。東西、南北とも約110mの範囲に、墳丘径25mクラス2基、20mクラス2基、15mクラス1基、10m以下1基が築かれ、当地域では平均的な規模の古墳群といえる。10基の主な埋葬施設があり、存続期を4期（II～V）に分けることが可能である。

鉄鏃の変遷を概観すると、広根鏃はII～V期を通じて見られるが、棒状部をもつI-CはIII期以降に形態変化が進み、V期に最も多くの種類が見られる。

III期とIV期の間に組成の差を見出し得る細根系鉄鏃（II類）のうち両関・両刃系では、小型三角形の長頸鏃（b）がII期からあり、刃部が比較的大きく重量感のあるものが、IV期に小型・軽量化し、V期では非常にきゃしゃなつくりになる。また、II・III期には、剣身形（c）と関のやや退化した形態で刃部が比較的大きく重量のあるdがそろっているが、IV期では剣身形がなくなり、dのみとなって、V期になるとdが小型・軽量化したeとなる。片関・片刃系は、II期には関のしっかりした片刃箭鏃（g）であるが、III期では関のわずかに残る形態と関のない片刃（h）になり、IV期で関の残るものがなくなってhの刃部が小型化し、V期になるとさらに小型・軽量化していわゆるかまち切先やなぎなた形の刃部をもつものが見られるようになる。

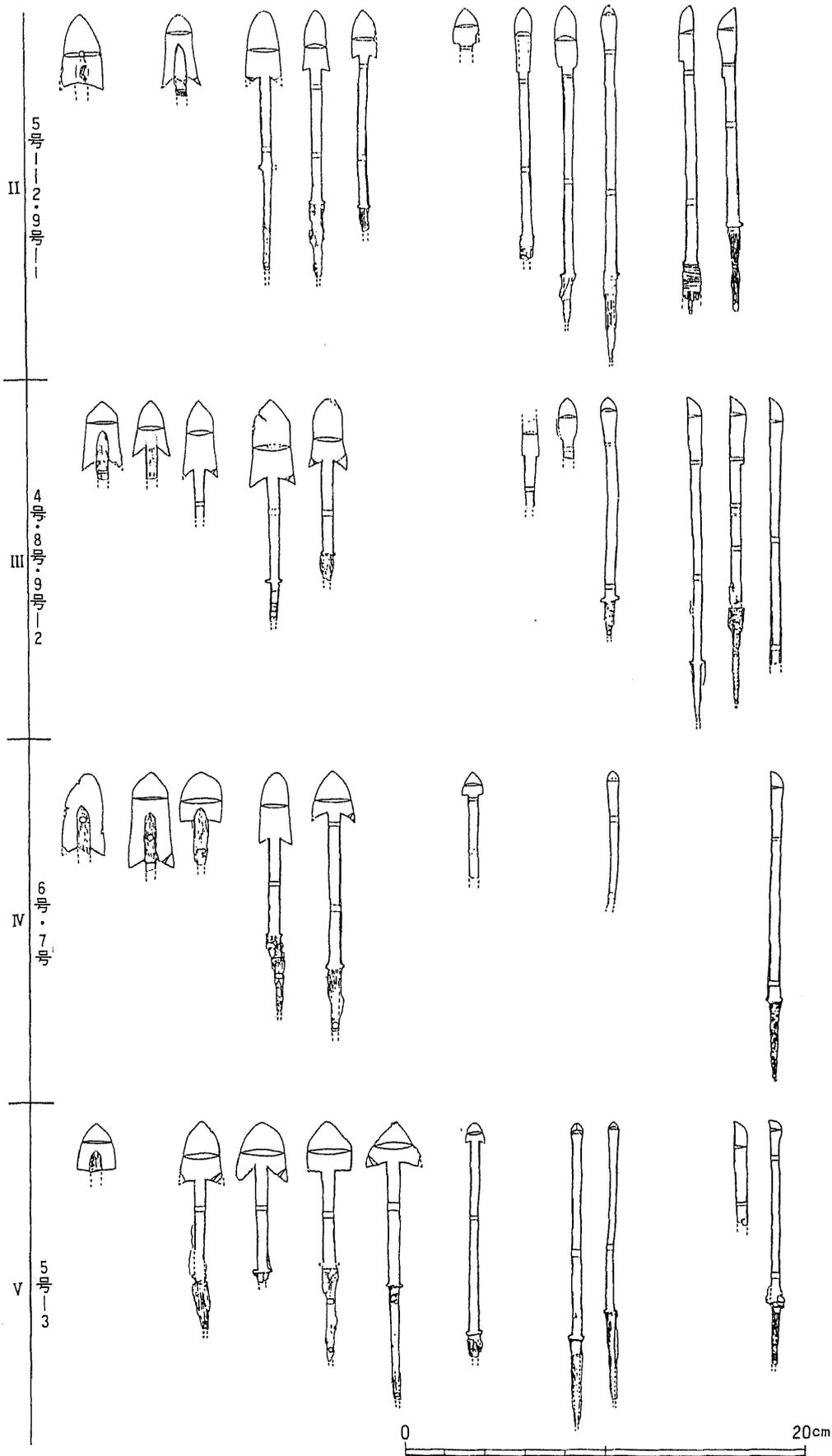


图 8 馬ノ口古墳群出土鉄鏃

(5) 伴出遺物の検討

冒頭に示したように、生実・椎名崎古墳群の武器・武具の出土率は、埋葬施設の78%、古墳総数の83%に出土しており、これは装身具の出土率が各々51%、61%であるのに比べても高い割合である。

まず、鉄鏃について出土率の高い大刀について見ると、総数約100振のうちⅠ期に2振、Ⅱ期に1振、Ⅲ期に3振、Ⅴ期に1振、計7振の飾り大刀が出土している点が注目される。Ⅰ期の1振は鉄製円頭大刀、他の1振は部分的な金銅装大刀である。Ⅱ期の例は、金銅装の圭頭大刀、Ⅲ期には、(金)銅装1振、銀装2振、Ⅴ期に鉄製足金物をもつ大刀1振が出土している。把頭の形態のわかるものは2例のみであるが、古墳群の成立期から盛期には有力被葬者が飾り大刀佩領層としては下位に位置づけられたことが窺えよう。

また、Ⅰ期では生実・椎名崎に1振ずつ、Ⅱ期は生実に1振、Ⅲ期は椎名崎に3振が集中し、Ⅴ期の例は生実に出土するという分布を示す。

一方、鏢について見ると、飾り大刀は銀装の1例を除いてすべて喰み出し鏢であるが、その他のはみ出し鏢はⅡ期に多く、それも大半は小刀に装着されるという限定的な使用である。大型の鏢は、無窓のものが圧倒的に多く、60%を占める。Ⅰ期にも見られるが、Ⅲ期とⅣ期に最も多い。有窓の鏢には、八窓、六窓があり、八窓はⅡ期から、また六窓はⅢ期からあるが、Ⅳ・Ⅴ期に多い。このことからⅢ期までは、飾り大刀を除いて、一般的な無窓の鏢が大半を占めていたことが判る。

この他の鉄製武器では、鉄製の飾り弓金具の出土が特徴的なあり方を示している。この飾り弓金具は、Ⅲ期とⅣ期に見られ、椎名崎古墳群に集中している。最近の調査例でも、神明社裏でⅢ期の例が、1例加わっており、椎名崎古墳群という中央有力者グループに片寄って分布する可能性がより濃厚になった。椎名崎古墳群最盛期のⅢ・Ⅳ期は、長頸の広根鏃をはじめ、最も鉄鏃の種類が豊富で、しかも大量に副葬される時期であることは、この飾り弓のあり方と重要な相関関係をもつものといえる。

武具類では、小札が挙げられる。小札は、Ⅱ期の生実古墳群にのみ検出されているが、いずれも4枚ずつで、使用時の重ねをそのまま残している例と改めて布に包まれていたと見られる例がある。後者がやや長く、孔の配置も異なるが、幅がほぼ等しいことから、同一の製品の一部を分有していたものとも考えられる。今後も生実古墳群に片寄って出土すれば、より性格が明らかになると思われる。

一方、馬具の出土は、現在のところ馬ノ口支群に限られており、Ⅲ期とⅤ期に1例ずつ副葬されている。2例とも鉄製の素環鏡板付轡と鉄製吊金具付木製壺鐙の組み合わせで、鏡板はいずれも立聞に鉸具が作り付けられたものであるが、Ⅴ期の副葬例は鏡板が逆三角形に近い形態で、引手には13~14回のひねりが加わる特徴がある。また、前者には馬装と考えられる金銅装の花卉形飾り金具・飾り鉾が伴出し、後者は石突(鉾)を伴っている。2例ともほぼ同規模、ほぼ同数の大量の鉄鏃をもつ有力円墳で、各々重要な地位を担った同系の被葬者が考えられるが、後者は、生実・椎名崎古墳群最後の有力構成員の一人であったと推定される。

4 生実・椎名崎古墳群分析の展望と課題

東京湾東岸における最大規模の後期古墳群を分析するに当たって、まず、最も出土率が高く量的にも多い鉄鏃を取り上げ、分類と編年を通して古墳群の推移を追ってみた。

鉄鏃の分類では、刃部の形態を第1の基準として分類した。特に刃部の大きく変化に富む形態のものを、有頸、無頸の区別なく広根系として一括し、同様の扱われ方をした鉄鏃と考え、むしろ盛行期が前後するものと捉えた。また、古墳時代後期を代表する細根系長頸鏃については、刃部の形態を小三角形系、両関・両刃系、片関・片刃系の3系統に大別し、系統内での形態のくずれ、無関化、小型化等の変遷を追い、相互が関連して変化していることを明らかにした。一方、これらの長頸鏃の特徴である棒状部の長さの変化にも重点を置いたが、合わせて重量の変化に着目し、長頸化の傾向から再び短頸化する変化が小型・軽量化として置き直せることを明らかにした。

これらの分類の中で、当古墳群形成期（Ⅰ・Ⅱ期）に重要なあり方を示す長頸鏃として、剣身長長頸鏃を抽出し、両関長三角形長頸鏃から分離した。この剣身長長頸鏃の6世紀後半代における盛行は、市原市国分寺台の調査成果にも明確に表われており、6世紀後葉・末葉をピークに6世紀前半代から7世紀前半代まで主体的に副葬される長頸鏃である。6世紀代の例は、直葬系の埋葬施設から出土したものが大半を占めており、この意味では当古墳群の横穴式石室出現前夜をも代表する鉄鏃である。

一方、古墳群の盛期～衰退期であるⅣ・Ⅴ期に特徴的な鉄鏃には、小型三角形式長頸鏃を取り上げた。これは、従来腸袂長三角形式長頸鏃として、大型の長三角形式と同系に扱われていたものであるが、小文で示した小型の長三角形式長頸鏃（Ⅱ-a）の影響下に正三角形式化したものと捉えられる。7世紀中葉前後に単独でまとまって副葬される例が多く、刃部の形態を保ちながら、大きさ、棒状部の長さ等に変化の追える鉄鏃である。

この古墳群の盛期～拡大期（Ⅲ・Ⅳ期）に最も特徴的な鉄鏃は、広根系の長頸鏃である。刃部の形態には、逆刺の比較的深いものもあるが、直角関の長三角形、五角形、菱形に至っては、実用性に乏しいことは否めない。また、全体的には細根系長頸鏃が圧倒的多数を占め、これに対し特殊な使われ方をした鏃であることは明らかである。これらが数本に留まっているならば、実用性の高い細根系長頸鏃に対する特殊性に注目して、鳴鏑矢に用いられた可能性も考えられるが、十数本まとまって副葬した例や、これのみを副葬した例からは、被葬者の戦場での役割を象徴する矢としても検討する必要がある。一つには、特殊な矢として神聖な意味をシンボル化したものと捉え、これをもつ被葬者に一定の地位を考える見方である。広根鏃を5本以上もつ古墳の墳丘規模は、14基中2基を除いて20mクラス以上で、うち7基が25mクラス以上である。鉄鏃総数も多く、9基が30本を超えており、3基に飾り大刀、2基に馬具の出土が見られる等、古墳群全体の中での地位の高さを示す要素は多い。

また、一方では、弓の性能、防具の変化と多様化に拠って用いられたことも考えられよう。さらに、想像をたくましくすれば、飛距離の長い集団戦に適した細根系長頸鏃に対して、個人戦等の接近戦用の矢として用いられたことも考えられ、戦闘形態の分化と多様性を示すとの捉え方も可能であろう。そこでは、歩兵の分化によって上位集団と下位集団が

存在し、前者が個人戦に近い役割を担う倭様の戦闘形態の萌芽を予測することも可能かも知れない。この戦闘形態の多様化が当地域のIV・V期に進行するとすれば、前述した周辺部の例とも時期的な併行関係が認められ、特にV期以降ではここでI-C-fとした逆刺の深い三角形系統（埼玉県、群馬県ではいわゆる飛燕型鉄鏃に類するものがほぼ対応して見られる）を含む長頸の広根鏃のみを数本副葬する例が多くなることとも相関する。

また、この広根系長頸鏃は、古墳ごとに刃部の形態にまとまりがあり、規格性が強いことから各々の被葬者に応じて配布された可能性が高い。刃部の形態が異っても同一古墳では棒状部長の比率が近似するという傾向もあり、あるいは古墳ごとに製作された可能性もないとは言えない。今回の分析では、他の形式に関する古墳ごとの規格性の問題には至らなかったが、大量に副葬された小型三角形式長頸鏃も非常に規格性が強く、剣身形、片関の片刃鏃にも古墳ごとに棒状部の長さの比率が一定するものがいくつか見られる。この点については、製作地の問題も含めて、今後の検討課題としたい。

生実・椎名崎古墳群では、鉄鏃を主体とする武器・武具の副葬のあり方が古墳の性格を示す最も有効な基準になると考えるが、これはまた、墳丘規模、埋葬施設の規模・構造との相関関係の上に成立するものである。埋葬施設については、横穴式石室の構造を検討した後に検証することにした。そこで、墳丘規模と大量に鉄鏃を出土した古墳の相関関係を示し、大量出土古墳の変遷を確認しておくことにする。

表4では、埋葬施設1基に20本以上の鉄鏃を出土した古墳を取り上げている。これは1基当たりの平均出土数13。2本を目やすに、伴出遺物の内容も含めて設定した。20本以上を出土した例は、第3表に示した54基のうち22基で、さらにA：40本以上、B：30～39本、C：20～29本の3段階に分けてみると各々5例、10例、7例となる。これを墳丘規模15mクラス～40mクラスに分けて対応させたのが第4表である。特徴的なのは、Aに40mクラスの前円墳が含まれず、25mクラスの円墳が主体になっている点である。これは、前方後円墳がその地位を鉄鏃の量で示す必要がなく、むしろ中型の円墳では鉄鏃の量・種類が直接に地位・身分を反映しているからである。Bには40mクラスの前円墳も含まれるが、やはり主体は25mクラスの円墳で、Cを含めると20～25mクラスの円墳が70%以上を占めている。また、III期後半以降には、30m以上の前方後円墳の築造はなく、前方後円墳を拠点とする体制が消失する状況にあることを示しており、25～28mクラスの円墳が最も重要な位置を占めるようになる。

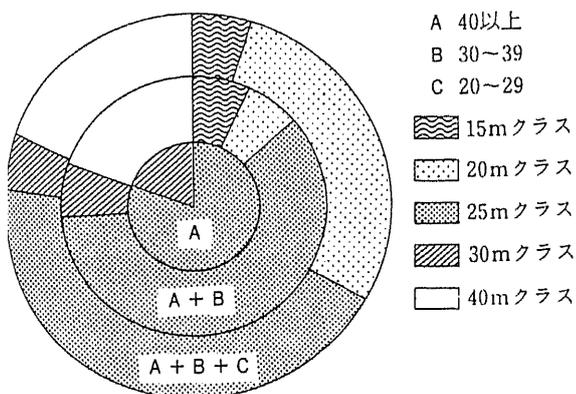


表4 墳丘規模と鉄鏃副葬数

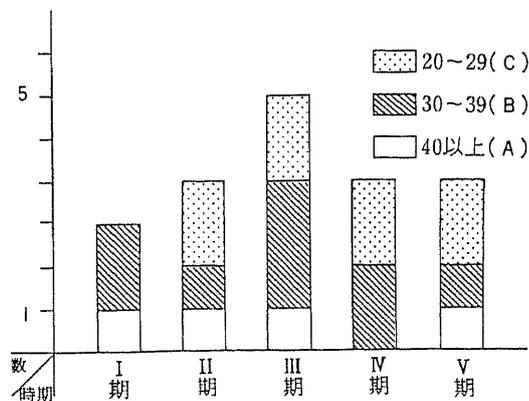


表5 有力鉄鏃出土古墳の推移

この墳丘規模・形態に見られる特徴は、副葬品の内容とともに被葬者層の性格を知る基準になると思われるが、古墳群造営の全期間を通して、20～25mクラスの円墳被葬者群が大量の鉄鏃を実際に駆使した実戦的な性格をもっていた可能性が1つ考えられる。また、当地での「前方後円墳体制」の消失と中型円墳主体の群構成は、被葬者群の変質を具現化した問題としてさらに周辺部の後期古墳群の分析と比較検討が必要である。

以上のように、今後の分析の課題は多岐にわたるが、この後期古墳群の有力被葬者群の性格を最も特徴づけるのは、次の2点である。まず、後期のある段階に急速に勢力を拡大している点が挙げられる。これは特に中央部の椎名崎古墳群に顕著で、より有力な周辺の勢力、あるいは中央の勢力との交渉によって、拠点的な古墳の築造を新しく許された新興勢力によって築かれたことが推測される。古墳群のあり方は、いわゆる群集墳とは異なり、7～8基からその倍の15～16基の単位で、独立した舌状台地全域に形成され、各支群が有力被葬者層とその下部構造によって構成される特徴をもつ。椎名崎古墳群では、中規模前方後円墳を有力被葬者層とする系統があり、それに有力円墳と小規模古墳を伴う構成が認められる。一方、生実古墳群では、有力円墳と小規模円墳主体の構成で、むしろ傍系的な様相を呈しているが、有力円墳群には中規模前方後円墳に匹敵する副葬品をもつものがあり、中期以来の伝統をもつ在地グループと解される。

第2点は、前述した鉄製武器を中心とした副葬品のあり方である。鉄製副葬品による被葬者群の編成秩序は、鉄製馬具・飾り大刀の有無、鉄製大刀の寡多、鉄製飾り弓金具の有無、鉄鏃の寡多に拠り、集団の性格としては装飾馬具を多くもつ騎兵を中心とした軍団とは異なり、鉄鏃と弓を中心とした歩兵軍団（韃負部等）の一例が考えられる。地理的には、東京湾沿岸を舟で移動することが容易に行われたと考えられる。

また、村田川流域全体の中での位置づけには、村田川南岸の菊間古墳群の後期の様相が問題になるが、前方後円墳のほとんどが未解明で、後期古墳は、集落跡調査に伴って小規模な帆立貝形前方後円墳1基と円墳6基が調査されているにすぎない⁽¹⁹⁾。このうち「大厩遺跡」として調査された3基のうちの2基は、典型的な剣身形鉄鏃を主体とする鉄鏃の構成をもち、群全体の様相に興味もたれるが、周辺部の大半は未調査である。菊間では、前期から有力古墳が築造され、中期には埴輪をもつ古墳が複数確認されており、後期の前方後円墳の解明は、「菊間国造」の勢力を知る重要な鍵であることは言うまでもない。この菊間国造の勢力圏については、現在の知見では推測の域を出ないが、前期から中期の様相は、石釧と鉄製農耕具出土古墳の分布によって、生実・椎名崎古墳群、草刈古墳群、菊間・大厩古墳群は不可分の関係にあることが窺える。また、中期の石枕、滑石製模造品副葬円墳の分布域として千葉市中央部を流れる都川流域を含めたより広い範囲での検討も必要である。

一方、後期に関しては、生実・椎名崎古墳群の資料だけが突出して、都川流域、村田川流域の他の資料が稀薄であるが、後期のこの時期に、都川流域、菊間の領域から半独立して開発された状況も窺える。前述した6世紀中葉以降の急速な開発は、この地域が下総・上総の要として直轄基地的に扱われていた可能性を示しているともいえよう。より上位者の様相はほとんど未解明でわずかに伝承資料⁽²⁰⁾を残すのみであるが、現在のところ周辺部の中で異彩を放っていることは確かである。いずれにしても沖積地中央部の古墳群の急速な広がりや鉄製武器類の大量副葬の背景には、古墳時代後期の東国政策の断片が窺える。

ここで、当古墳群から直線距離にしてわずか2.5～5.0kmの千葉市蘇我町に式内社である蘇賀比咩神社が所在していることに注目しておきたい。6世紀末葉～7世紀代の蘇我氏と東国経営の深い関わりについては、既に先学諸氏によって指摘されているが、当地域がその一拠点として、下総北部への進行の前進基地的役割を担ったことが想定される⁽²¹⁾。東京湾東岸の古代交通の要衝にある当地域に大和朝廷の下総進出の拠点基地が築かれ、やがて蘇我系（大王系）の龍角寺岩屋古墳を頂点とする広域支配権確立の基地の一つになったことは想像に難くない。古墳時代後期に、中央政権の軍事的基盤が東国に移ったことは、特定の馬具や飾り大刀が東国に備在することによっても推測されているが、生実・椎名崎古墳群の被葬者群は、常時戦闘や遠征に備える歩兵軍団として東国軍団の下部組織に組み入れられていたものと考えられる。

古代の東国に大規模な公的鍛冶工房が存在したことを明らかにした鹿の子C遺跡⁽²²⁾には、大がかりな工房群の中に鉄器の製作、補修部門が存在しており、鉄鏃・小札等の武器・武具類の製作、補修が行われたことが判明している。このような東北遠征基地的性格の工房が8～9世紀の東国に確実に存在したことは、その前代における東国軍団の性格を暗示するものといえよう。

しかし、当古墳群の鉄器の製作を現地で行っていた可能性は薄い。当地域では、4～5世紀の時期に南二重堀遺跡の住居跡、および草刈1号墳から、素材である鉄[■]（草刈1号墳例はミニチュア）が出土しているが、限定した出土例で周辺に関連資料もなく、特殊な事情から入手された畿内色の強い貴重品と考えられる。生実・椎名崎古墳群形成期の集落もかなり調査されているが、在地の鉄器生産を積極的に裏付ける証左はなく、現在確認の生産遺跡（製鉄跡、鍛冶跡）の知見では⁽²³⁾、奈良・平安時代によく本格的な鉄器の生産活動が始まったと考えるのが妥当である。集落跡出土の鉄器がにわかに増えるのもこの頃からである。

一方、市原市江子田金環塚古墳⁽²⁴⁾では、鍛冶具のひとつである鉄鉗が副葬されており、単独の出土例とはいえ在地の鍛冶（鉄素材搬入による小鍛冶）の集団が古墳時代後期の有力首長層に掌握されていた可能性がないとはいえない。

生実・椎名崎古墳群の鉄器については、中央の東国政策に関連して、特定の武器・武具類が生産地から供給された可能性が強いが、鉄鏃に見られる古墳ごとのまとまりやバラエティには、被葬者群と密接に結びついた鍛冶集団の存在が想定できる。被葬者群が直接把握していた集団ではないと思われるが、中央の指揮によって当地域を含めた東国の武装集団のために経営された工房か、あるいはその委託を受けた在地の有力首長層によって経営された工房（鉄素材をもった移動集団？）に拠るものであることが予想される。やがて奈良・平安時代に至って鉄生産、鉄器生産が在地で広く行われるようになるが、これを掌握した有力者層が、当地域の奈良・平安時代の方墳群被葬者層であることは想像に難くない。既に後期古墳時代は終わり、地方勢力は律令制度上では大きく組み換えられてもなお、後期古墳を築いた系譜上に存続した勢力が根強く、このような方墳群の存在が、上総・下総地域で次第に明らかになりつつあることにも注目しておきたい。

以上に述べてきた東京湾東岸最大規模の後期古墳群は、100mクラスの前方後円墳と大型方墳の存在しない地域として多様な要素と地域色を抽出し得ると考えられる。周辺部の調査成果を含めた多角的な検討を期していきたい。

註

- (1) a 池上 悟「後期古墳時代集落出土鉄鍬に関する若干の問題」『東京考古』1 東京考古談話会同人 1982 (50-78頁)
b 小久保徹他「埼玉県における古墳出土遺物の研究」I -鉄鍬について- 『研究紀要』創刊号 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983 (1-73頁)
c 小森哲也「栃木県内古墳出土遺物考」(1) -鉄鍬の変遷- 『栃木県考古学会誌』8 栃木県考古学会 1984 (53-92頁)
- (2) 終末期古墳の概念規定については、畿内の支配者層が、前方後円墳に替わって大型方墳、あるいは円墳を採用し、大陸文化の影響と政治秩序の変革を迎える6世紀末葉～7世紀後葉の畿内の古墳の変化を示す用語として用いられているが、東国の終末期には、地域色を加味した解釈が必要であり、当地域では、7世紀中葉前後に方墳を採用した後に方墳群の形成が活発に行われ、その下限は9世紀まで降る状況にある。奈良・平安時代の「方形溝状遺構」として分離する考え方もあるが、一連の造墓活動と地域色を重視して、当地域の終末期古墳として扱うことにしたい。
- (3) なお、鉄鍬の比較資料としては、周辺でまとまった調査の行われている市原市国分寺台古墳群の例を主に用いており、既発表資料、および筆者の分担した西谷古墳群出土資料を一部用いた。
- (4) 小支谷に面した小支群の名称については、それぞれの報告書、および調査で用いた名称に従った。
- (5) 狛江市史に発表された同市亀塚古墳出土の剣身形鉄鍬を初源に近いものと考え、東京国立博物館所蔵の亀塚古墳出土鉄鍬を実見したが、剣身形出現以前の別系統のものであった。公表された鉄鍬(国学院高校所蔵)の帰属には、なお検討が必要と思われる。東博所蔵資料の実見には、本村豪章氏ならびに望月幹夫氏のお世話になった。
小出義治「亀塚古墳」『狛江市史』 狛江市史編さん委員会、狛江市 1985 (119-188頁)
- (6) 丸子互他『城山第1号前方後円墳』 小見川町教育委員会 1978
- (7) 重量については、報告された資料が少なく、錆化が著しいために正確な値が出ないものが多いので、計測値の資料は限られている。今回計測したのは、馬ノ口古墳群、神明社裏古墳群出土鉄鍬のみで、重量の変遷を見るにはより多くの値の平均値が必要であることは否めない。なお、傍証資料として市原市西谷古墳群の計測値を用いている。
- (8) a 成田ニュータウン文化財調査班『公津原』I (財)千葉県地域振興公社 1975
b 杉山晋作「古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例」-公津原古墳群とその近隣- 『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集国立歴史民俗博物館 1982 (49-78頁)
- (9) 楢山林継編『請西』 木更津市請西遺跡調査団 1977
- (10) 渡辺久生・金井塚良一『西原古墳群』 考古学資料刊行会 1976
- (11) 金井塚良一他『柏崎古墳群』 考古学資料刊行会 1968
- (12) 塩野博・駒宮史朗他『鹿島古墳群』 埼玉県教育委員会 1972
- (13) 小出義治編『上総山王山古墳』 上総山王山古墳発掘調査団 1980
- (14) 石井則孝・轟俊二郎『原1号墳発掘調査概報』 千葉県教育委員会 1970
- (15) 星龍象・葛西功・西山克己他『白駒古墳』 君津市白駒遺跡発掘調査会 1981
- (16) 小林三郎・熊野正也編『法皇塚古墳』 市川考古博物館 1976

- (17) 当地域の横穴式石室は、第1次調査以来、玄室の前面に続く部分を「羨道部」と捉えて報告しているが、玄室と同様柱状石による区画と天井石があり、追葬や遺物の供献が行われていることから、「前室」としての構造・機能をもつことが明らかである。そうすると、複室構造の横穴式石室と捉えなければならず、従来の「羨道部をもつ両袖・単室の横穴式石室」という認識を自己批判も含めて全面的に変える必要が生じる。今後、周辺部の横穴式石室を含めた系譜と構造の検討を行った上で再度取り上げることにしたい。
- (18) 拙稿 「古墳出土の鉄鏃について」『千葉東南部ニュータウン』15—馬ノ口遺跡他— (財) 千葉県文化財センター 1984 (164-167頁)
- (19) a 三森俊彦他『市原市大厩遺跡』 (財) 千葉県都市公社 1974
b 斉木勝他『市原市菊間遺跡』 (財) 千葉県都市公社 1974
- (20) 地元の古老によって、七廻塚古墳の所在する長山台地北辺の甘藷貯蔵穴採集品として打出し文のある金製刀装具、トンゴ玉2点、ガラス玉21点が、(財) 千葉市文化財センターに寄贈されている。古老の話に拠ると、往時生実町周辺には約30基の古墳が所在しており、上記の採集品は台地突端の古墳から出土した模様である。
- (21) 安藤鴻基「房総七世紀史の一姿相」『古代探叢』—滝口宏先生古稀記念考古学論集— 早稲田大学出版部 1980 (385-398頁)
- (22) 茨城県教育財団編『鹿の子C遺跡—遺構・遺物編』 茨城県教育財団 1983
- (23) a 「押招大六天遺跡」『千葉県文化財センター年報』No. 9 (財) 千葉県文化財センター 1983
b 鈴木英啓『潤井戸西山遺跡』 (財) 市原市文化財センター 1986
村田川対岸の潤井戸西山遺跡では、古墳時代中期の住居跡から石製鉄床と小型鉄滓が検出されている。同時期の類例は、四街道市和良比中山遺跡にもあり、中山遺跡では筒形の羽口の他、器台脚部を転用した羽口も検出されている。潤井戸西山遺跡では、この他に住居廃絶後小鍛冶として利用されたと思われる遺構もあり、あくまでも推測の域を出ないが、当地域で最も古くさかのぼる鍛冶跡の可能性をもつ例で、この時期からごく小規模な鉄製品の製作や修理が行われていたことも予測できよう。
- (24) 永沼律朗他『上総 江子田金環塚古墳』 市原市教育委員会 1985

参考文献

(著者五十音順)

- 1 池上 悟「後期古墳時代集落出土鉄鏃に関する若干の問題」『東京考古』1 東京考古談話会同人 1982 (50-78頁)
- 2 小久保徹他「埼玉県における古墳出土遺物の研究」I—鉄鏃について—『研究紀要』創刊号 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983 (1-73頁)
- 3 小森哲也「栃木県内古墳出土遺物考」(1)—鉄鏃の変遷—『栃木県考古学会誌』8 栃木県考古学会 1984 (53-92頁)
- 4 小出義治「亀塚古墳」『狛江市史』 狛江市史編さん委員会 1985 (119-188頁)
- 5 丸子亘・渡辺智信他『城山第1号前方後円墳』 小見川町教育委員会 1978
- 6 成田ニュータウン文化財調査班『公津原』 (財) 千葉県地域振興公社 1975
- 7 杉山晋作「古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例」—公津原古墳群とその近隣—『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 国立歴史民俗博物館 1982 (49-78頁)

- 8 杉山林継編『請西』 木更津市請西遺跡調査団 1977
- 9 渡辺久生・金井塚良一『西原古墳群』 考古学資料刊行会 1976
- 10 金井塚良一他『柏崎古墳群』 考古学資料刊行会 1968
- 11 塩野博・駒宮史朗他『鹿島古墳群』 埼玉県教育委員会 1972
- 12 小出義治編『上総山王山古墳』 上総山王山古墳発掘調査団 1980
- 13 石井則孝・轟俊二郎『原1号墳発掘調査概報』 千葉県教育委員会 1970
- 14 星龍象・葛西功・西山克己他『白駒古墳』 君津市白駒遺跡発掘調査会 1981
- 15 小林三郎・熊野正也編『法皇塚古墳』 市立市川博物館 1976
- 16 白井久美子「古墳出土の鉄鏃について」『千葉東南部ニュータウン』15-馬ノ口遺跡他- (財)千葉県文化財センター 1984 (164-167頁)
- 17 三森俊彦他『市原市大厩遺跡』 (財)千葉県都市公社 1974
- 18 斉木勝他『市原市菊間遺跡』 (財)千葉県都市公社 1974
- 19 安藤鴻基「房総七世紀史の一姿相」『古代探叢』-滝口宏先生古稀記念考古学論集- 早稲田大学出版部 1980 (385-398頁)
- 20『鹿の子C遺跡-連続・遺物編』 常盤自動車通関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 茨城県教育財団 1983
- 21「押招大六天遺跡」『千葉県文化財センター年報』No.9 (財)千葉県文化財センター 1983 (23-24頁)
- 22 鈴木英啓『潤井戸西山遺跡』 (財)市原市文化財センター 1986
- 23 永沼律朗他『上総 江子田金環塚古墳』 市原市教育委員会 1985
- 24 末永雅雄『日本上代の武器』(増補版) 木耳社 1981
- 25 後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4号 1939 (133-161頁)
- 26 小林謙一「弓矢と甲冑の変遷」『古代史発掘』6 講談社 1975 (98-111頁)
- 27 田中新史「南向原古墳群の調査」『南向原』 上総国分寺台遺跡調査団 1976 (61-71頁)
- 28 田中新史「古墳出土の飾り弓」-鋌飾りの弓の出現と展開-『伊知波良』1 1979 (8-30頁)
- 29 田中新史「根田古墳群」『上総国分寺台発掘調査概報』 上総国分寺台遺跡調査団 1981 (6-20頁)
- 30 田中新史「古墳時代終末期の地域色-東国の地下式系土拵墓を中心として-」『古代探叢』II 早稲田大学出版部 1985 (437-475頁)
- 31 古墳文化研究会『日本古代文化研究』 創刊号 1984
- 32 新納 泉「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号 日本考古学会 1983 (50-70頁)
- 33 田中晋作「武器の所有形態からみた古墳被葬者の性格」『ヒストリア』第93号 大阪歴史学会 1981 (1-20頁)
- 34 野上丈助「古墳時代における鉄および鉄器生産の諸問題」『考古学研究』第15巻第2号 考古学研究会 1968 (55-75頁)
- 35 川西宏幸「後期畿内政権論」『考古学雑誌』第71巻第2号 日本考古学会 1986 (1-42頁)
- 36 和田晴吾「金属器の生産と流通」岩波講座『日本考古学』3-生産と流通- 岩波書店 1986 (263-303頁)

- 37 沼沢豊『千葉東南部ニュータウン』1－椎名崎古墳群（第1次）－（財）千葉県都市公社
1975
- 38 種田齊吾・阪田正一『千葉東南部ニュータウン』3－有吉遺跡（第1次）－（財）千葉県
都市公社 1975
- 39 種田齊吾・谷旬『千葉東南部ニュータウン』4－生浜古墳群－（財）千葉県文化財セン
ター 1977
- 40 上村淳一『千葉東南部ニュータウン』6－椎名崎遺跡－（財）千葉県文化財センター
1979
- 41 田坂浩・相京邦彦・上村淳一・白井久美子『千葉東南部ニュータウン』8－ムコアラク遺
跡・小金沢古墳群－（財）千葉県文化財センター 1979
- 42 郷田良一・小宮孟『千葉東南部ニュータウン』10－小金沢貝塚－（財）千葉県文化財セ
ンター 1982
- 43 関口達彦『千葉東南部ニュータウン』11－六通金山遺跡－（財）千葉県文化財センター
1981
- 44 伊藤智樹・栗田則久『千葉東南部ニュータウン』12－南二重堀遺跡－（財）千葉県文化
財センター 1983
- 45 田坂浩・栗田則久『千葉東南部ニュータウン』13－上赤塚1号墳・狐塚古墳群－（財）千
葉県文化財センター 1982
- 46 栗田則久他『千葉東南部ニュータウン』14－有吉遺跡（第3次）他－（財）千葉県文化
財センター 1983
- 47 古内茂・大野康男編『千葉東南部ニュータウン』15－馬ノ口遺跡他－（財）千葉県文化
財センター 1984
- 48 大野康男他『千葉東南部ニュータウン』16－大膳野北遺跡－（財）千葉県文化財センタ
ー 1985
- 49 白石浩『千葉市大膳野北遺跡』（財）千葉県文化財センター 1982
- 50 小久貫隆史『千原台ニュータウン』1－野馬堀遺跡他－（財）千葉県文化財センター
1980
- 51 三森俊彦編『千原台ニュータウン』Ⅱ－草刈遺跡A区（第1次調査）・鶴牧古墳群・人形
塚－（財）千葉県文化財センター 1983

第2節 竜角寺古墳群の再検討

1 竜角寺古墳群をめぐる見解

竜角寺古墳群は、白鳳仏を伝える龍角寺と古墳時代終末期最大の方墳、岩屋古墳の存在によって1930年代から学会で注目され、1941年には岩屋古墳が国の史跡に指定されている。しかし、岩屋古墳は江戸時代にすでに石室が開口していたことが記録にあり、1970年の石室測量時には副葬品は発見されなかった。また、墳丘測量によって1辺78mの方墳として報告されているが、発掘調査による確認は行われていないため、その規模は確定していない。当時の王陵をも凌ぐ全国一の終末期方墳ではあるが、実体の解明はなお今後の調査に委ねられている。

竜角寺古墳群は、現在の利根川下流域南岸につらなる印旛沼の東岸に立地し、南の公津原古墳群と共に下総最大の古墳密集地を形成している。従来、両古墳群を別にする見解が大勢を占めていたが、東側の根木名川と西側の印旛沼に注ぐ江川によって刻まれた台地上の古墳群全体を1体のものとする見解(田中1985)が重視されつつある。このうち北西部は、竜角寺・上福田・大竹の3群に分けられているが、むしろ後期の前方後円墳・円墳群と終末期の大型方墳でその立地が異なる。前方後円墳と円墳は沼に面した台地の西部に分布し、最も北側の龍角寺に臨む谷奥に前方後円墳が集中する。一方、終末期の大型方墳は、東から開析された支谷の谷頭ごとに独立して築かれ、3群を一連の古墳群として捉え、その変遷を検討すべきであることがわかる。これら3つの群の古墳総数は151基にのぼる。

2 群構成と変遷

上記の3群の墳形別の構成を見ると、竜角寺古墳群では113基のうち37基が前方後円墳で、実に全体の1/3を占めている。また、その大半(30基)は20~30mの小規模なもので、前方部の短小な帆立貝形に近い形態である。この点が竜角寺古墳群の大きな特徴として注目されてきた。おそらく、円墳と見ているものにも短小な前方部をもつ例が潜在すると思われ、その比率はさらに高くなる可能性がある。方墳は6基あり、竜角寺岩屋古墳が一際大きく、ついで35mのみそ岩屋古墳、22mの竜角寺100号墳がある。いずれも古墳時代終末期の方墳と見られる。円墳は小規模なものが多く、10~19m級が中心である。竜角寺古墳群で発掘調査された例はわずか7基にとどまり、石室の測量が行われた2基を含めても群形成の変遷を知る資料を得るには至っていない。前方後円墳と円墳については、埴輪をもつ16基の例がいずれも後期の古墳であり、レーダ探査等によって墳裾に石棺が確認された例が10基以上あることなどから、後期以降に営まれた可能性が高い。現在のところ、前・中期に遡る例が見られないことから、後期・終末期に集中して築かれた古墳群であろう。

最大の前方後円墳である浅間山古墳は、後期の前方後円墳が群在するという特異な群形成の契機となった古墳ではないかと推測されていたが、1996年の発掘調査によって、最後の前方後円墳であることが明らかになった。浅間山古墳は前方後円墳のなかでは最も台地の奥に立地しており、印旛沼から奥まった所に造られた終末期方墳の立地に近いといえる。

表 竜角寺古墳群と印旛沼東岸の古墳群

古墳名	総数	♀	♂	□
竜角寺	113	37	70	6
上福田	22	3	6	13
大竹	16		16	
(竜角寺)	(151)	(40)	(92)	(19)
上原	4		4	
北辺田	3			
蔵ノ下	1		(3)	
竜台	5		1	
南羽鳥	29	7	5	6
宝山	8	1	16	
押畑	3		7	
山口	5		3	
八代台	32	3	5	4
天王船塚	46	4	25	9
瓢塚	50	1	33	19
(公津原)	(128)	(8)	30	(32)
北須賀	10	3	(88)	0
五郎台	6		7	
台方	10		6	
(丸塚含む)			10	
計	363	59	247	57

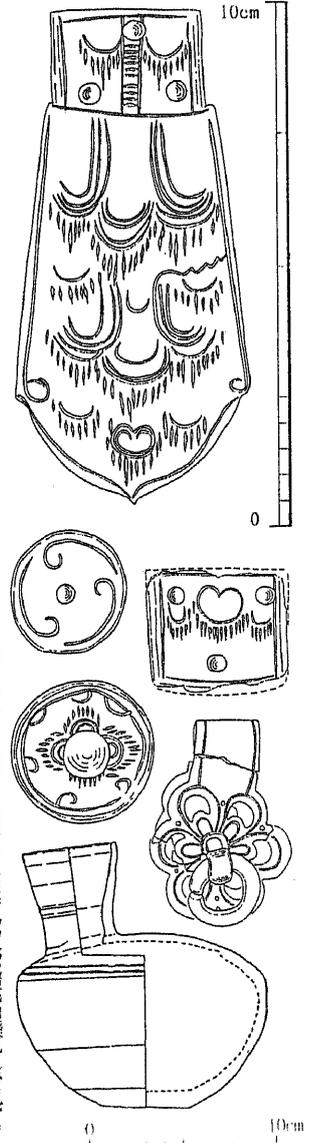
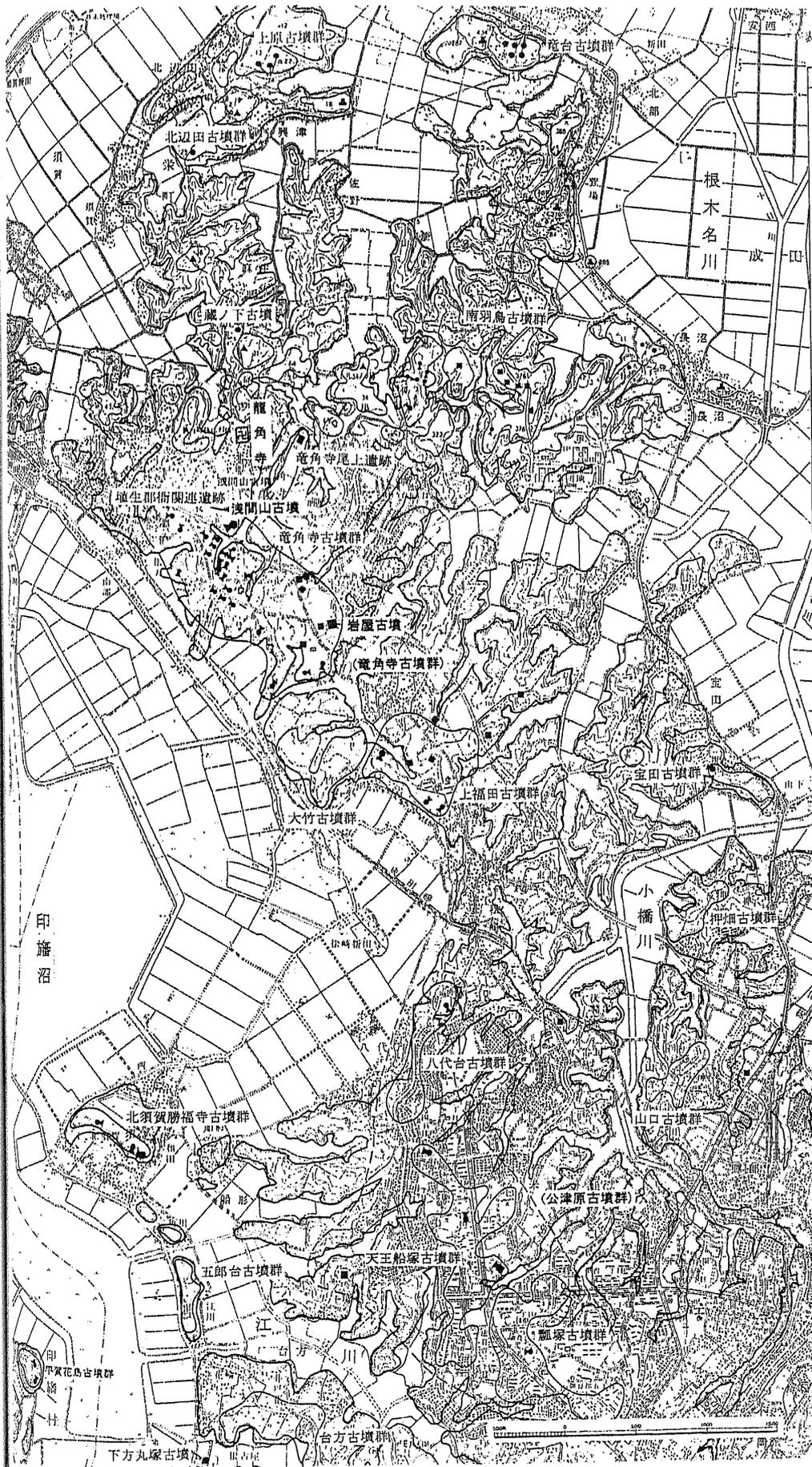


図1 竜角寺古墳群と印旛沼東岸の古墳群

図2 浅間山古墳出土遺物

全長(78m)に対し、後円部径(52m)の比率が大きい平面形の特徴は、前方部の短小な周辺の前方後円墳と共通するが、前方部が幅63mと大きく開き、高さも後円部と拮抗する一段と前方部の発達した形態である。墳丘には段築が見られるが埴輪はもたない。埋葬施設は、後円部の南西側面に開口する大型の横穴式石室で、筑波山周辺に産出する片岩板石を用いた複室構造の石室である。群内の箱式石棺にもこの片岩が使われており、石棺に羨道部を付設したような小規模な横穴式石室もあるが、大型の複室構造の石室はほかに例がない。また、竜角寺岩屋古墳の石室は2基とも単室で一回り小さく、壁石には付近に産出する貝化石を多量に含んだ砂岩の切石が用いられ、天井に限って筑波産の片岩が使われている。ほかの方墳の石室がすべて貝化石を含む砂岩の切石で構築されていることと考え合わせると、浅間山→竜角寺岩屋→以降の終末期方墳群という石室の変遷が追える。

上福田古墳群は、22基のうち13基が方墳である。石室の判明している上福田岩屋古墳・上福田13号墳はいずれも竜角寺岩屋古墳より新しいと考えられ、13号墳の下限は7世紀末葉にある。終末期方墳としてもさらに新段階の群が築かれていると見られる。一方、台地の縁辺に分布する3基の前方後円墳は、48mを筆頭に3基とも30m以上の規模を有し、埴輪をもつ最大の4号墳は6世紀前半代に位置づけられる。竜角寺古墳群の前方後円墳との前後関係は判然としないが、ほぼ同時に造墓が始まったものと考えられる。

このように、竜角寺古墳群を中心とする150基あまりの後期・終末期古墳群は、印旛沼に面する台地縁辺に前方後円墳・円墳が造られた段階→竜角寺が立地する谷の奥部に前方後円墳・円墳が集中して築かれ、最後に大型前方後円墳を築いて一連の造墓を終えた段階→場所を変えて方墳を築いた段階に分けられると想定している。これらを広義の竜角寺古墳群として以下の記述を進めたい。

3 「印波国造」の領域

竜角寺古墳群はまた、印旛国造の本拠地をめぐる、公津原古墳群と対比され、いずれにも本拠地を求めるべきか議論されてきた。上記のように、これらを一体のものとして捉える見解が重視されつつあり、その範囲は南北約10km、東西約5km以上におよび、後の律令制の郡域では埴生郡のほぼ全域と印旛郡の一部に相当する。北端の竜台古墳群から南端の台方古墳群まで、確認されている古墳総数は370基にのぼる。

竜角寺古墳群には見られない前・中期の古墳は、南部の公津原・台方古墳群のなかに求められる。公津原古墳群の形成は前期方墳の築造から始まったと見られ、その初源は有段口縁の壺形土器等から前期前半(4世紀前半)に遡り得る。前期後半には円墳が出現し、やがて石枕と石製模造品によって地域色を表出する中・後期の大型円墳(最大径42m)に発展する。石枕をもつ中期の大型円墳(径45m)は台方古墳群にも分布し、半円方形帯神獣鏡と3面の小型鏡を出土した中期初頭の下方丸塚古墳は隣接地にある。また、印旛沼に面した低地の独立丘に築かれた北須賀勝福寺古墳群には、50m級の前方後円墳が3基あり、最も大型のものは全長59mにおよび、天王・船塚(推定86m)・浅間山(78m)・天王塚(60m)に次ぐ規模である。測量調査も行われていないため、あまり注目されていないが、独立した立地からも古墳群の解明に重要な鍵をにぎる古墳群であろう。公津原では造墓が

後期・終末期にも継続し、大型の前方後円墳はいずれも後期以降に築造され、終末期方墳に20～30m級の規模をもつ例が多い点は竜角寺古墳群と同様である。しかし、埴輪消滅後の大型前方後円墳は竜角寺古墳群に築造され、終末期方墳の規模で竜角寺岩屋古墳が突出することは、両地域の消長に決定的な違いをもたらした。新しい時代の象徴である瓦葺きの寺院は竜角寺古墳群の造営地域に建立されたのである。

このように、終末期には竜角寺古墳群の造営主体が優位に立ち、公津原古墳群と一線を画したことは明らかであるが、後期の古墳造営層拡大期は両古墳群がほぼ拮抗し、後期以前は公津原古墳群を中心として南部の地域に中小の首長墓が林立した状況が窺える。これらを統合する広域首長墓が50～60m級の前方後円墳であったとすれば、終末期以前は中央部から南部に造墓の中心域があったと見られる。以上の古墳群の動向から、印旛の広域首長のポストはいくつかの豪族の間で動いていたと見られ、「印波国造」の領域はこれらの古墳群の造営地域全体にわたるものとする。

4 「香取海」沿岸の地域首長権

この地域の後期古墳では、主に箱式石棺に筑波産の片岩（筑波石）を用いているが、浅間山古墳では、産出地以外では最大規模の全長7mに及ぶ筑波石の横穴式石室が築かれている。天井石の幅は3mあり、このように大型の石材を筑波山麓から運ぶことができたのは、霞ヶ浦と印旛沼がひと続きであった「香取海」の水運を利用したからに他ならない。これは、浅間山古墳の被葬者が対岸の首長と交流をもち、大型の筑波石を入手して香取海を通航できるような地位にあったことを物語っている。公津原古墳群にも筑波石を使った石室はあるが、石棺に入り口部をつけた構造の非常に小規模なものである。

浅間山古墳は竜角寺岩屋古墳に匹敵する規模をもち、発掘調査の結果、出土遺物の示す年代は7世紀前半代という従来の岩屋古墳の推定年代と重なるものであった。石室構造の比較から、築造時期は岩屋古墳に先立つ7世紀頭頃と考えられる。公津原古墳群ではこの時期に大型前方後円（方）墳が築かれていないため、竜角寺古墳群は墳丘・埋葬施設ともに浅間山古墳の時代に公津原古墳群を超えているといえよう。この古墳を築造する時点で、竜角寺古墳群の首長が常陸南部との交通・流通において有利な立場にあり、おそらく公津原古墳群の首長を押さえて、印旛を代表する地位についていたと考えられる。

5 推古朝から孝徳朝の中央集権政策と仏教振興策

上記のように、6世紀末～7世紀前葉に、倭王権の地方政策担当者が常陸への道の要衝を押えている豪族として交渉の相手とした印旛の代表は、浅間山古墳の被葬者であったと推定される。浅間山古墳の副葬品には、蓮華紋や光芒（気）を表現した透彫り飾り金具や毛彫り文様をもつ馬具をはじめとする飛鳥の仏教美術の影響が色濃く反映されており、この時代の先進文化を受容した被葬者の性格が窺える。

倭王権との交渉はそのまま岩屋古墳の被葬者に受け継がれ、東北進出の前進基地を掌握する首長としての地位を固めていったものと思われる。香取海の交易・流通権に加えて倭

王権の後ろ盾をもつに至った岩屋古墳の被葬者は、当時の王陵にならって3段築成の巨大な方墳を築く。もはや筑波の大型石材を使用した石室を造る必然性はなくなり、加工しやすい地元の砂岩で切石積石室を造るようになる。以後竜角寺古墳群の終末期方墳の石室にはこの石材が用いられる。この石材を使用した石室は、印旛・手賀沼流域を中心に鹿島川、利根川下流域に広く分布している。

この地に下総最古の瓦葺き寺院＝龍角寺が建立されたのは、軒丸瓦・文字瓦の特徴によって7世紀中葉から後半代と推定されている。大型古墳に替わる新たな権威の象徴として、龍角寺を建立したのは、岩屋古墳の被葬者であったとしても齟齬はない。

一方、浅間山古墳の西側には、下総国埴生評(郡)家に関連した遺跡群があり、印旛の在地勢力が評制に再編された段階で竜角寺古墳群の勢力圏は「埴生」評に編成され、その中枢機関が首長墓と寺院の近くに設置されたことが窺える。公津原古墳群は印旛評(郡)の領域に属し、評制の分割・再編によってかつての印旛の首長圏は二分されたものと見られる。これは、毛野などに比べて小国造が林立した常総地域の評制施行前後の状況を如実に示しているという。支配領域の狭い小国造は、それ自体が直接的に部民制に組み込まれたものが多く、倭王権に対する従属度が強まるとともに、一族内の団結が弱まって配下の中小豪族が台頭を促す危険性をはらんでいたようである。7世紀前葉～中葉の印旛は、まさに国造一族が大きく動揺した時期であったと考えられる。

また、龍角寺創建期の所要瓦を焼いた五斗葺瓦窯跡出土の文字瓦の分析では、瓦の「寄進地名」が埴生評(郡)・印旛評(郡)の印旛沼東岸域にわたることが指摘されている(小牧1999)。これは、本論で想定した竜角寺・公津原古墳群の領域にほぼ対応しており、埴生評・印旛評にわたる地域がまだひとつの領域として瓦葺きの寺院という新たな地域首長権象徴の建設あたっていることに注目したい。この造営は、おそらく岩屋古墳の築造と同様の体制で行われたと考えられ、造営の母胎となった瓦の寄進領域が旧来の印旛首長圏を示すものとする。浅間山古墳の時代に始まった竜角寺古墳群周辺の一連の動きは、仏教という新しい信仰を精神的な支柱に、中央集権国家を指向した列島の大きな変革期を反映したものといえよう。

参考文献

(著者五十音順)

- 1 今泉潔他『千葉県重要古墳群測量調査報告書―成田市公津原古墳群―』千葉県教育委員会 1997
- 2 宇田敦司『千葉県成田市南羽鳥遺跡群』I (財)印旛郡市文化財センター 1996
- 3 太田文雄他『千葉県重要古墳群測量調査報告書―成田市上福田古墳群・北須賀勝福寺古墳群―』千葉県教育委員会 1998
- 4 国立歴史民俗博物館編「東国における古墳の終末《本編》」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館 1992
- 5 小牧美知江「龍角寺(五斗葺)瓦窯と文字瓦」(40-54頁)、山路直充「龍角寺軒瓦(山田寺式)の年代」(55-64頁)『官営工芸研究会会報』6 奈良国立文化財研究所 1999
- 6 (財)千葉県文化財センター編『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)―東葛飾・印旛地区(改訂版)―』(財)千葉県文化財センター 1997
- 7 (財)千葉県史料研究財団編『龍角寺古墳群からみた古代の東国』―栄町浅間山古墳の調

- 査成果をもとに一 (財) 千葉県史料研究財団 1998
- 8 田中新史「古墳時代終末期の地域色」『古代探叢Ⅱ』 早稲田大学出版部 1985 (437-475頁)
 - 9 永沼律朗「上福田13号墳」『主要地方道成田安食線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ (財) 千葉県文化財センター 1993 (18-27頁)
 - 10 成田ニュータウン文化財調査班『公津原』 (財) 千葉県地域振興公社 1975
 - 11 萩野谷悟他『竜角寺古墳群第101号古墳発掘調査報告書』 千葉県教育委員会 1988
 - 12 深沢克友「竜角寺古墳群研究の変遷と意義」『房総風土記の丘年報』11-昭和62年度- 千葉県立房総風土記の丘 1988

第3節 古墳終末期の上総北西部

1 歴史的環境

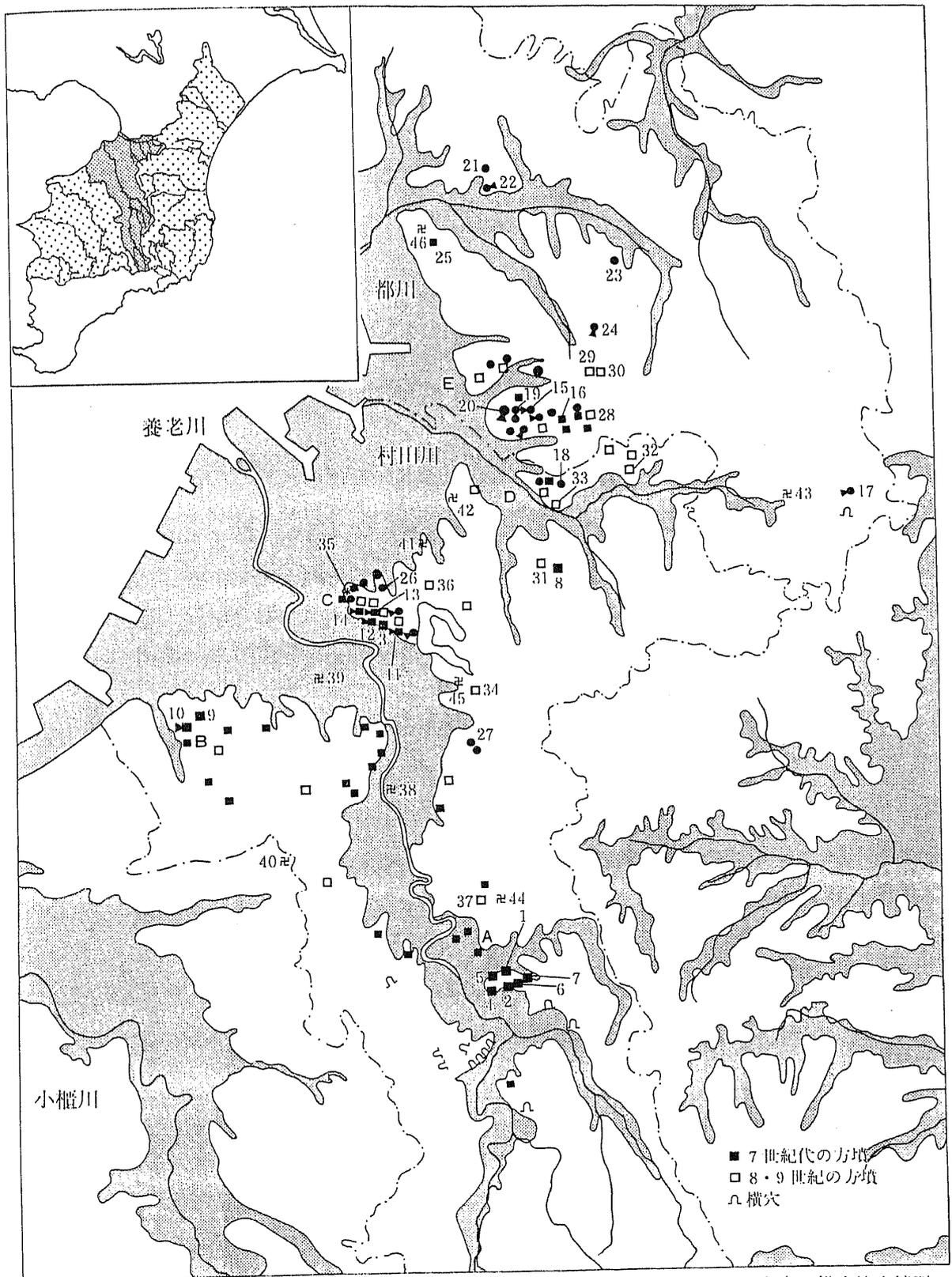
旧上総国北西部は、上総国府が所在した地である。国府の具体的な位置は未だ確認されていないが、東京湾に注ぐ養老川下流域北岸に所在することは文献の記載や「古甲（古国府）」・「国府」等の地名によって知られるところである。また、発掘調査によってほぼ全容が明らかになった上総国分尼寺は大和法華寺に匹敵する規模と主要伽藍をもち、僧寺もまたそれに相応した規模と内容をもつことが明らかにされてきた。

しかし、養老川流域には古墳時代の後期から終末期にかけて上総を代表するような大型古墳がなく、むしろ太平洋側の山武地域や南部の小櫃川・小糸川流域に代表的な前方後円墳や大型方墳が分布している。この地が律令国家形成期に上総国の政治・文化の中心地になった背景にはどのような状況が考えられるであろうか。このことに注目して、上総北西部の古墳の動態を見ていくと、以下のようないくつかの特徴を見いだすことができる。

- ① 古墳時代全般を通じて畿内の中央勢力との交渉に先進的な動きを示し、海上交通を利用して常に新しい文物を受け入れ、また新しい体制に順応している。
- ② 集落の発展を背景に成長した在来の首長層は、河川の流域ごとにいくつかの中規模古墳群を形成し、前期から終末期まである程度独立性をもって群を維持している。
- ③ 終末期になると、中・小規模の古墳や後期以降の新興古墳群は「方墳と横穴式石室」を受け入れたにもかかわらず、在来の中心的な古墳に前方後方墳という当時一般には使われていない墳形を採用している。
- ④ 古墳時代終末期以降も地下式横穴墓などの地下式系の埋葬施設をもち、独特な展開を示す「方墳群」が存在し、その築造時期は初期古代寺院の造営期とほぼ重なる。

以上の点から、養老川下流域が上総国の中心地となり得た背景には、早くから旧態依然とした埴輪や飾り大刀の世界から脱却して、先進的な直轄地的特性をもちつつも、初期古代寺院の建立を担うような在来の勢力が存続し、新たな体制に適応した状況が考えられる。

養老川下流域は、4世紀代～5世紀代に小櫃川、小糸川下流域と並んで100mクラスの大型前方後円墳を擁する地域である。養老川の北岸台地上には出現期の前方後円墳神門3・4号墳が築かれるが、これに直接つながる定型化した前方後円墳は、現在のところ発見されていない。前期の古墳の調査例では、主丘部の1辺が40mに及ぶ村田川流域の菊間新皇塚古墳が粘土槨を内部施設とし、小型仿製鏡(内行花文鏡・珠文鏡)、石釧等を出土したことから、この流域の主墳と考えられている。前方後方墳説もあるが、明確ではない。しかし、この地域では、出現期から前期の小規模な前方後方墳が拠点的に分布し、養老川北岸では系統的なまとまりをもつ例も見られる。この時期の小規模な前方後方墳は、おそくとも4世紀前半代で終息することが出土土器の分析で明らかになっている。



A. 牛久・江子田古墳群 B. 姉崎古墳群 C. 市原台古墳群 D. 草刈古墳群 E. 生実・椎名崎古墳群

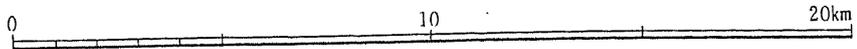


図1 上総北西部の終末期古墳と初期古代寺院
(遺物番号は本文・挿図・表に対応)

その後約 300年のブランクを経て、再び養老川下流域で主墳系列最後の古墳・六孫王原古墳に前方後方墳が採用される。この点が、終末期大型古墳に見られるこの地域の最大の特徴といえよう。6世紀以降の養老川流域は、前方後円（方）墳の規模が80m以下になり、小櫃川・小糸川下流域の前方後円墳が100mの規模を保つのは対照的である。しかし、周辺に群在する後期古墳群の主墳が50m以下に留まるのに対し、姉崎古墳群中の山王山古墳（6世紀中頃）のように前期以来の墓域に占地して、なお相対的に大型の規模（全長69m）を保っている。以下では、終末期大型古墳をとりまく地域的様相を抽出してみたい。

2 後期古墳群と方墳

上総北西部は、前述のように、最後の大型古墳が前方後方墳であるため、40mを超える大型方墳は存在しない。しかし、30mクラス（1辺27～37m）の方墳に視点を向けると、養老川流域に7基、村田川流域に1基と計8基を数え、県内の他の地域に比べて決して少なくはない。特に、養老川中流域の北岸、現在の牛久周辺に8基中の6基が集中する（表1）。中でも牛久3号墳は、二段築成で1辺30mを超える規模で、二重周溝をもつことから、下流域の前方後方墳に匹敵する方墳といえよう。これらの築造時期が問題であるが、調査・報告されているのは、牛久3号墳、女坂1号墳の2基にすぎない。女坂1号墳は、鉄釘を用いた木棺直葬の内部主体をもち、伴出した土器類から7世紀第2四半期～中葉の年代が考えられる。一方、牛久3号墳は軟質砂岩を用いた複室構造の横穴式石室を内部施設にもつ点で、同一地域内にあって女坂1号墳と対照的であるが、伴う遺物は、わずかに鉄鏃、鉄釘1点ずつと須恵器2個体で、石室使用が7世紀中葉前後に押さえられるに留まる。

この養老川中流域の2基の方墳については、江古田古墳群のまとまった調査が行われていないため、方墳群の存続期間、変遷を検討する資料が極めて少ない。そこで、後期～終末期の古墳群をかなり広範囲に調査している市原古墳群（国分寺台地区の古墳群）と村田川下流域の生実・椎名崎古墳群に方墳導入の時期と下限を求めてみたい。

国分寺台地区の諏訪台古墳群では、前方後方墳も含めて約130基もの古墳時代後期から終末期の古墳が調査されている（図3）。この中には、大型古墳を中心として群が形成された段階と著しく規模を縮小した新しい段階のものが含まれているが、ここでは前者の方墳に限って見てみることにする。この方墳群の初源については、須恵器蓋杯（図2-7）⁽¹⁾によって7世紀中葉にさかのぼることが確認されている。大半は、7世紀中葉以後のものと推定され、古墳時代終末期の大型方墳の下限は7世紀末葉と考えられる（図2-11・12）。また、方墳の内部施設に終始一貫して横穴式石室を採用していない点も諏訪台古墳群の特長であり、国分寺台では石室を採用する少数の方墳と併存する。次に、19基からなる古墳群の変遷が明らかにされている国分寺台地区の西谷古墳群（田中1985）についてみると、7世紀中葉以後に軟質砂岩を使用した単室の横穴式石室をもつ方墳が出現し、8世紀初頭までに4基（木棺直葬）の方墳が継続

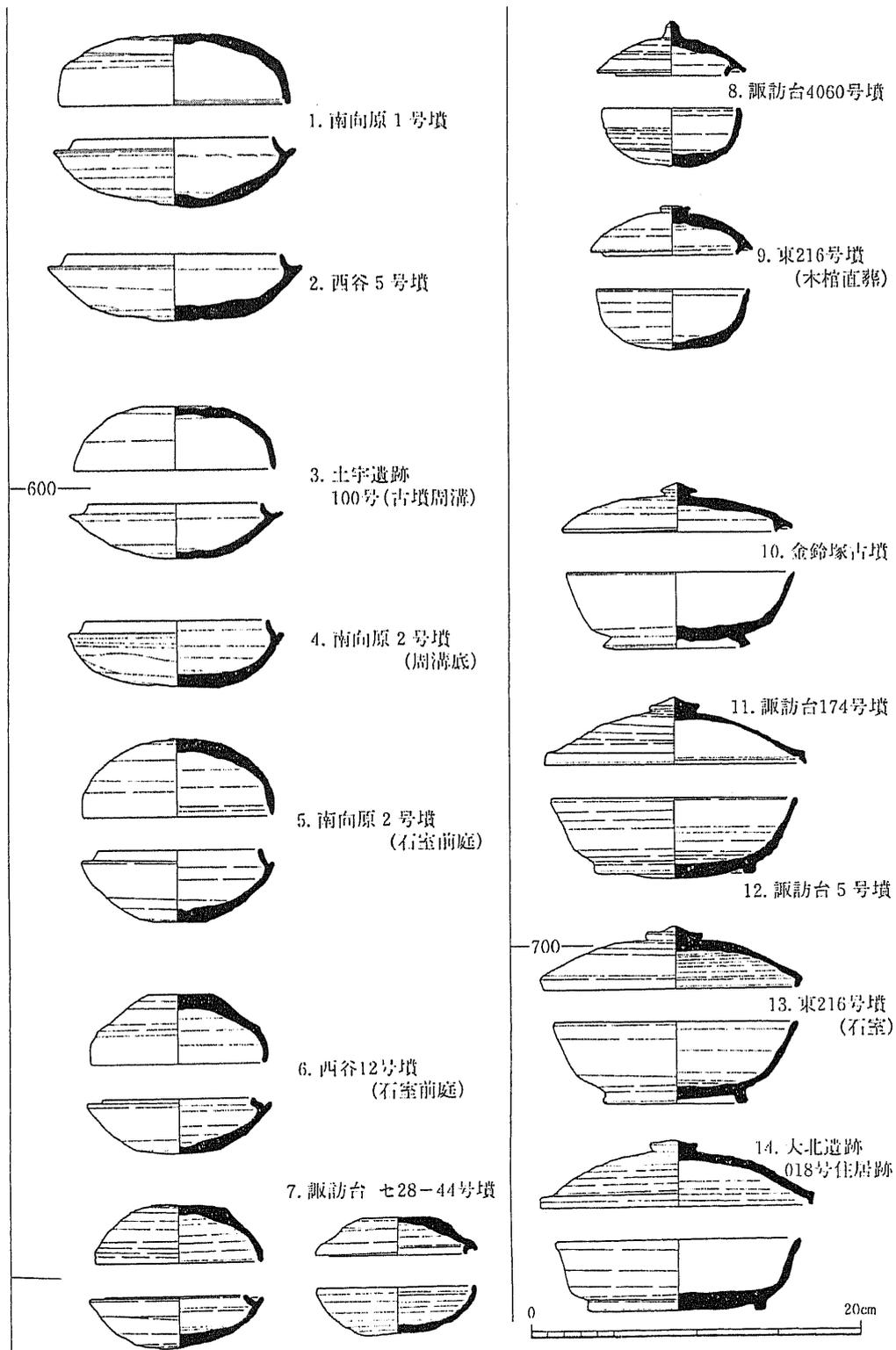


図 2 古墳時代終末期前後の須恵器蓋杯

表 1 上総北西部の大型方墳

古墳名	墳丘規模 (m) タテ・ヨコ・高	内部施設	遺物	その他	文献番号
1 牛久3号墳	31.2・28.0・2.8 外側周溝の範囲 一辺47.6	軟質砂岩截石積・ 複室構造の横穴式 石室	鉄鏃1、鉄釘1 須恵器長頸壺1	二段築成 二重周溝	1
2 女坂1号墳	29.0・29.0・3.5 周溝外側で 一辺37.0	木棺直葬2基	鉄釘72本、須恵器 壺1、大甕1、土 師器高杯4、杯1		2
3 諏訪台古墳 (K-17)	30・29.5 周溝外側で35.0	木棺直葬			3
4 江古田3号墳	36.7・26.7・5.7				4・5・6
5 5号墳	29.9・29.9・3				4・5・6
6 21号墳	26.4・27.8・4.1				4・5・6
7 22号墳	32.7・33.7・2.7				4・5・6
8 長者塚2号墳	33.0・(30)・3.7			半壊	5・6
9 (徳部台古墳)	不明	横穴式石室	不明	二重周溝	7

して築かれている。ほかに下限を示す例には、2次にわたって使用された東4号墳がある(田中1979)。1次の内部施設は、副葬品・須恵器(図2-9)から7世紀中葉と推定される。次いで築かれた軟質砂岩の横穴式石室から出土した須恵器蓋杯(図2-13)は、7世紀末葉から8世紀初頭(藤原京造営前後)に位置づけられ、石室をもった方墳では国分寺台で最も新しい古墳の一つと考えられる。

村田川流域の生実・椎名崎古墳群での方墳の採用は7世紀中葉に入ると推定している(白井1986)。現在までの調査では、特に中心となる規模の大型方墳は発見されていない。内部施設には、方墳採用以前から軟質砂岩系の石材を用いた横穴式石室と箱式石棺を併用しており、木棺直葬が著しく少ないのが特徴である。方墳には横穴式石室だけが用いられている。規模・構造に大きな相違はあるものの龍角寺岩屋古墳のように2基の横穴式石室を並列させる例も見られる。現在整理中であり、あくまで現時点での見解になるが、この群における横穴式石室をもつ方墳は、7世紀中葉から末葉に営まれたものと把握している。また、国分寺台と同様に方墳の築造はこの後も続いており、規模を縮小して、地下式構造の内部施設・改葬墓を伴う新たな段階へ移行していく。

3 7世紀代の前方後方墳

養老川下流域には、墳丘全長45.4mの六孫王原古墳を筆頭に7世紀代の前方後方墳が5基存在する⁽²⁾(表2)。出現期から前期に各地で築かれた前方後方墳は、4世紀

表2 7世紀代の前方後方墳

古墳名	墳丘長	内部施設	遺物	文献番号
10 六孫王原古墳	45.4m	凝灰質砂岩使用の横穴式石室	金銅製馬具、大刀、刀子、鉄鏃、須恵器	7・11
11 東間部多11号墳	25.5m	(木棺直葬か)	須恵器	12
12 諏訪台古墳(K-15)	38.7m	木棺直葬	金銅装足金物付大刀他	3
13 諏訪台古墳(4022)	29.5m	(木棺直葬か)	須恵器	13・14・15
14 諏訪台古墳(4060)	24.0m	木棺直葬	金銅製口金具付鉾、大刀、耳環、須恵器蓋杯、鉄鏃、鉄釘	13・14・15

代をもって終息すると考えるが、出雲地方は、例外的に5・6世紀代にも前方後方墳が存続することが報告されている⁽³⁾。凝灰岩製の舟形石棺をもつ竹矢岩船古墳、横穴式石室を用いる岡田山古墳・薄井原古墳はその例外といえる。しかし、確実に7世紀代に比定できる報告例は出雲にも見られない。

養老川流域で、約300年のブランクを経て再び前方後方墳が築かれた背景は、俄に把握しがたい。諏訪台、東間部多古墳群のように数十基の方墳が営まれる中で、中心的な存在が規模だけではなく墳形の差として現われた結果と理解するのが自然な解釈であろう。前方後円墳ではなく前方後方墳という形態を採用した背景には、主丘部に方形の墳丘を用いるという時代の趨勢があり、またすでに前方後円墳の時代が終わったことを意味すると思われる。

六孫王原古墳は、副葬品・須恵器の年代観から7世紀後半に位置づけられる。諏訪台古墳群では3基の前方後方墳が相次いで築かれる(図3)が、くびれ部の不明瞭な4060号墳(図2-8)・諏訪台最大のK-15号墳から台地奥部に占地した4022号墳まで7世紀中葉前後から末葉の短期間につくられたものであろう。

4 軟質砂岩を使用した複室構造の横穴式石室

内部施設から見たこの地域の特色には、軟質砂岩を使用した横穴式石室の盛行が挙げられる。特に、截石積複室構造の石室は、上総北西部地域の古墳時代終末期に欠くことのできない要素の一つである。

牛久3号墳の石室は、この地域では最も整った複室構造の横穴式石室である(図4-1)。前室と後室がほぼ同規模のプランは、埋葬空間として前室が後室(玄室)と同様の機能をもつ構造となっている。これと非常に近い構造の石室は、村田川、鹿島川の分水嶺近くに位置する千葉市土気舟塚古墳(中村1967)に見られる(図4-2)。いずれも前室と後室は長方形を呈し、側壁の構築には持ち送りが見られる。両室を通した主軸長は牛久3号墳が5.6m、土気舟塚古墳が4.9mで規模も近いが、後者では前室の方がやや長く(0.15m)、石材は大型である。前者が二重周溝の方墳、後者は墳丘長



図3 諏訪台古墳群全体図(第4回『市原市文化財センター遺跡発表会要旨』より改図転載)

37mの前方後円墳でやはり二重周溝をもち、小地域の拠点に位置する主墳として威容を保っている。両石室とも年代を推定できる副葬品がなく、墳丘から出土した須恵器によって石室が7世紀前半から中葉前後に使用されたことを知るのみである。しかし、石室の形態は複室構造として地域的に完成された姿と見ることができる。

複室構造の導入に先だって、房総では6世紀中葉頃から片袖や無袖の横穴式石室が用いられており、複室構造の出現には新たな契機が存在すると思われる。これには、後期になって急激に造営が拡大する古墳群の動向が注目されよう。村田川下流域の千葉市生実・椎名崎古墳群では、60基に及ぶ軟質砂岩系石材を用いた両袖単室の横穴式石室が調査されているが、玄室に続く著しく短い羨道部にも天井石が架構され羨門をもつ構造で、羨道部に改葬・副葬が行われた例も少なくない。羨道部は玄室より短小なまま発達しないが、機能的には複室構造のものと同様の役割を果たしている。

同様の石材を用いた横穴式石室は、村田川中流域の市原市草刈古墳群にも数基存在するが(高田他1980)、両古墳群の初源期の石室を見ると、玄室の最大幅が中央部に

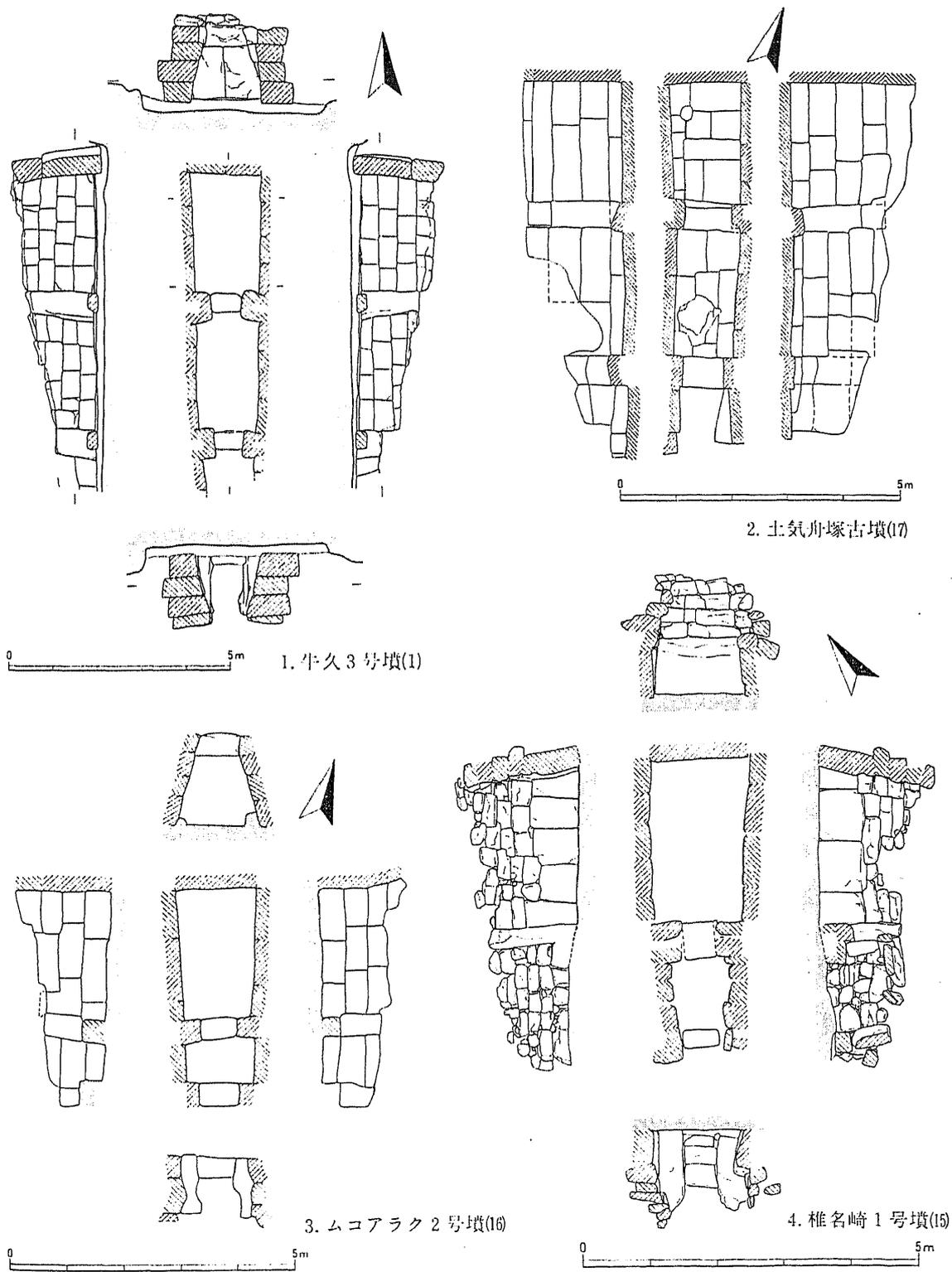


図4 横穴式石室展開図

あり、敷石の状況からも弱い胴張りの長方形であることがわかる(図5-1・2)。特に、草刈古墳群の29A号墳の石室は、玄室が細長く、羨道部もそれほど幅を減じていないため、無袖型に近い平面形態をもつ。墳丘から出土した須恵器にはTK43型式期にさかのぼるものがあり、石室の使用に伴う須恵器はTK209型式期前後に位置づけられる(図8-5・6)。おそらく、両古墳群を通じて最も古い形式の横穴式石室であろう。図5-2の椎名崎2号墳では、袖石による玄室と羨道部の区画が明瞭で、やや大型化した截石を用いているが、石が小さく未発達である。墳丘出土の須恵器杯にはTK209型式期に推定できるものがあり、石材の用い方から別系統と考えられる椎名崎1号墳(図4-4)と相前後して築かれたものと把握できる。1号墳は墳丘長44.6mの前方後円墳、2号墳は墳丘径24mながら2重周溝をもつ円墳で、外側周溝の外径は39mに及ぶ。2基ともこの古墳群の中心的な支群にあって古墳群の飛躍的な拡大の端緒を担った古墳である。

養老川流域では、市原市南向原2号墳⁽¹⁹⁾の玄室と福増1号墳⁽²⁰⁾の前室がわずかに胴張りの平面プランをもつ(図5-3・4)。福増1号墳の石室は、牛久3号墳・土気舟塚古墳に比べると、前室が小規模な複室構造であり、初期の複室構造の横穴式石室にも弱い胴張りの平面プランが採用されていたことが窺える。これらの築造時期については、南向原2号墳の周溝底出土の須恵器がTK209型式期の直後に位置づけられる(図2-4)ことから、村田川流域の両袖型横穴式石室の導入とほぼ同じ時期と考えてよいだろう。村田川流域の横穴式石室は、羨道部に変化があるものの、基本的には複室構造に近い機能をもつ両袖単室の石室で終始し、ムコアラク古墳群⁽²¹⁾のような方墳群に至っても短小な前室に近い羨道部空間を維持している(図4-3)。

複室構造の横穴式石室は、太平洋側の山武郡に集中して分布するが、以上のように東京湾岸の養老川・村田川流域もその分布域にあり、またその影響下に村田川流域では、両袖の截石積横穴式石室が爆発的に造られているのである。この意味で、土気舟塚古墳の複室構造の横穴式石室は、両地域の接点を担う位置にあるといえよう。一方、村田川・養老川流域では軟質砂岩系石材を用いた箱式石棺が横穴式石室と併存している。その築造期間は、6世紀後半から7世紀前半にわたり、方墳には採用されていない。下総から常総地域では、雲母片岩を使用した箱式石棺が盛行するが、雲母片岩を使用したものは、村田川北岸の椎名崎古墳群が分布の南限となっている。ただし、椎名崎古墳群の雲母片岩を使用した箱式石棺は、40基余りの調査例の中で人形塚古墳(図1-20)の1例に限られ、他は軟質砂岩系石材の石棺である。人形塚古墳は、古墳群中唯一埴輪をもつ前方後円墳で、立地・築造時期から同古墳群成立の契機となった可能性が強く、この雲母片岩の箱式石棺が当地域への石棺導入と深く関わっていると考えられる。

都川流域では、兼坂1号墳(図1-21)・新山1号墳(図1-22)・内野5号墳(図1-23)に雲母片岩の箱式石棺があり、鹿島川から常総地域の影響が南下するルートとして注目できる。また、谷奥部の中原4号墳(図1-24)では軟質砂岩の石棺⁽⁴⁾が用いられており、この流域で両者が混在することがわかる。古墳時代終末期の石室

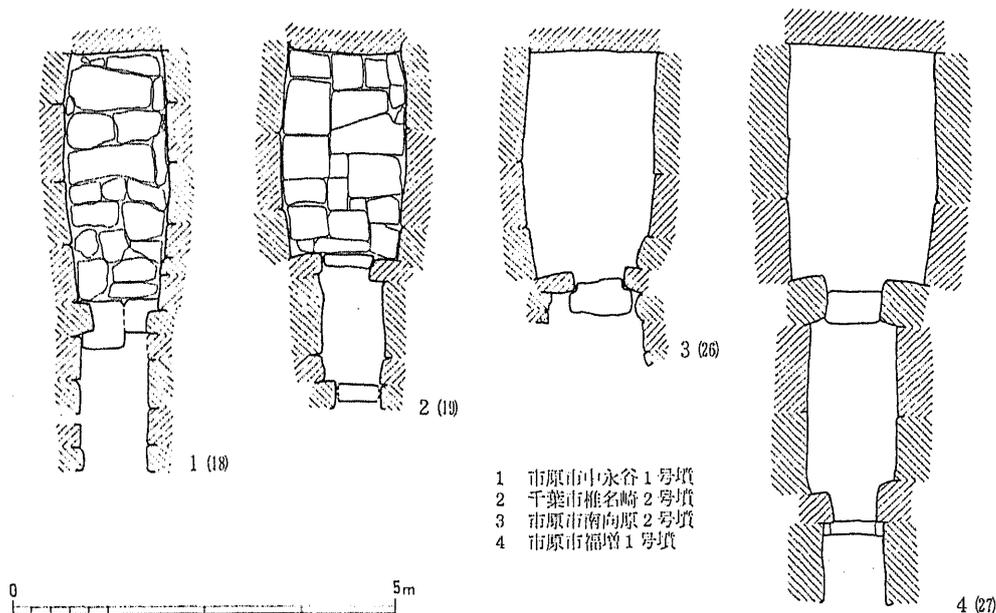


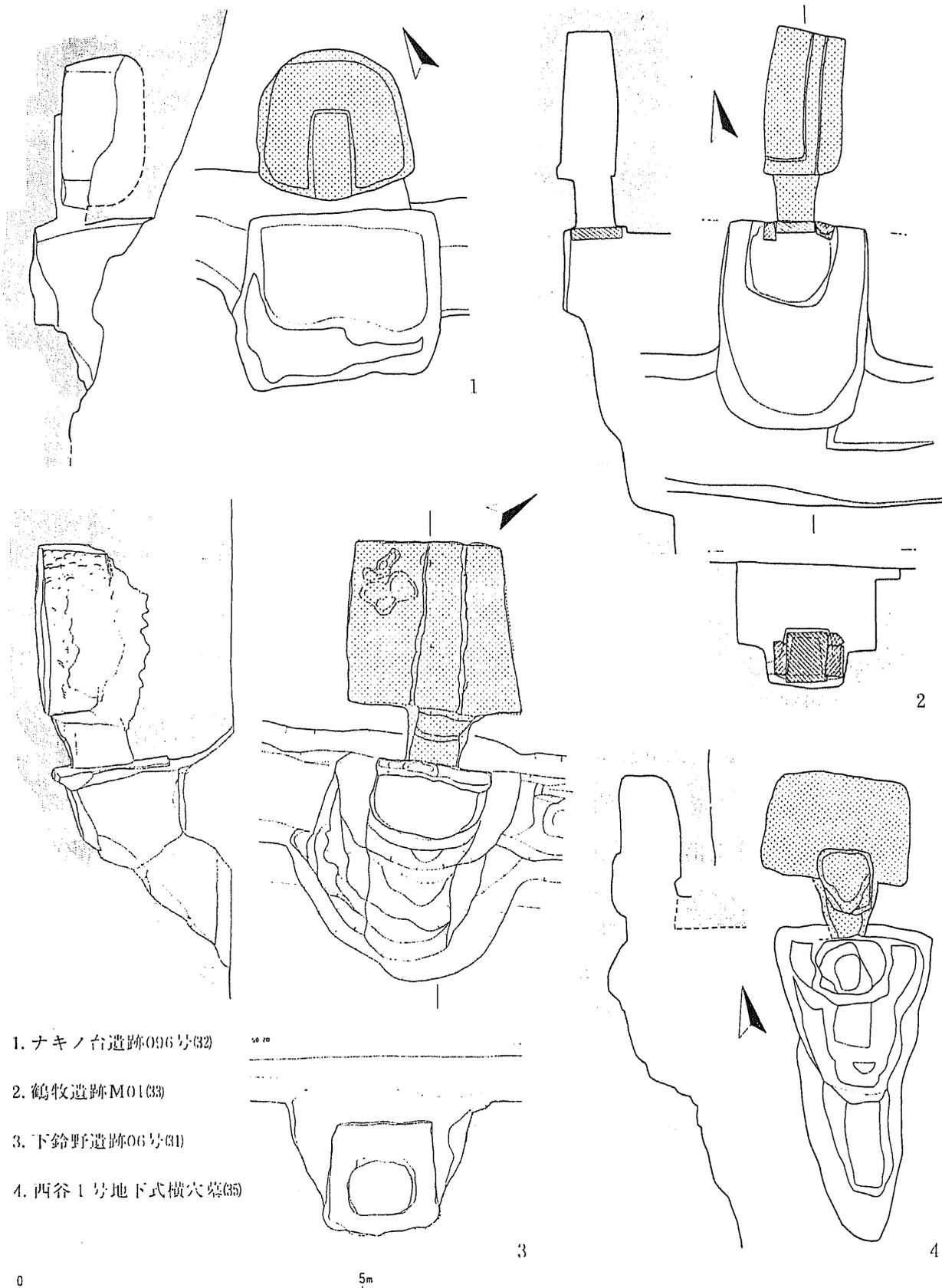
図5 胴張り系横穴式石室

をもつ古墳としては、荒久古墳が知られていたが、1987年度の荒久遺跡の調査に伴って周溝を確認したところ、墳丘1辺20mの方墳であることが判明した（山口他1989）。石室は凝灰質砂岩截石積の単室構造の横穴式石室で、持ち送りの著しい天井部の構造等に印旛地域の石室との関連が濃厚である。

5 8・9世紀の「方墳」と地下式横穴墓

前に述べたように、この地域では、古墳時代終末期の大型古墳が造られなくなった後も、小規模な方墳が継続的に築造されている。そのほとんどは、墳丘を削平されているため墳丘中に想定できる木棺直葬系の埋葬施設は極めて検出例が少ない。これに起因して単に方形の溝だけが検出される場合が多く、これらの性格・時期については曖昧な点が少なくなかった。しかし、ほぼ並行して採用されている地下式構造の埋葬施設の調査例が増加するに従って、伴出遺物・所属時期が次第に明らかになっており、7世紀末葉から9世紀前半に及ぶ変遷が解明されつつある⁽⁵⁾。また、分布範囲も上総北西部を中心として小櫃川流域から印旛沼周辺を経て下総北部まで広範な地域にわたることが分かってきた。これらは畿内型の終末期古墳からは逸脱した造墓活動として、前代の方墳群とは切り離して把握できる一面もあるが、同一地域内、あるいは同一墓域内での連続性が追える点が重要な側面である。

まとまった調査例には千葉市六通神社南遺跡(図1-28)の37基、千葉市辺田山谷遺跡(図1-29)の14基、千葉市鈴子(県立コロニー内)遺跡(図1-30)の12基、市原市下鈴野遺跡(図1-31)の9基、市原市ナキノ台遺跡(図1-32)の10基、市原市武士遺跡(図1-34)の28基⁽⁶⁾、市原市奉免上原台遺跡(図1-37)の45基が挙げられる。古墳時代終末期の古墳群に混在、あるいは隣接する例と奥まった台地上に立地して新たに造墓を開始する例がある。後者は、8世紀代になって方墳を造りはじめる例が多



- 1. ナキノ台遺跡096号(32)
- 2. 鶴牧遺跡M01(33)
- 3. 下鈴野遺跡06号(31)
- 4. 西谷1号地下式横穴墓(35)

図6 地下式横穴墓(1)

く、新たに造墓活動に加わった集団の性格とその背景には、上総国府の設定等、平城京造営期以後の国家規模の変革に対応した在地勢力の新しい動きを読み取る必要があるだろう。

地下式構造の内部施設には、埋葬部の形態から地下式土坑墓系の横長長方形のものと横穴墓系統の方形または台形のものがあり、後者の形態は正に平地に築造された横穴である（図6）。関東地方の横穴造墓の下限は7世紀中葉にあると考えられ、年代的なつながりからも、後者は「地下式横穴墓」と呼ぶのが最も相応しいと思われる。これらの築造は、関東地方以北を中心に7世紀中葉以降も横穴を改築、再利用した例が数多く存在するのと対照的な現象でもある。地下式横穴墓は、7世紀末葉から8世紀中葉にかけて3段階の変化が見られることが指摘されている（田中1985）。初期の例は、市原市ナキノ台遺跡096号や鶴牧遺跡(33)M01に見られるように、中央に横穴の縦溝と同様の縦長の方形溝をもち、玄室は奥行の深い台形や長方形を呈する（図6-1・2）。前者は3体埋葬可能な空間をもつ例、後者は1～2体埋葬用の構造といえる。鶴牧遺跡の例では、玄室の入口に軟質砂岩系の截石を立てて閉塞石とし、横穴式石室の名残りを留めている。墓道は次第に発達し、中央の方形溝は開口部に接するようになる。下鈴野遺跡06号（図6-3）、武士遺跡SC029号墳（図7）は方墳に採用され

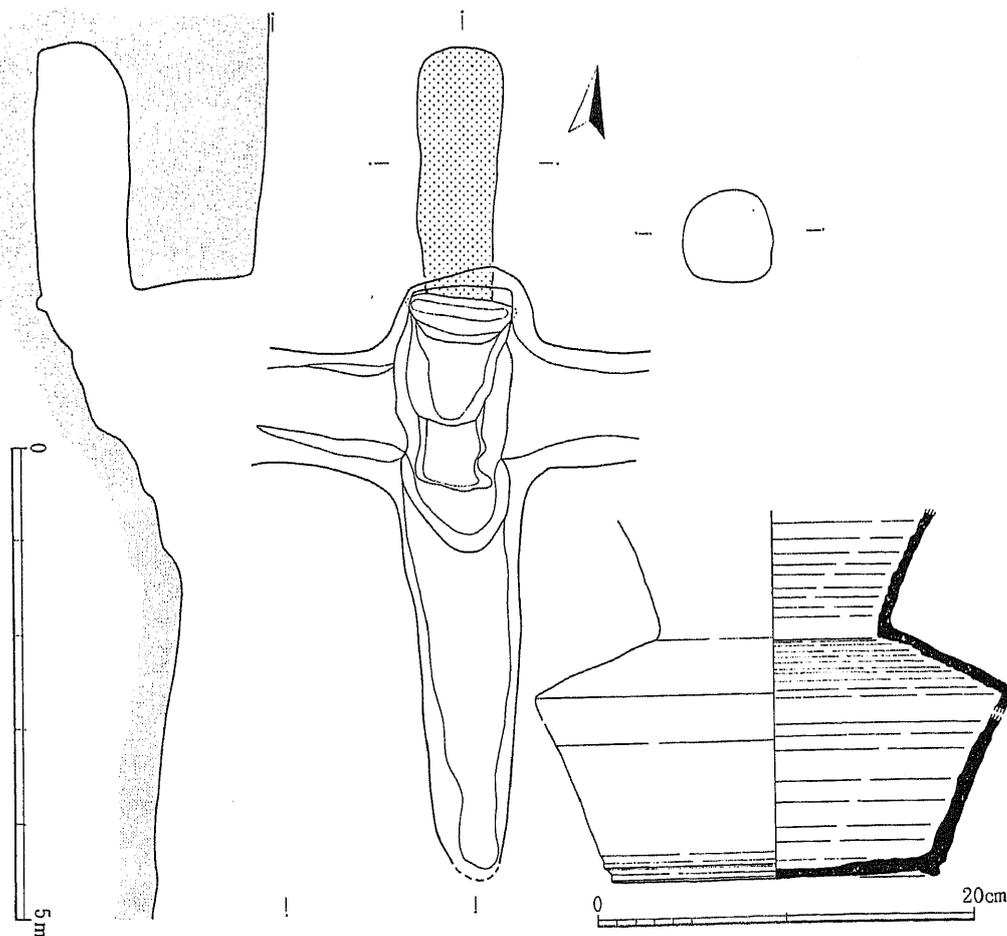


図7 地下式横穴墓(2) 武士遺跡SC029号

た発展段階の地下式横穴墓といえる。武士遺跡S C 029号墳前庭部出土の須恵器広口壺から8世紀第2四半世紀に使用されたことを推定できる。地下式横穴墓で新しく位置づけられる例は、市原市西谷1号地下式横穴墓に見られ(図6-4)、方形溝が前面にきて開口部に半分かかり、墓道はさらに発達して緩やかな階段状を呈する。搬入部出土の須恵器短頸壺から8世紀中葉に機能したことが窺える(田中1985)。この例は、墳丘と周溝を伴わない単独の地下式横穴墓であるが、千草山遺跡(図1-36)S X103(方墳)では、方形溝が開口部にかかっており、この時期まで地下式横穴墓が方墳に用いられたことも推定される。

また、古墳時代終末期に各種土坑墓の分布の中心を成した地域のひとつである印旛沼・手賀沼周辺には、現在までに1例も報告例がないことが、地下式横穴墓の分布に見られる特徴である。

8世紀中葉以降の方墳の内部施設は、改葬骨・火葬骨を納めるものが主体になり、改葬用の施設には地下式土坑墓、地下式横穴墓系の搬入部と小室からなる「地下式改葬墓」(田中1985)、火葬用には蔵骨器を納める小土坑や石櫃などが中心となるが、地下式横穴墓系の小室に蔵骨器を入れた例や小土坑に山砂と粘土を張り巡らすものなどがあり、多様性を増す。武士遺跡、奉免上原台遺跡で確認されている須恵器・土師器から、これらの方墳の下限は9世紀前半頃と推定される。

この新しい段階の方墳が規模・内部施設ともに充実し、さかんに造られたのは8世紀前半から中葉にかかる時期であり、上総北西部がこのような墓制の中心地域となる。

6 初期古代寺院

以上で扱った地域は、国郡里制の編成後に海上郡・市原郡・山辺郡の一部とされた地域である。この地域で7世紀後半から8世紀前半代に造営されたことが考えられる寺院には、二日市場廃寺(図1-38)・今富廃寺(図1-39)・川原井廃寺(図1-40)・光善寺廃寺(図1-41)・大椎廃寺(図1-43)・菊間廃寺(図1-42)などが挙げられる。上総国では、国分寺造営以前のこの時期に造寺活動の盛期があり、上総国の8郡中、長柄・埴生・天羽郡を除いて寺院が存在することが判明している。中でも市原郡・海上郡・武射郡には複数の寺院が認められる。これらの国分寺造営以前にさかのぼる寺院を初期古代寺院として概観することにした。

養老川中流域は、古墳時代終末期の比較的大型の方墳が集中する地域として注目したところである。後期古墳群の動態からもこの地域が古墳時代後期以降、下流域に劣らず重要な拠点となっていたことが推測される。この中流域に、紀寺系・龍角寺系(山田寺系)双方の瓦当文様をもつ軒丸瓦を出土した二日市場廃寺がある。他に房総で紀寺系軒丸瓦をもつ例は、現在のところ成東町真行寺廃寺に限られている。外区外縁が二重圏と素縁の違いがあるものの瓦当文様が酷似することから同範と考えられ、真行寺廃寺例は二日市場廃寺使用の範型の外区外縁に手を加えて使用したことが推定されている。また、海上郡と畔蒜郡の境付近に位置する川原井廃寺は、二日市場廃寺と

同じ生産地からの供給が推定される平瓦が出土していることから、養老川中流域の勢力の影響下に造られた初期の古代寺院であると考えられる。

一方、下流域の海上郡衙に隣接する地点には「郡名寺院」である今富廃寺が所在する。海上郡衙については、大字名の「小折」によっておよその所在地が推測されていたが、1984年度に行われた西野遺跡の調査で郡衙関連遺構が検出されたことによって、解明の途に着いた状況にある。郡衙の一郭を区画したと考えられる溝と井戸が調査されており、溝内からは8世紀後半から9世紀代の土器が主体的に出土し、9世紀の後半には埋没していたことが判明した。今富廃寺は基壇の存在が認められているのみで未調査である。軒瓦には、上総国分僧・尼寺系の平城宮形式の流れを汲むものとそれに先行するものがあり、国分寺造営以前の軒丸瓦には、山田寺の系譜を引く八葉単弁蓮華文様のものがある。出土瓦から「8世紀中葉の寺院の再整備段階で官営工房と相当密接な関係をもちながら、瓦が供給されて」おり、「中央との関係さえ窺わせるものがある」ことが指摘されている（今泉1989）。また、平瓦の格子日の特徴が二日市場廃寺のものに似ることから同一窯の供給による可能性も示唆されている。以上が海上郡と想定できる地域の瓦から見た初期造寺活動の動態である。

北岸に広がる台地上の市原郡衙推定域には光善寺廃寺が所在する。基壇の一部が確認できるが寺院内施設の内容は分かっていない。光善寺廃寺の瓦は、高い周縁と濶弁化した四葉単弁の軒丸瓦をもつことで、周准郡九十九坊廃寺、山辺郡大椎廃寺と共通する（須田1980）。また、光善寺廃寺と大椎廃寺は、凸面布目瓦をもち、技術的にも共通点が見いだせる。これらの文様構成には、九十九坊→光善寺→大椎への変遷が見られる。また、光善寺廃寺には八葉複弁蓮華文軒丸瓦と段顎三重弧文軒平瓦があり、海上郡武士廃寺（図1-45）・（下総）千葉寺跡（図1-46）に酷似した例がある。以上の瓦から見たこれらの主要寺院の建立時期については、総体的に見れば、川原寺系の瓦をもつ上総大寺廃寺を除いて、ほぼ一斉に建立された状況が考えられる。

これらの官寺的な初期古代寺院とは別に、8世紀代の方墳群の墓域内に、瓦を使用した小規模な「寺」が存在する可能性を示す遺構が奉免上原台遺跡（図1-44）で検出されている（田中他1992）。軒丸瓦の文様は、光善寺廃寺・大椎廃寺のものに類似し、凸面布目平瓦をもつ点でも光善寺廃寺と共通点をもつ。この遺構の性格については今後の報告に委ねることにしたいが、前代以来の時代の象徴である「方墳」と新しい時代の象徴である「菩提寺」をも造り得た新興在地勢力の性格の一端を表わすものとして注目しておきたい。

初期古代寺院が最も盛んに造られた時期と終末期新段階の方墳群築造の時期がほぼ一致する点をこの地域の特色として重視したい。

7 古墳終末期の地域色

これまでに、上総北西部における終末期古墳の様相から、いくつかの特徴を抽出した。上総北西部は、古墳時代出現期からいち早く東海以西の影響が波及し、畿内の中

中央勢力との交渉にも先進的な動きをしていた事が窺える。古墳時代全般を通じて淀みなく新しい文化を受け入れ、在地の勢力が順調に成長した地域といえる。集落の発展と在地首長層の確立が、中央勢力とも、地方の広域首長とも抵触せず、ある程度の独立性をもって維持されたため、河川の流域ごとにいくつかの中規模のまとまりが形成されたものと思われる。養老川下流域・村田川下流域には、それぞれ海上国造・菊間国造の奥津城に比定される古墳群が成立している。これらが畿内の中央政権によって認知された勢力であったことは、稲荷台1号墳の「王賜」銘鉄剣が語ってくれた。後期になって新興の集落や古墳群が形成されるようになって、在来の勢力もまた新たな体制に対応して中央との関係を維持したことは後期の古墳群の状況にも窺える。このような素地が古墳時代終末期の方墳や横穴式石室の受け入れ方にも反映していると思われる。すなわち、小規模な古墳や新興の古墳群では方墳を受け入れたにもかかわらず、中心的な古墳には前方後方墳という一般には使われていない墳形を採用し、横穴式石室の受容にも多様性があり、江子田古墳群・諏訪台古墳群のように全く石室を用いない大方墳群も存在する。新たな段階の方墳群と地下式横穴墓の独特な展開も、新旧の中小在地勢力の確実な成長を背景としたものであろう。これはまた、上総のほぼ中央、東西の要の位置にある養老川流域が必然的に上総国府の所在地となったこととも関連すると思われる。養老川流域は、6世紀後半以降の前方後円墳に上総を代表するようなものがなく、山武郡地域、小櫃川・小糸川流域が埴輪・飾大刀等をもつ代表的な前方後円墳の分布の中心地となる。大型方墳の分布にも同様の状況が見られる。それにもかかわらず、8世紀以降養老川流域が上総の中心となり得た背景には、早くから埴輪・飾大刀の世界から脱却した先進的で直轄地域的な特性があり、墓制の上でも既に旧態依然とした前方後円墳をいち早く造らなくなっていたことが考えられる。

最後に、古墳出土例を中心とした須恵器の変遷から当地域の古墳時代終末期の古墳と駄ノ塚古墳の年代的な関係を確認しておきたい⁽⁷⁾。

図2に示したように、当地域の6世紀末葉から8世紀初頭の須恵器蓋杯は、形態と法量の変化から大きく4段階の変化を見ることができる。まず、最初の変化は杯口径12.5cm前後から10.0cm前後へ小型化する段階で、陶邑編年のTK209型式並行期である。600年前後に位置づけられよう。法量はさらに小さくなり、杯口径8.5cm～9cmとなり蓋天井部に面をもつようになる。蓋と身の逆転する直前の形態で、中には図2-7のようにつまみのない蓋杯として既に逆転して使われたと考えられる例もある。この段階の資料は、集落・古墳ともに出土例が多く、地域によってはつまみ出現以降も使われている。7世紀第2四半期から中葉に盛行する器形といえよう。乳頭状のつまみをもち、完全に蓋と身が逆転する段階の例は図2-8によって確認できたが、出土例は極めて少ない。口径は最も小さく8cm～8.5cmとなる。口径がやや大きく9cm前後になって扁平な擬宝珠つまみをもつ図2-9の形態も含めて7世紀中葉から第3四半期に位置すると考える。法量は徐々に大きくなると想定され、湖西窯跡群の製品では杯口径11cm前後で蓋のかえりがやや扁平なものがあるが、この地域には出土例が

見当たらず、県内にも報告例がない。続く大きな変化は、高台の出現である。これに伴って法量は一段と大きくなり、蓋のかえりが退化し始める。高台が外に張り底径の小さい例から杯口径が15cmまで大きくなって、底部が高台よりはみ出す湖西窯跡群からの搬入品を7世紀第4四半期から末葉にとらえているが、図2-13のように底部が高台からはみ出さない形態も7世紀末葉からあり、両者が混在して8世紀初頭まで残るものと考えられる。図2-14は、平城宮I段階の畿内産土師器に伴う須恵器蓋杯として8世紀第1四半期の指標とした。

以上のように把握した須恵器の変遷の第一段階は、軟質砂岩系截石積横穴式石室の導入期で、前方後円墳築造の終焉に対応する。第二段階は古墳時代終末期方墳の出現～発展期に対応し、截石積横穴式石室が最も多く造られた時期である。第三段階は、古墳時代終末期の前方後方墳が造られた時期にあり、横穴式石室への追葬が終息する頃であろう。図2-14の段階は、横穴式石室への追葬も行われなくなる時期で、上総北西部独特の地下式系埋葬施設が方墳に採用される上限となるかどうか今後の課題となろう。

註

- (1) 諏訪台古墳セ28-44・4060号出土の須恵器蓋杯については、市原市文化財センター遺跡発表会で展示された資料を提供・掲載させていただいた。
- (2) 駄ノ塚古墳と同一台地上に立地する山武町矢部古墳が、前方後方墳の可能性が高いことが確認されている。略測で37.5mとの教示をうけた。上総の東京湾側だけでなく、太平洋側にも前方後方墳が分布することは注目される。また、古くから前方後方墳とされていた公津原古墳群の船塚古墳は、後世の改変が著しく現状では前方後方墳とする根拠は見出せない。
- (3) 山本清氏を中心に研究・報告され、『出雲の古代文化』（六興出版1989）に集成されている。
- (4) 中原4号墳の内部施設は、調査報告の中では竪穴式石室とされているが、形態と築造時期を検討して村田川流域北岸に広く分布する軟質砂岩截石使用の石棺と判断した。
- (5) この時期の「方形」の周溝のもつ地域性に注目した、以下の論稿が示されている。
 - a 田中新史 前出1985
 - b 渡辺修一 a 「群小区画墓の終焉期—所謂「方形周溝遺構」をどう見るか—」
『研究連絡誌』第6号 (財)千葉県文化財センター 1983(8-13頁)
b 「群小区画墓の終焉期(2)—方形周溝遺構における埋葬施設の新例とその検討—」
『研究連絡誌』第14号 (財)千葉県文化財センター 1985(9-14頁)
 - c 木村和紀 「房総における改葬系区画墓の出現期—方形(円形)区画改葬墓の提唱—」
『市原市文化財センター研究紀要』I 1987(47-71頁)
- (6) 武士遺跡の調査は、1987年度から(財)千葉県文化財センターが行っている。今回掲載の資料については、調査担当者諸氏より御教示・提供を受けた。
- (7) 駄ノ塚古墳の築造、あるいは初葬時期を示すと考えられる須恵器には蓋杯がないため、

長脚2段透かしの高杯を介在させて比較することになるが(図8)、駄ノ塚古墳の有蓋高杯は脚端をつまみ出して面をつくるという特長があり、長脚の中でも低いタイプのみであるため県内出土の有蓋高杯の中では変遷過程をとらえ難い。杯部の法量から言えば、富津市白姫塚・15cm-草刈29A号(墳丘内木棺直葬)・13.5cm-駄ノ塚・11.5cmという口径の差があり、透かしも三方から二方へ変化している。TK43型式期からTK209型式期の中での変化と考えられ、駄ノ塚古墳の高杯に最も新しい要素を見出し得る。奈良県藤ノ木古墳では口径15cmを超えるものと13.5cmのものがあり、TK43型式の範囲内での新古が見られ、草刈29A号墳例は形態・法量ともに藤ノ木古墳の主体的な高杯に最も近い。駄ノ塚古墳の高杯は後出的要素が強く、TK209型式に及ぶ奈良県牧野古墳の高杯に類似する。草刈29A号墳石室に伴う蓋杯はやや新しく、前掲の蓋杯変遷の中でTK209型式期直後に位置づけられるが、石室の構築時期は駄ノ塚古墳にかなり近いと思われる。この時期が当地域の軟質砂岩系截石積横穴式石室の導入期であることとも矛盾しない。

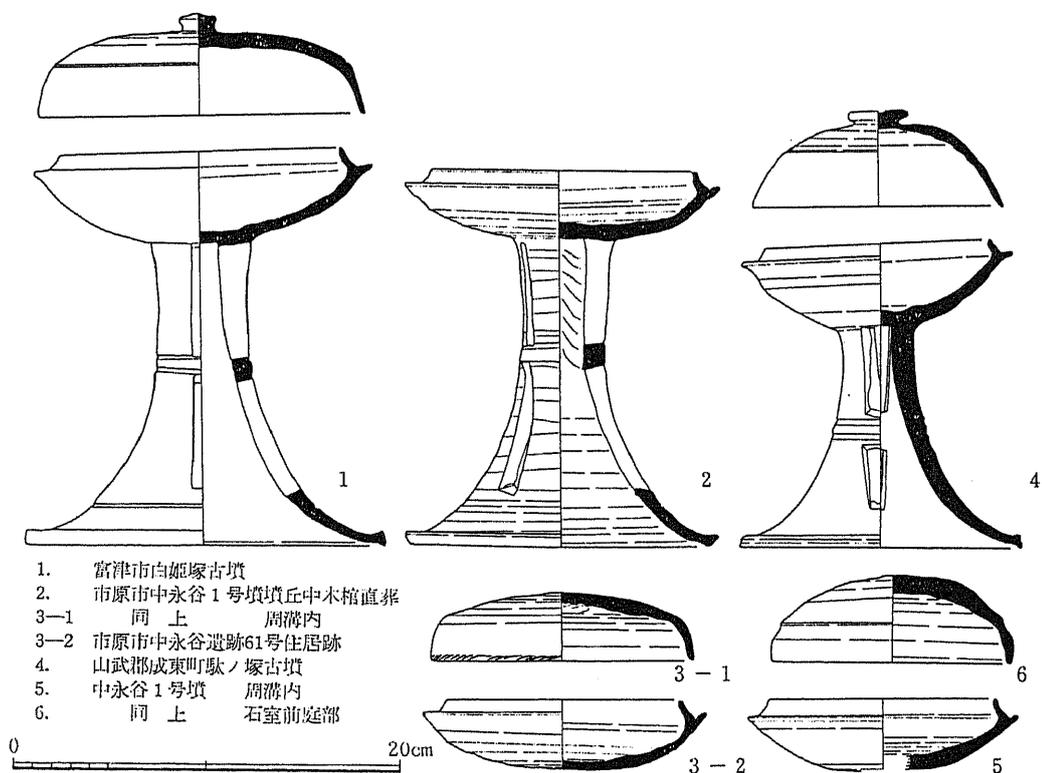


図8 県内出土の須恵器有蓋高杯蓋杯

参考文献

(著者五十音順)

- 1 浅利幸一「天神台遺跡」『市原市文化財センター年報』－昭和57・58年度－(財)市原市文化財センター 1985 (30-36頁)
- 2 浅利幸一「諏訪台古墳群について」昭和60年度『遺跡発表会要旨』(財)市原市文化財センター 1986 (14-15頁)
- 3 浅利幸一「諏訪台遺跡」『市原市文化財センター年報』－昭和63年度－(財)市原市文化財センター 1994 (53-56頁)
- 4 市毛勲・須田勉編『東間部多古墳群』－上総国分寺台遺跡調査Ⅰ－上総国分寺台遺跡調査団 1974
- 5 市原市教育委員会編『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図』－南部編－市原市教育委員会 1987
- 6 今泉潔他『成東町真行寺廃寺跡確認調査報告』(財)千葉県文化財センター 1984
- 7 今泉潔・山口典子編『市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター 1989
- 8 大村直『下鈴野遺跡』(財)市原市文化財センター 1987
- 9 河上邦彦編『史跡 牧野古墳』広陵町教育委員会 1987
- 10 菊池真太郎・豊田佳伸『千葉市誉田県立コロニー内遺跡』(財)千葉県文化財センター 1976
- 11 木下亘「須恵器」『斑鳩 藤ノ木古墳』－第1次調査報告－斑鳩町 1990 (196-205頁)
- 12 郷堀英司『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』(財)千葉県文化財センター 1984
- 13 (財)千葉県文化財センター編「六通神社南遺跡」『千葉県文化財センター年報』No. 14 (財)千葉県文化財センター 1984 5 (財)千葉県文化財センター編『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3) (財)千葉県文化財センター 1987
- 15 柴田龍司『千葉市辺田山谷遺跡』(財)千葉県文化財センター 1986
- 16 白井久美子「東国後期古墳分析の一視点」－鉄鍬から見た千葉市生実・椎名崎古墳群－『研究紀要』10 (財)千葉県文化財センター 1986 (185-215頁)
- 17 須田勉「古代地方豪族と造寺活動」－上総国を中心として－『古代探叢』早稲田大学出版部 1980 (433-474頁)
- 18 高田博他『千原台ニュータウン』Ⅲ－草刈遺跡B区－(財)千葉県文化財センター 1980
- 19 武田宗久・宍倉昭一郎他『上総国女坂1号方形墳』南総郷土文化研究会 1969
- 20 田坂浩・相京邦彦・上村淳一・白井久美子『千葉東南部ニュータウン8』－ムコアラク遺跡・小金沢古墳群－(財)千葉県文化財センター 1979
- 21 田中清美他『奉免上原台遺跡』(財)市原市文化財センター 1992
- 22 田中清美他『千草山遺跡・東千草山遺跡』(財)市原市文化財センター 1989
- 23 田中新史編『南向原』－上総国分寺台遺跡調査Ⅱ－上総国分寺台遺跡調査団 1976
- 24 田中新史「古墳出土の飾り弓」－鋌飾り弓の出現と展開－『伊知波良』1 伊知波良刊行会 1979 (8-30頁)

- 25 田中新史「東国終末期古墳出土の馬具」『古代探叢』 早稲田大学出版部 1980 (257-278頁)
- 26 田中新史「古墳時代終末期の地域色」－東国の地下式系土坑墓を中心として－『古代探叢』Ⅱ 早稲田大学出版部 1985 (437-475頁)
- 27 千葉市史編纂委員会「荒久古墳」『千葉市史』史料編1 千葉市 1976 (212-213頁)
- 28 永沼律朗他『上総 江子田金環塚古墳』 市原市教育委員会 1985
- 29 中村恵次・市毛勲「千葉県中原古墳群調査報告」『古代』第37号 早稲田大学考古学会 1962 (1-21頁)
- 30 中村恵次他「千葉県山武郡土気町舟塚古墳の調査」『古代』第48号 早稲田大学考古学会 1967 (17-32頁)
- 31 中村恵二・市毛勲他『市原市周辺地域の調査』市原市文化財調査報告書3 市原市教育委員会 1967
- 32 沼沢豊・田中新史『古墳時代研究』Ⅱ－千葉県市原市六孫王原古墳の調査－ 古墳時代研究会 1975
- 33 沼沢豊『千葉東南部ニュータウン1』－椎名崎古墳群(第1次)－(財)千葉県都市公社 1975
- 34 沼沢豊『成東町真行寺廃寺跡確認調査報告』 (財)千葉県文化財センター 1982
- 35 沼沢豊他『成東町真行寺廃寺跡研究調査概報』 (財)千葉県文化財センター 1983
- 36 沼沢豊編『千葉県富津市内裏塚古墳群測量調査報告書』 千葉県教育委員会 1986
- 37 萩原恭一他『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ (財)千葉県文化財センター 1986
- 38 増田精一他『牛久Ⅲ号墳調査抄報』 千葉県教育委員会 1972
- 39 山口典子他『千葉市荒久遺跡(1)』 (財)千葉県文化財センター 1989

終章 東国水域圏の地域的特質

第1節 総武と常総に見る古墳文化の二相

1 弥生時代から古墳時代へ

(1) 弥生文化の境界

弥生時代前期から中期前半にかけて、関東地方は壺棺再葬墓、東北地方は土坑墓・壺棺圏であった。中期中頃から後期前半に西方から方形周溝墓が急速に伝播・普及し、その分布域は総武の内海沿岸から香取海の南側まで達するようになると、再葬墓は中部高地周辺のみに残存するようになる。一方、香取海以東の東関東から東北地方では土坑墓・壺棺を用いる墓制一色となる。方形周溝墓の東漸と軌を一にして縄文時代以来東北地方で連続と続いていた葬法が南下し拡大しているのである。弥生時代後期後半に至っても、この図式は基本的に変わらない。方形周溝墓圏は中部高地に波及し、再葬墓の範囲がさらに狭まるが、香取海を超えることはない。ここに、香取海による弥生時代中・後期文化の壁の存在と南岸の印旛・手賀沼地域における弥生文化との接触・融合が顕在化する。

また、方形周溝墓を受容した南岸の土器は、後期にはむしろ北岸の土器の影響を強く受けるようになり、後期に再び北岸以東の影響が強まったことがうかがえる。方形周溝墓は、1隅が途切れる新しい形式に至っても香取海以北には例がなく、香取海が西方の文化波及の壁として立ちはだかっていた時代は永い。これは環濠集落についてもいえることであり、稲敷郡美浦村の木原城下層で発掘されたV字溝が唯一弥生時代中期の環濠である可能性を示すのみで、後期には香取海南岸からも姿を消している。

これに対して、総武の内海沿岸では中期から後期全般を通じて環濠集落が展開し、大規模な方形周溝墓群が築かれる。特に東岸では、後期に集落が飛躍的に拡大し、東海以西の影響が一層強まっている。

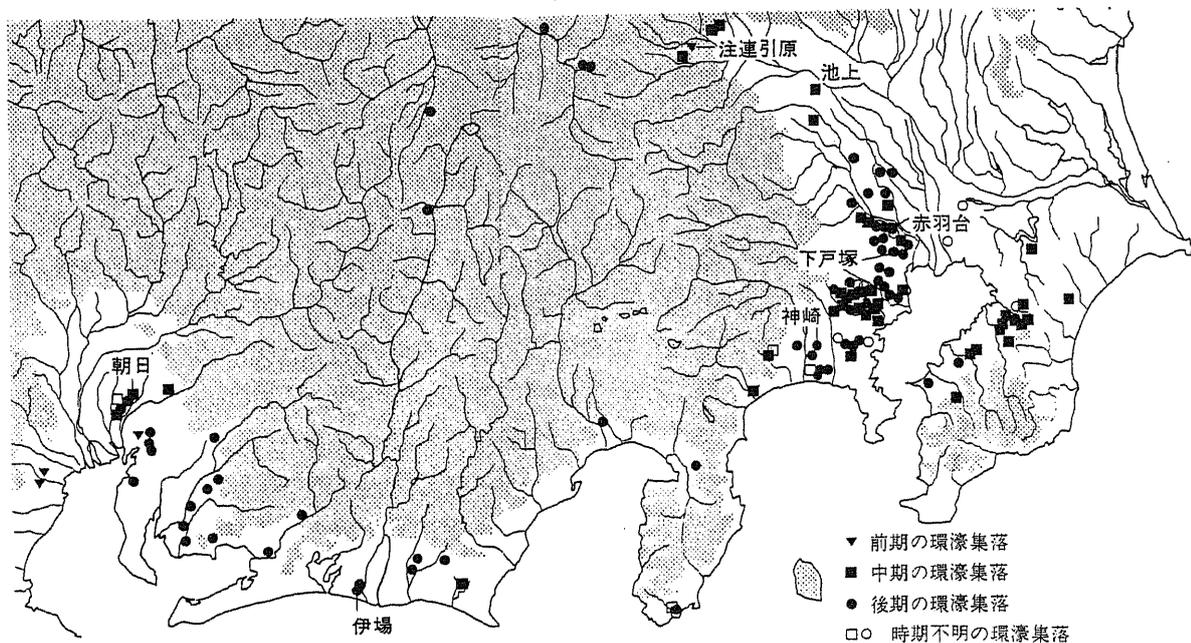


図1 東日本における環濠集落の分布(車崎1991より)

このように、弥生時代中期から西日本の弥生文化圏に入った総武の内海沿岸地域とそれに隣接しながらも弥生時代を通じて在来の文化圏を堅持した香取海沿岸の常総地域は、対照的な状況の中で古墳時代を迎えることになる。

(2) 小銅鐸分布圏の東限

総武の内海東岸における小銅鐸の集中分布は、上記の環濠集落・方形周溝墓群の分布に加えて、この地が東進した弥生文化の最終上陸地点であったことをより明確に示している。小銅鐸は、倭様化し大型化した銅鐸が弥生のムラの権威の象徴となっていたのに対し、弥生時代を通じてマツリの「鳴りもの」としての機能的な役割を維持したものと推測され、弥生文化の農耕祭祀本来の用途を伝えて分布する祭器であると考えられる。墓から玉類などのわずかな副葬品と共に出土する例は、後期の小型鏡と同様に^{かんなぎ}巫（男女を問わない）の持ち物であったことを示唆する。その分布範囲は銅鐸の東限である駿河湾を越えて総武の内海東岸に及んでいる（第1章第1節一図8）。また、栃木県小山市・群馬県新田郡に出土例があり、湾奥につながる河川（江戸川・利根川）沿いの最奥部に分布の限界があると見られ、まさに水運による分布圏を形成している。ところが、香取海を越えた例は未だ発見されていない。ここにも、墓制と同様に異文化を受け付けられない壁が存在する。弥生文化の受容度の違いは、総武の内海の西岸と東岸でも明らかで、東岸により東国色が強い。東岸の奥にある香取海以東はさらに別の世界であったといえよう。

そこには、銅鐸・環濠・方形周溝墓を必要としない世界がひろがっていたともいえる。それはなぜであろうか。香取海以東が文化的な伝統を守り得た状況を想定する必要がある。銅鐸の霊力を強化し、ムラの周囲に堀をめぐらし、有力者層のための大規模な墓を生み出した弥生文化の背景には、弥生時代中期末と後期後半の争乱があり、それは西日本全域から東海西部に及んでいたとみられる。総武の内海沿岸には直接その影響が及ぼされた形跡はなく、大型銅鐸の霊威に依存するような状況は波及していない。しかし、沿岸の一部に見られる弥生中期後半と後期集落の断絶や後期後半以降の爆発的な集落の拡大と東海系文物の流入には、西日本の争乱の影響が現れていると考えられる。中期に南関東の弥生文化が波及した香取海南岸で、後期に再び東方の影響が強まって環濠集落が消えるのもこうした状況が背景にあるとみられ、中期後半の断絶を機に元の社会に戻ってしまったといえる。

また、香取海を文化的な境界域として分布圏を形成する遺物に、弥生時代中期の有角石斧がある（図2）。特異な形態と赤色塗彩・黒く煤けて火を受けた例が多いことからマツリ用の斧である可能性が高く、儀器化した石器として注目される。従来は、西日本の銅剣・銅矛に代表される青銅製の武器形祭器と対照的に、東日本に分布する石製の武器形祭器とする見方が汎用されてきたが、東北地方で中期前半に出現した東方起源の祭器南下説（大竹 1989・1993、岡本 1999）が妥当であると考えられる。出土状況の明らかなものでは中期後半の例が最も多い。95例中61例が茨城県と千葉県に分布しており、常総型分布を示す文物のひとつといえよう。奇しくも東海道の東縁に集中しているが、現在の霞ヶ浦沿岸から市原市にかけての分布状況は、後の石枕と重なる。石材の産出地・製作地は東北部にあり、石枕よりさらに東方との交流を示すものである。本来北関東以北にあるべき石器が総武の内海東岸に集中する点は、弥生文化の東（北）進とそれを阻止しようとする縄文文化の接触の現れである（岡本 1999）といえよう。この有角石斧の分析は、縄文・弥生式土

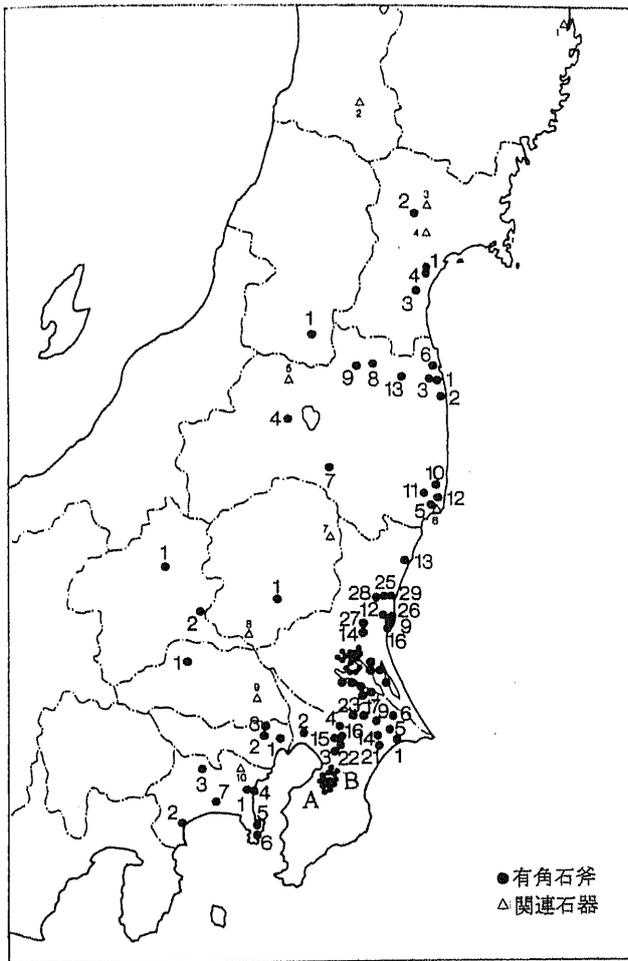
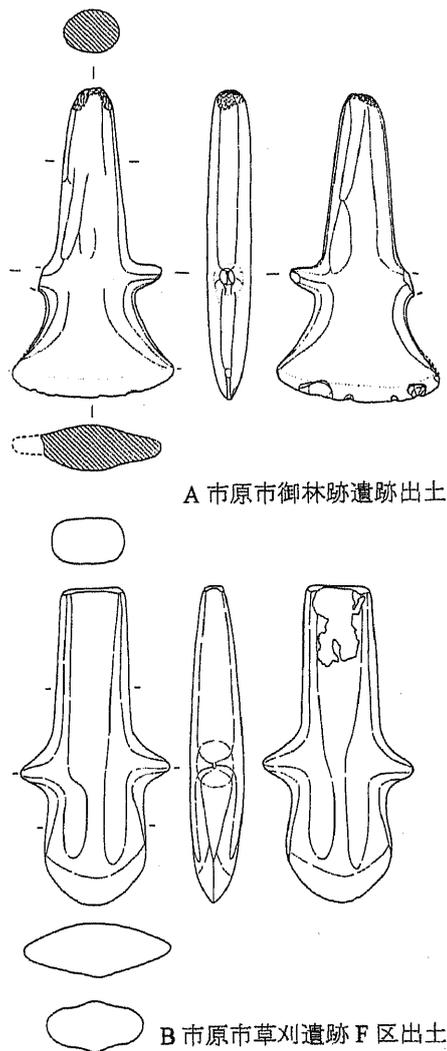


図2 有角石斧分布図（岡本1999より）



器による基層文化の追求に加えて、石器・石材による分析を行った例であり、常総地域がより東方との接点の役割を担ったのは、弥生時代中期に遡ることを示唆している。

（3）土器の流通と古墳文化の波及

西日本の文化が香取海を越えるのは、古墳時代を待たねばならない。弥生時代後期後半の香取海南岸は、未だ香取海以北の土器文化圏の影響下にある（図3）。中期後葉、常総地域に比較的斉一性をもって展開した沈線文・櫛描文・胴部縄文帯をもつ足洗式土器を基本とする土器群を母胎に、後期にはそれぞれの小地域ごとに土器文化圏を形成するようになる。後期後半には、隣接する小地域間の交流が活発化するが、伝統色は根強く弥生文化の影響を受けた南関東系の影響は希薄である。

一方、総武の内海沿岸では、東海地方を介して西から波及した土器の製作技法や形態の一部が取り入れられて南関東の土器様式を形成する。S字甕の初期汎用型式であるA類の分布は、総武の内海東岸でとどまっておろ、東海系の文物が波及する第一波の様相を象徴している。ところが、次の段階の定型化したS字甕B類の分布は、香取海を越えて一気

に東北南部に達し、浜通りを北上して福島県北部の原町市に及ぶことが確認されている⁽¹⁾。S字甕B類は古墳時代前期への変換と共に出現する型式であり、古墳の波及と軌を一にして北上している（前期古段階前半、第1章第2節一表1）。香取海北岸では、小規模な方墳が出現し、南関東系の土器群を伴うようになる。東北南部では東海以西の影響を受けた土器群と共に、小規模な前方後方墳と突出部をもつ方墳・円墳がほぼ同時に受容されている。現在のところ、香取海北岸から常陸北部ではこの段階の前方後方墳の例はなく、東北南部との間に分布の空白が生じている。この地域がより強固に伝統を固持したことも考えられるが、外来系土器の様相を見ると東北南部、特に会津盆地への古墳文化の波及は主に北陸路を経由したことがうかがえ、東西双方からの影響が墓制の変換を促したものと考えられる。太平洋側の海道を北上する古墳文化が常陸を含めて定着するのは、次の前期古段階の後半になってからである。東海西部以西の影響を受けた土器群は仙台平野に達し、会津盆地・中通り・宮城県南部に前方後円墳が築かれると、東北南部のほぼ全域が新たな土器の交流圏に入る。

これらの地域では、A類の分布圏であった総武の内海沿岸を含めてS字甕は定着せず、一過性の影響を与えるものの在来の甕に吸収されてしまうが、壺・高坏・鉢・小型器台など東海以西の影響を受けた土器群が伴に波及し、土器組成に大きな変革をもたらしている。東北起源の土器の伝統を堅持していた常総地域の土器にも、前期古段階の後半には畿内・東海系の土器の定着がうかがわれる。

（4）前期古墳にみる倭王権と総武・常総

上記のように、前期古墳は縄文文化の根強い伝統の壁を乗り越えて一気に東北南部に達している。この墓制に見る大変換は、弥生時代後期に一旦引いていた西方からの影響がより強力な倭王権の進出によって押し戻されたように見える。また、その前提には香取海をめぐる交流によって東海以西の弥生文化を周知していた蓄積があり、内的な変革の時期が熟していたためとみられる。

総武から常総の前期新段階の古墳は、主要河川の流域ごとに分布し、特に海岸線に沿った河川下流域に大型古墳が立地する。これらは東海道の本流を示し、また、ヤマトタケルの東征伝承の海路ルートと密接に関連している。すなわち、ヤマトタケルの東征路には前期の大型前方後円墳が分布する（尾張）・駿河・相模一走り水一上総・武蔵・常陸・甲斐・上野・（信濃）が網羅されており、前半は東海道沿いを進み、後半は東山道を戻るという巡路に対応する（第2章第1節一図1）。三浦半島から「走り水」を渡って房総半島へ至る間は、三浦半島側に前期古墳がないため推測の域を出ないのが現状であったが、最近になって、逗子市と葉山町にまたがる丘陵上に前期に遡る相模最大の前方後円墳・長柄桜山1・2号墳（共に全長90m級）が確認され、首長墓によって結ばれる海つ路がようやくつながった。相模最大の前期古墳が、相模湾の東端に立地していることは、相模から総武の内海に抜ける東方への路がいかに重要であったかを物語っているといえよう。

一方、倭王権の初期東国進出ルートの拠点を示すと考えられる三角縁神獣鏡の分布では、東山道ルートの利根川上流域の旧毛野国とともに天竜川下流域に集中的な分布が見られ、ここが海つ路の東国への入り口に近い拠点であったことをうかがわせる。また、その終点は近年確認された水戸市（旧茨城郡常澄村）の例から、那珂川下流域に達している（岸本

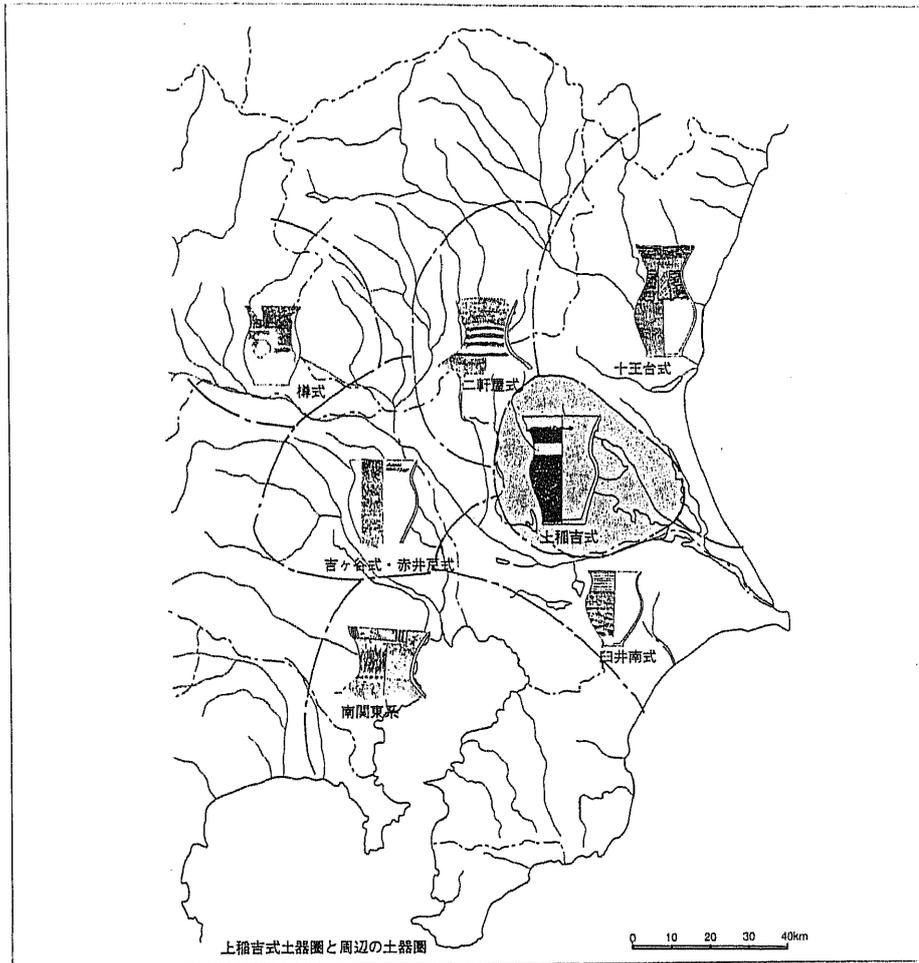


図3 弥生後期後半の上稲吉式土器圏と周辺の土器圏（霞ヶ浦郷土資料館1998より）

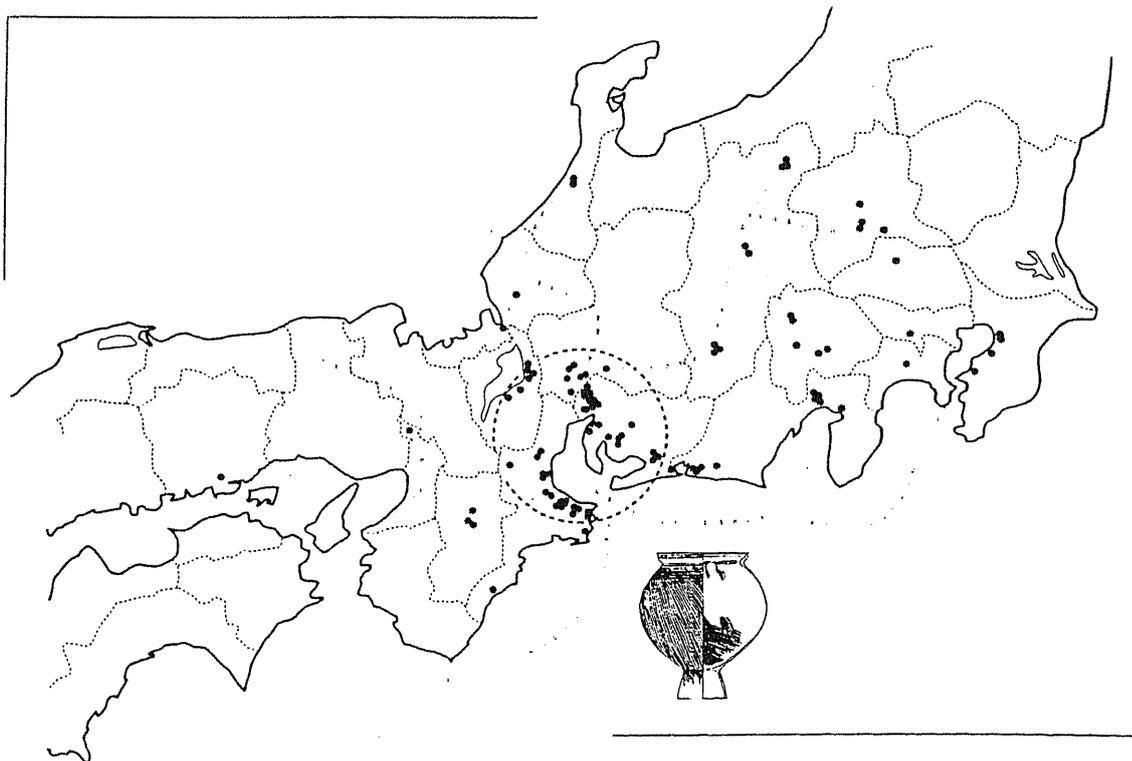


図4 S字甕A類の分布（赤塚1999より）

1992)。常総の内海（香取海）周縁にも鹿島町宮中野お伊勢山古墳等の大型前方後円墳が分布し、この地域が前期古墳文化の波及圏内に入ったことがわかる。

2 石枕と「王賜」銘鉄剣

(1) 前期から中期の2つの内海

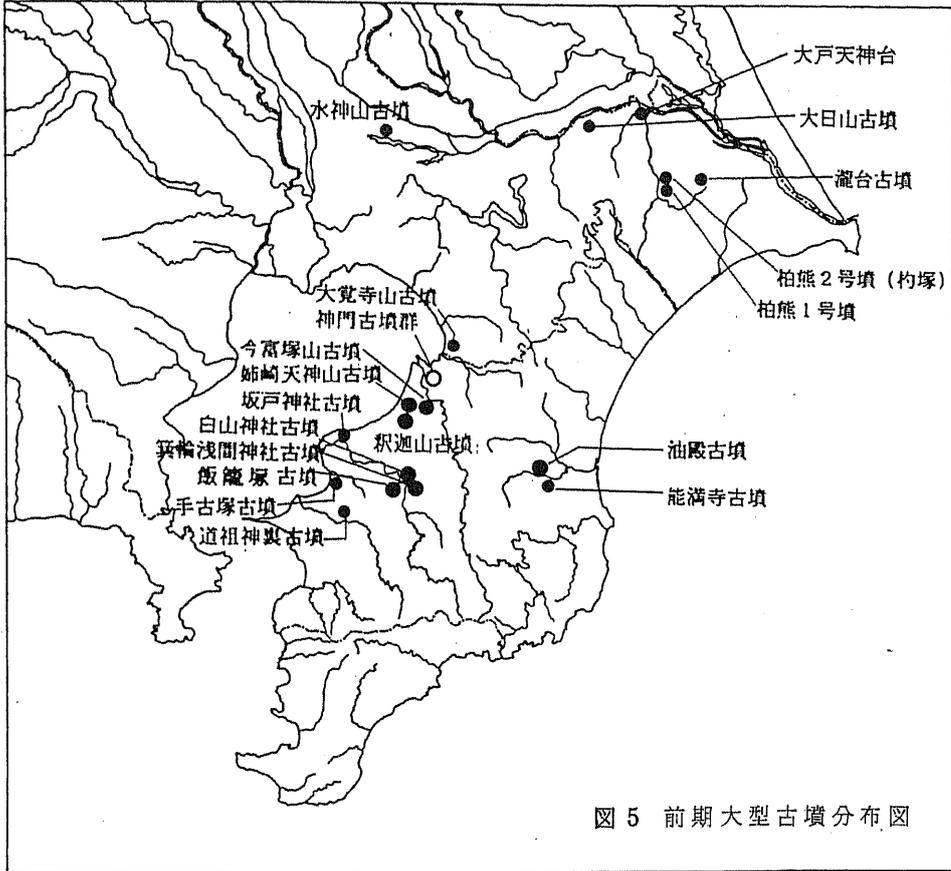
中期の総武の内海東岸は、稲荷台1号墳の「王賜」銘鉄剣によって象徴される。畿内王権と地域首長の関連がより密接になったことは大型前方後円墳の副葬品に明らかな影響が見られるが、「王賜」銘鉄剣を出土した稲荷台1号墳が直径27.5mという中・小規模の円墳で、金銅製の蝶番をつけた短甲と鉄製の胡籙金具を副葬されていたことの意義は大きい。ここでは、その前段階の様相から総武の内海東岸地域と常総地域を対比して概観したい。

図5では、房総の古墳時代前期に築かれた大型前方後円（方）墳の位置を示した。総武の内海の東岸、現在の市原市から富津市にかけての地域に前期の大型古墳が集中し、総武の内海を見下ろす海岸丘陵上と海岸平野を望む河川中流域の交通の要衝に立地している。このうち市原市釈迦山古墳と木更津市手古塚古墳が調査されており、2基とも粘土槨を埋葬施設とし、大和の布留式土器を出土した前期新段階古相の前方後円墳である。埋葬施設が発掘調査された手古塚古墳は、全長60mほどの規模であるが、三角縁神獸鏡と石製腕飾類が副葬されていることなど、当時の王権との関わりが色濃い副葬品をもつ。

この全長60m以上という規模は、全国的に見ても主要河川流域などの一定領域を統括する首長墓に見られ、被葬者の力量を示すメルクマールの1つになると思われる。図5には60m級以上の古墳を示しているが、一見して総武の内海東岸地域にその大半が集中するという現象がみられる。特に100m級ものは、実に7基中6基がこの地域に存在している。しかし、一方で注目されるのは太平洋の沿岸から利根川沿いに点々と分布する大型古墳の存在である。これらは、また別の文化・政治的な動きのルートの要衝に所在すると想定され、中期以降の動向に大きな意味をもってくる。

中期の大型古墳もやはり100m級の前方後円墳の分布は総武の内海東岸を中心に行っているが、この時期の香取海南岸には、全長124mの下総最大の規模をもつ小見川町豊浦大塚山古墳が築かれている。墳丘に三重の円筒埴輪をめぐらし、長持形石棺系の石棺を内部施設とする様子は、総武の内海東岸の木更津市の高柳銚子塚古墳、市原市姉崎二子塚古墳に匹敵し、対峙するかのような存在である。

第2節で触れたように、この2つの地域の首長墓は円筒埴輪に地域的特性を発現している。関東地方から東北南部の範囲で二次調整技法を見ると、横方向のハケによる二次調整が行われた円筒埴輪は、毛野地域と総武の内海東岸地域に集中するという傾向が見られる。これは、明らかに王権の影響が強く表れているといえる。一方、香取海南岸の豊浦大塚山古墳、北岸の茨城県石岡市舟塚山古墳には、二次調整をタテハケで行うという共通した技法が見られた。この香取海の対岸に存在する二つの大型古墳は、香取海全域を統括した二世代の広域首長墓として、独自の地盤を築いている。この地盤が石枕と立花を用いた特殊な葬制の展開を生み出し、その影響を周辺部に及ぼしているのである。



(2) 石枕と常総の内海

石枕は常総地域の中期前半を最もよく象徴する遺物であり、独自の地域圏を示す遺物として注目され、研究されてきた。

この石枕と立花は、出土地点の不明確なものが少なくなかったが、千葉市東寺山石神2号墳をはじめとする発掘調査例によって石枕と立花の埋葬施設での出土状態、他の副葬品との関係などが明らかになってきた。本稿では3章1節でその系譜と東国化の過程を分析した。石枕・立花とも常総起源のものではなく、前期の石棺造り付けのものから石棺はめ込み式の石枕はむしろ西日本に分布の中心がある。王陵の周辺では前期古段階の燈籠山古墳出土の埴製枕が、後の石枕に見られる頭部周囲の文様をもつ最古の例として注目される。前期新段階の例では、渋谷向山古墳出土と伝えられる単独の石枕があり、頭部周囲に燈籠山の埴枕と同様の鋸歯文をめぐらせている。立花の祖形となる勾玉意匠の石製葬具もこの頃の王陵周辺で用いられた碧玉製玉杖や琴柱形石製品に起源が求められる。古式の立花は、常総型石枕出現以前に天竜川以東の東国へもたらされており、その分布範囲は駿河湾の大井川下流域から毛野の利根川中・上流域を経て、常陸の那珂川下流域におよんでいる。この範囲は弥生時代後期から連綿と続いていた交流圏であり、石枕と立花が結びついて特殊化する前の文化的・政治的結びつきの強い地域の範囲である。ここで行われていた立花を用いる葬送儀礼が、常総型石枕出現の母胎となったわけである。

常総型石枕は現在の佐原市から成田市の利根川沿に最も集中し、次いで成田市から八千代市にかかる印旛沼の南側に集中しており、まさに香取海南岸域の地域的特性を示す遺物である。また、石枕の分布に玉作り遺跡の分布状況を重ねると香取海の周辺で祭祀用の玉を作っていたと思われる集団の位置と石枕の分布がほぼ重なる。この分布状況をさらに古墳時代後期にも重ねると、筑波石を使った箱式石棺を内部主体とする群集墳がやはりこの地域にオーバーラップしてくる。石製品、あるいは同じ石材をめぐって、古墳時代中期に限らず、その後も連綿とした地縁的・政治的関係をもった集団が香取海周辺に存在したことが推定される。

一方、総武の内海沿岸にも常総型石枕が波及している。中期の早い段階に、常総型石枕が立花孔をもって定型化して間もなく波及し、上海上国造の本拠地（古代の海上郡）と推定される姉崎古墳群中期の主墳である姉崎二子塚古墳にも出土している。しかし、点的な分布にとどまり、一時的にもたらされた一過性の葬具であったようである。かつて、甘粕健氏はこの例をもって、上海上国造と下海上国造による海上連合説（甘粕 1980）を唱えたが、二子塚の石枕は、側面に直弧文をもつ特殊な製品で、常総には例がない。石材も香取海沿岸の滑石とは大きく異なる。また、最も石枕の集中する地域は、古代の印旛郡・埴生郡と香取郡の北西部にあたり、下海上国造というよりは印旛国造の領域として比定されている地域である。しかし、いずれにしても2つの内海の有力首長間には交渉があり、その南限が上総の北西部に当たる上海上地域であったことを示しており、このことは後期以降の両地域の交渉に影響している。

中期後半になると、石枕をもつ古墳に鉄製の短甲が出土する例が出現する。墳丘径約25mの我孫子市金塚古墳である。金塚古墳の短甲は、稲荷台1号墳と同様の横矧板鋌留式で、ほぼ同時期の古墳と考えられ、この短甲をもった例が出現した時点で石枕の数は減少する方向に進んでいく。その次の段階には石枕の制作は激減し、滑石製祭器の終息と共に一気

に途絶えている。この現象と金塚古墳の被葬者の短甲捍領は無関係ではないと思われ、極めて強い王権の影響が香取海南岸にもおよび、中・小規模の円墳被葬者を地方首長の下部組織に組み込んだことを意味している。それまで香取海周辺で非常に強く結びあっていた地縁的・政治的な結び付きが崩れて、集団が再編成されていく状況が考えられる。

(3) 「王賜」銘鉄剣と総武の内海

中期の甲冑・胡籥を出土した古墳の分布は、総武の内海東岸と香取海南岸を主な分布域としているが、前者に分布の中心がある。また、ほとんどが円墳でしかも20～30mの小規模なものに集中している。この20～30mクラスの円墳が稲荷台1号墳と同様の定型化（定式化・統一化）した横矧板鋌留式短甲をもつということに着目すると、その型式が配られた段階で、配布される層が広がっていることがわかる。このことは、田中新史氏が指摘されているが（田中 1975）、定型化した横矧板鋌留式短甲が配られた時期に鉄製短甲の配布のピークがあったことが推定される。これは、いわゆる倭五王時代、倭王権が中国・朝鮮半島に対して積極的な外交政策を行ない、海外進出を計った政治的状況を反映しており、国内の軍事力を増強するにあたって各地の中・小規模の首長を組み入れ、軍事集団として再編する動きをもっていたことを示している。これはまた、『日本書紀』崇神紀から皇極紀にみえる、王権の外交使節や軍事指揮官として多数の地方豪族が派遣された記事に反映されているといえよう。地方の豪族層が直接中央へ出仕して、なんらかの形で中央の「王」に仕える状況は想像に難くない。稲荷台1号墳出土鉄剣の「王賜」の文字は、被葬者がこうした国内の状況の中で新たに中央の勢力によって組織化された武人の一人であったことを示してくれたといえる。稲荷台1号墳では短甲の他に鉄製の胡籥金具も出土しており、中規模ながら特別の扱いを受けたことがうかがえ、被葬者は横矧板鋌留式短甲を配布された中・小規模円墳の被葬者の中でも破格の扱いを受けるような功績を残した人物であったことがわかる。

中期後半は、再び総武の内海東岸に様々な情報と物資が押し寄せた時期でもある。須恵器の普及、鉄製利器の定着、大型甗とカマドの出現など先進地域の技術と生活様式がいち早く波及し、香取海沿岸より一足先に渡来系文化による変革の時代を迎えることになる。情報の基地の最先端として、常に新しい波の影響を受け入れる土壌が形成されるゆえんである。

引用・参考文献

- 1 赤塚次郎「土器の移動からみた社会の変化」『図説 古墳研究最前線』（別冊歴史読本第24巻第23号） 新人物往来社 1999（130-135頁）
- 2 甘粕健「養老川水系の古墳分布と山王山古墳の歴史的性格」『上総 山王山古墳』市原市教育委員会 1980（196-217頁）
- 3 石川日出志「南関東の弥生社会展開図式・再考」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』 東京堂出版 2000（739-760頁）
- 4 大竹憲治「有角石斧小考」『史峰』第14号 新進考古学同人会 1989（32-39頁）、『東北考古学論攷第2』（再録） 纂集堂 1993
- 5 岡本孝之「足洗型石器の研究」『考古学雑誌』第84巻第3号 日本考古学会 1999（1-53頁）

- 6 小田野哲憲「東北北部三～四世紀の様相」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』 東京堂出版 2000 (798-812頁)
- 7 車崎正彦「東日本の環濠集落」『邪馬台国時代の東日本』国立歴史民俗博物館編 六興出版 1991 (38-44頁)
- 8 白井久美子「房総の古墳時代研究と稲荷台1号墳」『千葉史学』第15号 千葉史学会 1989 (32-43頁)
- 9 滝口宏・市毛勲・田中新史・白石太一郎・永嶋正春・平川南・三辻利一『「王賜」銘鉄剣概報—千葉県市原市稲荷台1号墳出土—』吉川弘文館 1988
- 10 田中新史「五世紀における短甲出土古墳の様相」—房総出土の短甲とその古墳を中心として—『史館』第5号 史館同人 1975 (80-103頁)
- 11 千葉隆司編『霞ヶ浦沿岸の弥生文化』—土器から見た弥生社会— 霞ヶ浦町郷土資料館 1998
- 12 栃木県立那須風土記の丘資料館 『弥生人のくらし』—卑弥呼の時代の北関東— 栃木県立那須風土記の丘資料館 1996
- 13 沼沢豊「東国の石枕」『古代探叢』早稲田大学出版部 1980 (207-220頁)

第2節 坂東的世界の萌芽

1 後期・終末期古墳にみる地域的特性

前期から中期の東国には、倭王権との交渉によって新たな文物と技術を受容し、各地に独自の勢力基盤が築かれた。その中で総武と常総は海上の路の拠点に展開した地域であった。一方、内陸の路である東山道沿いには毛野の勢力が一大拠点を形成している。第2章の前期古墳の展開で瞥見した大型前方後円墳の中心地はこの内陸の拠点にあり、中期の東国最大の前方後円墳が築かれたのもこの地域である。海道・内陸の両勢力はそれぞれ系譜の異なる文物を受容しており、倭王権や東海以西の勢力とも独自の交渉を行っていたと考えられる。しかし、一面では河川交通を介して緩やかな結びつきをもっていたこともうかがえる。第3章で触れた中期の滑石製祭祀具が両地域で他に類を見ない発展をすることも根底にある文化的紐帯の現れと考えられる。このように両地域は、文化的基盤を共有しながら内陸と海道に対峙する格好で独自の地域圏を形成しているといえよう。

後期になると、北武蔵などの新興の地も加えて内陸・海道の各地に大型前方後円墳が林立し、西日本とは大きく異なる様相を呈してくる。すなわち、畿内および西日本各地で大型前方後円墳が造られなくなる6世紀以降に、依然として大型前方後円墳の造営を行い、その規模と数で畿内を圧倒するのである。相模・武蔵・上総・下総・安房・常陸・上野・下野からなる後の板東八国に相当する地域で、6世紀後半以降に築かれた100m以上の前方後円墳は、畿内の2倍以上に達している。それらは畿内の大王や有力豪族の墓に匹敵する規模をもち、上野・高崎観音塚古墳・綿貫観音山古墳、北武蔵・さきたま將軍山古墳、上総・金鈴塚古墳などの90～100m級の前方後円墳では、王族や中央の有力豪族の墓に迫る豪華な副葬品が出土している。

この後期大型前方後円墳の造営に見える板東の特異性は、倭王権の東北進出を背景とした政治的・軍事的基盤としての重要性によるところが大きい。また、板東各地の豪族がそれぞれ中央の有力豪族と結んで一定の領域を支配した構造を反映したものといえよう。しかし、その消長については内陸と海道で様相に違いが見られる。内陸の拠点である上野では後期大型前方後円墳が小地域に分散して万遍なく分布し、それぞれ核となる古墳の規模も拮抗している。ところが、終末期の大型古墳は総社古墳群に集約され、上野の頂点に立つ首長墓が現れる。これに対し、総武・常総では大型前方後円墳を築いた新旧の勢力は、再編されながらも後の郡単位に近い小地域内に終末期の大型古墳を造営しているのである。両地域に挟まれた下野・北武蔵では、特定の地域に後期の大型前方後円墳が集中し、終末期の拠点に再編される点でより上野に近い様相を示している。これは、文献に見える上野・下野・武蔵の大国造と上総・下総・常陸の小国造の様相を示唆する状況としても注目されてきた。

また、後期の代表的な埋葬施設である横穴式石室の受容と展開にも内陸と海道では相異がある。上野はその初源から畿内色が強く、特に大型古墳に一貫して畿内の直接的な影響が見られる。後期後半の石室の大型化→巨石化→切石積という中央の王族・有力豪族墓の変遷が大型古墳に反映され、それに応じた石材の調達・石工技術が導入されたことがうか

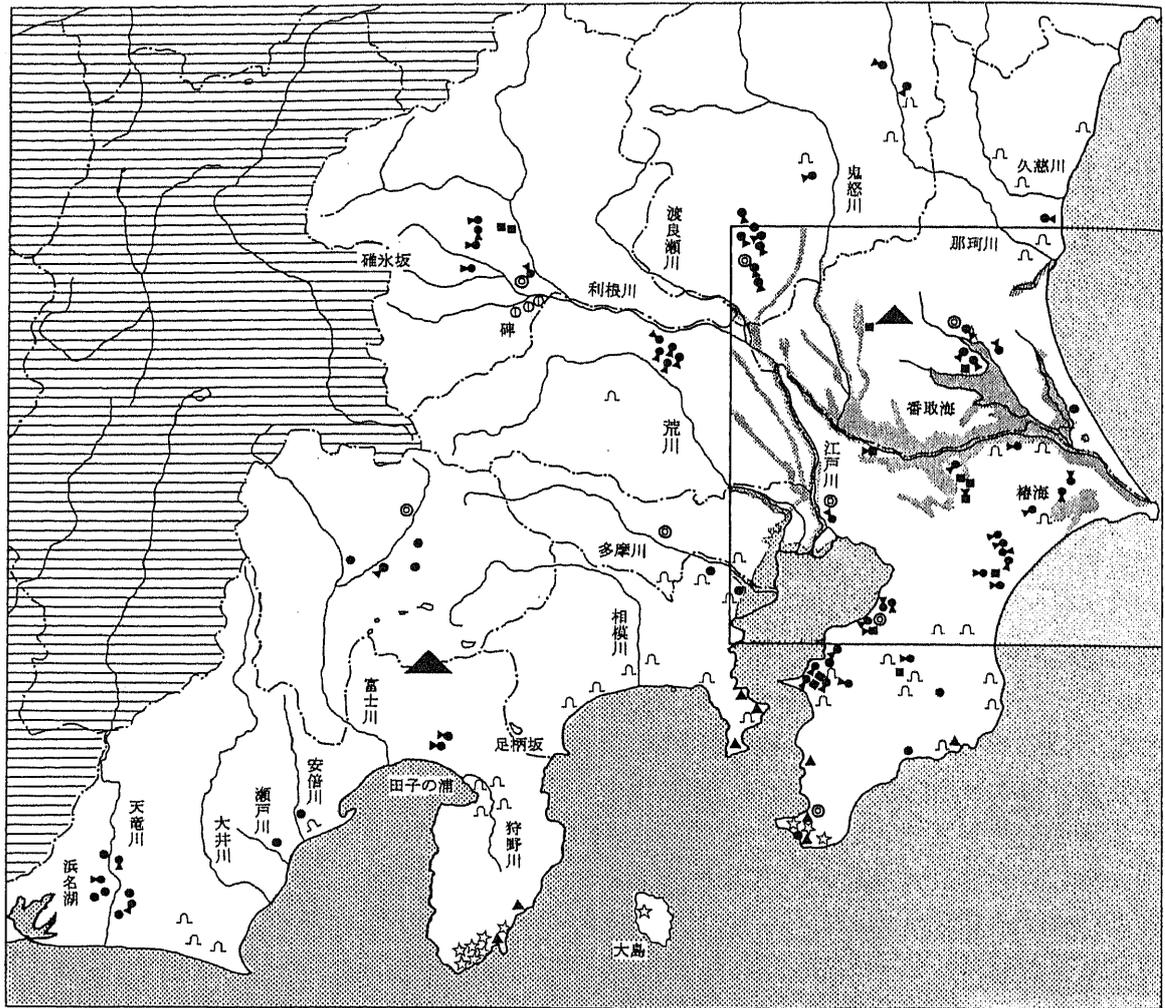


図1 東国（遠江以東）の後期・終末期主要古墳
 〽 横穴墓 ⊙ 国府推定地 ☆ 祭祀遺跡 ▲ 海蝕洞穴
 ♪ 前方後円墳 ▩ 前方後方墳 ● 円墳 ■ 方墳

がえる。総武・常総の横穴式石室もこの流れに沿った畿内の影響を受けているが、その様相は多様である。大型前方後円墳に採用される横穴式石室には、長大な無袖型・片袖型、片岩板石組、胴張り型など在地の石材を生かした型式や地域色の強い型式が見られる。

また一方では、石材の流通を核とした地域間交流が石室の型式にも影響を与えている。筑波石の流通圏では、板石組の横穴式石室・箱式石棺・石棺系横穴式石室が広く採用されるが、板石組横穴式石室のなかに、玄門をコの字状やL字状に切り抜いた板石で構成したものがあり、特徴的な分布を示す。石材の産地付近では、つくば市平沢古墳群に3例、山口古墳群に1例、L字型の板石を2枚組み合わせさせた玄門をもつ石室がある。同様の石室は約50km離れた香取海南岸の佐原市又見古墳にあり、コの字状の2枚の板石から成る玄門をもつ。さらに、筑波から約60km西の行田市小見真観寺古墳に一枚石を方形に切り抜いた玄門をもつ石室が存在する。小見真観寺古墳の石材は緑泥片岩であるが、全長112mの前方後円墳に特異な板石組石室が採用されている背景には、北武蔵の一勢力と香取海水域圏との結びつきがうかがえる。また、礫石・緑泥片岩の流通をめぐる総武の交流圏にも、北武蔵が関わっている（序章第2節）。このように、総武・常総の後期・終末期古墳の様相は内陸に比べてより多元的であるといえよう。

また、常総地域では、後期になると小規模な帆立貝形の墳形をもち、墳丘の裾部に箱式

石棺の埋葬施設を設置した独特の古墳形式が出現し、香取海沿岸を中心として現在の涸沼川から鬼怒川、古利根川に及ぶ水域圏に分布する。これらの規模は、20～30mの小規模なものが大半を占め、通有の群集墳では中規模の円墳に相当し、非常に短小な前方部をもつ。列島規模で行われた前方後円墳集成で、千葉県に全国で最も多くの前方後円墳が存在し、その数が倭王権の本拠地である奈良県の2.5倍、京都府の5.5倍に達したというデータは、このような後期の小規模前方後円墳の築造に起因するといえる。常総系の小規模な前方後円墳は、横穴式石室を埋葬施設とするものを含めると下野にも分布するが、上野には及んでいない。この常総型古墳の被葬者群が後期の常総勢力の中核を成しており、領域内は素より、周辺地域に対する優位性を指標する墳形として小規模な前方後円墳を用いたものと思われる。

常総型古墳の出現とほぼ同時に最下段の極端に低い下総型円筒埴輪が香取海南岸を中心に盛行する。後期後半になると常総型古墳・下総型埴輪ともに南下し、石枕と同様、上総北部の養老川下流域に達する。倭王権の東北進出という東方への動きの中で、常総地域の文化が再び南下しているのは、常総の勢力が再編成されて拡大したことが考えられるが、この時期は上総の拠点にも新旧の勢力が展開しており、両地域の接触・交流が再び活発化したことを反映したのもであろう。東山道の拠点である上野が畿内勢力の影響を一元化して次第に纏まりを示すのに対し、総武・常総はあくまで二極構造を崩さず、中央からの直接的影響・拠点的介入を受ける窓口とそれに対する在来勢力という構図は終末期まで変わらない。

2 坂東的世界の予察

弥生時代から古墳時代の関東地方を分析するに当たって、水域に着目したのは、今日とは大きく異なる地理的状況にあった。また、古代の交通は主に水運が用いられ、弥生文化・古墳文化の東漸、また東北文化の南下も水運によるところが大きい。特に総武の内海（東京湾）・香取海という2つの広大な内海は、関東地方を網の目状に走る河川を通じて新たな情報を発信する重要な水域であったと考える。すべての情報はここから流れ、またこれを超えてはじめて伝わったのである。従来の古墳時代の分析は、河川の流域を基本とした領域設定によって行われた傾向が強い。しかし、さらに広範な地域間交流を捉えるには、陸上の領域区画ではなく、それらを結ぶ水上の道が必要になる。古代官道の設定以前では、日常的な物資の流通路が地域を結んでおり、流通路を共有することによって広域の交流が可能であった。首長墓を造営するために東京湾や香取海を渡って石材が運ばれたという推論は、本論で扱った様々な文化の共有によって示される広大な水域の首長間交流を背景としている。

一方、古代の史料には陸奥の国に派遣された板東の騎兵に関連する記事があり、『続日本紀』天平9（737）年四月戊午条では常陸・上総・下総・武蔵・上野・下野六国の騎兵一千人が多賀柵に動員されたことが見える。このような史料は、古墳時代後期に遡って騎馬軍団の存在した可能性を示唆するが、総武・常総についていえばその証左は希薄である。古墳の副葬品に占める馬具の割合は低く、千葉県では約800基の古墳が調査されているな

かで馬具を出土した古墳は76例に過ぎない。埼玉県は58例、茨城県は60例、神奈川県は61例にとどまり、405（古墳出土例は306）の出土例がある群馬県は別格としても、約200例の静岡県、100例に及ぶ栃木県に比べても少ないといえる。古墳時代の騎馬・馬匹の状況は、板東のなかでも上野・下野と総武・常総では大きく異なると考えられる。

総武・常総では、5世紀中頃から後半の古墳に馬具の副葬が始まるが、分布状況は拠点的でわずか3例にとどまっている。総武の東岸では木更津市鹿島塚6号墳に木芯鉄板貼輪鏡・素環雲珠・辻金具、香取海南岸では印旛郡印旛村吉高浅間古墳と佐倉市大作31号墳に鉄製楕円形鏡板付轡の出土例がある。鹿島塚6号墳・吉高浅間古墳にはTK208～23型式の須恵器が伴っており、大作31号墳例の上限も同様の時期であると考えられる。いずれも径15～25.5mの小規模な円墳で、大型古墳の副葬例は不明である。大作31号例は馬に装着された状態で出土した馬の埋葬例でもあり、鞍の座金具は蹴彫文様をもつ金銅製品であった。これらは、この時期の短甲・胡籙金具出土古墳と同様、特定の小規模古墳に出土している点が被葬者の性格を表している特徴的である。これよりやや新しい時期の副葬例は、香取海北岸の霞ヶ浦町富士見塚・玉造町三味塚古墳の大型前方後円墳にあり、いずれも金銅装の特別に飾られた馬具である。6世紀前半代も飾り馬具が前方後円墳のみに副葬される状況が続き、普及しない。また、この時期は前方後円墳自体の数が少なく、倭王権の影響力も希薄である。実用的な馬具が普及して中小規模の古墳に副葬されるようになるのは、6世紀中葉から後半代にかけてのことであり、ほぼ同時に群集墳の形成が始まる。倭王権が下部構造の掘り起こしを始めたことを反映するものであろう。群集墳においても馬具の副葬率は低く、第4章第1節で扱った下総南部の千葉市生実・椎名崎古墳群では、分析の対象とした135基の後期～終末期の古墳のうち、馬具を副葬した例は2基のみである。武器の保有率が8割を超える古墳群にあって、極めて低い数値である。また、香取海南岸の成田市公津原古墳群では、調査した64基のうち馬具の副葬例は4基であった。いずれも鉄鎌の保有率が高く、生実・椎名崎古墳群では7割に達しており、弓矢を装備した歩兵を中心とする武装集団であったと考えられる。現在のところ考古資料からの実証は困難であるが、地理的環境から言えば、水運によって移動する軍団の編成が想定されよう。

一方、東山道の馬匹文化は明らかに先行し、その初源は4世紀後半代に遡り、総武・常総とは約1世紀の開きがある。最古の馬の埋葬例は山梨県八代郡中道町の前期大型古墳に隣接した東山2号墳、甲府市塩部遺跡3号墳にあり、いずれも方墳の周溝から馬歯・馬骨が出土し、東山2号墳では銅鎌・銅環・鉄製農具・S字甕・有段口縁壺が伴出している。中期前半の半島系渡来民による本格的な馬生産には、彼らの故地の風土に似た科野・甲斐の寒冷地山岳地帯が選ばれたと考えられ、積石塚、合掌形石室によってその系譜が跡づけられる。特に積石塚の分布は、東山道の特徴づけるものであり、科野・甲斐と毛野を結んでいる。

科野では中期中頃に大型古墳の分布が北部から伊那谷を中心とする南部に替わり、馬の埋葬例が南部に集中することから馬生産の中心地となったことがうかがえるが、北部の善光寺平周辺も古墳時代を通じた馬具・馬葬分布の拠点であり、科野に倭王権が直営する列島最大の牧が置かれていたものと思われる。これを背景に、6世紀後半代には広く東国に本格的な馬生産が拡散したことが推定され、北群馬郡の榛名・赤城山麓では牧跡が発見されている。毛野（群馬・栃木）の馬具出土数は、このような東山道の馬匹文化の波及を反

映して、総武・常総を圧倒しているものといえよう。佐倉市大作遺跡の馬葬例は、5世紀後半代に常総へ馬匹が波及した可能性を示唆するが、きわめて特殊な例で周辺に受け継がれた形跡がないため、常総の地に馬生産が定着するのは古代以降であると思われる。また、馬による移動・輸送がにわかに波及したことを示す資料も見られないことから、水運による交通が主体を占めていた地域であろうと考えている。

古墳時代終末期には、倭王権と中央の有力豪族の確執をめぐって内部に波乱が生じる。倭王権の東北進出の先鋒部にあつて軍事力を蓄積していた常総地域をはじめとする東国の諸勢力は、東北遠征に地の利を得てこの期に地盤を固めていったものと見られる。東国最大の終末期方墳である竜角寺岩屋古墳は、その象徴的な記念碑であったといえよう。ここに至って、常総の首長墓は初めて上野の首長墓の規模を超えるのである。奈良時代には、これらの東国の諸勢力が板東諸国として東北へ侵攻・駐留して律令国家の東北経営に重要な地位を占めるようになるが、総武・常総の海道の勢力は派兵数・物資の調達においても東山道の勢力に比肩している。

後期以降の倭王権とのつながりでは、総武・常総の首長層が王権の設置した名代・子代などの任についていることが注目されるが、本論で検討した様相からは在地の支配体系は王権の治外にあつた可能性が高い。文献研究で検討されているように、これらの地域の首長層は在来の領域支配者であると同時に王権の私有民となつて部民も統率することになり、結果的には領域内を一元的に支配しているといえる。律令国家形成時代には中央の管理下に置かれたが、やがて律令体制が変質すると各地に武士団が組織されたのは、古墳時代後期以来の在地支配体制が確立していた地にあつては必然のことであつたといえよう。

平安時代中期に遺領をめぐって起こつた平将門の乱は、東国の独立を計る反乱に発展する。この乱を契機に列島規模で武士団が争う時代がおおよそ250年続き、ついに成立した武家による鎌倉東国政権は、総武と常総の合体した勢力が東山道の勢力を取り込んで樹立したと言われており、まさに総武の内海と香取海の勢力が時代を変革したといえる。東国武家政権の基盤は、倭王権東北進出の前進基地として軍事力を蓄えるとともに、固有の文化を堅持して地域支配体制を確立した古墳時代に形成され始めていたと考える。

引用・参考文献

(著者五十音順)

- 1 霞ヶ浦町遺跡調査会編『風返稻荷山古墳』 霞ヶ浦町教育委員会 2000
- 2 群馬県古墳時代研究会編『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』群馬県古墳時代研究会 1996
- 3 白石太一郎「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集—東国における古墳の終末— 国立歴史民俗博物館 1992
- 4 立本成文『地域研究の問題と方法』 京都大学学術出版会 1996
- 5 田中琢・都出比呂志編『古代史の論点4 権力と国家と戦争』 小学館 1998
- 6 宮代栄一・谷畑美帆「続・埼玉県出土の馬具—副葬品としての馬具分析の問題点—」『埼玉考古』第32号 埼玉県考古学会 1996
- 7 野口実『板東武士団の成立と発展』 弘生書林 1982

おわりに

本稿は、千葉県をフィールドに古墳時代の考古資料の調査に携わってきた成果をどのような視点で見直し、体系化するかという課題のもとに構成したものである。古墳時代という古代王権による国家の形成期を分析の対象とする場合、東アジアの古代国家形成史、あるいは列島史の中に資料を位置づけることは不可欠な作業である。また、王権の中核であった畿内地域が常に新たな動きの発信地となり、周辺地域はその影響を受ける側であったこともこの時代の特質として否定できない。しかし一方で、列島の内なる地域を分析し、資料の性格を最もよく抽出しうる歴史的基盤を求めることも欠くことのできない課題である。本稿は後者に視座をおいて、隣接し対峙する2つの内海の交流圏に資料の特性を見出すことを試みた。

1970年代以降、列島各地で盛んに行われてきた考古資料の発掘調査によって、中央の目から見た歴史書には埋没した地方の歴史が次々と明らかになっている。そこには、歴史の表層で変動する事象や事件に対して、変わることなく持続されてきた人々の営みがある。

個々の論考は、調査の過程で作成したものであり、体系的なテーマに沿って構成されたものではないが、2つの内海をめぐって東西の文化が混淆し、せめぎ合う根底にそれぞれの地域の固有性を発見することでつなぎ合わすことをめざした。各所に残った未完成な断片をつなぎ合わせるのが今後の課題である。

ミレニアム元年の今から2千年前、日本列島は未だ弥生時代中期から後期に移行する段階にあり、北九州から戦乱期特有の武器の鉄器化が急速に進んできた頃であった。一方、中国大陸でも前漢時代からの世紀末の混乱期が続いて、混沌とした中から新しい勢力と文化が生まれようとしていた。西暦千年、日本は東国政権の胎動期を目前にした藤原道長の世であった。兄道隆の娘である一条天皇の中宮定子を退けて娘彰子を中宮にのぼらせた道長は、同時に定子を一条天皇の皇后にし、「一代二后」の例を開いている。定子には清少納言、彰子には紫式部・和泉式部・赤染衛門らの才媛が侍して文才を競い、今日に王朝文化の時代を伝えるが、一方では来世に救いを求める末法思想が広まったやはり世紀末の時代でもあった。2千年紀を迎えて、19世紀に体得した現代文明の諸矛盾が噴き出し、まさに世紀末の様相が展開している。自然を破壊し、伝統的な生活・思想を破棄して、現代文明の恩恵に浴してきた地球は、今さらながら失ったものの大きさに気づきはじめたところである。人類が存続する2千年紀のために、日本列島でもそれぞれの土地と風土の原風景を見つめ直す時である。

附論 小規模円墳の被葬者像

—ブリッジ付き円墳の検討—

1 はじめに

円墳の中に周溝の一部が掘り残され、陸橋部状に途切れた周溝を有するものがある（以下「ブリッジ付き円墳」とする）。これらは、比較的小規模で低墳丘のものも多く、全く墳丘を削平されてしまった例も多い。このため、弥生時代後期の陸橋部を有する方形周溝墓との対比から、古墳時代の円形周溝墓という性格の曖昧な名称を与えられた例が少ない⁽¹⁾。

しかし、ブリッジ付き円墳は、古墳時代初頭から後期の横穴式石室採用期まで築造されており、東北南部から九州のほぼ列島全域に報告例のある古墳である。群集して営まれる地域もあり、また継起的に築造されている地域も見られる。それらの事例は、ブリッジが単に古墳築造の際の作業用通路として掘り残され、その機能を終えた後も撤去されずに残存しただけのものではなく、古墳の外部施設として意識的に設けられたものであることを示している。また、個々の事例を見ると、ブリッジが葬送儀礼に係わる特別の場として機能したことを予測させるものが少なくない。

古墳を検討する際には、全体的な把握が必要であり、墳丘・内部主体の不明なものが多い点でブリッジ付き円墳は資料的限界が大きいことは否めないが、その形態だけを取り上げても、尚注目される点がいくつか挙げられることから、ブリッジという外部施設をもつ円墳として通常の円墳とは切り離して検討してみることにした。

2 系譜と類別

(1) 墳形の系譜

ここでいうブリッジ付き円墳は、ブリッジの幅が周溝の幅とほぼ等しいか、超えないものを指している⁽²⁾。ブリッジ部分の周溝幅が顕著に広がる形態は含まない。また、ブリッジ前面に溝を有するものも含まない。それらは、墳丘部分の形状によって、造り出し付き円墳、および帆立貝式前方後円墳のいずれかの一類型に含まれるものとする⁽³⁾。帆立貝式前方後円墳、造り出し付き円墳は、前方後円墳の出現、および造り出し付設によって出現したもので、前方後円墳の系列下に捉えられる墳形であるが、ブリッジ付き円墳は、あくまで円墳の一類型であり、ブリッジ部分が発達することもなく、何らかの規制のもとに停滞した墳形で一貫したものとして捉えられる。

低墳丘で円形の溝をめぐる墓は、既に弥生時代後期から存在するが、ブリッジ付きの調査例は極めて限られている⁽⁴⁾。兵庫県赤穂市原田中遺跡の墳丘墓は特殊器台・装飾壺・大型の高杯を出土した後期後半に位置づけられる例として注目される。墳丘墓には対向する2カ所にブリッジがあり、円丘の直径は19 m、墳丘には貼石が施されていた。また、瀬戸内沿岸の弥生終末期から古墳出現期には円丘部に突出部を付設した形態のものがあり、ブリッジ付きのもの系譜的につながる可能性がある。岡山県楯築墳丘墓、兵庫県西

条 52 号墓、徳島県萩原墳墓群 2 号墳、同奥谷 2 号墳、同曾我氏神社 2 号墳が挙げられる。これらは、突出部の幅が狭く一定である点は、ブリッジ付き円墳と類似するが、突出部が前方に伸びる点で、前方部に発展せずに終わる同類の施設を円丘部に付設したものの中でも、枝分れした異なる類型であると考えられる。

また、熊本県下益城郡塚原古墳群では、一辺の中央にブリッジをもつ低墳丘の方墳がブリッジ付き円墳に先行して営まれ、ブリッジ付き円墳出現につながる前段階の墳墓として捉えられるが、普遍的な現象とは言い難い。

一方、奈良県天理市の柳本古墳群には、行燈山（崇神陵）古墳、渋谷向山（景行陵）古墳という前期の王陵級の前方後円墳に数カ所のブリッジ（渡土堤）が存在し、渋谷向山では調査によって後円部北東のブリッジで葺石が検出され、築造時のものであることが確認された。最近の調査では桜井市箸墓古墳の後円部南東にも葺石を貼ったブリッジが検出され、大和では巨大な前方後円墳の成立時から周溝にブリッジが付設されていたことが窺える。しかし、周辺にブリッジ付き円墳の調査例がないため関連を確認できない。後述するように、前方後円墳のブリッジに直接的な関連が推測される例もあり、ブリッジ付き円墳の系譜については、時間、地域によって異なる多様な背景を考える必要がある。

（2）墳形の類別

ブリッジ付き円墳の形態的要素は、単純で、それ自体の型式変化はほとんどなく、むしろある段階以降形骸化するという特徴が見られるが、ブリッジの形態、数、内部主体との方向性から以下のような類型を設定することが可能である（図 1）。

- A 周溝の 1 ヶ所が直線的に掘り残されてブリッジとなる
- B 溝の 1 ヶ所が緩やかに立ち上って掘り残され、ブリッジの両側が丸く納まる⁽⁵⁾
- B' B の周溝の両端が極端に先細りとなる
- C 周溝は全周するが、一部分が特に高く掘り残されて浅いブリッジを形成する⁽⁶⁾
- D 周溝の 2 ヶ所が直線的に掘り残される
- E 周溝の 2 ヶ所が緩やかに立ち上って掘り残され、ブリッジの両側が丸く納まる
- F 横穴式石室の前庭部両側に 2 ヶ所ブリッジがある

また、内部主体の方向との関係には、

- 1 ブリッジと内部主体の主軸の方向が一致するもの
- 2 ブリッジと内部主体の主軸の方向が直交、或いは角度をもって一致しないもの
- 3 横穴式石室の背面にブリッジをもつもの

があり、A～F と 1～3 の組み合わせによるいくつかの類型が見られる。

それらの事例を示したのが図 1 であるが、直葬系、あるいは堅穴式石室、石棺系の内部主体をもつものは、ブリッジの主軸線上やそれと平行する位置に内部主体を設けるものと、ブリッジの主軸に直交して設置するものが大半を占め、ブリッジを意識した内部主体の配置が窺える。但し、墳丘裾部に内部主体を置く常総型の後期古墳には、ブリッジをはずした配置も見られる（図 1-10）。円墳のブリッジは、横穴式石室の採用、定着によって方向、性格が大きく変化すると考えられ、両者を区別して扱う必要がある。特に横穴式石室が墳丘裾部に開口する F 型になると、ブリッジはむしろ石室によって規制された位置に設けられるようになり、それ以前の段階に見られたような性格が失われるようである。こ

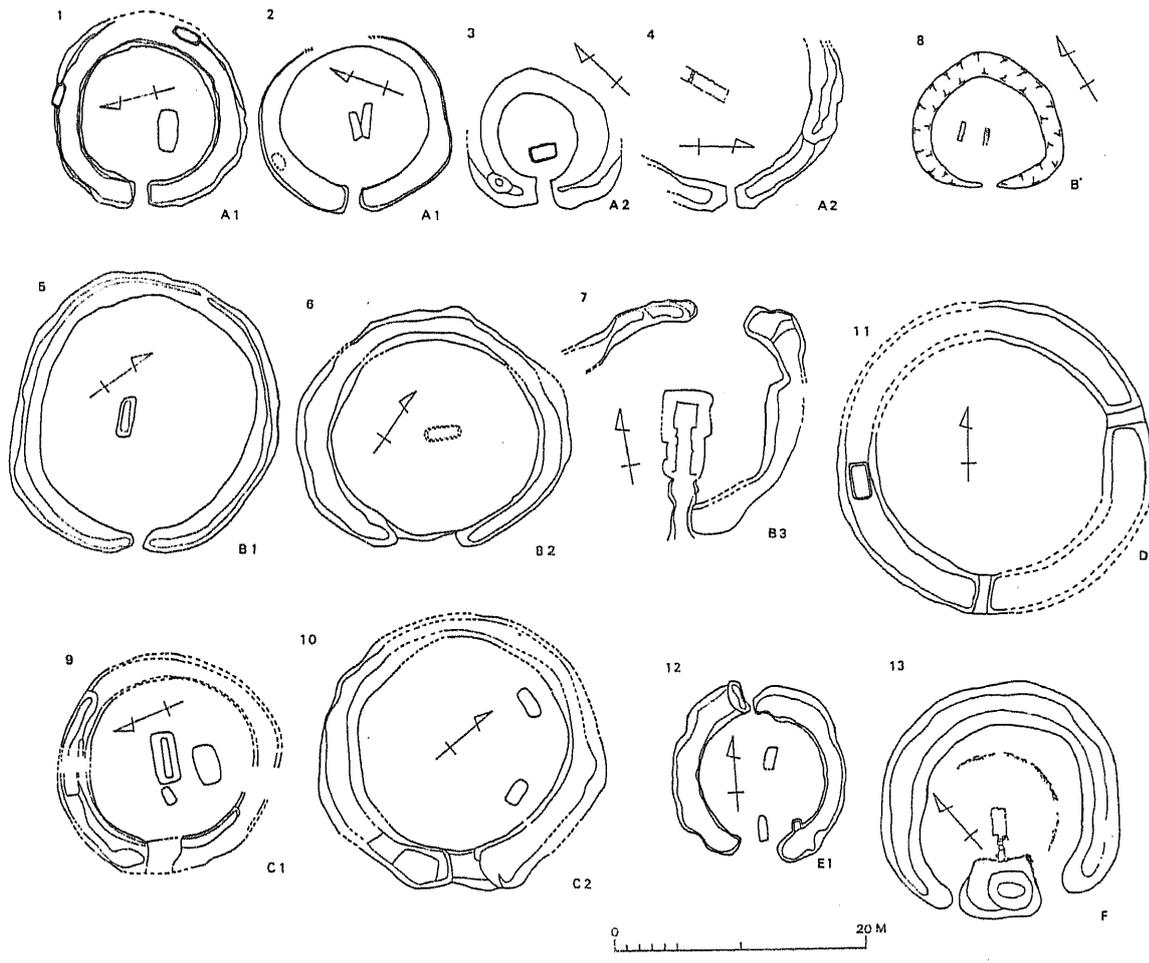


図1 ブリッジ付き円墳の形態 (S=1/300, 10, 12は1/300強, 11は1/300弱)
 1. 白糸台SZ3 2. 塚の峰3号 3. 仁王丸8号 4. 長沖28号 5. 大久保5号
 6. 長沖27号 7. 六本黒木ST043 8. 蛭田富士山D-5東周溝 9. 諏訪台7号
 10. 南向原1号 11. 登山古墳 12. 下郷SZ29 13. 赤堀村3号 (報告書より)

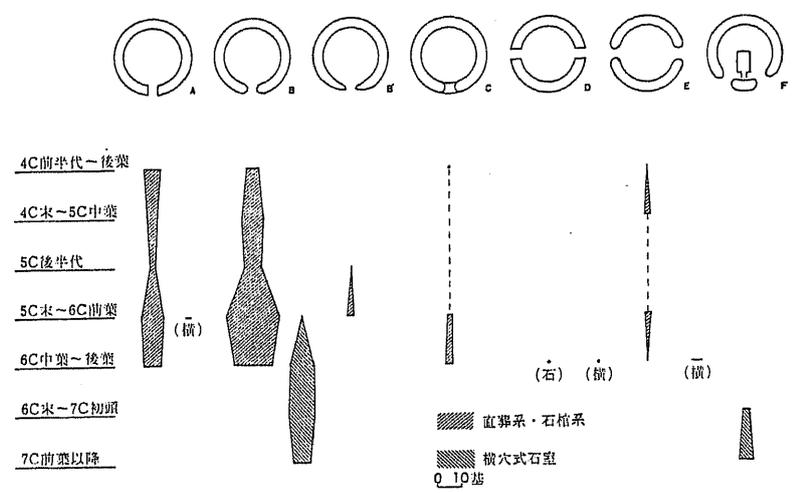


図2 ブリッジ付き円墳の形態別変遷

ここで扱うブリッジ付き円墳の主体を成すのは、直葬系、あるいは竪穴式石室系の内部主体をもつもので、周溝の1ヶ所にブリッジをもつA型およびB型である。

検討した例は、表1に挙げた201例に達するが、そのうち概ね時期の推定できる146例について形態別の変遷を示した(図2)。これによって、主体を成す直葬系・竪穴式石室系のA・B型の事例が5世紀後葉～6世紀後葉に盛行し、B型の横穴式石室採用へと受けつがれ、F型に至る大きな流れを概観できる。

ブリッジ付き円墳の展開の中心は、古墳時代後期にあり、後期の中小規模の古墳の一類型としての存在に一番大きな意味を見い出せるかと思われる。以下では、この観点に立って、年代、規模、副葬品等の諸点からブリッジ付き円墳の性格を検討してみたい。

3 時期別の変遷

ブリッジ付き円墳は、古墳時代を通して築造されているが、前期では群としてまとまって検出された例がなく、群在する例は5世紀後半以降のものである。いわゆる後期の群集墳が出現する時期に増え始め、5世紀末から6世紀前葉をピークに6世紀後葉までを盛行期と考えてよいだろう。そして横穴式石室が採用され、次第に石室中心の指向性が進むにつれ、ブリッジは形骸化し、衰退していく。このような時期的な動向から、この円墳の存続時期を大きく3期に分けることが可能である。

I期 4世紀代から5世紀中葉の、出現期から発展期。

II期 5世紀後半代から横穴式石室採用までの、盛行期(地域により異なるが、6世紀後葉を下限とする)。

III期 横穴式石室採用以降の、変容期。

I期では、特に地域による現象の遠いが著しいが、初期の段階では、一辺の中央にブリッジをもつ方墳との対応がその出現の背景の問題とも絡んで重要であろう。この方墳は、古墳時代初頭から前期に展開する小方墳の一類型⁽⁷⁾で、分布域も広範囲にわたるが、特に九州北西部の例は注目される。三角縁二神二車馬鏡を出土している福岡市藤崎遺跡の例は、ブリッジを設け、東西主軸の組み合わせ式木棺を主体部とする5基の方墳が整然と配置されている。三角縁二神二車馬鏡を出土した一辺13mのものが最大で、墳丘規模は当時の古墳としても大きいものではないが、古墳時代初頭に、盟主級の古墳の一類型として、このタイプの方墳が存在していることが窺えよう。

米子市青木遺跡では、古墳時代初頭に、このブリッジをもつ方墳と円墳が、墳丘をもつ墳墓としてほぼ同時期に出現している。両者は、交互に築造され、同遺跡に須恵器が出現する時期まで存続する。I期のブリッジ付き円墳は、5世紀前半代には、広島県三次市酒屋町の大久保5号墳⁽⁸⁾のように前期古墳として傑出した存在形態を示すものがあり、5世紀中葉には九州北西部から東北南部の広い地域に分布する。

II期は、ブリッジ付き円墳が最も普遍的な広がりを見せる時期で、前述したようにその頂点は5世紀後半～6世紀前葉に求められる。5世紀後半代は、特定の地域でブリッジ付き円墳が広がり始め、展開過程の中で画期となる時期であると考えられるが、特に大型古墳との関連に注目すべき点がある。

九州では江田船山古墳を擁する清原古墳群と周辺のブリッジ付き円墳群、関東では稲荷山古墳を擁する埼玉古墳群と周辺のブリッジ付き円墳群の展開に有機的なつながりを見ることが可能で、この2基の前方後円墳が5世紀後半代の政治動向を象徴するそれぞれの地域の盟主墳であり、西国と東国に波及した5世紀後半代社会の頂点に立つ古墳である点は特に注目される。

埼玉古墳群では、前方後円墳の周堤帯造り出しのブリッジが埴輪や土器群を伴っており、その出土状態等に円墳群のブリッジと共通した現象が見られ、直接的なつながりを強く感じさせられる。少なくともそこには或る共通の特別の行為が存在し、ブリッジはそれに伴う共通の機能をもつものとして現われたものと思われる。

また、中国地方では、広島県北西部の山間部、岡山県の山間部にブリッジ付き円墳が見られるが、この地域のこれらの円墳群と直接係わると思われる古墳として広島県三次市の酒屋高塚古墳が挙げられる。高塚古墳からは、23面の同型鏡をもつ画文帯神獸鏡が出土しており、その一面が江田船山古墳から出土していることは注目される。近年の調査⁹⁾によって判明した円筒埴輪、内部主体の構造等からも5世紀後半代に築造されたと考えられ、一方では在地色を強くもちながら、直接畿内政権との接触を図った地域の首長墓として捉えられる古墳である。

ここで挙げた3基の大型古墳出現の背景には、5世紀後半代の国内、対外両面の変革期があり、これらの大型古墳の在り方は、一層強化されつつあった中央集権志向の社会体制の一端を示すものと思われる。その基盤には、新しい生産技術の普及による全般的な生産力の向上があり、特定の地域と倭王権との特別な関係が窺える。

Ⅲ期は、横穴式石室の採用と定着によってブリッジ本来の意味が変容する時期として一括したが、横穴式石室の採用と定着の時期は地域、あるいは個々の古墳群によって大きく異なるため、6世紀後葉頃までは、直葬系の例が残存している。それまでをⅢ期前半として2分すれば、前半は、ブリッジは独立した施設として横穴式石室と形態的に分離しているが、後半には石室の開口部と切り離せないものとなる。このことは、中小規模ながら独自の周溝形感を保っていた被葬者層が、この時点で他のブリッジをもたない円墳の被葬者層と同質化してしまった現象として理解することができる。

古墳時代を通じて存在する中小古墳の多くは、後期の群集墳形成に至って急増した同等の被葬者層の中に埋没したものと思われ、このⅢ期における動向は、ブリッジ付き円墳もそうした変遷をたどる中小古墳の一類型であることを示しているといえよう。

4 ブリッジ付き円墳の規模

一貫して、小規模な古墳が圧倒的に多いが、時期別に若干の変化が見られる(図3)。

I期では、最小径7.0m～最大径41.0mの例があるが墳丘径10～20mのものが全体の6割近くを占め、次いで10m以下の非常に小規模なものが多い。径20m～30mのものは、吉原市薬子塚古墳、三次市大久保5号墳、下益城郡塚原M7の3例、径30m～40mのものは、調布市上布田一号墳、飽托郡羽山塚古墳、下益城郡塚原くぬぎ塚のわずか3例ずつに留まる。それは単独で存在するもの、或は群の中で飛び抜けた存在を示すもので、薬子

塚古墳、大久保5号墳のように鉄製品を含む豊富な副葬品をもち、地域の主墳系の古墳に類する例が見られる。

Ⅱ期では、最小径7.5m～最大径34.5mで、やはり径10m～20mのものが全体の6割を占めるが、径20～30mのものが2割以上に達し、規模の上でも発展した時期である。径30m以上の行田市埼玉5号墳、鹿本郡下原古墳、下益城郡塚原M6、および径20m～30mの14例は、大型古墳に近接して営まれるもの、大型古墳と小円墳の間に位置するものが目立ち、大型古墳に直接つながる存在として注目される。

Ⅲ期に至っても、やはり主体は径10m～20mのものであるが、次いで径20m～30mのものが全体の25%近くを占めるようになる。さらに径30m～40mでは京都市大覚寺2号墳、佐波郡赤堀村漏12号墳、前橋市荒砥70号墳、東松山市柏崎5号墳、富津市丸塚古墳の5例があり、また京都市大覚寺1号墳が径50mと際だった規模を有している。

大覚寺1号・2号墳は、6世紀以降になって大型の前方後円墳が造られた、畿内でも特殊な在り方を示す嵯峨野古墳群の有力古墳である。周辺には約100基の群集墳が営まれており、大型円墳群の被葬者には、前方後円墳を築造した太秦の首長の下にあって葛野の各地域の集団を直接支配した人々が推定されている⁽¹⁰⁾。巨石使用の横穴式石室採用後の事例であり、墳丘規模が際立って大きく、ブリッジ付き円墳の中では特殊な例であるが、古墳群の中でのブリッジ付き円墳の位置づけが可能な例として注目しておきたい。

5 副葬品等の内容

ブリッジ付き円墳は、各地域において中規模以下の古墳が主体であるため、副葬品の内容は概して貧弱である。また既に墳丘を削平されたものが半数近くを占めることから、内部主体、副葬品共に不明なものが多い。

I期では、刀子を出土した古墳が7例で最も多く、次いで剣、鉄鏃の5例、装身具、鋤先の2例がある。また、短甲、鉄斧、櫛、琴柱形石製品を出土した例が一例ずつ見られるが、これらを出土した古墳の大半は、20mクラス以上のもので、主要な構成員である径15mクラスのもの、土器類のみが出土する例が圧倒的に多い。尚、埴輪をもつものは、赤堀峯岸山299号墳、岡の御堂2号墳の2例に留まる。

Ⅱ期には、埴輪をもつ例が23例を数え、時期的な特徴を示している。内部主体からの遺物では、鉄鏃が最も多く12例、次いで刀子8、馬具6、装身具6、(直)刀5、農工具3の順に出土している。埴輪をもつ例の増加、馬具をもつ例があることは、この時期の地域の構成員として比較的優位に立っていたことを意味すると思われる。しかし、全般に副葬品は少なく、甲冑、帯金具、飾大刀等、この時期の進取の文化を象徴する遺物は見られない。

Ⅲ期では、Ⅱ期に比べて副葬品は豊かになり、特に鉄器の出土例が増えている。(直)刀を出土した例は25例に達し、以下鉄鏃24、刀子18、馬具8、鋌飾りの弓5、農工具3、鑿子2、槍先1の出土例がある。いずれも、後期古墳に通有の遺物で、他に飾大刀を出土した例が4例見られる⁽¹¹⁾。しかし、4例の内3例は7世紀前葉以降の例で、ブリッジ付き円墳の本来的な例からははずれるものであり、他の一例は前に触れた京都市大覚寺1号墳

で、特殊な例といえる。

このようにⅠ期からⅢ期の副葬品の内容は、その時期の中小規模の古墳に通有なものであるが、Ⅱ期の埴輪出土古墳の増加は注目に値する。

6 特定地域の動向

地域別の事例数を見ると、九州北西部と関東地方に集中する傾向がある（図4）が、これは地域による調査状況の相異に起因する可能性が大きく、特に墳丘の削平された例が大規模な面的調査によって検出されている点を考慮しなければならない。が、九州北西部、関東地方いずれも特色のある展開を示しており、古墳群としてまとまっている点でもやはり注目すべき地域である。

(1) 九州北西部

九州北西部では、福岡、佐賀、熊本県に多くの報告例があるが、特に熊本県北西部は、塚原古墳群を筆頭に、5世紀前葉から横穴式石室採用以降までブリッジ付き円墳が存続しており、現時点では九州地方における展開の中心地域である。塚原古墳群は、古墳時代前期末から後期にわたって営まれた古墳群で、前に触れたように、先行するブリッジをもつ方墳群に隣接して低墳丘のブリッジ付き円墳群が群在しており（図5）、いわゆる群集墳とは別の存在形態を示すことが指摘されている⁽¹²⁾。

先行する方墳群は、畿内布留式期のほぼ全期間にわたって営まれ、初期須恵器の出現をもって形成を終えている。円墳群は、これらの方墳群にとってかわって継起的に営まれ、5世紀後半から6世紀初頭を盛期に6世紀中葉まで存続する。墳丘の規模は、方墳、円墳とも径10m～20mの小規模なものが主体で、円墳への変換によっても大きな変化はない。台地上に前方後円墳が出現する段階になると、方墳群は既に消滅し、古墳群は前方後円墳、大型円墳、中小円墳群、墳丘・周溝をもたない石棺群によって構成されている。

古墳群の主体を成す中小の円墳群は、前方後円墳出現以前と同様にブリッジを有し、本来の規模・築造単位を維持している。おそらく、ここでは方墳群も円墳群も同様の基盤をもつ被葬者層の墳墓であったと考えられるが、円墳群は、前方後円墳を頂点とする新たに再編成された体制に組み込まれている。この点で、ブリッジ付き円墳は、新たな体制の身分秩序を表示した墳形であるといえよう。また、この段階で内部主体の主軸とブリッジの方向がすべて一致するようになり、直交するものが混在した方墳群の段階に比べ、より定型化された配置関係を示すようになる。

一方、円墳群の遺物の出土状況には、ブリッジ両側の周溝内に集中して遺物が出土する傾向があり、方墳群でも最も新しい様相のものと同様の現象が見られる。この傾向は、内部主体の主軸とブリッジの方向が一致することと無縁ではないと思われ、古墳の正面観の認識、或いは古墳正面における儀礼行為を結びつけて考えることが可能であろう。これによって、ブリッジはより機能的な外部施設としての性格をもち、単なる通路とは異なった意味をもつようになると思われる。この点は、ブリッジ付き円墳の基本的な要素の一つと考えられる。

次に、塚原古墳群および周辺の5世紀中葉から6世紀中葉のブリッジ付き円墳群の展開

が、隣接する玉名郡菊水町の清原古墳群の形成とほぼ同時に進行していると思われる点に着目したい。清原古墳群は、群中最大の規模を有する全長 61m の江田船山古墳を頂点におく古墳群である。群の形成は伝承地も含めて 4 世紀末から 5 世紀初頭に始まると考えられているが⁽⁴³⁾、群形成の盛期は、5 世紀中葉から 6 世紀前葉に求められ、唯一内部主体の明らかな江田船山古墳は上限を 5 世紀後半に位置づけられる。この清原古墳群の盛期は、九州北西部における古墳時代後期の盛期でもあり、この古墳群の形成を契機に周辺部も新たな体制に組み込まれていった状況が窺える。ブリッジ付き円墳群は、清原古墳群をささえた下位集団の墳墓の一類型であると考えられ、清原古墳群の影響をかなり直接的に受けていたと思われる。

塚原古墳群では、江田船山古墳の内部主体である横口式石棺が、新型式の内部主体として 5 世紀中葉以降の例に採用されている。また、清原古墳群から 7km の所に位置する岩原古墳群にブリッジ付き円墳 2 基が存在していることも注目される。岩原古墳群は、全長 102m といわれる前方後円墳・双子塚と円墳群から成り、2 基の円墳は、径 20～31m と比較的大型で、埴輪片、須恵器片の特徴から江田船山古墳より後出であると考えられる。主墳の双子塚は未調査で、時期、性格等不明であるが、清原古墳群との関連が注目される重要な古墳であると思われる⁽⁴⁴⁾。九州地方では、5 世紀代に畿内型古墳がほぼ九州全域に及び、より直接的に畿内の影響を受けた古墳が各地で出現する。そのような情勢の下に、ブリッジ付き円墳は、ブリッジという旧来の要素を維持しつつ、より直接的に体制に組み込まれていったものと考えられる。

6 世紀代には、分布の中心は福岡県北西部から佐賀県東部にあり、横穴式石室を採用した例が多い。ブリッジが石室開口部の前面にある例が新しく、石室背後や側面に配置される例が先行する。これは、横穴式石室採用以前の形態を継承し、変容していく現象として捉えられよう。また、6 世紀前葉から中葉には、後円部の西側面に 14m～18m の狭いブリッジをもつ前方後円墳が造られている。上益城郡御船町の長塚古墳と築紫市の剣塚 2 号墳がその例で、2 基とも 40m クラスの中規模の前方後円墳で、ブリッジ付き円墳の分布が集中する地域に存在している点が注目される。この前方後円墳の例は、ブリッジ付き円墳と同様の意味をもつと考えられ、九州のブリッジ付き円墳のほとんどが西側～北西側にブリッジを設けていることに、特定地域内での方向性が窺える。

(2) 関東地方

関東地方は、ブリッジ付き円墳が最も多く検出されている地域で、特に埼玉県、群馬県では、特定の地域にまとまって見られる傾向がある。最も密な分布を示すのは埼玉県の荒川流域で、特に東岸に集中している。この地域と群馬県南東部の利根川沿岸を含めた地域は、ブリッジ付き円墳の展開の中心となり得る地域である。これに次いで分布が集中するのは、多摩川流域で、中流域から上流の浅川支流域にかけて分布している。

① 荒川中流・上流域

荒川中流から上流では、五領式期の壺を出土した針ヶ谷北通例を初源例として、この地域特有の胴張りの横穴式石室採用以降まで報告例があるが、その大半は 5 世紀後半から 6 世紀後半代に構築されており、5 世紀後半代に何らかの契機があつて急速に広まったと考えられる。この点で注目されるのは、埼玉古墳群の形成と群中に在るブリッジ付き円墳群

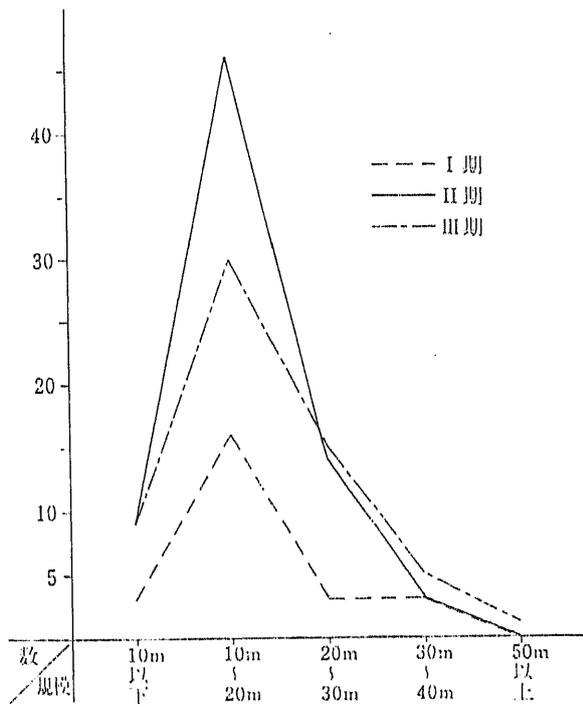


図3 ブリッジ付き円墳の規模

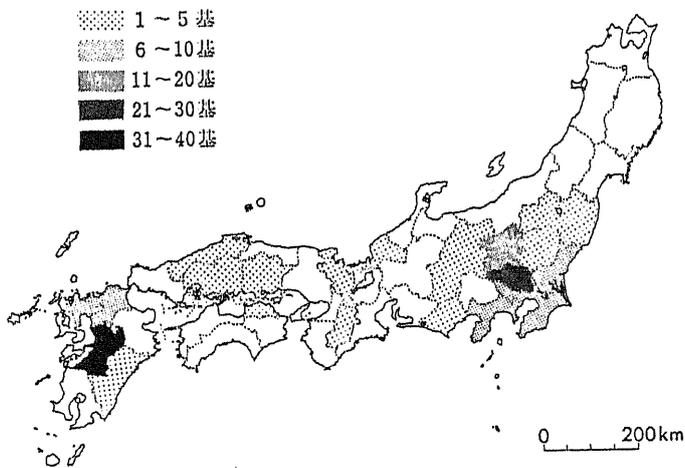


図4 ブリッジ付き円墳の検出状況

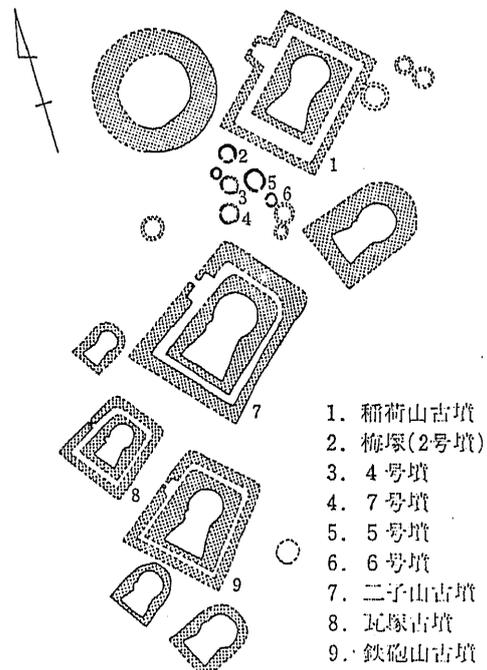


図6 埼玉古墳群配置図

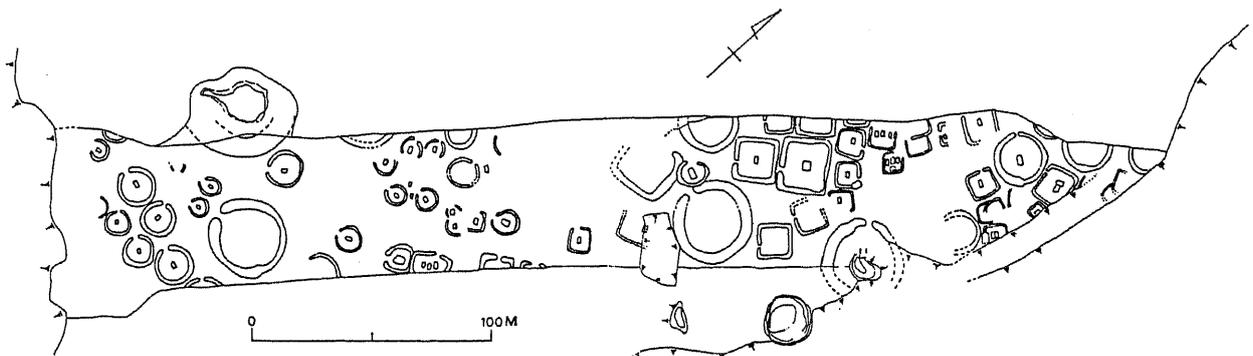


図5 塚原古墳群全体図
(『塚原』熊本県教育委員会に拠る)

の性格である。

埼玉古墳群は、現在前方後円墳 10 基、大型円墳 1 基、中型円墳 3 基、小円墳 31 基が確認されており、5 世紀後半から約 100 年間地域の頂点として君臨した北武蔵最大の古墳群である。稲荷山古墳から出土した有銘鉄剣は、さらにこの古墳群がこの地域の中心的存在であったことを補強したといえよう。ブリッジ付き円墳群は、稲荷山古墳と二子山古墳の間に 5 基確認されており、墳丘径 25 ～ 30m の中規模の円墳群である⁽¹⁵⁾ (図 6)。東西 2ヶ所にブリッジをもつ 2 号墳を除いて いずれも南～西にブリッジをもつ方向性がある。周溝内からは埴輪・須恵器・土師器が出土しており、ブリッジ付近の周溝内からまとまって出土している。その出土状況は、ブリッジを挟んだ両側にあたかもブリッジ上から転落したような状況である。これらの円墳群の須恵器は、伝稲荷山古墳出土のものと同型式のもので、土師器、埴輪にも稲荷山古墳のものと同様の特徴が見られる⁽¹⁶⁾。

一方、稲荷山古墳、二子山古墳は、トレンチ調査によって二重の周溝と周堤帯の造り出しが検出され、さらにこの周堤帯造り出しは、外堤とブリッジで接続していることが確認されている。この周堤帯造り出しは、いずれも後円部西側に付設されており、形象埴輪群の出土が報告されている⁽¹⁷⁾。その出土状態から、造り出し部に形象埴輪が配列されていた可能性が強く、造り出しと外堤を結ぶブリッジは、埴輪の特殊な使用状況から、被葬者の埋葬時に係る古墳の正面観を示す施設として意味をもつものと思われる。さらに、瓦塚古墳の外周溝にブリッジが存在することが確認されている⁽¹⁸⁾。ブリッジはくびれ部造り出しの西側に在り、ブリッジの南で人物・家・器材埴輪等の形象埴輪が周堤帯から流れ込んだ状態で出土したという。また、ブリッジ北側からは、円筒・朝顔型埴輪のみが出土しており、稲荷山・二子山の周堤帯造り出しと同様、形象埴輪の特殊な樹立がブリッジ付近の周堤帯で行われたことが推測される。

これらの前方後円墳の外周溝と円墳群のブリッジは、その遺物の出土状態から、ある共通の意味をもつ行為の場として機能した可能性が強く、前方後円墳群と円墳群の直接的な関わりを示すものといえよう⁽¹⁹⁾。

周辺地域では、埼玉古墳群の形成を機に古墳群の造営が活発になるが、県北を中心にしてさかんにブリッジ付き円墳が造られている。稲荷山古墳の存続期に併行するものには、長沖古墳群、南塚原古墳群、生出塚古墳群、行田市 No41 遺跡の諸例があり、6 世紀中葉には、台・袋適跡、白幡本宿遺跡にも見られる。いずれも墳丘径 10 ～ 20m の小規模なものであるが、その大半が埴輪をもつ点が注意される。特に長沖では、6 世紀前葉の埴輪をもつ前方後円墳 (25 号墳) の前方部前面にブリッジが認められ、25 号墳を中心に相前後して埴輪をもつブリッジ付き円墳が造られている。25 号墳の前方部周溝内からは、多量の埴輪が出土しており、埼玉古墳群同様、埴輪をもつブリッジ付き円墳との対応が注目される。また、埼玉古墳群から 1km 程の所に近接する行田市 No41 遺跡例は、出土土器の時期からも、埼玉古墳群の影響を最も強く受けた例であると思われる。

② 利根川中流・上流域

この地域では、古墳時代前期から後期を通してブリッジ付き円墳が造られているが、特に佐波郡周辺に集中して見られる。その中で 5 世紀中葉～6 世紀中葉以降までブリッジ付き円墳が継起的に造られている佐波郡赤堀峯岸山・地蔵山古墳群は、確認された古墳総数

の6割、および8割近くが調査されており、最も総合的な検討が可能な例である。

峯岸山・地蔵山古墳群の存続時期を四期に分けて各期におけるブリッジ付き円墳を取り上げてみる。まず、峯岸山では、古墳群形成の初源期に2基の前方後円墳と並んで2基のブリッジ付き円墳が独立した丘陵の尾根上に築かれる。この4基は、群の主体となる丘陵中央部の古墳群とは離れ、それらに先行して築かれたもので、5世紀前葉～中葉に位置づけられる⁽²⁰⁾。この時期地蔵山には、小円墳にブリッジをもつものが一基見られる。

次期は、両古墳群とも古墳の数が増え始め、5世紀後半～6世紀前半代の期間がこれに当る。峯岸山では、墳丘に葺石を貼り、円筒埴輪、形象埴輪を配列したブリッジ付き円墳288号が築造されるが、ほぼ同規模の葺石・埴輪をめぐらした前方後円墳と尾根上の緩斜面に並んで占地している点が注目される。地蔵山では、6世紀前葉から古墳の数が増え始め、埴輪をもつ比較的規模の大きい円墳が2～3基ずつ造られるようになり、6世紀後葉まで続く。また、この時期地蔵山にも埴輪をもつ前方後円墳が築かれているが、ブリッジ付き円墳とほぼ同規模である。

6世紀後葉になると、峯岸山では急に古墳の数が増える。ほぼ同時期に埴輪をもつ円墳が5基あり、その内1基にブリッジが見られる。それらは、ほぼ同規模で副葬品にも大きな差は見られない。一方、埴輪をもつ全長22～38mの帆立貝式前方後円墳が3基相次いで築かれており、小円墳群も加わって峯岸山は群形成の盛期を迎える。この時期の地蔵山には、ブリッジ付き円墳が2基見られるが、共に墳丘径28.0m、24.5mと群の主墳級の規模を有しており、このうち、記載漏13号では、ブリッジの墳丘側の正面に、形象埴輪の配列が検出されている。この時期は、両古墳群とも豊かな副葬品をもつようになり、質、量共に古墳群の最盛期を形成している。

6世紀末以降になると、横穴式石室の定着とともに周溝の形態も変化し、前庭部の両側2ヶ所が切れるものが多くなる。記載漏5号に金銅装大刀が出土している他は、副葬品に見るべきものはなく、埴輪は消失している。記載漏5号以後地蔵山の古墳群は急速に衰退して終局に向う。また、峯岸山の古墳群もほぼ期を一にして衰退している。

以上の動向から、両古墳群では、群形成の初源期から衰退期まで、継続してブリッジ付き円墳が築造され、群形成の盛衰に対応した内容を持ち合わせていたことが窺える。峯岸山では、古墳群形成の画期に存在する前方後円墳とともにブリッジ付き円墳が造られており、古墳群の中で先駆的な存在である点が注目される。一方、地蔵山では、6世紀後葉以降、ブリッジ付き円墳が主墳級の存在となっている点が注目される。また、7世紀前葉以降の変容した例は別にして、ブリッジ付き円墳は2基以上が併行して造られることはなく、古墳の数が増える群形成の盛期にも一基ずつ造られているようである。これらの点から、赤堀峯岸山・地蔵山古墳群のブリッジ付き円墳の被葬者像を問題にすれば古墳群が後期古墳群として形成を始める初源期から小規模ながら古墳を造ることができ、以後も継続して造墓活動に加わった在地の古参の有力被葬者像が想定される。

③ 多摩川流域

多摩川流域の報告例は、中流域の世田谷区から、調布、府中、日野、八王子の浅川流域に及ぶ地域に分布している。そのほとんどが墳丘を失ったもので、内部主体も検出されていないが、周溝内出土の土器類から5世紀初頭～6世紀後葉の年代が与えられる。特に5

世紀末葉から6世紀中葉の例が多い。

この地域には、後期の大型古墳がなく、中規模の前方後円墳や大型円墳に留まっている。その一つである狛江市亀塚古墳は、全長40mの帆立貝式前方後円墳で、埴輪をもち、5世紀後半代に位置づけられるが、後円部の北側に幅4.5mの「土橋状に掘り残した」ブリッジが設けられている。これは、周辺のブリッジ付き円墳の展開と無縁ではないと思われ、このような中規模の前方後円墳とブリッジ付き円墳群の展開は、この地域の後期古墳を特徴づけるものとして注目される⁽²¹⁾。

なお、宮城県加美郡色麻古墳群にまとまった調査例がある。現在のところ最も北に位置する例であり、方向性をもって群集するため、付け加えておきたい。色麻古墳群は、横穴式石室、竪穴式小石室（胴張りプランで裏込めがあり横穴式石室に極めて類似した構造である）、箱式石棺、を内部主体とする後期～終末期の群集墳で、その築造時期の主体は、7世紀中葉以降にある。確認された88基のうち28基が全掘され、そのうち22基にブリッジが認められる。石室開口部の方向にブリッジをもつものが大半を占め18基を数えるが、石室の背面、あるいは背面・開口部の2ヶ所にブリッジをもつものもあり、横穴式石室採用後の変容過程を見ることができる。また、ブリッジ付き円墳の終末期の在り方を示す例でもある。

7 ブリッジの機能と性格

ブリッジ付き円墳のブリッジは、周溝の一部を掘り残しただけの極めて簡単な施設であり、それ自体が独立して発達することもないため、単なる「通路」、「渡り」として機能したことも考えられる。しかし、内部主体とブリッジの方向性に意図的な配置が認められる例が多いことから、作業用、埋葬用の通路としての機能だけではなく、葬送儀礼、埋葬後の内部主体へ至る通路として機能したことが推測される。また、内部主体の正面を意図した配置には、円墳の正面観を示す施設としての性格が窺える。

さらに、このブリッジに意味を与えているのは、遺物の出土状況である。ブリッジ両側の周溝から土器が集中して出土した例、または据え置かれた状態で出土している例は23例あり、これにブリッジ付近の特定区域から土器類が出土した例を加えると25例に達する。また、ブリッジ上、あるいは付近から埴輪を出土し、ブリッジを意識した埴輪の樹立が行なわれたと推測される例が5例認められる。出土状況の不明確な例も少なくないことを考慮すれば、その数はかなり増えることが予測され、このブリッジ付近での遺物の出土状況は、ブリッジを特殊な場とした葬送儀礼に係わる行為が行われたことを示す現象として捉えられよう。

土器類の出土例については、先に挙げた塚原古墳群に10例、埼玉古墳群に2例ある他、鮎託郡羽山塚古墳、三次市大久保5号墳、米子市青木遺跡BSX22、五条市弘ノ山6号墳、府中市白糸台V10-SZ3、調布市飛田給3号墳、市原市諏訪台7号墳、浦和市白幡本宿2号墳、鴻巣市生出塚1号墳、同箕田3号墳、土浦市根本古墳、須賀川市早稲田14号墳があり、分布域全般に見られる（表1参照）。このうち、早稲田14号墳では、ブリッジの両

側から平底の杯 50 個体以上が重ねられた状態で出土し、諏訪台 7 号墳では、ブリッジ上に据え置かれた状態で須恵器が出土するなど、墓前での供献行為を示唆する出土状況も見られる。また、弘ノ山 6 号墳では、ブリッジの片側周溝内に底部穿孔の須恵器甕 2 個体が、反対側には方形の焼土坑が検出され、両者はブリッジを挟んで内部主体の前面に位置していることから、内部主体との関連で意図的に置かれたことが推測される。

ブリッジ付近の埴輪の出土状況については、先に触れた埼玉 5 号墳、赤堀村記載漏 13 号墳の他に、東茨城市杉崎コロニー 88 号墳、土浦市根本古墳、厚木市登山古墳が挙げられる。登山古墳ではブリッジ上に円筒埴輪が横倒しの状態で検出され、根本古墳ではブリッジ付近に完形の円筒埴輪 2 個体、朝顔型埴輪一個体が形象埴輪片、土器類と共にまとまって出土している。杉崎コロニー 88 号墳は、比較的良好な埴輪列を残しており、墳丘裾をめぐる形象、円筒埴輪列が検出されているが、形象埴輪は、ブリッジの向って右側に 2 列に配列されている。武人、農夫、襷掛けをした女子等の人物の他、鶏形埴輪も列に加わっている。内部主体は墳丘中央の木棺であるが、形象埴輪列は内部主体の正面に位置すると見られるブリッジから伸びて、墳丘裾にめぐる円筒埴輪列に合流している。88 号墳は、30m クラスの前方後円墳 4 基、径 12 ~ 20m の円墳 10 基からなる支群の 1 基で、この群では、帆立貝式前方後円墳と 88 号墳に埴輪が検出されている。前方後円墳の形象埴輪は、前方部の前面に 2 列に配列されており、88 号墳の配列との相異が注目される。

赤堀村記載漏 13 号墳では、ブリッジから横穴式石室開口部にかけて形象埴輪が配列されている。開口部に近い位置から女子、男子、女子、不明、男子の順で並び、その後に馬形埴輪 2 頭と馬飼らしい人物埴輪が出土している。さらにこの形象埴輪列に沿ってブリッジ側にもう一列円筒埴輪が並ぶようである。やはり、ブリッジを意識した配列であり、内部主体へ向けて並んでいるものと考えられる。この石室開口部へ向う形象埴輪列は、横穴式石室を内部主体とする上野の円墳の埴輪列に共通して見られる。⁽²²⁾

以上のように、形象埴輪列が、ブリッジから墳丘にかけて配列されていることは、ブリッジが外界との境を画する特別の場であったことを物語り、ブリッジ上から円筒埴輪を出土した登山古墳例やブリッジ両側の周溝内から埴輪を出土した諸例にも同様の意味づけをすることができよう。また、この形象埴輪列がブリッジから墳丘裾へ、あるいはブリッジ正面から内部主体へ向って配列される方向性をもつのに対し、前方後円墳の前方部、造り出しの埴輪列は、一定区画内で完結した配列をもつ点が大きく異なると思われる。このうち、形態的にブリッジに近い造り出しの埴輪列は、造り出し付き円墳の埴輪列ともからんで、ブリッジの埴輪列と対照する必要がある。

造り出しは、前方後円墳の発展した段階で付設された施設で、前方部とは異なる二次的な祭祀空間としての性格が考えられる。それらは、造り出しに円筒埴輪等による方形の区画をもち、中に形象埴輪や土器群を配している。兵庫県加古川市行者塚古墳は、造り出し埴輪列が判明しているものでは最も古くさかのぼる例である。行者塚古墳は、後円部とくびれ部に 2 カ所ずつ、4 カ所の造り出しをもち、そのすべてに方形の埴輪列がある。円形埴輪の中に家形埴輪が置かれ、神・を模したような各種の土製品が出土し、実際の儀礼を写したかのような祭祀の跡が窺える。東京都世田谷区野毛大塚古墳でも造り出しの埴輪列に円形に類する柵形埴輪が出土している。これらは奈良県河合町乙女山古墳、広島県賀茂郡三ツ城古墳の例を加えて、5 世紀前半代に位置づけられる例である。

造り出しに埴輪列が検出されているものには、和歌山市岩橋干塚花山6号墳、同大山22号墳、和歌山市井辺八幡山古墳があり、6世紀前半代までの例を見ることができる。また、三ツ城古墳、井辺八幡山古墳では、造り出しで須恵器がまとまって出土しており、土器類の出土が伝えられる例も少なくない。一方、王陵級の古墳では奈良県巢山古墳・大阪府仁徳陵古墳東側造り出し・堺大塚山古墳造り出しにも埴輪列が存在することが伝えられている⁽²³⁾。また、茨城県大生原第1号墳のように造り出しに礫床をもち、土師器、須恵器の他、火を受けた痕跡が見られ、粘土塊、木炭、金具の残片等、より具体的な造り出し使用の跡を残す例もある。さらに、特殊な例ではあるが、京都府宮ノ平2号墳が方形の墳丘に造り出しを付設しており、造り出しに方形にめぐる埴輪列をもっている。5世紀後半代の築造と考えられ、前方後円墳の造り出しが最も発達した時期の所産で、造り出し付き円墳に対する造り出し付き方墳として捉えることが可能である。

これらの造り出しに見られた埴輪、土器類の出土状況は、造り出しが墳丘から突出した一種の独立した祭祀空間としての性格をもつことを窺わせるもので、ブリッジにおける出土状況に比べてより完結した内容をもっている。

最後に、前方後円(方)墳に付設されているブリッジに触れておきたい。既にいくつかの例を挙げているが、幅が狭く、その機能は円墳のブリッジに近いと思われる点で注目され、古墳時代前期から後期に至るほぼ全期間にわたって例を見ることができる。

4世紀代には、前掲の渋谷向山古墳のほかに高崎市元島名將軍塚古墳、宇都宮市茂原愛宕塚古墳、福井市安保山4号墳、前橋市前橋天神山古墳、神戸市五色塚古墳、奈良市佐紀町瓢箪山古墳、横浜市稲荷前1号墳が挙げられる。茂原愛宕塚、安保山3号墳、瓢箪山古墳、五色塚古墳は、前方部前面に外堤につながるブリッジ⁽²⁴⁾があり、稲荷前1号墳には、前方部前面にブリッジの存在を示す突出部が見られる。また、前橋天神山古墳では、前方部北西隅角に葺石を葺いた低いブリッジが設けられている。尚、茂原愛宕塚には、前方部前面の他にくびれ部西側と後方部西側にも墳丘から伸びる突出部が確認されており、ブリッジが存在する可能性が高い⁽²⁵⁾。このような突出部が、墳丘、外堤双方から対になって検出されたのが元島名將軍塚の例で、後方部東側に2対の突出部が伸びている。これは、本来外堤と墳丘をつなぐブリッジであった可能性の強いもので、その中央を何らかの理由で撤去したものと思われる。墳丘側の突出部間には、供献土器群が集中して出土しており、突出部が墳丘内の特別の場へ至る道として機能したことを示唆している。報告者の田口氏は、後方部東側の突出部の存在と周溝の直の掘り込み、周溝幅が最も狭くなる点から、この部分が墳頂部以外の「特別に意識された場」であったことを指摘している(田口1981)。

数少ない5世紀代の例としては、後円部の側面にブリッジをもつ狛江市亀塚古墳が挙げられる。前期の段階では主丘部の正面、前面コーナーにブリッジが見られるが、後期に入るものには、前面にブリッジをもつものは例外的である。埼玉古墳群の周堤帯ブリッジも後円部側面に設けられており、造り出し付設の問題ともからんで、前方部の形骸化に対応した古墳の正面観に対する意識の変化が推察される。

6世紀代には、上益城郡長塚古墳、筑紫野市剣塚1号墳がある。この2基はいずれも後円部の西側にブリッジを設けており、周辺部に展開するブリッジ付き円墳群の多くもやはり西側にブリッジをもつことから、両者の関連が注目される。また、春日市日押塚古墳の後円部側面にもブリッジが検出されている。

7世紀代の例には、勝田市虎塚古墳が挙げられる。虎塚では、周溝調査によって前方部の北西隅と前方部南側にブリッジが検出されているが、横穴式石室を内部主体とする例の中でも既に変容した段階のものと思われる。

これらの前方後円（方）墳のブリッジは、埼玉古墳群の周堤帯造り出しのブリッジも含めて、外堤と古墳内部をつなぐ「祭祀の道」として残存したものと推測される。これらの大型古墳に見られるブリッジの影響下に、中小の円墳にブリッジが付設された時、それは、より集約化された機能をもつ施設として様々な意味をもつようになると思われる。

8 被葬者の性格

以上のように、古墳時代を通じて各地に営まれたブリッジ付き円墳は、一部の特殊な例を除いて終始中小規模のものが主体となり、一定の地位を保って存続していることを明らかにした。こうした中小規模の古墳の被葬者層は、古墳時代を通して基本的には変わらないと思われ、おそらく弥生時代後期以降の低墳丘の墳墓に葬られた人々と同質の基盤をもって存続した被葬者群であったと考えられる。ブリッジを設け、そこで行われた葬送儀礼は、弥生時代以来の低墳丘墓から、形を変え、質を変えて存続していったものと思われる。

墳形の系譜の問題のひとつとして、円丘から突出部が伸びる庄内期の瀬戸内沿岸の墳墓を挙げたが、これらは、突出部がブリッジとあまり変らない幅で伸びている点でブリッジ付き円墳に類似する。特定の時期、地域に限られたものではあるが、弥生時代後期後半から出現する辺の中央にブリッジをもつ小規模な方墳と同様、そのまま飛躍せずに終わる古墳の一類型であると考えられ、円丘の両方に突出部をもつ楯築、石清尾山猫塚のような盟主級の古墳に発展したものは対照的に古墳出現期から前期まで一貫した被葬者層が追えるものであろう。辺の中央にブリッジをもつ方墳が、5世紀前半代まで存続した例が塚原遺跡の方墳群であり、それらはさらにブリッジ付き円墳に姿を変えて存続する。各地のブリッジ付き円墳も、それぞれに前代からの基盤をもって存在したものと思われる。しかし、社会構造の変化はその都度彼らにも及んで、彼らもまた新たな体制に組み込まれている。それは、ブリッジ付き円墳の画期が、5世紀後半代という古墳時代社会の大きな画期に対応している点に窺えよう。

関東、九州の両地域でワカタケル大王（雄略）に任えていたと推定される盟主墳の周辺にブリッジ付き円墳が集中して存在することに注目したい。この時期、畿内の陪家群、地方の有力豪族層の墳墓は、中央との強い結びつきによって前方後円墳から帆立貝式前方後円墳に姿を変える。それらは、ほぼ定型化した規模、遺物相をもつ。この時期の短甲をもつ中小の円墳、造り出し付き円墳も同様の系列下に捉えられる古墳であり、中央によって直接再編成された有力被葬者層の墳墓であると考えられる。このような情勢の中で、関東と九州の両地域に大規模な前方後円墳を築いた被葬者群は、中央と特殊な関係を結んでいた例外的な存在であったと考えられ、この主墳の周辺に展開したブリッジ付き円墳は、これらの地域の首長を介して間接的に再編成されたものと思われる。帆立貝式前方後円墳、造り出し付き円墳、および短甲出土の円墳が中央の直接的な影響を強く受けた様相をもつのに対し、ブリッジ付き円墳は、旧来の規模を保ち、副葬品の遺物相にも進取の文化を象

徴するような飛躍がほとんど見られない。

このように、中央に直結した被葬者層でもなく、また新しく台頭した被葬者層でもない旧来の族長層が再編成されたものとして理解される点にブリッジ付き円墳の被葬者の特質が見い出せる。彼らは、中央に直結した首長との身分的な結びつきによって一定の地位を保っていたと考えられ、同一群内ではほぼ同規模の帆立貝式前方後円墳、造り出し付き円墳の被葬者とも区別される中間被葬者層とも呼ぶべき地域の有力構成員であったと考えられる。地方の首長との特殊な結びつきを示す資料が得られることを期待したい。

塚原をはじめとする熊本県北西部の例は、清原古墳群という盟主墳系の古墳群の周辺に密接な関連をもって展開した古墳であり、埼玉古墳群では大型前方後円墳のブリッジと共通の要素をもつ施設を有する古墳として、ブリッジ付き円墳が存在している。九州により在地色が強く、それぞれの背景も異なるが、いずれにせよこの墳形は、中央＝倭王権の管轄下に、地域の首長が直属する被葬者に与えることのできた墳形であったといえよう。ブリッジ付き円墳が畿内に少なく、関東・九州を中心とした特定周辺地域に多いこともこの想定を裏づけているように思われる。

こうして再編成されたブリッジ付き円墳は、地域の中で先駆けて埴輪をもつ例が多く、6世紀前半代には帆立貝式前方後円墳、造り出し付き円墳と比肩するような重要な構成員として存在するようになる。杉崎コロニー古墳群、長沖古墳群、赤堀峯岸山古墳群では、埴輪の樹立という視点からも、(帆立貝式)前方後円墳→ブリッジ付き円墳→ブリッジをもたない円墳という構成の原則を見い出すことができた。

一方、埴輪、土器のブリッジ付近での集中的な出土は、ブリッジが特別の行為の場であったことを示す現象であり、ブリッジが古墳の正面観を示すという機能をもつことを物語る。これには、土器のみを置いた段階と埴輪を用いた段階があり、それぞれ意義をもつと考えられるが、前者では前期古墳の墳頂部の土器群とブリッジの土器群の器種の相異、或いは横穴式石室の石室内、墓前の土器群との器種の対比が問題となろう。この分析、検討は、ブリッジの意味、機能をより明確にすると思われる。また、埴輪についても、墳頂部・墳丘裾の埴輪列との比較検討を行なう必要があるが、敢えて現時点での資料から推察すれば、ブリッジは第一に外部から埋葬部分へ至る通路であり、また葬送に伴う特別な行為の場であり、さらに外に向かって見せる部分でもあって、葬送儀礼の場として機能の集約された施設であったといえよう。

5世紀後半代から約100年間埴輪をもちい、その後半には帆立貝式前方後円墳、造り出し付き円墳に並ぶような存在となったブリッジ付き円墳も、横穴式石室を採用するようになると、ブリッジをもたない円墳と同質化するようになる。これは、横穴式石室中心の傾向性がブリッジの形骸化へ結びつくと思われ、埴輪を樹立しなくなった段階でブリッジはさらに形骸化する。やがて終末期の群集墳の時代になると、ブリッジ付き円墳は、均質化した群集墳の中に埋れていくようである。

古墳時代における低い墳丘をもつ小規模な墓を低墳丘の古墳、或いは「低墳丘墓」と呼んで前方後円(方)墳や大型円(方)墳と区別する見方がある。また、弥生・古墳時代を通じた小規模な墳丘をもつ墳墓の一貫した歴史的展開過程を追求する必要性が説えられて久しい。本論では、ブリッジ付き円墳という古墳時代を通じて発展し得ないまま終始した墳形に着目して、小規模古墳の一類型を示し、それらに発現した古墳時代社会の動向を讀

み取ろうとしたものである。

註

(1) 従来の報告書等でのブリッジ付き円墳の捉え方を見ると、上部構造の明らかでないものは、古墳時代の遺構であってもその形状から円形周溝墓と呼称された例が多い。その中で、埼玉県針ヶ谷北通遺跡の報告（今橋 1975）では「陸橋部を有する古墳のようにも見える」として古墳時代前期から後期にわたる報告例を紹介しているが、鬼高式土器群を出土した例の解釈に、古墳時代後期の方形周溝墓（低墳丘の方墳）の影響を挙げて、円形周溝墓という名称を与えている。後述するように、古墳時代の低墳丘の方墳・円墳は、弥生時代の方形・円形周溝墓とは異なる体制下に存在したものであり、弥生時代の周溝を有する墳墓に用いる周溝墓という名称を与えるのは、社会的な背景を反映しない不適切な用語であると考えている。また、この報告書の段階では、周溝の全周するものもブリッジをもつものも一括して円形周溝墓としており、特にブリッジ付きのものを類別していない。

一方、ブリッジに着目した報告、論考等には、ブリッジ部分を「渡り」、「渡り状に掘り残した土橋」等と記して、①特にブリッジを取り上げて説明した報告、②周辺の類例を挙げたもの、③ブリッジ付き円墳の性格について論及したもの、が見られる。②には、埼玉県西台遺跡（文献 24）、同白幡本宿遺跡（剣持 1980）の報告があるが、いずれも周辺の限られた地域の類例を挙げるに留まっている。③には、白幡本宿遺跡の報告、岡山県塚の峰古墳群（関川 1980）、茨城県杉崎コロニー古墳群（大川編 1980）の報告がある。

白幡本宿遺跡の報告では、ブリッジの方向が一致している点、同時期に複数のブリッジ付き円墳が築造されていない点から、「ブリッジの伝統的規範性」を想定し、さらに立地が「独立域的性格」を示すことから「強力な血縁共同体家父長層の『家族墓』として捉えられると推察している。限定された資料による推測ではあるが、ブリッジに明確な意味を見出した数少ない報告である。

また、塚の峰古墳群の報告では、ブリッジそのものの性格に言及している。「橋梁」の機能として墳丘築造の際の盛土の運搬、埋葬時の棺の運搬および葬送者の通路、埋葬後の「墓参り」的な二次的祭祀行為のための通路の 3 点を挙げ、塚の峰例については、「埋葬主体に通じる墓道の一部」であり、さらに古墳外表面や周溝への土器等の供献が埋葬直後だけでなく一定期間、一定期日が過ぎた後も行われた際の通路として利用されたことを推測している。また、一般には、木、板を使用した橋梁が用いられたと推定し、塚の峰の橋梁は「当時通路の必要性が意識されていたという前提で、労働力の省略と相まって削り残された」とされているが、塚の峰 3 号墳のブリッジは、主体部の主軸と同じ方向に造られており、墳丘構築の過程で、計画的に配置されたと思われるもので、塚の峰 3 号のような小規模な周溝の場合は全掘する方がより簡便であると考えられる。

杉崎コロニー古墳群では、前方後円墳 2 基とブリッジ付き円墳に埴輪列があり、ブリッジ右側に埴輪列を配しているが、報告者はブリッジについて「陸橋部が前方部に代わる性格を有していたように思われる。「…陸橋部という表現は適切ではなく、むしろ『擬造出部』とでも称した方が」適切であるとの見解を述べているが、具体的な検討は示されていない。

他にブリッジ付き円墳を扱った論考には、塩野博氏の「古墳の外部施設—特に小規模古墳の周堀—」（塩野 1967）がある。塩野氏はこの中で、小規模古墳（円墳を対象としている）の周堀の形態として、A 形＝墳丘を一周するもの、B 形＝墳丘を二周するもの、C 形＝古墳

の羨道前面をあけた所謂馬蹄形を呈するもの、を挙げているが、この内、「金環のように接しようとしている」C形の一形態としたものが、ここでいうブリッジ付き円墳である。これについて「このC形の成立は、墓前祭的な一定の葬送儀礼が行なわれたことをもって始まったものであろうし、またそれが行なわれたと思われる例も発見されている」として鴻巣市箕田3号墳で、「周溝の開いた所」に須恵器大甕が出土していることを挙げている。ブリッジ付き円墳が小規模な古墳に見られること、ブリッジ部分に意図的に遺物を置いたことを窺わせる例があることに注目し、その機能を推測している点で、ブリッジ付き円墳の性格に示唆を与えた論考である。

- (2) ブリッジの幅は、特殊な一部の例を除いて、規模の大小にかかわらず0.4mから9.1mの間にあり、概略の平均は1.0mから1.5mである。方形周溝墓のブリッジと同じように、機能的に最小限度の幅であって、それ以上の発展はなく、通路としての幅に終わっている。
- (3) 造り出し付き円墳と帆立貝式前方後円墳の形態的検討については、遊佐和敏氏の論考が新しいが、ブリッジ付き円墳は、円墳の周溝の一部が掘り残されただけの条件を備えるものとして、明確に区別できると思われる。(遊佐和敏「所謂『帆立貝式古墳』の形態的分離について」『古代』第68号 早稲田大学考古学会 1980、同「所謂『帆立貝式古墳』地名表(40-58頁)」1982、同「造り出し付き円墳について」『史学』第52巻第2号(40-58頁)1982年)
- (4) 清水市坂田遺跡例出土の土器は、大半が弥生時代後期のものである。また、弥生時代後期にさかのぼるもので愛知県門前遺跡例等、墳丘の形態が隅丸方形に近く、かなり丸味を帯びたものがあり、長野・群馬県下にも類例があるが、ブリッジをもつ方形周溝墓、或は方墳の一範疇に考え、ブツリッジ付き円墳としてここでは扱わないことにする。弥生時代後期には円丘系の墳墓が既に在り、ブツリッジ付きのものが存在する確率が高い。東国でかなり認められるとすれば、特殊な系譜を考えなければならない。(佐藤甦信他『埴牛原』喬木村教育委員会 1971、飯塚誠編『西大室遺跡群』II 前橋市教育委員会 1981)
- (5) Bの中には、本来Aのものが、後世の削平によって上端が不明瞭になり、変化したものが含まれている可能性があり、その区別の困難なものがある。
- (6) 周溝底の単なる高低ではなく、明らかに特定部分が高く掘り残されたと見られるものを挙げている。一応は掘り下げられている点で、変形したタイプではあるが、上面から掘り残されたものと機能的に有機的な関連があると思われる。実際には、さらに多くの例が存在すると思われるが、報告書や写真の検討からは判断できないものが多かった。今後、周溝の調査については、周溝底の凹凸に問題意識をもって、少なくとも周溝部分は10cmコンターの記録を報告することが必要である。
- (7) 田中新史「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』第63号 早稲田大学考古学会 1977(1-21頁)の中で氏がB I型とされたものである。
- (8) 大久保古墳群は、低丘陵の尾根上に2、3基ずつ散在する17基から成る古墳群で、径20mクラスの円墳2基と10mクラスの15基によって構成される。大久保5号墳は、径20mクラスの円墳の一基で、粘土床を伴う割竹形木棺を内部主体にもち、鉄剣、刀子の他に滑石の琴柱形石製品2点と小玉25点を出土している。琴柱形石製品は、亀井正道氏が宮山型と分析されたものである。周溝内から出土した土師器は、ほぼ王泊4層出土の土器群に併行すると考えられるもので、琴柱形石製品の年代観とも矛盾しないと思われ、5世紀前葉に位置づけられる。

- (9) 青山透編『酒屋高塚古墳』 広島県教育委員会 1983
- (10) 鎌田元一「嵯峨野の古墳群に関する覚書」『嵯峨野の古墳時代』 京都大学考古学研究会 1971 (159-168 頁)
- (11) 第一表に示したように、円頭の小大刀が柏崎 5 号墳に、金銅装の大刀が赤堀地蔵山記載 漏 5 号墳、西台 3 号墳、大覚寺一号墳に、環頭大刀が大覚寺一号墳に出土している。
- (12) 白石太一郎「群集墳の諸問題」『歴史公論』63 - 古墳時代の社会 - 雄山閣 1981 (79-86 頁)

この中で白石氏は、古墳時代後期の群集墳と弥生時代～古墳時代前期の方形周溝墓・方形台状墓を取りあげた。両者の間には大きな断層があり、単純に断続なく存続する同一系譜の墳墓とするのは困難であるとして、同様の規模をもち、群集して存在する両者を区別されている。九州、特に塚原の例は方形周溝墓群が円形周溝墓に形を変えて存続したものとされ、「あくまでも首長墓としての大型古墳を構成する要素が規定的な要因として作用して生まれた」群集墳とは区別して考える立場を示している。北九州では、これらの周溝墓とは別個に 5 世紀末～6 世紀前半には群集墳が成立しているのに対し、古墳時代後期に至っても首長墓級の大型古墳の影響下に組み込まれない墳墓群が群集墳と併存することを指摘されている。

本論では、ブリッジ付き円墳もやはり大型古墳の影響下に組み込まれて存在していることに着目し、伝統性を強く残しながら、特殊な組み込まれ方を示す墳墓群として捉えている。また、氏が方形周溝墓の伝統を受けつぐものとされたブリッジをもつ方墳群についても、すでに古墳時代の体制下に編成されているものであり、群集墳とは別系統に編成されていく古墳群として捉えることが可能である。

- (13) 『清原古墳許及び岩原古墳群の周溝確認調査』 熊本県文化財保護協会 1982
- (14) 江田船山古墳出土の大刀の銀象嵌銘文に見える大王は、従来反正大王に比定されていたが、埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣銘によって、稲荷山の銘文と同じ雄略大王である可能性が濃厚となった。両古墳の遺物相も、5 世紀後半代を上限とする点で、雄略期とするのに年代的にも矛盾がないと思われる。この雄略期を画期として、古墳時代社会は大規模な再編成が図られたことが、各地の古墳の様相にも窺えるが、この 2 つの銘文は、両古墳の被葬者が、大王との直接の関連をもっていたことを示すといえよう。
- (15) 円墳群中の天王山古墳もブリッジをもっていた可能性があるが、これだけが周溝の調査がトレンチ調査であったため、ブリッジの有無は明らかではない。径 35m を測り、埴輪、須恵器を出土している。
- (16) 2 号墳（梅塚）出土の須恵器蓋杯 3 組は、1 組のつくりにはシャープさを欠くものの陶邑 TK23 型式の範囲に位置づけられる特徴をもち、TK23 ～ 47 古型式に考えられる伝稲荷山出土のものより新しい要素は見られない。また、伴出している土師器杯も須恵器の忠実な模倣を試みたシャープなつくりである。埴輪についても、梅塚出土の人物埴輪は、小型のぶ厚いつくりで、周辺の 6 世紀代の人物埴輪とは趣が異なり、5 世紀代にさかのぼる要素を示すものと思われる。
- (17) 稲荷山古墳の周堤帯造り出しは、外堤に突出して付設された南北 27m、東西 25m の方形のもので、造り出しから伸びるブリッジに沿って外周溝に落ち込んだ状態で壺を持った人物、盾を持った武人、巫女、胃をかぶった武人、鞆を背負った武人等の多数の人物埴輪と馬形埴輪、神に供献する神饌などの形象埴輪が出土している。また、二子山古墳の周堤帯造り

出しは、長さ 28m、基部の幅 31m、前面の幅 43m の台形状で、外堤に突出することなく外周溝内に付設されているが、この造り出しからも人物埴輪等が出土しており、稻荷山と同様の性格をもつ施設であると考えられる。

(18) 『第 16 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』「行田市瓦塚古墳周堀の調査」埼玉考古学会、埼玉県遺跡調査会、埼玉県教育委員会 1983

杉崎茂樹『瓦塚古墳』—埼玉古墳群発掘調査報告書第 4 集— 埼玉県立さきたま資料館 1986

(19) 埼玉古墳群では、主要な前方後円墳にブリッジが見られ、その変化も追えるようであり、その形態的変化と意味の変容が注目される。しかしながら、公園整備に伴う緊急のトレンチ調査によって外部施設の確認が不十分なまま復元された例があり、外部施設の保存を目的とした十分な確認調査が継続されることを望みたい。

(20) この 2 例は、峯岸山 299・300 号で、内部主体は箱式石棺である（報告書では「竪穴式石槨」）。299 号は、方形透しのあるナデ調整の円筒埴輪をもち、埴輪列は墳頂外縁にめぐっていたものと推定される。300 号は、299 号よりやや小規模で埴輪はなく、299 号の周溝を避けて構築されているが、出土した土師器は 5 世紀中葉を下るものではなく、299 号の直後に築かれたものと思われる。この 2 基は、全長 50m の帆立貝式前方後円墳、全長 43m の前方後円墳と 4 基並んでおり、299 号は、周溝の切り合いから隣接する前方後円墳より早く占地している。他の一基が先行するとしても、峯岸山古墳群形成の初源期の古墳といえよう。

(21) 中流域の初源の様相を示す古墳の一つである野毛大塚古墳は、1946（昭和 21）年の航空写真に南側に造り出し部が認められ、ブリッジ状に掘り残されている可能性があるといわれていたが（十菱駿武・川上真紀子他『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会 1983）、1990 年からの 4 カ年にわたる発掘調査によって、全長 82 m の帆立貝式前方後円墳で、前方部の西に隣接して造り出しをもつことが判明した。

(22) 富岡 5 号墳、壇塚古墳、オクマン山古墳に内部主体に向う形象埴輪列が見られる。

(23) 仁徳陵古墳西側造り出しに手づくねミニチュア壺、須恵器杯が、塚大塚山古墳に多量の土師器、また愛知県名古屋市断夫山古墳に多量の須恵器杯と子持高杯の出土が伝えられている。

(24) このブリッジは、前方部前面の中央にあり、底辺の幅 5.2m、上面の幅 2.5m、高さ 60cm で、一旦周溝を掘ったのち、再度土砂を盛り上げてつくられており、側面には小石が葺かれている。また、ブリッジの盛土中には埴輪片が混入しており、これが墳丘への埴輪樹立後に築かれたことが推定されている。（神戸市教育委員会 1982）

(25) 調査された久保哲三氏の御教示によると、前方部のブリッジは、幅約 1m で、ブリッジの墳丘側、外堤側の両脇に一對ずつのピットが検出されているという。この 2 対のピットがブリッジに伴うどのような構造のものかは、想像の域を出ないが、ブリッジの両端を画した特別の意味をもつ施設が設けられていたことが想定できよう。

尚、この前方部のブリッジは、墳丘から外堤につながることを確認されているが、後方部西辺、およびくびれ部西側のブリッジについては、トレンチ調査では全容を明らかにできなかったため、元島名将軍塚のような中央の途切れるものである可能性も残されるといわれる。また、ピットは、前方部のブリッジにのみ検出されており、その特殊性が注目される。

- 1 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡群発掘調査報告』Ⅰ 1976
- 2 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡群発掘調査報告』Ⅲ 1978
- 3 青木豊昭『安保山古墳群』 福井県教育委員会 1975
- 4 青山透編『酒屋高塚古墳』 広島県教育委員会 1983
- 5 赤星直忠『厚木市文化財調査報告書』第8集 厚木市教育委員会 1967
- 6 甘粕健「稻荷前古墳群」『古代の都筑をまなぶ』 緑区郷土史研究会考古部会 1981 (27-42頁)
- 7 安藤信策「大覚寺古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会 1976 (80-115頁)
- 8 安藤鴻基「丸塚古墳」『日本考古学年報』27 日本考古学協会 1974 (55頁)
- 9 飯塚恵子・田口一郎編『元島名将塚古墳』 高崎市教育委員会 1981
- 10 飯塚誠編『西大室遺跡群Ⅱ』 前橋市教育委員会 1980
- 11 池上悟他「平山遺跡第9次調査」『日野市遺跡調査会年報』Ⅱ 日野市教育委員会 1978 (19-42頁)
- 12 石井寛・倉沢和子他『折本西原遺跡』 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1980
- 13 石山勲「剣塚第1号墳」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXⅣ 福岡県教育委員会 1978 (7-39頁)
- 14 石山勲「七曲山第3号墳」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXⅦ 福岡県教育委員会 1979 (184-191頁)
- 15 今橋浩一「円形周溝」『針ヶ谷北通遺跡発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会 1975 (39-47頁)
- 16 上野精志編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXⅡ 福岡県教育委員会 1978
- 17 緒方勉・高木正文『久保遺跡』 熊本県教育委員会 1975
- 18 大川清編『杉崎コロニー古墳群』 日本窯業史研究所 1980
- 19 大沢昌弘・田部井功他『袋・台遺跡』 吹上町教育委員会 1982
- 20 大山真充他『岡の御堂古墳群調査概報』 綾南町教育委員会 1977
- 21 小久貫隆史「草刈A区(第1次)の調査」『千原台ニュータウン』Ⅱ-草刈遺跡A区(第一次調査)鶴牧古墳群・人形塚- (財)千葉県文化財センター 1983 (10-310頁)
- 22 岡田威夫・御堂島正編『横浜市道高速2号線埋蔵文化財試掘報告書』 同調査団 1980
- 23 緒方勉編『清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査』 熊本県文化財保護協会 1982
- 24 尾崎喜左雄・松島栄治他『前橋天神山古墳図録』 前橋市教育委員会 1970
- 25 大塚初重・小林三郎編『勝田市史』別編Ⅰ 虎塚壁画古墳 勝田市史編さん委員会 1978
- 26 小淵良樹他『広木大町古墳群』 埼玉県遺跡調査会 1980
- 27 金井亀喜編『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 広島県文化財協会 1979
- 28 金井塚良一他『柏崎古墳群』 考古学資料刊行会 1968
- 29 金丸誠『佐倉市立山遺跡』 (財)千葉県文化財センター 1983
- 30 鎌田元一「嵯峨野の古墳群に関する覚書」『嵯峨野の古墳時代』 京都大学考古学研究会

- 1971 (159-168頁)
- 31 上村淳一他『千葉東南部ニュータウン』6-椎名崎遺跡- (財)千葉県文化財センター
1979
- 32 河上邦彦編『奈良県古墳発掘調査集報』II 奈良県立橿原考古学研究所編 1978
- 33 北原勝司他『武蔵国府関連遺跡調査抄報』I-白糸台遺跡の調査1- 府中市教育委員会
1978
- 34 『行田市No.41遺跡』 行田市教育委員会 1981
- 35 久々忠義「江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告』上市町教育委員会 1981 (12-14
頁)
- 36 隈昭志他『塚原』 熊本県文化財保護協会 1975
- 37 『清原古墳許及び岩原古墳群の周溝確認調査』 熊本県文化財保護協会 1982
- 38 『清原古墳許及び岩原古墳群の周溝確認調査』 熊本県文化財保護協会 1982
- 39 蔵本富美男・山本貴之『常盤自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』I (財)茨城県教
育財団 1980
- 40 栗田則久他『千葉東南部ニュータウン』13-上赤塚1号墳・狐塚古墳群- (財)千葉県文
化財センター 1982
- 41 栗原文蔵・田部井功「天王山・梅塚古墳他周堀発掘調査概要」『資料館報』No. 6 埼玉県
立さきたま資料館 1975 (7-9頁)
- 42 剣持和夫「古墳と出土遺物」『白幡本宿遺跡』 埼玉県教育委員会 1980 (21-30頁)
- 43 小出義治「亀塚古墳」『狛江市史』 狛江市史編纂委員会 1985 (119-188頁)
- 44 神戸市教育委員会『史跡五色塚古墳』 神戸市教育委員会 1982
- 45 駒宮史朗他『青柳古墳群発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会 1973
- 46 埼玉県教育委員会『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧』II 埼玉県教育委員会 1979
- 47 酒井仁夫「八並遺跡検出周溝墓について」『九州考古学』No. 52 九州考古学会 1976 (19
-23頁)
- 48 佐藤甞 信『埴牛原』 喬木村教育委員会 1971、
- 49 塩野博「古墳の外部施設-特に小規模古墳の周堀-」『埼玉考古』第5号 埼玉県考古学
会 1967 (24-30頁)
- 50 塩野博・駒宮史朗『西台遺跡』 埼玉県遺跡調査会 1970
- 51 塩野博・駒宮史朗他『鹿島古墳群』 埼玉県教育委員会 1972
- 52 茂木雅博編『常陸須和間遺跡の研究』 1972
- 53 『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 静岡県教育委員会 1965
- 54 設楽博巳「根本古墳」『筑波古代地域史の研究』 筑波大学 1982 (59-83頁)
- 55 島巡賢二・間壁忠彦「赤井西古墳群2号」『倉敷考古館研究集報』10 倉敷考古館 1974
(160-165頁)
- 56 十菱駿武・川上真紀子他『野毛大塚古墳』 世田谷区教育委員会 1983
- 57 白石太一郎「群集墳の諸問題」『歴史公論』63-古墳時代の社会- 雄山閣 1981 (79-86
頁)
- 58 菅谷浩之他『長沖古墳群』 児玉町教育委員会 198011 杉崎茂樹『瓦塚古墳』-埼玉古
墳群発掘調査報告書第4集- 埼玉県立さきたま資料館 1986

- 59 杉山博久・山本守男「厚木市天神遺跡の調査」『第一回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』同準備委員会 1977 (8-9頁)
- 60 鈴木裕芳『久慈吹上』日上市教育委員会 1982
- 61 勢田広行他『羽山塚古墳調査報告書』熊本県文化財保護協会 1979
- 62 清藤一順「星谷津1号墳」『佐倉市星谷津遺跡』(財)千葉県文化財センター 1978 (112-118頁)
- 63 関川尚功編『引ノ山古墳群』五条市教育委員会 1980
- 64 曾根博明・平方幸雄・重田薫「広畑古墳群」『秦野下大槻』秦野市教育委員会 1974 (23-41頁)
- 65 千賀久編『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県立橿原考古学研究所 1981
- 66 高瀬哲郎・岩永政博他「大門西遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』I 佐賀県教育委員会 1980 (13-120頁)
- 67 高根和信・大森信秀他『上出島古墳群』茨城県岩井市教育委員会 1977
- 68 鷹野光行「13号墳」『東間部多古墳群』上総国分寺台遺跡調査団 1974 (112-114頁)
- 69 高畑知功・栗野克己他「小中古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7 岡山県文化財保護協会 1975 (83-145頁)
- 70 田中新史「諏訪台1号墳」『諏訪台古墳群調査概要』上総国分寺台遺跡調査団 1975 (1-14頁)
- 71 田中新史編『南向原』上総国分寺台遺跡調査団 1976
- 72 田中新史「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』第63号 早稲田大学考古学会 1977 (1-21頁)
- 73 田中新史「1977年度古墳調査について」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団 1978 (7-11頁)
- 74 築比地秀行『砧中学校遺跡発掘調査略報』砧中学校遺跡調査団 1979
- 75 築比地秀行・菊池誠一「円形周溝墓」『下山遺跡』II 世田谷区教育委員会 1985 (67-70頁)
- 76 常川秀夫他『蛭田宮土山古墳群』栃木県那須郡湯津上村 1972
- 77 『調布市下布田遺跡』調布教育委員会 1979
- 78 『調布のいせき』調布市教育委員会 1982
- 79 『調布市飛田給遺跡』調布市教育委員会 1982
- 80 寺田良喜・三浦淑子編『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会 1999
- 81 中牟田賢治『千塔山遺跡』基山町遺跡発掘調査団 1978
- 82 中森秀夫「横枕1・2号墳」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980
- 83 西田和己・岩永政博他「六本黒木遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』I 佐賀県教育委員会 1980 (121-176頁)
- 84 二宮忠司・渡辺和子『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第54集 福岡市教育委員会 1980
- 85 日本考古学協会『関東における古墳出現期の諸問題 資料』日本考古学協会 1981
- 86 野間重孝「宮崎市下北方古墳群をめぐって」『宮崎考古』第8号 宮崎考古学会 1982 (35-37頁)

- 87 橋本輝彦『箸墓古墳』—纏向遺跡第109次発掘調査資料— (財) 桜井市文化財協会・桜井市教育委員会 1998
- 88 巾隆之編『下郷』 群馬県教育委員会 1980
- 89 菱田哲郎・高橋克尋他『行者塚古墳 発掘調査概報』 加古川市教育委員会 1997
- 90 福田正継・中野雅美他「塚の峯遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』22 岡山県文化財保護協会 1977 (195-277頁)
- 91 古内茂・伊藤智樹他『千葉東南部ニュータウン』12—南二重堀遺跡— (財) 千葉県文化財センター 1983
- 92 埋蔵文化財研究会『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題 資料』埋蔵文化財研究会 1982
- 93 埋蔵文化財研究会『定型化する古墳以前の墓制』 埋蔵文化財研究会 1988
- 94 前橋文化財研究会編『富田遺跡群・西大室遺跡・清里南部遺跡群』 前橋文化財研究会 1980
- 95 増田逸朗・水島孝行他『清水谷・安光寺・北坂』関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書X I 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 96 馬目順一他『八幡台遺跡』 (財) いわき市教育文化事業団 1980
- 97 松村一昭『赤堀村峯岸山の古墳』1 赤堀村教育委員会 1975
- 98 松村一昭『赤堀村峯岸山の古墳』2 赤堀村教育委員会 1976
- 99 松村一昭『赤堀村地蔵山の古墳』1 赤堀村教育委員会 1977
- 100 松村一昭『赤堀村地蔵山の古墳』2 赤堀村教育委員会 1978
- 101 松本和男・二宮治夫他「狼谷遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7 岡山県文化財保護協会 1975 (1-43頁)
- 102 向田裕始編『下山遺跡群発掘調査報告』 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター 1980
- 103 村井真輝編『境古墳群・境遺跡』 熊本県教育委員会 1980
- 104 目黒吉明他『母畑地区遺跡発掘調査報告IX』—早稲田古墳群—福島県教育委員会 1982
- 105 森田勉・馬田弘稔他『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXX I 下巻 福岡県教育委員会 1979
- 106 山口辰一・豊巻幸正「墳墓」『武蔵国府関連遺跡調査報告』I—白糸台地域の調査1—府中市教育委員会 1979 (35-38頁)
- 107 山崎武編『生出塚遺跡』 鴻巣市遺跡調査会 1981
- 108 遊佐和放「所謂『帆立貝式台墳』の形態的分離について」『古代』第68号 早稲田大学考古学会 1980 (40-58頁)
- 109 遊佐和放「造り出し付き円墳について」『史学』第52巻第2号 1982

(第1表 ブリッジ付き円墳一覧について)

- (1) 上赤塚1号墳は、舌状台地の先端部に占地し、周溝は尾根側のみに検出され、斜面側には廻っていないようである。尾根の中央部でブリッジが掘り残され、周溝は内湾気味の八の字状を呈しており、ブリッジ付き円墳の周溝としては特殊な形態であるが、ブリッジ南側の周溝内で土器が集中して出土していること、また、内部主体の主軸の方向がブリッジと一致することなどブリッジ付き円墳の特徴を備えている。報告書は、周溝内の土器集中出土地

点が他より深く掘り込まれ、その方向から見る墳丘のみかけの高さが最も高くなることから、その部分を古墳の正面として捉える見解を示している。また、器種が高杯、埴、手捏ね土器に限られていることを加えて、「墳丘構築にともなう周溝内祭祀が行われた可能性を提示している。

上赤塚1号墳は、石枕、立花、石製模造品と鉄製農工具を出土しており、同様の遺物を出土した千葉市七廻塚古墳、同東寺山石神2号墳とともに5世紀前半代の当地における大型円墳の一つとして傑出した存在である。

- (2) 宮崎県下北町塚原では、地下式横穴を内部主体とするブリッジ付き円墳の例が3例検出されている。地下式横穴はブリッジ部分から墳丘中央に向けて造られ、5世紀後半から6世初頭のもものと推定されている。規模は、1基が径30m、他の2基が径20mで、いずれも周溝幅3mと報告されている。(野間1982)

表1 ブリッジ付き円墳一覽

単位m ()内は推定 埴輪 ○は円筒 △は形象

番号	県名	古墳名	墳丘規模	盛土高	ブリッジ幅	類型	埴輪	基石	内部施設	刀剣	鉄鏃	刀子	装身具	土師器	須恵器	その他	推定期	文献
1	福島	八幡台第1号墳	15.0	—	1.4	A								○			I新	1
2	"	" 2 "	10.0	—	2.0	A								○			II	"
3	"	早稲田2号墳	14.56	—	1.0	B ₁			横穴式石室					○			III	2
4	"	" 4 "	15.4	—	5.2-	B								○			(III)	"
5	"	" 5 "	17.0	—	1.0	B								○			(III)	"
6	"	" 6 "	17.7	—	2.6	B								○			(III)	"
7	"	" 10 "	17.8	—	2.0	B								○			(III)	"
8	"	" 14 "	16.3	—	3.2	B								○			(III)	"
9	茨城	久慈吹上1号墳	17.5	—	1.0	C ₂	△		横穴式石室	○	○			○	○		III古	3
10	"	大塚7号墳	18.0	(0.65)	(1.4)	A												4
11	"	" 9 "	(12.9)	—	(1.1)	C												"
12	"	上出島1号墳	18.0	0.5	1.0	B				○								5
13	"	杉崎コロニー88号墳	19.5	2.5	2.45	C ₂	△		木棺直葬	○	○			○			II	6
14	"	" 90 "	15.0	2.6	1.0	B								○			II新	"
15	"	須和間9号	10.7	0.85	2.1	B								○			II	7
16	"	根本古墳	20.0	0.5	—	Dor E	△							○			II	8
17	栃木	蛭田富士山D-5東	9.6	—	1	B' ₁			箱式石棺2					○	○		II	9
18	"	" D-14	12.0	—	(3.7)	B ₂			粘土槨	○	○			○			I	"
19	埼玉	さきたま2号墳	29.0	—	2.3~4.6	D	△							○			II	10
20	埼玉	さきたま4号墳	21.0	—	1.6~2.9	B	○							○			II	10
21	"	" 5 "	31.0	—	7.0	B	○							○			II	"
22	"	" 6 "	25.0	—	5.6	B	△							○			II	"
23	"	" 7 "	26.0	—	(5.0)	B								○			II	"
24	"	針ヶ谷北通円墳	9.7	—	1.8	A								○			I古	11
25	"	白幡本宿2号墳	11.2	—	1.3	A	△										II新	12
26	"	" 3 "	12.8	—	1.5	A											"	"
27	"	" 4 "	10.6	—	4.3-										○		II	"
28	"	南塚原第3号墳	21	—	—	(B)			(礫梯)					○			II	13
29	"	" 5 "	23	1.0	—	(B ₂)	○		横穴式石室	○	○					銀飾りの弓	III	"
30	"	長沖12号墳	11.0	1.0	3.2	C ₂	○		竪穴式石室					○			II	14
31	"	" 15 "	19.0	—	0.7	A	○										II	"
32	"	" 16 "	22.0	—	1.0	A											"	"
33	"	" 22 "	17.4	2.1	1.2	C ₁	△		(礫梯)					○			II	"
34	"	" 23 "	—	1.76	—	(A ₂)	○		横穴式石室	○	○			○		銀飾りの弓	III	"
35	"	" 27 "	16.0	1.2	5.0-	B ₂	○		竪穴式石室					○			II	"
36	"	" 28 "	16.5	1.0	0.8	A	○			○							II	"
37	"	広木大町1号墳	—	—	—	(B)												15
38	"	" 2 "	18.0	—	—	(B)	△(○)										II	"
39	"	" 9 "	7.5	—	1.0	(B)											"	"
40	"	" 24 "	7.5	—	4.0-	B	△							○			II	"
41	"	" 32 "	18	—	—									○			"	"
42	"	行田市No.41 1号墳	10+	—	1.2	B								○			II	16
43	"	行田市No.41 2号墳	14	—	2.4	C								○			II	"

番号	県名	古墳名	墳丘規模	盛土高	ブリッジ幅	類型	墳輪	墓石	内部施設	刀剣	鉄鍔	刀子	装身具	土師器	須恵器	その他	推定時期	文献
44	埼玉	鴻巣市箕田3号墳				B												17
45	"	生田塚1号墳	13	—	1.2	B	○										II	18
46	"	" 4 "	12	—	1.2~1.8	B											II新~	"
47	"	" 5 "	15.9	—	1.2	B												"
48	"	柏崎5号墳	30	—	2.5	B ₂			横穴式石室(胴張り)	○	○	○	○			鋌飾りの弓	III	19
49	"	清水谷1号墳	14.4	—	1.8	C												20
50	"	鹿島第1号墳	16	2.85	4~4.2	B ₁	○	○	横穴式石室(胴張り)	○							III	21
51	"	" 12 "	24.0	1.63	2.5	B ₁	○		"	○	○	○				鋌飾りの弓	III	"
52	"	" 13 "	19	2.0	1.4	(B ₁)	○		"	○	○	○				鋌子	III	"
53	"	" 14 "	13.5	1.08	—	(B ₁)			"									"
54	"	" 15 "	12.0	1.33	4.2-	B ₁	○		"							人骨		"
55	"	" 19 "	18.0	1.5		(B ₁)			"		○	○					III	"
56	"	" 20 "	20.0	1.89	(2.2)	E ₂			"	○	○	○					III	"
57	"	" 22 "	14.2	1.19	0.85	B ₁			"									"
58	"	" 24 "	21.5	1.94		(B ₂)			"	○	○	○					III	"
59	"	" 26 "	(10.0)	0.92		(B ₁)			"	○								"
60	"	" 34 "	14.0	0.97		(B ₁)			"	○							III新	"
61	"	袋・台2号墳	25	—	1.1	B											II	22
62	"	中井1号墳	20.5	—	5.5	(B)	△		横穴式石室(胴張り)	○								23
63	"	西台2号墳	26~27	—	—	(B)			"	○	○	○	○				III	24
64	埼玉	西台3号墳	23	2.4		B ₁			"	○		○				金銅装太刀	III新	24
65	"	" 5 "	(25)	—	2.0	B ₁			横穴式石室(胴張り)	○							(III新)	"
66	群馬	赤堀峯岸山283	21.5	0.9+	—	(B ₁)	○		横穴式石室	○	○	○	○	○			III	26
67	"	" 286	20.0	0.55	—	B ₂	△	○	箱式石棺			○	○				II	25
68	"	" 299	19.0	1.44	0.8~1.4	B ₁ (D)	○		" 2			○					I新	"
69	"	" 300	17.8	1.65	2.5	B ₁			"	○			○				I新	"
70	"	" 記載漏 4	13.0	—	1.5	B ₂	△		横穴式石室	○	○	○	○				III	"
71	"	" " 9	15.3	0.7	5.1	B ₂	△	○	箱式石棺	○	○	○	○				II新	"
72	"	" " 12	33.0	1.0		(F)			横穴式石室	○	○	○	○			鋌子	III	26
73	"	赤堀地蔵山3	19.0	0.9	3	F			"	○	○	○	○					28
74	"	" 4	16.5~22.5	1.05	(0.4~4.5)	F			"	○	○	○	○	○		馬具, 鋌, 釘 鉄斧	III	"
75	"	" 5	11.7			(F)			(")	○			○				III	"
76	"	" 17	12.0	0.53	6.0	F			"			○				鋌状鉄器	III新	"
77	"	" 18	13.5	—	—	(F)	○		"				○				III新	"
78	"	" 24	24.5	10		B ₂ (D)			"				○				III	"
79	"	" 記載漏 1	9.8	0.3		F			(")				○				III新	27
80	"	" " 2	11.5	0.35	0.9	B ₂ (E)			"	○	○	○				鉄釘		"
81	"	赤堀地蔵山記載漏 5	15.0	0.45	2.5			○	横穴式石室	○	○	○	○				III	"
82	"	"	13	28.0	0.9+	4.4	B ₁	△	"	○	○	○	○				III	"
83	"	"	22	18.0	0.9+	0.8	A ₂	△	"	○	○	○				砥石	III	"
84	"	"	24	8.0	—		B		箱式石棺								II新	"
85	"	"	26	—	0.35		(F)		横穴式石室								III	"
86	"	"	27	7.6	0.36		F		"								III	"

番号	県名	古墳名	墳丘規模	盛土高	ブリッジ幅	類型	埴輪	墓石	内部施設	刀剣	鉄鍔	刀子	装身具	土師器	須恵器	その他	推定期	文献
87	群馬	下郷S Z 28	17.08	—	1.9	B								○			I	29
88	〃	〃 29	12.2	—	1.8 0.4	E			土壙					○			I	〃
89	〃	〃 37	(15±)	—	3.0	B	○							○			II	〃
90	〃	〃 38	17.0	—	0.8	(B)								○			II	〃
91	〃	おとうか山古墳	29.5	—	3.0	B		○						○			II	30
92	〃	東原2号墳	11.0	—	—	(B)	△		竪穴式石室					○			II	〃
93	〃	荒砥70号墳	35	6±	3.0	B			横穴式石室	○	○	○	○	○	○	鉄飾りの弓 (馬具)	III	〃
94	東京	白糸台I古墳	15.0+	—	1.5	A					○			○			II	31
95	〃	白糸台V10-S Z1	9.3	—	0.5	A					○			○				32
96	〃	〃 S Z3	13.4	—	1.5	A								○			II	〃
97	〃	平山M3	15	—	1.5	(A)								○				33
98	〃	砧中8号	13.4	—	1.5	A								○	○		II	34
99	〃	下布田1号	12.3	—	—	(B)												35
100	〃	上布田1号	31±	—	—	A											I	36
101	〃	飛田給1号	15±	—	—	(A)								○			I	37
102	〃	〃 3号	14±	—	1.0	B								○			II	〃
103	〃	下山5次円形周溝	10.2	—	1.5	B												38
104	千葉	南向原1号墳	19.1	1.25	2.3	C			木棺直葬2		○			○	○		II新	39
105	〃	東間部多13号墳	20	0.35	0.5	B								○			II	40
106	〃	稲荷台209号墳	18.3	1.9	2.5	B			木棺直葬2	○	○	○		○			II	41
107	〃	諏訪台7号墳	20	0.5	3	C			木棺直葬3			○		○			II新	42
108	〃	丸塚古墳	30	4.0	10.4-	B			横穴式石室	○	○	○	○	○	○	馬具, 骨鍔	III	43
109	〃	西ノ原4号墳	16.4	—	14-	B'										鉄斧		44
110	〃	上赤塚1号墳	31±	2.2+	11.9±	[B]	注1		木棺直葬2	○			○	○		石枕, 立花 石製模造品 鉄製農具	I	45
111	〃	狐塚2号墳	21.5	2.1+	2.2	C			木棺直葬	○	○	○		○			II新	〃
112	〃	南二重堀2号墳	19.0	1.2-	7.5	B			箱式石棺 土壙	○	○			○		鏃子	II新	46
113	〃	草刈A区107	13.0	—	2±	B								○			II	47
114	〃	〃 108	15.2	—	—	(B)								○			II	〃
115	〃	星谷津1号墳	17.0	—	3.0	B								○			II	48
116	〃	立山3号墳	21.0	1.2		B			木棺直葬2		○	○					II新	49
117	〃	〃 3号円形周溝	9.8	—		B								○			II	〃
118	神奈川	広畑3号墳	20±	1.2	5.0-	B			横穴式石室	○	○	○	○	○			III	50
119	〃	〃 1号円墳址	10.5	—	0.6	C												〃
120	〃	〃 4号	11.8	—	1.7	B								○			II新	〃
121	〃	登山古墳	20.0	2.0	1.1	D	△										II	51
122	〃	林天神第1区	23	—	—	A												52
123	〃	折本西原 1号円形周溝	18	—	1.2	A								○	○		II	53
124	〃	清水ヶ丘1号墳	19.0	—	1.3	B'								○	○		II	54
125	静岡	薬子塚古墳	24	1.0±	15.5±	E			粘土床	○	○	○				鉄斧	I新	55
126	三重	横枕2号墳	20	—	—	(B)			横穴式石室	○	○			○			III	56
127	奈良	弘ノ山6号墳	6.0	—	1.7	A			木棺直葬					○			II	57
128	〃	〃 8	8.4	—	—	(B)	○							○			II	〃
129	京都	大覚寺1号墳	50	9.1	3±	A			横穴式石室	○	○	○	○	○		飾り太刀 馬具	III古	58

番号	県名	古墳名	墳丘規模	盛土高	ブリッジ幅	類型	埴輪	葺石	内部施設	刀剣	鉄鍔	刀子	装身具	土師器	須恵器	その他	推定期	文献
130	京都	大覚寺2号墳	30	—	0.5	(D)			横穴式石室								III	58
131	岡山	塚の峰3号墳	14	1.3	1.0				木棺直葬2								II	59
132	〃	狼谷遺跡2号周溝	6	—	0.4	B												60
133	〃	小中4号墳	10.5	—	0.5	B			土壇 箱式石棺		○	○			馬具		II	〃
134	〃	半俵3号墳	8±	—	—	(B)	○		横穴式石室								III	61
135	〃	赤井西2号墳	19±	—	0.8±	B			〃	○	○				馬具 鉄釘, 鏃		III	〃
136	広島	四拾貫小原17号	14.4	—	1.3	B	⊙										II	62
137	〃	大久保5号墳	22.5	2.7	0.8	B			粘土床	○	○				滑石製琴柱 形石製品		I	63
138	〃	〃 7 〃	7.0	0.4	(1.2)	B											I	〃
139	〃	仁王丸8号墳	10.5	3.1	1.0	A											II	〃
140	香川	岡の御堂2号墳	12	1.25	4±	B	○		木棺直葬	○	○				(三角板鋌 留)短甲		I新	64
141	取島	青木FSX02	12.0	0.65	1.0-	A			合口土器棺 土壇			○					I	65
142	〃	〃 FSX15	10.0	—	—	(B)											I新	〃
143	〃	〃 BSX02	16.0	1.1	2.0	A			(木棺直葬)								II	66
144	富山	江上ASD03	12	—	3±	A											I	67
145	福岡	七曲山3号墳	20	1.3	3.5	A			箱式石棺 木棺直葬, 石蓋土壇	○							I古	68
146	〃	八並円形周溝	19.5	—	—	(A)			箱式石棺								I	69
147	〃	吉武塚原1号墳	16	—	1.0±	(E)			横穴式石室						馬具		III	70
148	〃	〃 2号墳	7.5	—	—	(F)			横穴式石室	○	○	○			馬具, 鋤先		III	〃
149	福岡	吉武塚原4 〃	13	2.8	5.5-	E			竪穴系横口式石室	○	○	○	○	○	馬具, 手鎌, 斧		II新	70
150	〃	〃 5 〃	8.0	—	1.8	(E)			横穴式石室	○	○	○	○	○	馬具, 釘, 斧		III古	〃
151	〃	〃 6 〃	13.0	3.0	1.6	B			竪穴式石室	○	○	○	○	○	鏹羽口		II	〃
152	〃	〃 7 〃	10.5	—	2.1	E			竪穴系横口式石室	○					馬具, 石突		II新	〃
153	〃	〃 8 〃	12±	—	1.5	(E)			横穴式石室								III	〃
154	〃	ハサコの宮1号墳	18	1.3	—	(B)			(横穴式石室)								(III古)	71
155	〃	〃 2 〃	13.5	2.55	4.0-	B			横穴式石室								III	〃
156	〃	汐井掛4号墳	10	—	1.5	C			〃			○	○	○			III	72
157	〃	〃 5 〃	6.5	—	1.0±	C			〃						鉄斧		III	〃
158	〃	〃 7 〃	7.0±	—	1.5	E			〃								III	〃
159	佐賀	八幡古墳	27	2.0	1.0±	A	○								馬具, 鉄釘		II新	73
160	〃	一本谷	9.3	—	1.0±	B			木棺直葬								I	74
161	〃	大門西ST039	14.0	—	1.0	A									鋤先		I	75
162	〃	〃 ST048	10.0	—	1.1	(B)			横穴式石室								(III)	〃
163	〃	六本黒木ST043	15±	—	3.3	F			横穴式石室	○	○				馬具		III	76
164	〃	〃 ST044	7.8	—	0.6	B											〃	〃
165	熊本	羽山塚古墳	41.0	—	4.1	A									鋤先		I新	77
166	〃	岩原狐塚	20	—	12±	B			横穴式石室								III古	78
167	〃	〃 下原古墳	31	4.0	4±	B	○										II	〃
168	〃	塚原M3	13.0	—	4.0	B			(組合式石棺)	○	○	○	○	○			II古	79
169	〃	〃 M4	25.0	—	2.6	B											II新	〃
170	〃	〃 M16	13.5	—	2.5	B			箱式石棺								〃	〃
171	〃	〃 M23	8.0±	—	1.8±	B				○							II	〃
172	〃	〃 M24	7.0±	—	1.75	B			(箱式石棺)								〃	〃

番号	県名	古墳名	墳丘規模	盛土高	ブリッジ幅	類型	輪壇	墓石	内部施設	刀剣	鉄鍔	刀子	装身具	土師器	須恵器	その他	推定期	文献
173	熊本	塚原M25	(7.0)	—	—	(B)			(箱式石棺)									79
174	〃	〃 M26	16.5	—	2.0	B			(〃)	○		○	○	○	馬具, 馬齒		II新	〃
175	〃	〃 M27	11.7	—	1.8	B			(〃)					○	馬具, 馬齒		〃	〃
176	〃	〃 M28	10.0	—	2.5	B			(組合式石棺)					○			II	〃
177	〃	〃 M29	9.0	—	2.0	B			箱式石棺								〃	〃
178	〃	〃 M31	(8~9)	—	—	(B)			(箱式石棺)								〃	〃
179	〃	〃 M32	(18)	—	—	(B)								○			II	〃
180	〃	〃 M9	13.3	—	—	(B)			箱式石棺		○				鉄錐		〃	〃
181	〃	〃 M11	11.5±	—	1.2	B						○					II	〃
182	〃	〃 M12	8.5	—	1.2±	B			箱式石棺				○				II	〃
183	〃	〃 M13	10.0	—	1.8	B			〃			○	○				II	〃
184	〃	〃 M14	(9.4)	—	—	(B)			〃								〃	〃
185	〃	〃 M15	(22.0)	—	—	(B)											〃	〃
186	〃	〃 M17	7.5	—	2.1	B			箱式石棺								〃	〃
187	〃	〃 M18	(9.0)	—	—	(B)			〃								〃	〃
188	〃	〃 M19	7.8	—	1.9	B			〃								〃	〃
189	〃	〃 M34	10.5	—	2.2	B											〃	〃
190	〃	〃 M35	(8.8)	—	—	(B)											〃	〃
191	〃	〃 MO5	18.5	—	1.0	B			組合式石棺	○			○		楠, 人骨2 体		I新	〃
192	〃	〃 MO6	(13.0)	—	—	(B)							○				I	〃
193	〃	〃 MO7	17.7	—	—	(B)			竪穴式石室				○				I新	〃
194	〃	〃 MO8	(20.0)	—	—	(B)							○				〃	〃
195	熊本	塚原MO9	(15)	—	—	(B)							○					79
196	〃	〃 M6	34.5	—	3.5±	B							○				II	〃
197	〃	〃 M7	27	—	—	(B)							○				I新	〃
198	〃	〃 M8	12.8	—	4-	B			横口式石棺						M6を切る		II	〃
199	〃	〃 M20	(10)	—	—	(B)							○	○			II	〃
200	〃	くぬぎ塚	(26)	3.0	3.2±	B			横穴式石室				○				III古	〃
201	〃	境2号墳	16	—	—	B			〃	○	○	○	○		馬具		III	80

古代東国における地域圏の成立過程

図版一覧

序章 地域的特性と分析視角

第1節 東国水域圏の原風景

- 図1 富士山の可視圏
- 図2 衣川流海および刀禰川古代水脈想定図
- 図3 常陸国風土記地図
- 表1 歌集および注釈書にみえる「香取海」

第2節 水運から見た地域的特性

- 図1 房総半島と三浦半島の海蝕洞穴分布図
- 図2 大寺山洞穴全体図, 遺物出土状況図
- 図3 三角板革綴衝角付冑・短甲
- 図4 横矧板鋳留短甲
- 図5 鉄鍬・鉄製利器
- 図6 鉾・大刀・工具
- 図7 耳環・玉類
- 図8 須恵器・土師器
- 図9 東日本におけるオツタノハガイ製貝輪の分布
- 図10 石巻市五松山洞穴出土遺物
- 図11 磯石を利用した石室・石棺の分布と石材サンプル採取地
- 図12 房総半島と三浦半島の層序対比
- 図13 房総半島中西部三浦半島の地質図
- 図14 片岩使用の埋葬施設
- 表1 東京湾産出の磯石を使用した石室・石棺

第1章 古墳出現期の地域圏形成

第1節 小銅鐸圏の東縁

- 図1 草刈遺跡群分布図
- 図2 草刈遺跡H区遺構配置図
- 図3 小銅鐸出土方墳全体図
- 図4 小銅鐸実測図・写真
- 図5 小銅鐸・土器出土状況
- 図6 小銅鐸・土器出土状況写真
- 図7 方墳(397号跡)出土土器
- 図8 小銅鐸の分布図
- 図9 文脇遺跡出土小銅鐸
- 図10 川焼台遺跡出土2号小銅鐸
- 表1 小銅鐸出土地名

第2節 定型化する古墳以前の墓制

- 図1 房総の出現期古墳
- 図2 特定通路から前方部へ
- 図3 神門古墳群
- 図4 高部30・32号墳墳形図
- 図5 高部30・32号墳出土鏡
- 図6 高部古墳群出土土器
- 図7 各地の出現期～前期古段階の前方後円墳
- 図8 纏向石塚古墳・馬口山古墳
- 図9 長平台遺跡・王子ノ台遺跡の弥生後期方形周溝墓
- 図10 草刈遺跡の周溝内埋葬(1)
- 図11 草刈遺跡の周溝内埋葬(2)
- 表1 出現期・前期古墳をめぐる見解
- 表2 草刈遺跡出土の周溝内埋葬人骨一覧

第2章 古墳時代前期の地域圏形成

第1節 前期古墳の展開

- 図1 東国（遠江以東）の主要古墳分布図
- 図2 那須郡駒形大塚古墳と出土遺物
- 図3 廻間遺跡SZ01とSZ02関連遺構出土土器
- 図4 香取海南岸域の主要古墳
- 図5 城山1号墳出土三角縁三神五獣鏡
- 図6 佐原市大戸天神台古墳測量図
- 図7 干潟町臈台古墳測量図
- 図8 草刈遺跡の方墳群配置図
- 図9 草刈遺跡の方墳群出土土器
- 図10 B群B1周溝内埋葬人骨
 - 1 人骨全景
 - 2 手玉（管玉）装着状況
 - 3 人骨出土層位
 - 4 草刈貝塚千葉急行線予定地内C10周溝内土壙埋葬人骨
 - 5 草刈貝塚千葉急行線予定地内C10周溝内土壙埋葬人骨
 - 6 同C9周溝内土壙埋葬人骨
 - 7 松戸河原塚古墳墳頂主体部埋葬人骨
- 表1 大型前方後墳一覽
- 表2 香取海南岸域の主要古墳

第2節 土器の搬入と模倣

- 図1 長平台遺跡出土土器
- 図2 上総市分寺台古墳出土「有段土器」甕形土器
- 図3 野原市三堀遺跡1号住址出土土器
- 図4 千葉市宮内のおよび上総国分寺仁王門脇住居址出土土器
- 図5 千葉県内の受け口の状況
- 図6 南関東地方以西の受け口状況
- 図7 甕形土器

第3章 倭五王の時代と2つの内海

第1節 常総の内海をめぐる石枕と立花の時代

- 図1 枕造り付け石棺の分布（関連主要古墳）
- 図2 香取海を中心とした石枕・玉作遺跡分布図
- 図3 石棺造り付けの石枕
- 図4 石製立花の祖型と系譜
- 図5 石製立花・常陸型石枕の分布地域
- 図6 石製立花と石枕の変遷

第2節 総武の内海東岸の大型首長墓

- 図1 高柳銚子塚古墳墳丘復原図
- 図2 木更津市高柳銚子塚古墳の復原図
- 図3 1946年の高柳銚子塚古墳
- 図4 中期前半の前方後円墳墳形
- 図5 前方部の面積比
- 図6 高柳銚子塚古墳石棺底石採取の石棺材
- 図7 高柳銚子塚古墳石棺材
- 図8 豊浦大塚山古墳石棺材
- 図9 祇園大塚山古墳石棺図
- 図10 高柳銚子塚古墳の円筒埴輪
- 図11 高柳銚子塚古墳・内裏塚古墳出土埴輪
- 図12 長州塚に見る石製模造品
- 図13 公園に大塚山古墳復原図および周辺現況図
- 図14 祇園大塚山古墳出土埴輪・須恵器
- 図15 祇園大塚山古墳出土埴輪
- 図16 祇園大塚山古墳出土埴輪

- 図17 祇園大塚山古墳出土須恵器
- 図18 B種横ハケ埴輪出土古墳分布図
- 表1 関東・東北のB種横ハケ埴輪出土古墳

第3節 総武の内海の大型円墳

- 図1 村田川流域の墳形と規模の構成
- 図2 総武の内海の大型円墳
- 表1 総武の内海の大型円墳一覧

第4節 赤焼き須恵器の展開

- 図1 草刈遺跡出土の赤焼き須恵器(1)
- 図2 草刈遺跡出土の赤焼き須恵器(2)
- 図3 草刈遺跡の赤焼き須恵器出土遺構
- 図4 草刈遺跡の古式須恵器出土遺構
- 図5 ウワナベ古墳出土の赤焼き須恵器

第4章 古墳時代後期・終末期の地域圏形成

第1節 東国後期古墳分析の視点 — 鉄鏃による後期古墳群の分析 —

- 図1 生実・椎名崎古墳群と房総の主な後期古墳
- 図2 生実・椎名崎古墳群分布図
- 図3 剣身形鉄鏃の変遷
- 図4 市原市西谷・南向原古墳群出土鉄鏃
- 図5 生実・椎名崎古墳群の須恵器
- 図6 神明社裏古墳群出土鉄鏃
- 図7 椎名崎A支群(1次調査)出土鉄鏃
- 図8 馬ノ口古墳群出土鉄鏃
- 表1 生実・椎名崎古墳群一覧
- 表2 時期別の比率
- 表3 古墳別鉄鏃組成一覧
- 表4 墳丘規模と鉄鏃副葬数
- 表5 有力鉄鏃出土古墳の推移

第2節 竜角寺古墳群の再検討

- 図1 竜角寺古墳群と印旛沼東岸の古墳群
- 図2 浅間山古墳出土遺物

第3節 古墳終末期の上総北西部

- 図1 上総北西部の終末期古墳と初期古代寺院
- 図2 古墳時代終末期前後の須恵器蓋杯
- 図3 諏訪台古墳群全体図
- 図4 横穴式石室展開図
- 図5 同張り系横穴式石室
- 図6 地下式横穴墓(1)
- 図7 地下式横穴墓(2) 武士遺跡SC029号
- 図8 県内出土の須恵器有蓋高杯蓋杯
- 表1 上総北西部の大型方墳
- 表2 7世紀代の前方後方墳

終章 東国水域圏の地域的特質

第1節 総武と常総に見る古墳文化の二相

- 図1 東日本における環濠集落の分布
- 図2 有角石斧分布図(岡本1999より)
- 図3 弥生後期後半の上稲吉式土器圏と周辺の土器圏
- 図4 S字甕A類の分布

- 図 5 前期大型古墳分布図
- 図 6 中期の大型古墳と甲冑・胡・出土古墳

第 2 節 坂東的世界の萌芽

- 図 1 東国（遠江以東）の後期・終末期主要古墳

附論 小規模円墳の被葬者像

- 図 1 ブリッジ付き円墳の形態
- 図 2 ブリッジ付き円墳の形態別変遷
- 図 3 ブリッジ付き円墳の規模
- 図 4 ブリッジ付き円墳の検出状況
- 図 5 塚原古墳群全体図
- 図 6 埼玉古墳群配置図
- 表 1 ブリッジ付き円墳一覧

初出一覧

序章 地域的特性と分析視角

第1節 東国水域圏の原風景

- 1 水域圏をめぐる古墳時代の分析に向けて（書き下ろし）
- 2 関東平野の地形と水脈（「東国世界の原風景」『土筆』第5号 土筆舎 1999）
- 3 常総の水域圏（同上）

第2節 水運から見た地域的特性

- 1 海人の首長（「海人の首長」『房総考古学ライブラリー6』—古墳時代2—千葉県文化財センター 1992、「館山市大寺山洞穴の出土遺物」『千葉県史研究』第2号 千葉県 1994）
- 2 石材の流通（「古墳に使用された礫石」『土筆』第4号 土筆舎 1996）

第1章 古墳出現期の地域圏形成

第1節 小銅鐸圏の東縁

- 1 小銅鐸の年代と性格—草刈遺跡出土の小銅鐸をめぐる—（「市原市草刈遺跡の小銅鐸」『考古学雑誌』第75巻第2号 日本考古学会 1989）
- 2 小銅鐸分布圏の意義（「銅鐸の終着駅」『考古学の世界』第2巻 ぎょうせい 1993）

第2節 定型化する古墳以前の墓制

- 1 出現期古墳とその前後—房総の出現期古墳をめぐる—（書き下ろし）
- 2 古墳出現期前後の周溝内埋葬について（「古墳出現期前後の周溝内埋葬」『相模西の三・四世紀』 東海大学校地内遺跡調査団 1992）

第2章 古墳時代前期の地域圏形成

第1節 前期古墳の展開

- 1 前方後方墳の時代（書き下ろし）
- 2 前期の前方後円墳
 - (1) 東京湾沿岸の前期古墳（書き下ろし）
 - (2) 香取海南岸の前期古墳（「佐原市大戸天神台古墳測量調査報告」『千葉県史研究』第2号 千葉県 1994）
- 3 前期の方墳群—草刈遺跡の方墳群をめぐる—（「市原市草刈遺跡の方墳群」『研究連絡誌』第22号 千葉県文化財センター 1988）

第2節 土器の搬入と模倣

- 1 市原市長平台遺跡のパレス式装飾壺をめぐる（「市原市長平台遺跡 288・289 出土の土器」『三～四世紀の東国』八王子郷土資料館 1983）
- 2 東海系「有段口縁」甕について（「市原市上総国分寺台出土の東海系有段口縁甕形土器」『古代』第71号 早稲田大学考古学会 1981）

第3章 倭五王の時代と2つの内海

第1節 常総の内海をめぐる石枕と立花の時代（「石製立花と石枕の出現」『古代探叢』Ⅲ 早稲田大学出版部 1991）

- 1 石枕出現の背景（同上）
- 2 枕造り付け石棺の年代（同上）
- 3 剝抜式木棺と枕（同上）
- 4 東国の石枕と立花（同上）
- 5 常総型石枕成立の基盤（同上）
- 6 おわりに（同上）

第2節 総武の内海東岸の大型首長墓

- 1 高柳銚子塚古墳の出現（「高柳銚子塚古墳をめぐる諸問題」『日本考古学』第2号 日本考古学協会 1995）
- 2 祇園大塚山古墳の性格（「祇園大塚山古墳の埴輪と須恵器」『古代』第83号 早稲田大学考古学会 1987）
- 第3節 総武の内海の大型円墳（「東京湾周辺の円墳」『古代学研究』第123号 古代学協会 1990）
 - 1 大型円墳の立地（同上）
 - 2 規模と構成（同上）
 - 3 円墳の類別（同上）
 - 4 まとめ（同上）
- 第4節 赤焼き須恵器の展開（「草刈遺跡出土の赤焼き須恵器」『千原台ニュータウン』6—草刈六之台遺跡— 千葉県文化財センター 1994）
 - 1 赤焼きの「須恵器」（同上）
 - 2 名称について（同上）
 - 3 草刈遺跡出土の赤焼き須恵器について（同上）
 - 4 類例の検討（同上）
 - 5 今後の課題（同上）

第4章 古墳時代後期・終末期の地域圏形成

- 第1節 東国後期古墳分析の視点—鉄鍬による後期古墳群の分析—（「東国後期古墳分析の一視点」『研究紀要』10 千葉県文化財センター 1986）
 - 1 分析にあたって（同上）
 - 2 生実・椎名崎古墳群の概要（同上）
 - 3 鉄鍬の検討（同上）
 - 4 生実・椎名崎古墳群分析の展望と課題（同上）
- 第2節 竜角寺古墳群の再検討（「竜角寺古墳群」『季刊 考古学』第71号 2000）
 - 1 竜角寺古墳群をめぐる見解（同上）
 - 2 群構成と変遷（同上）
 - 3 「印波国造」の領域（同上）
 - 4 「香取海」沿岸の地域首長権（同上）
 - 5 推古朝から孝徳朝の中央集権政策と仏教信仰策の影響（同上）
- 第3節 古墳終末期の上総北西部（「上総北西部における古墳終末期の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館 1992）
 - 1 歴史的環境（同上）
 - 2 後期古墳群と方墳（同上）
 - 3 7世紀代の前方後円墳（同上）
 - 4 軟質砂岩を使用した複室構造の横穴式石室（同上）
 - 5 8・9世紀の「方墳」と地下式横穴墓（同上）
 - 6 初期古代寺院（同上）
 - 7 まとめ（同上）

終章 東国水域圏の地域的特質

- 第1節 総武と常総に見る古墳文化の二相（書き下ろし）
 - 1 弥生時代から古墳時代へ（同上）
 - 2 石枕と「王賜」銘鉄剣（同上）
- 第2節 坂東的世界の萌芽（書き下ろし）
 - 1 後期・終末期古墳にみる地域的特性（同上）
 - 2 坂東的世界の予察（同上）
 - 3 おわりに（同上）

附論 小規模円墳の被葬者像—ブリッジ付き円墳の検討—（「小規模古墳の一類型について」『古代』第75・76合併号 早稲田大学考古学会 1983）

- 1 はじめに
- 2 系譜と類別
- 3 時期別の変遷
- 4 ブリッジ付き円墳の規模
- 5 副葬品等の内容
- 6 特定地域の動向
- 7 ブリッジの機能と性格
- 8 被葬者の性格

参考・引用文献

(著者五十音順)

番号	著者名	書名	発行元	発行年 掲載頁
1	相京邦彦・白井久美子 ・金子進	「川焼台遺跡出土の2号銅鐸について」 『研究連絡誌』第15・16合併号	千葉県文化財センター	1986 (6-15頁)
2	青木豊昭	『安保山古墳群』	福井県教育委員会	1975
3	青木遺跡発掘調査団	『青木遺跡群発掘調査報告』I	青木遺跡発掘調査団	1976
4	青木遺跡発掘調査団	『青木遺跡群発掘調査報告』III	青木遺跡発掘調査団	1978
5	青山透編	『酒屋高塚古墳』	広島県教育委員会	1983
6	赤松宗旦原著・柳田国 男校訂	『利根川図志』(岩波文庫)	岩波書店	1938
7	赤松宗旦原著・津本信 博訳	『利根川図志』	教育社	1980
8	赤塚次郎他	『廻間遺跡』	愛知県埋蔵文化財センター	1990
9	赤塚次郎他	『西上免遺跡』	愛知県埋蔵文化財センター	1997
10	赤塚次郎	「土器の移動からみた社会の変化」『図説 古墳研究最前線』(別冊歴史読本第24巻 第23号)	新人物往来社	1999 (130-135頁)
11	赤星直忠	『厚木市文化財調査報告書』第8集	厚木市教育委員会	1967
12	秋本吉郎校注	『日本古典文学大系風土記』	岩波書店	1958
13	浅賀正義編	『新・千葉県 地学のガイド』	コロナ社	1993
14	浅利幸一	「天神台遺跡」『市原市文化財センター年 報』一昭和57・58年度一	市原市文化財センター	1985 (30-36頁)
15	浅利幸一	「諏訪台古墳群について」昭和60年度『遺 跡発表会要旨』	市原市文化財センター	1986 (14-15頁)
16	浅利幸一	「諏訪台遺跡」『市原市文化財センター年 報』一昭和63年度一	市原市文化財センター	1994 (53-56頁)
17	麻生優・河原純之・岡 本東三	「館山市大寺山洞穴墓の舟葬について」 『洞穴遺跡の諸問題発表要旨』	愛知学院大学(代表麻生優)	1998 (36-41頁)
18	安達厚三・木下正史	「飛鳥地方出土の古式土師器」『考古学雑 誌』第60巻2号	日本考古学会	1974 (1-30頁)
19	我孫子市教育委員会	『我孫子市鹿島前遺跡』	我孫子史料刊行会	1978
20	甘粕健	「金塚古墳」『我孫子古墳群』	東京大学文学部考古学研究室 ・我孫子町教育委員会	1969 (58-83頁)
21	甘粕健	「養老川水系の古墳分布と山王山古墳の 歴史的 성격」『上総 山王山古墳』	市原市教育委員会	1980 (196-217頁)
22	甘粕健	「稻荷前古墳群」『古代の都筑をまなぶ』	緑区郷土史研究会考古部会	1981 (27-42頁)
23	甘粕健・古川知明編	『大沢遺跡』一B'・B地区の調査概報一	巻町・瀧東村教育委員会	1981
24	天野末喜他	『古市古墳群』	藤井寺市教育委員会	1986
25	天野末喜・山田幸弘・ 中西康裕・東口公子編	『古市古墳群をめぐる諸問題』	藤井寺市教育委員会	1989
26	天野末喜編	『岡古墳』	藤井寺市教育委員会	1989
27	天野末喜・中西康裕他	『新版 古市古墳群』	藤井寺市教育委員会	1993
28	網野善彦	「霞ヶ浦四十八津と御留川」『歴史学研究』 第192号	岩波書店	1956 (30-36頁)
29	網野善彦	「海民の世界」『東と西の語る日本の歴史』	そしえて	1982 (121-123頁)
30	網野善彦	「常総・下総の海民」『日本中世の非農業 民と天皇』	岩波書店	1984 (366-391頁)
31	安藤鴻基	「丸塚古墳」『日本考古学年報』27	日本考古学協会	1974 (55頁)
32	安藤鴻基他	『関向古墳』一発掘調査概報一	関向古墳発掘調査団	1975
33	安藤鴻基他	「千葉県香取郡小見川町三之分目大塚山 古墳の長持形石棺遺材」『古代』第64号	早稲田大学考古学会	1978 (35-45頁)

番号	著者名	書名	発行元	発行年	掲載頁
34	安藤鴻基	「房総七世紀史の一姿相」『古代探叢』 一滝口宏先生古稀記念考古学論集一	早稲田大学出版部	1980	(385-398頁)
35	安藤信策	「大覚寺古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』	京都府教育委員会	1976	(80-115頁)
36	飯塚恵子・田口一郎編	『元島名将軍塚古墳』	高崎市教育委員会	1981	
37	飯塚誠編	『西大室遺跡群』II	前橋市教育委員会	1980	
38	伊賀高弘・近藤義行	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第15集	城陽市教育委員会	1986	
39	伊賀高弘・太田勝康・近藤義行他	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第17集	城陽市教育委員会	1987	
40	池上悟他	「平山遺跡第9次調査」『日野市遺跡調査会年報』II	日野市教育委員会	1978	(19-42頁)
41	池上悟	「後期古墳時代集落出土鉄鏃に関する若干の問題」『東京考古』1	東京考古談話会同人	1982	(50-78頁)
42	石井則孝・轟俊二郎	『原1号墳発掘調査概報』	千葉県教育委員会	1970	
43	石井寛・倉沢和子他	『折本西原遺跡』	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1980	
44	石川日出志	「南関東の弥生社会展開図式・再考」『大塚初重先生頌寿記念考古論集』	東京堂出版	2000	(739-760頁)
45	石野博信・関川尚功	『纏向』	橿原考古学研究所	1976	
46	石橋充	「常総地域における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』第6号	筑波大学歴史・人類学系	1995	(31-57頁)
47	石部正志編	『塚山古墳外形確認調査報告』	宇都宮大学考古学研究会	1995	
48	石山勲	「剣塚第1号墳」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X XIV	福岡県教育委員会	1978	
49	石山勲	「七曲山第3号墳」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X XVII	福岡県教育委員会	1979	(184-191頁)
50	市毛勲・梶山林継・沼沢豊他	『千葉県香取郡下総町大日山古墳』昭和45年度埋蔵文化財抄報2	大日山古墳調査団	1971	
51	市毛勲・須田勉編	『東間部多古墳群』一上総国分寺台遺跡調査I一	上総国分寺台遺跡調査団	1974	
52	一瀬和夫・伊藤雅文	『応神陵古墳外堤発掘調査概要』	大阪府教育委員会	1981	
53	一瀬和夫・鈴木陽一・小野昌光・伊藤雅文	『允恭陵古墳外堤の調査』	大阪府教育委員会	1981	
54	一瀬和夫	「古市古墳群における埴輪群の変遷一大型古墳を中心として」『究班』	埋蔵文化財研究会	1992	(279-288頁)
55	一瀬和夫	「河内平野とその周辺の埴輪編年概観」『古代文化』第44巻第9号	古代学協会	1992	(8-12頁)
56	市原市教育委員会編	『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図』一南部編一	市原市教育委員会	1987	
57	市村高男	「中世東国における房総の位置」『千葉史学』第21号	千葉歴史学会	1992	(31-50頁)
58	伊藤久嗣	『納所遺跡』	三重県教育委員会	1980	
59	伊藤智樹・栗田則久	『千葉東南部ニュータウン』12-南二重堀遺跡一	千葉県文化財センター	1983	
60	糸川道行	『沼南町北ノ作1・2号墳発掘調査報告書』	千葉県文化財センター	1993	
61	井上洋一	「銅鐸起源論と小銅鐸」『東京国立博物館紀要』第28号	東京国立博物館	1993	(1-95頁)
62	茨城県教育財団編	『鹿の子C遺跡一連構・遺物編』常盤自動車通関係埋蔵文化財発掘調査報告書5	茨城県教育財団	1983	
63	今泉潔他	『成東町真行寺廃寺跡確認調査報告』	千葉県文化財センター	1984	
64	今泉潔他	『千葉県重要古墳群測量調査報告書』一成田市公津原古墳群一	千葉県教育委員会	1997	
65	今泉潔・山口典子編	『市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書』	千葉県文化財センター	1989	

番号 著者名	書名	発行元	発行年 掲載頁
66 今橋浩一	「円形周溝」『針ヶ谷北通遺跡発掘調査報告書』	埼玉県遺跡調査会	1975 (39-47頁)
67 上田正昭	「古道と海路と」『環境文化』第55号一特集・歴史の道—海上の道—	環境文化研究所	1982 (2-7頁)
68 上田睦他	『石川流域遺跡群発掘調査報告』IV	藤井寺市教育委員会	1989
69 上田睦他	『石川流域遺跡群発掘調査報告』V	藤井寺市教育委員会	1990
70 上田睦	「土師の里埴輪窯跡群の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告』VI	藤井寺市教育委員会	1991 (179-228頁)
71 上田睦	「古市古墳群出土円筒埴輪の様相」『古代文化』第44巻第9号	古代学協会	1992 (13-22頁)
72 上田睦他	『石川流域遺跡群発掘調査報告』VIII	藤井寺市教育委員会	1993
73 上田睦	「円筒埴輪編年から見た古市・百舌鳥古墳群の構成」『倭の五王の時代』	藤井寺市教育委員会	1994 (6-16頁)
74 上田睦他	『石川流域遺跡群発掘調査報告』IX	藤井寺市教育委員会	1994
75 上野精志編	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXII	福岡県教育委員会	1978
76 上野純司・栗田則久・白井久美子・萩原恭一	『房総考古学ライブラリー5』古墳時代(1)	千葉県文化財センター	1990
77 上野純司・栗田則久・白井久美子・萩原恭一	『房総考古学ライブラリー6』古墳時代(2)	千葉県文化財センター	1992
78 上野恵司	「総における古墳時代後期の埋葬施設の研究—箱式石棺—」『立正考古』第32号	立正大学考古学研究会	1993 (59-75頁)
79 植松章八・馬飼野行雄・渡井一信編	『月の輪遺跡群』	富士宮市教育委員会	1981
80 上村淳一他	『千葉東南部ニュータウン』6—椎名崎遺跡—	千葉県文化財センター	1979
81 宇田敦司	『千葉県成田市南羽鳥遺跡群』I	印旛郡市文化財センター	1996
82 梅原末治	『久津川古墳研究』(復刻)	名著出版	1973
83 梅沢重昭	『史跡天神山古墳外堀部発掘調査報告書』	群馬県教育委員会	1970
84 梅原末治・小林行雄	『筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳』	京都帝国大学	1940
85 梅原末治	「備前新庄天神山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』	日本古文化研究所	1938 (53-56頁)
86 江上智恵他	『立石遺跡』IV	葛飾区遺跡調査会	1994
87 榎本義讓	「草山遺跡の小銅鐸」『考古学雑誌』第73巻第4号	日本考古学会	1988 (87-100頁)
88 大川清編	『杉崎コロニー古墳群』	日本窯業史研究所	1980
89 大沢昌弘・田部井功他	『袋・台遺跡』	吹上町教育委員会	1982
90 太田文雄他	『千葉県重要古墳群測量調査報告書』—成田市上福田古墳群・北須賀勝福寺古墳群—	千葉県教育委員会	1998
91 大竹憲治	「有角石斧小考」『史峰』14	新進考古学同人会	1989 (32-39頁)
92 大竹憲治	「有角石斧小考」『東北考古学論攷第2』(再録)	纂集堂	1993
93 大塚初重・小林三郎編	『勝田市史』別編I 虎塚壁画古墳	勝田市史編さん委員会	1978
94 大寺山洞穴遺跡調査団	『館山市大寺山洞穴測量調査概報』	千葉大学文学部考古学研究室	1993
95 大寺山洞穴遺跡調査団	『大寺山洞穴第1次発掘調査概報』	千葉大学文学部考古学研究室	1994
96 大寺山洞穴遺跡調査団	『大寺山洞穴第2次発掘調査概報』	千葉大学文学部考古学研究室	1995
97 大寺山洞穴遺跡調査団	『大寺山洞穴第3・4次発掘調査概報』	千葉大学文学部考古学研究室	1996
98 大寺山洞穴遺跡調査団	『大寺山洞穴第5次発掘調査概報』	千葉大学文学部考古学研究室	1997

番号	著者名	書名	発行元	発行年	掲載頁
99	大野康男他	『千葉東南部ニュータウン』16-大膳野北遺跡-	千葉県文化財センター	1985	
100	大場磐雄・亀井正道	「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌』第37巻第3号	日本考古学会	1951	(31-46頁)
101	大場磐雄・佐野大和	『常陸鏡塚』國學院大學考古学研究報告第1冊	(綜芸舎)	1956	
102	大橋勤編	『伊保遺跡』	猿投遺跡調査会	1974	
103	大橋信弥・山崎秀二他	『服部遺跡発掘調査概報』	滋賀県文化財保護協会	1979	
104	大林太良編	『古代の日本』8 海人の伝統	中央公論社	1987	
105	大参義一	「S字状口縁土器考」『いちのみや考古』No.13	一宮考古学会	1967	(1-8頁)
106	大参義一	「弥生式土器から土師器へー東海地方西部の場合」『名古屋大学文学部研究論集(史学)』47号	名古屋大学文学部	1968	(1-34頁)
107	大村直	『下鈴野遺跡』	市原市文化財センター	1987	
108	大山真充他	『岡の御堂古墳群調査概報』	綾南町教育委員会	1977	
109	岡田威夫・御堂島正編	『横浜市道高速2号線埋蔵文化財試掘報告書』	横浜市道高速2号線埋蔵文化財調査団	1980	
110	緒方勉・高木正文	『久保遺跡』	熊本県教育委員会	1975	
111	緒方勉編	『清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査』	熊本県文化財保護協会	1982	
112	岡村秀典	『三角縁神獣鏡の時代』	吉川弘文館	1999	
113	岡本健一	「埼玉将軍山古墳の横穴式石室について」『調査研究報告』7	埼玉県立さきたま資料館	1994	(47-57頁)
114	岡本孝之	「足洗型石器の研究」『考古学雑誌』第84巻第3号	日本考古学会	1999	(1-53頁)
115	岡本東三	「よみがえる舟葬論」『古墳研究最前線』	新人物往来社	1999	(36-41頁)
116	岡山県立博物館編	『おかやまの歴史と美』	岡山県立博物館	1975	
117	小久貫隆史	『千原台ニュータウン』1-野馬堀遺跡他-	千葉県文化財センター	1980	
118	小久貫隆史	「草刈A区(第1次)の調査」『千原台ニュータウン』II-草刈遺跡A区(第一次調査)鶴牧古墳群・人形塚-	千葉県文化財センター	1983	(10-310頁)
119	小久貫隆史	『市原市釈迦山古墳発掘調査報告書』	千葉県教育委員会	1995	
120	奥村 清編	『改訂・神奈川 地学のガイド』	コロナ社	1993	
121	尾崎喜左雄・藤岡一雄	『鷲沼古墳』	習志野市教育委員会	1967	
122	尾崎喜左雄・松島栄治他	『前橋天神山古墳図録』	前橋市教育委員会	1970	
123	小沢洋	「参考資料 内裏塚古墳出土遺物」『年報』No.1	君津都市文化財センター	1983	
124	小沢洋	『二間塚遺跡群確認調査報告書』II	富津市教育委員会	1985	
125	小沢洋	『小浜遺跡群』II マミヤク遺跡	君津都市文化財センター	1989	
126	小沢洋	「南関東の前方後方墳」『前方後方墳を考える』第1分冊	東海考古学フォーラム	1995	(467-561頁)
127	小田野哲憲	「東北北部三～四世紀の様相」『大塚初重先生頌寿記念考古論集』	東京堂出版	2000	(798-812頁)
128	乙益重隆他	『院塚古墳調査報告』	熊本県文化財調査報告第6集	1965	
129	小野山節	「千葉市石神2号墳の年代論の意義」『東寺山石神遺跡』	千葉県文化財センター	1977	(534-541頁)
130	小野山節他	『紫金山古墳と石山古墳』	京都大学文学部博物館	1993	
131	小淵良樹他	『広木大町古墳群』	埼玉県遺跡調査会	1980	
132	貝塚爽平編	『東京湾の地形・地質と水』	築地書館	1993	

番号	著者名	書名	発行元	発行年	掲載頁
133	柿沼修平他	『土宇』	日本文化財研究所	1979	
134	笠井敏光他・古市古墳群研究会編	『古市古墳群とその周辺』	摂河泉文庫	1985	
135	橋本輝彦	『箸墓古墳』—纏向遺跡第109次発掘調査資料—	桜井市文化財協会・桜井市教育委員会	1998	
136	霞ヶ浦町遺跡調査会(千葉隆司)編	『風返稻荷山古墳』	霞ヶ浦町教育委員会	2000	
137	堅田直	『紀伊田辺市磯間岩陰遺跡調査概要』	帝塚山大学考古学研究室	1970	
138	金井塚良一他	『柏崎古墳群』	考古学資料刊行会	1968	
139	金井亀喜編	『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2)	広島県文化財協会	1979	
140	金子浩昌・和田哲也	『館山鉦切洞窟の考古学的調査』	早稲田大学考古学研究室	1958	
141	金子浩昌・中村恵次・市毛勲	「千葉県東葛飾郡沼南村片山古墳群の調査」『古代』第33号	早稲田大学考古学会	1959	(23-39頁)
142	金子皓彦・青木豊	『國學院大學考古学資料館要覧』—関東の古墳時代文化—	國學院大學考古学資料館	1976	
143	金丸誠	『佐倉市立山遺跡』	千葉県文化財センター	1983	
144	鎌田元一	「嵯峨野の古墳群に関する覚書」『嵯峨野の古墳時代』	京都大学考古学研究会	1971	(159-168頁)
145	亀井正道	「古墳出土の石枕について」『上代文化』第20輯	國學院大學考古学会	1951	(29-36頁)
146	河上邦彦他	「堺市いたすけ古墳・文殊塚古墳・定の山古墳及び岸和田市貝吹山古墳の測量調査」『考古学研究紀要』3	関西大学考古学研究会	1977	(1-22頁)
147	河上邦彦編	『奈良県古墳発掘調査集報』II	奈良県立橿原考古学研究所編	1978	
148	河上邦彦編	『史跡 牧野古墳』	広陵町教育委員会	1987	
149	川崎晃稔	『日本丸木舟の研究』	法政大学出版局	1991	
150	川尻秋生	「香取の海の由来」『中央博物館だより』No. 30	千葉県立中央博物館	1996	(6-7頁)
151	川尻秋生	「古代東国の沿岸交通—中世との接点を求めて」『千葉県立中央博物館研究報告—人文科学—』第5巻第2号	千葉県立中央博物館	1998	(69-88頁)
152	川尻秋生	「板東の成立」『千葉中央博物館研究報告—人文科学—』第6巻第1号	千葉県立中央博物館	1999	(1-15頁)
153	川西宏幸	「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号	日本考古学会	1978	(1-70頁)
154	川西宏幸	「後期畿内政権論」『考古学雑誌』第71巻第2号	日本考古学会	1986	(1-42頁)
155	川西宏幸	『古墳時代の比較考古学』	同成社	1999	
156	菊池真太郎・豊田佳伸	『千葉市菅田県立コロニー内遺跡』	千葉県文化財センター	1976	
157	岸本直文	「茨城県水戸市出土の三角縁神獸鏡」『考古学雑誌』第78巻第1号	日本考古学会	1992	(113-117頁)
158	北野耕平	『河内野中古墳の研究』	大阪大学文学部国史研究室	1976	
159	北原勝司他	『武蔵国府関連遺跡調査抄報』I—白糸台遺跡の調査1—	府中市教育委員会	1978	
160	木村和紀	「房総における改葬系区画墓の出現期—方形(円形)区画改葬墓の提唱—」『市原市文化財センター研究紀要』I	市原市文化財センター	1987	(47-71頁)
161	木下亘	「須恵器」『斑鳩 藤ノ木古墳』—第1次調査報告—	斑鳩町	1990	(196-205頁)
162	金宅圭・李殷昌	『皇南洞古墳発掘調査概報』古蹟調査報告第1冊	嶺南大学校博物館	1975	
163	行田市教育委員会	『行田市No.41遺跡』	行田市教育委員会	1981	
164	久々忠義	「江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告』	上市町教育委員会	1981	(12-14頁)

番号 著者名	書名	発行元	発行年 掲載頁
165 久曾神昇	『日本歌学大系』別巻1・3	風間書房	1966 1970
166 久保哲三編	『シンポジウム 関東における古墳出現期の諸問題』	日本考古学協会・学生社	1981
167 隈昭志他	『塚原』	熊本県文化財保護協会	1975
168 熊本県文化財保護協会	『清原古墳許及び岩原古墳群の周溝確認調査』	熊本県文化財保護協会	1982
169 倉田直純	『地蔵僧遺跡発掘調査報告』	亀山市教育委員会	1978
170 蔵本富美男・山本貴之	『常盤自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』I	茨城県教育財団	1980
171 栗田則久他	『千葉東南部ニュータウン』13-上赤塚1号墳・狐塚古墳群-	千葉県文化財センター	1982
172 栗田則久他	『千葉東南部ニュータウン』14-有吉遺跡(第3次)他-	千葉県文化財センター	1983
173 栗原良輔	『利根川治水史』	斎書房出版	1973 (官界公論社 1943復刻)
174 栗原文蔵・田部井功	「天王山・梅塚古墳他周堀発掘調査概要」『資料館報』No.6	埼玉県立さきたま資料館	1975 (7-9頁)
175 栗本佳弘編	「佐倉市大篠塚遺跡」『東関東自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』	千葉県教育委員会	1970 (1-88頁)
176 車崎正彦	「常陸舟塚山古墳の埴輪」『古代』第59・60合併号	早稲田大学考古学会	1976 (38-49頁)
177 車崎正彦	「東日本の環濠集落」『邪馬台国時代の東日本』国立歴史民俗博物館編	六興出版	1991 (38-44頁)
178 黒板勝美・国史大系編修會	新訂増補国史大系『日本書紀』前篇	吉川弘文館	1979
179 群馬県古墳時代研究会編	『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』	群馬県古墳時代研究会	1996
180 劔持和夫	「古墳と出土遺物」『白幡本宿遺跡』	埼玉県教育委員会	1980 (21-30頁)
181 劔持輝久	「神奈川県三浦半島南部の海蝕洞穴をめぐって」『洞穴遺跡の諸問題』第2回シンポジウム発表要旨	千葉大学(代表麻生優)	1997 (32-33頁)
182 小泉裕司・近藤義行他	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第19集	城陽市教育委員会	1989
183 小泉裕司・佐藤正之	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第20集	城陽市教育委員会	1990
184 小出義治他	『松戸河原塚古墳』	松戸市誌編纂委員会	1956
185 小出博	「第3回千年前の利根川」『利根川と淀川』中公新書384	中央公論社	1975
186 小出義治編	『上総山王山古墳』	上総山王山古墳発掘調査団	1980
187 小出義治	「亀塚古墳」『狛江市史』	狛江市史編さん委員会	1985 (119-188頁)
188 郷田良一・小宮孟	『千葉東南部ニュータウン』10-小金沢貝塚-	千葉県文化財センター	1982
189 郷堀英司	『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』	千葉県文化財センター	1984
190 小久保徹他	「埼玉県における古墳出土遺物の研究」I-鉄鏃について-『研究紀要』創刊号	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	1983 (1-73頁)
191 国立歴史民俗博物館編	「東国における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集	国立歴史民俗博物館	1992
192 木暮昌典・島田孝雄	『天神山古墳外堀・A陪塚』-範囲確認調査-	太田市教育委員会	1970
193 小竹森淑江	「中世香取海における津の支配-海夫注文の分析から-」『武蔵大学日本文化研究』第2号	武蔵大学日本文化研究会	1981 (37-53頁)
194 後藤守一	「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4号	東京人類学会	1939 (133-161頁)

番号	著者名	書名	発行元	発行年	掲載頁
195	小林謙一	「弓矢と甲冑の変遷」『古代史発掘』6	講談社	1975	(98-111頁)
196	小林行雄	「直弧文」『古墳文化論考』	平凡社	1976	(483-540頁)
197	小林行雄	「神功・応神紀の時代」『古墳文化論考』 (再録)	平凡社	1976	(67-91頁)
198	小林三郎・熊野正也編	『法皇塚古墳』	市立市川博物館	1976	
199	小林清隆他	『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ 草刈貝塚	千葉県文化財センター	1990	
200	古墳文化研究会編	『日本古代文化研究』創刊号	古墳文化研究会	1984	
201	小牧美知江	「龍角寺(五斗蒔)瓦窯と文字瓦」『官営工 房研究会会報』6	奈良国立文化財研究所	1999	(40-54頁)
202	駒宮史朗他	『青柳古墳群発掘調査報告書』	埼玉県遺跡調査会	1973	
203	小森哲也	「栃木県内古墳出土遺物考」(1) - 鉄鏃 の変遷 - 『栃木県考古学会誌』8	栃木県考古学会	1984	(53-92頁)
204	近藤義郎編	『権現山51号墳』	『権現山51号墳』刊行会	1991	
205	近藤義郎編・広瀬和 雄・天野末喜他	『前方後円墳集成』- 近畿編 -	山川出版社	1992	
206	近藤精造監修	『千葉の自然をたずねて』	築地書館	1992	
207	近藤義郎編	『前方後円墳集成』- 東北・関東編 -	山川出版社	1994	
208	斉木勝他	『市原市菊間遺跡』	千葉県都市公社	1974	
209	埼玉県教育委員会	『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧』Ⅱ	埼玉県教育委員会	1979	
210	千葉県文化財センター	「押沼大六天遺跡」『千葉県文化財セン ター年報』No.9	千葉県文化財センター	1983	(23-24頁)
211	千葉県史料研究財団 編	『竜角寺古墳群からみた古代の東国』- 栄町浅間山古墳の調査成果をもとに-	千葉県史料研究財団	1998	
212	千葉県文化財センター 編	「六通神社南遺跡」『千葉県文化財センタ ー年報』No. 9	千葉県文化財センター	1984	
213	千葉県文化財センター 編	『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)	千葉県文化財センター	1987	
214	千葉県文化財センター 編	『千葉県埋蔵文化財分布地図(1) - 東葛 飾・印旛地区 (改訂版) -』	千葉県文化財センター	1997	
215	斉藤忠編	『弘法山古墳』	松本市教育委員会	1978	
216	斉藤優	『改訂 松岡古墳群』	松岡町教育委員会	1979	
217	斉藤優	『足羽山の古墳』(復刻)	福井考古学会	1985	
218	佐伯秀人	『内裏塚古墳群』	君津郡市文化財センター	1992	
219	酒井仁夫	「八並遺跡検出周溝墓について」『九州考 古学』No.52	九州考古学会	1976	(19-23頁)
220	酒井清治	「千葉県大森第2遺跡出土の百濟土器」 『古文化談叢』第15集	九州古文化研究会	1985	(105-124頁)
221	榊原弘二・山口典子	「市原市川焼台遺跡出土の小型銅鐸に ついて」『研究連絡誌』第7・8合併号	千葉県文化財センター	1984	(1-6頁)
222	榊原弘二・土屋潤一 郎・宮城孝之	「市原市草刈遺跡出土の有角石斧につい て」『研究連絡誌』第12号	千葉県文化財センター	1985	(1-6頁)
223	坂本行広編	『猫作・栗山16号墳』	香取郡市文化財センター	1995	
224	埼玉県立さきたま資料 館	『さきたま将軍山古墳と銅鏡』展示解説書	埼玉県立さきたま資料館	1992	
225	桜井市教育委員会・奈 良県立樞原考古学研 究所	『ホケノ山古墳発掘調査現地説明会資 料』	桜井市教育委員会・奈良県立 樞原考古学研究所	1995	
226	佐藤甞信	『埴牛原』	喬木村教育委員会	1971	
227	真田幸成他	『上箕田』- 弥生式遺跡第2次調査報告1	鈴鹿市教育委員会	1970	

番号	著者名	書名	発行元	発行年	掲載頁
228	澤潟久孝他編	『萬葉集大成』総索引	平凡社	1986	
229	佐原真	「銅鐸の始まりと終り」『展望アジアの考古学』—樋口隆康教授退官記念論集—		1983	(382-393頁)
230	三森俊彦他	『市原市大厩遺跡』	千葉県都市公社	1974	
231	三森俊彦他	『市原市大厩遺跡』	千葉県都市公社文化財事務所	1974	
232	三森俊彦編	『千原台ニュータウン』II—草刈A区・鶴牧古墳群・人形塚—	千葉県文化財センター	1983	
233	塩野博	「古墳の外部施設—特に小規模古墳の周堀—」『埼玉考古』第5号	埼玉県考古学会	1967	(24-30頁)
234	塩野博・駒宮史朗	『西台遺跡』	埼玉県遺跡調査会	1970	
235	塩野博・駒宮史朗他	『鹿島古墳群』	埼玉県教育委員会	1972	
236	静岡県教育委員会	『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』	静岡県教育委員会	1965	
237	設楽博巳	「根本古墳」『筑波古代地域史の研究』	筑波大学	1982	(59-83頁)
238	千葉隆司編	『霞ヶ浦沿岸の弥生文化』—土器から見た弥生社会—	霞ヶ浦町郷土資料館	1998	
239	柴垣勇夫監修	『朝日遺跡群第1次調査報告』	愛知県教育委員会	1975	
240	柴田龍司	『千葉市辺田山谷遺跡』	千葉県文化財センター	1986	
241	島巡賢二・間壁忠彦	「赤井西古墳群2号」『倉敷考古館研究集報』10	倉敷考古館	1974	(160-165頁)
242	清水真一	平成10年度冬季企画展『纏向遺跡100回調査記念—纏向遺跡はどこまでわかった』	桜井市立埋蔵文化財センター	1998	
243	下城正・女屋和志雄他	『三ツ寺I遺跡』	群馬県埋蔵文化財調査事業団	1988	
244	下津谷達男他	『野田市三ツ堀遺跡』	野田市郷土博物館	1962	
245	下村登良男・村上喜雄	『おばたけ遺跡発掘調査報告』1—第4次	鳥羽市教育委員会	1972	
246	下村登良男	「伊勢市上地町野垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』	三重県教育委員会	1979	(61-117頁)
247	下山遺跡調査団	『下山遺跡—下山遺跡第2次調査概報—』	世田谷区教育委員会	1980	
248	十菱駿武・川上真紀子他	『野毛大塚古墳』	世田谷区教育委員会	1983	
249	塩野博・駒宮史朗他	『鹿島古墳群』	埼玉県教育委員会	1972	
250	白井久美子他	「長平台遺跡出土土器」『上総国分寺台発掘調査概報』	上総国分寺台遺跡調査団	1982	(44-46頁)
251	白井久美子	「小規模古墳の一類型について—ブリッジ付円墳の検討—」『古代』第75・76合併号	早稲田大学考古学会	1983	(29-69頁)
252	白井久美子	「古墳出土の鉄鏃について」『千葉東南部ニュータウン』15—馬ノ口遺跡他—	千葉県文化財センター	1984	(164-167頁)
253	白井久美子	「東国後期古墳分析の一視点」—鉄鏃から見た千葉市生実・椎名崎古墳群—『研究紀要』10	千葉県文化財センター	1986	(185-215頁)
254	白井久美子	「祇園大塚山古墳の埴輪と須恵器」『古代』第83号	早稲田大学考古学会	1987	(100-109頁)
255	白井久美子	「《研究ノート》市原市草刈遺跡の方墳群」『研究連絡誌』第22号	千葉県文化財センター	1988	(9-16頁)
256	白井久美子	「房総の出現期・前期古墳の様相について」『第17回古代史サマーセミナー発表資料』	古代史サマーセミナー事務局	1989	(181頁)
257	白井久美子	「房総の古墳時代研究と稲荷台1号墳」『千葉史学』第15号	千葉史学会	1989	(32-43頁)
258	白井久美子・福田依子	「千葉県市原市草刈遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌』第75巻第2号	日本考古学会	1989	(73-84頁)
259	白井久美子	「石製立花と石枕の出現」『古代探叢』III	早稲田大学出版部	1991	(335-354頁)

番号 著者名	書名	発行元	発行年 掲載頁
260 白井久美子	「海人の首長」『房総考古学ライブラリー6』古墳時代(2)	千葉県文化財センター	1992 (16-21頁)
261 白井久美子	「長州塚」の石製品『房総考古学ライブラリー6』古墳時代(2)	千葉県文化財センター	1992 (37-40頁)
262 白井久美子	「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」千葉県一、文献データ千葉県一『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集(共同研究「日本出土鏡データ集成」2)	国立歴史民俗博物館	1994 (82-95, 746-749頁)
263 白井久美子	「弥生時代から古墳時代の住居形態と土器群」草刈遺跡出土の赤焼き須恵器『千原台ニュータウン』VI-草刈六之台遺跡(第2分冊)	千葉県文化財センター	1994 (888-920頁)
264 白井久美子	「香取郡干潟町瀧台古墳測量調査報告」『千葉県史研究第5号』	千葉県	1997 (83-92頁)
265 白石太一郎	「群集墳の諸問題」『歴史公論』63-古墳時代の社会一	雄山閣	1981 (79-86頁)
266 白石浩	『千葉市大膳野北遺跡』	千葉県文化財センター	1982
267 白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田尚	「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集	国立歴史民俗博物館	1984 (41-82頁)
268 白石太一郎・杉山晋作・車崎正彦	「群馬県お富士山古墳所在の長持形石棺」『国立歴史民俗学博物館研究報告』第3集	国立歴史民俗博物館	1984 (83-120頁)
269 白石太一郎	「神まつりと古墳の祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集-共同研究「古代の祭祀と信仰」本篇一	国立歴史民俗博物館	1985 (79-114頁)
270 白石太一郎	『古墳とヤマト政権-古代国家はいかに形成されたか-』	文芸春秋	1999
271 白石竹雄編	『平台先遺跡』	平台先遺跡発掘調査団	1973
272 辛亥銘鉄剣シンポジウム実行委員会	「埼玉県の前期古墳」『辛亥銘鉄剣と金石文』	埼玉県教育委員会	1982 (30-31頁)
273 末永雅雄	『日本の古墳』	朝日新聞社	1961
274 末永雅雄	『日本上代の武器』(増補版)	木耳社	1981
275 菅谷浩之他	『長沖古墳群』	児玉町教育委員会	1980
276 杉崎章編	『東海市カプト山遺跡』第2次調査報告	東海市教育委員会	1974
277 杉崎茂樹	『瓦塚古墳』-埼玉古墳群発掘調査報告書第4集-	埼玉県立さきたま資料館	1986
278 杉原荘介・小林三郎	「古墳時代」『市川市史』第1巻(原始、古代)	市川市	1974 (353-467頁)
279 杉山博久他	『小田原市諏訪の前遺跡』	小田原考古学研究会	1971
280 杉山林継編	『請西』	木更津市請西遺跡調査団	1977
281 梶山林継・野中徹	『史跡弁天山古墳』保存整備事業報告書	富津市教育委員会	1979
282 梶山林継	「菅生周辺の遺跡」木更津市長洲塚出土品と伝える石製模造品『上総菅生遺跡』	中央公論美術出版	1980 (159-165頁)
283 杉山晋作	「千葉県の石枕」-市原市発見の石枕-『史館』第8号	史館同人	1977 (71-73頁)
284 杉山晋作	「古墳時代銅鏃の二、三について」『古代探叢』-滝口宏先生古稀記念考古学論集	早稲田大学出版部	1980 (181-205頁)
285 杉山晋作	「古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例」-公津原古墳群とその近隣-『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集	国立歴史民俗博物館	1982 (49-78頁)
286 杉山晋作	「石製刀子とその用途」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集	国立歴史民俗博物館	1985 (115-133頁)
287 杉山晋作	「特異な彫刻文のある石製腕飾」『古代探叢』II	早稲田大学出版部	1985 (299-318頁)

番号 著者名	書名	発行元	発行年 掲載頁
288 杉山晋作・大久保奈奈・荻悦久	『佐原市・禅昌寺山古墳の遺物』『古代』第83号	早稲田大学考古学会	1987 (110-139頁)
289 杉山博久・山本守男	『厚木市天神遺跡の調査』『第一回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』	神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会	1977 (8-9頁)
290 鈴木裕芳	『久慈吹上』	日立市教育委員会	1982
291 鈴木啓・辻秀人他	『原山1号墳発掘調査概報』	福島県教育委員会	1982
292 鈴木英啓	『潤井戸西山遺跡』	市原市文化財センター	1986
293 鈴木敏則	『淡輪系円筒埴輪』『古代文化』第46巻第2号	古代学協会	1994 (39-50頁)
294 鈴木尉元他	『東京湾とその周辺地域の地質』(第2版)	地質調査所	1995
295 須田勉	『古代地方豪族と造寺活動』—上総国を中心として—『古代探叢』	早稲田大学出版部	1980 (433-474頁)
296 澄田正一・大参義一・岩野見司	『新編一宮市史—資料編2—』	一宮市	1967
297 清藤一順	『星谷津1号墳』『佐倉市星谷津遺跡』	千葉県文化財センター	1978 (112-118頁)
298 関川尚功編	『引ノ山古墳群』	五条市教育委員会	1980
299 関口達彦	『千葉東南部ニュータウン』11-六通金山遺跡—	千葉県文化財センター	1981
300 勢田広行他	『羽山塚古墳調査報告書』	熊本県文化財保護協会	1979
301 瀬戸谷皓他	『中ノ郷・深谷古墳群』	但馬考古学研究会	1985
302 千田稔	『埋れた港』	学生社	1974
303 曾根博明・平方幸雄・重田薫	『広畑古墳群』『秦野下大槻』	秦野市教育委員会	1974 (23-41頁)
304 高木市之助他校注	『萬葉集』全4巻日本古典文学大系4-7	岩波書店	1959
305 高木博彦	『日本の石枕』	千葉県立房総風土記の丘	1979
306 高木市之助他編	『萬葉集大成』5歴史社會篇	平凡社	1986
307 高木恭二	『環状縄掛突起を有する石棺について—とくにその石棺材の産地をめぐって—』・同(2)『熊本史学』第53号・第54号	熊本史学会	1979・(41-58, 36-52 1980 頁)
308 高島忠平・西弘海	『寿命王塚古墳出土土器』『奈良国立文化財研究所年報』	奈良国立文化財研究所	1971 (48-49頁)
309 高瀬哲郎・岩永政博他	『大門西遺跡』『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』I	佐賀県教育委員会	1980 (13-120頁)
310 高田博他	『千原台ニュータウン』III—草刈遺跡B区—	千葉県文化財センター	1986
311 高根和信・大森信秀他	『上出島古墳群』	茨城県岩井市教育委員会	1977
312 鷹野光行	『13号墳』『東間部多古墳群』	上総国分寺台遺跡調査団	1974 (112-114頁)
313 高橋護	『組帯文の展開と特殊器台』『岡山県立博物館研究報告』5	岡山県立博物館	1984 (1-21頁)
314 高橋康男	『草刈遺跡』	市原市文化財センター	1985
315 高橋護	『弥生時代終末期の土器編年』『岡山県立博物館研究報告』9	岡山県立博物館	1988 (1-32頁)
316 高橋一夫・本間岳史	『將軍山古墳と房州石』『埼玉県史研究』第29号	埼玉県	1994 (21-38頁)
317 高畑知功・栗野克己他	『小中古墳群』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7	岡山県文化財保護協会	1975 (83-145頁)
318 滝口宏・市毛勲・田中新史・白石太郎・永嶋正春・平川南・三辻利一	『『王賜』銘鉄剣概報—千葉県市原市稻荷台1号墳出土—』	吉川弘文館	1988
319 武田宗久・宍倉昭一郎他	『上総国女坂1号方形墳』	南総郷土文化研究会	1969

番号	著者名	書名	発行元	発行年	掲載頁
320	田坂浩・相京邦彦・上村淳一・白井久美子	『千葉東南部ニュータウン8』—ムコアラク遺跡・小金沢古墳群—	千葉県文化財センター	1979	
321	田坂浩・栗田則久	『千葉東南部ニュータウン』13—上赤塚1号墳・狐塚古墳群—	千葉県文化財センター	1982	
322	立本成文	『地域研究の問題と方法』	京都大学学術出版会	1996	
323	田中清美他	『千草山遺跡・東千草山遺跡』	市原市文化財センター	1989	
324	田中清美他	『奉免上原台遺跡』	市原市文化財センター	1992	
325	田中晋作	「武器の所有形態からみた古墳被葬者の性格」『ヒストリア』第93号	大阪歴史学会	1981	(1-20頁)
326	田中新史	「五世紀における短甲出土古墳の一樣相—房総出土の短甲とその古墳を中心として—」『史館』第5号	史館同人	1975	(80-103頁)
327	田中新史	「諏訪台1号墳」『諏訪台古墳群調査概要』	上総国分寺台遺跡調査団	1975	(1-14頁)
328	田中新史	「五世紀における短甲出土古墳の一樣相」『史館』第5号	史館同人	1975	(80-103頁)
329	田中新史編	『南向原』	上総国分寺台遺跡調査団	1976	
330	田中新史	「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』第63号	早稲田大学考古学会	1977	(1-21頁)
331	田中新史	「御嶽山古墳出土の短甲」『考古学雑誌』第64巻第1号	日本考古学会	1978	(28-44頁)
332	田中新史	「1977年度古墳調査について」『上総国分寺台調査概報』	上総国分寺台遺跡調査団	1978	(7-11頁)
333	田中新史	「古墳出土の飾り弓—鋌飾り弓の出現と展開—」『伊知波良』1	伊知波良刊行会	1979	(8-30頁)
334	田中新史	「東国終末期古墳出土の馬具」『古代探叢』	早稲田大学出版部	1980	(257-278頁)
335	田中新史	「根田古墳群」『上総国分寺台発掘調査概報』	上総国分寺台遺跡調査団	1981	(6-20頁)
336	田中新史	「出現期古墳の理解と展望—東国神門5号墳の調査と関連して」『古代』第77号	早稲田大学考古学会	1984	(1-53頁)
337	田中新史	「古墳時代終末期の地域色—東国の地下式系土冪墓を中心として—」『古代探叢』II	早稲田大学出版部	1985	(437-475頁)
338	田中新史	「東国の古墳時代出現期とその前後」『東アジアの古代文化』46	大和書房	1986	(84-94頁)
339	田中新史	「市原台地の特性」『王賜』銘鉄剣慨報』図2解説 滝口宏監修	吉川弘文館	1988	(2頁)
340	田中新史	「奈良盆地東縁の大形前方後円墳出現に関する新知見」『古代』第88号	早稲田大学考古学会	1989	(126-136頁)
341	田中新史	「古墳時代中期前半の鉄鏃(一)」『古代探叢』IV	早稲田大学出版部	1995	(247-308頁)
342	田中英夫	「長持形石棺の再検討」『古代学研究』77	古代学研究会	1975	(17-29頁)
343	田辺幸雄	『萬葉集東歌』	塙書房	1963	
344	谷口栄他	『柴又河川敷遺跡』II	葛飾区遺跡調査会	1989	
345	谷口栄他	『柴又八幡神社古墳』	葛飾区郷土と天文の博物館	1992	
346	種田齊吾・阪田正一	『千葉東南部ニュータウン』3—有吉遺跡(第1次)—	千葉県都市公社	1975	
347	種田齊吾・谷旬	『千葉東南部ニュータウン』4—生浜古墳群—	千葉県文化財センター	1977	
348	玉口時雄・阪田正一編	『宮脇』	宮脇遺跡調査団	1973	
349	田中新史	『市原市神門四号墳の出現とその系譜』『古代』第63号	早稲田大学考古学会	1977	(1-21頁)
350	千賀久編	『磯城・磐余地域の前方後円墳』	奈良県立橿原考古学研究所	1981	
351	千葉市史編纂委員会	「七廻り塚古墳」『千葉市史』史料編1	千葉市	1976	(221-226頁)
352	千葉県地方課編	『千葉県町村合併史』(上)	大和学芸図書株式会社	1979	

番号 著者名	書名	発行元	発行年 掲載頁
353 千葉県教育庁文化課	『千葉県富津市内裏塚古墳群測量調査報告書』	千葉県教育委員会	1986
354 千葉県教育庁文化課	『千葉県重所在古墳群詳細分布調査報告書』	千葉県教育委員会	1990
355 千葉県史料研究財団編	『千葉県の歴史』-資料編 古代-	千葉県	1996
356 千葉県史料研究財団編	「古代の房総三国」『千葉県の歴史 資料編 考古3』	千葉県	1998
357 千葉県地学のガイド編集委員会編	『続千葉県 地学のガイド』	コロナ社	1990
358 千葉県立中央博物館編	『鋸山周辺の地層』(自然観察会11)	千葉県立中央博物館	1982
359 千葉市史編纂委員会	「荒久古墳」『千葉市史』史料編1	千葉市	1976 (212-213頁)
360 千葉県立中央博物館	平成5年度特別展図録『香取の海-その歴史と文化-』	千葉県立中央博物館	1993
361 調布市教育委員会	『調布のいせき』	調布市教育委員会	1982
362 調布市教育委員会	『調布市飛田給遺跡』	調布市教育委員会	1982
363 築比地秀行	『砧中学校遺跡発掘調査略報』	砧中学校遺跡調査団	1979
364 築比地正治	「高柳銚子塚古墳の埴輪」『宇麻具多』第3号	木更津古代史の会	1982 (7-8頁)
365 築比地秀行・菊池誠一	「円形周溝墓」『下山遺跡』II	世田谷区教育委員会	1985 (67-70頁)
366 都出比呂志	『日本農耕社会の成立過程』	岩波書店	1989
367 都出比呂志編	『古代史復元』6-古墳時代の王と民衆-	講談社	1989
368 都出比呂志	『古代国家はこうして生まれた』	角川書店	1998
369 都出比呂志・田中琢編	『古代史の論点4 権力と国家と戦争』	小学館	1998
370 常川秀夫・石川均	『塚山古墳群』	栃木県考古学会	1979
371 常川秀夫他	『蛭田宮土山古墳群』	栃木県那須郡湯津上村	1972
372 坪之内徹	「東紀寺遺跡出土土師器焼成の(須恵器)高杯」『韓式系土器研究』IV	韓式系土器研究会	1993 (120-126頁)
373 寺沢薫	『桜井市箸墓古墳(纏向遺跡第81次)発掘調査概報』	榎原考古学研究所	1995
374 寺田良喜	「野毛大塚古墳見学資料」	世田谷区教育委員会	1989
375 寺田良喜他	『野毛大塚古墳』	世田谷区教育委員会・野毛大塚古墳調査会	1999
376 東海古墳文化研究会編	「東海の前方後方墳-論集 弥生から古墳へ-」『古代』第86号	早稲田大学考古学会	1988 (123-214頁)
377 第3回東海考古学フォーラム	『前方後方墳を考える』	第3回東海考古学フォーラム三重県実行委員会	1995
378 東海大学校地内遺跡調査団	「相模の3・4世紀 方形周溝墓をめぐって」『東海大学校地内遺跡調査報告』3	東海大学校地内遺跡調査団	1992
379 富樫卯三郎他	『向野田古墳』	宇土市教育委員会	1978
380 富樫雅彦・徳澤啓一	「小銅鐸の基礎的研究」『國學院大學考古学資料館紀要』第11輯	國學院大學考古学資料館	1995 (25-70頁)
381 栃木県立那須風土記の丘資料館	『弥生人のくらし』-卑弥呼の時代の北関東-	栃木県立那須風土記の丘資料館	1996
382 栃木県立なす風土記の丘資料館	第6回企画展図録『ムラ・まつり・古墳』	栃木県 立なす風土記の丘資料館	1998
383 轟 俊二郎	『埴輪研究』第1冊		1973
384 豊岡卓之	『古墳のための年代学』-近畿の古式土師器と初期埴輪-	奈良県立榎原考古学 研究所 附属博物館	1999
385 豊田市教育委員会	『高橋遺跡』	豊田市教育委員会	1971

番号 著者名	書名	発行元	発行年 掲載頁
386 中井正幸	「四世紀の神まつりはどのようなものだったか—滑石製農具の検討から」『新視点 日本の歴史』第2巻古代編 I	新人物往来社	1993 (126-135頁)
387 中井正幸	「古墳出土の石製祭器—滑石製農具を中心として—」『考古学雑誌』第79巻第2号	日本考古学会	1993 (31-61頁)
388 中司照世	「西地区出土土器」『昭和43年度 上総国分寺址調査報告』	上総国分寺址調査団	1969 (19-20頁)
389 中司照世編	『泰遠寺山古墳』	松岡町教育委員会	1984
390 中西康裕編	『土師の里8号墳』	藤井寺市教育委員会	1994
391 永沼律朗他	『上総 江子田金環塚古墳』	市原市教育委員会	1985
392 永沼律朗	『市原市今富塚山古墳確認調査報告書』	千葉県教育委員会	1992
393 永沼律朗	「上福田13号墳」『主要地方道成田安食線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』II	千葉県文化財センター	1993 (18-27頁)
394 永原慶二監修	『全譯 吾妻鏡』全5巻・別巻1巻	新人物往来社	1976
395 中牟田賢治	『千塔山遺跡』	基山町遺跡発掘調査団	1978
396 中村恵次・市毛勲	「千葉県中原古墳群調査報告」『古代』第37号	早稲田大学考古学会	1962 (1-21頁)
397 中村恵次他	「千葉県山武郡土気町舟塚古墳の調査」『古代』第48号	早稲田大学考古学会	1967 (17-32頁)
398 中村恵二・市毛勲他	『市原市周辺地域の調査』	市原市教育委員会	1967
399 中村太一	「古代東国の水上交通」『古代東国の民衆と社会』	名著出版	1994 (133-171頁)
400 中森秀夫	「横枕1・2号墳」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』	三重県教育委員会	1980
401 奈良国立文化財研究所編	『平城宮発掘調査報告』VI	奈良国立文化財研究所	1974
402 奈良県立橿原考古学研究所編	『黒塚古墳』	学生社	1998
403 成田ニュータウン文化財調査班	『公津原』	千葉県地域振興公社	1975
404 新納泉	「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号	日本考古学会	1983 (50-70頁)
405 西弘海	「平底の土器・丸底の土器」『土器様式の成立とその背景』	真陽社	1986 (167-205頁)
406 西田和己・岩永政博他	「六本黒木遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』I	佐賀県教育委員会	1980 (121-176頁)
407 二宮忠司・渡辺和子	『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第54集	福岡市教育委員会	1980
408 日本考古学協会	『関東における古墳出現期の諸問題資料』	日本考古学協会	1981
409 日本考古学協会新潟大会実行委員会	『東日本における古墳出現過程の再検討』	日本考古学協会	1993
410 日本海洋学会他	『日本全国沿岸海洋誌』(第3刷)	東海大学出版会	1992
411 日本の地質『関東地方』編集委員会編	『関東地方』—日本の地質3—	共立出版	1991
412 沼沢豊・田中新史	『古墳時代研究』II—千葉県市原市六孫王原古墳の調査—	古墳時代研究会	1975
413 沼沢豊	『千葉東南部ニュータウン』1—椎名崎古墳群(第1次)—	千葉県都市公社	1975
414 沼沢豊	「石神2号墳の調査」「石神2号墳の諸問題」「古墳時代」『東寺山石神遺跡』	千葉県文化財センター	1977 (31-101, 118-154, 484-508頁)
415 沼沢豊・森尚登・深沢克友	『佐倉市飯合作遺跡』	千葉県文化財センター	1978
416 沼沢豊	「東国の石枕」『古代探叢』—滝口宏先生古稀記念考古学論集—	早稲田大学出版部	1980 (207-220頁)

番号	著者名	書名	発行元	発行年 掲載頁
417	沼沢豊	「千葉県石枕」『房総風土記の丘年報』3	県立房総風土記の丘	1980 (34-43頁)
418	沼沢豊	『成東町真行寺廃寺跡確認調査報告』	千葉県文化財センター	1982
419	沼沢豊編	『千葉県富津市内裏塚古墳群測量調査報告書』	千葉県教育委員会	1986
420	沼沢豊他	『成東町真行寺廃寺跡研究調査概報』	千葉県文化財センター	1983
421	野上文助	「古墳時代における鉄および鉄器生産の諸問題」『考古学研究』第15巻第2号	考古学研究会	1968 (55-75頁)
422	野口実	『坂東武士団の成立と発展』	弘生書林	1982
423	野間重孝	「宮崎市下北方古墳群をめぐって」『宮崎考古』第8号	宮崎考古学会	1982 (35-37頁)
424	萩野谷悟他	『竜角寺古墳群第101号古墳発掘調査報告書』	千葉県教育委員会	1988
425	萩原恭一他	『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書』II	千葉県文化財センター	1986
426	萩原儀征・清水眞一・寺沢薫	『纏向石塚古墳』範囲確認調査(第4次)概報	桜井市教育委員会	1989
427	萩原恭一	「畑沢埴輪生産遺跡」房総における埴輪の変遷と分布」『千葉県文化財センター研究紀要』15	千葉県文化財センター	1994 (76-129, 160-177頁)
428	萩原恭一	『山武町胡摩手台16号墳発掘調査報告書』	千葉県教育委員会	1995
429	羽咋市史編纂委員会	『羽咋市の考古資料』-羽咋市史原始古代編-	羽咋市	1973
430	橋口尚武	「黒潮の考古学」『黒潮の道』-海と列島文化7-	小学館	1991 (55-88頁)
431	橋本澄夫他	「金沢市下安原海岸遺跡の第1次調査」『石川考古学研究会々誌』第18号	石川県考古学研究会	1975 (9-35頁)
432	橋本輝彦	「纏向遺跡の発生期古墳出土の土器について」『庄内式土器研究』XIV	庄内式土器研究会	1997 (102-113頁)
433	八賀晋	「富雄丸山古墳の出土遺物」『富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』	京都国立博物館	1982 (1-28頁)
434	巾隆之編	『下郷』	群馬県教育委員会	1980
435	原田享二他	『佐原市内遺跡群発掘調査概報』II	佐原市教育委員会	1988
436	原秀三郎・柴垣勇夫他	『遠江 堂山古墳』	磐田市教育委員会	1995
437	春成秀爾	「遠江の銅鐸寸感」『浜松市博物館館報』I	浜松市博物館	1989 (13-16頁)
438	春成秀爾	「吉備と大和」『第9回古代史シンポジウム』	全日空・朝日新聞社	1991 (13-21頁)
439	春成秀爾	「弥生から古墳へ-その変革過程-」『日本考古学協会1992年度大会』研究発表要旨	日本考古学協会	1992 (60-67頁)
440	菱田哲郎・高橋克尋他	『行者塚古墳 発掘調査概報』	加古川市教育委員会	1997
441	平野雅之・諸墨知義	「富士見台遺跡(FT008)」『年報』No.5	君津郡市文化財センター	1987
442	平野功他	『三之分目大塚山古墳発掘調査報告書』	小見川町教育委員会	1987
443	深沢克友	「竜角寺古墳群研究の変遷と意義」『房総風土記の丘年報』11-昭和62年度-	千葉県立房総風土記の丘	1988
444	福田正継・中野雅美他	「塚の峯遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』22	岡山県文化財保護協会	1977 (195-277頁)
445	藤田憲司	「讃岐(香川県)の石棺」『倉敷考古館研究集報』第12号	倉敷考古館	1976 (58-79頁)
446	藤田富士夫	『古代の日本海文化』-海人文化の伝統と交流-	中央公論社	1990
447	古内茂・伊藤智樹他	『千葉東南部ニュータウン』12-南二重掘遺跡-	千葉県文化財センター	1983
448	古内茂・大野康男編	『千葉東南部ニュータウン』15-馬ノ口遺跡他-	千葉県文化財センター	1984
449	星龍象・葛西功・西山克己他	『白駒古墳』	君津市白駒遺跡発掘調査会	1981

番号 著者名	書名	発行元	発行年 掲載頁
450 本間清利	『利根川』	埼玉新聞社	1978
451 埋蔵文化財研究会	『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題 資料』	埋蔵文化財研究会	1982
452 埋蔵文化財研究会	『定型化する古墳以前の墓制』	埋蔵文化財研究会	1988
453 埋蔵文化財研究会編	『倭人と鏡』その2-3・4世紀の鏡と墳墓	埋蔵文化財研究会	1994
454 埋蔵文化財研究会編	『前方後円墳の再検討』	埋蔵文化財研究会	1995
455 前田敬彦	「和歌山県和歌山市車駕之古址古墳」 『日本考古学年報』46	日本考古学協会	1995 (531-535頁)
456 前橋文化財研究会編	『富田遺跡群・西大室遺跡・清里南部遺跡群』	前橋文化財研究会	1980
457 間壁忠彦	『石棺から古墳時代を考える』	同朋舎出版	1994
458 間壁忠彦・間壁菫子	「岡山県丸山古墳ほか長持形・古式家形石棺の石材同定」『倉敷考古館研究集報』第10号	倉敷考古館	1974 (221-231頁)
459 増田精一他	『牛久Ⅲ号墳調査抄報』	千葉県教育委員会	1972
460 増田逸朗・水島孝行他	『清水谷・安光寺・北坂』関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅠ	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	1981
461 松枝正根	『古代日本の軍事航海史』上巻	かや書房	1993
462 松尾昌彦	「横穴式石室石材の交流と地域性」『人物埴輪の時代』	葛飾区郷土と天文の博物館	1997 (79-82頁)
463 松島栄治他	『群馬県史』資料編3	群馬県	1981
464 松村一昭	『赤堀村峯岸山の古墳』1	赤堀村教育委員会	1975
465 松村一昭	『赤堀村峯岸山の古墳』2	赤堀村教育委員会	1976
466 松村一昭	『赤堀村地蔵山の古墳』3	赤堀村教育委員会	1977
467 松村一昭	『赤堀村地蔵山の古墳』2	赤堀村教育委員会	1978
468 松村一美他	『お富士山古墳』-範囲確認調査報告書-	伊勢崎市教育委員会	1989
469 松本和男・二宮治夫他	「狼谷遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7	岡山県文化財保護協会	1975 (1-43頁)
470 松本豊胤他編	『香川の前期古墳』	日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会	1983
471 馬目順一他	『八幡台遺跡』	いわき市教育文化事業団	1980
472 丸子亘・渡辺智信他	『城山第1号前方後円墳』	小見川町教育委員会	1978
473 丸山竜平・中村博司他	『高島郡新旭町堀川遺跡』	滋賀県教育委員会	1975
474 美里町史編纂委員会	「美里町の古墳」『美里町史』通史編	美里町	1986 (145-191頁)
475 三島格他	「山下古墳調査概報」『熊本の歴史と社会』	熊本史学会編	1977 (1-17頁)
476 三辻利一	「千葉県内の古墳出土埴輪の蛍光X線分析」『千葉県文化財センター研究紀要』15	千葉県文化財センター	1994 (130-158頁)
477 三宅宗議・茂木好光編	『五松山洞千葉大学文学部考古学研究室 窟遺跡』-発掘調査報告-	石巻市教育委員会	1988
478 宮代栄一・谷畑美帆	「続・埼玉県内出土の馬具-副葬品としての馬具分析の問題点」『埼玉考古』第32号	埼玉考古学会	1996
479 宮田登編	『海と列島文化』第7巻黒潮の道	小学館	1991
480 宮本哲郎編	『金沢市南新保D遺跡』	金沢市教育委員会	1981
481 向田裕始編	『下山遺跡群発掘調査報告』	広島県埋蔵文化財調査センター	1980
482 村井崑雄	「千葉県木更庫市大塚山古墳出土遺物の研究」『ミュージアム』第189号	東京国立博物館編・美術出版社	1966 (2-17頁)

番号	著者名	書名	発行元	発行年	掲載頁
483	村井真輝編	『境古墳群・境遺跡』	熊本県教育委員会	1980	
484	村井崑雄・本村豪章・望月幹夫他	『東京国立博物館図版目録』—古墳遺物篇(関東Ⅱ)—	東京国立博物館	1983	(166頁)
485	村井崑雄・亀井正道・本村豪章・望月幹夫・井上洋一他	『東京国立博物館図版目録』—古墳遺物篇(関東Ⅲ)—	東京国立博物館	1986	
486	目黒吉明他	『母畑地区遺跡発掘調査報告』IX—早稲田古墳群—	福島県教育委員会	1982	
487	茂木雅博編	『常陸須和間遺跡の研究』		1972	
488	茂木努・丸山治雄・志村哲	『白石稲荷山古墳範囲確認調査報告書』I	群馬県藤岡市教育委員会	1986	
489	茂木努・志村哲	『白石稲荷山古墳範囲確認調査報告書』II	群馬県藤岡市教育委員会	1987	
490	森重彰文・田口崇	『木滝台遺跡・桜山古墳 埋蔵文化財発掘調査報告書』	鹿島町木滝台遺跡発掘調査会・日本文化財研究所	1978	
491	森田勉・馬田弘稔他	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI 下巻	福岡県教育委員会	1979	
492	森本六爾	「直弧紋を有する石製刀子」『古代文化研究』第2号	古代文化研究会	1925	(87-99頁)
493	山内昭二他	『舟塚山古墳周濠調査報告書』	石岡市教育委員会	1972	
494	山口辰一・豊巻幸正	「墳墓」『武蔵国府関連遺跡調査報告』I—白糸台地域の調査1—	府中市教育委員会	1979	(35-38頁)
495	山口典子他	『千葉市荒久遺跡(1)』	千葉県文化財センター	1989	
496	山崎武編	『生出塚遺跡』	鴻巣市遺跡調査会	1981	
497	山路直充	「竜角寺軒瓦(山田寺式)の年代」『官営工房研究会会報』6	奈良国立文化財研究所	1999	(55-64頁)
498	湯川悦夫・加納俊介	「南関東出土の東海系土器とその問題」『小田原考古学研究会会報』第5号	小田原考古学研究会	1972	(85-103頁)
499	遊佐和放	「所謂『帆立貝式台墳』の形態的分離について」『古代』第68号	早稲田大学考古学会	1980	(40-58頁)
500	遊佐和放	「造り出し付き円墳について」『史学』第52巻第2号	三田史学会	1982	
501	遊佐和敏	『帆立貝式古墳』	同成社	1988	
502	横須賀考古学会	『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』	横須賀考古学会	1984	
503	横田里司	「五領期の江原台」『江原台』	江原台第一遺跡発掘調査団	1979	
504	吉田東伍	『大日本地名辞書』板東	関東史料研究会	1974	(1908富山房版復刻)
505	吉田東伍	『利根治水論考』	崙書房出版	1974	(三省堂1910復刻)
506	吉田東伍	『利根の変遷と江戸の歴史地理』	崙書房出版	1974	
507	吉廻純・大村直編	『神谷原』I	櫛田遺跡調査会	1981	
508	由水常雄	『トンボ玉』	平凡社	1989	
509	龍ヶ崎市史編纂委員会	『龍ヶ崎市史』—中世史料編—	龍ヶ崎市教育委員会	1993	
510	若松良一	「埼玉将軍山古墳と渡航文化」『考古学ジャーナル』No.349	ニューサイエンス社	1992	(20-28頁)
511	若松良一	「からくにへ渡った東国の武人たち」—埼玉将軍山古墳と房総の首長の交流をめぐって—『法政考古学』第20集	法政考古学会	1993	(199-214頁)
512	和田萃	「東国への海つ路」『環境文化』第55号—特集・歴史の道—海上の道—	環境文化研究所	1982	(8-28頁)
513	和田晴吾	「古墳時代の石工とその技術」『北陸の考古学』—石川考古学会々誌第26号—	石川考古学研究会	1983	(501-534頁)
514	和田晴吾	「金属器の生産と流通」岩波講座『日本考古学』3—生産と流通—	岩波書店	1986	(263-303頁)

番号	著者名	書名	発行元	発行年	掲載頁
515	和田晴吾	「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号	日本考古学会	1987	(44-55頁)
516	和田英雄	『古沢町遺跡発掘調査報告』弥生時代編	名古屋市教育委員会	1974	
517	渡辺久生・金井塚良一	『西原古墳群』	考古学資料刊行会	1976	
518	渡辺修一	「群小区画墓の終焉期」—所謂[方形周溝遺構]をどう見るか— 『研究連絡誌』第6号	千葉県文化財センター	1983	(8-13頁)
519	渡辺修一	「群小区画墓の終焉期(2)」—方形周溝遺構における埋葬施設の新例とその検討— 『研究連絡誌』第14号	千葉県文化財センター	1985	(9-14頁)
520	綿貫友子	『中世東国の太平洋海運』	東京大学出版会	1998	